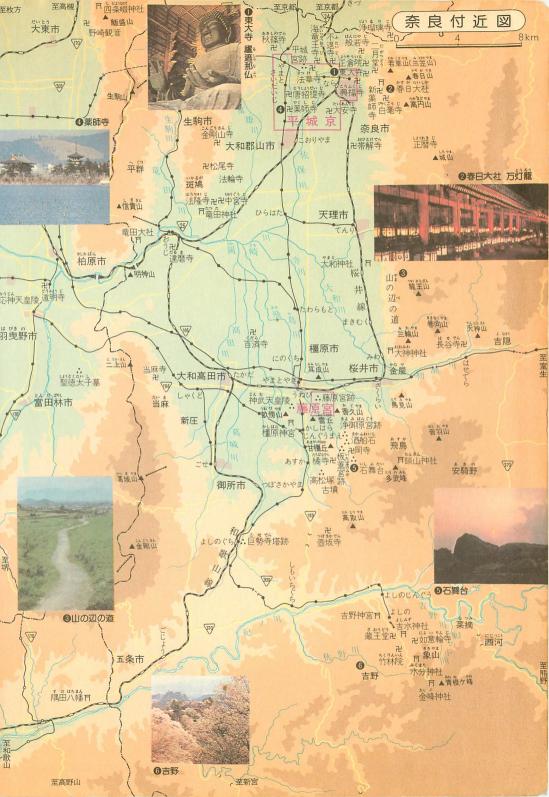
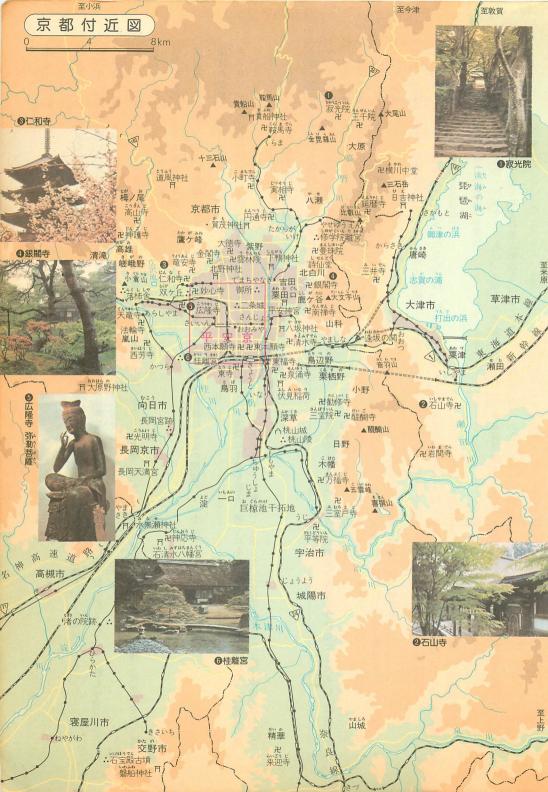
新総合国語便覧

監修

三好 行雄
稲賀 敬二
森野 繁夫

第一学習社

奈良付近図
0
4
8km
❶東大寺
盧遮那仏
❹薬師寺
❷春日大社 万灯籠
❸山の辺の道
❺石舞台
❻吉野
平城京
藤原宮
奈良市
大和郡山市
生駒市
天理市
橿原市
桜井市
大和高田市
御所市
五条市
柏原市
羽曳野市
富田林市
大東市
法隆寺
中宮寺
春日大社
興福寺
唐招提寺
薬師寺
長谷寺
大神神社
石舞台
高松塚古墳
飛鳥
吉野
金峰神社
和歌山線
桜井線
至京都
至高野山
至和歌山
至熊野
至室生
至新宮
至堺

❶寂光院
❷石山寺
❸仁和寺
❹銀閣寺
❺広隆寺 弥勒菩薩
❻桂離宮

本書の特色

○総合的な国語力育成を目標に、**国語の学習・文学の歴史・言語の概説・漢文の学習**の四本の柱におのおの**図説編**を加えた構成とした。

○豊富な図説（多色刷り・48ページ）による国語学習への視覚的な導入〈**見る学習**〉から、そこに生まれた興味・関心にこたえる〈**読む学習**〉、さらに実際に〈**書く学習**〉の領域までを考慮して編集した。

○従来の文学関係に偏した内容を改め、新学習指導要領をふまえての国語の学習――**表現**〈文章表現法〉、**理解**〈文章読解法〉、**言語**〈漢字学習法〉に重点をおいた。

○学習を側面から支える**資料・年表・地図**の充実に力を注いだ。

○図説編と本文編との関連を密接に図り、効果的な学習ができるように、図説編に本文の関連ページを示した。（↓p10）

国語の学習
（国語の表現・理解のための基礎編）

*ジャンルごとに具体的な一作品を例として、文章を読解する際の手がかりを示した。〈文章読解法①②〉

*目的に応じて適切な表現ができるよう、高校生に身近な文章について具体的な文章作法を示した。〈文章表現法①〉

*実際に文章を読み、書くにあたって、国語の表記の仕方、難読語の読みと意味などを整理して示した。〈文章表現法②、漢字学習法①②③〉

文学の歴史
（古代から現代、世界文学に至る文学史）

*古典では、高校生にとって基本的な作品・人物を精選してとりあげ、年表・詳細な解説をほどこした。〈日本文学史①〉

*近代の文学では、各ジャンルごとに代表的な人物をとりあげ、その人間像に触れられるよう、年表を加え詳細な解説をほどこした。〈日本文学史③〉

*世界の文学では、世界の代表的な作家を年代順にとりあげ、年表・解説をほどこした。〈世界文学史〉

*高校生として覚えておいてほしい韻文を、古典は「名歌選」「名句選」の形でまとめた。中でも古典に親しむという観点から「小倉百人一首」をとりあげ、大意・出典・作者解説を付した。

言語の概説
（日常の言語生活に即した国語の応用編）

*言語の役割・日本語の特質・文法事項に目を向け、歴史的な変遷という視点をも加えて日本語を見直した。

*日常用語の中で特に誤解しやすいことば、慣用的なことばを具体的にとりあげて、系統ごとに分類・整理した。〈日常用語の基礎知識〉

漢文の学習
（漢文学習の必須事項の整理）

*教科書に必出の重要人物・作品をとりあげ、文学史・思想史・歴史の上に位置づけたうえ、年表を加え詳細な解説をほどこした。〈中国文学史〉

*基礎語彙・主な助字・重要句形など、漢文学習に必要な事柄について、わかりやすく解説した。〈漢文の基礎知識〉

新総合国語便覧

監修

東京大学教授
三好 行雄

広島大学教授
稲賀 敬二

広島大学助教授
森野 繁夫

第一学習社

もくじ

図説編

文章読解法①

文章読解法②

文章読解法③

▲石川啄木の森鷗外宛書簡

▲藤原佐理筆蹟

▲森鷗外遺書(賀古鶴所筆)

日本文学史①

日本文学史②

図説編

▲伊勢物語絵巻

日本文学史③

世界の文学

▲伊勢物語絵巻

言語の概説

言語の概説
国語の変遷
文法
日常用語の基礎知識

▲古今和歌集序（伝源俊頼筆）

漢文の学習

中国文学史

図説編

漢文の基礎知識

漢文読解法

漢文の資料

▲神話の帝王たち

索引

●この索引は、本書所収語句(書名・人名・事項)および古典名歌・名句を掲げた**総合索引**である。
●「古典名歌・名句」については検索の便宜上、別にまとめた。
●**見出し語**の配列は表記の五十音順によった。
●書名・人名は、見出し語について の詳説ページを**太字**で示した。
●人名は原則として「姓名」で収め赤字で示した。
●「もくじ」における小項目をも▽・■で示して収めた。
(例) ■在原業平年譜　一五三
▽いろはかるた　三一五
●難読語にはふりがなを付した。
●「古典名歌・名句」は第一句の五字をもって見出しとした。

古典名歌・名句索引

国語の学習

図説編

小野小町（おののこまち）
佐竹本歌仙絵（大和文華館蔵）

平安時代初期の歌人、六歌仙の一人である。歌風は「よき女の悩めるに似たり」と評され、伝説に残りうる美女であったらしい。歌の大半は女性らしい纖細さをたたえた恋愛歌であるが、「花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世に　ふる　ながめせしまに」のように人生観照をこめた歌を詠んでいる。

歌仙絵とは、すぐれた歌人の肖像を描き、略歴と和歌一首を書きそえたもの。この絵にも、小町の出自と次の歌一首がのせられている。

いろみえて　うつろふ
ものは　よの中の
人のこゝろの　はなに
そありける

1 服装 男子

中古の服装　平安時代以前は公服として礼服・朝服が用いられたが、これらには唐風文化の影響が色濃い。平安時代中期以降になるとこれらはすたれ、文官・武官ともに正装として束帯姿が一般的となった。

◀束帯姿（武官）

靴　弓

▲束帯姿（文官）（伴大納言絵詞）

上代の服装

◀衣褌姿

◀礼服姿

◀朝服姿

束帯着用順序

1 垂纓冠　懸緒　小袖　襪

2 単

3 衵　表袴

4 下襲　裾

5 笏　太刀　平緒　浅履

石帯の上手

冠

◀垂纓　◀巻纓　◀立纓

▼衣冠姿

衵　袍　扇　指貫

束帯着用順序

①小袖を着て襪（白い絹の靴下）をはき冠をかぶる。

②大口袴（すそ口が広い袴）をはき単を着る。

③衵（多く綾織物）と表袴（表は白、裏は紅）を着る。

④下襲（背後に裾が長く続いた服）を着る。

⑤縫腋袍（そでの下から両脇を縫いつけた上着）を着、石帯（袍の腰を結ぶ帯）をしめ浅履（正装用）をはく。

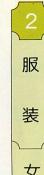
▲直衣姿（紫式部日記絵巻・五島美術館蔵）

▶庶民の姿（伴大納言絵詞）

中世の服装　狩衣・水干は平安時代の民間服であったが鎌倉時代以降武家の礼服となり、特に水干は上下の身分なく着用された。直垂は鎌倉時代の武士の平服で室町時代には礼服となった。道服・十徳・肩衣袴は室町時代の服装である。

近世の服装　長裃は江戸時代の上級武士の礼装。これよりもややおちる礼装に半裃があり，武士の平常服は継裃であった。素襖は室町時代に下級武士の平常服として生じ，江戸時代には式服となった。

◀素襖姿（東京国立博物館蔵）

◀肩衣袴姿（長興寺蔵）

十二単 平安時代中期以降の女子の正装は「女房装束」とよばれるものであった。これは天皇のお側近くに伺候する女房たちに用いられたために起こった呼称で、いわゆる「十二単」は後世生じた俗称である。当時の女子の服装にはこのほか褻の装束（平常服）があった。

▲唐衣・裳姿（佐竹本三十六歌仙絵・大和文華館蔵）

上代の服装

◀衣裳姿

◀礼服姿

◀朝服姿

装束着用順序

1 小袖　長袴

2 単

3 打衣

4 袿（五衣）

5 袙扇　唐衣　小腰　打ち袴　表着

大腰　引腰　裳

装束着用順序

①小袖を着て紅の長袴をはく。

②単（裏のない衣）を着る。

③打衣（色は普通紅できぬたで打ってつやを出した）

④五衣（五枚の袿を重ねたもの）を着る。

⑤表着を着る。

⑥唐衣（錦・綾などで袷に仕立てた衣）を着て裳（腰部より下の後方にだけまとう衣）を着け、袙扇を持つ。

▶小袿姿（源氏物語絵巻・徳川黎明会蔵）
浮舟のもとを薫が訪れた場面。女性たちは唐衣や裳を着けず、くつろいだ小袿姿で描かれている。
◀単袴姿
単
◀汗衫姿
汗衫
打衣
袿
表袴
◀袙姿
袙
市女笠
枲の垂衣
◀枲の垂衣姿
小袖
草履
被衣
◀壺装束姿
小袿
江戸時代の髪型
島田まげ▶
▼丸まげ
唐人まげ▶
（銀杏返し）
▶白拍子姿
立烏帽子
太刀
水干
扇子
◀小袖姿
小袖
帯
▲腰巻姿（持明院蔵）
▼寛政三美人（喜多川歌麿筆）
◀振袖姿
振袖
◀掻取姿
打掛
◀打掛姿
小袖
打掛

3 襲ね色目

古典にあらわれる色

襲ね色目　平安時代の服装は衣服を何枚も重ねて着るものであったため、その色の配合が重視された。「襲ね色目」には二通りの意味があり、ひとつは女房の五衣・単などの重なった色合いのことで、もうひとつは直衣・狩衣・袿・表着などの表と裏の配色のことである。これらは季節により着用する色が定まっていた。（配色に異説の多いものは一説によった。）

表と裏の襲ね色目

春
山吹　躑躅　早蕨　桜　紅梅　梅

夏
撫子　百合　杜若　卯花　菖蒲　葵

秋
龍胆　萩　紫苑　菊　女郎花　黄紅葉

冬
雪下　初雪　椿　篠青　氷　枯野

雑
松重　蘇芳　葡萄　二色

女郎花

4 武具・馬具

▲合戦のようす（平治物語絵巻・ボストン美術館蔵）

面繋
轡
手綱
鞅
鞍壺
切付
鞦
腹帯
鐙
障泥

前輪
後輪
手形
居木
四緒手
鞍
鞍爪

鉸子
鐙
舌
踏込

兵庫鎖の太刀（軍陣用）
兜金
柄
鍔
帯取（兵庫鎖）
鞘
責金
猿手
目貫
一の足
二の足
小尻

蛭巻の太刀（軍陣用）

飾太刀（儀杖用）

末筈
上の鏑籐
弦
矢摺籐
握
蟇目叩き
匂籐
鏑籐
本筈

塗籠籐弓
本滋籐弓
節巻弓

熊手
薙刀
直槍
穂
けら首
逆輪
千段巻
胴金
柄
水返
石突

空穂
靫（上代）
壺胡簶（中世～）
平胡簶
弦巻
指腹

右は武官の束帯姿。天皇以下百官が朝廷公事の際に着用した正装。袍をまとい，弓矢・太刀をたずさえている。

切斑
大中黒
本白
妻黒
征矢
野矢
火矢
蟇目
雁俣
鏑矢（尖矢）

筈
羽
袖摺節
篦
押取節
射付節
沓巻
鏃（平根）

采配
軍配団扇
楯

5 武装

▲院の御所夜討の報にあわて馳せ向かう人々（平治物語絵巻・ボストン美術館蔵）

▶兜（櫛引八幡宮蔵）

鍬形　篠垂　据文　鍬形台

▼金溜塗具足（久能山東照宮蔵）

籠手　臑当

◀▶紺糸縅鎧（大山祇神社蔵）

星　眉庇　吹返　忍緒　鞖　冠板　障子板　栴檀板　鳩尾板　大袖　脇板　弦走　繰締緒　蝙蝠付　馬手草摺（右）　畦目　前草摺　菱縫　射向草摺（左）

頂辺孔　兜鉢　鞖　境粧板　綿噛　掛緒　逆板　総角　引敷草摺（後）　畦目　据板

縅　縅は鎧の札を糸や細い皮でつづることをいい。材料やつづり方により種類がある。

▼東国へ落ちて行く源義朝の一行（平治物語絵巻・大和文華館蔵）

◀鎧の縅

紫綾縅　黒韋縅　浅黄縅　沢瀉縅

色々縅　白糸縅　赤糸縅　小桜韋縅

武士の生活　鎌倉時代の武士は武芸を重んじ一族の名誉を尊ぶ。日常生活では武芸の修練を怠らなかった。中でも流鏑馬・笠懸・犬追物は騎射三物として特にさかんであった。

▲武芸の訓練〈笠懸〉(男衾三郎絵詞・東京国立博物館蔵)

武装　古代では甲冑は胸腹と背を守るだけの短いもので，大鎧・胴丸などは平安時代になって形成された。南北朝時代には徒歩戦用に軽武装の胴丸・腹巻がさかんになった。室町時代末に現れた当世具足は江戸時代末まで甲冑の主流をなした。

▼武家の屋敷と武士の生活(法然上人絵伝・知恩院蔵)

武家の住居　鎌倉時代の武士の家は，一般に武家造の母屋に厩・年貢を納める御蔵などを備え，周囲には濠と土塁（土で築いたとりで）をめぐらし，門は不意の襲撃に備えて櫓門であった。総じて簡素なものであったが，南北朝動乱ごろからは武士が支配者としての地位を確立し，それにつれて足利義満の花の御所のように華麗なものも出現した。

6 建物

六世紀後半から、仏教の伝来に伴って寺院の建立がすすめられた。飛鳥・白鳳・天平と時代が下るにつれ、文化は国風の様式を整え、国史の編纂も始められたころである。

▲唐招提寺金堂

▲法隆寺全景

七九二年の平安京遷都に画される中古は、貴族を中心とした華やかな国風文化の時代であった。貴族の私邸の代表的な建築様式である寝殿造りを舞台に、優美な王朝文学が展開された。

寝殿造り 南向きの寝殿(正殿)を中心に，北・東・西に対屋があり，それぞれ渡殿で連絡している。対屋から南にのびた廊の端には釣殿，庭園には遣水・池・築山があった。

▲寝殿造り平面図

▲寝殿造り（駒競行幸絵巻）

中世の建築は再び力強い中国の影響を受けた(唐様・天竺様)。文化のにない手である武士のすまいは書院造りとよばれる簡素なものであったが、のち、戦功をあげた武将は豪壮な城郭を築き、邸宅とするようになった。

▲東大寺南大門（天竺様）

▲書院造り〈慈照寺東求堂同仁斎〉

7 乗り物

車　平安時代には「牛車（ぎっしゃ）」が盛んに用いられたが、これには乗る人の身分や時と場合によって細かい使い分けがなされた。　**輿（こし）**　平安時代以前は天皇の乗り物と定められていたが、平安時代には鳳輦（ほうれん）・葱花輦（そうかれん）以外は臣下も乗用するようになった。

▲天皇が出御する様子。階下に鳳輦が迎えにきている。（年中行事絵巻）

食器

調度

懸盤
高坏
甑
折敷
破子
衝重
銚子
提子
瓶子
折櫃
伏籠
薬玉
卯槌
几帳（裏）
几帳（表）
衣架
砧
鏡台
倚子
経机
文机
火取香炉
泔坏
脇息
床几
厨子
円座
双六盤
唐櫃
貝合
角行燈
ねむり燈台
松明
牡丹燈籠
燈台
高坏燈台
結燈台
丸行燈
火桶（火鉢）
炭櫃
手燭
篝火
小田原提燈

楽器

建物の部分名称

楽太鼓
団扇太鼓
豆太鼓
大太鼓
鼓
三鼓
羯鼓
締太鼓
瑟
二絃琴
和琴
七つ緒の琴
箏
百済琴
琵琶
阮咸
三味線
笙
篳篥
高麗笛
横笛
妻戸
半蔀
妻戸
格子
長押
長押
遣戸
羅文
透垣
庇の間
簀子縁
勾欄
長押
妻戸
御簾
勾欄
閼伽棚
羅文
透垣

9
古典によまれる植物
なし
もも
かたくり
やまぶき
すみれ
春
べにばな
むらさき
よし
しょうぶ
かきつばた
きり
ふじ
なつつばき
たちばな
おうち
夏
じゅずだま
ゆうがお
しおん
つゆくさ
あさがお
秋
やぶこうじ
さねかずら
まゆみ
しらかし
わすれぐさ
秋

春の七草
せり
ほとけのざ（たびらこ）
なずな
すずな（かぶ）
ごぎょう（ははこぐさ）
すずしろ（だいこん）
はこべら（はこべ）
秋の七草
なでしこ
はぎ
おみなえし
おばな（すすき）
ふじばかま
くず
あさがお（ききょう）
あしび
ぼたん
あおい
夏
のいばら
うのはな
やどりぎ
かしわ
夏
おもいぐさ
りんどう
秋
まつ
ゆずりは
冬

10 古典によまれる動物

春夏

きじ
よぶこどり
やまどり
うぐいす
ひばり

ひたき
ぬえこどり
くいな
う
ほととぎす

秋冬

しぎ
うずら
かり
かささぎ
ひわ

つる
ちどり
かも
におどり
たか
みやこどり
おしどり

こおろぎ（古名＝きりぎりす）

きりぎりす（古名＝こおろぎ）

まつむし（古名＝すずむし）

すずむし（古名＝まつむし）

国語の学習

石川啄木

病のごと
思郷の心湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

科学者と頭

寺田(てらだ)　寅彦(とらひこ)

①「科学者になるには『頭』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。しかし、一方でまた「科学者は頭が悪くなくてはいけない」という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後のほうの命題は、それを指摘し解説する人が比較的に少数である。

②この一見相反する二つの命題は実は一つのものの互いに対立し共存する二つの反面を表現するものである。この見かけ上のパラドックスは、実は頭ということばの内容に関する定義の曖昧(あいまい)不鮮明から生まれることはもちろんである。

③論理の連鎖のただ一つの輪をも取り失わないように、また混乱の中に部分と全体との関係を見失わないようにするためには、正確でかつ緻密(ちみつ)な頭脳を要する。紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見通す内察と直観の力を持たなければならない。すなわちこの意味ではたしかに科学者は「頭」がよくなくてはならないのである。

④しかしまた、普通にいわゆる常識的にわかりきったと思われることで、そうして、普通の意味でいわゆる頭の悪い人にでも容易にわかったと思われるよ

重要語　読んで意味のよくわからない語や重要と思われる語については、文脈から見当をつけた上で、労をいとわず辞書を引く。日常生活における辞書を引く作業の積み重ねが語い力を豊富にし、国語の基礎力をつける。

○命題＝判断を言語で表したもの。
○パラドックス＝逆説。真理に反対しているようであるが、よく吟味すれば真理である説。「急がば回れ」の類。
○緻密＝きめのこまかいこと。
○紛糾した可能性＝今はいりみだれて解決困難に見えるが、解明する見込みはある状態。
○岐路＝わかれ路。
○内察＝内部を明らかにする。
○尋常茶飯事＝日ごろ飲食している茶や飯の意で、少しも珍しくないこと。
○闡明＝はっきりしていなかった道理や意義を明らかにすること。
○苦吟＝苦心して詩歌を作ることの意から、苦心すること。
○必須＝必ずなくてはならぬこと。
○朴念仁＝わからずや。道理のわからぬものをののしっていう。
○阻喪＝気落ちすること。
○周到＝手落ちなく、よく行き届くこと。

構成

1 形式段落の内容をつかむ

だれでも、いつでも、どこでも、論理的な文章をまちがいなく読み解こうとするときは、次のようにするのがよい。
○形式段落に通し番号をつける。(①〜⑩)
○形式段落内の各文の意味をよく考えて読む。特に、「何が何だ。」「何がどうする。」「何がどんなだ。」というのかに注意する。
○形式段落内の文相互の関係を明らかにして、段落の構造をつかみ、段落の要点を示している中心文を見つける。中心文のない場合は、自分でまとめる。

第一段落を例にとると、第一文は命題、第二・三文は、それについての説明、第四文は、対立する命題、第五文は、その説明。そこで、第一段落の要点として、第一文と第四文とを中心にまとめる。

寺田寅彦　一八七八(明治一一)―一九三五(昭和一〇)。物理学者・随筆家。

論説読解の技法

1 形式段落の内容をつかむ。
(1)文の理解―重要語・指示語に注意しながら、「何が何だ。」「何がどうする。」「何がどんなだ。」と述べているのかをつかむ。
(2)文相互関係の理解―接続語や呼応する表現などに注意して、文と文との関係をつかむ。
(3)段落の要点の把握―中心文に留意する。中心文がない場合は、自分でまとめる。

〈参考〉段落の構造
①中心文→例証
②中心文→詳述
(詳述→中心文)
③原因→結果
理由→帰結
④肯定→否定
⑤比較・対象
⑥一般→特殊
全体→中心

うな尋常茶飯事の中に、何かしら不可解な疑点を認めそうしてその闡明に苦吟するということが、単なる科学教育者にはとにかく、科学的研究に従事する者にはさらにいっそう重要必須なことである。この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もっともっと物わかりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり朴念仁でなければならない。

⑤いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくそのだいじな宝物を拾って行く場合がある。

⑥頭のいい人は、言わば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

⑦頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡される。少なくも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって楽観的である。そうして難関に出会っても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

構成表

- Ⅰ科学者に必要な能力と態度（結論）
  - ①科学者になるには頭がよいと同時に頭が悪くなくてはいけない。（中心）
  - ②この一見相反する命題は一つのものの対立共存する二つの半面を表現している。（説明）
  - ③科学者の頭がよくてはならない理由（能力として）。（詳述）
  - ④科学者の頭が悪くなくてはならない理由（態度として）。（詳述）
- Ⅱ頭のいい人の欠点と頭の悪い人の長所（具体例による説明）
  - ⑤頭のよい人―人より先に着く―肝心なものを見落とす恐れあり。頭の悪い人―おくれて来て―宝物を拾って行く場合あり。（比喩による説明）
  - ⑥頭のよい人―富士のすそ野で頂上をながめただけで引き返す心配あり。（頭の悪い人）―（登ってみる）（比喩による説明）
  - ⑦頭のよい人―前途の難関が見渡される―前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人―前途に霧―楽観的で切り抜けて行く。（説明）
  - ⑧頭のよい人―頭の力を過信する恐れあり。（頭の悪い人）―（過信の恐れなし）（説明）
- Ⅲ科学者に必要な能力と態度（結論）
  - ⑨科学者には人間の頭の力の限界を自覚し、大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟（科学者の態度―頭が悪い）と観察と分析と推理の正確周到（科学者の能力―頭がよい）とが必要である。（結論）
  - ⑩科学者は頭が悪いと同時に頭がよくてはならないのである。（要約）

2意味段落を設定して内容をまとめる　すべての形式段落の要点がつかめると、次には、形式段落相互の関係を明らかにするとともに、話題や論点の展開に注意して、いくつかのグループにまとめる。

○第一段落で逆説的な命題を提示し、第二段落で解説・補足し、第三段落・第四段落で敷衍し、詳述する展開になっている。第一

2意味段落を設定して内容をまとめる。

(1)形式段落の統合―話題や論点の展開に注意して、いくつかの形式段落をまとめる。

(2)形式段落相互の関係の理解―接続語・内容・段落全体における役割に注意する。

〈参考〉形式段落の役割例

○問題提起　○比喩
○定義　○象徴
○説明　○比較
○詳述　○対照
○原因　○列挙
○理由　○類推
○引用　○結論
○例示　○補足

(3)文脈・呼応表現に留意する。

3構成をつかむ。

(1)意味段落に見出しをつける。

(2)意味段落相互の関係をつかむ。

(3)意味段落の全体における役割に注意する。

(4)文章構成の型をつかむ。

〈参考〉文章構成の型

①二段型―本論・結論（尾括型）
　結論・本論（頭括型）
②三段型―序論・本論・結論
　結論・本論・結論（双括型）
③四段型―起・承・転・結
　序論・説明・強調・結論
④五段型―序論・説明・論証・列叙・結論

⑧頭のよい人は、あまりに多く頭の力を過信する恐れがある。その結果として、自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、「自然のほうが間違っている」かのように考える恐れがある。まさかそれほどでなくても、そういったような傾向になる恐れがある。これでは自然科学は自然の科学でなくなる。一方でまた自分の思ったような結果が出たときに、それが実は思ったとは別の原因のために生じた偶然の結果でありはしないかという可能性を吟味するというだいじな仕事を忘れる恐れがある。

⑨頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思い利口だと思う人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸の自分を投げ出し、そうしてただ大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があって、初めて科学者にはなれるのである。しかしそれだけでは科学者にはなれない事ももちろんである。やはり観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは言うまでもないことである。

⑩つまり、頭が悪いと同時に頭がよくてはならないのである。

段落の、はじめの「ある意味では」が第三段落の「この意味では」と、第一段落の、後の「ある意味では」が第四段落の「この点で」とそれぞれ呼応していることをつかむのがカギとなる。第四段落まで「科学者になるには頭がよいと同時に頭が悪くなくてはいけない。」という命題の説明がひとまず終わるので、一区切りとなる。

○第五段落から第八段落までは、逆説的命題の根拠を比喩など用いながら述べた部分で、頭のよい人の短所と頭の悪い人の長所とを比較対照しながら、興味深く、しかも、わかり易く述べている。ここで一区切りとなる。

○第九段落で詳しく結論を述べ、「つまり」ではじまる第十段落で要約している。

結局、三つの意味段落にまとめることができる。

3 構成をつかむ

次には、

○意味段落の内容をよく示す見出しをつける。

○意味段落相互の関係をつかむ。

○文章全体における各意味段落の役割をつかむ。

すなわち、第一段落は、「科学者に必要な能力と態度」について述べており、第二段落は、「頭のよい人の欠点と頭の悪い人の長所」について、第三段落は、再び「科学者に必要な能力と態度」について述べている。

第一段落は、結論となる命題を提起し、第二段落で、具体例によって説明し、第三段落では、結論を再び繰り返して結んでいる。

文章構成の形からすると、参考の②三段型の結論・本論・結論に近い型と考えられる。

また、文章構成の根底を支えている、その筆者独自の論理展開の形式をつかむことは、筆者の文体、考え方、思想に迫るうえで大切である。

この文章の場合は、参考の④結論→論証に近い形式である。

4 要旨をつかむ

○右のように構成表ができあがると文章の内容をはっきりとつかむために、要約文を書いて、大意をまとめてみるのもよい。

○要約文は、各段落の要点を要領よくつないでいくとよい。

序・破・急

序と申すはおのずからの姿、(略)。破と申すは序を破りて細やけて色々を尽くす姿なり。急と申すはまた序を尽くす所の名残の一体なり。

世阿弥『花伝書』

起・承・転・結

(起)大阪本町糸屋の娘
(承)姉が十六妹が十四
(転)諸国大名は弓矢で殺す
(結)糸屋の娘は目で殺す

頼山陽「糸屋のむすめ」

(5)論理展開の形式をつかむ。

〈参考〉論理展開の主要な形式

①演繹法＝一般的原理→特殊的事実
普遍的一般的な前提(事実)から、経験にたよらず、論理の規則に従って特殊的個別的な事実を導き出す推論の方法である。その基本的で代表的な形式が三段論法である。

○三段論法
(大前提)すべてのAはBである。
(小前提)CはAである。
(結　論)故にCはBである。

②帰納法＝特殊的な事実→一般的原理
個々の具体的な事実から、一般的な命題や法則を導き出す推論の方法である。
鯛は卵を産む。鰹は卵を産む。鮒は卵を産む。故に魚類は卵を産む動物である。

③弁証法＝二つの対立する考えを総

〔参考〕「科学者と頭」の最後の部分

最後にもう一つ、頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としてはりっぱな科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって「致知」の一部にすぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウパニシャドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出す手がかりをもっていない。そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い誤り、思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるためには少なからざる障害となるであろう。これもわかりきったことのようであってしばしば忘れられがちなことであり、そうして忘れてならないことの一つであろうと思われる。

この老科学者の世迷い言を読んで不快に感ずる人はきっとうらやむべき優れた頭のいい学者であろう。またこれを読んで会心の笑みを漏らす人は、またきっとうらやむべく頭の悪いりっぱな科学者であろう。これを読んで何事をも考えない人はおそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろうと思われる。

科学者になるには頭がよいと同時に頭が悪くなくてはいけない。この一見相反する命題は、一つのものの対立共存する二つの半面を表現している。すなわち論理をたどる正確で緻密な頭脳と前途を見通す内察と直観力が必要であるという意味では、頭がよくなくてはならない。しかしまた、常識的にわかりきったと思われることに不可解な疑点を認め、科学的に研究することが必要であるという意味では、頭が悪くなくてはならない。

（第一段、以下略）

○要旨は、主要な段落の要点をまとめるとよい。

この文章の場合は、第九段落を中心として、それに第一段落の用語を適当に利用してまとめてみる。

科学者は、正確で緻密な頭脳と前途を見通す内察・真観力を持つと同時に、人知の限界を自覚して大自然の教えにのみ傾聴する謙虚な態度が必要である。

5 表現の特色をつかむ

○「科学者は頭が悪くなくてはいけない」という逆説表現（パラドックス）がこの文章の中心である。既成の観念・学問に絶えず疑問を持ち、謙虚な態度で自然に向かわなくてはならないと言ったのでは平凡になるところを、「頭が悪くなくてはならぬ」と表現して効果的である。

○また、全体が比較・対照法で書かれているために論理が明解でよく理解できる。さらに第五・六段落の比喩表現も具体的でわかり易く、効果的である。

6 作者の考え方をつかむ

○筆者は「科学の歴史は、ある意味では、錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の、頭の悪い、能率の悪い仕事の歴史である。」という立場から、科学者とすれば当然そうあるべきなのに、とかく忘れられがちな面を特に強調して説得している。「それを指摘し解説する人が～少数である」とか「単なる科学教育者にはとにかく」「先生にはなれても」とか、筆者の学者に対する批評は辛辣である。

合統一（止揚するという）して、より高次の考えを導く推論の方法。正・反・合の三段階の展開をする。

④結論→論証
抽象→具体

⑤比較・対照

4 要旨をつかむ。

(1)大意をつかむ—各段落の要点をつなぎ合わせて要約文をまとめてみるとよい。

(2)要旨をつかむ—主要段落の要点を簡潔にまとめる。

(3)表題・反復語に留意する—表題は主題を示していることが多いし、反復して用いられている語は、主題に迫るためのキー・ワードであることが多い。

5 表現の特色をつかむ。

(1)比喩・象徴表現はないか。

(2)逆説表現はないか。

(3)文体はどうか。

6 作者の考え方をつかむ。

(1)どういう問題に、どんな視点から、どう切り込んでいるか。

(2)どういう意図で書いているか。

(3)作者は、どういう思想の持ち主か。

▲寺田寅彦の絵

伊豆の踊り子

川端康成

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨あしが杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓からわたしを追って来た。

わたしは二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺がすりの着物にはかまをはき、学生かばんを肩にかけていた。ひとり伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊まり、湯が島温泉に二夜泊まり、そしてほお歯の高げたで天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林の深い渓谷の秋に見ほれながらも、わたしは一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨がわたしを打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋にたどり着いてほっとすると同時に、わたしはその入り口で立ちすくんでしまった。あまりに期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っているわたしを見た踊り子がすぐに自分の座ぶとんをはずして、裏返しにそばへ置いた。「ええ……。」とだけ言って、わたしはその上に腰をおろした。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう。」ということばがのどにひっかかって出なか

ここに採録したのは、「伊豆の踊り子」の冒頭の一章である。作品全体への見通しをもちながら、作品の冒頭の一章としての読み方を考えてみよう。以下、読み方のポイントを掲げながら、具体的に述べていくことにする。

作品の冒頭を読む——次の諸点に着眼し、作品全体への展開を予測する。

○題名の「伊豆」「踊り子」に、どんなイメージが描けるか。

「伊豆」という地名から、どんなイメージがわくか。南国の明るい風土、都会から離れた清閑の地、温暖な気候、といったことを思い浮かべるだろう。「踊り子」は、どうだろうか。踊りを職業としている若い女性。「舞い子」でもなく、「ダンサー」でもない。「踊り子」からわくイメージは、やや古風な女性芸能人である。それが、和服か洋装かは、定かでない。「伊豆の踊り子」と結ぶと、旅先の伊豆で会った踊り子、伊豆出身の踊り子、といった意味に理解される。これは、読みの課題となる。

○書き出し文から何を読みとるか。

いわゆる新感覚派風の、鮮やかな印象を残す表現である。「わたし」が、天城峠を急いでいる。旅の道中にある状況が、端的に叙述される。すさまじい早さで「わたし」を追ってくる雨あしの白い情景は、とりも直さず、「わたし」の心象でもある。何かを追っている「わたし」のイメージが重なる。

○「わたし」は、何の目的でひとり旅に出たのか。

秋という季節に、ひとり、旅に出るというのは、学生という身分から考えると、単なる物見遊山＝観光目的ではなさそうである。「旅情が自分の身についたと思った。」という文から考えても、旅そのものに身を浸したいという思いが感じられ、この範囲では、はっきりとは理解できないが、何か、特に思い立った目的があるように思われる。これも、これからの読みの課題である。

○踊り子との出会いは、どんな意味をもつか。

踊り子との出会いから、何が起こってくるのかは、まだ、定かではない。しかし、踊り子に対する「わたし」の強い関心——執心といってもよい——は何かを引き起こしそうである。これは、踊り子のもつ清純可憐な印象と関係がありそうである。これはまた、旅に出た目的・動機とも関係があることだと思われる。

川端康成　一八九九（明治三二）—一九七二（昭和四七）。小説家。

▲ノーベル賞受賞式にて

■小説とは

小説とは、作者が想像力（構想力）を働かせて、人生や社会を形象的に表現し、その真実を追求する散文体の文学。

■小説読解の技法

1作品に一貫している中心思想（主題）を明らかにする。

(1)あらすじをつかむ。

(2)筋の単位となる一つ一つのエピソード（話）を箇条書きにする。

(3)これらの話の中を貫いている中心思想をつかむ。

2作品のプロット（筋立て）をとらえる。

(1)筋の単位であるエピソードをつかむ。

(2)エピソードとエピソードとのつながり、関係を明らかにする。

(3)筋立てを表解する。

3作品の中の場面や事件が、だれの立場（視点）から述べられているか、明確にし、その効果を考える。

(1)登場人物が、何人称で表されているかに着目する。

(2)作者は、登場人物のうち、だれの目

ったのだ。
　踊り子と間近に向かい合ったので、わたしはあわてたもとからたばこをとり出した。踊り子がまた連れの女の前のたばこ盆を引き寄せてわたしに近くしてくれた。やっぱりわたしは黙っていた。
　踊り子は十七くらいに見えた。わたしにはわからない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形のりりしい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊り子の連れは四十代の女がひとり、若い女がふたり、ほかに長岡温泉の宿屋の印ばんてんを着た二十五、六の男がいた。
　わたしはそれまでにこの踊り子たちを二度見ているのだった。最初はわたしが湯が島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊り子は太鼓をさげていた。わたしはふり返りふり返りながめて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯が島の二日めの夜、宿屋へ流して来た。踊り子が玄関の板敷きで踊るのを、わたしははしご段の中途に腰をおろして一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯が島なら、あすは天城を南に越えて湯が野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できっと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でぴったり落ち合ったものだから、わ

○設定された人間関係・事件・伏線はどのように展開するか。
　踊り子を中心とする旅人一行との出会い、茶店のばあさんにあおりたてられた思いは、このあとの展開に、どのようなかかわりをもつか、課題としてあたためておくことが必要である。

中心題材をとらえる
○中心題材は何か。
　中心題材は、旅＝伊豆への旅である。その旅で、踊り子と出会う。つまり、踊り子と出会う伊豆の旅が、中心題材である。この旅は、学生かばんを肩にかけた高等学校生の休暇時でない旅。旅は、また、日常性からの脱出であると言われる。

視点を捜す
○作者は、どの人物の眼から、作品中の事物、出来事を描いているか。
　「わたし」の眼を通して、事件・自然・人物を描いている。踊り子たちを外側から描き、「わたし」を内側から描くことによって、踊り子との出会いによって変容していく「わたし」を、効果的に描いている。「わたし」を内側から描くというのは、「わたし」の眼を通して、「わたし」を描くということである。

登場人物の性格をつかむ
○この冒頭の部分で、主要な登場人物が、どういう性格の人間として把握できるか。
〈踊り子〉——題名読みでもったイメージを修正しながら読み深める必要がある。「わたし」の旅情をそそり、青春の叙情の対象としてふさわしい造型がなされていることを読みとる。「すぐに自分の座ぶとんを……置いた。」「連れの……くれた。」などの叙述から、古風な礼儀をわきまえた、よく気のつくやさしい娘として描かれていることがわかる。また、「卵形のりりしい顔」「古風の不思議な形」の髪型などの描写から、どことなくロマンチックで、純情可憐な印象をうける。これらのことを総合して、人物像としてまとめる。
〈わたし〉——うぶで、生まじめな青年として設定されている。「踊り子と間近に……あわてて……取り出した。」などの叙述には、純情さがにじみ出ている。「高等学校の制帽をかぶり、紺がすりの着物にはかまをはき、学生かばんを肩にかけていた。」という文からは、いかにも学生らしい生まじめな感じが表され

を通して、事件や心理・風物を描いているかをつかむ。
(3)その視点の定め方が、作品に与える効果を考える。

4 作中人物の性格をつかみ、作品全体の中での位置を解明する。
(1)登場人物の、作品中での社会的な位置、また、社会に対する見方をとらえる。
(2)登場人物が、作中で自分自身をどう見ているか押さえる。
(3)登場人物の行動や心理が、どのように表現されているかつかむ。
(4)これらをまとめて、登場人物の性格を明らかにする。

5 イメージの使い方を理解する。
(1)イメージには、五官（視・聴・触・嗅・味）でとらえられ、形成されたものがある。作中に描かれているイメージは、そのどれかをつかむ。
(2)事物そのものを直叙的に表したイメージか、他のものを間接的に表したイメージ（比喩・寓喩・象徴）かを明らかにする。

▲『伊豆の踊子』の銅像と天城峠付近

たしはどぎまぎしてしまったのだ。まもなく、茶店のばあさんがわたしを別の部屋へ案内してくれた。
小一時間たつと、旅芸人たちがいて立つらしい物音が聞こえてきた。わたしも落ち着いている場合ではないのだが、胸騒ぎがするばかりで立ち上がる勇気が出なかった。踊り子たちがそばにいなくなると、かえってわたしの空想は解き放たれたようにいきいきと踊り始めた。彼らを送り出してきたばあさんにきいた。
「あの芸人は今夜どこで泊まるんでしょう。」
「あんな者、どこで泊まるやらわかるものでございますか、だんな様。お客があればありしだい、どこにだって泊まるんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」
はなはだしい軽蔑を含んだばあさんのことばが、わたしをあおりたてた。
雨あしが細くなって、峰が明るんできた。もう十分も待てばきれいに晴れ上がると、しきりに引き止められたけれども、じっとすわっていられなかった。
暗いトンネルにはいると、冷たいしずくがぽたぽたと落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

ている。しかし、特に個性的なものにおいはしない。

場面を把握する

○場面を構成する要素としての、場所・時・人物・事件は、どのように設定され、場面が構成されているか。

①場所―伊豆・天城峠の茶屋
②とき―秋
③人物―「わたし」・踊り子・踊り子の連れ・茶店の老婆
④事件―ア　天城峠で旅芸人の一行を追う。
イ　茶店で旅芸人の一行―踊り子と会い、ことばを交わす。
ウ　茶店の老婆の軽蔑のことばに、気持ちをあおられる。
エ　先に立った旅芸人のあとを追う。

筋立てをたどる

○事件の展開と「わたし」の心理の起伏は、どのようにからみ合って展開しているか。

本文展開	場面の登場人物	事件の展開	心理の起伏
1行〜17行 峠	○「わたし」	○旅芸人の一行を追う。	○一つの期待に胸をときめかして
	○「わたし」	○旅芸人の一行と会う。	○その入り口で立ちすくんでしまった。あまりに期待がみごとに的中したからである。
18行〜64行 茶店	○旅芸人一行	○踊り子がざぶとんをそばへ。	○息切れと驚きでことばがでない。
		○踊り子がたばこ盆を近くへ。	○あわてて……。黙っていた。
	○茶店のばあさん	○別室に入る。	○わたしの空想は……踊り始めた。
		○旅芸人一行が出立する。○ばあさんの軽蔑のことば	○わたしをあおりたてた。

(3)これらのイメージが、作品のエピソードの範囲で機能しているものか、作品の場面のレベルで働いているか、作品全体に影響を及ぼす役割をしているかを考える。
(4)これらのイメージの働きを、主題との関係で明らかにする。

6 文章表現の特徴を明らかにする。

(1)短文表現か長文表現かを見わける。
(2)どのような文末表現が用いられているかに着目して、作者の表現態度をつかむ。
(3)比喩的な表現や描写が多い文章か、論理的な表現や説明が多い文章かに気をつける。
(4)これらの表現法が、作品に与えている効果を考える。

■小説の構成要素と比喩表現

1 小説の三要素

(1)人物（だれが）
(2)環境（いつ・どこで・どういう状況で）
(3)事件（何をした・どういうできごとを引き起こした）

2 比喩表現

(1)直喩（〜のような）（〜に似ている）
——りんごのような頬。
(2)隠喩・暗喩（〜の〜）
——りんごの頬。鎌の月。
(3)活喩・擬人法
——雨あしが……わたしを追って来た。
(4)象徴　読者の想像力に訴えて、抽象的な観念や感覚的な気分・情調を、ある類似性を仲立ちとして表す具体

（このあとの梗概）

すぐ出発したわたしは、六町と行かないうちに一行に追いついた。明るい景色の中を歩きながら、気さくに話しかける一行の人々にうちとけたわたしは、下田まで同行する気持ちになっていた。湯が野に着いた夜は、宴席から聞こえる踊り子の太鼓の音に悩ましい思いをしたが、翌晩、踊り子たちは、わたしの部屋へ遊びに来た。翌日、一行が出立を一日延ばして滞在するというのに合わせて、わたしも出発をとりやめにした。

いろいろな話の中で、踊り子の名は薫、年は十四歳だということがわかった。

秋空が、晴れ過ぎたためか春のように霞んで見える海を見ながら、踊り子と話したり、踊り子の兄の栄吉と一緒になったりしながら歩いた。離れたところで、踊り子と女たちの話すのが聞こえてきた。

「いい人ね。」

「それはそう、いい人らしい。」

「ほんとうにいい人ね。いい人はいいね。」

わたしは、自分が世間尋常の意味でいい人に見えることが、言いようもなくありがたかった。下田に着いて、映画を見に行く約束をしたが、一行のおふくろさんが、許してくれなくて、踊り子は元気がなかった。翌朝、旅費の都合でどうしても帰京するわたしを、踊り子と栄吉だけが、港まで送りに来てくれた。二人に別れた船の中で、わたしは、「頭が澄んだ水になってしまっていて、それがぼろぼろこぼれ、そのあとには何も残らないような甘い快さだった。」

▲下田港

65行〜70行 トンネル	○「わたし」	○出立する。	○南伊豆への出口が……明るんでいた。

表現を味わう

○イメージの使い方は、どのようになっているか。

〈杉の密林を白く染めて追ってくる雨あし〉――これは、単なる叙景ではなく、「わたし」の「期待」を追っている心理を象徴している。

〈古風の豊かな髪形をし、卵形のりりしい面ざしの踊り子〉――「わたし」の叙情の対象、心情の投影であるとともに、このイメージを大事にして読み進むと、作品の最後まで揺曳（ようえい）していることがわかる。

〈小さく明るんでいる南伊豆へのトンネルの出口〉――「明るい」ということばは、このあとに展開する作品の基調となっている。

また、何か明るい希望・期待をもたされる。

○文末表現に気づくことはないか。

「た」という助動詞が多用されている。青春の回想の心情にふさわしく、「た」音のもつ簡潔な響きと短文表現が、歯切れのよいテンポと若々しさを感じさせる。

伊豆の踊子　上　川端康成

湯ヶ野までは河津川の渓谷に沿うて三里余りの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなった。荻乗や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ヶ野の藁屋根が麓に見えるやうになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと言った。彼は大変喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別

▲『伊豆の踊子』原稿

的形象。

――鳩＝平和、白＝純潔。作品の主題は、作中のあるイメージによって象徴的に表現されることがある。

3 小説の構成

短編小説の構成は、次の五段の構成になっていることが多い。

(1)発端（事件が起こる。）

(2)展開（事件がある方向に進展する。）

(3)最高潮（クライマックス。事件が最も盛りあがる。）

(4)破局（危機。事件の解決の糸口が見える。）

(5)結末（事件が解決する。）

作品の主題は、(4)に力点を置いて、出現する傾向がある。

▲川端康成が『伊豆の踊子』を執筆した旅館（福田屋）

一つのメルヘン

中原中也

秋の夜は、はるかの彼方に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射してゐるのでありました。

陽といつても、まるで硅石か何かのやうで、
非常な個体の粉末のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、
淡い、それでゐてくつきりとした
影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもゐなかつた川床に、水は
さらさらと、さらさらと流れてゐるのでありました……

第一印象　詩歌の鑑賞・読解の場合、特に第一印象のイメージを大切にしたい。

分　類　口語自由詩、象徴的叙情詩。この詩型は四、四、三、三の全四節一四行からなるソネット（ヨーロッパの一四行詩）形式である。

構　成　秋の夜は現実だが、それ以下の河原の風景は作者の心象風景で、それゆえに題はメルヘン（童話）とつけられた。

起	秋の夜―はるかの彼方（時） 河原―小石ばかり（場所） 陽→さらさらと（光＝視覚表現）
承	陽―硅石　＝非常な個体の粉末 ↓さらさらと（音＝聴覚表現）
転	一つの蝶―淡い／くつきりと＞影
結	蝶→× 河原―水 ↓さらさらと（水＝視覚・聴覚・触覚表現）

心象風景の重要語は「さらさらと」で「蝶」の登場をきっかけとして、光・音から水へと転化する、幻想的なドラマである。

ふるさとの小川から発想されたらしい、静寂で清らかな、死の世界を思わせる風景、その「さらさら」とかわいた世界に水が流れはじめ、潤いのある世界に変わる。典型的な起承転結の四段構成である。

表現の特色　①メルヘン的表現〔夜なのに陽が射す、淡い、それでいてくっきりなどの矛盾。蝶がいなくなると水が流れはじめる。「のでありました」という文末表現。〕②独特な用語〔「硅石」「非常な個体の粉末」（ガラスの粉末状のもの）「一つの蝶」（一匹でも一羽でもない）〕③象徴〔「蝶」は何の象徴か（作者自身の象徴という説あり）。この作品は作者のどういう心情の表現なのか。（主題）〕

リズム　①リフレイン（同語・同音の繰り返し）②押韻（頭韻・脚韻）③五音七音の多用などによりリズムが生まれてくる。

主　題　象徴をどのように解釈するかで諸説があるが、「不毛の心の状態からの脱出を願い、潤いと優しさに満ちた遠い世界への郷愁に身を焼いている」作者の心情を表現したものと考えたい。

中原中也　一九〇七（明治四〇）―一九三七（昭一二）。詩人。

■詩の鑑賞・読解の技法

1 詩の形式・種類をつかむ。
(1)用語―文語詩か口語詩か。
(2)形式―定型詩か自由詩か散文詩か。
(3)内容―叙事詩か劇詩か叙情詩か叙景詩か象徴詩か。

2 構成をつかむ。
(1)情景―季節・時刻・場所・人物など。
(2)心情―作者の心情とその変化。

3 主題をつかむ。
詩の題・反復のことば・感動的表現などに着目し感動の中心をつかむ。

4 イメージをつかむ。
一語一語のイメージ・全体のイメージを明確にし、その情感・意味を知る。

5 表現の技法・特色をつかむ。
(1)比喩 (2)象徴 (3)独得の用語 (4)倒置法 (5)省略 (6)連用中止法 (7)体言止め (8)特別の表記法・句読点などはないか。

6 リズムをつかむ。
(1)リフレイン (2)対句 (3)音位律（押韻）(4)音数律（七五、五七など一定の音数の反復）(5)内在律（作者の感動に起因するリズム）などはどうか。

7 作風をつかむ。
他の作品を読み、作者について調べ作風とこの作品との関連を考える。

俳句

遠山に日の当たりたる枯れ野かな　　高浜虚子

啄木鳥や落ち葉を急ぐ牧の木々　　水原秋桜子

工場の建ちひろがる音のけふも西風の晴れ　　河東碧梧桐

短歌

のど赤きつばくらめふたつはりにゐて
足乳根の母は死にたまふなり　　斎藤茂吉

病のごと
思郷の心湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも　　石川啄木

遠山に……　季語　枯れ野(冬)。さむざむとして淋しい感じ。「遠山」「日の当たりたる」「枯れ野」の三句のかかわりあいでイメージが組み立てられている。遠い連山に日が当たって、浮き出ており、近景の枯れ野は、それとの対照で蕭条とした印象がつよめられる。その心情を表白した作者は、枯れ野を近景とする位置におり、枯れ野と遠山とを同時に視野におさめている。

啄木鳥や……　季語　啄木鳥(秋)。落ち葉を急ぐ、で晩秋の感じ。散り急ぐ牧場の木々とキッツキのつつく音との二つのイメージの組み合わせで成り立っている。キッツキの聴覚イメージと落ち葉の視覚イメージとである。「や」という切れ字は、感動を未分化のまま表す。感動の中味を読みとり、イメージをふくらませる必要がある。見えないキッツキが、この句の中心に座り、散り急ぐ木々の葉が、背景となっている。キッツキのひびきと、散り急ぐ木の葉には、リズムの調和がある。

工場の……　季語　なし。いわゆる新傾向俳句の一つである。するどい感覚で、瞬間の印象を直接的にとらえ表現している。口語自由律をとっているのも、そこにねらいがある。「……音の」の「の」は、それで受ける部分を、微妙に「西風の晴れ」に続けている。工場の拡張される建設の音がする、そのひびきは、西風が吹いて晴れた空にこだまし、今日もまた晴天である、といった意。

のど赤き……　「死に給ふ母」連作の中の一首。句切れはないが、「はりにゐて」で、小休止をする。下の句は、「足乳根の母は」と題目を提示し、「死に給ふなり」と断定的に言い切る。「足乳根の」は、母にかかる枕詞。単なる修辞でなく、乳房に象徴される母のイメージがある。「死に給ふなり」と、断定の助動詞でとらえざるを得なかった、切迫した事実認識の表現が作者の哀切きわまりない心情をよく表している。「のど赤きつばくらめ……」のさりげない点景と母の死という重大事との対比。

病のごと……　啄木が数多く歌っている望郷の歌の一つ。三行に分けて書かれている点に注意。「思郷の心」が一種の心象風景として具象化されたのが、「目にあをぞら……」の下の句である。青空に立ちのぼり、たなびく煙の、うすく白くはかない様子。かぎりない郷愁のイメージを読みとることができる。「病のごと」は、「湧く」にかかる。この比喩は、とどめようとしてとどめられない、強くしきりに望郷の心が湧きあがるのを表したものである。

■俳句読解の技法

1季語を見つけ、季節感をとらえる。
現代俳句では、新年(一月)春(二～四月)夏(五～七月)秋(八～十月)冬(十一～十二月)と考えるのが一般である。

2五七五の三句によって構成される情景・イメージをつかむ。
名詞を用いた凝縮表現であるから、想像によって省略をふくらませ、情景・イメージを描く。

3切れ字に着目し、句の中心をつかむ。
「ぞ・や・かな・けり」などである。

4作者の位置・視点をつかむ。

5前書きを手がかりに制作事情をつかむ。

■短歌読解の技法

1歌によまれている場所・時刻・季節などを明らかにする。
自然の風景・季節感と結びついての叙情が多い。

2句切れによって短歌の構成をつかみ、それによって表現される情景・イメージを明らかにする。
初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れという切れ方がある。

3感動の中心を示す語句を見つける。
句読点をうって、文法的構成を明確にし、意味の上から歌の中核をなす語句をつかむ。

4句切れ・繰り返し・母音・子音のあらわれ方によって、リズムをつかむ。
二句切れ・四句切れは五七調で、ゆったりとした格調、初句切れ・三句切れは七五調で、流れるような感じである。時に字余りのものがある。

5前書きと結びつけて読む。

現代文重要単語100

（↓は参照項目を、↕は対義語、＝は同義語を示す。）

アポロ的　Apollonian type(英)。ニーチェは『悲劇の誕生』の中でギリシア悲劇をアポロ型とディオニソス型に分類した。ギリシア神話でアポロンは太陽神、ディオニソスはぶどう酒の神。アポロ的は静的・知的な秩序や調和のあるもの、ディオニソス的は動的・激情的・陶酔的・狂熱的なものをいう。

意識　精神の諸機能が働いて、それをわれわれが自分の働きとして自覚したとき意識が生じる。自覚のない場合、無意識とか潜在意識とかいう。また意識は内容と作用とに分けられ、意識内容の種類によって道徳意識・美意識・自意識・社会意識などという。

一元論　世界のさまざまな事物は究極的な原理によって統一されており、すべてがそこから展開していくという世界観。原理が二種類のものより成り立っている場合が二元論、それ以上の場合が多元論。唯物論は物質一元論、唯心論は精神一元論、デカルト思想は精神物質二元論。

イデオロギー　Ideologie(独)。①人間の行動の基本となる根本的なものの考え・観念形態。②政治・社会に関する基本的な考え。思想傾向。③社会の物質的・経済的なさまざまのあり方（下部構造）に対して、これに対応する法律・政治・思想・宗教・芸術など（上部構造）のあり方をいう。

因果　①原因と結果。②前に行った業の報い。因果律とは、同一原因からは必ず同一結果を生じるという自然界の法則。因果応報とは、人間の心や行いの善悪に応じてむくいを受けること。

演繹　①一つの事から他の事に押しひろめて述べること。②一般的な命題から特殊な命題を、また抽象的な命題から具体的な命題を、論理によって導くこと。↓三段論法　↕帰納

厭世主義　この世界は悪と苦痛とが優勢を占めているとして、結局、人生は生きるに値しないものだという絶望的な考え方。またそのような人生観に基づく哲学上の立場。＝厭世観・ペシミズム↕楽天主義

外延　形式論理学の用語で、概念が適用される事物の全体の、もとの概念に対する称。たとえば、金属という概念の場合、金・銀・銅・鉄などが、これに当たる。↕内包

懐疑主義　人間にとって普遍的な真理を確実にとらえることは不可能だとする考え方。アテナイのソフィスト、プロタゴラスは「万物の尺度は人間である」から、是非善悪の判断はすべて各人によって異なるとした。＝懐疑論

概念　Begriff（独）の訳。個々の事物から共通な性質や一般的性質を取り出してつくられた表象をいう。内包（意味内容）外延（適用範囲）とからなり、名辞と呼ばれる言語によって表される。

仮説　いろいろな事柄の間の関係が実際には確かめられていない場合、それを統一的に説明するための理論的な仮定。また一般に、ある事柄を理由づけるための仮の見解。実験や観察その他で立証されたとき、正しい学説が成立する。

カテゴリー　Kategorie（独）。①哲学で、事物を分類する際、もはやそれ以上に分けることのできない、最も根本的、一般的な基本概念（属性・量・状態・関係等）。②一般に、同じ性質のものが属すべき範囲・部門。範疇。

観照　①仏語。真実の知恵を働かせて、個々の事物やその理法を明らかに洞察すること。②主観をまじえないで、冷静に現実をみつめること。③美学で、美を直接的に認識すること。

感性　感覚的刺激や印象を受容したり、経験を伴う刺激に反応する心の能力。直感の能力。意志や知性と区別された、感覚的衝動・欲求・感情・情緒を含んだ心の能力。↕悟性

観点　物事を観察・考察するときに、その人の判断の根拠となる一定の立場。＝見地・視点

観念　idea（英）。哲学で、心理学上の表象とほぼ同義に用いられ、人間の意識内容として与えられているあらゆる対象を意味する。個人的に主観的に思い描いているときには観念、誰もが同じように思い浮かべるものとして思い描いているときは概念と言う。↓概念

偽善　うわべだけを飾って正しいように、あるいは善人のように見せかけること。また、その行為。↕偽悪

帰納　個々の観察された事例から、一般に通ずるような法則を導き出すこと。↕演繹

詭弁　人をあざむくために巧みな言いまわしをして、正当でないことを正当であるかのように言うこと。こじつけ。

逆説　パラドックス（paradox）（英）。真理にそむいているようで、よく考えると一種の真理を言い表している表現法。「急がば回れ」の類。

客観　意志や認識などの精神作用が目標として向かう対象。また、主観と独立して存在する外界の対象。行動の目標の対象が客体。↕主観

極限状況　実存主義における重要語で、ドイツのヤスパースの用語。人間を状況における存在としてみるとき、自己の置かれている状況は、ぬきさしならぬ絶対の場、根源的な場と見なしうる。状況をこのように厳しく見るとき、それを極限状況、または限界状況という。そこで人間は挫折し、かえって自分の本来のあり方（実存）を自覚する。

巨視的　物事に対する全体的な把握・大局的な観点よりの把握。↕微視的

虚無主義　現在の制度や機構、権力や価値などをすべて否定し、打破しようとする主義。実在とか真理などを否定しようとする考え方。＝ニヒリズム

偶像　①神仏にかたどり信仰の対象とする像。②崇拝や盲信の対象となっているもの。イギリスの哲学者ベーコンはイドラと呼び、個人的偏見、社会的偏見、習慣・伝統の偏見、種族固有の偏見の四つをあげている。

具象 ①ものが実体を備え、固有の形体を持っていること。②わかりやすい方法や形で表すこと。また、その表されたもの。＝具体 ↕抽象

具体的 物事がはっきりした実態を備え実際の形体・内容を持っているさま。＝具象的 ↕抽象的

経験 ①実際に見たり、聞いたり、行ったりすること。また、それによって得た知識や技能。②哲学で、なんらかの原因によって感覚に引き起こされた主観的状態や意識。体験を批判して得たものを経験とする説もある。

形而上 形がなくて、感覚では知ることができず、時間・空間を超越した、抽象的・観念的なもの。経験的に知覚できる有形のものを形而下という。↕形而下

啓蒙 一般の人々の無知をきりひらき、正しい知識を与えること。自然に行われるのが啓発で、意識的に行われるのが啓蒙である。

現象 直接、知覚することのできる、自然界・人間界の出来事。また、その有様。哲学で、感性的な認識の対象を現象と呼び、理性的認識によってのみとらえられるものを本体・イデアとした。

後天的 ①生まれてから後に身につけるさま。②認識論上、経験を根拠としていること。経験に依存するさま。ア・ポステリオリ。↕先天的

合理 道理にかない正当であること。論理の法則にあっていること。↕不合理
合理化＝道理にあうようにすること。
合理的＝道理にあうようす。
合理主義＝道理にあうことを第一とする考え方。（＝理性主義）

功利主義 哲学で、人間が幸福になることを、人生、または社会の最大目的とする考え方。自分の幸福だけを主とする考え方、他人の幸福を主とする考え方、世間一般のすべての人々が幸福になることを主とする考え方とがある。

個人主義 個人の意義と価値を重視し、個人の権利や自由を尊重する考え方。ルネサンスや宗教改革を経て、個人の価値が自覚され、さらに近代の資本主義の発達により個人の自由競争を重んずることから、広く定着するようになった。

個性 個々の人または個々の事物に備わっていて、他から区別させている固有の性質。パーソナリティ。＝人格

三段論法 論理学の用語。大名辞・媒名辞、小名辞という三つの名辞の間で、大名辞を含む大前提と小名辞を含む小前提の二つから、共通の媒名辞をなかだちとして、小名辞と大名辞からなる結論を出す推論形式。たとえば、「すべての人間は動物である。A氏は人間である。故にA氏は動物である。」の類。

思惟 ①思うこと、考えること。思考。②哲学で、感覚・知覚以外の認識作用。分析・総合・推理・判断などの精神作用をいう。↕感覚

自意識 自分自身についての意識。外界や他人と区別された自我としての自分についての意識。自己意識。自我意識。自覚。↕社会意識
自意識過剰＝自意識が強すぎること。

自我 ①自分。②哲学で、対象の世界と区別された認識・行為の主体であり、しかも体験内容が変化しても同一性を持続して、作用・反応・体験・思考・意欲の働きをする意識の統一体。我。エゴ。

試行錯誤 ①本能・習慣などのままに行って、失敗を重ねながら、だんだんと適応するようになること。②課題が困難で、解決の見通しが容易に立たない場合、種々何回も試みて、失敗を重ねながら、次第に目的に迫って行くこと。

自己疎外 人間の習性や人格が社会関係の中に埋没して主体性を失ってしまう結果、他人や他の事柄に対してだけでなく、自分自身に対してさえも疎遠な感じにとらわれてしまう関係。たとえば、技術革新、高度分業、情報過多の中にあって自己の主体性を失い、何事に対しても違和感をもち、愛も喜びも喪失してしまう状態。

時代錯誤 アナクロニズム。異なる時代の現象・事件・人物・思考などを、歴史の流れを考慮しないで結びつけて理解する誤り。

事大主義 はっきりした自分の主義・定見がなく、ただ勢力の強いものにつき従っていくという考え方。

実在 ①現実にあること。②哲学で、想像・幻覚ではなく、客観的に現実に存在するもの。③哲学で、絶えず生滅変化する現象の奥にあると考えられる常住不変の実体。プラトンのイデアの世界など。↕観念

実証 ①たしかな証拠。②観察や実験から得られた確かな証拠をもってものごとを証明すること。

実存 ①実際にこの世に存在すること。②スコラ哲学で、現実にある存在。実存哲学では、真実で現実にある人間存在。人間が現実の世界の中に埋没して自分を失う状態を自覚し、こうした自己喪失を乗り超えて、真実の自己にもどろうと努力し、自己否定をとおして主体的に自己生成をとげていくこと。
実存主義＝第二次世界大戦後、フランスのサルトルによって造語された思想運動。カフカ『城』の絶望、カミュ『異邦人』の不条理など有名。

主観 ①自分ひとりの考え方。②体験・認識・行動の対象に対して、体験し思惟し認識し感動し意志する存在、またその意識。↕客観・主体

主体 他に対して、意志・行動を及ぼすもの。特に、ヨーロッパ近世哲学では、主観と同様に、認識論上、経験の対象と区別して、認識作用の性質・状態をにない思惟する存在。現代哲学では、認識論的と倫理的主観とに区別され、倫理的・実践的に対象に働きかける意識と身体を持った存在者、行為者をさす。↕客体 →客観・主観

止揚 Aufheben(独)の訳。ヘーゲル弁証法で、低い次元で矛盾対立する二つの概念や事物を、いっそう高次の段階に高めて、新しい調和と秩序のもとに統一すること。＝揚棄 →弁証法

情緒 何かを見たり聞いたり、また考えたりするときに起こってくる喜怒哀楽などの心の動き。そのように心を動か

す対象の雰囲気。＝情趣・情調

象徴　ことばに表現しにくい抽象的な観念・内容を、それを想起・連想させるような具体的な事物や感覚的なことばで置きかえて表すこと。十字架でキリスト教を、ハトで平和を表す類。比喩が感覚的に把握しやすい類似した具象と具象との関係をたとえで表すのに対し、象徴は抽象的なものを具象でたとえる場合にいう。シンボル。

世界観　世界を一つの統一と見たときのその意義や価値に関する考え方。人生観。楽天主義・厭世主義・宿命論・宗教的世界観・道徳的世界観など、多くの立場がある。

絶対　ただ一つだけで、何物にも依存せず、制約されず、あらゆる条件、他者との関連から独立したあり方をいう。
絶対的＝他に比較しうるものがないようす。
絶対者＝他の何物からも支配されない存在。たとえば神。↕相対

全体主義　大衆のおくれた観念形態を利用して、大衆・個人の活動は、すべて民族・国家という全体のために奉仕されねばならぬという観念を植えつけ、大衆・個人のあらゆる自由を抑圧する主義のこと。ドイツのナチズム、イタリヤのファシズム、日本の大政翼賛運動など。↕個人主義・民主主義・自由主義

先天的　①生まれつきであるさま。②人間に、生まれながらにそなわっている理性の特性の状態。カントの認識論で、経験に基づかない論理的にそれに先立つ純粋な形式を根拠としていること。ア・プリオリ。↕後天的

先入観　最初に知ったことによって形成された固定的な観念・見解。ふつう、それによって自由な思考が妨げられるような場合にいう。＝先入見・先入主

相対　他に対立するものがあったり、他に支配するものがあったり、要するに他に関係のあるものがあり、唯一独立の存在でないこと。↕絶対
相対的＝他に比較するものがあるさま。

対照　①照らし合わせること。②対立する事物を並べた時、それぞれの特徴があざやかに発揮されて、著しい違いが目立つこと。コントラスト。＝対比

対象　①目標となるもの。②哲学で、主観に対するものとして、われわれの前にあるもの。↕客観

タブー　taboo(英)。①未開社会において、異常と正常、聖と俗、清浄と不浄を区別し、両者の接近・接触を禁止し、これを犯すと超自然的制裁が加えられると信ずる社会的習俗。②一般にさしさわりがあるから忌み嫌っている事柄。

知・情・意　人間の三つの精神活動で、知性・感情・意志のこと。

抽象　個々別々の物事や観念の中から、それらに共通する性質を抜き出して、一つのものにまとめること。こうしてまとめた観念を概念という。↕具象・具体↕具象
抽象的＝具体的でなく、はっきりしないようす。↕具象的

直観　経験・説明・推理などによらず、事物の真相を直接知ること。＝直覚　↕思考・思惟↕思惟

ディオニソス的　dionysian type (英)。↕アポロ的

典型　①規範となる形式、またその形式をそなえたもの。＝基準・てほん　②同類の中で、その本質・特徴を最もよく表している型やもの。＝類型
典型的＝代表・模範となりうるようす。
類型的＝個性にとぼしく、ありふれた型をもつようす。

伝統　古くからの、しきたり・様式・傾向・思想・血筋など、有形無形の系統をうけ伝えること。また、うけ継いだ系統。

当為　Sollen（独）の訳。哲学で、現に存在すること、必然的であることと、またはありうることに対して、かくあるべし、かくすべしとしてその実現が要求されること。

陶汰　①悪いものを除き良いものを選び残すこと。②生物集団で、特定の個体群だけが特に繁殖するようになることで、適者が選ばれ、不適者は除かれる現象。ダーウィンは人為陶汰・自然陶汰・雌雄陶汰に分けた。

ドグマ　dogma（英）①各種宗教・宗派が信奉する教義・教理。②キリスト教、特にカトリック教会における教条。③独断。正しい根拠をもたず、無批判的・盲目的に提出された、あるいは受け入れられた思想。

内包　形式論理学の用語で、概念が適用されるすべての事物に共通する性質の総体。たとえば、「人間」という概念に対して、「理性性」や「動物性」のたぐい。↕外延

二律背反　相等しい妥当性をもつ前提の上に立った二つの原理や推論が互いに矛盾し合うこと。たとえば、カントが提出した「世界は有限である」と「世界は無限である」という矛盾した二つの命題のたぐい。

認識　①物事をはっきり知り、その意義を正しく理解すること。②哲学で、主観（人間）と客観（対象）とが特定の相互関係にあって、主観がある形式と内容を備えたものとして対象を知り、さらにその知った対象が真であると要求できるような知識、またはそれを知る過程。

発想　①思想や詩情などを表現すること。思想・観念などを、一つの形・一つの気分・一つの意図のもとに表現すること。②ある考えが浮かぶこと。思いつき。③音楽で、楽曲のもつ気分を的確に表現するための演奏の緩急や強弱など。

汎神論　宇宙または宇宙の諸力・法則が神であり、神の具現したものが宇宙の万物であるという宗教説、哲学説。キリスト教から見れば異端であり、無神論といえる。オランダの哲学者スピノザ思想の中に典型的な姿を見る。

必然　必ずそうなること。そのように帰着するに前から決まっていること。↕偶然
必然性＝必ずそうであるべき性質。
必然的＝必ずそうなるようす。

非人情　①他人に対するおもいやり、同情心などに欠けること。＝不人情・薄

情。②世間一般の義理・人情を超越して、それにわずらわされないこと。夏目漱石が説いたもので、『草枕』に具体的に出てくる。＝超俗

ヒューマニズム humanism(英)。人間性の尊重と、人間の解放を基調とする主張。①ルネサンス期のイタリアに始まる、中世の教会的権威のもとで死滅しかかっていた自然な人間性をよみがえらそうとした運動。②一七～一八世紀のイギリス、フランスのいくつかの市民革命を理論づけ指導した思想。③一八世紀後半から抽象的合理主義と機械的世界観に対する反抗からドイツに起こった新ヒューマニズムなどがある。＝人間主義・人本主義・人文主義

諷刺　社会や人物などの過失・欠陥・不合理などを正面から非難攻撃しないで、皮肉・機知・冷笑・反語などの方法でからかったり、遠まわしに攻撃し非難すること。

不条理　①物事のすじみちが立たないこと。道理に合わないこと。②人生の無意義・無目的・不合理な絶望的状況。
不条理の哲学＝フランスの実存主義文学者アルベール＝カミュの思想。意味も希望も見いだせない人生の不条理が、人間と世界とのかかわり合いの中に現れるが、人間がこうした不条理を克服できないのに克服しようと努力していることを強調し、ここに人生の真の不条理を見ようとする哲学。↓極限状況・実存

普遍　①ひろくゆきわたること。②一定範囲内の事象すべてに共通し、例外のないこと。↕特殊
普遍性＝広く一般に行きわたる性質。（↕特殊性）

ブルジョア bourgeois(仏)。①中世ヨーロッパの都市で主に商工業に従事した市民。貴族・僧侶に対して第三階級を構成。市民革命のにない手となった。②近代資本主義社会で、資本家階級に属する人。また生産手段を有する人。
ブルジョアジー＝有産階級・資本家階級↕プロレタリア・プロレタリアート

プロレタリア Proletarir(独)。資本主義社会で、他に一切の生産手段を持たず、自分の労働力を資本家に売り渡して生活する賃金労働者。その階級。↕ブルジョア

文化　①人間が価値あるものを作り生活を豊かにする活動。または人間生活が豊かになった状態。②特に精神的な面で生活を豊かにする活動、または精神生活が豊かになった状態。↕文明
文化的＝文化の状態にあるようす。文化に関係あるようす。
文化国家＝文化の向上を方針とする国家。

文明　①文教が盛んで人知が明らかになり、精神的・物質的に生活が快適であること。②人間の内面的な精神活動によって形成された科学・宗教・芸術などの精神文化に対して、人間の外面的な生活条件や秩序が科学技術の発達により物質的に豊かになる状態。↕文化

弁証法　Dialektik(独)原語は対話・弁論術の意。ヘーゲル哲学では、思惟は矛盾を通して発展し、その発展の中で矛盾が止揚されるとし、正(テーゼ)反(アンチテーゼ)合(ジンテーゼ)の三段階を経るという。マルクスは弁証法的唯物論として展開した。↓止揚

民主主義 democracy(英)。人民が権力を所有するとともに、権力をみずから行使する政治形態。狭義には、フランス革命以後に私有財産制を前提とした上で、個人の自由と万人の平等を法的に確定した政治をいう。

命題　判断をことばに表したもの。

唯心論　物質の存在を認めず、外界は主観の観念であるとする説。世界の本体は精神にあるとする説。＝観念論 ↓一元論・観念　↕唯物論

唯物論　宇宙の本質は物質であり、霊魂・精神などは実在せず、意識は高度に組織された物質である脳髄の所産であり、認識は客観的実在である脳髄による反映であるとする説。↕唯心論・観念論

楽天主義　人生の暗い面を認めるが、けっきょくこの世はすべて善であり、人生は楽しいものであるとする考え方。
＝楽天観　オプチミズム　↕厭世主義

理性　①感情に走らず、道理に基づいて考えたり判断したりする能力。②プラトン哲学では真実在を直覚する能力。カント哲学では、概念的な思考能力であるとともに義務の意識に基づく行為を遂行していく能力。↕感性・悟性

理想　①将来はこうありたい、当然そうあるべきだと思いえがく完全な状態。②哲学で、人間の理性と感情を十分に満足させる最も完全な状態。

理知　理性と知恵。本能や感情に支配されることなく、深い知識に基づいて物事を論理的に思考したり、判断したりする能力。↓理性

理念　理性によって得られる最高の概念。カントでは経験を超越する概念、すなわち神・自由・不死をいう。＝イデア・イデー
理念的＝理念としてあるようす。

倫理　①人間として行うべき道、その原理。②道徳意識。個人の中にあって性格を形造るほど内面化した道徳の標準の観念・倫理感。＝道徳・モラル

類推　①同じたぐいの事、または類似の点をもとにして他の事を推しはかること。②論理学で、二つの物事の間のある点の類似性から、他の点での類似性を推理すること。＝アナロジー・類測・類比

レジスタンス résistance(仏)。抵抗。権力や侵略者などに対する抵抗運動。

ロゴス logos(ギ)①ことば。②ギリシア哲学で、ことばを媒体として表現される理性、また理性の働き。③ギリシア哲学で、万物が流転するという宇宙の真理理法。

論理　①議論・思考・推理などを進めて行く筋道。思考の法則・形式・論証の仕方。②物事の中にある道理。また、事物間の法則的なつながり。
論理学＝アリストテレス以来の推理の形式の研究が形式論理学。ラッセル・ホワイトヘッドなどが数学的方法によって開拓したのが記号論理学。

随筆

徒然草

吉田兼好

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたくつくれり。しだのなにがしとかやしる所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも、人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拝みに。掻餅めさせむ。」とて具しもていきたるに、おのおの拝みて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子・狛犬そむきて、うしろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。ふかきゆゑあらむ。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覧じとがめずや。無下なり。」と言へば、おのおのあやしみて、「まことに他にことなりけり。都のつとにかたらむ。」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、さだめてならひあることにはべらむ。ちとうけたまはらばや。」と言はれければ、「そのことにさうらふ。さがなきわらはべどものつかまつりける、奇怪にさうらふことなり。」とて、さしよりて、すゑなほして去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

（二百三十六段）

古文の学習　古文の学習では予習がポイントである。予習の方法は次のようにするとよい。

本文書写——歴史的仮名遣いを正確に。
↓
音　読——文脈を確認しながら。
↓
単語調べ——古語辞典をひく時は、形容動詞は語幹のみ、それ以外の活用語は終止形で。
〈例〉めでたく→めでたし。奇怪に→奇怪。
↓
口　語　訳——できるだけ原文に忠実に。

獅子

狛犬

現代語と異なる意味の古語　次のような、古語と現代語の意味が異なる語には気をつける。

おとなし（古）主だった。（現）もの静かだ。
いたづら（古）むだ。（現）悪ふざけ。

作品の構成　この一段の構成は次のようになる。

起　丹波に～信おこしたり　丹波の出雲社に聖海上人たち一行が参拝した。
↓
承　御前なる～など言ふに　神前の獅子・狛犬が背中あわせに立っているのを見て上人が感激。
↓
転　上人なほ～去にければ　神官にわけを問うと、「子供のいたずらだ」と置き直して行ってしまう。
↓
結　上人の～なりにけり　上人の涙がむだになってしまったことだ。（作者の感想）

主　題　結にあたる「上人の感涙いたづらになりにけり。」にこの段の主題が暗示されていることに注意。主題は権威主義者の聖海上人に対する作者の痛烈な皮肉である。

鑑　賞　「いかに殿ばら～無下なり」と人を見下した態度をとる上人が、実は子供のいたずらに感激の涙をこぼしていたというどんでん返しのおもしろさ。オーバーな上人と、事もなげな神官との対比のおかしさを味わい、そのユーモアの裏にある作者の皮肉な眼（＝主題）を読みとる。

■『徒然草』読解の技法

1 作者兼好の考え方の特徴をとらえる。
(1)兼好の考え方の多面性を理解する。
(2)徒然草に流れる合理的精神をつかむ。
(3)徒然草に流れる無常観を理解する。

2 各章段が主題のもとに明確な文章構成の型をもっていることに注目する。
(1)主題を表していることばを見つける。
(2)主題文の置かれている位置の確認。
(3)話の展開にそって段落分けをし、文章構成の型をつかむ。

3 徒然草は、対句法・列挙法が文章の特色であることをつかむ。
(1)対句法で書かれた文に注意する。
〈例〉かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。
(2)列挙法で書かれた文に注意する。
〈例〉人は、かたち・ありさまの
(3)対句法・列挙法の効果に着目する。

4 用言（動詞・形容詞・形容動詞）の活用変化をマスターする。
(1)用言の活用形および活用の種類を理解し記憶する。
(2)連用形の用法に習熟する。
①中止法〈例〉かたちをはづる心もなく、人にいでまじらはん事を思ひ、
②副詞法〈例〉見る人もなき月の、さむけくすめる二十日あまりの空こそ、
③連用法〈例〉身をあやぶめて、くだけやすき事。

5 基本的な語彙について意味を系統的に理解する。
(1)辞書の引き方を覚え、辞書に慣れる。
(2)現代語と意味の異なる語に注意する。
(3)文脈にふさわしい意味をとらえる。

伊勢物語

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めにとてゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所に至りぬ。（略）その沢のほとりの木のかげに下りゐて、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ。」と言ひければ、よめる。

唐衣着つつなれにし妻しあれば
　はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙落として、ほとびにけり。

ゆきゆきて、駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つた・かへでは茂り、もの心ぼそく、すずろなるめをみることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道はいかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて文書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつつにも
　夢にも人にあはぬなりけり

（九段）

場面・心情

〈状況・場面〉昔、男（自分は何の役にもたたないと諦めて関東に安住の地を求めに友人と旅立っている）が、三河の八橋（かきつばたが美しく咲いた沢のほとりの木かげ）で、干し飯を食べているとき、仲間に旅情を詠めと言われたので、歌を詠んだら、一同は落涙した。

〈心情〉旅愁（京に恋しい妻を残しているので、はるばるやって来た旅路が悲しく思われることだ。）

〈場面〉男が、駿河の宇津の山で、山道を心細く思っている時に、知り合いの修行者と出会ったので、手紙を京の妻へと託した。

〈心情〉慕情（駿河の宇津の山まで来たが、現実でも夢でもあなたに会わない—あなたは私のことなど思ってくれていないのだね。）

和歌の修辞法

①**折句**＝「かきつばた」のように物の名を示す文字を各句の最初に使うという制約を設けて歌を作る技巧を「折句」という。

②**枕詞**＝「唐衣」は「着」へかかる枕詞。原則として五音。

③**序詞**＝「唐衣着つつ」は「なれ」を導く序詞。原則として六音以上。ある歌で一度しか用いられない。述部に直接関係のない飾りことばを見つけ、五音なら枕詞、それ以上なら序詞と判断すればよい。

④**掛詞**＝なれ（馴れ・褻れ）つま（妻・褄）はるばる（遙々・張る張る）き（来・着）などのように、一語に二つの意味がかけられている技法を掛詞という。

⑤**縁語**＝褻れ・褄・張る張る・着は「唐衣」の縁語である。一首の中に縁のあることばをつらねる技法を縁語という。

注意すべき表現

①三河の国（三河という国）②書きてつく（書いてことづけた）

③修行者あひたり（修行者が男に会った）

係り結び・敬語表現

なむ—ける（連体形）ぞ—思ふ（連体形）か—いまする（連体形）「います」は「在り・居り・行く」などの意の敬語動詞。この場合、尊敬表現で、修行者の男に対する敬意を示している。

基本的な語彙

基本語　えうなし・かれいひ・すずろなり

■『伊勢物語』読解の技法

1 伊勢物語全体をつらぬく「みやび」の精神を理解する。
業平らしい「色好み」の愛の物語を通して、場面にふさわしい最も洗練された言語と行動を読みとる。

2 歌物語の形式をつかむ。
散文（地の文）＝歌の詠まれる場面・状況を叙述。
歌＝主人公の心情・感動の中心を叙述。
＊両者が対等の関係で融合して、現実的で叙情的な文章を構成する。

3 場面を明確にし、主人公の心情をつかむ。

4 伊勢物語の文章の特徴をつかむ。
①歌に必要なもの以外は具象化しない象徴的文章。
②「昔、男」「昔、男ありけり」ではじまり、歌で結ぶ、単純素朴な構成。
③単純な構文の文の積み重ね・指示語の多用・同語反復。
④時代特有の表現法—助詞の用法など。

5 和歌の修辞法をマスターする。
①折句 ②枕詞 ③序詞 ④掛詞 ⑤縁語

6 基本的な助動詞の用法を習得する。
①意味分類で覚え、基本的な意味を理解するとともに活用を覚える。
②接続関係を確実に覚える。
③「き・けり」などのような同じ分類内の助動詞の用法の違いに注意する。
④二つ以上の助動詞の連接表現に留意。

7 係り結びの表現に習熟する。

8 敬語表現（尊敬・謙譲・丁寧）について体系的に理解する

9 基本的な語彙、古代の習慣を理解する。

枕草子

清少納言

うつくしきもの、瓜にかきたるちごの顔。すずめの子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、急ぎてはひ来るみちに、いと小さき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。かしらは尼削ぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきて、ものなど見たるもうつくし。

大きにはあらぬ殿上童の、装束きたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。（中略）

いみじう白く肥えたるちごの、二つばかりなるが、二藍のうすものなど、衣長にて、たすき結ひたるがはひ出でたるも、また、短きが袖がちなる着てありくも、みなうつくし。八つ九つ十ばかりなどの男児の、声はをさなげにて文読みたる、いとうつくし。

にはとりのひなの、足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよひよとかしがましう鳴きて、人のしりさきにたちてありくもをかし。（一五五段）

枕草子の基本文型　枕草子の類集的章段には、下で説明したような二つの基本文型がある。この段では次の二つの型が基本である。

題詞＝心情詞＋項目
うつくしきもの、瓜にかきたるちごの顔。→「もの」型定型文

題詞－省略＋説明詞＋心情詞
（うつくしきもの）、二つ三つ〜見せたる、いとうつくし。→「は」型定型文の変形

枕草子の文の構造　この段では格助詞の「の」の二つの用法に注意して、文の構造を考えなければならない。

①主格を表す「の」

主部（主語）　述部（述語）
二つ三つばかりなるちごの、〜見せたる、いとうつくし。
（訳）二つ三つぐらいの子供が〜見せる様子は大変かわいい。

②同格を表す「の」

主部（主語　同格）
いみじう白く肥えたるちごの、二つばかりなる（ちご）が、
（訳）とても色白な太った子供であって、二歳ぐらいな子供が、

この文の全体的な構造は①と同じである。

基本語（とくに心情語）　この段で注意すべき基本的な心情語を次にあげておく。これらは、似た意味で用いられているが、それぞれの根本的な意味を理解して、作品の中での表現のニュアンスを読みとることが大切である。

〔うつくし〕　最も古くは、親子間、夫婦間の愛情を表すことばであった。それが平安時代になり、小さいものをかわいく思う気持ちを表すようになり、中世に入って、美しい・きれいだ、の意味に転じた。

〔らうたし〕　弱いもの、劣ったものへのいたわりの気持ちを表す。この段では、「かいつきて寝たる」幼児の姿を表現するのに用いられている。

〔をかし〕　ものを客観的な興味をもって賞美する意味をもつ。この段では、思わず笑いをさそわれるひよこの様子を表現している。

〔をかしげなり〕　「をかし」と同じ意味である。

■『枕草子』読解の技法

1 枕草子の美的理念「をかし」を理解する。

(1)「をかし」「うつくし」などの心情や印象・感覚を表す語を理解する。
(2)「をかし」「うつくし」などの心情語が用いられる対象を把握する。

2 枕草子の類集的章段に特有の二つの基本文型を理解する。

○「は」型定型文
題詞＋項目＋心情
〈例〉笛は。横笛、いみじうをかし。(294)

○「もの」型定型文
題詞＝心情詞＋項目
〈例〉すさまじきもの。昼ほゆる犬。(76)

3 枕草子の文章の特色をつかむ。

(1)短文表現が多い。
(2)省略表現が多い。
(3)名詞のみの表現が多い。

4 基本的な助詞の用法に習熟する。

(1)助詞には、格助詞・接続助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞がある。これらの基本的用法を理解する。
(2)特に次の助詞に注意する。
- ①格助詞「の」の同格用法。
- ②接続助詞「ば」の用い方。
  - ㋐未然形＋ば→順接の仮定条件。
  - ㋑已然形＋ば→順接の確定条件。
- ③係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の用法・意味の違い。
- ④副助詞「だに」「さへ」の意味の違い。
- ⑤終助詞「ばや」「なむ」の意味の違い。

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、こぞの秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えんと、そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

表八句を庵の柱に掛け置く。

やよひも末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有り明けにて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙

旅の動機・目的

①旅へのあこがれ―人生は旅であり、敬慕する古人（李白・杜甫・西行・宗祇）も多く旅中に死んでいる。旅らしい旅へのあこがれ。

②歌枕探訪―松島の月など名所や、西行などゆかりの歌枕を訪れ古人の心に触れようとした。

③風雅探求―単なる名所見物や懐古趣味のためではなく、風雅の伝統に直接ふれることによって、あらたな創造をめざした。

圧縮表現の例―「片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず」は「片雲の風に誘はれて漂泊するごとく、我も漂泊したき思ひやまず。」

縁語・掛詞の例―「松島の月まづ心にかかり」の「月」と「かかり」が縁語。「春立てる霞の空に」の「立てる」に「春が立つ」と「霞が立つ」とがかかっている。

対句表現の例―「月日は百代の過客」と「行きかふ年もまた旅人」とが対句。「舟の上に生涯を浮かべ」と「馬の口とらえて老いを迎ふる」とが対句。

比喩・朧化の例

「幻のちまた」＝夢幻のようにはかないこの世の街道（比喩）

「予も、いづれの年よりか」などは朧化（ぼかし）表現。

俳句の季語と切れ字

「草の戸も」の句＝季語「ひな」（春）・切れ字「ぞ」

「行く春や」の句＝季語「行く春」（春）・切れ字「や」

陰暦では、一、二、三月が春、四、五、六月が夏、七、八、九月が秋、十、十一、十二月が冬。

破格表現の例

①馬の口とらえ（ヤ行下二）て――とらへ（ハ行下二）

②付けかえ（ヤ行下二）て――付けかへ（ハ行下二）

③灸すゆる（ヤ行下二）――すうる（ワ行下二）

文の構造に注意すべき例

連用修飾語　　A　被修飾語　　被修飾語

［春立てる霞の空に］白河の関［越えん］と〜心を［狂はせ］

B

文法的にはABとも可能である。それを決定するのは、「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（能因法師）との関係をどうとらえるかという解釈である。

■『おくのほそ道』読解の技法

1 旅の動機・目的を理解し、人生を旅とみる流転の思想をつかむ。

2 和漢混交文を基調とする俳文の特色をつかむ。

①省略・圧縮・飛躍

②縁語・掛詞

③対語・対句

④比喩・朧化

3 地の文と俳句との関係をつかむ。

地の文＝場面・状況を述べることによって俳句の意味や情趣を助ける。

俳句＝場面の状況・心情を象徴的に凝縮して表現することにより文章を引き締める。

4 俳句の季語・切れ字に注意して句意をつかむ。

5 文法的破格表現に注意する。

①ハ行・ワ行の二段活用動詞のヤ行化

②連体形による終止

③他動詞の自動詞的用法

6 文の構造、分析について理解を深め習熟する。

〈基本文型〉

①平叙文・疑問文・命令文・感動文

②単文・複文・重文

③「何がどうする」「何がどんなだ」「何が何だ」

〈文の成分〉

①主部・述部・修飾語・被修飾語

②主語・述語・修飾語・並立語・接続語・独立語

③主述関係と修飾関係の解明が重要。

7 基本語彙について意味を系統的に理解する。

古典重要単語265

【古今異義語】

（古）は古語の意味、（現）は現代の意味の要点を示したもの。

あからさま（なり）〈形容動詞・ナリ活用〉
（古）かりそめに～だ。（現）ありのまま。露骨。

あきらむ〈他動詞・下二段〉
（古）明らかにする。（現）諦めて思い切る。

あくがる〈自動詞・下二段〉
（古）①放心する。②ぶらぶらさまよい出る。（現）「あこがれる」は思い慕う、こがれる。

あさまし〈形容詞・シク活用〉
（古）善悪にかかわらず、驚きあきれる気持ち。（現）あまりになさけない。あさはかだ。

あそび〈名詞〉
（古）①管絃。②遊び。（現）②の意味。

あたらし〈形容詞・シク活用〉
（古）惜しい。（現）新しい。

あながち（なり）〈形容動詞・ナリ活用〉
（古）むやみだ。あまりだ。（現）かならずしも。

あらます〈他動詞・四段〉
（古）予定する。「あらましごと」（現）「あらまし」は、おおよそ。

ありがたし〈形容詞・ク活用〉
（古）めったにない。（現）かたじけない。

あるじ（す）〈名詞〉〈自動詞・サ変〉
（古）①人をもてなす。②主人。（現）②の意。

いそぎ〈名詞〉
（古）①急用。②用意。準備。（現）①の意。

いたし〈形容詞・ク活用〉
（古）甚だしい。りっぱだ。（現）痛い。

いたづら（なり）〈形容動詞・ナリ活用〉
（古）①むだだ。②むなしい。③ひまだ。（現）悪さ。悪戯。

いたはし〈形容詞・シク活用〉
（古）①骨をおる。②苦しむ。③大事に思う。④気の毒だ。（現）④の意。

いまいまし〈形容詞・シク活用〉
（古）①不吉だ。②にくらしい。（現）癪（しゃく）だ。

うしろめたし〈形容詞・ク活用〉
（古）①心配だ。②やましい。（現）②の意。

うつくし〈形容詞・シク活用〉
（古）①愛らしい。②なつかしい。③りっぱだ。（現）美しい。

うるはし〈形容詞・シク活用〉
（古）①端正だ。②正式だ。③仲がよい。④美麗だ。（現）④の意。

おこたる〈自動詞・四段〉
（古）①病気がなおる。②怠ける。（現）②の意。

おこなふ〈自動詞・他動詞・四段〉
（古）①仏道修行する。②する。（現）②の意。

おとなし〈形容詞・シク活用〉
（古）①大人びている。②物なれている。③おもだっている。（現）落ち着いて穏やかだ。

おどろく〈自動詞・四段〉
（古）①目をさます。②驚く。（現）②の意。

おのづから〈副詞〉
（古）①自然に。②たまたま。③もしひょっとして。（現）①の意。

おぼえ〈名詞〉
（古）①信用。評判。寵愛。②思いあたること。（現）記憶。

おぼつかなし〈形容詞・ク活用〉
（古）①はっきりしない。②待ち遠しい。もどかしい。③不審だ。④不安だ。（現）④の意。

かしこし〈形容詞・ク活用〉
（古）①すぐれている。②甚だしい。③恐ろしい。④おそれ多い。（現）りこうだ。

かしづく〈他動詞・四段〉
（古）①大切に愛育する。②世話・後見する。（現）つかえる。

かたち〈名詞〉
（古）①容貌。②形。（現）②の意。

かたらふ〈他動詞・四段〉
（古）①交際する。②仲間にする。③頼む。④男女が言い交す。⑤話し合う。（現）⑤の意。

かつ〈副詞〉
（古）①一方では。②すぐに。③わずかに。（現）それに加えて。

かなし〈形容詞・シク活用〉
（古）①いとしい。②興趣がある。③悲しい。（現）③の意。

きよらなり〈形容動詞・ナリ活用〉
（古）華麗だ。美しい。（現）清らかだ。

ここら〈副詞〉
（古）多く。たくさん。（現）このあたり。

こころぐるし〈形容詞・シク活用〉
（古）①つらい。苦痛だ。②気がかりだ。③気の毒だ。（現）③の意。

ことわる〈他動詞・四段〉
（古）①判断する。②説明する。（現）辞退する。予告する。拒絶する。

さうざうし〈形容詞・シク活用〉
（古）ものたりない。淋しい。（現）さわがしい。

さながら〈副詞〉
（古）①そのまま。②すべて。（現）まるで。

さる〈自動詞・四段〉
（古）①その時節になる。②離れていく。③移り変わる。（現）②の意。

すさまじ〈形容詞・シク活用〉
（古）①興ざめだ。②おもしろくない。③不調和だ。（現）ものすごい。恐ろしい。

せめて〈副詞〉
（古）①無理に。②非常に。（現）すくなくとも。

つとめて〈名詞〉
（古）①早朝。②翌朝。（現）努力して。

つらし〈形容詞・ク活用〉
（古）①薄情だ。②心苦しい。（現）②の意。

つれなし〈形容詞・ク活用〉
（古）①変化がない。②無情だ。（現）冷淡だ。

なかなか〈副詞〉
（古）かえって。むしろ。（現）かなり。

なさけなし〈形容詞・ク活用〉
（古）①無情だ。②無風流だ。（現）なさけない。

ながむ〈他動詞・下二段〉
(古)①物思いにふける。②眺める。(現)②の意。
なつかし〈形容詞・シク活用〉
(古)①心ひかれる。②慕わしい。(現)②の意。
なほ〈副詞〉
(古)①まだ。②やはり。③まるで。④さらに。(現)④の意。
なまめかし〈形容詞・シク活用〉
(古)優美だ。上品だ。(現)いろっぽい。
にほふ〈自動詞・四段〉
(古)①色美しく映える。②かおる。(現)におう。
ねんず〈他動詞・サ変〉
(古)①がまんする。②祈る。(現)②の意。
ののしる〈自動詞・四段〉
(古)①大声でさわぐ。②評判になる。③威勢がいい。(現)悪口をいう。
はかなし〈形容詞・ク活用〉
(古)①たよりない。②とるにたりない。③かりそめだ。(現)無常だ。もろい。
はづかし〈形容詞・シク活用〉
(古)①きまりが悪い。②気がおかれる。③相手がとてもりっぱだ。(現)①の意。
ふるさと〈名詞〉
(古)①旧都。②親愛の地。③故郷。(現)③の意。
むつかし〈形容詞・シク活用〉
(古)①不快だ。②煩わしい。③気味が悪い。(現)困難だ。
めづらし〈形容詞・シク活用〉
(古)①愛らしい。②目新しい。(現)まれだ。
めでたし〈形容詞・ク活用〉
(古)①すばらしい。②祝うべきだ。(現)②の意。
もてはやす〈他動詞・四段〉
(古)①ひきたたせる。②ほめそやす。(現)②。
もどかし〈形容詞・シク活用〉
(古)①非難すべきだ。②はがゆい。(現)②の意。
やうやく〈副詞〉
(古)①しだいに。②やっと。(現)②の意。
やがて〈副詞〉
(古)①すぐに。②そのまま。(現)そのうち。
やさし〈形容詞・シク活用〉
(古)①はずかしい。②優美だ。③殊勝である。(現)①柔和だ。②たやすい。
ゆかし〈形容詞・シク活用〉
(古)心がひかれる。(現)おくゆかしい。
よろこび〈名詞〉
(古)①祝賀。②お礼。③官位昇進。④喜び。(現)④の意。
をかし〈形容詞・シク活用〉
(古)①おもしろい。②興趣がある。③すぐれている。(現)こっけいだ。へんだ。

【一般的な基本古語】

あざる〈自動詞・下二段〉
①ふざける。乱れる。②うちとける。
あつし〈形容詞・シク活用〉
病弱だ。危篤だ。
あてなり〈形容動詞・ナリ活用〉
①身分が高貴だ。②優雅上品だ。
あなづらはし〈形容詞・シク活用〉
①あなどられやすい。②気がおけない。
あふ(敢ふ)〈自動詞・補助動詞・下二段〉
①どうにかやりきる。耐える。②すっかり〜する。
いたづく〈自動詞・他動詞・四段〉
①苦労する。②病気をする。③いたわる。
いつく〈自動詞・他動詞・四段〉
①神に仕える。②たいせつにする。
いはけなし〈形容詞・ク活用〉
幼稚だ。あどけない。
いひくたす〈他動詞・四段〉
けちをつける。言いけなす。
いひけつ〈他動詞・四段〉
①否定する。②非難する。
いひしろふ〈他動詞・四段〉
①言い争う。②うわさする。
いぶせし〈形容詞・ク活用〉
①気が晴れない。②おぼつかない。待ち遠しい。③むさくるしい。
うたて〈副詞〉
①いよいよ甚だしく。②普通でなく。③いとわしく。
うとし〈形容詞・ク活用〉
①疎遠である。②無関心である。
うべ〈副詞〉
なるほど。いかにも。
うらなし〈形容詞・ク活用〉
①心にかくす所がない。②遠慮がない。
うれたし〈形容詞・ク活用〉
①うらめしい。②いとわしい。
えうなし〈形容詞・ク活用〉
①役にたたない。②不要だ。
えんなり〈形容動詞・ナリ活用〉
①優美だ。上品だ。②あでやかだ。
おいらかなり〈形容動詞・ナリ活用〉
おだやかだ。おうようだ。
おくる(後る)〈自動詞・下二段〉
①機をのがす。②おくれる。③劣る。乏しい。④生き残る。死におくれる。⑤気おくれがする。
おどろおどろし〈形容動詞・シク活用〉
おどろくべき様だ。ぎょうさんだ。
おのがじし〈副詞〉
①めいめい。②自分の心まかせに。
おほけなし〈形容詞・ク活用〉
①身分不相応だ。②おそれおおい。
おほどかなり〈形容動詞・ナリ活用〉
おっとりしている。
おほとのごもる〈自動詞・四段〉
おやすみになる。(「寝る」の敬語)。
おもだたし〈形容詞・シク活用〉
晴れがましい。名誉だ。
およづく〈自動詞・下二段〉
①大人らしくなる。②老成する。③質素だ。
かこつ〈他動詞・四段〉
①かこつける。②ぐちをいう。嘆く。
かたみに〈副詞〉
おたがいに。
かどかどし〈形容詞・シク活用〉
①才気がある。賢い。②心にくせがある。
がり〈名詞〉
〜のいる所。〜のもと。「人のがり」
かる(離る)〈自動詞・下二段〉
①遠のく。②うとくなる。絶える。

くすし〈形容詞・シク活用〉
①霊妙だ。②窮屈だ。③奇特だ。
くたす〈他動詞・四段〉
①朽ちさす。腐らす。②悪く言う。
けうとし〈形容詞・ク活用〉
①いとわしい。②きみがわるい。
けしきだつ〈自動詞・四段〉
①ようすが外にあらわれる。②気取る。③きざす。
けやけし〈形容詞・ク活用〉
①異様だ。②顕著だ。③きっぱりしている。
こうず(困ず)〈自動詞・サ変〉
①こまる。②疲れる。
こころづきなし〈形容詞・ク活用〉
気にくわない。心にしっくりこない。
こころづくし〈名詞〉
もの思い。気をもむこと。
こよなし〈形容詞・ク活用〉
この上ない。格別だ。
さうなし〈形容詞・ク活用〉
①(双無しの意)比類がない。②(左右無しの意)たやすい。どっちとも決めかねる。
さがなし〈形容詞・ク活用〉
①よくない。②手におえない。
さはる(障る)〈自動詞・四段〉
支障となる。さまたげとなる。
しほたる〈自動詞・下二段〉
①潮水にぬれて滴がたれる。②涙を流す。③涙で袖がぬれる。
しるし(著し)〈形容詞・ク活用〉
①明白でいちじるしい。②予想通りだ。
すだく〈自動詞・四段〉
①群がり集まる。②虫が鳴く

せちなり〈形容動詞・ナリ活用〉
切迫している。
そこはかとなし〈形容詞・ク活用〉
①どことわからない。②とりとめがない。
たえて〈副詞〉
全然(下に打消の語を伴う)。
たぐふ〈自動詞・四段〉〈他動詞・下二段〉
①ならぶ。②つれだつ。③似合う。④ならばせる。⑤まねる。
たれこむ〈自動詞・下二段〉
家の中にひきこもる。
つたなし〈形容詞・ク活用〉
①劣っている。②不運だ。③情けない。
つつまし〈形容詞・シク活用〉
①気がひける。②はずかしい。③遠慮される。
つゆ〈副詞〉
ちっとも(下に打消の語を伴う)。
とみなり〈形容動詞・ナリ活用〉
にわかだ。急のことだ。
なげなり〈形容動詞・ナリ活用〉
①なさそうだ。②無雑作だ。③かりそめだ。
なづむ〈自動詞・四段〉
①行きなやむ。②苦しみ悩む。③こだわる。④ひたすら思いこがれる。
なのめなり(斜なり)〈形容動詞・ナリ活用〉
①いいかげんだ。②平凡だ。
なめし〈形容詞・ク活用〉
無礼だ。不作法だ。
なゆ(萎ゆ)〈自動詞・下二段〉
①力がぬけてなよなよとなる。②衣服の糊けがなくなる。

にげなし〈形容詞・ク活用〉
似合わない。ふさわしくない。
ねたし〈形容詞・ク活用〉
①うらめしい。にくらしい。②ねたましい。
ねぶ〈自動詞・上二段〉
①年をとる。②成長する。ませる。
はかばかし〈形容詞・シク活用〉
①はかどっている。②頼みがいがある。③はきはきしている。
ひがひがし〈形容詞・シク活用〉
①すなおでない。②情趣を解しない。
ひとげなし〈形容詞・ク活用〉
①人並みに扱われない。②人情がない。
ひとわろし〈形容詞・ク活用〉
①外聞が悪い。②きまりがわるい。
ふつつかなり〈形容動詞・ナリ活用〉
①太く丈夫だ。②下品だ。③みっともない。④あさはかだ。軽率だ。
ふりはへて〈副詞〉
わざわざ。ことさら。
ほいなし(本意なし)〈形容詞・ク活用〉
①残念だ。②物足りない。③おもしろくない。
まさなし〈形容詞・ク活用〉
①正しくない。②見苦しい。
よづく〈自動詞・四段〉
①世慣れる。②色気づく。③俗っぽくなる。
わくらばに〈副詞〉
まれに。たまたま。

【多義語】

あぢきなし〈形容詞・ク活用〉
①役にたたない。②おもしろくない。③つらい。④乱暴だ。
あはれなり〈形容動詞・ナリ活用〉
しみじみとした感動を、対象に応じて(嘆美・悲哀など)ひろく用いる。
あやし〈形容詞・シク活用〉
①ふしぎだ。②普通でない。③不都合だ。④下賤だ。⑤粗末だ。
いかで〈副詞〉
①どうして(疑問)。②どうして~であろうか、ない(反語)。③なんとかして(願望)。
いつしか〈連語〉
①いつであったか。②はやく。
いみじ〈形容詞・シク活用〉
①程度がはなはだしい。②すばらしい。③おそろしい。
うたてし〈形容詞・ク活用〉
①いやだ。ひどい。②異様だ。③なさけない。
うそぶく〈自動詞・四段〉
①息を吹く。②詩歌を吟ずる。③そらとぼける。④得意なさまをする。
おのづから〈副詞〉
①自然に。②ひょっとして。③偶然。
かぎり(限り)〈名詞〉
①限度。②機会。③~だけ。④~すべて。
かたくなり〈形容動詞・ナリ活用〉
①ねじけて頑固だ。②教養がない。
かたはらいたし〈形容詞・ク活用〉
①そばにいて気がかりだ。②にがにがしい。③気がひける・はずかしい。
きこゆ〈自動詞・他動詞・下二段〉
①きこえる(動詞)。②申しあげる(謙譲の動詞)。③お~申しあげる(謙譲の

補助動詞〉。

くちをし〈形容詞・シク活用〉
①残念だ。②感心しない。③いやしい。

こころなし〈形容詞・ク活用〉
①思慮がない。②情味がない。③情趣を解しない。

こころにくし〈形容詞・ク活用〉
①おくゆかしい。②気がかりだ。

こころもとなし〈形容詞・ク活用〉
①気がおちつかない。②待ち遠しい。③不安だ。④ぼんやりしている。かすかだ。

さるは〈接続詞〉
①順接。それは・そのわけは。②逆接。そのくせ。

したたむ〈他動詞・下二段〉
①処理する。②用意する。③書きしるす。

しな（階・品）〈名詞〉
①階段。②身分・地位。③品位。

しのぶ〈他動詞・四段・下二段〉
①思いしたう（偲慕）。②賞美する（賞）。③こらえる（忍）。④包みかくす（隠）。

すさぶ（すさむ）〈自動詞・四段・上二段〉
①いよいよ進む。②はてて衰える。③興じ慰む。

すずろなり（そぞろなり）〈形容動詞・ナリ活用〉
①漫然としている。②むやみだ。③思いがけない。④根拠のない。わけもない。

すなはち〈副詞〉
①すぐに。②とりもなおさず。

そら〈名詞〉
①空・空間・上方・天候。②方向。あて。③心境。④暗誦。⑤実体のないさま。

たてまつる〈他動詞・自動詞・四段〉
①さしあげる（謙譲の動詞）。②～申しあげる（謙譲の補助動詞）。③おめしになる（尊敬の動詞）。

たより（頼・便）〈名詞〉
①縁故。②好機。③便宜。④ぐあい。⑤消息・連絡。

ちぎり（契）〈名詞〉
①約束。②男女の誓い。③宿縁。④運命。

ところせし〈形容詞・ク活用〉
①場所が狭く窮屈だ。②気づまりだ。③堂々としていばっている。④おおげさだ。

はしたなし〈形容詞・ク活用〉
①中途半端だ・不安定だ。②ぶつごうだ。③ていさいが悪い。④そっけない。⑤無作法だ。

びんなし〈形容詞・ク活用〉
①都合がわるい。②困る。③かわいそうだ。

ふみ（文）〈名詞〉
①文字・模様。②文書・書物。③漢詩。④手紙。⑤学問（漢学）。

ほど（程）〈名詞〉
①時間を示す（時・ころ・期間など）。②空間を示す（距離・広さ・場所など）。③程度を示す（身分・様子・度合いなど）。

まねぶ〈他動詞・四段〉
①まねをする。②ありのまま表現する。③学習する。

まばゆし〈形容詞・ク活用〉
①まぶしい。②美しい。③目をそむけたいほどだ。④てれくさい。

見ゆ〈自動詞・下二段〉
①見える。②見られる。③示す。④会う。⑤訪れる。⑥結婚する。

みる（見）〈他動詞・上一段〉
①見る。②会う。③男女があう。④世話をする。⑤取り扱う。⑥鑑識する。⑦うける。

ものす〈自動詞・他動詞・サ変〉
ある動作をすることを婉曲に表現したもので、さまざまな行動に適用される。

やむごとなし〈形容詞・ク活用〉
①すてておけない・のっぴきならない。②なみなみでない。③高貴だ・尊い。

ゆゆし〈形容詞・シク活用〉
①神聖でふれてはならない。②不吉でいまわしい。③はなはだしい。④すぐれている。⑤心配でそら恐しい。

よし（由）〈名詞〉
①理由・根拠。②手段・方法。③趣旨。④由緒・いわれ。⑤風情。⑥様子・体裁。

わびし〈形容詞・シク活用〉
①心細くさびしい。②つらい。③うんざりする。④みすぼらしい。

わりなし〈形容詞・ク活用〉
①道理にあわない。②無茶だ。③つらい。④甚だしい。⑤やむをえない。

【特定の意味に用いられる語】

遊び　特に管絃の遊びをいう。

糸竹　音楽。糸は琴・琵琶などの絃楽器を、竹は笛・笙などの管楽器を意味する。

うす色　薄い紫色。または薄い紅色。襲の色合いとしては表が濃藍色、裏が紫色のもの。

行ひ　仏前の勤行。「勤め」ともいう。

大御所　徳川家康または徳川家斉。本来は前将軍の意。

大政所　豊臣秀吉の母。本来は摂政・関白の母をさす。

皮　鼓をいう。

濃き色　濃い紫色。時には濃い紅色。

節分　立春の前日の節分をさす。本来は季節の分かれめであるから、年に四回ある。

月　秋の夜の月。

寺　三井寺（園城寺）をさす。三井寺を本山とする天台宗を「寺門派」といい、ここにいた法師を「寺法師」とよぶ。

鳥　にわとりをさす。

大師　弘法大師（空海）をさす。

太閤　豊臣秀吉をさす。本来は現関白の父である前関白をいう。

花　桜の花。古くは梅の花をさしたこともある。

文　特に漢詩や漢籍をさすことが多い。

祭　京都賀茂神社の祭り。陰暦四月の第二の酉の日に行われた。「葵祭り」ともいう。後に石清水八幡宮の祭りを南祭り、賀茂神社の祭を北祭りと呼びわけるようになった。

真木　桧・杉などをさす。

真鳥　鷲をさす。鳥中の王の意。

真虫　毒蛇のマムシ。最も忌むべき虫の意。

紅葉　特に色づいた楓をさす。

山　比叡山また延暦寺をさす。延暦寺を本山とする天台宗を「山門派」といい、ここにいた法師を「山法師」とよび、比叡山の日吉神社を「山王」と称する。

【慣用語的な連語】

——たとえば、動詞未然形「飽か」と助動詞打消「ず」との連語である場合は〈動あか・助動ず〉の形で簡略に示した。（略語）名詞→名　動詞→動　形容詞→形　形容動詞→形動　助動詞→助動　助詞→助　副詞→副　連体詞→連　接続詞→接　感動詞→感　補助動詞→補助動

あかず〈動あか・助動ず〉①あきたりない。②いやになることがない。

あととふ〈名あと・動とふ〉①死後をとむらう。②行方をたずねる。

あなかま〈感あな・形語幹かま〉ああ、やかましい。静かに。

あへず〈動あへ・助動ず〉①たえきれない。②～しきれない。

あやめもしらぬ〈名あやめ・助も・動しら・助動ぬ〉ものの条理もわからない。

あらぬ〈動あら・助動ぬ〉①ほかの。②にせの。③意外な。④つまらない。

ありありて〈動あり・助て〉①生きながらえて。②あげくのはてに。

ありし〈動あり・助動し〉さきに言ったあの。以前の。

ありつる〈動あり・助動つる〉以前の。

ありとある〈動あり・助と・動ある〉ある限り全部の。

ありのすさびに〈動あり・助の・名すさび・助に〉生きているのに慣れて（おろそかにする気持ち）。

ありもつかず〈動あり・助も・動つか・助動ず〉そこに落ちつかない。

いかがはせむ〈副いかが・助は・動せ・助動む〉①どうしようか。②どうにもならない。やむをえない。

いざたまへ〈感いざ・補助動たまへ〉さあいらっしゃい。＝「いざさせたまへ」

いつはあれど〈名いつ・助は・動あれ・助・ど〉いつでも結構だが（中でも）。

いはむかたなし〈動いは・助動む・名・かた・形なし〉なんとも言いようがない。

いふかひなし〈動いふ・名かひ・形なし〉①言っても仕方がない。②ふがいない。③卑しい。④がっかりする。

いふべきにあらず〈動いふ・助動べき・助動に・動あら・助動ず〉言いあらわせないほどだ。

いふもおろかなり〈動いふ・助も・形動おろかなり〉言うまでもない。

いへばさらなり〈動いへ・助ば・形動さらなり〉いまさら言うまでもない。

えさらず〈副え・動さら・助動ず〉避けられない。のがれられない。

えならず〈副え・助動なら・助動ず〉何ともいえないほどよい。

えもいはず〈副え・助も・動いは・助動ず〉①はなはだしい。②ひどい。

おもはずに〈動おもは・助動ず・助に〉意外。思いのほか。

かしらおろす〈名かしら・動おろす〉出家する。

かずならず〈名かず・助動なら・助動ず〉身分がいやしい。人なみでなくつまらない。

けしからず〈形けしから・助動ず〉①異様だ。②よくない。③はなはだしい。

けしきおぼゆ〈名けしき・動おぼゆ〉①趣がふかく思われる。②あやしく思う。

こけのした〈名こけ・助の・名した〉墓の中。草葉のかげ。

こころをやる〈名こころ・助を・動やる〉①心を晴らす。②満足する。

さしたる〈連体さしたる〉これといって特別の。＝「させる」

さてありぬべし〈副さ・助て・動あり・助動ぬ・助動べし〉そうあってよかろう。そうあって不自然でない。

さらぬわかれ〈動さら・助動ぬ・名わかれ〉死別。避けられない別れ。

さらなり＝「いへばさらなり」

さらにもいはず＝「いへばさらなり」

さるものにて〈連体さる・名もの・助動に・助て〉①それは一応もっともであるが。それはともかくとして。②もちろんのこと。

せむかたなし〈動せ・助動む・名かた・形なし〉何ともいたしかたがない。

そこどもいはず〈名そこ・助ど・助も・動いは・助動ず〉別にどこと定めず。

そこともしらず〈名そこ・助と・助も・動しら・助動ず〉どこだか見当もつかず。

そのこととなく〈名そ・助の・名こと・助と・形なく〉特別の用件もなく。

とあればかかり〈副と・動あれ・助ば・副かく・動あり〉一方があ あだとこっちがこうだ。

ときしもあれ〈名とき・助し・助も・動あれ〉時も時。ちょうどその時。

ときにあふ〈名とき・助に・動あふ〉時めく。時代にあう。＝「世にあふ」

ところをおく〈名ところ・助を・動おく〉遠慮する。敬遠する。

なでふ〈名なに・助と・動いふ〉①何という、どのような。②どうして。

なにおふ〈名な・助に・動おふ〉①名としてもつ。②評判をもつ。名高い。

なのめならず〈名なのめ・助動なら・助動ず〉一通りでない。特別。甚だしく。

なべてならず〈副なべて・助動なら・助動ず〉おしなべてでない。普通でない。

ねをなく〈名ね・助を・動なく〉声をたてて泣く。＝「ねになく」

ひとやりならず〈名ひとやり・助動なら・助動ず〉自分の心からしたことだ。

ほにいづ〈名ほ・助に・動いづ〉顔色に出る。表面にあらわれる。

めもあやなり〈名め・助も・形動あやなり〉①まぶしいほどりっぱだ。②見るに忍びない。

めもおよばず〈名め・助も・動およば・助動ず〉正視できないほどりっぱだ。

やるかたなし〈動やる・名かた・形なし〉①心を晴らすすべがない。②はなはだしい。

ようせずは〈形よく・動せ・助動ず・助は〉わるくすると。ひょっとすると。

よにしらず〈名よ・助に・動しら・助動ず〉①またとない。②非常にすばらしい。

れいの〈名れい・助の〉いつものように。

をりしもあれ〈名をり・助し・助も・動あれ〉ちょうどその時。折も折。

【対照的な語】

いぎたなし〈形ク〉 寝坊だ。
いざとし〈形ク〉 目ざとい。

いぶせし〈形ク〉 気がふさぐ。
はればれし〈形シク〉 心が晴れている。

いまめかし〈形シク〉 当世風だ。
こだいなり〈形動ナリ〉 古風だ。

いも(妹)〈名〉 女性への親称。
せ(背)〈名〉 男性への親称。

うしろめたし〈形ク〉 気がかりだ。
うしろやすし〈形ク〉 安心だ。

おもておこす〈連語〉 名誉となる。
おもてぶせ〈名〉 不面目。

おとなし〈形シク〉 思慮に富む。
をさなし〈形ク〉 未熟である。

おほて(大手)〈名〉 城の表門。
からめて(搦手)〈名〉 城の裏門。

かはたれどき〈名〉 おもに明け方。
たそがれどき〈名〉 夕ぐれどき。

からうた〈名〉 漢詩。
やまとうた〈名〉 和歌。

かんな(仮名)〈名〉 かな文字。
まんな(真名)〈名〉 漢字。

けぢかし〈形ク〉 親しみ深い。
けどほし〈形ク〉 うとうとしい。

げに〈副〉 ほんとうに。
さすがに〈副〉 そうはいっても。

こころあり〈連語〉 情趣を解する。
こころなし〈形ク〉 情趣を解しない。

こころおとり〈名〉 予想より劣る。
こころまさり〈名〉 予想よりまさる。

こころぐるし〈形シク〉 心配だ。
こころやすし〈形ク〉 安心だ。

こしかた〈名〉 過去。
ゆくすゑ〈名〉 未来。

じやうず(上衆)〈名〉 貴人。
げす(下衆)〈名〉 賤しい人。

じやうご(上戸)〈名〉 酒量の多い人。
げこ(下戸)〈名〉 酒の飲めない人。

たつたひめ(竜田姫) 秋の女神。
さほひめ(佐保姫) 春の女神。

せ(瀬)〈名〉 浅く速い流れ。
ふち(淵)〈名〉 水の深いよどみ。

そうす(奏)〈動サ〉 天皇に用いる。
けいす(啓)〈動サ〉 三宮・東宮・上皇に用いる。

たつ〈動四〉 立つ。占める。
ゐる〈動上一〉 すわる。

たまふ(給)〈動四〉 くださる。(尊敬)
たまはる(賜)〈動四〉 いただく。(謙譲)

つきづきし〈形シク〉 似つかわしい。
つきなし〈形ク〉 不似合いだ。

つごもり(晦日)〈名〉 月の最終日。
ついたち(朔日)〈名〉 月の最初の日。

と〈副〉 あのように。
かく〈副〉 このように。

とやま(外山)〈名〉 人里近い山。
おくやま(奥山)〈名〉 深山。

ひなぶ〈動上二〉 いなか風だ。
みやぶ〈動上二〉 優雅だ。

まかる(罷)〈動四〉 退出する。(謙譲)
まゐる(参)〈動四〉 参上する。(謙譲)

まほなり〈形動ナリ〉 完全だ。
かたほなり〈形動ナリ〉 不完全だ。

まめなり〈形動ナリ〉 誠実だ。
あだなり〈形動ナリ〉 うわついている。

みいだす(見出)〈動四〉 中から外を見る。
みいる(見入)〈動下二〉 外から内を見る。

みおこす〈動四〉 こちらを見る。
みやる〈動四〉 遠くを見る。

みぐるし〈形シク〉 みにくい。
めやすし〈形ク〉 感じがよい。

みそかなり〈形動ナリ〉 ひそかだ。
あらはなり〈形動ナリ〉 露骨だ。

やる〈動四〉 向こうへやる。
おこす〈動四〉 こちらへよこす。

ゆめ(夢)〈名〉 夢。
うつつ(現)〈名〉 現実。

よろし〈形シク〉 わるくない。
わろし〈形ク〉 よくない。

をとこで(男手)〈名〉 漢字。
をんなで(女手)〈名〉 ひらがな。

【まぎれやすい古語】

あいなし〈形ク〉 おもしろくない。
あへなし〈形ク〉 はりあいがない。
あやなし〈形ク〉 わけがわからない。

あた〈名〉 かたき(敵)。
あだ〈形動語幹〉 はかない。むだ。
あて〈形動語幹〉 高貴。

あたらし〈形シク〉 惜しい。
あらたし〈形シク〉 新しい。

あはれなり〈形動〉 しみじみ感じ入る。
をかし〈形ク〉 興味をおぼえる。

いさ〈感・副〉 さあ、どうだか。
いざ〈感〉 誘いのことば。

いと〈副〉 たいそう。
いとど〈副〉 いっそう。

いらふ(答)〈動下二〉 答える。
いろふ(色)〈動四〉 美しい色になる。
いろふ(弄)〈動四〉 かかわりあう。

うつくし〈形シク〉 いとしい。可愛い。
うるはし〈形シク〉 端正だ。

疎(おろ)かなり〈形動〉 いいかげんだ。
愚かなり〈形動〉 無知だ。

おうな(媼)〈名〉 老女。
をんな(女)〈名〉 女性。

かたみ(筐)〈名〉 かご。
かたみ(形見)〈名〉 思い出の品。
かたみに(互)〈副〉 おたがいに。

かつぐ(担)〈動四〉 になう。
かづく(被)〈動四〉 かぶる。いただく。
かづく(潜)〈動四〉 水中にもぐる。

くくる(括)〈動四〉 くくり染めにする。
くぐる(潜)〈動四〉 もぐる。

け〈名〉 理由。
けに(異)〈副〉 いっそう。
げに(実)〈副〉 ほんとうに。

こころうし〈形ク〉 つらく情けない。
ものうし〈形ク〉 おっくうだ。

こころにくし〈形ク〉 おくゆかしい。
にくし〈形ク〉 不快だ。

こぞ〈名〉 去年。昨夜。
きぞ〈名〉 昨日。昨夜。

こちたし〈形ク〉 ぎょうさんらしい。
こちなし〈形ク〉 無風流だ。

さかし(賢)〈形シク〉 すぐれている。
さがし(険)〈形シク〉 けわしい。

さざめく〈動四〉 さわぐ。
ささめく〈動四〉 ささやく。

さらぬ(然)〈連語〉 そうではない〜。
さらぬ(避)〈連語〉 避けられない〜。

しかしながら〈副〉 一切、すべて。
しかしながら〈接〉 しかし。(逆接)

しる(知)〈動四〉 理解する。
しる(領・治)〈動四〉 支配する。
しる(痴)〈動下二〉 ぼける。

たのむ〈動四〉 頼みにする。
たのむ〈動下二〉 頼みに思わせる。

たまふ〈動・四〉 （尊敬語となる）
たまふ〈動・下二〉 （謙譲語となる）
つらし〈形ク〉 薄情だ。
つれなし〈形ク〉 平然としている。
ひとみな〈連語〉 人間はすべて。
みなひと〈連語〉 そこにいる人全部。
たち〈接尾〉 敬意を含む複数。
ども〈接尾〉 同類の物の複数。
など〈助〉 他類似物を示す。
ながむ〈眺〉〈動下二〉 物思いつつ見る。
ながむ〈詠〉〈動下二〉 詩歌をよむ。
なづさふ〈動四〉 なれ親しむ。
なづむ〈動四〉 ゆきなやむ。
またし〈形ク〉 完全だ。
まだし〈形シク〉 まだ不十分だ。
やまかは〈名〉 山と川と。
やまがは〈名〉 山間の川。
やまぎは〈名〉 山に接する空。
やまのは〈名〉 空に接する山。
らうがはし〈形シク〉 乱雑だ。
らうたし〈形ク〉 かわいい。
らうらうじ〈形シク〉 上品で美しい。
よし〈形ク〉 すぐれている。
よろし〈形シク〉 悪くはない。

【接頭語】

〔勢いを強め、調子を整えるもの〕
○い―い行く・い隠る・い通ふ・い立つ
○うち―うち語らふ・うち聞く・うち見る
○おし―おし立つ・おしなべて
○か―か細し・か弱し・か黒し
○かき―かき消つ・かき数ふ・かき曇る・（音便で）かい撫づ・かい放つ
○け―けざやか・け近し
○さ―さ霧・さ迷ふ・さ夜
○さし―さし仰ぐ・さし罪く・さし向かふ
○た―たなびく・た謀る・たやすし
○たち―たち後(おく)る・たちまさる・たち返る
○とり―とりつくろふ・とりおこなふ
○ひき―ひきしたたむ・ひきそふ
○もて―もてあがむ・もて騒ぐ・もてはやす

〔ある意味をそえるもの〕
○あひ（ともにの意）―あひ乗る・相見る
○あを（未熟な）―青侍・青女房
○いささ・ささ（小さい）―いささ群竹(むらたけ)・ささ波
○いや（ますます）―いや珍し・いや頻(し)く
○うひ（初）―初冠(かうぶり)・初学び
○うま（甘い・尊い）―うま酒・うまびと
○うら（心のなか）―うら淋し・うら悲し
○お・おん・おほん・おほみ（御・尊敬）―お前・御時・御歌
○おほ（大・尊敬）―大海・大宮人
○かた（少し・一方）―片時・片いなか
○そら（むだ・うそ）―そら頼み・そら寝
○たま（美称）―玉垣・玉藻・玉裳
○なま（未熟）―生受領・生おぼえ
○ひが（ゆがんだ）―ひが事・ひが者
○ま（純粋・美称）―真心・真木・真玉
○み（御・尊敬・美称）―御垣守・み山・み雪
○もの（何となく）―もの悲し・物淋し
○わ（親愛・軽蔑）―わ殿・わ法師め

【接尾語】

〔上の語を名詞化するもの〕
○く―言ふ→言はく・知らず→知らなく
○さ―白し→白さ・さびし→さびしさ
○み―軽し→軽み・繁る→繁み
○らく―老ゆ→老いらく・恋ふ→恋ふらく

〔上の語を動詞化するもの〕
○がる―ゆかし→ゆかしがる・才(ざえ)→才がる
○ぐむ―芽→芽ぐむ・涙→涙ぐむ
○さぶ―神→神さぶ・少女(をとめ)→少女さぶ
○だつ―野分→野分だつ・気色(けしき)→気色だつ
○づく―世→世づく・秋→秋づく
○なす―山→山なす（大波）・鏡→鏡なす
○ばむ―散る→ちりばむ・気色→気色ばむ
○ぶ―鄙→ひなぶ・宮→みやぶ
○めく―めかす―時めく・今めかす

〔上の語を形容詞・形容動詞化するもの〕
○がち―眺む→眺めがちなり・雨がちなり
○がはし―乱る→乱りがはし・乱(らう)がはし
○がまし―をこ→をこがまし・かごとがまし
○げ―美し→美しげなり・清げなり
○やか―貴(あて)→貴やかなり・まめやかなり
○めかし―古し→古めかし・今めかし
○らか―清し→清らかなり・ゆるらかなり

〔上の語を副詞（連用修飾語）化するもの〕
○すがら―身→身すがら・道→道すがら
○づから―おの→おのづから・手づから
○み―山高し→山高み・瀬速し→瀬を速み

〔上の語にある意味を添えるもの〕
○あまり（数が多い意）―二十日あまり一日
○うへ（敬意）―尼上・母上
○か（場所）―ありか・住みか
○がほ（ようす）―かこち顔・心得顔
○こ（場所）―みやこ・そこ
○こ（親愛の称）―背子・妹子・乙女子
○ざま（方角）―方ざま・西ざま
○たち（尊敬・複数）―公(君)達・神たち
○どち（仲間・複数）―友どち・童(わらは)どち
○ども（謙遜・複数）―犬ども・身ども
○ばら（同類・複数）―殿ばら・奴(やっこ)ばら
○め（軽蔑・卑下）―小法師め・某(それがし)め
○ろ（親愛の称）―児ろ・背(せ)ろ

【音韻が変わってゆく語】

〔音韻が脱落したもの〕
○河原―かははら→かはら
○炭櫃―すみびつ→すびつ
○仮庵―かりいほ→かりほ
○長雨―ながあめ→ながめ
○吾妹―わがいも→わぎも
○案内―あんない→あない
○日記―につき→にき
○茨―いばら→ばら

〔音便とされるもの〕
○装束―しやうぞく→さうぞく
○垣間見―かきまみ→かいまみ
○商人―あきひと→あきうど
○髪挿―かみさし→かんざし

〔音韻が添加されたもの〕
○消息―せうそく→せうそこ（くはk音）
○誰―た→たれ
○詩歌―しか→しいか
○夫婦―ふふ→ふうふ
○春雨―はるあめ→はるさめ（s音を添加）

〔近い音韻に同化したもの〕
○斜―なのめ→ななめ

○好—このまし→このもし
○盛—さかりなり→さかんなり

〔音韻が交替したもの〕

○煙—けぶり↔けむり（b音とm音）
○秘か—ひそか↔みそか（ひ音とみ音）
○行く—いく↔ゆく（い音とゆ音）
○消す—けす↔けつ（s音とt音）
○天・雨—あま↔あめ（a音とe音）
○現身—うつしみ↔うつせみ（i音とe音）
○憧る—あくがる↔あこがる（u音とo音）
○歩く—あるく↔ありく（u音とi音）

〔音韻が倒置されたもの〕

○新し—あらたし→あたらし
○晦日—つごもり→つもごり

【読みにくい古典用語】

〔国名〕
(1)安房 (2)因幡 (3)石見 (4)近江
(5)上総 (6)上野 (7)相模 (8)讃岐
(9)下野 (10)下総 (11)周防 (12)駿河
(13)但馬 (14)遠江 (15)播磨 (16)日向
(17)常陸 (18)豊後 (19)伯耆 (20)美作

〔地名〕
(1)飛鳥 (2)斑鳩 (3)石清水 (4)交野
(5)栗栖野 (6)更科 (7)勿来関 (8)熱田津

〔宮廷関係〕
(1)朝臣 (2)内大臣 (3)上達部 (4)公達
(5)供御 (6)供奉 (7)除目 (8)殿上人
(9)春宮 (10)舎人 (11)主殿司 (12)御息所
(13)命婦 (14)乳母 (15)采女 (16)郎女
(17)衛士 (18)防人 (19)受領 (20)雑色

〔宗教関係〕
(1)神楽 (2)祝詞 (3)寿詞 (4)巫女
(5)産土 (6)瑞垣 (7)閼伽棚 (8)行脚
(9)回向 (10)帰依 (11)功徳 (12)解脱
(13)還俗 (14)勤行 (15)宿世 (16)遷化
(17)僧都 (18)塔頭 (19)読経 (20)菩提
(21)涅槃会 (22)冥加 (23)黄泉 (24)来迎

〔服飾・住居・調度〕
(1)総角 (2)汗衫 (3)帷子 (4)狩衣
(5)指貫 (6)下襲 (7)直衣 (8)直垂
(9)領巾 (10)烏帽子 (11)小袿 (12)炭櫃
(13)透垣 (14)簀子 (15)対屋 (16)築土
(17)半蔀 (18)渡殿 (19)前栽 (20)牛車

〔気象関係〕
(1)如月 (2)弥生 (3)師走 (4)陽炎
(5)細雪 (6)五月雨 (7)時雨 (8)東雲
(9)氷柱 (10)垂水 (11)野分 (12)村雨

〔動植物関係〕
(1)水鶏 (2)時鳥 (3)蜻蛉 (4)氷魚
(5)女郎花 (6)浜木綿 (7)馬酔木 (8)合歓
(9)木槿 (10)帚木 (11)撫子 (12)寄生木

【読みにくい古典用語の読み】

（現代かなづかいで示した）

〔国名〕 (1)あわ (2)いなば (3)いわみ (4)おうみ (5)かずさ (6)こうずけ (7)さがみ (8)さぬき (9)しもつけ (10)しもふさ (11)すおう (12)するが (13)たじま (14)とうとうみ (15)はりま (16)ひゅうが (17)ひたち (18)ぶんご (19)ほうき (20)みまさか

〔地名〕 (1)あすか (2)いかるが (3)いわしみず (4)かたの (5)くるすの (6)さらしな (7)なこそのせき (8)にぎたづ

〔宮廷関係〕 (1)あそん (2)うちのおとど (3)かんだちめ (4)きんだち (5)くご (6)ぐぶ (7)じもく (8)てんじょうびと (9)とうぐう (10)とねり (11)とのも(り)づかさ (12)みやす(ん)どころ (13)みょうぶ (14)めのと (15)うねめ (16)いらつめ (17)えじ (18)さきもり (19)ずりょう (20)ぞうしき

〔宗教関係〕 (1)かぐら (2)のりと (3)よごと (4)みこ (5)うぶすな (6)みずがき (7)あかだな (8)あんぎゃ (9)えこう (10)きえ (11)くどく (12)げだつ (13)げんぞく (14)ごんぎょう (15)すくせ (16)せんげ (17)そうず (18)たっちゅう (19)どきょう (20)ぼだい (21)ねはんえ (22)みょうが (23)よみ (24)らいごう

〔服飾・住居・調度〕 (1)あげまき (2)かざみ (3)かたびら (4)かりぎぬ (5)さしぬき (6)したがさね (7)のうし (8)ひたたれ (9)ひれ (10)えぼし (11)こうちぎ (12)すびつ (13)すいがい (14)すのこ (15)たいのや (16)ついひじ(ついじ) (17)はじとみ (18)わたどの (19)せんざい (20)ぎっしゃ

〔気象関係〕 (1)きさらぎ (2)やよい (3)しわす (4)かげろう (5)ささめゆき (6)さみだれ (7)しぐれ (8)しののめ (9)つらら (10)たるみ (11)のわき (12)むらさめ

〔動植物関係〕 (1)くいな (2)ほととぎす (3)あきつ・かげろう (4)ひお (5)おみなえし (6)はまゆう (7)あしび (8)ねむ (9)むくげ (10)ははきぎ (11)なでしこ (12)やどりぎ

■和歌の修辞技巧

種類・解説	例文
枕詞 意味的・音的類縁性の関連を持つ一定の語の上にかかり、情緒的な色彩を添えながら、句調を整えるのに用いられる。普通五音である。 ふつう五音 ──→ 一定の語	(1)意味的な関連によるもの a修飾的　あかねさす紫野行き標野(しめの)行き野守(のもり)は見ずや君が袖(そで)振る　(万葉集) b比喩的　降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか　(万葉集) (2)音的類縁性によるもの a音調的　浅茅原(あさぢはら)つばらつばらに物思へば故(ふ)りにし里し思ほゆるかも　(万葉集) b掛詞的　わが待たぬ春は来ぬれど冬草のかれ(枯・離)にし人はおとづれもせず　(古今集)
序詞 枕詞と機能は同じであるが、一句からなる枕詞とは違って、数句からなる長いものである。かかることばも枕詞のように一定せず、自由に修飾できるため、和歌に複雑な効果を与える。『万葉集』によく使われている。 ▲因幡の国府跡	(1)意味的な関連によるもの a比喩の序詞　み熊野の浦の浜木綿(はまゆふ)百重(ももへ)なす心は思へど直に逢はぬかも　(万葉集) (み熊野の浦の浜木綿は幾重も連なっているが、そのようにあなたを心で思っていても直接お会いしていないことだなあ。) (2)音的類縁性によるもの a同音反復の序詞 みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ　(新古今集) (みかの原にわいて流れるいづみ川ではないが、私はあの人をいつ見たというのでこんなにもあの方が恋しいのだろうか。) b掛詞の序詞 立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつ(松・待)とし聞かば今帰り来む　(古今集) (私は今あなたと別れ因幡(いなば)に行くけれど、そこの山に生えている松のように、私の帰りを待つと聞いていたらすぐ帰ってくるつもりだ。)
掛詞 同音の一つのことばで、二つ以上の意味を表す技法である。「言い掛け」ともいい、「懸詞(かけことば)」の字をあてることもある。歌や文の意味内容を複雑にし豊かにする。『古今集』以後の和歌に盛んに用いられるようになり、散文でも謡曲・道行文・浄瑠璃などには多く用いられた。	(1)前後の文脈をつなぐ掛詞 ももしきやふるき軒端(のきば)のしのぶ(偲ぶ・忍ぶ)にもなほあまりある昔なりけり　(続後撰集) (宮中は荒れはてて古い軒ばの忍ぶ草を見るにつけても、偲(しの)んでも偲びきれない昔の御代である。) (2)前の語句を並列的に受ける掛詞 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれ(離れ・枯れ)ぬと思へば　(古今集) (山里はひとしお冬はさびしさがまさってくることだよ。人もたずねてこなくなり、草も枯れてしまうと思うと。)

■主要枕詞一覧

(枕詞)	(修飾する語)
あかねさす	日・昼・紫・君
あきつしま	大和(やまと)
あさつゆの	消(け)・消え・おく・命
あしひきの	山・峰・尾(を)の上(へ)・固有の山の名
あづさゆみ	引く・張る・射る・音・末(すゑ)
あまざかる	日・鄙(ひな)
あまとぶや	雁(かり)・軽(かる)・ひれ
あらがねの	土・地
あらたまの	年・月・日・春
あをによし	奈良
いさなとり	海・浜・灘(なだ)・湖
いそのかみ	古(ふる)・降る・振る
いはばしる	垂水(たるみ)・滝(たき)
うつせみの	命・世・人・身・空し・殻(から)
うばたまの	黒・闇(やみ)・夜・夢・月
うまざけ	三室・三輪・かみ
おきつもの	なばり・なびく
おほともの	御津(みつ)・高師(たかし)
おほふねの	たのむ・たゆたふ・渡(わたし)
かきつばた	にほふ・さき沼
からごろも	着る・裁(た)つ・紐(ひも)・袖・すそ
くさまくら	旅・ゆふ・かり・むすぶ
くれたけの	節(よ)・ふし・世・夜
ささなみの	近江・志賀・大津
すすたけの	君・大宮・皇子・舎人(とねり)
さねかづら	のちも逢ふ
さねさし	相模(さがみ)
しきしまの	大和(やまと)
しろたへの	衣(ころも)・袖(そで)・雪・袂(たもと)・雲
そらにみつ	大和(やまと)
たたなづく	青垣(あをがき)
たたみこも	へ・隔て・平群(へぐり)
たまかぎる	夕さり・ほのかに・磐垣淵(いはがきふち)
たまくしげ	ふた・箱・み・明く

縁語　一首中のある語と密接な関係がある語を、互いに縁語という。掛詞の技巧と共に使われることが多い。連想によって、複雑なイメージを構成する。中古以後の歌学において重んじられた修辞法で、題詠の場合、特に重視され、『新古今集』に盛んに表れている。

本歌取り　古歌の特徴的な語句をもとにして、一首を作る方法。古歌のイメージの上に、新たな世界を展開させて、複雑な情感を生み出し、余情・余韻を深める。藤原定家の本歌取りの規準は、①本歌と句の置き所を変えない場合は二句未満、②本歌と句の置き所を変える場合は二句と三、四句まで。③初二句は本歌のままとしてよい場合がある。④本歌と着想・主題が同じになることを避けるため、春の歌を秋の歌にするなど変化をさせることが望ましい、などである。

体言止め　普通には歌の第五句の終わりの文節に体言を用いて、余韻・余情を表す技法をいう。「名詞止め」ともいう。新古今時代に最高潮に達した。

句切れ　結句以外の句で文が終止していることをいう。初句切れ、二句切れ、三句切れ、四句切れがある。また句切れのない歌もある。さらに、一首中に二個所以上切れるものもあり、それぞれ歌の韻律と深くかかわっている。二句切れ、四句切れは五七調、初句切れ、三句切れは七五調に近い。

○あをやぎの糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにけり　（古今集）
　柳の枝を糸に見たて、「糸」に関係のある「よりかくる」「みだれ」「ほころび」を用いている。

○玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることの弱りもぞする　（新古今集）
　「緒」に関係のある「たえ」「ながらへ」「弱り」を用いている。

○鈴鹿山うき世をよそにふりすてていかになりゆくわが身なるらむ　（新古今集）
　鈴鹿山の「鈴」に関係のある「ふり」「なり」（成りゆくと掛けている）を用いている。

○（本歌）み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり　（古今集）
○（本歌取り）み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり　（新古今集）
　本歌の寒々としたみ吉野の情景を下敷きとしながら、季節を冬から秋に移し、衣をうつ音を新たに入れることによって、寂寥としたイメージの増幅をはかっている。

○（本歌）心あらむ人に見せばや津の国の難波あたりの春の景色を　（後拾遺集）
○（本歌取り）津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯れ葉に風渡るなり　（新古今集）
　本歌の快い春の情景をまず彷彿とさせ、次に「夢なれや」とそれを否定することにより、荒涼とした冬枯れの世界が対照的に浮かびあがる。

○春の夜の夢の浮き橋とだえして峯にわかるる横雲の空　（新古今集）
○心なき身にもあはれはしられけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ　（新古今集）
○山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水　（新古今集）

○句切れのない歌　石そそく垂水の上のさわらびの萌えいづる春になりにけるかも　（万葉集）
○初句切れ　五月やみ／短き夜半のうたたねに花たちばなの袖に涼しき　（新古今集）
○二句切れ　何処にか船泊てすらむ／安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟　（万葉集）
○三句切れ　なげけとて月やは物を思はする／かこち顔なるわが涙かな　（千載集）
○四句切れ　わが背子の帰り来まさむ時のため命のこさむ／忘れたまふな　（万葉集）
○句切れが二個所以上ある場合　またや見む／交野のみ野のさくらがり／花の雪散る春のあけぼの　（新古今集）

枕詞	被枕詞
たまだすき	懸け・畝火
たまづさの	使・妹・言・通ふ
たまのをの	長き・短き・絶ゆ
たまぼこの	道・里人・手向けの神
たまもかる	敏馬・沖
たらちねの	母・親
ちはやぶる	神・社・うぢ
つがのきの	つぎつぎに
つぎねふ	山城
つゆじもの	消ゆ・おく
とりがなく	東
なつくさの	しげき・ふかく・野
なよたけの	節・世
にほどりの	かづく・葛飾・なづさふ
ぬえどりの	片恋・のどよび
ぬばたまの	黒・闇・夜・夢・月
はるがすみ	立つ・春日
ひさかたの	天・雨・空・月・雲・光
ふゆごもり	春・張る
まかねふく	吉備・丹生
みすずかる	信濃
みづぐきの	岡・跡・かき・流れ
みづとりの	鴨・浮き・たつ・憂き
むらぎもの	心
むらさきの	匂ふ・名高し・心
もののふの	八十氏川・宇治川・矢田・氏
ももしきの	宮・大宮
ももづたふ	八十・五十・渡る・津・石
やくもたつ	出雲
やすみしし	わが大君
やつはしの	くもで
やまかはの	たぎつ・おと・あさ
やまのゐの	飽く・浅き
ゆふづくよ	暁闇・をぐらし
わかくさの	つま・にひ・わか

主要年中行事

（「見出し」は歴史的かなづかいによった。
*印は今日も行われているもの。）

【一月】

一日　*四方拝　天皇が清涼殿東庭で、皇大神宮など四方の神霊を遥拝し、国家の幸いを祈られる儀式。

元日節会　天皇が豊楽院（後には紫宸殿）に出御、群臣に宴を賜う儀式。

恵方詣　新年、恵方（吉方）に当たる社寺に参詣すること。恵方はその年の干支によって、よいと定められた方角。

七日　白馬節会　宮中にひかせてきた青馬を、天皇が御覧になり、後に宴を賜る御儀。中国から伝わった風習で、嵯峨天皇の弘仁二年から始まると言う。青は春の色で、これを見ると年中の邪気を祓いになる。後に白馬に代えたが、やはり「あおうま」と読む。

▲白馬節会
（恒例公事の図）

*七種　五節句の一つ。春の七草（せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ）を入れ粥をたく。これを食べると万病を防ぎ、邪気を除くといわれた。「七種の節句」「人日」ともいう。

（このころ）　県召除目　地方官（外官）である国の守（受領）任命の儀式。秋に行われる司召除目に対して、県召除目を「春の除目」ともいう。

踏歌節会　踏歌とは、足で地を踏み拍子をとって歌い舞うこと。男踏歌は一四日、女踏歌は一六日。「あらればしり」ともいう。

*薮入り　盆・正月の一六日、奉公人が主人から休暇をもらい、わが家に帰る休養日。

射礼　建礼門の前で、親王以下五位以上、六衛府の者が弓を射る儀式。

賭弓　弓場殿で左右近衛府・兵衛府の舎人が弓の技を競うのを、天皇が御覧になる儀式。

上の子の日　子の日の遊び　正月最初の子の日に、野に出て小松をひき、若菜を摘んで宴遊し、千代を祝う行事。王朝の和歌によくよまれる。

上の卯の日　卯杖・卯槌　桃・梅・柳などの木を束ねて五色の糸で巻いた枝を、東宮坊や衛府から朝廷に献上したのが卯杖、小さな槌を糸所から朝廷に献上したのが卯槌である。

（このころ）　*節分　元来「節分」は季節の変わり目をいったが、特に立春の前日をいうようになり、豆をまいて鬼を追い払う儀式となった。一二月の「追儺」参照。

【二月】

四日　祈年祭り　神祇官や国司庁で五穀豊饒を祈る祭り。

一五日　*涅槃会　釈迦がすべての煩悩を滅して入寂した日で法会を行う。

春分の日　*彼岸会　春分の日を中日（二一日ごろ）とする前後七日間の法要。参詣者は故人の霊を供養する。

【三月】

三日　*上巳（雛祭り）　五節句の一つ。雛人形・調度・草餅などを供える。

曲水の宴　川辺に宴をはり、水に浮かべた杯が自分の前につくまでに詩をつくる遊び。

中の午の日　石清水臨時祭　山城の国、石清水八幡宮の例祭。

【四月】

一日　二孟旬　夏と冬の季節の初めに、群臣を召されて宴を賜る。夏の初めの孟夏の旬と、冬の初めの立冬の旬を総称して、二孟旬という。

更衣　四月一日より夏装束、一〇月一日より冬装束に改めた。几帳など調度もすべて、季節のものに変える。

八日　灌仏会　釈迦降誕の日の法会。釈尊像に甘茶をそそぐ。釈迦誕生の時、天から龍が現れて甘露をそそいだという伝えによる。

陰暦四月　*賀茂祭り　古典で「祭り」といえばこの祭りを指す。山城の国、賀茂神社の祭り。牛車・桟敷の簾や冠などを双葉葵で飾るので葵祭りとも呼ぶ。石清水八幡祭の祭礼（南祭り）に対して北祭りともいう。明治一七年以降は五月一五日。

▲賀茂祭りの勅使以下の行列の一部（賀茂祭草子）

国語の学習

【五月】

五日　*端午節会　五節句の一つ。「端」は初めで、「午」は五に通じ、五月の初めの午の日を「端午」という。悪気祓いの菖蒲が尚武に通じるところから男子の節句として、宮中では競射馬術の催しが行われた。*賀茂競馬　上賀茂神社の境内で行う競べ馬。現在は六月五日。

【六月】

三〇日　*大祓（水無月祓・名越祓）　半年間の罪・汚れを祓う儀式。川や海のほとりに出て、祓の祝詞を唱え、みそぎを行った。

【七月】

七日　*七夕（乞巧奠）　五節句の一つ。牽牛・織女の二星が年一回会うという伝説にちなんだ行事。この二星を祭り、織物・裁縫・恋愛・出産・詩歌・書道の上達を祈る。

一三日〜一五日　*盂蘭盆　諸寺院においては法会をいとなむ。釈迦の弟子目蓮の亡母が餓鬼道に落ち、責苦にあっていたが、百味飯食の供養により救われ成仏した故事による。

二八日　相撲節　全国から選ばれた力士を召し、宮中において相撲をとらせ、天皇が御覧になる行事。二八日がその召し合わせ。

【八月】

一日　八朔　八月朔日の略。「たのみの節」ともいい、田の実、更に頼みにかけて、稲の豊饒と君臣相たのむの意として祝った。

一五日　*仲秋観月　十五日の月を仲秋の月あるいは三五夜の月ともいい、月見の宴を催し、芒・団子などを供える。

*石清水放生会　石清水八幡宮の例祭。南祭りともいい社前に鯉を放って法会を行う。

秋分の日　彼岸会　春の彼岸会に準ずる。

【九月】

九日　重陽節会　五節句の一つ。重九・菊の節句ともいう。宮中では詩歌献上の儀式があり、菊の花弁を浮かせた酒を飲み、また「着綿」といい、前日、菊に綿をかぶせ、香のしみた綿で顔をぬぐって延命を願う。

（このころ）　司召除目　平安中期以降・京官を任命する儀式。県召除目を「春の除目」と呼ぶのに対し、「秋の除目」という。

【一〇月】

一日　更衣　装束・調度を冬物に改める。

一〇日　維摩会　藤原氏の氏寺である興福寺で、一〇日から一六日まで維摩経を唱えて供養する。

上の亥の日　*亥の子の祝い　万病を除くために一〇月初亥の日に、「亥の子餅」をついて祝う。室町時代から中の亥の日になった。

【一一月】

一五日　*子供宮参り（七五三）　男子は三歳・五歳、女子は三歳・七歳のとき、子供に新調の衣服をつけさせ、氏神にお参りして祝う。

中の丑・寅・卯・辰　五節　毎年一一月の豊明の節会に朝廷で行われた女楽の行事。中の丑の日に帳台の試み、次の寅の日に御前の試み、殿上の淵酔、卯の日に童女御覧、辰の日が豊明の節会である。

中の卯の日　新嘗祭り　新嘗祭で新米や穀物を天皇が神に供える儀式。

中の辰の日　豊明節会　新嘗祭の翌日、天皇が豊楽殿で新穀をお召し上がりになり、群臣に宴を賜る。五節の舞が行われる。

【一二月】

一三日　事始め　新年の準備を始める日。歳暮・御祝儀もこの日からである。

一九日　御仏名　一九日から三日間、宮中で行われる行事。罪業消滅のため、三世諸仏の名を唱え、読経する。

（このころ）　荷前　年の終わりの吉日に、十陵八墓に幣を奉る宮中の行事。この時の勅使を荷前の使いという。

大祓　年間の汚れや罪を祓い清める行事で、親王以下すべての官人が朱雀門で行う。

追儺　一年の邪気を弓矢で追い払う儀式。大舎人寮の舎人が鬼になり、これを方相氏（鬼を追う役）と二〇人の童子が桃の弓・芦の矢で追い払う。「おにやらい」ともいう。近世以降、節分の行事となった。

▼追儺（鬼）（政事要略）

▲追儺（方相氏）（政事要略）

■官職一覧表

〔各官職は、長官（太政官を除き、普通一名）、次官（一人）、判官（一―三人）、主典（一―三人）の四等官に分かれている。次表のうち▢（ベタ赤印）が長官、▨（斜赤印）が次官、▢（太赤カコミ）が判官、▢（ベタスミ印）が主典に当たる。〕

官職＼位階	正一位・従一位〔親王は一品から四品まで四階〕	正二位・従二位	正三位	従三位	正四位（上・下）	従四位（上・下）	正五位（上・下）	従五位（上・下）	正六位（上・下）	従六位（上・下）	正七位（上・下）・従七位（上・下）・正八位（上・下）・従八位（上・下）・大初位（上・下）・少初位（上・下）
神祇官						伯		大副	少副	大佑・少佑	大史（正八下）、少史（従八上）
太政官	太政大臣	左大臣・右大臣・内大臣	大納言	中納言	参議	左大弁・右大弁	左中弁・右中弁、左少弁・右少弁	少納言	大外記・大史		少外記・少史（正七上）
八省　中務省					卿		大輔	少輔、侍従・大監物	大内記、大丞	少丞	大録・少内記（正七上）、少監物・大主鈴（正七下）、主典（従七上）、大典鑰（従七下）、少録（正八上）
八省　式部省・治部省・民部省・兵部省・刑部省・大蔵省・宮内省					卿		大輔・大判事	少輔	中判事、大丞	少丞、少判事・大主鑰	大録（正七上）、判事大属（正七下）、少主鑰（従七下）、少録（正八上）、判事小属（正八下）
職・坊　中宮職・大膳職・左京職・右京職・修理職・春宮坊					春宮傅	大夫	大膳大夫	亮、春宮博士		大進、少進、大膳・京職大進	大蔵・京職少進（正七上）、大膳大属（正八上）、大属（正八下）、少属（従八上）
寮　大舎人寮・図書寮・内蔵寮・縫殿寮・内匠寮・大学寮・雅楽寮・玄蕃寮・諸陵寮・主計寮・主税寮・木工寮・左馬寮・右馬寮・兵庫寮								頭、文章博士	助、明経博士		馬・兵庫大允（正七上）、大允、助教、明法博士（正七下）、少允、音博士、書博士、算博士（正七上）
寮　陰陽寮・大炊寮・主殿寮・典薬寮・斎宮寮・掃部寮								頭	侍医、斎宮助	助	斎宮大允、陰陽博士、天文博士、医博士、女医博士（正七下）、允、斎宮少允、陰陽師、暦博士、漏刻博士（従七上）
司・監・署　内蔵司・正親司・内膳司・造酒司・東市司・西市司・囚獄司									奉膳・正		佑、典膳（従七下）
司・監・署　隼人司・織部司・采女司・主水司・主膳監・主蔵監・主殿署・主工署・主馬署									正	主水・舎人・主膳・主蔵正、首	佑（正八上）、主水佑・舎人佑・主膳佑・主蔵佑（正八下）
弾正台				尹		大弼	少弼		大忠、少忠		大疏（正七上）、少疏（正八上）
近衛府　左近衛府・右近衛府				大将		中将	少将		将監		将曹（正七下）
四衛府　左衛門府・右衛門府・左兵衛府・右兵衛府						督		佐		大尉	少尉（正七上）、大志（正八下）、少志（従八上）
太宰府				帥		大弐	少弐		大監	少監、大判事	大典・少判事・大工（正七上）、算師・少典・医師・少工（正八上）
国司								守（大国）、守（上国）	守（中国）、介（大国）	介（上国）、守（下国）	大掾（大国）（正七下）、少掾（大国）・掾（上国）（従七上）、掾（中国）（正八上）、掾（下国）（従八下）

国司：（国司は大国・上国・中国・下国の四分類のもとに、おおむね守・介・掾（大掾・少掾）・目（大目・少目）の四等官）。

その他：蔵人所、別当は左大臣又は右大臣、頭二人（一人は弁官で頭弁、一人は近衛で頭中将などと呼ばれる）、五位蔵人、六位蔵人などがある。

勘解由使・斎院司などでは長官・次官・判官・主典の四等官がある。

後宮には尚侍（従三位相当）典侍・掌侍（普通「内侍」と書く）などがある。

㊟陸奥(みちのく)は，もと東山道との境が明らかでなかったが1868年(明治元)に，陸奥を磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥とし，出羽を羽前・羽後に分けた。

■十干

①甲（コウ・カツ）きのえ（木の兄）
②乙（オツ・イツ）きのと（木の弟）
③丙（ヘイ）ひのえ（火の兄）
④丁（テイ）ひのと（火の弟）
⑤戊（ボ）つちのえ（土の兄）
⑥己（キ）つちのと（土の弟）
⑦庚（コウ）かのえ（金の兄）
⑧辛（シン）かのと（金の弟）
⑨壬（ジン）みづのえ（水の兄）
⑩癸（キ）みづのと（水の弟）

■十二支

①子（ね・シ）鼠
②丑（うし・チュウ）牛
③寅（とら・イン）虎
④卯（う・ボウ）兎
⑤辰（たつ・シン）龍
⑥巳（み・シ）蛇
⑦午（うま・ゴ）馬
⑧未（ひつじ・ビ〈ミ〉）羊
⑨申（さる・シン）猿
⑩酉（とり・ユウ）鶏
⑪戌（いぬ・ジュツ）犬
⑫亥（ゐ・ガイ）猪

■干支（えと）の読み方

十干十二支を順次に配してできた六十種の組み合わせで年や日を表す。六十一年目にもとの干支にかえるが、これを還暦という。
（例）壬申の乱　庚申待　甲子吟行

1 甲子 コウシ きのえね
2 乙丑 イッチュウ きのとうし
3 丙寅 ヘイイン ひのえとら
4 丁卯 テイボウ ひのとう
5 戊辰 ボシン つちのえたつ
6 己巳 キシ つちのとみ
7 庚午 コウゴ かのえうま
8 辛未 シンミ かのとひつじ
9 壬申 ジンシン みづのえさる
10 癸酉 キユウ みづのととり
11 甲戌 コウジュツ きのえいぬ
12 乙亥 イツガイ きのとゐ
13 丙子 ヘイシ ひのえね
14 丁丑 テイチュウ ひのとうし
15 戊寅 ボイン つちのえとら
16 己卯 キボウ つちのとう
17 庚辰 コウシン かのえたつ
18 辛巳 シンシ かのとみ
19 壬午 ジンゴ みづのえうま
20 癸未 キミ みづのとひつじ
21 甲申 コウシン きのえさる
22 乙酉 イツユウ きのととり
23 丙戌 ヘイジュツ ひのえいぬ
24 丁亥 テイガイ ひのとゐ
25 戊子 ボシ つちのえね
26 己丑 キチュウ つちのとうし
27 庚寅 コウイン かのえとら
28 辛卯 シンボウ かのとう
29 壬辰 ジンシン みづのえたつ
30 癸巳 キシ みづのとみ
31 甲午 コウゴ きのえうま
32 乙未 イツミ きのとひつじ
33 丙申 ヘイシン ひのえさる
34 丁酉 テイユウ ひのととり
35 戊戌 ボジュツ つちのえいぬ
36 己亥 キガイ つちのとゐ
37 庚子 コウシ かのえね
38 辛丑 シンチュウ かのとうし
39 壬寅 ジンイン みづのえとら
40 癸卯 キボウ みづのとう
41 甲辰 コウシン きのえたつ
42 乙巳 イツシ きのとみ
43 丙午 ヘイゴ ひのえうま
44 丁未 テイミ ひのとひつじ
45 戊申 ボシン つちのえさる
46 己酉 キユウ つちのととり
47 庚戌 コウジュツ かのえいぬ
48 辛亥 シンガイ かのとゐ
49 壬子 ジンシ みづのえね
50 癸丑 キチュウ みづのとうし
51 甲寅 コウイン きのえとら
52 乙卯 イツボウ きのとう
53 丙辰 ヘイシン ひのえたつ
54 丁巳 テイシ ひのとみ
55 戊午 ボゴ つちのえうま
56 己未 キミ つちのとひつじ
57 庚申 コウシン かのえさる
58 辛酉 シンユウ かのととり
59 壬戌 ジンジュツ みづのえいぬ
60 癸亥 キガイ みづのとゐ

■二十四節気一覧

四季	月		その他の別称	二十四節気（（ ）内は太陽暦）	備考
春	一月	孟春	祝月・元月・端月	立春（2・3ごろ）・雨水（2・18ごろ）	○節分（2・3ごろ） ○春の彼岸（春分を中日とする七日間） ○社日（春社）（春分に最も近い戊の日） ○春の土用（立夏前十八日間）
	二月	仲春	令月・仲陽・梅見月	啓蟄（3・5ごろ）・春分（3・21ごろ）	
	三月	季春	晩春・暮春・桜月・花見月	清明（4・5ごろ）・穀雨（4・20ごろ）	
夏	四月	孟夏	麦秋・初夏・首夏	立夏（5・5ごろ）・小満（5・21ごろ）	○八十八夜（5・2ごろ） ○入梅（6・11ごろ） ○半夏生（7・2ごろ） ほぼ一か月後に出梅 ○夏の土用（立秋前一八日間）
	五月	仲夏	星月・鶉月・早稲月	芒種（6・5ごろ）・夏至（6・22ごろ）	
	六月	季夏	晩夏・林鐘	小暑（7・7ごろ）・大暑（7・23ごろ）	
秋	七月	孟秋	初秋・新秋・七夕月	立秋（8・8ごろ）・処暑（8・21ごろ）	○二百十日（9・1ごろ） ○二百二十日（9・11ごろ） ○秋の彼岸（秋分を中日とする七日間） ○社日（秋社）（秋分に最も近い戊の日） ○秋の土用（立冬前十八日間）
	八月	仲秋	清秋・月見月	白露（9・7ごろ）・秋分（9・23ごろ）	
	九月	季秋	晩秋・暮秋・菊月	寒露（10・8ごろ）・霜降（10・23ごろ）	
冬	十月	孟冬	初冬・小春・時雨月	立冬（11・8ごろ）・小雪（11・22ごろ）	○冬の土用（立春前十八日間）
	十一月	仲冬	朔月・霜降月・雪待月	大雪（12・7ごろ）・冬至（12・22ごろ）	
	十二月	季冬	晩冬・極月・臘月	小寒（1・5ごろ）・大寒（1・22ごろ）	

■陰暦月齢表

- 二十三夜月(23日ごろ)
- 二十日余りの月(22日ごろ)
- 宵待月・更待月(20日ごろ)
- 寝待月・臥待月(19日ごろ)
- 居待月(18日ごろ)
- 立待月(17日ごろ)
- 十六夜月(16日ごろ)
- 満月・望月(15日ごろ)
- 小望月・十三夜月(13日ごろ)
- 十日余りの月(11日ごろ)
- 九日月(9日ごろ)
- 八日月(8日ごろ)
- 七日月(7日ごろ)
- 三日月(3日ごろ)
- 二日月(2日ごろ)
- 新月(1日ごろ)

上弦の月・夕月夜(宵月夜)——→下弦の月・有り明けの月(朝月夜)

■陰暦月名一覧

- 一月　むつき(睦月)
- 二月　きさらぎ(如月)
- 三月　やよひ(弥生)
- 四月　うづき(卯月)
- 五月　さつき(早月・皐月)
- 六月　みなづき(水無月)
- 七月　ふみづき(文月)／ふづき(文月)
- 八月　はづき(葉月)
- 九月　ながつき(長月)／きくづき(菊月)
- 十月　かんなづき(神無月)
- 十一月　しもつき(霜月)
- 十二月　しはす(師走)／ごくげつ(極月)

■方位と時刻

主要名数一覧(中国は408ページ参照)

- **一院**　上皇(法皇)が二人ある場合の前の上皇。本院。
- **一人**　天皇。
- **一の人**　摂政・関白。一座・一の所ともいう。
- **一の上**　左大臣。
- **一の家**　摂政・関白たる家筋。
- **二王**　(仏教)金剛像と力士像。
- **二教**　(仏教)密教・顕教。
- **二神**　(和歌)和歌守護の住吉・玉津島の二神。
- **二聖**　①(書道)嵯峨天皇と僧空海。②(和歌)柿本人麻呂と山部赤人。
- **二都**　南都(奈良)と北都(京都)。
- **三界**　(仏教)①欲界・色界・無色界。②過去・現在・未来。
- **三関**　①鈴鹿(伊勢)・不破(美濃)・愛発(越前)、後に逢坂(近江)。②奥羽では勿来・白河・念珠。
- **三奇人**　(寛政年間)林子平・高山彦九郎・蒲生君平。
- **三教**　儒教・道教・仏教。
- **三景**　松島(陸奥)・厳島(安芸)・天橋立(丹後)。
- **三元**　上元(正月一五日)・中元(七月一五日)・下元(一二月一五日)。
- **三公**　①太政大臣・左大臣・右大臣。②左大臣・右大臣・内大臣。
- **三綱**　君臣・父子・夫婦の道。
- **三業**　(仏教)身・口・意の所作。
- **三国**　日本・唐(中国)・天竺(印度)。
- **三才**　天・地・人。
- **三山**　①(大和)畝傍山・天香具山・耳梨山。②(熊野)新宮・本宮・那智。③(出羽)月山・羽黒山・湯殿山。
- **三社**　伊勢神宮・石清水八幡宮・賀茂神社。
- **三舟の才**　詩・歌・管絃の三道に秀れること。
- **三種の神器**　八咫鏡・草薙剣(天叢雲剣)・八坂瓊曲玉。
- **三世**　①過去・現在・未来。②父・子・孫。
- **三蹟**　小野道風・藤原佐理・藤原行成。
- **三夕の歌**　『新古今集』所収。
  - ●心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ(西行)
  - ●見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ(定家)
  - ●寂しさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮れ(寂蓮)
- **三尊**　①阿弥陀・観音・勢至の三菩薩。②釈迦・文珠・普賢の三菩薩。
- **三大河**　利根川(坂東太郎)・筑後川(筑紫次郎)・吉野川(四国三郎)。
- **三大橋**　宇治橋(山城)・山崎橋(山城)・勢多橋(近江)。
- **三代集**　(和歌)古今集・後撰集・拾遺集。
- **三大人**　荷田春満・賀茂真淵・本居宣長。平田篤胤を加えて、国学の四大人という。
- **三大門**　平安京の羅城(生)門・朱雀門・応天門。
- **三筆**　(書道)①(平安朝)嵯峨天皇・橘逸勢・僧空海。②(近世)近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗。

三宝 仏・法・僧。

三流 遠流・中流・近流の三つの流罪。

四鏡 大鏡・今鏡・水鏡・増鏡

四苦八苦 生・老・病・死(四苦)と愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦(四苦)を合わせたもの

四座 (能楽流派)観世・金春・宝生・金剛。喜多を加えて「四座一流」という。

四姓 源・平・藤原・橘の四氏。

四天王 ①(仏教)持国天(東)・広目天(西)・増長天(南)・多聞天(北)。②(頼光の臣)渡辺綱・坂田金時・碓井貞光・卜部季武。③(中世和歌)頓阿・兼好・浄弁・慶運。④(近世和歌)小沢蘆庵・西山澄月・伴蒿蹊・大愚慈延⑤。(家康の臣)酒井忠次・榊原康政・井伊直政・本多忠勝。

五戒 (仏教・在家信者の戒律)不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒

五街道 (江戸日本橋を起点とした江戸時代の陸路)東海道・中山道(木曽街道)・日光街道・奥州街道・甲州街道。

五家髄脳 (和歌)新撰髄脳(藤原公任)・歌枕(能因法師)・俊頼髄脳(源俊頼)・綺語抄(藤原仲実)・奥儀抄(藤原清輔)。

五歌仙 赤染衛門・和泉式部・紫式部・馬内侍・伊勢大輔。

五畿 山城・大和・河内・和泉・摂津の畿内五国。

五穀 米・麦・粟・黍・豆。

五山 ①(京都)天龍寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺(南禅寺は五山の上)。②(鎌倉)建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺。

五舎 (宮中)昭陽舎(梨壺)・淑景舎(桐壺)・飛香舎(藤壺)・凝花舎(梅壺)・襲芳舎(雷鳴壺)。

五節会 元日・白馬(正月七日)・踏歌(正月十四日)・端午(五月五日)・豊明(十一月新嘗祭)の翌日。

五摂家 (摂政関白たる家柄)近衛・九条・二条・一条・鷹司。

五人 (梨壺五人)大中臣能宣・坂上望城・源順・清原元輔・紀時文。

五味 (味覚)酸・苦・甘・辛・鹹。

六歌仙 (和歌)在原業平・僧正遍昭・大伴黒主・小野小町・喜撰法師・文屋康秀。

六根 (仏教)眼・耳・鼻・舌・身・意

六道 (仏教)地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上。

七福神 大黒天(有福)・恵比寿三郎(清廉)・弁財天女(愛敬)・毘沙門天(威光)・寿老人(寿命)・布袋和尚(大量)・福禄寿(人望)。

七部集 (俳諧)①(芭蕉)冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・続猿蓑。②(蕪村)其雪影・明烏・一夜四歌仙・桃李・続明烏・五車反古・花鳥篇。

七堂伽藍 (仏教・真言宗)金堂・講堂・塔婆・経蔵・鐘楼・牛門・大門。

七宝 (仏教)金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・珊瑚・瑪瑙。

七草 (植物)①(春)せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ。②(秋)萩・尾花・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗(古名・あさがお)。

八代集 (和歌)古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集。

八景 ①(近江八景)比良の暮雪・矢橋の帰帆・石山の秋月・瀬田の夕照・三井の晩鐘・堅田の落雁・粟津の晴嵐・唐崎の夜雨。②(全国)紀伊和歌浦・摂津住吉浦・播磨明石浦・大和芳野山・陸奥塩竈浦・山城加茂川・出羽最上川・駿河富士山。

八州 (関八州)武蔵・相模・安房・上総・下総・常陸・上野・下野。

八宗 (仏教)倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華厳宗・天台宗・真言宗。

八省 中務省・式部省・治部省・民部省・兵部省・刑部省・大蔵省・宮内省。

九族 高祖父・曽祖父・祖父・父・己・子・孫・曽孫・玄孫。

九品 (仏教)上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生。

十戒 (仏教)不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不両舌戒・不悪口戒・不綺語戒・不貪欲戒・不瞋恚戒・不邪見戒。

十哲 (俳諧・蕉門十哲)其角・嵐雪・

十三代集 (和歌)新勅撰集・続後撰集・続古今集・続拾遺集・新後撰集・玉葉集・続千載集・続後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新続古今集。

二十一代集 (和歌)八代集と十三代集を加えたもの。

三十六歌仙 柿本人麻呂・大伴家持・在原業平・猿丸太夫・紀貫之・壬生忠岑・素性法師・坂上是則・藤原興風・源重之・大中臣頼基・源公忠・藤原朝忠・源順・平兼盛・小大君・中務・藤原元真・山部赤人・僧正遍昭・小野小町・紀友則・凡河内躬恒・伊勢・藤原敏行・藤原兼輔・源宗于・斎宮女御・藤原敦忠・藤原高光・源信明・清原元輔・大中臣能宣・藤原仲文・藤原清正・壬生忠見。

▶三十六歌仙屏風

主要単位呼称一覧

A基本となる単位呼称

はかろうとするものの形状、容器の種類によって次のような基本呼称がある。

一籠　籠にはいったもの（果物など）
一罐　罐にはいったもの（罐詰め・海苔など）
一切　切ったもの（奈良漬・西瓜など）
一串　串にさしたもの（団子・干柿など）
一組・一揃　合わせてひとそろいになるもの（布団・衣服・食器など）
一束・一把　細いものをまとめて（そうめん・たきぎ・稲・柴など）
一箱　箱にはいったもの（菓子・煙草など）
一袋　袋にはいったもの（菓子・茶など）
一枚　薄いもの（紙・油揚げ・布団・皿・畳・盆・レコードなど）
一冊　とじた本状のもの（書籍・ノートブックなど）
一足　両足にはくそろいもの（くつ・下駄・たび・鐙など）
一頭　主として大きめな動物（牛・馬・象など）
一杯　コップ・さじ・さかずきなどの容器にはいったもの（水・酒・砂糖など）
一匹　主として小さめな動物や魚、虫類（犬・鯉・こおろぎなど）
一俵　俵にはいったもの（米・炭など）
一本　細く長いもの（傘・酒〈ビン・チョウシ〉・木・槍など）

B注意すべき単位呼称

A以外にも、はかろうとするものによって次のような呼称がある。

【動物】
あわび　一杯
烏賊・蛸　一杯
魚　一尾
うさぎ　一羽
馬　一騎（騎乗の時）
かれい・鱒・鯛　一枚

【植物】
植木　一株・一鉢
木　一株
草　一株
茄子　一顆
花　一輪

【飲食物】
葡萄　一粒・一房
饂飩　一玉
鏡餅　一重
菓子　一折
果物　一顆
酒　一献
ざるそば　一枚
茶　一封・一椀
豆腐　一丁
海苔　一帖
羊羹　一棹

【服飾】
袷　一領
衣服　一重・一具
烏帽子　一頭
帯　一条・一筋
織物　一反
被衣　一領
裃　一具
狩衣　一具
絹　一端・一疋
小袖　一重
手拭　一条・一筋
布　一幅・一端・一匹
羽織　一領
袴　一対・一下
紐　一条・一筋
木綿　一締

【住居・調度】
行燈　一張
家　一軒・一戸・一棟
鏡　一面・一口
掛軸　一幅・一軸・一対
蚊帳　一張・一垂・一条
几帳　一基
砧　一枚
脇息　一脚
鏡台　一基・一台
倉　一棟
簾　一張・一垂・一連
箪笥　一棹
ちょうちん　一張
机　一脚
壺　一瓶・一口・一壺
堂　一宇
燈籠　一張・一基
長持　一棹

【日用品】
笠　一笠・一枚・一蓋
傘　一張
剃刀　一挺・一口
櫛　一枚
膳　一膳・一人前
扇子　一柄・一本
煙草盆　一面
樽　一樽・一荷
箸　一膳・一具
旗　一旒・一流
包丁　一柄・一挺
ろうそく　一挺

【武具】
刀　一振・一口
太刀　一腰・一振・一柄
鉄砲　一挺・一門・一口
薙刀　一柄・一振
矢　一筋
槍　一条
弓　一張

【文具】
紙　一締・一葉・一帖
書籍　一巻・一篇
硯　一面
手紙　一本・一通・一封
巻物　一巻・一軸

【楽器】
琴　一張・一面
三味線　一棹・一挺
つづみ　一張
琵琶　一面
笛　一管

【娯楽・芸能】
生け花　一杯・一鉢
歌合　一番
謡いもの　一段
碁・将棋　一局・一番
詩　一編
芝居　一場・一幕・一景
すもう　一番
川柳　一句
短歌　一首
能　一番
俳句　一句
舞楽　一曲
舞　一指

【宗教】
経　一巻・一部
袈裟　一領
珠数　一貫・一連
神体　一柱
塔婆　一基・一層
鳥居　一基
仏像　一軀・一頭・一体

【乗り物】
駕籠　一挺
貨車　一両・一台
車　一両・一台
航空機　一機
列車　一両・一本・一列

【その他】
薬　一服・一錠・一包
事件　一件
証文　一札
煙草　一服
荷物（馬に乗せた）　一駄
履歴書　一通

国語の学習

文章表現の手順（清書原稿）

責任をとる　三年三組　三十三番　白水　緑

六百余の命が一瞬にして散った。鶴見事故と三池の爆発事故の犠牲者である。日本の人口が減ったと喜ぶような愚か者はまずいまい。

　誰もがショックを受け、誰もが運命の恐ろしさを痛いほど感じたはずである。列車事故について私は述べてみよう。

　例によって例のごとく、国鉄に対して猛烈な非難があびせられた。「この責任はお前のものだ、どうしてくれる。」式である。このような非難に屈し、安易な考えにさおさされて、関係者が辞職をするのが常である。しかし、事故が起こったために辞職することがイクオール責任をとることになるであろうか……。私はそうは思わない。それは責任をとるどころか、責任を逃れる弱い態度である。なぜ二度と事故が起こらぬように、あらゆる努力をしようとしないのだろうか……。

　去年の五月、突如として起こった三河島事故。それに対する反響のすごさは、まだ記憶に新しい。当然、当時の十河（そごう）総裁に白い目が向けられた。だが十河さんは頑として辞職しなかった。理由は東海道新幹線に託した夢であった。それを彼の功名心だと思う人は、自分のひねくれた根性を直すべきてである。事故の責任をとるために辞職することが無意味であ

題材集め

自分の書く力、話す力を伸ばすためには、日常生活において、たえず材料を集め、話題を豊富にしておくことが大切である。

　題材集めのメモは、次のようにするとよい。

　日付・題・メモ（話材・語句・文・あらすじ・構造・主題など）・分類

〈題材集めの例〉

日付　8月1日
題　克己
メモ　人生は自分とのたたかいの連続だと私は思います。（主題文）
分類　⑥（下段参照）

◇

日付　8月4日
題　もうひとつの甲子園
メモ　人気コメディアンの欽ちゃんこと萩本欽一さんが、「〝もうひとつの甲子園〟も応援しようじゃないの」といいだした。賛成である。
分類　③

◇

日付　8月6日
題　平和祈念式典に参加して
メモ　原爆で家族をみんな失ったいとこのことを思い、平和への誓いを新たにした。
分類　④

◇

日付　8月8日
題　「野菊の墓」を観て
メモ　久しぶりにいい映画を観た。松田聖子は美しい自然を背景に、悲恋のヒロインをみごとに演じた。
分類　①

（分類してみると、自分の取材方法の特徴がわかって、参考になる。）

■文章表現の技法

1 題材集め

①見ること
②聞くこと
③読むこと
④すること
⑤尋ねること
⑥考えること
によって

㋐不平や不満を感じたこと
㋑困ったこと
㋒おもしろいと思ったこと
㋓感心したこと
㋔ふしぎだと思ったこと
㋕しあわせだと思ったこと
㋖美しいと思ったこと
㋗恐ろしいと思ったこと
㋘珍しいと思ったこと
㋙ハッと心を打たれたこと
などを書きとめておく。

2 題材選択

集めた題材の中から、次の点に注意して一つ選ぶ。

(1)自分が真に書きたいという意欲を感じるもの。
(2)高校生に興味・関心のあるもの。
(3)制限字数内でまとめられるもの。

3 主題決定

自分の選んだ題材で何を書こうとするのか、次の点に注意しながら一文にまとめる。

(1)何について書くのか、その中心を一つにしぼる。
(2)何について書くのか、明確にする。
○広いものから狭いものへと限定する。

ると思ったからにちがいない。だからこそ、そのような事で、自分の夢を水の泡にしたくなかったのだろう。何にせよ、周囲の猛烈な非難に屈しなかった十河さんの態度に、私は大きな感銘を受けたものである。

今度の事故が発生した時も、すぐに石田総裁の進退問題が云々された。様々な要素がからみあって、国鉄に対する風当たりは前にも増してものすごい。だが石田総裁は、はっきりとこう言っている。

「今回の事故に対する私のとるべき態度については、今すぐ辞表を出して職を去り、罹災者並びに天下に謝するという身の処し方もあるだろう。しかし、今、私はこのような安易な無責任な態度はとるべきではないと信じている。事故の後始末をし、原因を徹底的に究明し、将来の輸送の安全を増すために留まり、努力することこそ私の進むべき道だと確信している。」

このことばこそ真に事故の責任を感じ、その責任をとろうとする人のことばである。そしてまた、このことばは、私がこの文中で述べたいことをズバリ述べている。

私たちは、責任を追求することにのみエネルギーを費さず、二度とこのような事故が起こらないようにできるだけの協力をすることが必要である。また、関係者もすぐ辞職して責任を逃れることなく、善後措置に全力を尽くすべきである。それが本当に〝責任をとる〟ことになるのだと私は思う。

題材選択 → 主題決定 → 構想 →

多くの題材の中から、一番書きたくて、友だちにも興味・関心があり、しかも分量的にも適当なものとして、白水さんは、次のものを選んだ。

〈題材〉

事故の責任

そして、この題材で自分が述べたいと思っていることを一文でまとめてみた。

〈主題文〉

何か事故が発生したとき、関係者がすぐ辞職するのは、責任の回避である。

次に話材メモを頼りに書きたい事柄を箇条書きにすると、次のようになった。

〈話材メモ〉

○横須賀線の列車事故と三池炭鉱の爆発事故。
○事故が発生した時の周囲の者の態度。
○事故の責任者は、責任をとると言っては辞職する。
○辞職することは、責任をとることにはならないどころか、責任を逃れる弱い態度である。
○三河島事件の時の十河総裁の態度→東海道新幹線への夢がすてきれないのが最大の理由ではあったが、周囲の非難に屈しなかった。
○今度の事故に対する石田総裁の態度→責任を感じ辞職することも考えられるが、それは責任の回避となる。善後措置に全力を尽くしたい。
○全く同感である。
○責任を追求することにエネルギーを費すべきではない。

○言いたくてたまらないこと、言わないではいられないことをはっきりと意識する。

4 構想（構成）

(1) 話材メモ

○題材集めのメモを参考にしながら書きたいことを箇条書きにする。
○ブレーン・ストーミング（集団思考。頭の中から、自由に、たくさんの材料やアイデアを取り出す方法）によって話材を豊富にする。

(2) 話材整理（アウトライン）

○どういう順序で書くか、符号をつけてまとめる。

Ⅰ—A—1—a—(1)—(a)
Ⅱ　B　2　b　(2)　(b)

○KJ法を利用するのも効果的である。
○三段構成か四段構成かを原則とするのがよい。

5 叙述

(1) 題名をつける。

○主題・構想が決まったら、仮題をつけて書きはじめ、最後に決定する。

(2) 書き出しを工夫する。

○読み手の興味をひきつけ、文章の中にひき入れるために魅力的なものにしたい。

(3) 書き終わりを工夫する。

○短いほうが効果的である。
○文章の内容に落ち着きをあたえ、読み手の心の中に余韻を残すものにしたい。

文章表現の手順（下書きの推敲）

　六百余の命が一瞬にして散った。横須賀線の列車事故と三池炭鉱の爆発事故の犠牲者である。日本の人口が減ったと喜ぶような愚かな者はまずいまい。誰もがショックを受け、誰もが運命の恐しさを痛いほど感じたはずである。列車事故に全てをまとめて述べてみよう。
　例によって例のごとく国鉄に対して猛烈な批判があびせられた。「この責任はお前のものだ、どうしてくれる」式である。このような批判に屈し、安易な考えにさおさされて、関係者が辞職するのが常である。しかし、事故が起こったために辞職することがイクオール責任をとることになるであろうか。私はそうは思わない。それは責任をとるどころか、責任を逃れる弱い態度である。なぜ一時の苦しみを乗り越えて、二度と同じような事故が起こらぬように、あらゆる努力をしようとしないのか。
　去年の五月、突如として起こった三河島事故。それに対する反響のすごさは記憶に新しい。当然、当時の十河総裁に白い目がむけられた。だが十河さんは頑として辞職しなかった。理由は東海道新幹線に託した夢であった。それを彼の功名的な考えと思う人は自力のひねくれた根性を直すべきである。事故の責任をとるために辞職することが無意味であるとを知っていたからにちがいない。だからこそ、そのような事が自分の夢を水の泡にしたくなかったのだろう。もちろん十河さんは事故の責任を強く感じ

叙述

それを整理すると次のようになる。

〈アウトライン（あらすじ書き）〉

Ⅰ横須賀線の列車事故と三池炭鉱の爆発事故

Ⅱ関係者に対する国民の態度
　A責任を人に転嫁し、追求したがる。
　→関係者が辞職するのが普通
　→しかし、それは責任をとることにはならない。
　　1　三河島事件の時の十河総裁の態度
　　2　今度の事件に対する石田総裁の態度

Ⅲ　周囲の者
　→責任を追求することにエネルギーを費すべきではない。
　関係者
　→辞職して責任を逃れるべきではない。
　善後措置に全力を尽くすことである。

いよいよ書き始めることになるが、まず題名を決める。

〈題名〉

仮題　責任をとる　→　本題　責任をとる

↓題名のつけ方
①主人公を示すもの
②主題を表すもの
③作品の中心をなす話題や事がらを表すもの

(4)段落を設定する。
○アウトラインの一項目を、原則として一段落として構成し、一つの事柄だけを述べる。
○段落の長さを二〇〇字～三〇〇字とする。
○適切な位置に主題文を入れる。
○段落内部の文のつながりを自然なものにし、適切な接続語句・指示語を用いて、筋が通るようにする。

(5)わかりやすい文で書く。
○一つの文には一つの事がらだけを入れる。
○文の長さを三〇字～四〇字程度にする。
○主述を明確にする。
　①「何がどうした。」
　②「何がどんなだ。」
　③「何がなんだ。」
○修飾・被修飾の照応に注意し、修飾語は、なるべく被修飾語のすぐ前に置く。
○わかりやすい語句を使う。
○文末表現を工夫する。

①書き手の断定—である、だ、です
②書き手の強い断定—に違いない / にきまっている
③書き手の軽い断定—と信じる / と思う
④普通の述べ方—である、だ、です
⑤書き手の疑わしい断定—らしい / かもしれない

て、事故防止のためにあらゆる努力を続けた。何にせよ、周囲の猛烈な批判に屈しなかった十河さんの態度に、私は大きな感銘を受けたものである。

今度の事故が発生した時も、すぐに石田総裁の進退問題が云々された。三河島事故から一年もたたないうちに起こった、しかも戦後史上二番目の大事故とあって、国鉄に対する風当たりは前にもましてものすごい。だが石田総裁ははっきりとこう言っている。

「今回の事故に対する私のとるべき態度については、今すぐ辞表を出して職を去り、り災者並びに天下に謝するという身の処し方もあるだろう。しかし今、私はこのような安易な無責任な態度はとるべきでないと信じている。事故の跡始末をし、原因を徹底的に究明し将来の輸送の安全度を増すために留まり、努力することこそ私の進むべき道だと確信している。」

このことばこそ真に事故の責任を感じ、その責任をとろうとする人の態度の表れである。そしてまた、このことばの中に、私がこの文中で述べたいことがズバリ述べてある。

私たちは責任を追求することにのみエネルギーを費すべきでない。「あなた任せ」にしないで、二度と事故が起こらぬようにできるだけの協力をすることである。また、関係者もすぐ辞職して責任を逃れることなく、前後措置に全力を尽くすべきである。やたら興奮しないで静かに考えることである。

推敲 → 清書

④重要な場所や時を示すもの
⑤作品の主題や話題とは直接関係ないが、印象的な場面や事がらを表すもの
⑥聖典・故事・古歌などの一句を借りて内容や主題を暗示するもの

〈書き出し〉

六百余名の命が一瞬にして散った。

↓書き出し例
①自分の思い出や日常の経験から始める。
②描写で始める。
③説明で始める。
④会話で始める。
⑤引用で始める。
⑥話しかける調子で始める。
⑦疑問の形で始める。

〈書き終わり〉

それが本当に責任をとることになるのだと私は思う。

↓書き終わりの例
①中心となる考えをふたたび強調する。
②書き出しの文にもどって、読み手にはじめからの成りゆきを思い出させるようにする。
③全文の要約をする。
④これからどう展開させていくかの見通しや希望を述べる。
⑤感想を付け加えて、余韻を残す。

⑥書き手の予想―であろう
⑦世間が認めているという述べ方　ではあるまいか　―ということ（話）
⑧定説の引用―と言われている　だ　とされている
⑨出所のあいまいな引用―だそうだ　ということらしい
⑩他人の意見―が言った、と述べている

6 推敲

○自分が述べたいことが正しく伝わるように適切な表現がされているか、と考えながら、繰り返して読んでみる。声を出しても読んでみる。一字一句に注意して読む。時間をおいてまた読んでみる。

○文章を書く作業は、どのプロセス（過程）も推敲の連続である。
①誤字・あて字・脱字を訂正する。↓句読点についても注意する。
②語句の誤りや不適切な表現を直す。
③むだな語句を削ったり、足りない語句を補ったりする。
④論理的に筋が通っているかどうか、前後で食い違う叙述がないかを調べる。
⑤段落や全体の構成を省みる。

7 清書

○推敲したものを写し違いのないように、しかも、ていねいに書く。

友人について

三ノ一　岡田明子

①友人とよく生きがいの事について話す。そして必ず出てくるのが、仕事、結婚のこと。そして結論はいつも同じ。私達は仕事に生きたほうがよいのではないかということだ。
②現在でも根強く残っている男尊女卑という観念。世間の人は皆、この色メガネを通して女子を見る。この考えに甘んじている人もいるが私には我慢できない。そして、この友人もである。彼女にははっきりした将来の希望がある。漠然としたものはあっても、それが有形のものでない私にとって、彼女は羨ましい限りである。
③女がひとり生きてゆくことは大変な事だと思う。何か一つの事について男性よりすぐれていなければならぬ。すぐれているだけでなく、自分を見る世間の白い目に耐えなければならぬ。その仕事に自分の生きがいを見い出さねばならぬ。何かの本に書いてあった。生きがいとは、そのものに賭ける情熱なのだと。まさに、その通りだと思う。今の私には生きがいと言えるだけのものはない。しかし彼女にはあるようだ。少なくとも、私にはそう思える。今はなくても、将来見つけることができたなら、私はそれに自分の最大限の力を発揮したい。自分にそれだけの器量があるかどうかは、わからぬが。(1)
④私がこのような考えを持ち始めたのはいつごろだ

この文章は、題目「友人」、字数制限、四百字詰原稿用紙三枚以内、という課題・条件で、制限時間内に書かれたものである。
この作文を評価し診断することを通して、小論文の書き方や望ましい小論文のあり方について解説することとする。
まず、評価の観点を、次の四つに立てる。

1課題・条件を満たしているか。
2中心意見が明確であるか。
3下位論点が、中心意見を適切に支持しているか。
4全体的に読み手の心に迫るものがあるか。また、そのための工夫があるか。

この観点に従って、評価・診断してみよう。

1　課題・条件を満たしているか。

○課題作文としては、複雑な課題・条件ではない。この作文の場合、一応、三条件を満たしているといえる。字数も、千百字程度であり、中心題材も「友人」ということで書かれている。ただ、意見という点では、生きがい論に傾いていて、テーマに難がある。

2　中心意見が明確であるか。

○作文では、主題が明確であることは、最も重要な条件である。特に、小論文のように、意見や主張を述べることが中心になる文章では、中心意見が不明確であることは致命的な欠陥となる。
○この文章の中心意見は、男尊女卑の社会の中で、女性の生きがいをどう見つけるか、ということである。形式段落①の内容は、問題提起になっており、生きがい論を主題としようとしているように理解される。形式段落②・③は、それを受けて展開している。ところが、形式段落④以降は、友人論を展開する意図もうかがわれ、中心意見が分裂傾向を示しているといえる。
○この文章は、④以降の後半に中心を置いて修正されなければ、「友人」について論述することを求めた課題に、適合しない。

3　下位論点が、中心意見を適切に支持しているか。

○論点は、中心意見の分節されたもので、それを支持する柱としての働きをもつ。したがって、この文章では、意味段落の(1)・(2)・(3)がそれにあたる。検討されなければならないのは、中心意見との支持関係である。
(1)　男尊女卑の観念の強い現代社会であるが、女である私も生きがい——自分の情熱をかけることのできる仕事を見つけて

■小論文の技法

1小論文　ふつう、八百字から千二百字ぐらいの長さのものをいう。
2課題　小論文は、課題されるのが一般である。また、字数や制作時間に制限がある。
3ブレーン・ストーミング　課題について、思いつくことを、できるだけ多く紙に書きつらね、関連のあるものごとにグルーピング(組み合わせ)をする。
4主題文　ブレーン・ストーミングの結果の構造化の過程で、課題についてどういう中心的な考えを述べるかをまとめ、一文であらわす。
5アウトライン　三段構成を基本とし、場合によっては、四段構成とする。その際、主題文をどこに置くか、くふうする。
6論証の方法　小さくても論文であるから、説得力のある文章でなければならない。そのためには、確かな論証の方法を用いることが、大切である。
①事実による裏づけをする。特に、体験事例だと効果的である。
②誰もが真実だと認めている普遍的原理にあてはめて、自分の考えの正しさを証明する方法もある。
③いくつかの事実から誰もが承認する一般的意見を導き出す方法もある。
④誰もが認めている権威者や権威のある人の言説によって証明する方法もある。
7文の長さ　一文の長さは、五〇字以内におさめるほうが、わかりやすい。
8表記　句読点、漢字に気をつける。

ったろうか。おそらく、高二のころ、彼女とつき合い始めてからではないかと思う。
⑤芸術という厳しい道へ進む決心をしていた彼女の、一人っ子で甘えん坊の私への影響は、かなり大きかったと思う。美術研究所と学校とを両立させようとすれば、かなり辛いはずである。私なら一ぺんで悲鳴をあげてしまいそうなところを、彼女は歯をくいしばって、よく続けていると思う。そんな彼女を横で見ていて、私も頑張らねばと思ったのだった。今の私の考え方には多分に彼女の影響がある。彼女のおかげで私も生きがいを持ちたいと思っているのだから。（2）
⑥私は友達関係については、軽く手をつなぎ前向きの姿勢で、ひっぱるのでも、ひっぱられるのでもなく、そのつないだ手に力を入れずに歩いてゆくのを理想としている。
⑦手に力を入れ、ひっぱれば、相手には大きな負担となってしまうだろう。
⑧私は将来、できればこの友人との関係は保ちたいと思う。私の長い人生での、最も大切な二年間に、私の将来を決定づけるほどの影響を与えた彼女なのだから。
⑨喧嘩（けんか）をしそうになるほど、自分の意見を主張しあったこともあった。それが、私たちの未来によい影響を与えれば最高だと思っている。（3）

生きたい。
（2）私の友人は、芸術家になるという目的を持っているが、自分もその影響を受けて、生きがいを持ちたいと思いはじめた。
（3）友人関係は、前向きの姿勢で、二人が手をつないでいるが、どちらがひっぱるというのでもない状態が理想である。この友人とも、そういう関係を保ちたい。
○この文章の論点を整理すると、このようになる。全体のバランスから考えれば、（1）が中心論点、（2）は、つなぎの働きだけをしている段落、（3）は課題に対応する論点をもつが、（1）に比べると軽い。（1）と（3）とは分裂していて、（1）との支持的な関係に立っているとは言いがたい。
○書き直すとすると、（3）を中心意見として、その具体例＝意見の根拠として（1）・（2）を再編成することが大切である。特に生きがい論と友人論とを統合して新しい意見を生み出すことが必要であろう。

4　全体的に読み手の心に迫るものがあるか。また、そのための工夫があるか。

○全体的印象としては、なだらかに書かれていて、書かれていることは自然に理解できるが、課題に対して答えた文章としては、必ずしも論理的にすっきりとしたものではない。すでに指摘したように、最大の原因は、主題の分裂にある。この違和感が評価結果にもたらすものは大きい。
○次に、この文章が必ずしも迫力に満ち、読み手の心に訴えるものが強くないのは、一つは、筆者が理想としている友人像が類型的・常識的であって、読み手がハッとさせられるものがないということ、いま一つは、全体的に文章が冗漫であるということに原因を求めることができる。友人論には、さまざまな考え方があり、お互いに負担にならない関係というのも一つの見解であろうが、⑨段落にも書いてあるように、むしろ、けんかをするぐらいの自己主張をし合うことのできる関係が、望ましい友人関係と言えるのではないか。その具体例を体験から引いてくれれば、訴える力が強くなる。また、生きがい論の部分も、もっと簡潔に書くことで、すっきりとした印象を生み出すことができると思われる。
○以上のことを頭において推敲すると、小論文としてのまとまりのある文章とすることができよう。

■論点の構成の型

論点は、文章の主題を支える柱であり、ある一つのまとまった判断の結果を表すものである。次のような型がある。
1 **抽象と具体**　抽象的見解の証明として具体例を示すという関係を表すもの。
2 **具体的事例（実例）**　具体的事実・事例によってある考えを表すもの。
3 **原因と結果**　ある原因によって、ある結果に至ったという関係を表すもの。
4 **比較・対照**　類似点を示し比較、対立的を示す対立という関係を表すもの。
5 **問題と解答**　問題を提起し、それに対する解答を表すもの。
6 **誤りと真実（否定と肯定）**　ある事柄の誤りを指摘して否定し、それによって真実を肯定的に表すもの。
7 **問題と解決策**　問題点を示し、それに対する解決策を表すもの。
8 **要素分析**　ある事柄を要素に分析して表すもの。
9 **判断と根拠**　ある判断とその根拠を表すもの。
10 **価値・意味**　ある事柄の価値評価や意味を表すもの。

■文連節関係の類型

文脈を展開する文の連接関係と、それを導く接続詞には、次の類型がある。
1 展開型　だから・ゆえに・したがって
2 反対型　だが・しかし・ところが
3 累加型　そして・また・かつ・および
4 同格型　つまり・すなわち・たとえば
5 補足型　なぜなら・ただし・もっとも
6 対比型　または・あるいは・もしくは
7 転換型　さて・ところで・次に

レポート

表題　**漱石と鷗外について**

夏森　学

昭和五六年九月一日提出

はじめに

1研究の動機

2研究主題設定の理由など

○ここでは、これから述べることが、読み手に展望できるように、そのポイントや問題の所在などについて書く。

I　漱石と鷗外の文学史的位置

1明治二〇年代～末期までの文学史的潮流の概観

(1)明治二〇年代――文学思潮の概説

※没理想論争

(2)明治三〇年代――文学思潮の概説

(3)明治四〇年代――文学思潮の概説

2自然主義と反自然主義

(1)自然主義と反自然主義

(2)漱石・鷗外の文学的立場

○ここでは、漱石・鷗外が明治文学史の中で、どのような位置にあるかを、まとめる。

II　漱石と鷗外について

1漱石について

(1)生いたち

(2)近代的知識人としての特質――英文学者

(3)文学者としての特質

題目決定 → 問題分析 → 情報探索

高校では、レポートは、多く課題に対するものとして書くことが求められる。国語科の夏休みの課題として、「漱石と鷗外」について調べて報告する宿題が出たとしよう。

題目は、決定されているので、題目の中にこめられている**課題を分析**し、何をどのように調査し、研究したらよいか、**研究の視点**を明確にする。

「漱石と鷗外」の「と」は、漱石と鷗外との関係を問うていると理解できる。この「と」の関係は、両者の特色をおおまかに見てみると、漱石も鷗外も、

①西欧の近代文化に直接触れている。

②当時の自然主義の思潮に批判的な立場をとっている。

という共通点がある。また、

③一方は町人の出身、一方は武士の出身である。

④一方は英文学者で、一方は医学者である。

という相違点がある。

これによって考えると、両者の関係は、その共通点と相違点を明らかにすることによってとらえることができると考えられる。これが**研究の視点**となろう。

両者を比較するにあたっては、巨視的には、文学史的視野からとらえること、微視的には、両者の、

(1)生いたち

(2)近代的知識人としての特質

(3)文学者としての立場

について調べること、という二つの立場に立ち、これらを、反自然主義の観点から総括しようという研究の見通しをつける。

この見通しに従って、必要な研究情報を収集する。もっぱら、図書資料によって調べること

■レポート作成の技法

1レポートとは

レポートは、あること（学校では、課題が多い）について、調べたり考えたりしたことをまとめて、報告書として提出するものである。

2問題の分析

何のために、どういうことについて、調べたり考えたりして書くのかを明確にする。そのためには、課題について分析し、問題を具体化する必要がある。

3情報の探索

どういう問題に答えたらよいかを、具体的につかむことができたら、それを解決するための情報を収集する。

(1)まず、自分の保持している記憶・知識の中から探索する。

(2)次に、(1)とかかわらせながら、文献資料、実地踏査、聞きとりなどの方法で、外部情報を集める。

(3)図書館で参考文献を検索するときは、日本十進分類法によって作成された図書の目録カードを活用するとよい。目録には、著者目録・書名目録・件名目録の三種類のものが用意されている。件名目録は、図書の内容・主題を短いことばで表し、見出しにしたものである。

4情報の構造化

内部、外部から収集してきた情報を、解決すべき課題に対してどう有効に働かせるか、どういう意味をもつかを考えながら、小単位の情報をグルーピングして、構造化する。

①作風――主要作品を通して
②文学的立場――「余裕」を中心に

2 鷗外について

(1)生いたち

(2)近代的知識人としての特質――医学者・軍人

①作風――主要作品を通して

②文学的立場――「傍観者」を中心に

○ここでは、漱石と鷗外を対照的に取りあげて、論述する。具体的に作品を押さえ、両者の評論などから、文学的立場の主張を引用して、実証的に書く。

III 漱石・鷗外文学の影響

1「漱石山脈」について

(1)新思潮派の人々

(2)大正教養派の人々

2 鷗外の影響

(1)鷗外歴史小説の系譜

(2)観潮楼歌会の活動

○ここでは、漱石・鷗外の当代および後代への影響を中心にまとめる。ここでも、両者を対照的に論述するように努める。

おわりに

1 研究のまとめ

2 反省と課題

○ここでは、研究についてのまとめをする。この研究に取り組んでの反省と残った課題を書く。

資料の構造化 ← アウトライン ← 文章記述

になろう。漱石や鷗外についての研究書はかなりたくさんあるので、どの文献によって調査するかということを検討しなければならない。まず、一定の評価のある研究者の著書か、文学辞典類によって調べ、そこから発展して種々の文献を知るとよいだろう。

収集した研究情報は、課題に基づいて構造化する必要がある。その作業を進めるにあたっては、調べた情報資料を適切に選択して、収集したものを全部取り込まないことが大切である。要するに、課題に対する解答のポイントを明確にするということである。

課題に応えるべき内容が明確になったら、これらを文章として構成しなければならない。レポートには、基本的形式がある。それにしたがうことが肝要である。しかし、レポートは、あくまでも、与えられた課題について調べ、考えたことを報告することが根本の性格であるから、読み手にわかりやすく書くことに意を用いなければならない。形式を守りながら、読み手への配慮を忘れないようにすることである。文書を書く前に、アウトラインの形に整理してみるとよい。

アウトラインに従って書くにあたって、原稿用紙を用いる場合は、その書き方の基本ルールを守ること。一般のレポート用紙を用いる場合も、縦書き、横書きに注意して、表記を誤らないように注意しなければならない。

丁寧な字体で書くこと。適当な大きさの字で書くことも大切なことである。字数制限がある時は、厳格にそれを守ること。

文章に書きあげたら、もう一度読み直し、推敲すること。誤字、脱字があると、内容も低く見られるものである。

国語の学習

5 アウトラインの作成

構成の基本パターンを心得ておく。

(1)表題
(2)報告者名・提出日
(3)序論―研究動機・目的・主題設定の理由など
(4)本論―研究方法・課題に関する調査結果と考察
(5)結論―まとめ・反省と課題
(6)参考文献など

〈参考〉

日本十進分類法
(Nippon Decimal Classification)

000 総記	500 工学，工業
100 哲学，宗教	600 産業
200 歴史，地誌	700 芸術
300 社会科学	800 語学
400 自然科学	900 文学

▲夏目漱石『吾輩は猫である』原稿

「富嶽百景」を読んで

二ノ七　西村明美

小学三年の時、私は初めて富士を見た。

「わあ、あれが富士山、大きいね。」

と、その時、何の抵抗もなく感激したのを今でも覚えている。やっぱり私も俗な凡人らしい。どうも日本人の心の中には、「富士は日本一」というのが観念的に根づいているようだ。これは、一種の偶像崇拝なのかもしれない。

だが、作者、太宰治は違う。彼は通俗性をきらい、高尚さを目ざす個性的な人物である。そのことは、冒頭から富士の俗性を否定してかかる所や、「富士には、月見草がよく似合う。」と平然として言ってのけた所などからもうかがえる。富士を頭から肯定していた私にとって、これらは少なからず、衝撃であった。

それで、この独特な作者に対して、少々、不審を抱きながらも、何度も読み返すうちに、私の心は変わっていった。そうだ！　私は単に富士のうわべだけを見て喜んでいたにすぎなかったのだ。いささか浅はかである。これに対して、作者は、俗な富士を否定することで、真の富士の内部にまではいりこみ、美化されていない、ありのままの富士をとらえようとしたのではなかろうか。先入感や常識的観念をすべて捨ててかかることで、全くの無の中に、作者独自の富士を見いだそうとしたのではないだろうか。そして、このつきつめた頂点に、作者の求めて

この感想文は、教科書に採録されている文章を読んで、四百字詰原稿用紙三枚以内の制限で書いたものである。以下、感想文の書き方のポイントを掲げながら、具体的に述べていくことにする。

1 感動したこと・考えさせられたこと。

○筆者の感動したことや考えさせられたことを抜き出してみると、

①太宰の反俗性
②太宰の芸術に対する厳しさ・真剣さ
③この作品の明るいイメージ

などがある。

2 文章構成

文章の構成は、次のようになっている。

①自己の体験から富士に対する俗な感情。
②作者の反俗精神に衝撃を受けたこと。
③作者は富士のうわべではなく、独自な見方による真の富士をとらえようとしたこと。
④作者は富士に誰よりも愛着を感じていること。
⑤作品の最後の部分に感動し、明るさとさわやかさを感じたこと。
⑥作者再生の原動力は富士・月見草・人間関係である。

○「富士は日本一」という通俗的な感情をいだいている筆者は、富士の俗性を否定するこの作品に出会って衝撃をうける。そして、何度も読み返すうちに、自分が富士の表面だけしか見ていなかったことに気づく。作者は、富士の内部に入り込み、ありのままの富士をとらえようとしている。それが「単一表現の美」の追求でもあることを発見している。

○感動から自己変革、それから個性的な発見へというように、自然に、わかりやすく文章を展開している。また、作者の芸術に対する厳しさ、真剣さをしっかりと受けとめているところがなによりよい。

3 叙述

○一種のはずみのある文体で、わかりやすく書いている。

良書選択 → 読書 → メモ → 文章構成 →

■読書感想文の書き方

1 良書を選ぶこと。

先生・友人の紹介や案内書などによって価値のある本であり、しかも自分の能力・興味関心・問題意識に適した本を選ぶ。

2 体あたりで書物にぶつかること。

まず自分を没却して読み、次に自分の思想によって対決して読み、作者の提示する主題・課題・経験に鋭く迫り、自分の人生上の糧(かて)・課題を発見する。

3 感動したこと・考えさせられたことを整理すること。

①読みながら、おもしろいと思うところや、気にかかるところなどをメモしておく。
②小説の場合は、プロット、事件、人物の心理や行動などに注目して、感銘のありか、問題点を明確にしておく。
③印象的な表現・語句についても、抜き書きしたり、注記したりしておく。
④感想を明確に表現するために、身近な人に話してみる。
⑤要点をまとめ、自分の書こうとするポイントをしぼる。

4 感動にふさわしい文章構成を考えること。

読書感想文によくみられる型

A①まえがき―作品とその背景、取りあげた理由。
②内容の紹介―主題と構成を簡潔に。
③感想―主題に関するものを中心とし、構成・叙述・素材その他

いる「単一表現の美」というものが存在するような気がする。何だか、作者の仕事、言い換えれば芸術に対する厳しさ、真剣さが脈うつように、あとからあとから音を立てて伝わってくるように思われた。

　このように考えてくると、富士に対して、誰よりも愛着を感じていたのは、作者にほかならないことに改めて気づかされる。彼にとって、富士は、自分の腕をみがくよきライバルであり、腹を割って話しあえる友人なのだ。そして、彼の目に富士は、人間のように心を持ち、まるで生きて躍動しているかのように様相を変えて映る。彼の手にかかると、富士も、まっ白いすいれんの花になったり、月見草と対等になったり、水の精や、ほおずきになったりするから不思議だ。

　最後に、「富士山、さようなら、お世話になりました。」と胸を張って行く姿に、私は、何か熱いものを感じた。これが、今まで、彼に対して持っていた暗いイメージを打ち消す決定的なものになったからだ。確かに、この作品中でも、彼自身、誰にも負けない苦悩は経てきたと言っているが、少なくともこの作品に関しては、およそ暗さなどみじんも感じられない。むしろ読者に、明るさとさわやかさを与えてくれる。

　そして、彼自身も、さまざまな富士の姿やけなげな月見草の姿に接して心をうたれ、また、井伏氏をはじめとする多くの人々とのあたたかい交流を通して励まされ、人生への希望を新たにしたのだった。

○作者の意見と自分の意見とを区別し、むしろ対比させて書いている。

○自分の考え方、見方が変わっていた自己変革の過程をはっきり表現している。

○専門家の作品解説や評論につられないで、自分の考えを素直に表現している。

4 推敲すべき点

①富士を描くことと、再生への希望を得たこととのかかわりが追求されていないため、並列してあるだけで全体の統一がない点。

②事実をふまえて書かれている場合でも、原則として主人公と作者とを混同しないで区別すること。

③原文のどこをふまえて書いているのかがわかるようにして客観性をもたせること。

④「富士には月見草がよく似合う」の深い意味を考えること。

→「富士の大きさに対して、月見草のけなげさをもって」生きて行くというのである。「富士の大きさだけに気を奪われ、力み過ぎたのが初期の心だとすると、月見草のつつましい美しさに生命の充実を認めることのできたのが中期の心である」ともいわれるのである。

⑤人間関係、とりわけ、甲府の娘との縁談の件が重要な意味を持っていることを考えること。

▲御坂峠から見た富士

に関するものを関連させて取りあげる。

④むすび―中心論点を強調してまとめる。

B①感動―感動の中心を述べる。

②理由―なぜ感動したのかを作品に即しながら述べ、同時に内容紹介にもなるようにする。

③反省―作品の状況と現在の社会・自分の状況とを比較して、あるべき自分の姿を考える。

④決意―自分はこのように生きていくという決意。

C手紙文形式

作者または主人公宛の手紙文の形式で、作品に提示されている問題・生き方について賛成・反対の立場から意見を述べる。

叙述 → 推敲 → 清書

5 文章の表現上で、特に、次の点に注意すること。

①書物の内容と自分の意見とを区別すること。

②自己変革の過程をはっきりと表現すること。

③わかり易く、明確な用語・文体で書くこと。

④専門家の作品解説や評論につられないこと。

⑤制限字数を越えないこと。

6 推敲を十分にすること。

自分らしいとらえ方（自己変革・個性的な発見・問題意識の喚起・価値判断など）がよく表現されているかを中心に推敲すること。

■縦書き原稿用紙を用いた例

a 『富嶽百景』を読んで

b 二年七組　西村明美

c d 小学三年の時、私は初めて富士を見た。

f 「わあ、あれが富士山、大きいね。」

と、その時、何の抵抗もなく感激したのを今

でも覚えている。やっぱり私も（g 俗な）凡人らしい。

どうも日本人の心の中には、h 「富士は日本一」i

というのが観念的に根づいているようだ。こ

o

れは、一種の遇（j 偶）像崇拝なのかもしれない。

k だが、作者、太宰治は違う。彼は通俗性を

きらい、高尚さを目ざす個性的な人物である。

l そのことは、冒頭から~~すぐ~~富士の俗性を否

定してかかる所や、m 「富士には、月見草がよ

■原稿用紙の使い方

1　原稿用紙の選び方

原稿用紙には、縦書き用・横書き用、二百字詰・四百字詰などがあるので、書こうとする内容や量に応じて決める。（四百字詰原稿用紙が一般的）

2　原稿用紙の使い方（〔　〕内は横書きの場合）

a〈題名〉第二行めの、上〔左〕から三、四字めから書き始める。

b〈姓名〉第三行めの、下〔右〕部（最後の字の後を二、三字あける程度）に書く。

c〈本文〉姓名から一行あけて書き始める。

d〈書き出し〉各段落の始めは一字あけて書く。

e〈句読点〉一字をとってはっきりと書く。他の符号についても同じ。（符号の用い方については、七五ページ参照）

f〈会話文〉改行し、かぎかっこ（「」）で囲む。

g〈挿入〉できるだけ訂正のない原稿がのぞましいが、書き加えたいときは、その個所がはっきりわかるように、すぐ右〔上〕の空欄に枠で囲んで明示する。

h〈かぎかっこ〉会話文以外にも、この個所のようにことばを強調したいときや、引用文（m）があるときには、かぎかっこを用いる。

i〈行末の符号〉原則として次の行の最初には書かない。

j〈訂正〉できれば書き直しがのぞましいが、無理なときは不要な語句の上から線をひき、すぐ右〔上〕の空欄に訂正語句を書く。

k〈段落〉この場合のように、自分に関することがらから作者へと、観点が移行しているところでは段落を立てる。段落を立てるのは次のようなときである。

①場面・題材・観点が変化しているとき

②論旨が展開しているとき

③一段落が長すぎてわかりにくいとき

それぞれの段落が、全体の主題を中心に、有機的

く似合う。」と平然として言ってのけた所などからもうかがえる。富士を頭から肯定していた私にとって、これは少なからず、衝撃であ n りました。

それで、この独特な作者に対して、少々、

20×20

につながるように構成することが大切である。

l〈削除〉できれば書き直しがのぞましいが、無理なときは不要な語句の上から線をひく。

n〈文末の語尾〉「である」体で書き始めたら、最後までそれで統一する。

o〈番号〉原稿用紙が二枚以上になるときは、整理しやすいように通し番号をつける。

p〈横書きの場合の数字〉原則として算用数字を用いる。ただし、次のような場合は漢数字を用いる。一つ、二月、三々五々、四国、一般に、など

読者へのメッセージ

日曜日の午後二時。西にまわる日ざしをながめて、あなたはなんとなく憂鬱になることはありませんか。こんなふうに。

やれやれ、もう休みはおわってしまうのか。

しようと思っていたことは山ほどあるのに、なにもしないうちに、あすはもう月曜日か。こうしてくりかえして人生はすぎていくのか。自分の生活に、いったい何の意味があるんだろう……。

そうなんです。私もそう思います。じつはこの本は、そのような日曜日の午後に生まれたのです。

ですから、できることなら、この本は日曜日の午後に読んでいただきたいと思います。

▲森本哲郎「ゆたかさへの旅」の序，原稿

■横書き原稿用紙を用いた例

o 1

a 宗教改革—その意義について

3年3組 b 武田義朗

c d 1517年10月31日，e ウィッテンベルク大学教授マルチン＝ルターは，ウィッテンベルク市の城内教会の扉に一枚の意見 g 書をはりだした。いわゆる h「95か条の意見書」である。これは，i 教皇レオ10世の免罪符販売に対して，自己の宗教的見解を95か条にまとめたもので，m「免罪符を所有しているから，必ず神に j 救われると信ずる者は，その教師たちとともに永久に呪われるであろう（p 32条）。」といった，ローマ教会の形式的な免罪観に対する非難が激しいことばでつづられている。

しかし，この段階ではルターはローマ教会との絶縁を意図していたわけではなかった。

20×20

①古谷先生

②みんみん蟬がわがもの顔に鳴く暑い毎日、③いかがお過ごしでしょうか。私はもちろん健康そのもの。夏太りでいよいよミゾブーとなっています。

④さて、⑤待望かつ恐怖の夏休みを迎えて、四日目にして早くも怠け病にかかってしまい、やらねばという気持ちだけで行動が伴わない状態です。意志が弱いというのでしょうね。まったくこの意志の弱さがたたって、一学期の成績は、これまでの最低で、とにかく目もあてられない結果でした。母から、中学生の時のほうがよく勉強していたと言われるぐらいですから、下がって当然かもしれません。しかし、担任の先生から、数学の先生が、あの子はもう伸びがとまったのではないかと言われたと聞いてショックを受けました。私だって、あの人ぐらいガリ勉すれば——と、いくらか自信があっただけに大ショックでした。しかし、落ちるところまで落ちてしまったのですから、これから、高校生活の残り半分で、じわじわはいあがり、ついには舞いあがろうと決意しています。先生のお心を明るくするようなお便りをさし上げられなくて——本当にすみません。

中学時代にバスケットに熱を入れすぎて、ちっとも本を読まなかった反動でしょうか、高校に入学してからこのかた、本の虫になって、今は漱石の「こ

■手紙文の基本形

1 前文（前文を省略してすぐ主文から入る場合→前略）

①頭語（書き出しのことば）……拝啓・拝復（返信）・謹啓（相手への呼びかけ）

②時候のあいさつ……新緑の候となりましたが～

③安否のあいさつ…相手＝先生にはお変わりもなく、お過ごしでございますか。

…自分＝私も元気でがんばっています。

（無沙汰のわび・感謝のことば等を加える場合あり）

…長い間ごぶさたして申しわけございません。

…先日はごちそうにあずかりありがとうございました。

2 主　文

④起辞（主文の書き出しことば）……さて・ところで・つきましては・ときに・さっそくながら

⑤本文……（手紙の主要内容）

3 末　文

⑥結びのあいさつ……まずは近況のご報告まで（健康を祈ることば・ことづてのことば等を加える場合あり）…ご自愛のほどお祈りいたします・末筆ながらご家族の皆様によろしく

⑦結語……敬具・かしこ〈女性〉・さようなら・ではまた・（前略の場合は）草々・早々

4 後　付

⑧日づけ（本文より一、二字下げて）昭和〇年〇月〇日

⑨署名（日づけの下か、その次の行に姓名とも書くのが正式）

⑩宛名

⑪敬称……様（殿・先生・君・兄・さん・御中〈団体〉）

⑫脇づけ（あらたまった場合に宛名の左下に書き添える敬語）足下・机下・侍史・みもとへ（に）〈女性〉・み前に〈女性〉

5 副　文（本文に書きもらしたことなど短く書き添える。）

追伸・追って・二伸・書き忘れましたが、などで書き出す。慶弔の手紙や目上の人への手紙では書かない。

■時候のあいさつ用語・用例集

新年＝謹賀新年・恭賀新年・賀正・迎春・頌春（しょうしゅん）

一月＝厳寒の候・厳冬・寒冷・寒風・寒月・寒気ことのほかきびしく・寒さひとしお身にしむ折から・新雪輝き、スキーの好季節となりましたが

二月＝春寒の候・余寒・残雪・立春・早春・立春とは申せ、なおきびしい寒さが続きますが・梅一輪一輪ほどのあたたかさとか申しますが

三月＝早春の候・春色・春雪・春暖・水ぬるむ・雪解け・春雨・寒さもゆるみ、ようやく春めいてまいりましたが・桜のつぼみが色づいてまいりました

四月＝陽春の候・春日・花ぐもり・春たけなわ・春宵一刻値千金・春眠暁を覚えずとか申しますが・桜花ほころびるころとなりました

五月＝新緑の候・惜春・若葉・薫風・初夏・青葉が目にしみる季節となりましたが・目に青葉山ほととぎす初がつおの好季節をむかえました

六月＝梅雨の候・入梅・短夜・梅雨空・梅雨晴れ・麦秋・田植え・衣更え・毎日うっとうしい天気が続きますが

七月＝酷暑の候・盛夏・炎暑・猛暑・星祭り・土用・夕立・夏休み・連日きびしい暑さが続きます・暑中お見舞い申し上げます

八月＝残暑の候・晩夏・立秋・入道雲・ひぐらしの声・秋立つとは申せ、残暑きびしき折から

九月＝初秋の候・秋色・秋涼・野分・秋晴れ・仲秋の名月・天高く馬肥ゆるの候となりました・草むらの虫の声もしげくなりましたが

十月＝秋冷の候・秋晴れ・秋雨・行楽の秋・実りの秋・味覚の秋・読書の秋・紅葉・朝夕めっきり寒くなりました・燈火書に親しむころとなりました

十一月＝晩秋の候・暮秋・初しぐれ・落葉・ゆく秋・霜枯れ・夜寒・ゆく秋の淋しさが身にしみるこのごろ

十二月＝師走の候・初冬・こがらし・霜夜・初雪・冬至・クリスマス・年の瀬・除夜・歳末ご多忙の折から・年の瀬もおしつまってまいりました

ころ」を読んでいます。漱石の作品すべてを読破するつもりなのです。いつも本に親しんでいるためでしょうか、中学時代は大嫌いだった国語が、今では大好きな教科となり、大学の志望も文学部か教育学部の文科系かにしようと迷っているくらいです。
夏休み中に一度先生のお宅をぜひお訪ねしたいと思っています。その折にはいろいろ悩みを聞いてくださいね。
⑥それではこのあたりで失礼します。きびしい暑さが続きますので、お体を大切にしてください。⑦さようなら
⑧八月二十四日　⑨溝口雅美
⑩古谷芳太郎⑪先生

▶正岡子規がロンドン留学中の夏目漱石にあてた手紙

封筒の書き方

①730-□□　③（切手）
②広島市西白島町一七の三
林雅子様

⑦緘
⑥五月二十日
④東京都杉並区戸山町二の五
⑤宮野英明
167

① 〈郵便番号〉算用数字で枠内に一字ずつはっきりと書く。色は青か黒がよい。
② 〈あて名〉住所よりもやや大きく、一、二字下げて書く。封筒の中央にバランスよく。
③ 〈切手〉表面の左上（横長形式の封筒では右上）にはる。
④ 〈自分の住所〉封筒の半分より少し高めの位置から書き始める。
⑤ 〈自分の名〉住所よりもやや大きめに書く。住所と名前は、封筒の中央か、中央より左にまとめて書く。
⑥ 〈日付〉封筒の右上の余白、または自分の名の上に書く。
⑦ 〈封字〉封をとじた印として「封」「緘」「〆」、またはシール・封印などを用いる。

はがきの書き方

簡単な用件や、第三者に見せてもよい内容のときには、はがきを用いる。
① 〈あて名〉上から切手の三分の二ぐらいの位置から書き始める。脇づけは普通つけない。
② 〈自分の住所〉切手の下に、あて名よりも小さく書く。
③ 〈通信欄〉はがきの表面は、下部$\frac{1}{2}$（横長に使うときは左側$\frac{1}{2}$）の範囲まで通信用に使うことができる。
④ 〈裏面〉上下左右に多少のゆとりをもたせ、バランスよく書く。ていねいなあいさつ文は不要。

④毎日暑い日が続いていますが、元気ですか。
当方は「夏休み」に入ったはずなのにクラブと補習で連日しぼられっぱなしです。
ところで、我校野球部がめでたくも県予選に優勝し、甲子園に出場することになりました。野球部の練習には一段と熱がこもっている様子です。
それで私も応援に参加したいと思うのですが、その節はお宅にもおじゃましたいと思います。
ではお会いできるのを楽しみに。
伯父さん、伯母さんにもよろしくお伝え下さい。

■文体の種類

種類		解説	文体例
文語体	和文体	**和文体** 平安時代の和文体が発達したもので、主として明治中期ごろまで用いられた。叙情的で流麗な文体。	母親の呼声しばしばなるを侘しく、詮方なさに一ト足二タ足ゑゝ何ぞいの未練くさい、思はく恥かしと身をかへして、かたかたと飛石を伝ひゆくに……『たけくらべ』(樋口一葉)
		雅俗折衷文体 中世以来の和漢混交文に俗語文体がまじった。会話の部分に俗語が用いられているのが多い。	「おいこら、起きんか、起きんか。」と沈みたる、然も力を籠めたる声にて謂へり。婦人は慌しく蹶起きて、急に居住ひを繕ひながら、「はい、」と答ふる……『夜行巡査』(泉鏡花)
		和漢混交文体 和文体と漢文訓読体のまじった文体。和文脈で漢語を使っている。明治期の美文に多い。	余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこのヨーロッパの新大都の中央に立てり。なんらの光彩ぞ、わが目を射むとするは。『舞姫』(森鷗外)
	漢文体	**漢文訓読体** 漢文の書き下し文のような文体。体言止め・対句法を用い、簡潔で力強く、明治期の評論などに多い。	何の目的ありて是の世に産出せられたるかは吾人の知る所に非ず、然れども生まれたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。『美的生活を論ず』(高山樗牛)
口語体		**言文一致体** 話しことばと書きことばの一致を目ざした文体。明治中期から発達し、今日の口語文体の基礎となった。	「母親さん、咽が涸いていけないから、お茶を一杯入れて下さいナ。」「アイヨ。」ト言ってお政は茶簞笥を覗き「ヲヤ〳〵茶碗が皆汚れてる……鍋。」『浮雲』(二葉亭四迷)
		欧文体 欧文の翻訳様式を取り入れた文体。抽象名詞が主語となる表現。長い修飾部が特徴。	武蔵野の美はたゞ其縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことに由て始めて獲られる。『武蔵野』(国木田独歩)
		口語文体 今日用いられている一般的な現代文。	その夜は寒かった。台湾でも高山の夜は冷える。彼は一度ならず……『谿間にて』(北杜夫)

■比喩

解説	文例
直喩(明喩) 他のものにたとえたことを「ごとし」「のようだ」等の語を用いて明示する表現。	窓を開くと街は日にさらされたボール紙のように色あせて見えた。 暗いはずの空は、真昼のごとく明るくなっていた。
隠喩(暗喩) 「のようだ」等の語を省略して「AはBだ」と言いなす表現。	私は組織の中の小さな歯車でしかなかった。 彼女は夜に咲いた白い花だ。
諷喩(寓喩) 言いたいことを表面に出さず、たとえを示して暗示する表現。	花より団子 人生は地獄よりも地獄的である。『侏儒の言葉』(芥川龍之介)
擬人法(活喩) 無生物を生物とし、人間でないものを人間と見たてる表現。	川面ではちらちらと陽光が躍っていた。 猫を呼んだが、彼女は知らん顔をして自分の背中をなめていた。

■文章の構成の型

種類	構成	解説
〔三段〕序破急	①序―導入―序論 ②破―展開―本論 ③急―結末―結論	能楽の法則による構成法。文章構成の基本的な型である。普通「序」と「結び」の部分は短い。
〔四段〕起承転結	①起―発端―序論 ②承―展開―説話 ③転―ヤマ場―論証 ④結―結末―結論	漢詩の絶句の作法による構成法。「起」は書き出しであり、「承」はこれを受けて内容を深め、「転」で変化させ、「結」でまとめる。
〔五段〕ソナタ形式	①序奏部―序論 ②呈示部―説話 ③展開部―論証 ④再現部―列叙 ⑤終尾部―結論	中国では、起→承→鋪→叙→結という。起承転結の変型と考えることもできる。

■論証

種類	解説	文例
帰納(きのう)法	個々の特殊的事実から一般的普遍的原理を導く方法。 ①②③ → 原理	①Aさんも風邪だ。 ②Bさんも風邪だ。 ③Cさんも風邪だ。 今、風邪がはやっているようだ。
演繹(えんえき)法	一般的普遍的原理から個々の特殊的事実を推論する方法。 原理 → ①②③	生物はみな死ぬ。 ①犬も死ぬ。 ②人も死ぬ。 ③鳥も死ぬ。
三段論法	一般的普遍的原理から新しい判断を導く演繹法の代表。二つの前提から一つの結論を導く方法。 A＝B ①大前提 C＝A ②小前提 ∴C＝B ③結論	①人間は死ぬものである。 ②ソクラテスは人間である。 ③故にソクラテスは死ぬ。
弁証法	二つの対立する考えを止揚して、高次元で統一する考えを導く方法。 正・反 →止揚→ 合	㊣原子力によって文明は発展した。 ㊫しかし原子力によって人類は滅亡の危機に瀕(ひん)している。 ㊰人類は原子力の安全性を確かめ、平和利用することによって文明をさらに発展させるべきだ。

■現代かなづかいの要領

（昭和21年11月16日内閣告示「現代かなづかい」をもとに口語文を書きあらわすかなづかいをまとめた。）

(1) 現代かなづかいは、だいたい、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の規則を示したものである。

(2) 現代かなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。

(3) 原文のかなづかいによる必要のあるもの、または変更しがたいものは除く。

(4) 一般的な原則

①ゐ・ゑ・をは、い・え・おと書く。ただし、助詞「を」はもとのままとする。

例 いど(井戸《ゐど》)、いる(ゐる)、こえ(声《こゑ》)、すえる(据ゑる)、うお(魚《うを》)

②くわ・ぐわは、か・がと書く。

例 かふん(花粉《くわふん》)、がいこく(外国《ぐわいこく》)、いちがつ(一月《いちぐわつ》)

③ぢ・づは、じ・ずと書く。

例 ふじ(藤《ふぢ》)、はじる(恥ぢる)、しずかに(静《しづ》かに)

ただし、

(ア)二語の連合によって生じたぢ・づは、ぢ・づと書く。

例 はなぢ(鼻血《はなぢ》)、みかづき(三日月《みかづき》)

(イ)同音の連呼によって生じたぢ・づは、ぢ・づと書く。

例 ちぢみ(縮み)、つづみ(鼓)

④ワ・イ・ウ・エ・オに発音されるは・ひ・ふ・へ・ほは、わ・い・う・え・おと書く。ただし、助詞「は」「へ」はもとのままとする。

例 かわ(河《かは》)、はい(灰《はひ》)、あらう(洗ふ)、さえ(さへ)、かお(顔《かほ》)

⑤オに発音されるふは、おと書く。

例 あおい(葵《あふひ》)、たおす(倒《たふ》す)

(5) 長音の書き方

①ア列長音は、ア列のかなにあをつけて書く。

例 おかあさん、ああ

②イ列長音は、イ列のかなにいをつけて書く。

例 おじいさん、きい(奇異)

③ウ列長音は、ウ列のかなにうをつけて書く。

例 ゆうがた(夕方)

④エ列長音は、エ列のかなにえをつけて書く。

例 ねえさん(姉さん)

⑤オ列長音は、オ列のかなにうをつけて書くことを本則とする。

例 ちゅうおう(中央)

⑥ア列拗音の長音は、ア列拗音のかなにあをつけて書く。

例 きゃあきゃあ

⑦ウ列拗音の長音は、ウ列拗音のかなにうをつけて書く。

例 じゅうなん(柔軟)

⑧オ列拗音の長音は、オ列拗音のかなにうをつけて書くことを本則とする。

例 じゅぎょう(授業)

(6) 拗音を表すには、や・ゆ・よを用い、促音を表すには、つを用い、いずれもなるべく右下に小さく書く。

例 きゅうりょう(丘陵)、ちょう(蝶)、りっぽう(立法)

注意 「クヮ・カ」「グヮ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。

■新旧かなづかい対照表

（基本的な語の一例）

	漢字	歴史的かなづかい	現代かなづかい
ゐ・ゑ・を ← い・え・お	藍	あゐ	あい
	参る	まゐる	まいる
	植える	うゑる	うえる
	御苑	ぎよゑん	ぎょえん
	教える	をしへる	おしえる
	老翁	らうをう	ろうおう
くわ・ぐわ ← か・が	結果	けつくわ	けっか
	会議	くわいぎ	かいぎ
	瓦礫	ぐわれき	がれき
	元利	ぐわんり	がんり
ぢ・づ ←	草鞋	わらぢ	わらじ
	持続	ぢぞく	じぞく

じ・ず	鶉	うづら	うずら
	水	みづ	みず
ハ行→ワ行	琵琶	びは	びわ
	庭	には	にわ
	鶯	うぐひす	うぐいす
	言訳	いひわけ	いいわけ
	舞う	まふ	まう
	結う	ゆふ	ゆう
	家	いへ	いえ
	拾え	ひろへ	ひろえ
	匂い	にほひ	におい
	多い	おほい	おおい
長音関係 (1)	桜花	あうくわ	おうか
	扇	あふぎ	おうぎ
	笄	かうがい	こうがい
	太閤	たいかふ	たいこう
	挿話	さふわ	そうわ
	肖像	せうざう	しょうぞう
長音関係 (2)	呼吸	こきふ	こきゅう
	晩秋	ばんしう	ばんしゅう
	柔和	にうわ	にゅうわ
	留意	りうい	りゅうい
	故郷	こきゃう	こきょう
	唱歌	しやうか	しょうか
	尿	ねう	にょう
	豹	へう	ひょう
	冥加	みやうが	みょうが
	領土	りやうど	りょうど

■送り仮名のつけ方

（昭和48年6月18日内閣告示された「送り仮名の付け方」をもとに要約・抜粋したものである。一部表記を改めた。）

◎本文の構成

- 単独の語
  - 活用のある語 ｛通則1・通則2・通則3
  - 活用のない語 ｛通則4・通則5
- 複合の語 ｛通則6・通則7
- 付表の語
  - 1 送りがなをつける語に関するもの
  - 2 送りがなをつけない語に関するもの

◎用語の意義

単独の語 漢字の音または訓を単独に用いて、漢字一字で書き表す語。

複合の語 漢字の訓と訓、音と訓などを複合させ、漢字二字以上を用いて書き表す語。

付表の語 「当用漢字音訓表」の付表に掲げてある語のうち、送りがなの付け方が問題となる語をいう。

活用のある語 動詞・形容詞・形容動詞をいう。

活用のない語 名詞・副詞・連体詞・接続詞をいう。

本則 送りがなの付け方の基本的な法則と考えられるものをいう。

例外 本則には合わないが、慣用として行われていると認められるものであって、本則によらず、これによるものをいう。

許容 本則による形とともに、慣用として行われていると認められるものであって、本則以外に、これによってよいものをいう。

○各通則において、送りがなの付け方が許容によることのできる語については、本則・許容のいずれに従ってもよいが、個々の語に適用するに当たって、許容に従ってよいかどうか、判断し難い場合には、本則によるものとする。

本文

単独の語

I 活用のある語

通則1

本則 活用のある語（通則2を適用する語を除く。）は、活用語尾を送る。

〔例〕 憤る　承る　書く　実る　催す

例外 (1) 語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。

〔例〕 著しい　惜しい　悔しい

(2) 活用語尾の前に「か」、「やか」、「らか」を含む形容動詞は、その音節から送る。

〔例〕 静かだ　穏やかだ　明らかだ

(3) 次の語は、次に示すように送る。

味わう　哀れむ　異なる　逆らう　和らぐ　明るい　小さい　少ない

許容 次の語は、（　）の内に示すように、活用語尾の前の音節から送ることができる。

表す（表わす）　著す（著わす）　現れる（現われる）　行う（行なう）　断る（断わる）　賜る（賜わる）

（注意） 語幹と活用語尾との区別がつかない動詞は、例えば、「着る」、「寝る」、「来る」などのように送る。

通則2

本則 活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語の送りがなの付け方によって送る。（含まれている語を〔　〕の中に示す。）

〔例〕

(1) 動詞の活用形またはそれに準ずるものを含むもの。

浮かぶ〔浮く〕　生まれる〔生む〕　押さえる〔押す〕　捕らえる〔捕る〕　聞こえる〔聞く〕　起こる〔起きる〕　落とす〔落ちる〕　暮らす〔暮れる〕　当たる〔当てる〕　終わる〔終える〕　変わる〔変える〕　集まる〔集める〕

(2) 形容詞・形容動詞の語幹を含むもの。

重んずる〔重い〕　悲しむ〔悲しい〕　確かめる〔確かだ〕　柔らかい〔柔らかだ〕　清らかだ〔清い〕

(3) 名詞を含むもの

汗ばむ〔汗〕　先んずる〔先〕　春めく〔春〕　男らしい〔男〕

許容 読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について、次の（　）の中に示すように、送りがなを省くことができる。

〔例〕 浮かぶ（浮ぶ）　生まれる（生れる）　押さえる（押える）　捕らえる（捕える）

（注意） 次の語は、それぞれ〔　〕の中に示す語を含むものと考えず、通則1によるものとする。

明るい〔明ける〕　荒い〔荒れる〕　悔しい〔悔いる〕　恋しい〔恋う〕

II 活用のない語

通則3

本則　名詞（通則4を適用する語を除く。）は、送りがなを付けない。

〔例〕　月　鳥　花　山　男　女　彼

例外

(1)　次の語は、最後の音節を送る。

辺り　哀れ　勢い　幾ら　後ろ　傍ら　幸い　幸せ　互い　便り　半ば　情け　斜め　独り　誉れ　自ら　災い

(2)　数をかぞえる「つ」を含む名詞は、その「つ」を送る。

〔例〕　一つ　二つ　三つ　幾つ

通則4

本則　活用のある語から転じた名詞及び活用のある語に「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは、もとの語の送りがなの付け方によって送る。

〔例〕

(1)　活用のある語から転じたもの。

動き　願い　晴れ　当たり　代わり　答え　問い　祭り

(2)　「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いたもの。

正しさ　明るみ　惜しげ

例外　次の語は、送りがなを付けない。

謡　虞　趣　氷　印　頂　帯　畳　卸　煙　恋　志　次　隣　富　恥　話　光　舞　折　係　掛（かかり）　組　肥　並（なみ）　巻　割

（注意）　ここに掲げた「組」は、「花の組」、「赤の組」などのように使った場合の「くみ」であり、例えば、「活字の組みがゆるむ。」などとして使う場合の「くみ」を意味するものではない。「光」、「折」、「係」なども、同様に動詞の意識が残っているような使い方の場合は、この例外に該当しない。従って、本則を適用して送りがなを付ける。

許容　読み間違えるおそれのない場合は、次の（　）の中に示すように、送りがなを省くことができる。

〔例〕　曇り（曇）　当たり（当り）

通則5

本則　副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。

〔例〕　必ず　更に　少し　既に　再び　全く　最も　去る　及び

例外

(1)　次の語は、次に示すように送る。

明くる　大いに　直ちに　並びに

(2)　次の語は、送りがなを付けない。

又

(3)　次のように、他の語を含む語は、含まれている語の送りがなの付け方によって送る。（含まれている語を〔　〕の中に示す。）

〔例〕　併せて〔併せる〕　従って〔従う〕　例えば〔例える〕

複合の語

通則6

本則　複合の語（通則7を適用する語を除く。）の送りがなは、その複合の語を書き表す漢字の、それぞれの音訓を用いた単独の語の送りがなの付け方による。

〔例〕

(1)　活用のある語

書き抜く　流れ込む　申し込む

(2)　活用のない語

石橋　竹馬　後ろ姿　花便り

許容　読み間違えるおそれのない場合は、次の（　）の中に示すように、送りがなを省くことができる。

〔例〕　書き抜く（書抜く）　申し込む（申込む）

（注意）「こけら落とし（こけら落し）」、「さび止め」、「洗いざらし」、「打ちひも」のように、前、もしくは後ろの部分をかなで書く場合は、他の部分については、単独の語の送りがなの付け方による。

通則7

複合の語のうち、次のような名詞は、慣用に従って、送りがなを付けない。

〔例〕

(1)　特定の領域の語で、慣用が固定していると認められるもの。

ア　地位・身分・役職等の名。

関取　頭取　取締役　事務取扱

イ　工芸品の名に用いられた「織」、「染」、「塗」等。

《博多》織　《型絵》染　《鎌倉》彫　《備前》焼

ウ　その他

書留　踏切　請負　割引　組合

(2)　一般に、慣用が固定していると認められるもの。

木立　子守　物語　織物　建物

（注意）

(1)　「《博多》織」、「売上《高》」などのようにして掲げたものは、《　》の中を他の漢字で置き換えた場合にも、この通則を適用する。

(2)　通則7を適用する語は、例として挙げたものだけで尽くしてはいない。従って、慣用が固定していると認められる限り、類推して同類の語にも及ぼすものである。通則7を適用してよいかどうか判断し難い場合には、通則6を適用する。

付表の語

「当用漢字音訓表」の「付表」に掲げてある語のうち、送りがなの付け方が問題となる次の語は、次のようにする。

1　次の語は、次に示すように送る。

浮つく　お巡りさん　差し支える　五月晴れ　立ち退く　手伝う　最寄り

なお、次の語は、（　）の中に示すように、送りがなを省くことができる。

差し支える（差支える）　五月晴れ（五月晴）　立ち退く（立退く）

2　次の語は、送り仮名を付けない。

息吹　時雨　築山　名残　雪崩　吹雪　迷子　行方

○歴史的仮名遣い

江戸時代、契沖が定家仮名遣いに対して、『和字正濫鈔』の中で、平安時代初期の文献を証として、新しい仮名遣いを唱えた。伊呂波四十七字中の「いひゐ」「えゑへ」「をお」を、古代の発音に基づいてその使い分けを明らかにした。明治以降、普及した。

■外来語の書き表し方

（昭和29年3月15日付国語審議会報告「外来語の表記」をもとにまとめたものである。）

○ここでは欧米語から国語に取り入れられたことばを外来語という。外来語は大別して次の三つに分けられる。

(1)その語の歴史が古く、国語に融合し、外来語と感じられないもの、たとえば、たばこ、かっぱ、きせるなど。

(2)外国語という感じをなお多分にとどめているもの、たとえばオーソリティ、フィアンセ。

(3)すでに国語として熟しているが、なお外来語という感じは残っているもの、たとえば、オービー、ラジオ。

この表記については、

(イ)国語化した書き表し方の慣用が固定しているものは、これを採る。

(ロ)その書き表し方の慣用が固定せず、二様にわたるものについては、原語の発音として、われわれが聞き取る音を基準として、なるべく平易なほうを採る。

○外来語表記の原則

1 外来語は、原則としてかたかなで書く。

2 慣用の固定しているものは、これに従う。

ケーキ、リュックサック

3 はねる音は「ン」と書く。

テンポ、トランク

4 つまる音は、小さく「ッ」を書き添えて示す。

コップ、カット

5 原語のつづりに引かれて、「ン」「ツ」を添えて書き表したものは「ン」「ツ」を使わない。

コミュニケ（コンミュニケ）

アクセサリー（アクセッサリー）

6 拗音は、小さく「ャ」「ュ」「ョ」を書き添えて示す。

ジャズ、シュークリーム

7 長音を示すには、長音符号「ー」を添えて示す。なお、原音における二重母音の「エイ」「オウ」は長音とみなす。（エイト、ペイントは例外）

ボール（ボウル、ボオル）

8 イ列・エ列の音の次の「ア」音は、「ヤ」と書かずに「ア」と書く。

ピアノ、ヘアピン（ダイヤ、タイヤ、ワイヤ、ベニヤは例外）

9 原音における「トゥ」「ドゥ」の音は、「ト」「ド」と書く。

ゼントルマン、ドライブ、ドラマ（ツーピース、ツリー、ズック、ズロースは例外）

10 原音における「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の音は、なるべく「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。ただし、原音の意識が残っているものは、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」と書いてもよい。（ファインプレー、ヴェールなど）

プラットホーム、ホルマリン、バイオリン、ビタミン、ベランダ

11 原音における「ティ」「ディ」の音は、なるべく「チ」「ジ」と書く。ただし、原音の意識が残っているものは、「ティ」「ディ」と書いてもよい。（ティー、ビルディング）

チーム、チンキ、ラジオ

12 原音における「シェ」「ジェ」の音は、なるべく「セ」「ゼ」と書く。ただし、原音の意識が残っているものは、「シェ」「ジェ」と書いてもよい。（シェード、ページェント）

セパード、ミルクセーキ

13 原音における「ウィ」「ウェ」「ウォ」の音は、なるべく「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書く。ただし、「ウ」を落とす慣用のあるものは、これに従う。（サンドイッチ、スイッチ）

ウイスキー、ウエーブ

14 原音における「クァ」「クィ」「クェ」「クォ」の音は、なるべく「カ」「クイ」「クエ」「コ」と書く。ただし、原音の意識が残っているものは、「クァ」「クィ」「クェ」「クォ」と書いてもよい。

レモンスカッシュ、クイズ（スリークォーター、クォータリー）

15 Xを「クサ」「クシ」「クス」「クソ」と発音する場合は、「キサ」「キシ」「キス」「キソ」と書かないで、なるべく「クサ」「クシ」「クス」「クソ」と書く。

タクシー、ボクシング（エキストラ、テキストなどは例外）

16 原語のつづりの終わりの—er、—or、—ar、は、長音符号「ー」を用いる。ただし、これを省く慣用のあるものはつけなくてもよい。（ハンマ、スリッパ、ドア）

ライター、エレベーター

17 語末（特に元素名等）の—umは「ウム」と書く。

アルミニウム、ラジウム（アルバム、スタジアムは例外）

18 原音における「テュ」「デュ」の音は、「チュ」「ジュ」と書く。

スチュワーデス、ジュース（プロデューサーは例外）

19 原音における「フュ」「ヴュ」の音は、「ヒュ」「ビュ」と書く。

ヒューズ、レビュー

○注 外来語を書き表す場合には、「ヰ」「ヱ」「ヲ」「ヅ」「ヂ」は使わない。

■文学作品中の外国名漢字表記例

○アジア（亜細亜）
○アフリカ（阿弗利加）
○アメリカ（亜米利加）
○イギリス（英吉利）
○イタリア（伊太利）
○インド（印度）
○オーストラリア（濠太剌利）
○オーストリア（墺太利）
○オランダ（和蘭）
○スペイン（西班牙）
○デンマーク（丁抹）
○ドイツ（独逸）
○トルコ（土耳古）
○フィリピン（比律賓）
○フランス（仏蘭西）
○ペルシア（波斯）
○ポルトガル（葡萄牙）
○ヨーロッパ（欧羅巴）
○ロシア（露西亜）

■符号のつけ方

・（中点・黒丸）
①物を並列する場合
桃・ばらを買う。
②外来語、日付などを表す場合
大正五・六・三

（　）（かっこ）
①ことばに説明を加える。
中宮定子（藤原道隆女）と清少納言。

「　」（かぎかっこ）
①会話の場合
「お体のぐあい、どうですか」
②あることばを注目させる場合
これが彼のいう「自由」だ。

『　』（二重かぎ）
①かぎかっこの中でかぎかっこを使う場合
「原君は『退部する』と言った」と主将が話した。
②書名・雑誌名などを示す場合
『草枕』『週刊朝日』

〜（波形）
①時・所などの「…から…まで」を示す場合
朝七時〜十時
日本〜ハワイの飛行距離

＝（つなぎ）
①外国の人名の場合
ルイ＝ナポレオン

－（つなぎ線）
①外国の地名の場合
サン－フランシスコ

……（点線）
①省略する場合
赤、青、白……などの光。
②余韻をもたせる場合
そして再び還らなかった……。

——（ダッシュ）
①言い換える場合
昭和二〇年—終戦の年—ぼくは生まれた。
②間を置く場合
彼はといえば—蒼白であった。

？（疑問符）
①疑ったり、質問する場合
昨日は何をしていたの？

！（感嘆符）
①呼びかけや命令、感嘆する文の場合
ねえ、山田君！　撃て！

■踊り字の用い方

○踊り字とは同字の繰り返しを示す記号である。古い歴史を持つものであるが今日では、慣用的に用いられる一部を除いては、使用しないほうが望ましい。

々（同の字点、漢字がえし）
①漢字一字の繰り返しに用いる。
山々　人々

ゝ（ひらがなかえし）
①かな一字の繰り返しに用いる。
まゝ　やゝ

〱（大がえし　くの字点）
①かな二字の繰り返しに用いる。
くれ〴〵も

〻（二の字点）
①特定の漢字に用いる。
屢〻　稍〻

■句読点のつけ方

○単語や文をくぎり、文章をわかり易く、読み易くする符号を句読点といい、その使い方の決まりを句読法という。

○句点　狭義の句点「。」と、広義の句点（感嘆符「！」や疑問符「？」）がある。文の意味の切れるところに打つ。
本を読む。花がきれいだ。

○読点　狭義の読点「、」と、広義の読点（黒丸「・」や点線「……」）がある。
1　主語を示す「は」「も」などの後に用いる。
秋は、何も言うことがない。
2　読点がないと誤解のおそれがあるとき、用いる。
私と、美術大学に行った吉村さんは入賞した。
3　並列するものを挙げるときに用いる。
空、山、川、海
4　文の初めに置く接続詞、および副詞のあとに用いる。
だが、二度と彼は生きてもどらなかった。
5　条件や限定を表す語句のあとに用いる。
あなたさえうんと言えば、みんなが幸福になれるのに。
6　体言を直接修飾する語句の後には、原則として用いない。
コペルニクス的転回とは、意見や説をすっかり変えてしまうことをいう。

■数字の書き表し方

○たて書きの場合
①原則として、漢数字を用いる。
一億三千万六千人
②十、百、千、十億、百億は一を省略し、一万、一千億、一兆は省略しない。
③大きな数字を示す場合には、三ケタごとに位取りの点を置く。
④概数を示すときは、二、三人、五、六百人のように書く。
⑤統計的な数字、年号、西暦は次のように略記する。
二〇・五パーセント
大正三・七・一一　一九三二年
⑥金額などを書く場合は、壱、弐、拾、阡という特別な漢字を用いる時がある。
⑦十、二十、三十の代わりに一〇、廿、卅は用いない。

○横書きの場合
①原則として，アラビア数字を用いる。
「万，億，兆」は漢数字で入れる。１億2000万6000人
②小数点はカンマを用いない。6.8　0.03
③大きな数字は次のように書く。
8,000　5,836,274　１兆6,000万
④日時，電話番号などは略記する。
昭和29.9.11　7:25　(0822)28-5174
⑤概数は「—」や「〜」を使って書く。2—3日　2〜3日
⑥次のような場合は漢数字を用いる。
a固有名詞　八戸　六甲山　四国
b貨幣，紙幣　百円玉　一万円札
c和語の数詞　一つ　二月
d慣用的な語　三々五々　一日千秋
eその他　一般に　二者択一

漢字の構成

〈漢字の性格〉

表意文字　世界の文字は、表音文字（一字だけで意味を表すことなく、音声だけを表す文字）と表意文字（一字が一定の意味を表す文字）とに分けられる。仮名やアルファベットが前者であり、漢字が後者である。

単音節　漢字は一字一音節で一つの意味を表す。「サン」という一音節が「やま」という意味を持つ一語であり、それを「山」という一字で表す。

形・音・義　漢字は形・音・義から成り立っている。

山（やまの形）　サン　やま
川（かわの形）　セン　かわ

このうち音は、時代の経過につれてかなり変化しているが、形と義（意味）にはそれほど変化はなく、昔とほぼ同じ字体で意味が表現されている。古代に書かれた『詩経』や『論語』が現代でも読解できるのは、そのためである。

〈漢字の特徴〉

語順　漢語には、語尾変化や活用、テニヲハなどがなく、ただ語の排列順序によって意味の違いを表す。

川清　川が清む
清川　清んだ川

声調　漢字には、音が同じで意味の違うものが多いため、平（平らな調子）、上（のぼり調子）、去（くだり調子）、入（つまる調子）の四つの声調によって、意味の違いを明らかにする。ただ、現代中国語（普通話）の四声では、入声がなくなり、平声が一声と二声に分かれ、上声が三声、去声が四声となっている。

第一声
第四声
第二声
第三声
5 4 3 2 1

mā 媽（おかあさん）
má 麻（あ　さ）
mǎ 馬（う　ま）
mà 罵（ののしる）

〈漢字の造字法と運用法（六書）〉

後漢の許慎は『説文解字』（漢字一字ずつの形・音・義を解説した、中国最初の字書）の序文で、あわせて六種の造字法・運用法（六書）を説明しているが、その要点は次のようである。

	種類	解説	実例
造字法 第一次（文）	象形	物の形に象ったもの。象形・指事の方法で作られたものを「文」とよぶ。	（山）（川）（木）（魚）（日）（月）
	指事	一・二・三・上・下のように、抽象的な事柄を形の上に表したもの。	（上）（中）（下）（本）（末）（刃）
造字法 第二次（字）	会意	既成の文字を組み合わせて、新しい意味を示したもの。会意・形声の方法で作られたものを「字」とよぶ。	木＋木＋木＝森（木がたくさん生えている所） 人＋言＝信（人間の言葉は信であるの意）
	形声	形（意味）を表す文字と、声（音声）を表す文字を組み合わせたもの。現在ある漢字の八割以上を占める。	氵（水）＋工＝江（コウとよばれる川の意） 氵（水）＋可＝河（カとよばれる川の意）
運用法	転注	本義と関連のある別の意味に利用する方法。仮借とともに、数の限られている漢字を広く利用するための方法。	令（いいつける→長官）命令する意から、それをする人、つまり長官の意に使用する。
	仮借	いわゆる「あて字」で、ある字の音だけを借りて、他の意味に転用する方法。	來（ムギ→来ル）本義のムギがクルと同音のために転用。（やがて來にはムギの意がなくなり、麦の字を作ってムギを表した。）

国字　日本で作られた漢字のことであり、ほとんどが会意文字。多くは訓だけで音がない。

峠（とうげ）・凪（なぎ）・辻（つじ）・笹（ささ）・躾（しつけ）・苅（かる）・榊（さかき）・樫（かし）

〈字体の変遷〉

中国最古の文字は、十九世紀の末に殷墟から発見された甲骨文字であるが、周・秦・漢と、社会情勢が変化するにつれて、字体も変遷し、現在は簡体字にまで至っている。

字体	時代	解説	実例
甲骨文	殷	亀の甲や獣の骨に刻みつけられた、卜いのことば（卜辞）を記した文字。河南省安陽にある殷帝国の跡から発見された。	
金文	殷末・周	鐘・武器・鼎などの青銅器に刻みつけられている文字。	
古文 大篆（籀文）	戦国時代	古文は中国の東部で、大篆（籀文）は西部、つまり秦の地で行われた文字。籀文とは、周の史官の籀が考案した字体と伝えられることによる呼び名。	
小篆	秦	始皇帝の天下統一により、宰相の李斯が大篆および古文を整理統一した字体。	
隷書	漢・秦	小篆をさらに簡略化したもの。天下統一によって増加した官獄の事務を、隷人（下級官吏）を使って迅速に処理するために使い易くした字体。	馬
楷書	後漢以後	隷書をさらに簡潔にしたもので、字画を正しくきちんと書くことから楷書という。正書・真書ともよばれる。	馬

行書(ぎょうしょ)	後漢以後	楷書の字画を少しくずしたもの。	馬
草書	秦末以後	小篆・隷書をくずしたもの。また行書をさらにくずしたものともいう。	馬
簡体字	中華人民共和国	漢字の普及を目的として、思いきって簡略化したもので、略字ではなく正字として扱われている。	马

〈簡体字の簡略法〉

①発音を表す部分を共通なものに簡略化する。
艺(藝)・忆(憶)・亿(億)……いずれも乙(yì)と発音
钟(鐘)・种(種)・肿(腫)……いずれも中(zhōng)と発音

②同音の字にかえる。
里(裏)・谷(穀)・几(幾)・刮(颳)・志(誌)

③民間の略字を採用する。
头(頭)・对(對)・当(當)・观(觀)・乱(亂)

④草書体を採用する。
书(書)・为(為)・东(東)・学(學)・兴(興)

⑤古代の字を採用する。
云(雲)・万(萬)・众(衆)・丰(豐)・干(幹)

⑥扁(へん)や旁(つくり)を簡単にする。
说(說)・银(銀)・结(結)・践(踐)・坚(堅)

⑦字体の一部を省略する。
习(習)・产(産)・开(開)・离(離)・寻(尋)

⑧意味を考慮して新しい字を作る。
阴(陰)・阳(陽)・孙(孫)・尘(塵)・宝(寶)

なお一九七七年には、中国では第二次漢字簡化方案を発表し、さらに簡素化をはかっている。例えば病は疒に、道は辺に、私は厶、泰は太、舞は午となっている。

〈漢字の音訓〉

日本にはもともと字がなかったので、中国から漢字を借りて利用した。初めは「音」によって利用していたが、次第に漢字一字ずつに日本語の訳をあてはめていった。こうしてできたものが「訓」である。以来、日本人は、漢字を「音」「訓」併用して使ってきたが、その「音」には、中国の時代や地域によって違いがあり、また「訓」のつけ方にも幾通りかあった。

種類		解説	実例
音	呉音	主に奈良時代に日本に入ってきた音で、六・七世紀の南朝(揚子江下流地方〈呉〉)の音。(南方音)	経文(キョウ)・外道(ゲ) 修行(ギョウ)・頭痛(ズ)
	漢音	平安時代に遣唐使や留学生によって伝えられた九・十世紀の唐都長安付近の音。(北方音)	経書(ケイ)・内外(ガイ) 旅行(コウ)・先頭(トウ)
	唐宋音	鎌倉・室町時代の禅僧・商人らによって伝えられた宋・元代の音。	看経(キン)・外郎(ウイロウ) 行脚(アン)・饅頭(ジュウ)
	慣用音	漢字を誤読したものが、そのまま定着して一般に通用するようになったもの。	消耗(モウ)(正しくはコウ) 漁師(リョウ)(正しくはギョ)
訓	正訓	その漢字に相当する日本語訳をつけたもの。	日(ひ)・月(つき)・山(やま) 川(かわ)・雨(あめ)・魚(うお) 馬(うま)・足(あし)・手(て)
	義訓	個々の漢字の意味にこだわらないで、その熟語全体の意味によってつけたもの。	七夕(たなばた)・海苔(のり) 東風(こち)・東雲(しののめ) 長閑(のどか)・蚊帳(かや)
	国訓	漢字本来の意味とは関係なく、日本語の訳をあてたもの。	柏(かしわ)・鮨(すし)・椿(つばき)

〈熟語の読み方〉

音読み(音・音) 牧場(ボクジョウ)・草木(ソウモク)・学校(ガッコウ)・家庭(カテイ)・世界(セカイ)
訓読み(訓・訓) 牧場(まきば)・草木(くさき)・青空(あおぞら)・野原(のはら)・山川(やまかわ)
重箱(じゅうばこ)読み(音・訓) 新芽(シンめ)・素顔(スがお)・役場(ヤクば)・客間(キャクま)・仕業(シわざ)
湯桶(ゆとう)読み(訓・音) 合図(あいズ)・身分(みブン)・手本(てホン)・湯気(ゆゲ)・消印(けしイン)

〈主要部首〉

偏(へん)

部首	名称	古文字	意味	例字
亻	にんべん		人の身体の形。ひと。	仁・信
口	くちへん		孔(あな)の形。口、ことば、ひと。	叫・史
土	つちへん		盛った土の形。土壌、大地。	地・坑
女	おんなへん		身体のしなやかな女がひざまずいている形。女性。	好・婦
子	こへん		小児の形。	学・孫
山	やまへん		高く聳(そび)える山の形。	岳・峰
彳	ぎょうにんべん		道の形。一説に、股(もも)・脛・足の形。	往・待
忄(心)	りっしんべん		心臓の形。こころ、まんなか。	志・快
扌(手)	てへん		手の形。手に持つ。	担・拍
犭(犬)	けものへん		犬の形。	狩・猛
阝(阜)	こざとへん		石のない土山の形。大きな丘。	陸・険
氵(水)	さんずい		水の流れる形。	江・海
日	にちへん		太陽の形。中の印は充実の意を示す。	早・明
月	つきへん		月の形。中の印は日字の場合と同じ。	朗・望
月(肉)	にくづき		切り離した獣肉と、その筋のある形。	肝・胃
木	きへん		木の枝・幹・根の形。	本・松
火	ひへん		火のもえている形。	炎・炊
牜(牛)	うしへん		牛の角と頭とを後から見た形。	牧・牲
王(玉)	たまへん		曲(まが)玉の連なった形。	珍・珠

部首	名称	字源	例
田	たへん	たんぼの形。	男・畝
目	めへん	目の形。	看・眼
石	いしへん	大岩から分かれた小石の形。	岩・砂
(示)ネ	しめすへん	犠牲を台の上にのせて神に献ずる形。	神・祈
禾	のぎへん	穂の垂れた稲の形。	秋・穀
米	こめへん	もみがらをやぶって出した粒の形。	粒・精
糸	いとへん	何本かの糸をよりあわせた形。	素・紛
羊	ひつじへん	羊の頭角と尾の形。	美・義
耳	みみへん	耳の形。	聞・聖
舟	ふねへん	丸木舟の形。⺊は転覆防止用の支え。	航・船
虫	むしへん	蛇の形。後に「むし」の意に使われるようになった。	蚊・蜜
(衣)ネ	ころもへん	着物の衿(えり)の形。	裁・装
角	つのへん	獣の角の生えはじめの形。	触・解
言	ごんべん	口から出る心(ことば)の意。辛(辛)は音を表す。	詩・説
豆	まめへん	たかつきの形。	豊・豈
貝	かいへん	左右に開いた貝がらの形。貨幣。	財・貨
(足)⻊	あしへん	膝(ひざ)から下全部の形。	跡・路
車	くるまへん	車の形。上は車全体、下は車輪だけを表したもの。	軽・輪
金	かねへん	土の中に金が輝いている形。𠆢は音を表す。	銀・鏡
(食)飠	しょくへん	食器に盛られた食物を食べる形。	飯・飢
馬	うまへん	馬の形。	駒・騎
魚	うおへん	魚の形。	鯉・鯨
鳥	とりへん	鳥の形。	鳴・鶏
歯	はへん	口の中に並んでいる歯の形。止(止)は音を表す。	齢・齔

旁(つくり)

部首	名称	字源	例
刂(刀)	りっとう	刀の形。	刃・切
力	ちから	腕の筋肉に力の入っている形。	加・助
又	また	右手の形。「また」は借用。	友・受
彡	さんづくり	はけ目の形。毛のはけで画いた形。	形・彩
阝(邑)	おおざと	諸侯の領国の意。村里。	邦・郡
寸	すん	手くびの下一寸の所を示す意。	射・封
戈	ほこづくり	ほこの形。	戦・戒
斤	おのづくり	柄(え)の曲がった斧の形。	断・折
殳	るまた	杖を持って人を遠ざける形。つえぼこ。	殺・設
見	みる	意味を表す目と、音を表す儿(けん)とから成る。	視・観
頁	おおがい	人のかしらの意。上部はかしらで、下部は体。	須・項

冠(かんむり)

部首	名称	字源	例
艹(艸)	くさかんむり	草の生えている形。屮は草木が初めて生えた形。	花・草
宀	うかんむり	四方に屋根が深くたれている形。	宇・家
耂(老)	おいかんむり	年をとって毛の変わった人の意。	考・者
癶	はつがしら	両足を左右にそむき開いた形。そむく。行く。	発・登
穴	あなかんむり	ほらあなの意。八(八)(けつ)は音を表す。	空・突
罒(网)	あみがしら	あみの形。	罪・置
雨	あめかんむり	雲から雨のふる形。	雪・雲

脚(あし)

部首	名称	字源	例
儿	ひとあし	人の形。一説に、行歩する人の形。	元・兄
⺗(心)	したごころ	(心に同じ)	志・慕
灬(火)	れんが・れっか	(火に同じ)	熱・烈
皿	さら	皿の形。	盆・盛

垂(たれ)

部首	名称	字源	例
厂	がんだれ	がけの形。	厚・原
广	まだれ	がけの上に家の建っている形。	広・床
尸	しかばね	人が首をふせ背をまげて臥す形。しかばね。	展・層
戸	とだれ	門の片とびらの形。	扇・房
疒	やまいだれ	人が病んで物によりかかる形。また、人が病み床に在る形。	病・疲

構(かまえ)

部首	名称	字源	例
匚	はこがまえ	物を入れる箱の形。	巨・匠
匸	かくしがまえ	物を隠し蔵する所の形。乚は蔵する所、一は覆い。	匹・匿
囗	くにがまえ	四方をひとめぐりした形。	国・囲
行	ゆきがまえ	十字路の形。	街・術
門	もんがまえ	門の形。	間・開

繞(にょう)

部首	名称	字源	例
攵(攴)	ぼくにょう	かるくたたく形。	教・改
廴	いんにょう(えんにょう)	ゆっくり歩く意。彳が引きのばされた形で行ったり止まったりする意。	廷・建
辶(辵)	しんにょう	彳十止の会意字。	道・送
鬼	きにょう	人が死者の頭(つくりもの)をかぶり、霊座にしゃがんでいる形。	魂・魅

書き誤りやすい漢字

一般に書き誤りやすい漢字を「形・音・意味・用例」の順に示し、五十音順に配列した。

漢字（音）意味	用例
哀（アイ）かなしい	人生の悲哀を感じる。
衰（スイ）おとろえる	衰弱がはなはだしい。
意（イ）こころ	意志の固い人。
竟（キョウ）おわる	畢竟むりな話だ。
遺（イ）わすれる・のこす	遺失物。遺跡。
遣（ケン）つかわす	使者を派遣する。
因（イン）もと・よる	原因を追求する。
困（コン）こまる	解決困難な問題。
隠（イン）かくれる	隣の隠居。隠遁。
穏（オン）おだやか	穏健な思想。
栄（エイ）さかえる	栄華を極める。
営（エイ）いとなむ	会社の経営。
延（エン）のびる	時間を延長する。
廷（テイ）政治を行う場所	朝廷。宮廷。
憶（オク）おもう	追憶にふける。
臆（オク）むね	臆病な人。
億（オク）（数の名）万の万倍	中国の八億の民。
瓜（カ）うり	瓜田に履を納れず。
爪（ソウ）つめ	爪牙をとぐ。
科（カ）しな	授業の科目。
料（リョウ）はかる・代金	料簡が狭い。使用料。
貨（カ）たから	貨幣の価値。
貸（タイ）かす	品物を貸与する。
戒（カイ）いましめる	警戒を厳重にする。
戎（ジュウ）いくさ	戎衣を身につける。
悔（カイ）くいる	後悔、先にたたず。
侮（ブ）あなどる	侮辱を受ける。
壊（カイ）こわす	堤防が決壊する。
壌（ジョウ）つち	アルカリ性の土壌。
格（カク）ただす・きまり	格言。破格の待遇。
恪（カク）つつしむ	精励恪勤。
穫（カク）とりいれる	収穫の秋。
獲（カク）つかまえる	漁獲量の制限。
巻（カン・ケン）まく	巻末に掲載する。巻雲。
券（ケン）わりふ	入場券を買う。
竿（カン）さお	物干し竿。
竽（ウ）ふえ	竽を吹く。
冠（カン）かんむり	戴冠式。
寇（コウ）あだ・かたき	外寇を防ぐ。
感（カン）おもう	感謝の念。
惑（ワク）まどう	たいへん迷惑する。
幹（カン）みき	新幹線。
斡（アツ）めぐる	仕事を斡旋する。
管（カン）くだ	水道管が破裂する。
菅（カン）かや・すげ	菅笠。
勧（カン）すすめる	参加を勧誘する。
歓（カン）よろこぶ	新入生を歓迎する。
眼（ガン）め	眼から鼻へ抜ける。
眠（ミン）ねむる	睡眠を十分とる。
己（キ・コ）おのれ・つちのと	克己復礼。自己満足。
已（イ）やむ・すでに	動詞の已然形。
巳（シ）み・へび	巳年の生まれ。
季（キ）すえ・とし	伯仲叔季。季節。
李（リ）すもも	李下に冠を正さず。
宜（ギ）よろし	便宜をはかる。
宣（セン）のべる	選手宣誓。
疑（ギ）うたがう	疑惑をはらす。
凝（ギョウ）こりかたまる	相手を凝視する。
休（キュウ）やすむ	体を休める。
体（タイ）からだ	名は体をあらわす。
宮（キュウ）みや	宮殿を建てる。
官（カン）つかさ	首相官邸。
牛（ギュウ）うし	牛のごとき歩み。
午（ゴ）うま・ひるの十二時	午前午後。
距（キョ）へだたる	長距離電話。
拒（キョ）こばむ	申し入れを拒否する。
郷（キョウ）ふるさと	郷里に帰る。
卿（ケイ・キョウ）くげ	卿相。公卿。
仰（ギョウ）あおぐ	びっくり仰天する。
抑（ヨク）おさえる	人民を抑圧する。
苦（ク）くるしむ	苦は楽のたね。
若（ジャク・ニャク）わかい	若輩。老若男女。
屈（クツ）かがむ	屈伸運動。
届（カイ）とどける	手紙を届ける。
掘（クツ）ほる	発掘作業。
堀（クツ）ほり	外堀を埋める。
頃（ケイ）ころ	近頃の世の中。
項（コウ）物事の要点	入試要項を発表する。
倹（ケン）むだをはぶく	材料を倹約する。
険（ケン）けわしい	危険防止に協力する。
検（ケン）しらべる	身体検査。
孤（コ）みなしご・ひとり	孤児。孤軍奮闘。
狐（コ）きつね	虎の威を借る狐。
弧（コ）弓なりに曲がった曲線	弧を描いて飛ぶ。
甲（コウ）きのえ・よろい	甲子園。装甲自動車。
申（シン）さる・のべる	庚申。申請書を出す。
抗（コウ）あたる	抵抗する。
杭（コウ）くい	杭を打つ。
坑（コウ）あな	坑道を掘る。
効（コウ）ききめ	練習の効果が現れる。
郊（コウ）町はずれ	郊外を散歩する。
侯（コウ）大名小名・侯爵	諸侯。
候（コウ）まつ・きざし・そうろう	候補者。徴候。
綱（コウ）つな	綱紀を粛正する。
網（モウ）あみ	法網をくぐりぬける。
忽（コツ）たちまち	忽然として消える。
怱（ソウ）いそがしい	怱々として働く。

構(コウ)かまえる
講(コウ)説く
購(コウ)買う
済(サイ)すむ・すくう
剤(ザイ)調合した薬
裁(サイ)たちきる
栽(サイ)うえる
載(サイ)のせる
戴(タイ)いただく
在(ザイ)ある
存(ソン・ゾン)ある・考え
罪(ザイ)つみ
罰(バツ)ばち
漸(ゼン)しだいに
暫(ザン)しばらく
仕(シ)つかえる
任(ニン)まかせる
史(シ)ふみ
吏(リ)つかさ
枝(シ)えだ
技(ギ)わざ
思(シ)おもう
恩(オン)めぐみ
施(シ)ほどこす
旋(セン)めぐる
師(シ)先生・軍隊
帥(スイ)ひきいる
字(ジ)もじ
宇(ウ)のき・そら
侍(ジ)はべる
待(タイ)まつ
失(シツ)うしなう
矢(シ)や
日(ジツ、ニチ)ひ
曰(エツ)いう

構内通行禁止。
講演を聴く。
土地を購入する。
借金返済。難民救済。
消化剤を飲む。
裁判。洋裁。
野菜を栽培する。
雑誌に掲載する。
ありがたく頂戴する。
不在者投票。
存在。異存なし。
無罪放免。
罰金を払う。
漸次よくなるはず。
暫定の処置。
仕官の口をさがす。
重大な任務。
日本の歴史。
官吏登用試験。
枝葉末節。
優秀な技術。
思索にふける。
恩恵を受ける。
計画を実施する。
空中を旋回する。
師弟。師団。
全軍を統帥する。
文字を習う。
屋宇(おくう)。広大な宇宙。
王のそばに侍る。
大きな期待。
失敗は成功のもと。
流矢(ながれや)に当たる。
本日(ほんじつ)休業。日月星辰(しん)。
孔子曰わく。

住(ジュウ)すむ
往(オウ)ゆく
粛(シュク)つつしむ
蕭(ショウ)さびしい
順(ジュン)したがう
須(シュ・ス)まつ・用いる
暑(ショ)あつい
署(ショ)役所
徐(ジョ)ゆるやか
除(ジョ・ジ)のぞく
小(ショウ)ちいさい
少(ショウ)すくない
招(ショウ)まねく
紹(ショウ)ひきあわせる
衝(ショウ)つく
衡(コウ)はかり
臣(シン)けらい
巨(キョ)おおきい
浸(シン)ひたす
侵(シン)おかす
粋(スイ)まじりけなし
砕(サイ)くだく
推(スイ)おす
堆(タイ)もりあげる
遂(スイ)とげる
逐(チク)おう
井(セイ)いど
丼(タン)どんぶり
斉(セイ)ひとしい
斎(サイ)ものいみ
誠(セイ)まこと
誡(カイ)いましめ
晴(セイ)はれる
睛(セイ)ひとみ

住宅地。
往復の距離。
ご静粛に願います。
蕭条たる秋の野。
順番を待つ。
必須の科目。
暑中見舞いのはがき。
警察の署長。
徐行運転。
害虫の駆除。掃除。
君子と小人。
少数精鋭主義。
お客を招待する。
自己紹介。
正面衝突。
均衡をたもつ。
建国の功臣。
巨大なタンカー。
床下浸水。
侵略者。
純粋な気持ち。
石を粉砕する。
原因を推測する。
土砂の堆積。
任務を遂行する。
敵を駆逐する。
市井のうわさ。
うなぎ丼(どんぶり)。
校歌斉唱。
斎戒沐浴。
誠意を尽くす。
訓誡を垂れる。
本日は晴天だ。
画龍点睛。

斥(セキ)しりぞける
斤(キン)おの・重さの単位
積(セキ)つむ
績(セキ)つむぐ・うむ
籍(セキ)ふみ
藉(セキ)しく
折(セツ)おる
析(セキ)わける
祖(ソ)おじいさん
粗(ソ)あらい
租(ソ)ぜいきん
卒(ソツ)しもべ・おわる
率(ソツ・リツ)ひきいる・わりあい
宗(ソウ・シュウ)おおもと
宋(ソウ)中国の王朝名
奏(ソウ)もうす・かなでる
秦(シン)中国の王朝名
泰(タイ)やすらか
喪(ソウ)うしなう
衷(チュウ)こころ
苔(タイ)こけ
笞(チ)むち
代(ダイ)かわる・よ
伐(バツ)うつ
奪(ダツ)うばう
奮(フン)ふるう
旦(タン)あさ
且(ショ)かつ・しばらく
短(タン)みじかい
矩(ク)さしがね
治(ジ・チ)おさめる
冶(ヤ)とかす
張(チョウ)はる
帳(チョウ)とばり・覚書(おぼえがき)

排斥運動。
斧斤(ふきん)。砂糖一斤。
積雪二十センチ。
紡績工場。成績。
戸籍を調べる。
狼藉(ろうぜき)者。
屈折。曲折。
成分を分析する。
祖父を大切にする。
粗末。粗雑。
租税を納入する。
兵卒。卒業式。
生徒を引率する。
男女の比率(ひりつ)。
宗家(そうけ)。宗派。
唐宋の時代。
上奏文。音楽の演奏。
秦の始皇帝。
天下泰平。
戦意を喪失する。
衷心より感謝する。
苔がはえる。
愛の笞。
代理。時代。
敵を征伐する。
選手権の争奪戦。
奮起をうながす。
元旦。旦夕。
働き且(か)つ学ぶ。
短気な性格。
矩形。規矩。
政治を正す。
冶金の技術。
勢力を拡張する。
几帳(きちょう)。帳簿。

鳥(チョウ)とり　鳥小屋。鳥獣。
烏(ウ)からす　烏合の衆。
追(ツイ)おう　敵を追跡する。
迫(ハク)せまる　迫真の演技。
低(テイ)ひくい　低空飛行。
抵(テイ)あたる　激しい抵抗。
提(テイ)さし出す　問題を提起する。
堤(テイ)つつみ　防波堤。
適(テキ)かなう　適切な処置。
摘(テキ)つまみ出す　欠点を指摘する。
徹(テツ)とおす　徹夜でがんばる。
撤(テツ)とりさる　危険物を撤去する。
天(テン)あめ　天気予報。
夭(ヨウ)若死に　夭折を悲しむ。
徒(ト)あるく・いたずらに　徒歩。徒労におわる。
徙(シ)うつる　兵士を国境に徙す。
土(ド)つち　領土の返還。
士(シ)さむらい　武士。兵士。

○書き誤りやすい部分

〔正〕
易(エキ)——昜
陽(ヨウ)——陽
茂(モ)——茂
迎(ゲイ)——迎
抑(ヨク)——抑
柳(リュウ)——栁
凍(トウ)——涷
准(ジュン)——淮
暇(カ)——暇
策(サク)——筞
達(タツ)——逹

○認められていない　俗字・略字

〔正〕
権(ケン)——权
質(シツ)——貭
職(ショク)——耺
第(ダイ)——㐧
点(テン)——奌
闘(トウ)——斗
働(ドウ)——仂
簿(ボ)——笵
卒(ソツ)——卆
門(モン)——门

努(ド)つとめる　努力を重ねる。
怒(ド)いかる　喜怒哀楽の情。
悩(ノウ)なやむ　苦悩にゆがんだ顔。
脳(ノウ)のうみそ　頭脳明晰。
背(ハイ)せなか・そむく　背水の陣。背信行為。
脊(セキ)せぼね　脊椎動物。
薄(ハク)うすい　意志薄弱。
簿(ボ)ちょうめん　出席簿。
比(ヒ)くらべる　服装を比較する。
此(シ)これ・この　彼此を比べる。
微(ビ)かすか　微生物。微笑。
徴(チョウ)しるし・めす　日本の象徴。徴兵。
氷(ヒョウ)こおり　南極の氷原。
永(エイ)ながい　永遠の平和。
貧(ヒン)まずしい　貧者の一燈。
貪(タン・ドン)むさぼる　貪夫。貪欲。
復(フク)かえる・ふたたび　往復。復活。
複(フク)二つ以上　複雑な計算。
福(フク)しあわせ　幸福な家庭。
副(フク)そえる　主食と副食。
幅(フク)はば　振幅が大きい。
粉(フン)こな　花粉を運ぶ。
紛(フン)みだれる　紛争を解決する。
噴(フン)ふく　噴出。噴火。
憤(フン)いきどおる　悲憤の涙を流す。
墳(フン)はか　古墳時代。
弊(ヘイ)やぶれる・わるい　弊衣破帽。弊害。
幣(ヘイ)ぬさ・通貨　御幣かつぎ。紙幣。
壁(ヘキ)かべ　城壁を築く。
璧(ヘキ)たま　完璧なできばえ。
偏(ヘン)かたよる　偏見を持つ。
遍(ヘン)あまねく　諸国を遍歴する。
母(ボ)はは　父母の恩。
毋(ブ)なし　遊ぶこと毋かれ。

防(ボウ)ふせぐ　防風林。
妨(ボウ)さまたげる　交通を妨害する。
末(マツ)すえ　末代までの恥辱。
未(ミ)いまだ　十八歳未満。
漫(マン)みだりに　注意力散漫。
慢(マン)おこたる・おごる　職務怠慢。慢心。
密(ミツ)ひそか　親密な間柄。
蜜(ミツ)はちみつ　蜜蜂を飼育する。
明(メイ)あきらか　明白な事実。
朋(ホウ)とも　朋友。同朋。
鳴(メイ)なく　犬の鳴き声。
嗚(オ)なげく　嗚咽をこらえる。
滅(メツ)ほろびる　破滅。滅亡。
減(ゲン)へる　勢力が半減する。
免(メン)まぬかれる　授業料の免除。
兎(ト)うさぎ　脱兎のように逃げる。
模(モ・ボ)かたどる・てほん　模型。模範。
摸(モ)さぐる　暗中摸索。
予(ヨ)あらかじめ　予定の行動。
矛(ボウ・ム)ほこ　矛戟。矛盾した意見。
幼(ヨウ)おさない　幼年時代。
幻(ゲン)まぼろし　夢幻の世界。
楊(ヨウ)やなぎ　楊柳。
揚(ヨウ)あげる　国旗を掲揚する。
栗(リツ)くり　桃栗三年、柿八年。
粟(ゾク)あわ　膚が粟立つ。
梁(リョウ)はり　大工の棟梁。
粱(リョウ)あわ　粱は粟に似る。
緑(リョク)みどり　緑化運動。
縁(エン)えにし・よる　前世からの因縁。
歴(レキ)すぎる　歴史上の人物。
暦(レキ)こよみ　還暦を迎える。
練(レン)ねる　訓練にはげむ。
錬(レン)きたえる　身心の鍛錬。

書き誤りやすい語

一般に書き誤りやすい語を「用例・正しい漢字・誤字」の順に示し、五十音順に配列した。

用例	(正)	(誤)
喜怒アイラクの激しい人。	哀楽	愛楽
アクタイをつく。	悪態	悪体
就職をアッセンする。	斡旋	斡施
アットウ的な勢力。	圧倒	圧到
アトカタもなく焼ける。	跡形	跡方
アヤマちを認める。	過	誤
アンシン立命の境地。	安心	安身
アンピを気づかう。	安否	安非
相手をイアツする。	威圧	偉圧
イガイな出来事。	意外	以外
イカンの意をあらわす。	遺憾	遺感
イギのある一日。	意義	意議
イギをさしはさむ。	異議	異義
イク同音に叫ぶ。	異口	異句
親のイコウをかさに着る。	威光	偉光
イサイを放つ。	異彩	偉彩
イシ薄弱な人。	意志	意思
イセキした野球選手。	移籍	移席
イチドウに会する。	一堂	一同
イッショに帰る。	一緒	一諸
イッシン同体の夫婦。	一心	一身
危機イッパツの出来事。	一髪	一発
人事イドウを行う。	異動	移動
契約にイハンする。	違反	違犯
イマだに完成しない。	未	今
仲間で使うインゴ。	隠語	陰語
生徒をインソツする。	引率	引卒
物資をイントクする。	隠匿	隠得
インボウをくわだてる。	陰謀	隠謀
改築をウけ負う。	請	受
ウヨ曲折を経る。	紆余	宇余
テレビのエイゾウ。	映像	影像
エンゼツを聞く。	演説	演舌
エンユウ会の名士たち。	園遊	宴遊
客とオウタイする。	応対	応待
懸賞にオウボする。	応募	応慕
オオいに語る。	大	多
政界のオオモノが集まる。	大物	大者
誕生日のオクり物。	贈	送
勢いがオトロえる。	衰	劣
オンケンな思想の持ち主。	穏健	温健
オンコ知新。	温故	温古
早急にカイケツすべき問題。	解決	解結
駅のカイサツロで待つ。	改札	開札
カイシンの作品。	会心	快心
カイテキな旅をする。	快適	快的
病人をカイホウする。	介抱	介胞
借りた本をカエす。	返	帰
カクウの話。	架空	仮空
合格をカクシンする。	確信	確心
一気カセイに仕上げる。	呵成	可成
カソウ行列に参加する。	仮装	化装
話題のカチュウの人。	渦中	禍中
カッコをつける。	括弧	活弧
カビな服装の女学生。	華美	花美
カヘイの価値。	貨幣	貨弊
本をカりる。	借	貸
カン違いをする。	勘	感
失敗をカンカする。	看過	観過
衆人カンシの中の出来事。	環視	観視
たくさんのカンシュウ。	観衆	観集
名曲をカンショウする。	鑑賞	観賞
ガンゼンでの交通事故。	眼前	顔前
要求をカンテツする。	貫徹	完徹
カンニンを重ねる。	堪忍	勘忍
彼の腕前にカンプクする。	感服	感伏
カンペキの備え。	完璧	完壁
流行性カンボウにかかる。	感冒	寒冒
動作のカンマンな選手。	緩慢	緩漫
証人をカンモンする。	喚問	換問
カンレキの祝いをする。	還暦	環歴
古いキオクをたどる。	記憶	気憶
ギオンの舞妓さん。	祇園	祗園
消化キカンが弱い。	器官	機官
突然のキグウに驚く。	奇遇	奇偶
キケンを冒す。	危険	危倹
キゲンが悪い。	機嫌	気嫌
不順なキコウが続く。	気候	気侯
ギセイを払って確保する。	犠牲	議性
相手のキセンを制する。	機先	気先
旅券をギゾウする。	偽造	欺造
キテキを鳴らす。	汽笛	気笛
キトク状態におちいる。	危篤	危特
キネンの行事をする。	記念	紀念
発展のキバンを作る。	基盤	基磐
万事キュウす。	休	窮
キュウキョクの目的。	究極	究局
知識をキュウシュウする。	吸収	吸集
キュウタイ依然とした考え。	旧態	旧体
キョウイの目をみはる。	驚異	驚威
組織をキョウカする。	強化	強加
恵まれたキョウグウの人。	境遇	境偶
すばらしいギョウセキ。	業績	業跡
生存キョウソウが激しい。	競争	競走
特にキョウチョウする。	強調	強張
キョウドウ一致。	協同	共同
キョウラクにふける。	享楽	亨楽
ギョカク量が制限される。	漁獲	魚穫
ギョセンで操業する。	漁船	魚船
キンコウを破る。	均衡	均衝
キンセイ品の販売。	禁制	禁製
グウゼンの出会い。	偶然	遇然
敵艦隊をクチクする。	駆逐	駆遂
クノウが絶えない。	苦悩	苦脳
グンショウの零細企業。	群小	群少
直情ケイコウの性格。	径行	経行
ケイソツな行動をする。	軽率	軽卒
全力をケイトウする。	傾倒	傾到
香港ケイユで行く。	経由	径由
ゲキヤクに注意する。	劇薬	激薬
豪雨でケッカイした堤防。	決壊	欠懐
責任感がケツジョしている。	欠如	欠除
次回でケッシンする。	結審	決審
ケッセン投票をする。	決選	決戦
ケツロンに従う。	結論	決論
ゲネツ剤を与える。	解熱	下熱
変死者をケンシする。	検視	検死
人口がゲンショウする。	減少	減小
走者をケンセイする。	牽制	索制
ケンゼンな精神の人。	健全	建全
慎重にケントウする。	検討	検当
ケンヤクした生活をする。	倹約	険約
亀の甲より年のコウ。	功	甲
教室でコウギする。	講義	講議
記録をコウシンする。	更新	更進
コウセイ大臣。	厚生	更生
ゴウジョウな人。	強情	剛情
ゴウソウな邸宅に住む。	豪壮	豪荘
監督をコウテツする。	更迭	交送
コウトウ試問をする。	口頭	口答
ゴカクに戦う。	互角	互格
コドクな人生。	孤独	弧独

会社のコモンをする。　顧問　顧門
コユウの文化。　固有　個有
ザイゲンを確保する。　財源　財原
立派なサイゴをとげる。　最期　最後
粉骨サイシンがんばる。　砕身　砕心
サイテイの生活をする。　最低　最底
草花をサイバイする。　栽培　裁培
サイホウを教える。　裁縫　栽縫
サギ行為をする。　詐欺　詐偽
ザンシンなデザイン。　斬新　漸新
注意がサンマンだ。　散漫　散慢
シゲキを与える。　刺激　剌激
シサを与える。　示唆　指唆
犯人の首ジッケンをする。　実検　実験
テストをジッシする。　実施　実旋
シッシンする。　失神　失心
欠点をシテキする。　指摘　指適
シヘイを数える。　紙幣　紙弊
運動会のあとシマツをする。　始末　仕末
ジャッカン二十歳。　弱冠　若干
シャレのうまい人。　洒落　酒落
シュウカン誌。　週刊　週間
切手をシュウシュウする。　収集　集収
ジュウジュンな態度。　従順　柔順
シュウチ徹底させる。　周知　衆知
内容がジュウフクする。　重複　重復
規模をシュクショウする。　縮小　縮少
シュコウをこらす。　趣向　趣好
日本のシュトは東京です。　首都　主都
血液のジュンカンがよい。　循環　巡環
ジュンシンな子供。　純真　純心
ショウコがない。　証拠　証固
意気ショウテン。　衝天　昇天
意見がショウトツする。　衝突　衡突
ショクゼンに供する。　食膳　食前

車がジョコウして通る。　徐行　除行
医者のショホウ箋。　処方　処法
権利をシンガイする。　侵害　浸害
シンキ一転がんばる。　心機　心気
シンギを確認する。　真偽　真疑
ジンチクに無害である。　人畜　人蓄
意味シンチョウなことば。　深長　深重
シンボウをする。　辛抱　辛棒
スウキな運命をたどる。　数奇　数寄
スジョウを調べる。　素性　素姓
セイセキが下がる。　成績　成積
学校のセイフクを着る。　制服　正服
セイメイを名乗る。　姓名　性名
生徒にセッキョウする。　説教　説経
外交問題をセッショウする。　折衝　接衝
客をセッタイする。　接待　接対
ゼッタイ絶命の危機。　絶体　絶対
利益をセッパンする。　折半　切半
上空をセンカイする。　旋回　施回
ゼンゴ策を相談する。　善後　前後
センザイ意識を喚起する。　潜在　先在
ゼンジ回復する。　漸次　暫時
ゼンショを要望する。　善処　善所
ゼンゼン理解できない。　全然　全々
センモンの科目。　専門　専問
ソウゴに助け合う。　相互　双互
ソウゴンな寺院。　荘厳　壮厳
ソウダイな建物。　壮大　荘大
ソウホウの言い分を聞く。　双方　相方
生長をソクシンする。　促進　速進
ソクセキ料理を食べる。　即席　速席
ソンショクなし。　遜色　孫色
自宅でタイキする。　待機　待期
子供タイショウの番組。　対象　対照
タイヨウの黒点。　太陽　大陽

タイヨウを航海する。　大洋　太洋
不利な局面をダカイする。　打開　打解
窮地をダッキャクする。　脱却　脱脚
タントウ直入に話す。　単刀　短刀
一敗チにまみれる。　地　血
公金をチャクフクする。　着服　着腹
チョウカイ免職になる。　懲戒　徴戒
チョチクを奨励する。　貯蓄　貯畜
家を借金のテイトウにする。　抵当　低当
発言をテッカイする。　撤回　徹回
責任をテンカする。　転嫁　転化
トウカ親しむ候。　燈火　燈下
地価がトウキする。　騰貴　謄貴
戸籍トウホンを請求する。　謄本　騰本
言語ドウダンの行動。　道断　同断
トクイな体質。　特異　特違
トクギを持つ人。　特技　得技
市場をドクセンする。　独占　独専
ドンヨクな知識欲。　貪欲　貧欲
ニクシンの愛情。　肉親　肉身
相手にニクハクする。　肉薄　肉迫
稲作のノウカン期。　農閑　農間
男性をノウサツする。　悩殺　脳殺
ハイグウ者。　配偶　配遇
バイショウ金を支払う。　賠償　倍賞
異分子をハイセキする。　排斥　排斤
ハップンしてがんばる。　発奮　発奪
考えをハンエイさせる。　反映　反影
悪い虫がハンショクする。　繁殖　繁植
黒いハンテンが現れる。　斑点　班点
自分の将来をヒカンする。　悲観　悲感
条約をヒジュンする。　批准　批淮
友人をヒナンする。　非難　否難
ビミョウな判定。　微妙　徴妙
ヒンシの重傷を負う。　瀕死　頻死

社内のフウキを乱す。　風紀　風規
フオンな様子がある。　不穏　不隠
フクゾウのない意見。　腹蔵　腹臓
フダンの努力をする。　不断　普段
フハイした政治。　腐敗　腐廃
負けてフンキする。　奮起　奮気
会議がフンキュウする。　紛糾　粉糾
内容をブンセキする。　分析　分折
ヘンクツな人。　偏屈　変屈
睡眠をボウガイする。　妨害　防害
ボウジャク無人な態度。　傍若　暴若
友人の家をホウモンする。　訪問　訪門
損害をホショウする。　補償　保障
ボンサイの好きな老人。　盆栽　盆裁
マンジョウ一致で決める。　満場　万場
人跡ミトウの土地。　未踏　未到
無我ムチュウで走る。　夢中　無中
五里ムチュウの捜索。　霧中　夢中
ムボウな行為をする。　無謀　無暴
肝にメイずる。　銘　命
メイギを書き換える。　名義　名儀
モクヒ権を行使する。　黙秘　黙否
客船のモケイを作る。　模型　模形
日中ユウコウ条約。　友好　友交
海外にユウヒする。　雄飛　勇飛
ユウフクな暮らしをする。　裕福　有福
執行ユウヨの判決。　猶予　裕余
意気ヨウヨウと引き揚げる。　揚々　洋々
ヨダンを許さない事態。　予断　余断
リチギな人。　律義　律気
レイギを重んじる人。　礼儀　礼義
レンタイ感を持つ。　連帯　連体
ロウコウな選手。　老巧　老功
ロウゼキ者の集団。　狼藉　浪籍
ワイロを受け取る。　賄賂　賄路

同音異義語の使い分け

読み方が同じで意味が違う語の使い分けを示した。
(上段↓語、中段↓語の意味、下段↓用例)

あいしょう

語	意味	用例
愛称	親愛の気持ちで呼ぶ名前。	友人を愛称で呼ぶ。
哀傷	悲しみいたむこと。	彼の死を哀傷する。
愛唱	好んで歌うこと。	愛唱歌集。

あいせき

語	意味	用例
愛惜	惜しんで大切にすること。	愛惜の念。
哀惜	人の死を悲しみ惜しむこと。	哀惜の思いに浸る。

あっせい

語	意味	用例
圧制	権力で押さえつけること。	圧制に反抗する。
圧政	権力で押さえつける政治。	圧政に苦しむ民衆。

いぎ

語	意味	用例
異議	他と違った議論、異論。	異議を申し立てる。
意義	意味。価値。	意義を見いだす。
威儀	作法にかなった立居振舞い。	威儀を正す。

いけん

語	意味	用例
意見	考え。思うところ。	私も同じ意見だ。
異見	他と違った意見、異存。	異見を唱える。

いし

語	意味	用例
遺志	故人の生前の志。	亡夫の遺志を継ぐ。
意志	何かをしようとする気持ち。	意志が薄弱だ。
意思	考え。思い。	意思の疎通を欠く。

いじょう

語	意味	用例
異常	普通と違っていること。	異常な反応がある。
異状	普通と違った状態。	室内に異状はない。

いどう

語	意味	用例
異動	地位・勤務が変わること。	人事異動。
移動	場所を移ること。	隅に移動する。

うんこう

語	意味	用例
運行	決まった道筋を行くこと。	地球の運行。
運航	船が航路を進むこと。	赤道近くを運航。

えいき

語	意味	用例
英気	人より優れた性質。	英気を養う。
鋭気	鋭く勢いのある性質。	天性の鋭気。

えんかく

語	意味	用例
沿革	移りかわり。変遷。	町の沿革を述べる。
遠隔	遠く離れていること。	遠隔地に就職する。

おんじょう

語	意味	用例
温情	思いやりのある心。	温情主義。
恩情	いつくしみ。恩愛の心。	師の恩情に涙ぐむ。

がいかん

語	意味	用例
概観	ざっと見ること。	歴史を概観する。
外観	外部から見たところ。	外観で判断するな。

かいこ

語	意味	用例
懐古	昔を懐かしく思うこと。	懐古趣味。
回顧	過去を顧みること。	青春期を回顧する。

かいしん

語	意味	用例
改心	悪い心を改めること。	改心して自首する。
会心	心にかなうこと。	会心の作。

かいとう

語	意味	用例
回答	返事。答え。	アンケートの回答。
解答	問題を解き答えを出すこと。	試験の解答を出す。

かいほう

語	意味	用例
解放	解き放ち自由にすること。	奴隷を解放する。
開放	出入りの自由を許すこと。	施設を人々に開放。

かぎょう

語	意味	用例
家業	家の職業。	家業は呉服屋だ。
稼業	生活費を得るための仕事。	サラリーマン稼業。

かくさ

語	意味	用例
格差	価格・品質などの差。	教育格差をなくす。
較差	二者の間のひらき。	温度の較差が大だ。

かせつ

語	意味	用例
仮説	現象を説明するための仮定。	仮説を立てる。
仮設	かりに作ること。	事務所を仮設する。

かてい

語	意味	用例
過程	物事の進行する段階、経路。	作業の過程。
課程	ある期間に割りあてた仕事。	教育課程。

かもく

語	意味	用例
科目	いくつかに区分した各部分。	科目ごとに書く。
課目	課せられた項目。	得意な課目。

かりょう

語	意味	用例
科料	罪科をあがなう金品。	科料処分になる。
過料	過失罪科に科す金品。	過料を支払う。

かんし

語	意味	用例
監視	注意して見はること。	刑事に監視される。
環視	ぐるりを取りまいて見る。	衆人環視の中。

かんしょう

語	意味	用例
鑑賞	芸術作品を味わうこと。	音楽を鑑賞する。
観賞	見て楽しむこと。	金魚を観賞する。
観照	対象を客観的に見ること。	観照的な態度。

かんしん

語	意味	用例
感心	物事に感服すること。	感心できない態度。
関心	興味を持って注意すること。	政治に関心を持つ。
寒心	心配して肝をひやすこと。	寒心にたえない。
歓心	喜ぶこと。嬉しいと思う心。	彼女の歓心を買う。

かんせい

語	意味	用例
喚声	叫び声。	喚声をあげる。
歓声	喜びのあまり叫ぶ声。	歓声に迎えられる。
喊声	ときの声。	突撃の喊声。

かんだん

語	意味	用例
歓談	うちとけた話合い。	和やかに歓談する。
閑談	ひまつぶしのむだ話。	閑談を打ちきる。

きうん

語	意味	用例
気運	時勢のなりゆき。	復興の気運。
機運	時のまわりあわせ。	機運が熟する。

きかん

語	意味	用例
季刊	一年に四回刊行するもの。	季刊の雑誌。
既刊	すでに刊行したもの。	既刊の書物。

きこう

語	意味	用例
紀行	旅行の記事。	シベリア紀行。

語	意味	用例
起工	工事を始めること。	起工式を行う。
機構	組み立て。組織。	会社の機構。
気候	気象の状態。	厳しい気候。
きせい		
既成	すでにできていること。	既成の価値規準。
規正	正しい方へ直すこと。	行動を規正する。
規制	規律をたてて制限すること。	交通規制をする。
既製	前もって作ってあること。	既製服は買わない。
期成	成功を期すること。	期成同盟。
きてい		
規定	おきて。さだめ。	社内規定に従う。
既定	既に定まっていること。	既定の方針に従う。
きてん		
起点	始まり。	東京を起点とする。
基点	基礎となるところ。	本店を基点とする。
きょうい		
脅威	おびやかしおどすこと。	核戦争の脅威。
驚異	驚きあやしむこと。	驚異的な回復。
きょうき		
狂喜	夢中になって喜ぶこと。	合格して狂喜する。
驚喜	驚き喜ぶこと。	奇遇に驚喜する。
きょうそう		
競争	勝負・優劣を争うこと。	競争相手。
競走	走る速さを競うこと。	百メートル競走。
きょくげん		
極限	限り。果て。	厳寒の極限に挑戦。
局限	範囲を一部に限ること。	受信地を局限する。
くじゅう		
苦渋	苦しみ悩むこと。	苦渋に満ちた表情。
苦汁	苦い汁。苦い経験をする。	苦汁をなめる。
けいせい		
形成	形を成すこと。作ること。	人格の形成。
形勢	様子。ありさま。	不利な形勢。
けっさい		
決済	お金を支払うこと。	借金の決済をする。
決裁	決めること。裁決。	社長が決裁する。
こうい		
厚意	思いやりのある心。	厚意を無にする。
好意	親愛感。	好意を寄せる。
こうがく		
向学	学問に心を向けること。	向学心に燃える。
好学	学問を好むこと。	好学の士。
後学	今後のためになる知識。	後学のために見る。
こうかん		
交換	取りかえること。	贈り物を交換する。
交歓	お互いに楽しむこと。	交歓会を開く。
こうき		
好機	いいおり。チャンス。	好機を逃すな。
高貴	身分が高くて貴いようす。	高貴な生まれ。
綱紀	守るべき秩序。	綱紀粛正。
こうげん		
広言	無遠慮なことば。	広言して憚（はばか）らない。
公言	公然と言うこと。	秘密を公言する。
こうこく		
広告	広く一般に知らせる文書。	バーゲンの広告。
公告	一般の人に知らせること。	法令を公告する。
こうしょう		
交渉	かけあうこと。	漁業問題の交渉。
考証	文献で実証すること。	時代考証をする。
こうじょう		
口承	人々が口伝えに伝えること。	口承の伝説。
厚情	手厚い情。	厚情にすがる。
交情	交際の親しみ。	交情が深い。
こうせい		
厚生	人民の生活を豊かにする。	厚生施設の拡充。
更生	生活を正しく改めること。	犯罪者の更生。
更正	誤りや落ちを改め直すこと。	申告を更正する。
こうてい		
行程	道のり。過程。	三日の行程。
工程	作業のはかどりかた。	生産の工程を知る。
こうとう		
口頭	口を使って述べること。	口頭試問を行う。
口答	口で答えること。	口答と筆答。
こうほう		
公報	官庁が国民に発表する文書。	戦死の公報が入る。
広報	広く知らせること。	広報活動。
こじ		
固辞	固く辞退すること。	招待を固辞する。
固持	固く持ち続けること。	自説を固持する。
こじん		
古人	昔の人。	古人の教えを守る。
故人	なくなった人。	故人を偲（しの）ぶ夕べ。
個人	個々別々の人間。	個人の権利を守る。
さいけつ		
裁決	物事の是非を決定すること。	裁決を下す。
採決	賛否の決をとること。	採決まで持ちこむ。
さくせい		
作成	作りあげること。	予定表を作成する。
作製	ものを作ること。	プラモデルの作製。
しあん		
私案	自分個人としての案。	私案を述べる。
試案	試みの案。	あくまでも試案だ。
じき		
時期	時。おり。	中間テストの時期。
時機	適当な機会。ころあい。	時機が熟する。
時季	季節。シーズン。	海水浴の時季だ。
しこう		
施行	実際に行うこと。	法律が施行される。
試行	ためしにやってみること。	試行錯誤を重ねる。
施工	工事を行うこと。	施工はわが社だ。
思考	考え思うこと。	思考を妨げる。
指向	目ざし向かうこと。	彼の指向する方面。
志向	心が向かうこと。	権力志向。
しざい		
資材	材料として役に立つ物資。	資材の値が上がる。

私財　個人の財産。　私財を投げうつ。
資財　資産。財産。　資財を貯える。

じったい
実態　実際の状態。　公害の実態を知る。
実体　実物。本体。　実体をつかむ。

じてん
事典　事柄を説明した書。　百科事典。
辞典　ことばを説明した書。　国語辞典。
字典　文字の形・音・義を記した書。　漢字の字典。

しもん
試問　試験のために問うこと。　口頭試問を受ける。
諮問　意見を尋ね求めること。　諮問機関。

しゅうきょく
終曲　歌劇の各幕の結びの曲。　終曲とともに幕。
終局　事件の落着。　終局を迎える。
終極　はて。終わり。　この世の終極。

しゅうしゅう
収集　取り集めること。　切手を収集する。
収拾　乱れたものを整えること。　収拾のつかぬ事態。

しゅうせい
修正　よくない点を直し正すこと。　軌道を修正する。
修整　整え直すこと。　写真を修整する。

しゅうち
周知　広く知れわたること。　周知の事実。
衆知　多くの人の知恵。　衆知を結集する。

しゅうりょう
終了　終わること。　試合終了の合図。
修了　一定の学業を修めること。　博士課程を修了。

しゅくせい
粛清　厳しく不正を排除すること。　不平分子を粛清。
粛正　厳格に正すこと。　綱紀粛正。

しゅさい
主催　中心となって会を催すこと。　集会を主催する。
主宰　人の上に立つこと。　一国の主宰者。

しゅし
主旨　主な意味・根本となる意味。　論文の主旨を理解。
趣旨　事のおもむき。わけ。　会の趣旨に賛成。

しょうかい
照会　問い合わせ。　勤務先に照会する。
紹介　人と人とのなかだち。　転校生を紹介する。

しょうかん
召喚　官庁が個人を呼び出すこと。　参考人として召喚。
召還　呼びもどすこと。　大使を召還する。

しょうしゅう
招集　招き集めること。　株主を招集する。
召集　召し集めること。　国会を召集する。

じょうれい
条令　箇条書きにした法令。　緊急条令。
条例　県や市町村が発布した法規。　県条例。

しょくりょう
食糧　米・麦などの主食。　食糧の買い出し。
食料　食用にするもの。食物。　食料品店に行く。

しょよう
所用　用事。用むき。　所用で外出する。
所要　必要なこと。　所要時間を考える。

しんき
心気　気持ち。心持ち。　心気を平静にする。
心機　心の動き。　心機一転する。
新規　新しく物事をすること。　新規に採用する。
新奇　目新しく変わっていること。　新奇な傾向に走る。

しんちょう
慎重　注意深く大事をとること。　慎重な態度で臨む。
深長　意味深く、含みのあること。　意味深長なことば。
伸長　長さや力が伸びること。　才能を伸長する。

しんにゅう
進入　進んで中に入ること。　敵地に進入する。
侵入　侵して中に入ること。　家宅侵入。
浸入　水が入ること。　床下に浸入した。

しんにん
信任　信用してことを任せること。　信任投票。
親任　天皇自ら任命すること。　親任官。

しんろ
進路　進んでいく道。　卒業後の進路指導。
針路　船の進むべき道。　針路を南にとる。

せいいく
成育　体が一人前に育つこと。　子供が成育する。
生育　生まれて大きくなること。　生育の過程。

せいぎょう
生業　生活に必要な仕事。　木樵を生業とする。
正業　正当な職業。　正業に就く。

せいこう
成功　目的を達成すること。　山岳縦走に成功。
精巧　細工が細かく巧みなこと。　精巧な時計。
性行　人の性質と行い。　婚約者の性行調査。
性向　性質の傾向。　性向を見ぬく。

せいこん
精根　根気。気力。　精根尽きて倒れる。
精魂　魂。精霊。　精魂を込めた作品。

せいさく
制作　芸術品などを作ること。　油絵を制作中。
製作　ものを作ること。　椅子を製作する。

せいさん
精算　細かく計算し直すこと。　運賃を精算する。
成算　成功する見込み。　成算は全くない。
清算　貸借を整理すること。　借金を清算する。

せいちょう
成長　人や動物などが育つこと。　みるまに成長する。
生長　草木などが育つこと。　草木が生長する。

せいねん
青年　年の若い男女。若者。　青年たちの笑い声。
成年　心身が完全に発達した年齢。　成年に達した喜び。

せいりょく
勢力　勢い。力。　革新勢力を伸ばす。
精力　物事をなし遂げる力。　精力的な仕事ぶり。

せっせい

語	意味	用例
節制	控えめにする。	酒を節制する。
摂生	養生をすること。	摂生に専心する。

ぜったい

語	意味	用例
絶対	くらべるもののないこと。	時間は絶対守ろう。
絶体	身の終わり。	絶体絶命。

そうぎょう

語	意味	用例
創業	事業を新しく始めること。	創業二十周年記念。
操業	機械などで仕事をすること。	操業を短縮する。

そがい

語	意味	用例
阻害	隔て妨げること。	計画を阻害する。
疎外	うとんじること。	疎外感に苦しむ。

そくせい

語	意味	用例
促成	人工的に生長を促すこと。	促成栽培の野菜。
即製	即座にできあがること。	即製販売をする。
速成	速やかになしとげること。	速成教育。

そくだん

語	意味	用例
速断	速やかに決断すること。	速断を戒める。
即断	即座に決断すること。	即断を求める。

たいけい

語	意味	用例
大系	体系的に集めた作品の全集。	日本文学大系。
体系	矛盾なく組織された理論。	体系的な研究。

たいしょう

語	意味	用例
対象	人の意識の向けられるもの。	対象を克明に描く。
対照	他と照らし合わせること。	対照的な姉妹。
対称	つりあうこと。	左右対称。

たいせい

語	意味	用例
体制	社会組織の様式。	体制に反抗する。
態勢	身構えや状態。	態勢を立て直す。
大勢	世の大方の形勢。	大勢につく。
体勢	体の構え。	着地の体勢。

たんきゅう

語	意味	用例
探究	探しきわめること。	学問を探究する。
探求	探し求めること。	真実の愛を探求。

ちょうしゅう

語	意味	用例
徴収	税金などを取り立てること。	会費を徴収する。
徴集	呼び集めること。	兵士を徴集する。

ついきゅう

語	意味	用例
追求	追い求めること。	利潤を追求する。
追究	尋ねきわめること。	真理を追究する。
追及	追いつめ食いさがること。	余罪を追及する。

てきかく

語	意味	用例
的確	的をはずれず確かなこと。	的確に指摘する。
適格	ある資格にあてはまること。	彼が適格でしょう。

てきせい

語	意味	用例
適正	適当で正しいこと。	適正な処置をとる。
適性	性質が適していること。	教師の適性がある。

てんか

語	意味	用例
転嫁	罪や責任を他へ移すこと。	責任を転嫁する。
転化	他の状態に変化すること。	水から氷へ転化。

どうけい

語	意味	用例
同系	同じ系統。	同系の色。
同形	同じ形。	同形の時計。

とくちょう

語	意味	用例
特徴	特に目立つところ。	脱獄犯の特徴。
特長	特に秀れたところ。	当社の製品の特長。

はんこう

語	意味	用例
反抗	てむかうこと。	両親に反抗する。
反攻	反撃。	彼は反攻に移った。

はんざつ

語	意味	用例
繁雑	物事が多くごたつくこと。	繁雑な事務。
煩雑	煩しくごたつくこと。	煩雑な手続き。

ひうん

語	意味	用例
非運	運が開けないこと。	本当に非運な人だ。
悲運	悲しい運命。	悲運に弄ばれる。

ふじゅん

語	意味	用例
不順	順序が正しくないこと。	天候不順。
不純	純真でないこと。	不純な動機。

へいこう

語	意味	用例
平行	交わることのない線や面。	平行線をひく。
平衡	つりあいのとれていること。	平衡をとる。
並行	並んで同時に行うこと。	並行して行う。

へんせい

語	意味	用例
編成	集めて一つにまとめること。	時間割の編成。
編制	団体などを組織すること。	婦人団体の編制。

ほしょう

語	意味	用例
保証	確かであると受け合うこと。	保証つきの品。
補償	損害を金品で埋め合わす。	事故の補償に悩む。

みとう

語	意味	用例
未到	まだ行きつかないこと。	前人未到の境地。
未踏	まだ足を踏み入れないこと。	人跡未踏の秘境。

みんぞく

語	意味	用例
民俗	人民の風俗。	民俗・風習を知る。
民族	同一地域の同一人種の集団。	民族衣装。

むじょう

語	意味	用例
無常	一定しないこと。	人生の無常。
無情	同情がないさま。非情。	無情にも鼻で笑う。

めいかい

語	意味	用例
明快	さっぱりと気持ちよいこと。	単純明快な論理。
明解	はっきりした解釈。	明解を与える。

やせい

語	意味	用例
野生	自然に野山に生長すること。	野生の馬。
野性	自然のままの本能的性質。	野性的。

ゆうぎ

語	意味	用例
遊戯	遊びたわむれること。	子供の遊戯。
遊技	遊びのわざ。	遊技場。

ゆうせい

語	意味	用例
優性	必ず次の代に遺伝する形質。	優性の法則。
優生	いい遺伝を保つこと。	優生保護法。
優勢	勢いが他より秀れること。	相手チームは優勢。

ようけん

語	意味	用例
要件	大切な用事。必要な条件。	要件を満たす。
用件	用事の種類・内容。	用件を伺う。

ようこう

語	意味	用例
要項	必要な事項。	募集要項。
要綱	大事な事がら。	会談の要綱。

同訓異義語の使い分け

「常用漢字音訓表」により、同じ読み方で漢字の違うものを示した。昭和48年6月18日に国語審議会漢字部会が作成し、「参考資料」として公表したものを参考に、用例などを整理したものである。

あう
合う—計算が合う。服が体に合う。
会う—客と会う時刻。人に会いに行く。
遭う—災難に遭う。にわか雨に遭う。

あがる・あげる
上がる・上げる—地位が上がる。物価が上がる。腕前を上げる。
揚がる・揚げる—花火が揚がる。歓声が揚がる。たこを揚げる。船荷を揚げる。
挙げる—例を挙げる。全力を挙げる。

あく・あける
明く・明ける—背の明いた服。夜が明ける。
空く・空ける—席が空く。空き箱。家を空ける。時間を空ける。
開く・開ける—幕が開く。開いた口がふさがらない。窓を開ける。

あし
足—足の裏。手足。客足。
脚—机の脚(足)。えり脚(足)。

あたい
価—価が高くて買えない。商品に価を付ける。
値—そのものの持つ値。未知数xの値を求める。称賛に値する。

あたたかい・あたたかだ・あたたまる・あたためる
暖かい・暖かだ・暖まる・暖める—暖かい気持ち。暖かな毛布。暖まった空気。室内を暖める。
温かい・温かだ・温まる・温める—温かい料理。温かな家庭。心温まる話。スープを温める。

あたる・あてる
当たる・当てる—ボールが体に当たる。予報が当たる。胸に手を当てる。日光に当てる。当て外れ。
充てる—建築費に充(当)てる。保安要員に充(当)てる。

あつい
暑い—今年の夏は暑い。暑い部屋。
熱い—熱い湯。
厚い—厚い壁で隔てる。支持者の層が厚い。手厚いもてなし。

あと
跡—足の跡。苦心の跡が見える。
後—後の祭り。後を頼んで行く。

あぶら
油—油を流したような海面。水と油。
脂—仕事に脂がのる年ごろ。牛肉の脂。

あやまる
誤る—適用を誤る。誤りを見付ける。
謝る—謝って済ます。手落ちを謝る。

あらい
荒い—波が荒い。金遣いが荒い。
粗い—網の目が粗い。仕事が粗い。

あらわす・あらわれる
表す・表れる—言葉に表す。喜びを顔に表す。喜びの表れ。
現す・現れる—姿を現す。太陽が現れる。怪獣が現れる。
著す—書物を著す。

ある
有る—財源が有る。子が有る。
在る—日本はアジアの東に在る。在り方。

あわせる
合わせる—手を合わせて拝む。時計を合わせる。調子を合わせる。
併せる—二つの会社を併せる。両者を併せて考える。併せて健康を祈る。

いたむ・いためる
痛む・痛める—足が痛む。腰を痛める。
傷む・傷める—家が傷む。傷んだ果物。建物を傷める。
悼む—死を悼む。故人を悼む。

いる
入る—念の入った話。気に入る。
要る—金が要る。保証人が要る。

うける
受ける—注文を受ける。保護を受ける。
請ける—請け負う。下請け。

うつ
打つ—くぎを打つ。碁を打つ。
討つ—賊を討つ。義士の討ち入り。
撃つ—鉄砲を撃つ。いのししを猟銃で撃つ。

うつす・うつる
写す・写る—書類を写す。写真を写す。写真の中央に写っている人。
映す・映る—スクリーンに映す。壁に影が映る。鏡に姿が映る。

うむ・うまれる
生む・生まれる—新記録を生む。傑作を生む。京都に生まれる。
産む・産まれる—卵を産み付ける。産みの苦しみ。産み月。予定日が来てもなかなか産まれない。

うれい・うれえ
憂い・憂え—後顧(こうこ)の憂い(え)。災害を招く憂い(え)がある。
愁い—春の愁い。愁いに沈む。

える
得る—勝利を得る。許可を得る。
獲る—猟で熊を獲る。

おかす
犯す—過ちを犯す。法を犯す。
侵す—権利を侵(犯)す。国境を侵(犯)す。
冒す—危険を冒す。激しい雨を冒して行く。

おくる
送る—荷物を送る。卒業生を送る。
贈る—お祝いの品を贈る。感謝状を贈る。故人に位を贈る。

おくれる
遅れる—完成が遅れる。列車が遅れる。
後れる—気後れする。人に後れを取る。

おこす・おこる
起こす・起こる—体を起こす。訴訟を起こす。事件が起こる。持病が起こる。物事の起こり。
興す・興る—産業を興す。国が興る。

おさえる
押さえる—紙の端(はし)を押さえる。証拠を押さえる。要点を押さえる。
抑える—物価の上昇を抑える。要求を抑える。憤りを抑える。

おさまる・おさめる

収まる・収める―博物館に収まる。争いが収まる。効果を収める。成功を収める。目録に収める。

納まる・納める―品物が納まった。国庫に納まる。税を納める。注文の品を納める。

治まる・治める―国内がよく治まる。痛みが治まる。領地を治める。

修まる・修める―身持ちが修まらない。学を修める。

おす

押す―ベルを押す。横車を押す。

推す―会長に推す。推して知るべしだ。

おどる

踊る―リズムに乗って踊る。盆踊り。

躍る―小躍りして喜ぶ。胸が躍る。

おもて

表―裏と表。表で遊ぶ。表向き。

○常用漢字の注意

(1)点について

○うつもの

伏 状 然 獄 博 捕 浦

○うたないもの

突 類 抜 涙 寛 免 逸

(2)たて棒について

○はねるもの

投 打 押 水 永 小 原

○はねないもの

木 枝 休 未 東 糸 系

(3)彐と⺕について

○つきぬけないもの

帰 婦 掃 侵 浸 雪 急

○つきぬけるもの

書 筆 律 君 妻 事 兼

面―面も振らずまっしぐらに。矢面に立つ。

おりる・おろす

降りる・降ろす―電車を降りる。霜が降りる。次の駅で降ろしてください。主役から降ろされた。

下りる・下ろす―幕が下りる。錠が下りる。枝を下ろす。貯金を下ろす。

卸す―小売りに卸す。卸し値。

かえす・かえる

返す・返る―もとの持ち主に返す。借金を返す。恩返し。貸した金が返る。正気に返る。返り咲き。

帰す・帰る―親もとへ帰す。故郷へ帰る。帰らぬ人となる。帰り車。

かえりみる

顧みる―過去を顧みる。顧みて他を言う。

省みる―自らを省みる。省みて恥じるところがない。

かえる・かわる

変える・変わる―形を変える。観点を変える。位置が変わる。声変わり。

換える・換わる―物を金に換える。名義を書き換える。金に換わる。

替える・替わる―振り替える。替え歌。入れ替わる。社長が替わる。

代える・代わる―書面をもってあいさつに代える。父に代わって言う。

かおる

薫る―風薫る。

香り―茶の香り。

かかる・かける

掛かる・掛ける―迷惑が掛かる。腰を掛ける。壁掛け。掛け売り。

懸かる・懸ける―月が中天に懸かる。優勝が懸かる。賞金を懸ける。命を懸けて戦う。

架かる・架ける―橋が架かる。橋を架ける。電線を架ける。

係る―本件に係る訴訟。係り結び。

かげ

陰―山の陰。陰の声。陰口を利(き)く。

影―障子に影が映る。影が薄い。

かた

形―自由形。跡形もない。

型―型にはまる。一九七〇年型。鋳型。

かたい

堅い―堅い材木。堅炭(かたずみ)。手堅い商売。

固い―団結が固い。頭が固い。

硬い―硬い石。硬い表現。

かわ

皮―皮をはぐ。とらの皮。木の皮。

革―革のくつ。なめし革。

かわく

乾く―空気が乾く。干し物が乾く。

渇く―のどが渇く。渇きを覚える。

きく

聞く―物音を聞いた。話し声を聞く。

聴く―音楽を聴く。国民の声を聴く。

効く―薬が効く。宣伝が効く。

利く―左手が利く。機転が利く。

きわまる・きわめる

窮まる・窮める―進退窮まる。窮まりなき宇宙。真理を窮(究)める。

極まる・極める―不都合極まる言動。山頂を極める。栄華を極める。

究める―学を究(窮)める。

くら

倉―倉敷料。倉荷証券。

蔵―蔵座敷。蔵払い。

こえる・こす

越える・越す―山を越える。峠を越す。

超える・超す―人間の能力を超(越)える。百万円を超(越)える額。

こおる・こおり

凍る―湖水が凍る。土が凍る。

氷―氷が張った。氷をかく。氷砂糖。

さがす

捜す―うちの中を捜す。犯人を捜す。

探す―空き家を探(捜)す。あらを探(捜)す。

さく・さける

裂く―布を裂く。仲を裂く。

割く―時間を割く。紙面を割く。

さげる

下げる―値段を下げる。軒に下げる。

提げる―手に提げる。手提げかばん。

さす

差す―腰に刀を差す。差し出す。

指す―目的地を指して進む。指し示す。

刺す―人を刺す。とげが刺さる。

さます・さめる

覚ます・覚める―太平の眠りを覚ます。迷いを覚ます。目が覚める。寝覚めが悪い。

冷ます・冷める―湯冷まし。湯が冷める。料理が冷める。熱が冷める。

しずまる・しずめる

静まる・静める―心が静まる。あらしが静まる。鳴りを静める。気を静める。

鎮まる・鎮める―内乱が鎮まる。反乱を鎮める。痛みを鎮める。

沈める―船を沈める。

しぼる
絞る―手ぬぐいを絞る。絞り染め。
搾る―乳を搾る。搾り取る。

しまる・しめる
締まる・締める―ひもが締まる。引き締まった顔。心を引き締める。申し込みの締め切り。
絞まる・絞める―首が絞まる。首を絞める。羽交(はが)い絞め。
閉まる・閉める―戸が閉まる。ふたを閉める。店を閉める。

すすめる
進める―前へ進める。時計を進める。
勧める―入会を勧める。転地を勧める。
薦める―候補者として薦める。

する
刷る―名刺を刷る。刷り物。
擦る―転んでひざを擦りむく。擦り傷。

そう
沿う―川沿いの家。線路に沿って歩く。
添う―影の形に添うように。連れ添う。

そなえる・そなわる
備える・備わる―台風に備える。調度品を備える。必要品はすべて備わっている。人徳が備わる。
供える―お神酒(みき)を供える。お供え物。

たえる
堪える―任に堪える。鑑賞に堪えない。
耐える―重圧に耐（堪）える。風雪に耐（堪）える。

たずねる
尋ねる―道を尋ねる。由来を尋ねる。
訪ねる―知人を訪ねる。史跡を訪ねる。

たたかう
戦う―敵と戦う。
闘う―病気と闘う。

たつ
断つ―退路を断つ。快刀乱麻を断つ。
絶つ―命を絶つ。消息を絶つ。
裁つ―生地(きじ)を裁つ。紙を裁つ。

たつ・たてる
立つ・立てる―演壇に立つ。席を立つ。柱を立てる。計画を立てる。
建つ・建てる―家が建つ。ビルを建てる。銅像を建てる。建て前。

たっとい・とうとい
尊い―尊い神。尊い犠牲を払う。
貴い―貴い資料。貴い体験。

たま
玉―玉にきず。目の玉。玉をみがく。
球―電気の球。球を投げる。
弾―ピストルの弾。

つかう
使う―機械を使って仕事をする。重油を使う。
遣う―気遣う。心遣い。小遣い銭。

つく・つける
付く・付ける―墨が顔に付く。利息が付く。名を付ける。気を付ける。
着く・着ける―席に着く。手紙が着く。船を岸に着ける。衣服を身に着ける。仕事に手を着ける。
就く・就ける―床に就く。職に就く。役に就ける。

つぐ
次ぐ―事件が相次ぐ。富士山に次ぐ山。
継ぐ―布を継ぐ。跡を継ぐ。引き継ぐ。
接ぐ―木を接ぐ。骨を接ぐ。接ぎ木。

つくる
作る―米を作る。規則を作る。
造る―船を造る。庭園を造る。

つつしむ
慎む―身を慎む。酒を慎む。
謹む―謹んで聞く。謹んで祝意を表す。

つとめる
努める―完成に努める。解決に努める。
勤める―会社に勤める。勤め人。
務める―議長を務める。主役を務める。

とく・とける
解く・解ける―結び目を解く。包囲を解く。問題を解く。会長の任を解かれる。ひもが解ける。雪解け。
溶く・溶ける―絵の具を溶く。砂糖が水に溶ける。地域社会に溶け込む。

ととのう・ととのえる
整う・整える―整った文章。隊列を整える。身辺を整える。
調う・調える―嫁入り道具が調う。晴れ着を調える。費用を調える。

とぶ
飛ぶ―鳥が空を飛ぶ。アフリカに飛ぶ。
跳ぶ―みぞを跳ぶ。三段跳び。

とまる・とめる
止まる・止める―交通が止まる。水道が止まる。息を止める。通行止め。
留まる・留める―小鳥が木の枝に留（止）まる。ボタンを留める。書留。
泊まる・泊める―船が港に泊まる。宿直室に泊まる。友達を家に泊める。

とる
取る―手に取る。資格を取る。
採る―血を採る。会議で決を採る。
執る―筆を執る。事務を執る。
捕る―ねずみを捕る。生け捕る。
撮る―写真を撮る。映画を撮る。

ない
無い―金が無い。無い物ねだり。
亡い―亡き父をしのぶ。

なおす・なおる
直す・直る―誤りを直す。機械を直す。
治す・治る―風邪を治す。傷が治る。

なか
中―箱の中。両者の中に入る。
仲―仲がいい。仲を取り持つ。

ながい
長い―長い髪の毛。長い道。気が長い。
永い―ついに永い眠りに就く。永の別れ。末永く契る。

ならう
習う―先生にピアノを習う。見習う。
倣う―前例に倣う。

のせる・のる
乗せる・乗る―母を飛行機に乗せて帰す。電波に乗せる。馬に乗る。時流に乗る。
載せる・載る―自動車に貨物を載せる。雑誌に広告を載せる。机に載っている本。新聞に載った事件。

のばす・のびる
伸ばす・伸びる―手足を伸ばす。勢力を伸ばす。草が伸びる。身長が伸びる。学力が伸びる。
延ばす・延びる―出発を延ばす。開会を延ばす。地下鉄が郊外まで延びる。寿命が延びる。

のぼる
上る―水銀柱が上る。川を上る。
登る―山に登る。木に登る。
昇る―日が昇(上)る。天に昇(上)る。

はえ・はえる

映え・映える―夕映え。紅葉が夕日に映える。
栄え―栄えある勝利。見事な出来栄え。

はかる

図る―合理化を図る。解決を図る。
計る―時間を計る。計り知れない恩恵。
測る―水深を測る。距離を測る。
量る―目方を量る。升で量る。
謀る―暗殺を謀る。悪事を謀る。
諮る―審議会に諮る。

はじまる・はじめ・はじめて・はじめる

初め・初めて―初めこう思った。初めての経験。
始まる・始め・始める―会が始まる。始めと終わり。仕事を始める。

はな

花―花も実もない。花の都。花形。
華―華やか。華々しい。

はなす・はなれる

離す・離れる―間を離す。離れ島。職を離れる。離れ離れになる。
放す・放れる―鳥を放す。見放す。矢が弦を放れる。放れ馬。

はやい

早い―時期が早い。気が早い。早口。
速い―流れが速い。投手の球が速い。

ひ

火―火が燃える。火に掛ける。
燈―燈がともる。遠くに町の燈が見える。

ひく

引く―綱を引く。線を引く。
弾く―ピアノを弾く。ショパンの曲を弾く。

ふえる・ふやす

殖える・殖やす―財産が殖える。財産を殖やす。

○常用漢字による書きかえ

愛慾→愛欲　決潰→決壊
暗誦→暗唱　月蝕→月食
衣裳→衣装　訣別→決別
遺蹟→遺跡　交叉→交差
陰翳→陰影　曠野→広野
叡智→英知　媾和→講和
臆測→憶測　涸渇→枯渇
恩誼→恩義　混淆→混交
快濶→快活　根柢→根底
恢復→回復　昏迷→混迷
活溌→活発　雑沓→雑踏
肝腎→肝心　撒布→散布
機智→機知　刺戟→刺激
奇蹟→奇跡　蒐集→収集
技倆→技量　障碍→障害
焦躁→焦燥　颱風→台風
蒸溜→蒸留　煖房→暖房
書翰→書簡　智慧→知恵
抒情→叙情　鄭重→丁重
試煉→試練　碇泊→停泊
侵蝕→侵食　顛倒→転倒
滲透→浸透　曝露→暴露
訊問→尋問　醱酵→発酵
制禦→制御　抜萃→抜粋
尖鋭→先鋭　反撥→反発
銓衡→選考　諷刺→風刺
煽動→扇動　編輯→編集
尖端→先端　抛棄→放棄
綜合→総合　防禦→防御
頽廃→退廃　諒承→了承

増える・増やす―人数が増える。水かさが増える。人数を増やす。

ふく

吹く―風が吹く。笛を吹く。
噴く―火を噴き出す。火山が煙を噴く。

ふける

更ける―夜が更ける。秋が更ける。
老ける―老けて見える。老け込む。

ふた

二―二重。二目と見られない。
双―双子。双葉。

ふね

舟―舟をこぐ。小舟。ささ舟。
船―船の甲板。船で帰国する。船旅。

ふるう

振るう―士気が振るう。刀を振るう。
震う―声を震わせる。身震い。
奮う―奮って参加する。奮い立つ。

まざる・まじる・まぜる

交ざる・交じる・交ぜる―麻が交ざっている。漢字仮名交じり文。交ぜ織り。
混ざる・混じる・混ぜる―酒に水が混ざる。西洋人の血が混じる。セメントに砂を混ぜる。

まち

町―町と村。町ぐるみの歓迎。町役場。
街―街を吹く風。学生の街。

まわり

回り―身の回り。胴回り。
周り―池の周り。周りの人。

みる

見る―遠くの景色を見る。面倒を見る。
診る―患者を診る。脈を診る。

もと

下―法の下の平等。一撃の下に倒した。
元―火の元。出版元。元が掛かる。
本―本を正す。本と末。
基―資料を基にする。基づく。

や

屋―屋根。酒屋。屋敷。
家―二階家。家主。家賃。

やぶる・やぶれる

破る・破れる―約束を破る。障子が破れる。平和が破れる。
敗れる―競技に敗れる。勝負に敗れる。

やわらかい・やわらかだ

柔らかい・柔らかだ―柔らかい毛布。身のこなしが柔らかだ。
軟らかい・軟らかだ―表現が軟（柔）らかい。軟（柔）らかな土。

よい

良い―品質が良い。成績が良い。
善い―善い行い。世の中のために善いことをする。

よむ

読む―本を読む。字を読む。秒読み。
詠む―和歌を詠む。一首詠む。

わかれる

分かれる―道が二つに分かれる。意見が分かれる。勝負の分かれ目。
別れる―幼い時に両親と別れる。家族と別れて住む。

わざ

業―至難の業。離れ業。軽業。業師。
技―柔道の技。技をみがく。

わずらう・わずらわす

煩う・煩わす―思い煩う。心を煩わす。
患う―胸を患う。三年ほど患う。

難読語の読みと意味

【音読みの語】

挨拶（あいさつ）　おじぎ。礼。
哀悼（あいとう）　悲しみいたむこと。
曖昧（あいまい）　はっきりしないこと。
隘路（あいろ）　狭い道。障害。
齷齪（あくせく）　こせこせすること。
悪辣（あくらつ）　ずるくあくどいこと。
圧巻（あっかん）　もっともすぐれた所。
斡旋（あっせん）　周旋。とりもち。
軋轢（あつれき）　こすれ合うこと。不和。
暗澹（あんたん）　見通しのないさま。
安堵（あんど）　心を安めること。安心。
行燈（あんどん）　昔の照明具の一種。
塩梅（あんばい）　味加減。ほどあい。
慰藉（いしゃ）　なぐさめること。
蝟集（いしゅう）　群がること。
委嘱（いしょく）　頼んで任せること。
一瞥（いちべつ）　ちらっと見ること。
一縷（いちる）　ひとすじ。かすか。
一斑（いっぱん）　一部分。一端。
夷狄（いてき）　えびす。野蛮人。
囲繞（いにょう）　とりまくこと。
萎靡（いび）　しおれなびくこと。
遺漏（いろう）　もれること。
慇懃（いんぎん）　ていねい。へりくだる。
咽喉（いんこう）　のど。たいせつな所。
隠棲（いんせい）　世を逃れること。
隠蔽（いんぺい）　おおい隠すこと。
湮滅（いんめつ）　消滅。もみ消し。
迂回（うかい）　遠まわり。

胡散（うさん）　あやしいこと。不審。
鬱蒼（うっそう）　こんもり茂った様子。
鬱憤（うっぷん）　たまった怒りや不満。
烏有（うゆう）　皆無。何もないこと。
蘊蓄（うんちく）　積み貯えた学識。
蘊奥（うんのう）　学問・技芸などの奥義。
英邁（えいまい）　特に優れているさま。
会釈（えしゃく）　おじぎ。
会得（えとく）　わかること。
衣紋（えもん）　衣服の着こなし方。
演繹（えんえき）　おし広げ述べること。
円滑（えんかつ）　なめらか。
怨嗟（えんさ）　うらみ嘆くこと。非難。
冤罪（えんざい）　無実の罪。ぬれぎぬ。
横溢（おういつ）　あふれ出ること。
押韻（おういん）　韻をふむこと。
押収（おうしゅう）　差し押さえること。
嘔吐（おうと）　食べたものを吐くこと。
懊悩（おうのう）　悩み。もだえ。苦悩。
鷹揚（おうよう）　ゆったりしている。
嗚咽（おえつ）　むせび泣くこと。
悪寒（おかん）　寒けのすること。
億劫（おっくう）　めんどうなこと。
汚穢（おわい）　けがらわしいこと。糞尿。
恩寵（おんちょう）　恵み。寵愛（ちょうあい）。
隠密（おんみつ）　江戸時代の探偵。
開眼（かいげん）　仏道の真理を悟る。
諧謔（かいぎゃく）　しゃれ。ユーモア。
邂逅（かいこう）　めぐりあい。
膾炙（かいしゃ）　口々に称賛すること。
介錯（かいしゃく）　かいぞえ。
晦渋（かいじゅう）　難解なこと。
改悛（かいしゅん）　前非を改めること。
灰燼（かいじん）　灰と燃え残り。

凱旋（がいせん）　戦いに勝って帰る。
街道（かいどう）　交通上重要な道路。
開闢（かいびゃく）　天地の開け始め。
傀儡（かいらい）　あやつり人形。
界隈（かいわい）　あたり。近所。
乖離（かいり）　そむき離れること。
瓦解（がかい）　物事が次々崩れること。
瑕瑾（かきん）　傷。欠点。過失。
矍鑠（かくしゃく）　老いて元気な様子。
馘首（かくしゅ）　首切り。免職。
鶴首（かくしゅ）　首を伸ばして待つこと。
角逐（かくちく）　互いに競争すること。
攪拌（かくはん）　かきまわすこと。
擱筆（かくひつ）　筆を置くこと。
苛酷（かこく）　むごいようす。
瑕疵（かし）　玉の傷。欠点。過失。
鍛冶（かじ）　金属を練（ね）ること。
呵責（かしゃく）　責め苦しめること。
脚気（かっけ）　栄養失調症の一つ。
恰好（かっこう）　姿。ころあい。
喝采（かっさい）　どっとほめる声。
甲冑（かっちゅう）　よろいかぶと。
葛藤（かっとう）　もつれ。争い。
喝破（かっぱ）　正しくない説を破る。
恰幅（かっぷく）　からだつき。
闊歩（かっぽ）　いばって歩くこと。
割烹（かっぽう）　調理。料理。
刮目（かつもく）　目をみはること。注目。
画餅（がべい）　役に立たないこと。
歌留多（かるた）　遊び、ばくちに使う札。
伽藍（がらん）　寺院。寺。
間歇（かんけつ）　時をおいて起こる。
箝口（かんこう）　口どめをすること。
癇癪（かんしゃく）　怒りやすい性質。
緩衝（かんしょう）　不和を和らげる。

肝腎（かんじん）　きわめて重要なこと。
完遂（かんすい）　なしとげること。
贋造（がんぞう）　実物に似せて作る。
勘当（かんどう）　君臣・肉親の縁を切る。
艱難（かんなん）　難儀。苦労。
旱魃（かんばつ）　ひでり。水枯れ。
甲板（かんぱん）　船の床。デッキ。
完璧（かんぺき）　完全無欠。
涵養（かんよう）　養い育てること。育成。
貫禄（かんろく）　威厳。おもみ。
義捐（ぎえん）　寄付。義金。
麾下（きか）　指揮下。旗のもと。
亀鑑（きかん）　行為の基準になるもの。
忌諱（きき）　いみはばかること。
飢饉（ききん）　凶作。
危惧（きぐ）　おそれ。心配。
揮毫（きごう）　書画を書くこと。
帰趨（きすう）　ゆきつくところ。なりゆき。
毀損（きそん）　破り傷つけること。
稀代（きたい）　世にまれなこと。
忌憚（きたん）　遠慮。いみはばかる。
吃音（きつおん）　どもる音声。
拮抗（きっこう）　対抗。対立。
屹立（きつりつ）　高くそびえ立つこと。
驥尾（きび）　すぐれた人のうしろ。
詭弁（きべん）　道理に合わない弁論。
欺瞞（ぎまん）　あざむきだますこと。
華奢（きゃしゃ）　かぼそく弱々しい。
杞憂（きゆう）　とりこし苦労。
糾弾（きゅうだん）　問い正し責める。
狭隘（きょうあい）　狭いこと。
驚愕（きょうがく）　非常に驚くこと。
恐喝（きょうかつ）　おどしつけること。
胸襟（きょうきん）　胸のうち。心中。

恐懼(きょうく) おそれかしこまる。
校合(きょうごう) 比べ合わせる。校正。
僥倖(ぎょうこう) 思いがけない幸い。
教唆(きょうさ) 教えそそのかすこと。
矜持(きょうじ) 誇り。プライド。
強靱(きょうじん) しなやかで強い。
矯正(きょうせい) 欠点を直すこと。
形相(ぎょうそう) 顔かたち。姿。
怯懦(きょうだ) 臆病で意志が弱い。
虚妄(きょもう) うそ。いつわり。
基督(きりすと) イエス=キリスト。
羇旅(きりょ) 旅行。たび。
僅少(きんしょう) わずか。少しばかり。
金子(きんす) 貨幣。金銭。
究竟(くきょう) 終極。きわみ。
苦衷(くちゅう) 苦しい心中。
句読点(くとうてん) 句点と読点。
愚昧(ぐまい) おろかなこと。
工面(くめん) 金銭を整えること。
薫陶(くんとう) 徳をもって感化する。
炯眼(けいがん) 鋭い目。眼力。
敬虔(けいけん) 敬いつつしむこと。
迎合(げいごう) 他人におもねること。
京師(けいし) 都。京都。
形而上(けいじじょう) 形を離れたもの。
閨秀(けいしゅう) 学芸に優れた婦人。
傾城(けいせい) 美人。遊女。
軽重(けいちょう) 軽いと重い。重さ。
軽佻(けいちょう) 軽はずみなこと。
稀有(けう) まれなこと。
怪我(けが) 負傷。不測の結果。
逆旅(げきりょ) 宿屋。旅。
逆鱗(げきりん) 天子の怒り。
下向(げこう) 都から地方へ行くこと。
夏至(げし) 二十四気の一つ。

化身(けしん) 生まれ変わり。
外題(げだい) 書物の標題。芝居の題。
解毒(げどく) 体内の毒を無毒にする。
健気(けなげ) 殊勝。かいがいしい。
解熱(げねつ) 高熱の体温をさげる。
懸念(けねん) 執着。心配。
下馬評(げばひょう) 世間でする評判。
仮病(けびょう) にせの病気。
下郎(げろう) 下男。
嫌悪(けんお) 憎みきらうこと。
狷介(けんかい) 片意地。
乾坤(けんこん) 天と地。陰と陽。
減殺(げんさい) 少なくすること。
牽制(けんせい) ひきつけ制御する。
眷属(けんぞく) 親族。一族。
還俗(げんぞく) 僧から俗人にかえる。
倦怠(けんたい) あきること。疲れ。
健啖(けんたん) 大食。多く食べること。
言質(げんち) 証拠となることば。
喧伝(けんでん) 世間に言いはやす。
絢爛(けんらん) きらびやかなさま。
眩惑(げんわく) 目がくらみ迷うこと。
語彙(ごい) 語の集まり。用語。
拘引(こういん) 引き寄せること。
後裔(こうえい) 子孫。後胤。
好悪(こうお) 好き嫌い。
劫火(ごうか) 世界を焼き尽くす大火。
狡猾(こうかつ) 悪がしこくずるい。
巷間(こうかん) 世間。世上。
交誼(こうぎ) つきあいのよしみ。
香華(こうげ) 仏前にそなえる香と花。
肯綮(こうけい) ものごとの急所。要所。
膏肓(こうこう) 治療の及ばない部分。
恍惚(こうこつ) うっとりする様子。
交叉(こうさ) すじかいになること。

嚆矢(こうし) 物事の始め。始まり。
格子(こうし) 寝殿造りの建具の一つ。
好餌(こうじ) うまい餌。
幸甚(こうじん) 非常にありがたい。
好事家(こうずか) 物好きな人。
巧緻(こうち) 巧みで細かいさま。
膠着(こうちゃく) ねばりつくこと。
拘泥(こうでい) こだわること。
更迭(こうてつ) その役目を変えること。
叩頭(こうとう) 頭を地につける礼。
勾配(こうばい) 傾斜。斜面。
高邁(こうまい) 秀れて気高いようす。
涸渇(こかつ) 水分が失われること。
古稀(こき) 七十歳。
極意(ごくい) 秘伝。奥義。
沽券(こけん) 体面。面目。
股肱(ここう) 頼みとする部下。
鼓吹(こすい) 元気づけること。
炬燵(こたつ) 暖をとる設備。
滑稽(こっけい) 冗談。かいぎゃく。
忽然(こつぜん) にわかに。突然。
糊塗(こと) とりつくろいごまかす。
誤謬(ごびゅう) あやまり。まちがい。
古文書(こもんじょ) 古い文書。
固陋(ころう) 頑固で見識の狭いこと。
蠱惑(こわく) 人をまどわすこと。
混淆(こんこう) 入りまじること。
今昔(こんじゃく) 今と昔。
紺青(こんじょう) あざやかな藍(あい)色。
渾身(こんしん) 体全体。全身。
昏睡(こんすい) 意識不明で眠ること。
痕跡(こんせき) あと。あとかた。
渾然(こんぜん) 区別のつかない様子。
献立(こんだて) 料理の種類や順序。
混沌(こんとん) 不分明なさま。

困憊(こんぱい) 苦しみ疲れること。
猜疑(さいぎ) そねみ疑うこと。
最期(さいご) 命の終わる時。臨終。
采配(さいはい) 指図。指揮。
削減(さくげん) けずり減らすこと。
錯誤(さくご) あやまり。まちがい。
錯綜(さくそう) いりまじること。
索莫(さくばく) さびしいさま。
炸裂(さくれつ) 爆弾が破裂すること。
些細(ささい) わずか。いささか。
桟敷(さじき) 高く作られた見物席。
挫折(ざせつ) くじけ折れること。
早急(さっきゅう) 非常にいそぐこと。
颯爽(さっそう) さわやかなさま。
早速(さっそく) すみやか。すぐ。
雑踏(ざっとう) 人ごみ。こみあうこと。
雑駁(ざっぱく) 不統一なこと。
殺戮(さつりく) むごたらしく殺す。
蹉跌(さてつ) つまずくこと。失敗。
茶飯事(さはんじ) ありふれたこと。
茶話会(さわかい) 茶を飲み話す会。
散佚(さんいつ) 散り失せること。
慚愧(ざんき) はじいること。
懺悔(ざんげ) 罪悪を悔い告白する。
讒言(ざんげん) 偽り悪口を言うこと。
暫時(ざんじ) しばらく。
斬新(ざんしん) きわめて新しいこと。
燦然(さんぜん) きらきらと光るさま。
酸鼻(さんび) むごたらしいこと。
参籠(さんろう) おこもり。
恣意(しい) 気ままにふるまう。
思惟(しい) 考えること。思考。
弛緩(しかん) ゆるみ。
爾後(じご) この後。その後。
施行(しこう) 実施。執行。

嗜好(しこう)　好みたしなむこと。
示唆(しさ)　そそのかすこと。暗示。
仔細(しさい)　詳しい事情。事のわけ。
孜々(しし)　仕事に励むさま。
私淑(ししゅく)　ひそかに慕い学ぶこと。
市井(しせい)　人家の集まっている所。
自重(じちょう)　行動に気をつける。
桎梏(しっこく)　手かせと足かせ。束縛。
昵懇(じっこん)　親しいこと。懇意。
叱咤(しった)　大声で叱ること。
疾病(しっぺい)　病気。
自負(じふ)　自信があって誇ること。
諮問(しもん)　相談すること。
赤銅(しゃくどう)　銅と金・銀の合金。
灼熱(しゃくねつ)　焼けて熱くなる。
邪険(じゃけん)　不人情。無慈悲。
藉口(しゃこう)　かこつけること。
奢侈(しゃし)　おごり。ぜいたく。
洒脱(しゃだつ)　俗気がないこと。脱俗。
借款(しゃっかん)　貸し借り。借金。
若干(じゃっかん)　いくらか。
惹起(じゃっき)　引き起こすこと。
娑婆(しゃば)　人間界。現世。
煮沸(しゃふつ)　煮えたぎらせること。
驟雨(しゅうう)　にわか雨。夕立。
終焉(しゅうえん)　命の終わり。
祝儀(しゅうぎ)　お祝いの儀式。引出物。
祝言(しゅうげん)　祝い。婚礼。
執着(しゅうじゃく)　深く思い込む。
蒐集(しゅうしゅう)　とり集めること。
充塡(じゅうてん)　詰め込むこと。
執念(しゅうねん)　固く思い込むこと。
蹂躙(じゅうりん)　踏みにじること。
収斂(しゅうれん)　ちぢめること。
夙夜(しゅくや)　早朝から夜遅くまで。

首肯(しゅこう)　承知すること。
首相(しゅしょう)　内閣総理大臣。
入水(じゅすい)　投身。身投げ。
呪咀(じゅそ)　呪い。まじない。
出来(しゅったい)　事件などが起きる。
撞木(しゅもく)　鐘を鳴らす棒。
須臾(しゅゆ)　しばらく。わずかの間。
腫瘍(しゅよう)　異常なはれもの。
修羅(しゅら)　阿修羅。インドの鬼神。
逡巡(しゅんじゅん)　ためらうこと。
浚渫(しゅんせつ)　水底をさらうこと。
潤沢(じゅんたく)　豊か。豊富。
蠢動(しゅんどう)　うごめくこと。
純朴(じゅんぼく)　素直で飾らない。
駿馬(しゅんめ)　秀れた馬。
承引(しょういん)　承知。承諾。
哨戒(しょうかい)　敵襲を警戒する。
情誼(じょうぎ)　人情の義理。よしみ。
捷径(しょうけい)　近道。手早い方法。
上梓(じょうし)　図書を出版すること。
瀟洒(しょうしゃ)　こぎれいなようす。
成就(じょうじゅ)　できあがること。
精進(しょうじん)　行いを慎む。努力。
憔悴(しょうすい)　やせ衰えること。
饒舌(じょうぜつ)　おしゃべり。
焦燥(しょうそう)　いらいらすること。
常套(じょうとう)　ありふれたしかた。
成仏(じょうぶつ)　死ぬこと。
招聘(しょうへい)　丁寧に招くこと。
嘱託(しょくたく)　仕事を委嘱する。
所作(しょさ)　ふるまい。仕事。
所詮(しょせん)　結局。つまり。
熾烈(しれつ)　勢いの激しいこと。
塵埃(じんあい)　ちり。ほこり。ごみ。
塵芥(じんかい)　ちりあくた。ごみ。

震撼(しんかん)　震え動くこと。
呻吟(しんぎん)　苦しみうめくこと。
深紅(しんく)　濃い紅色。
箴言(しんげん)　格言。戒めとなる言葉。
真摯(しんし)　まじめなさま。
親炙(しんしゃ)　その人に感化される。
斟酌(しんしゃく)　くみとること。忖度。
尽瘁(じんすい)　力を尽くすこと。
甚大(じんだい)　非常に大きいこと。
滲透(しんとう)　しみとおること。
辛辣(しんらつ)　非常に手厳しいこと。
垂涎(すいえん)　強く物を欲しがること。
遂行(すいこう)　成し遂げること。
推敲(すいこう)　字句を練り直すこと。
出納(すいとう)　金銭、物品の出し入れ。
推輓(すいばん)　推挙。推薦。
趨勢(すうせい)　なりゆき。傾向。
杜撰(ずさん)　粗漏。粗雑。
素姓(すじょう)　血筋。生まれ。
寸毫(すんごう)　極めてわずかなこと。
精悍(せいかん)　鋭く強いこと。
逝去(せいきょ)　死去。遠逝。
贅言(ぜいげん)　無用の語。多弁。
正鵠(せいこく)　物事の急所。要点。
凄惨(せいさん)　むごたらしいこと。
脆弱(ぜいじゃく)　もろくて弱いこと。
凄愴(せいそう)　痛ましいこと。
精緻(せいち)　細かく詳しいこと。
掣肘(せいちゅう)　おさえること。制約。
碩学(せきがく)　大学者。大家。
寂寞(せきばく)　ものさびしいさま。
寂寥(せきりょう)　ものさびしい様子。
折檻(せっかん)　人を強くいさめる。
席巻(せっけん)　片はしから侵略する。
折衝(せっしょう)　相手とのかけひき。

雪辱(せつじょく)　恥をそそぐこと。
窃盗(せっとう)　こっそり盗むこと。
刹那(せつな)　極めて短い時間。
尖鋭(せんえい)　鋭く急進的なこと。
僭越(せんえつ)　身分を超えること。
銓衡(せんこう)　よく調べて選ぶ。
穿鑿(せんさく)　吟味。ほじくること。
漸次(ぜんじ)　だんだん。次第に。
先蹤(せんしょう)　前例。
先鞭(せんべん)　他に先んずる。
羨望(せんぼう)　羨しく思うこと。
闡明(せんめい)　道理を明白にする。
殲滅(せんめつ)　皆殺し。掃滅。
戦慄(せんりつ)　おそれ震えること。
川柳(せんりゅう)　雑俳の一つ。
象嵌(ぞうがん)　金工術の一つ。
蒼穹(そうきゅう)　青空。蒼天。
雑巾(ぞうきん)　よごれをふく布。
走狗(そうく)　人に使われる者。手下。
巣窟(そうくつ)　悪徒のすみか。
象牙(ぞうげ)　象のあごの二本の門歯。
造詣(ぞうけい)　学問などにすぐれる。
糟糠(そうこう)　貧しい食べ物。
相好(そうごう)　顔かたち。顔つき。
相剋(そうこく)　互いに相争うこと。
雑言(ぞうごん)　悪口。むだ話。
操作(そうさ)　やりくりすること。
造作(ぞうさ)　面倒。厄介。もてなし。
相殺(そうさい)　差し引き帳消しにする。
騒擾(そうじょう)　騒ぎ。騒動。
雑炊(ぞうすい)　野菜を入れたかゆ。
雑兵(ぞうひょう)　身分の低い兵士。
双璧(そうへき)　一対の玉。両雄。
挿話(そうわ)　逸話。エピソード。
遡及(そきゅう)　過去にさかのぼること。

仄聞（そくぶん） かすかに聞くこと。
齟齬（そご） 食い違うこと。
粗忽（そこつ） 軽はずみなこと。誤り。
咀嚼（そしゃく） よくかみ砕くこと。
沮喪（そそう） 元気がなくなるさま。
塑像（そぞう） 彫刻の原型となる像。
措置（そち） 取りはからうこと。
疎通（そつう） さわりなく通じること。
遜色（そんしょく） 劣っている様子。
忖度（そんたく） おしはかること。
退嬰（たいえい） しりごみ。
大音声（だいおんじょう） 大声。
対峙（たいじ） 対立。互いににらみあうこと。
堆積（たいせき） つみ重なること。
対蹠的（たいせきてき） 正反対。
泰斗（たいと） その道の大家。
駘蕩（たいとう） 春ののどかなさま。
兌換（だかん） 取りかえること。
唾棄（だき） いみきらうこと。軽蔑。
拿捕（だほ） 船などを捕らえること。
端倪（たんげい） はかり知ること。
短冊（たんざく） 和歌を書く細長い紙。
耽溺（たんでき） 酒色におぼれること。
団欒（だんらん） 親しい者の集まり。
知己（ちき） 知りあい。知人。
逐次（ちくじ） 次々と。順次。
逐電（ちくでん） 姿をくらますこと。
知悉（ちしつ） 知りつくすこと。精通。
蟄居（ちっきょ） 閉じこもること。
緻密（ちみつ） きめが細かいこと。
抽出（ちゅうしゅつ） ぬき出すこと。
抽籤（ちゅうせん） くじびき。
紐帯（ちゅうたい） つながり。紐と帯。
躊躇（ちゅうちょ） ためらい。

厨房（ちゅうぼう） 料理場。台所。
稠密（ちゅうみつ） こみあっていること。
寵愛（ちょうあい） 特別に愛すること。
弔慰（ちょうい） 遺族を慰めること。
鳥瞰（ちょうかん） 俯瞰。展望。
重畳（ちょうじょう） この上ない満足。
打擲（ちょうちゃく） 打ちたたくこと。
重複（ちょうふく） 重なりあうこと。
凋落（ちょうらく） 没落。落ちぶれる。
跳梁（ちょうりょう） 横行する。
直截（ちょくせつ） すぐ決裁すること。
猪突（ちょとつ） 向こう見ずなこと。
佇立（ちょりつ） たたずむこと。停立。
椿事（ちんじ） 思いがけぬ大きな事件。
珍重（ちんちょう） 大切にすること。
沈澱（ちんでん） 液体中に沈むこと。
闖入（ちんにゅう） 突然に入りこむ。
陳腐（ちんぷ） 古くさいようす。
追従（ついしょう） こびへつらうこと。
追悼（ついとう） 死者をしのび悼む。
痛痒（つうよう） 痛みとかゆみ。
定款（ていかん） 会社などの規則。
涕泣（ていきゅう） 涙を流して泣く。
庭訓（ていきん） 家庭教育。しつけ。
体裁（ていさい） 外から見える形。
抵触（ていしょく） さしさわり。
泥濘（でいねい） ぬかるみ。
碇泊（ていはく） 碇をおろしてとまる。
剔出（てきしゅつ） えぐり出すこと。
覿面（てきめん） はっきり現れること。
鉄槌（てっつい） かなづち。ハンマー。
転嫁（てんか） 責任をなすりつける。
添削（てんさく） 詩文に手を入れる。
恬淡（てんたん） あっさりして無欲。
奠都（てんと） 都を定めること。

顛倒（てんとう） さかさま。
天稟（てんぴん） 天性。天資。
顛末（てんまつ） 首尾。一部始終。
纏綿（てんめん） からみつくこと。
韜晦（とうかい） 隠しくらますこと。
恫喝（どうかつ） おびやかすこと。
慟哭（どうこく） 大声をあげて泣く。
洞察（どうさつ） 見ぬくこと。
踏襲（とうしゅう） あとをつぐこと。
搭乗（とうじょう） 乗りこむこと。
頭取（とうどり） かしらとなる人。
登攀（とうはん） よじのぼること。
掉尾（とうび） 最後に勢いを出すこと。
獰猛（どうもう） 性格が猛々しいこと。
瞠目（どうもく） 目をみはること。
陶冶（とうや） 人格を高めること。
逗留（とうりゅう） 滞在。滞留。
棟梁（とうりょう） かしら。大工の親分。
禿頭（とくとう） はげ頭。光頭。
匿名（とくめい） 本名を隠すこと。
髑髏（どくろ） されこうべ。
途絶（とぜつ） とぎれること。
咄嗟（とっさ） 瞬間的な時間。
訥弁（とつべん） 口べた。まずい弁舌。
賭博（とばく） ばくち。
吐露（とろ） 吐き出すこと。
頓挫（とんざ） くじけること。
頓着（とんじゃく） 心配。関心。
頓首（とんしゅ） 手紙の終わりの敬語。
内訌（ないこう） うちわもめ。内乱。
乃至（ないし） ……から……まで。
捺印（なついん） 印を押すこと。押印。
難渋（なんじゅう） はかどらないこと。
柔和（にゅうわ） やさしく穏やか。
如実（にょじつ） 実際そのまま。

刃傷（にんじょう） 刃物で人を切る。
佞言（ねいげん） へつらいのことば。
捏造（ねつぞう） でっちあげ。
年貢（ねんぐ） 毎年納める金や物。
捻出（ねんしゅつ） ひねり出すこと。
徘徊（はいかい） うろつくこと。
稗史（はいし） 小説風の歴史。小説。
媒酌（ばいしゃく） 結婚をとりもつ。
胚胎（はいたい） きざすこと。
背馳（はいち） そむくこと。背反。
拝眉（はいび） 拝顔。
驀進（ばくしん） まっしぐらに進む。
剝奪（はくだつ） はぎとること。
白眉（はくび） 一番すぐれたもの。
暴露（ばくろ） 秘密があらわれること。
破綻（はたん） 破局。不成立。
跋扈（ばっこ） のさばること。横行。
抜粋（ばっすい） 要所の抜き書き。
抜擢（ばってき） ひきあげること。登用。
法被（はっぴ） 武家の中間の上着。
潑剌（はつらつ） 活発。ぴちぴち。
破廉恥（はれんち） 恥を恥と思わない。
挽歌（ばんか） 死者をいたむ詩歌。
晩餐（ばんさん） 夕食。
繁盛（はんじょう） にぎわい栄える。
反芻（はんすう） 繰り返し味わうこと。
範疇（はんちゅう） 分類。範囲。
反駁（はんばく） 反対し非難する。
頒布（はんぷ） わけくばること。
伴侶（はんりょ） 仲間。道づれ。
凡例（はんれい） 書物の要領を記す文。
庇護（ひご） 保護。かばい守ること。
非業（ひごう） 非運。災難。
批准（ひじゅん） 条約などを確認する。
畢竟（ひっきょう） つまりは。結局。

逼迫（ひっぱく）　切迫すること。窮迫。
誹謗（ひぼう）　そしること。中傷。
彌縫（びほう）　とりつくろうこと。
飛沫（ひまつ）　しぶき。とばっちり。
罷免（ひめん）　免職。
剽悍（ひょうかん）　すばやくて強い。
剽軽（ひょうきん）　気軽で滑稽なこと。
剽窃（ひょうせつ）　他人の作品を盗む。
豹変（ひょうへん）　急に変わること。
標榜（ひょうぼう）　公然とかかげる。
肥沃（ひよく）　地味がこえていること。
披瀝（ひれき）　包まず打ちあけること。
披露（ひろう）　公（おおやけ）に発表すること。
尾籠（びろう）　不作法。きたないこと。
頻出（ひんしゅつ）　続出すること。
便乗（びんじょう）　うまく利用する。
紊乱（びんらん）　乱れること。
吹聴（ふいちょう）　言いふらすこと。
訃音（ふいん）　死亡の知らせ。
夫子（ふうし）　先生、賢者の尊称。
風靡（ふうび）　なびかせること。
敷衍（ふえん）　詳しく述べひろげること。
俯瞰（ふかん）　高い所から見おろす。
馥郁（ふくいく）　いい匂いがする様子。
福音（ふくいん）　よろこばしい訪れ。
輻輳（ふくそう）　物がこみ合うこと。
浮腫（ふしゅ）　むくみ。
不肖（ふしょう）　おろかで父に似ない子。
無精（ぶしょう）　なまけること。
風情（ふぜい）　味わい。おもむき。
敷設（ふせつ）　作り敷くこと。
払拭（ふっしょく）　ぬぐい去ること。
仏頂面（ぶっちょうづら）　無愛想な顔。
払底（ふってい）　すっかりなくなる。

埠頭（ふとう）　波止場。岸壁。
蒲団（ふとん）　夜着。寝具。
不如意（ふにょい）　手元が苦しいこと。
不憫（ふびん）　あわれなこと。
俘虜（ふりょ）　とりこ。捕虜。
無聊（ぶりょう）　退屈。つれづれ。
雰囲気（ふんいき）　その場の気分。
紛糾（ふんきゅう）　事がもつれること。
忿怒（ふんぬ）　憤り怒ること。
忿懣（ふんまん）　憤りもだえること。
睥睨（へいげい）　横目でにらむこと。
閉塞（へいそく）　とじふさぐこと。閉鎖。
併呑（へいどん）　あわせのむこと。併合。
辟易（へきえき）　しりごみすること。
劈頭（へきとう）　まっさき。冒頭。
霹靂（へきれき）　雷。いかずち。
瞥見（べっけん）　ちらっと見ること。
編纂（へんさん）　編集すること。
鞭撻（べんたつ）　はげます。むちうつ。
辺鄙（へんぴ）　辺土。不便な土地。
片鱗（へんりん）　一片。一端。
茅屋（ぼうおく）　かやぶき。あばらや。
萌芽（ほうが）　めばえ。きざし。
抱懐（ほうかい）　心のうちに抱くこと。
蜂起（ほうき）　群がり起こること。
彷徨（ほうこう）　うろつくこと。
咆哮（ほうこう）　ほえること。
芳醇（ほうじゅん）　香り高く味が良い。
幇助（ほうじょ）　そばから手伝うこと。
豊饒（ほうじょう）　豊かに実ること。
呆然（ぼうぜん）　あっけにとられる。
法曹（ほうそう）　司法官。弁護士。
厖大（ぼうだい）　非常に大きい様子。
放擲（ほうてき）　投げうつこと。放棄。
放蕩（ほうとう）　酒色にふけること。

澎湃（ほうはい）　水のみなぎるさま。
朋輩（ほうばい）　友だち。仲間。
抱負（ほうふ）　心に抱く考え。計画。
彷彿（ほうふつ）　よく似ている様子。
泡沫（ほうまつ）　あわ。はかない存在。
放埒（ほうらつ）　気まま。不品行。
木鐸（ぼくたく）　世人を教導する人。
朴訥（ぼくとつ）　実直で無口な様子。
発起人（ほっきにん）　最初の計画者。
発作（ほっさ）　急に起こる病気の症状。
発足（ほっそく）　出発。活動開始。
発端（ほったん）　糸口。おこり。
布袋（ほてい）　七福神の一人。
補塡（ほてん）　補いうずめること。
梵鐘（ぼんしょう）　つり鐘。
煩悩（ぼんのう）　人間の欲望。迷い。
枚挙（まいきょ）　数えあげること。
邁進（まいしん）　勇み進むこと。直進。
埋没（まいぼつ）　うずもれること。
真面目（まじめ）　本気であること。
末期（まつご）　死にぎわ。臨終。
抹殺（まっさつ）　ぬり消すこと。
蔓延（まんえん）　はびこりひろがる。
未曽有（みぞう）　はじめてのこと。
冥利（みょうり）　神仏が与える利益。
無垢（むく）　汚れのないこと。純潔。
無碍（むげ）　障害がないこと。
謀叛（むほん）　主君にそむくこと。
瞑想（めいそう）　目を閉じて考える。
酩酊（めいてい）　ひどく酒に酔うこと。
明媚（めいび）　景色の美しい様子。
冥福（めいふく）　死後の幸福。
妄執（もうしゅう）　迷いによる執念。
蒙昧（もうまい）　無知で道理に暗い。
朦朧（もうろう）　おぼろげ。ぼんやり。

耄碌（もうろく）　おいぼれること。
没義道（もぎどう）　むごいようす。非道。
文盲（もんもう）　文字が読めないこと。
冶金（やきん）　金属を取り出すこと。
扼殺（やくさつ）　手で首をしめて殺す。
揶揄（やゆ）　からかうこと。
遺言（ゆいごん）　死後に残すことば。
由緒（ゆいしょ）　物事の起こり。由来。
誘拐（ゆうかい）　かどわかし。
雄渾（ゆうこん）　力強く勢いがいい。
遊説（ゆうぜい）　意見を説いてまわる。
遊山（ゆさん）　行楽。遊び。
容喙（ようかい）　口出し。干渉。
夭折（ようせつ）　若死に。早死に。
揺籃（ようらん）　ゆりかご。発展の始め。
礼讃（らいさん）　ほめたたえること。
磊落（らいらく）　快活でこだわらない。
烙印（らくいん）　焼き印。
落魄（らくはく）　おちぶれること。零落。
拉致（らち）　無理に連れ去ること。
埒外（らちがい）　範囲外。制限外。
喇叭（らっぱ）　管楽器の一つ。
辣腕（らつわん）　すご腕。
爛熟（らんじゅく）　熟しすぎること。
濫觴（らんしょう）　物の始め。起源。
懶惰（らんだ）　怠けること。怠惰。
爛漫（らんまん）　花が咲き乱れること。
襤褸（らんる）　ぼろぎれ。破れごろも。
俚諺（りげん）　卑近なことわざ。
罹災（りさい）　災害にあうこと。被災。
律義（りちぎ）　義理がたいこと。実直。
掠奪（りゃくだつ）　かすめ奪うこと。
柳眉（りゅうび）　美人の眉。
凌駕（りょうが）　他をしのぐこと。
領袖（りょうしゅう）　人のかしら。

凌辱(りょうじょく) 犯し辱める。
悋気(りんき) やきもち。嫉妬。
吝嗇(りんしょく) ひどい物惜しみ。
流罪(るざい) 罪人を遠方に流すこと。
流転(るてん) 限りなく移り変わる。
流布(るふ) 流れひろまること。
縷々(るる) こまごま。詳細に。
怜悧(れいり) 賢いこと。利発。
玲瓏(れいろう) 美しく光り輝くさま。
憐憫(れんびん) あわれみ。
漏洩(ろうえい) もれること。
老獪(ろうかい) 世慣れて悪賢いさま。
狼藉(ろうぜき) 乱暴。取り散らかす。
壟断(ろうだん) 利益を独占すること。
籠絡(ろうらく) まるめこむこと。
陋劣(ろうれつ) いやしいこと。卑劣。
緑青(ろくしょう) 銅のさび。
呂律(ろれつ) ことばの調子。
論駁(ろんばく) 他説の非を反論する。
歪曲(わいきょく) ゆがめ曲げること。
矮小(わいしょう) 丈が低く小さい。
賄賂(わいろ) 不正な贈物。袖の下。

【訓読みの語】

匕首(あいくち) つばのない短刀。
生憎(あいにく) 都合の悪いさま。
灰汁(あく) 灰のうわずみ。個性。癖。
欠伸(あくび) 疲れた時出る深い呼吸。
胡坐(あぐら) 足を組んで坐ること。
渾名(あだな) 愛称。異名。
可惜(あたら) 惜しくも。惜しむべき。
天晴(あっぱれ) 見事なさま。
袷(あわせ) 裏つきの着物。
許嫁(いいなずけ) 婚約者。フィアンセ。
漁火(いさりび) 魚を誘うための火。
稲荷(いなり) もと穀物の神。
刺青(いれずみ) ほりもの。
団扇(うちわ) あおいで風を起こす物。
自惚(うぬぼれ) 自負すること。
産土神(うぶすながみ) 氏神。鎮守の神。
産湯(うぶゆ) 赤子に使わせる湯。
石女(うまずめ) 子を生まない女。
閏年(うるうどし) 閏のある年。
五月蠅(うるさい) わずらわしい。
胡乱(うろん) 怪しいこと。不審。
似而非(えせ) 似ていて実は違うもの。
大晦日(おおみそか) 一年の最終の日。
大童(おおわらわ) 力の限り奮闘する。
陸稲(おかぼ) 畑に植える稲。
白粉(おしろい) お化粧に使う白い粉。
十八番(おはこ) 得意の技芸。
思惑(おもわく) 考え。評判。
案山子(かかし) 雀おどしの人形。
陽炎(かげろう) 春にたちのぼる蒸気。
飛白(かすり) 織物の模様の一種。
気質(かたぎ) 職業などに特有な気性。
固唾(かたず) 緊張して息をこらす。
合羽(かっぱ) 雨の時に着るもの。
首途(かどで) 旅立ち。出立。
冠木門(かぶきもん) 門の一種。
剃刀(かみそり) 刃物。才気鋭く果断。
硝子(がらす) 堅くて脆い透明な物質。
生糸(きいと) 繭から取ったままの糸。
気障(きざ) いやみ。気ざわり。
煙管(きせる) タバコを吸う道具。
生粋(きっすい) 純粋。
肌理(きめ) 表面の細かいあや。
香車(きょうしゃ) 将棋の駒の一つ。
曲者(くせもの) あやしい者。
草臥(くたびれ) 疲れ。くたびれること。
怪訝(けげん) 合点のいかぬさま。
下戸(げこ) 酒の飲めない人。
琴柱(ことじ) 琴の糸を張る道具。
独楽(こま) おもちゃの一種。
紙縒(こより) 紙を細くよったひも。
声色(こわいろ) 声の調子。
月代(さかやき) ちょんまげの、そった額の部分
雑魚寝(ざこね) 多数がごろ寝する。
流石(さすが) しかし。いかにも。
潮騒(しおさい) 波の寄せ返す音。
潮干狩(しおひがり) 干潟で貝を取る。
枝折(しおり) 案内。しるべ。
時化(しけ) 風雨で海が荒れること。
洒落(しゃれ) 機知に富んだ文句。
不知火(しらぬい) 九州八代湾の怪火。
頭巾(ずきん) 頭にかぶるもの。
菅笠(すげがさ) 菅の葉で編んだ笠。
助太刀(すけだち) 加勢すること。
双六(すごろく) 遊戯の一種。
台詞(せりふ) 舞台で俳優が言う言葉。
雑木(ぞうき) 材木にならない木。
十露盤(そろばん) 算盤。計算用具。
黄昏(たそがれ) ゆうぐれ時。
三和土(たたき) 土間。
伊達(だて) 意気を競うこと。
店子(たなこ) 借家人。
煙草(たばこ) 嗜好品の一種。
手向(たむけ) 神や仏にささげること。
手水(ちょうず) 手洗い。手を洗う水。
提灯(ちょうちん) 照明用具の一つ。
接木(つぎき) 木を他の木につぐこと。
氷柱(つらら) 水滴が凍ってたれさがったもの。
常磐木(ときわぎ) 常緑樹。
心太(ところてん) 海草から作る食物。
外様(とざま) 直系でない者。
都々逸(どどいつ) 俗曲の一種。
問屋(とんや) 卸し売りをする商店。
等閑(なおざり) いい加減。
就中(なかんずく) 中でも。特に。
長刀(なぎなた) 武器の一つ。
長押(なげし) かもいの横の装飾材。
馴染(なじみ) 親しい仲。
納屋(なや) 物おき。
苗代(なわしろ) 稲の苗をつくる田。
納戸(なんど) 物おきの部屋。
熨斗(のし) 進物にそえるもの。
長閑(のどか) 落ちついて静かな様子。
海苔(のり) 海草の一種。
暖簾(のれん) 店先にはる布。信用。
暢気(のんき) 気楽。むとんじゃく。
旅籠(はたご) 昔の宿屋。
法度(はっと) 禁止の法令。
羽二重(はぶたえ) 薄くて目の細かい絹布。
贔屓(ひいき) 特に目をかけること。
麦酒(ビール) 大麦から作った酒。
僻目(ひがめ) 見そこない。
抽斗(ひきだし) ぬきさしのできる箱。
只管(ひたすら) それぱかり。一途に。
一入(ひとしお) いちだんと。いっそう。
天鵞絨(びろうど) 織物の一種。
黒子(ほくろ) 皮膚の表面の黒い点。
反古(ほご) 役に立たないもの。
燐寸(まっち) すって火をつける道具。
莫大小(めりやす) 綿織物の一種。
木理(もくめ) 木の断面に出る線。
結納(ゆいのう) 婚約のしるしの贈り物。
所以(ゆえん) わけ。理由。

【古典・宗教関係の語】

総角（あげまき）古代の子供の結髪。
阿闍梨（あじゃり）天台・真言宗の僧位。
網代（あじろ）竹や木であんだ網。
校倉（あぜくら）古代建築法の一種。
朝臣（あそん）八種の姓の第二位。
行脚（あんぎゃ）仏道修行の諸国巡り。
行宮（あんぐう）仮の宮居。かりみや。
十六夜（いざよい）陰暦十六日の夜。
衣鉢（いはつ）弟子に伝える教え。
今様（いまよう）平安の歌謡。現代風。
郎女（いらつめ）昔の若い女性の呼称。
因縁（いんねん）由来。理由。
有卦（うけ）幸運の続く年まわり。
永劫（えいごう）長い年月。永久。
回向（えこう）死者の霊を弔うこと。
蝦夷（えぞ）アイヌの古称。
干支（えと）十干十二支のこと。
穢土（えど）現世。穢れている世界。
烏帽子（えぼし）公家・武士の帽子。
縁起（えんぎ）社寺などの由来。前兆。
厭世（えんせい）世を厭いはかなむ。
往生（おうじょう）死ぬこと。
和尚（おしょう）坊さん。
怨霊（おんりょう）恨んで死んだ人の霊。
神楽（かぐら）神事で行われる舞楽。
帷子（かたびら）麻製のひとえもの。
渇仰（かつごう）深く信仰すること。
楽府（がふ）漢詩の一体。
唐衣（からごろも）唐風の衣服。
唐破風（からはふ）唐風の破風。
勧進（かんじん）仏道を勧めること。
上達部（かんだちめ）公卿。
帰依（きえ）一心に信仰すること。
牛車（ぎっしゃ）昔、牛に引かせた車。

後朝（きぬぎぬ）男女が共寝した翌朝。
宮司（ぐうじ）神宮の神官。
公家（くげ）朝廷。朝廷に仕える者。
苦患（くげん）苦難。苦悩。
口伝（くでん）言語で伝えること。
功徳（くどく）よい行い。神仏の恵み。
国造（くにのみやつこ）古代の地方官。
供奉（ぐぶ）行列に加わること。
口分田（くぶんでん）人民に与えた田地。
公方（くぼう）朝廷。幕府。
供養（くよう）死者の冥福を祈ること。
庫裡（くり）寺の台所。
境内（けいだい）境界の内。社寺の敷地。
戯作（げさく）江戸時代の娯楽読み物。
下衆（げす）下人。心のいやしい者。
懸想（けそう）思いをかけること。
解脱（げだつ）煩悩からのがれること。
結縁（けちえん）仏道に縁を結ぶこと。
外道（げどう）仏教以外の教え。邪説。
検非違使（けびいし）中古の京都の警察。
虚空（こくう）大空。うわの空。
後生（ごしょう）後の世。来世。
東風（こち）東方から吹く風。春風。
近衛府（このえふ）六衛府の一つ。
虚無僧（こむそう）普化宗の僧。
御利益（ごりやく）神仏のお恵み。
勤行（ごんぎょう）仏前で読経すること。
権化（ごんげ）神仏の化身。
建立（こんりゅう）寺院などを立てる。
催馬楽（さいばら）日本の古代楽曲。
防人（さきもり）辺境に派遣された男子。
指貫（さしぬき）はかまの一種。
座主（ざす）僧職の首座。
散華（さんげ）壮烈な戦死。
参内（さんだい）宮中に参上すること。

三昧（ざんまい）夢中になること。
東雲（しののめ）明け方。暁。
除目（じもく）官職任命の儀式。
十二単（じゅうにひとえ）昔の女官の服。
修験道（しゅげんどう）宗教の一種。
衆生（しゅじょう）いっさいの生き物。
装束（しょうぞく）身じたく。いでたち。
定命（じょうみょう）決まっている寿命。
従容（しょうよう）ゆったりするさま。
上臈（じょうろう）身分の高い婦人。
神祇（じんぎ）天神と地神。
神道（しんとう）日本古来の信仰。
透垣（すいがい）間をすかした垣根。
垂迹（すいじゃく）仏が民衆の教化のために神になって現れること。
受領（ずりょう）諸国の長官。国司。
旋頭歌（せどうか）短歌の形式の一つ。
遷化（せんげ）高僧が死ぬこと。入寂。
先達（せんだつ）先輩。案内者。
宣命（せんみょう）古代の和文の詔勅。
僧都（そうず）僧正の次の階級。
相聞（そうもん）万葉集の部立の一つ。
卒塔婆（そとば）墓地に立てる一種の板。
松明（たいまつ）松などを束ね火をつけたあかり。
内裏（だいり）天皇の御殿。禁中。
大宰府（だざいふ）九州に置かれた役所。
荼毘（だび）火葬。
重陽（ちょうよう）陰暦九月九日の節句。
築地（ついじ）泥土だけで固めた垣。
追儺（ついな）年中行事の一つ。
局（つぼね）曹司。局を有する女官。
殿上人（てんじょうびと）昇殿を許された人。
春宮（とうぐう）皇太子。皇太子の御所。

刀自（とじ）老婦人の敬称。
舎人（とねり）天皇の近侍の者。
典侍（ないしのすけ）中古の女官の一つ。
仁王（におう）仏教の守護神。
女御（にょうご）中宮の次の位のきさき。
女房（にょうぼう）身分の高い女官。
涅槃（ねはん）釈迦の死。入寂。入滅。
直衣（のうし）古代の衣服の一種。
野分（のわき）秋の台風。こがらし。
半蔀（はじとみ）戸の一種。
埴生（はにゅう）赤い粘土のある土地。
埴輪（はにわ）古代の、土で作った像。
般若（はんにゃ）知恵。鬼女の面。
氷雨（ひさめ）あられ。秋の冷たい雨。
直垂（ひたたれ）武士などが着た衣服。
屏風（びょうぶ）部屋の中に立てる家具。
奉行（ぶぎょう）武士の役所の長官。
布施（ふせ）僧侶に施すお金や品物。
判官（ほうがん）四等官の第三。尉。
菩提心（ぼだいしん）仏心。道心。
勾玉（まがたま）古代の装身具の一種。
水脈（みお）舟の通る水路。
澪標（みおつくし）水脈に立てる木。
神酒（みき）神に供える酒。
巫女（みこ）神に仕える少女。
御簾（みす）すだれの敬語。
御息所（みやすどころ）天子寝所の侍所。
命婦（みょうぶ）五位以上の女官の称。
望月（もちづき）陰暦十五日の夜の月。
夜叉（やしゃ）鬼神。
山賤（やまがつ）木こり。
有職（ゆうそく）儀式・故実に詳しい人。
律令（りつりょう）古代・中古の法令。
輪廻（りんね）生物が死んで生まれる過程を永久に繰り返すこと。

動物・植物の読み

【動物】

海豹 アザラシ
浅蜊 アサリ
鯵 アジ
家鴨 アヒル
虻 アブ
信天翁 アホウドリ
鮎 アユ
蟻 アリ
鮑 アワビ
烏賊 イカ
鼬 イタチ
蝗 イナゴ
猪 イノシシ
鰯 イワシ
鵜 ウ
鶯 ウグイス
兎 ウサギ
蛆 ウジ
鶉 ウズラ
鰻 ウナギ
海胆 ウニ
雲丹 ウニ
海老 エビ
蝦 エビ
鸚鵡 オウム
狼 オオカミ
鳳 オオトリ
鴛鴦 オシドリ
蛾 ガ
蛙 カエル

牡蠣 カキ
蜻蛉 カゲロウ
蜉蝣 カゲロウ
鵲 カササギ
河鹿 カジカ
蝸牛 カタツムリ
鵞鳥 ガチョウ
鰹 カツオ
郭公 カッコウ
蟹 カニ
甲虫 カブトムシ
蝦蟇 ガマ
亀 カメ
鴨 カモ
羚羊 カモシカ
鷗 カモメ
烏 カラス
雁 カリ
鰈 カレイ
川獺 カワウソ
雉 キジ
啄木鳥 キツツキ
狐 キツネ
螽蟖 キリギリス
麒麟 キリン
水鶏 クイナ
孔雀 クジャク
轡虫 クツワムシ
熊 クマ
蜘蛛 クモ
水母 クラゲ

鯉 コイ
蝙蝠 コウモリ
蟋蟀 コオロギ
駒鳥 コマドリ
犀 サイ
鷺 サギ
鮭 サケ
栄螺 サザエ
鯖 サバ
鮫 サメ
猿 サル
山椒魚 サンショウウオ
秋刀魚 サンマ
鹿 シカ
鴫 シギ
獅子 シシ
蜆 シジミ
四十雀 シジュウカラ
紙魚 シミ
鯱 シャチ
軍鶏 シャモ
十姉妹 ジュウシマツ
猩々 ショウジョウ
鱸 スズキ
雀 スズメ
海象 セイウチ
鶺鴒 セキレイ
蟬 セミ
鯛 タイ
鷹 タカ
蛸 タコ
太刀魚 タチウオ
駝鳥 ダチョウ
狸 タヌキ
鱈 タラ

蝶 チョウ
狆 チン
燕 ツバメ
鶴 ツル
貂 テン
泥鰌 ドジョウ
馴鹿 トナカイ
鳶 トビ
虎 トラ
海鼠 ナマコ
鯰 ナマズ
鳰 ニオ
鰊 ニシン
猫 ネコ
鼠 ネズミ
蚤 ノミ
蠅 ハエ
獏 バク
蜂 ハチ
鳩 ハト
蛤 ハマグリ
鱧 ハモ
隼 ハヤブサ
雲雀 ヒバリ
豹 ヒョウ
鵯 ヒヨドリ
蛭 ヒル
鱶 フカ
河豚 フグ
梟 フクロウ
鮒 フナ
鰤 ブリ
蛇 ヘビ
頬白 ホオジロ
螢 ホタル

時鳥 ホトトギス
子規 ホトトギス
蜀魂 ホトトギス
不如帰 ホトトギス
杜鵑 ホトトギス
鮪 マグロ
鱒 マス
蓑虫 ミノムシ
蚯蚓 ミミズ
木菟 ミミズク
百足 ムカデ
椋鳥 ムクドリ
土竜 モグラ
百舌 モズ
山羊 ヤギ
山雀 ヤマガラ
守宮 ヤモリ
葦切 ヨシキリ
駱駝 ラクダ
栗鼠 リス
驢馬 ロバ

【植物】

葵 アオイ
茜 アカネ
薊 アザミ
葦 アシ
紫陽花 アジサイ
馬酔木 アシビ
小豆 アズキ
梓 アズサ
甘葛 アマズラ
粟 アワ
杏子 アンズ
苺 イチゴ
無花果 イチジク

瓜 ウリ
榎 エノキ
豌豆 エンドウ
樗 オウチ
荻 オギ
女郎花 オミナエシ
万年青 オモト
楓 カエデ
柿 カキ
杜若 カキツバタ
樫 カシ
柏 カシワ
桂 カツラ
樺 カバ
蕪 カブ
南瓜 カボチャ
蒲 ガマ
枳殻 カラタチ
落葉松 カラマツ
甘藷 カンショ
甘蔗 カンショ
桔梗 キキョウ
黍 キビ
胡瓜 キュウリ
夾竹桃 キョウチクトウ
桐 キリ
銀杏 ギンナン
枸杞 クコ
楠 クス(ノキ)
葛 クズ
櫟 クヌギ
茱萸 グミ
栗 クリ
胡桃 クルミ
芥子 ケシ

欅 ケヤキ
紫雲英 ゲンゲ(レンゲ)
苔 コケ
牛蒡 ゴボウ
胡麻 ゴマ
昆布 コンブ
榊 サカキ
柘榴 ザクロ
笹 ササ
山茶花 サザンカ
百日紅 サルスベリ
山椒 サンショウ
椎茸 シイタケ
紫蘇 シソ
羊歯 シダ
石南花 シャクナゲ
秋海棠 シュウカイドウ
棕櫚 シュロ
生姜 ショウガ
菖蒲 ショウブ
沈丁花 ジンチョウゲ
西瓜 スイカ
水仙 スイセン
睡蓮 スイレン
杉 スギ
菅 スゲ
薄 ススキ
鈴蘭 スズラン
菫 スミレ
李 スモモ
芹 セリ
栴檀 センダン
蕎麦 ソバ
橙 ダイダイ
筍 タケノコ

橘 タチバナ
蓼 タデ
玉葱 タマネギ
蒲公英 タンポポ
茅 チガヤ
土筆 ツクシ
柘植 ツゲ
蔦 ツタ
躑躅 ツツジ
椿 ツバキ
籐 トウ
冬瓜 トウガン
玉蜀黍 トウモロコシ
木賊 トクサ
橡 トチ
団栗 ドングリ
梨 ナシ
茄子 ナス
薺 ナズナ
棗 ナツメ
撫子 ナデシコ
楢 ナラ
人参 ニンジン
大蒜 ニンニク
葱 ネギ
合歓 ネム
海苔 ノリ
萩 ハギ
蓮 ハス
帚木 ハハキギ
浜木綿 ハマユウ
薔薇 バラ
柊 ヒイラギ
稗 ヒエ
檜 ヒノキ

向日葵 ヒマワリ
白檀 ビャクダン
瓢簞 ヒョウタン
枇杷 ビワ
蕗 フキ
藤 フジ
葡萄 ブドウ
芙蓉 フヨウ
糸瓜 ヘチマ
鳳仙花 ホウセンカ
朴 ホオ
牡丹 ボタン
槇 マキ
柾 マサ
松茸 マツタケ
蜜柑 ミカン
茗荷 ミョウガ
海松 ミル
木槿 ムクゲ
葎 ムグラ
藻 モ
木犀 モクセイ
樅 モミ
椰子 ヤシ
寄生木 ヤドリギ
藪柑子 ヤブコウジ
柚(子) ユズ
百合 ユリ
蓬 ヨモギ
林檎 リンゴ
若布 ワカメ
山葵 ワサビ
勿忘草 ワスレナグサ
蕨 ワラビ
吾木香 ワレモコウ

四字熟語の読みと意味

愛別離苦（あいべつりく）　親子、兄弟、夫婦など、愛する人と生別し離別する苦しみ。八苦の一つ。

曖昧模糊（あいまいもこ）　はっきりせずに、ぼんやりとしていること。

悪事千里（あくじせんり）　悪事は遠くまですぐに伝わるということ。

悪戦苦闘（あくせんくとう）　死にものぐるいの苦しい戦い。転じて、困難にうち勝とうとする努力。

阿鼻叫喚（あびきょうかん）　阿鼻地獄に落ちた者があげる苦しみの叫び。非常にむごたらしい状態。

阿諛追従（あゆついしょう）　こびへつらうこと。

安心立命（あんじんりつめい）　天命を知って心を安らかにし、くだらないことに心を動かさないこと。

暗中模索（あんちゅうもさく）　暗闇の中で手探りして探すこと。転じて、様子がはっきりせず、どうしたらよいかわからないまま、いろいろ探ってやってみること。

唯々諾々（いいだくだく）　はいはいと従順に従うこと。

意気軒高（いきけんこう）　意気の盛んなさま。

意気消沈（いきしょうちん）　元気がなくなり、沈んでいるさま。

意気衝天（いきしょうてん）　意気が天をつくほど盛んなこと。

意気沮喪（いきそそう）　意気込みがくじけること。

意気投合（いきとうごう）　気がよく合うこと。

意気揚々（いきようよう）　得意になっていばるさま。

異口同音（いくどうおん）　多くの人がみな口をそろえて同じことを言うこと。

以心伝心（いしんでんしん）　ことばに頼らず、互いの心から心に伝えること。

一意専心（いちいせんしん）　一つのことに心を集中すること。

一衣帯水（いちいたいすい）　一本の帯のように狭い川。転じて、二つの物の間が非常に狭いこと。

一期一会（いちごいちえ）　一生に一度会うこと。

一言半句（いちごんはんく）　わずかなことば。

一日千秋（いちじつせんしゅう）　一日会わないと千年も会わないように、待ちこがれる気持ちの激しいこと。「一日三秋」に同じ。

一汁一菜（いちじゅういっさい）　一椀の吸い物と一皿のおかず。転じて、質素な食事をいう。

一念発起（いちねんほっき）　決心して仏道信仰の道に入ること。転じて、ある事を成しとげようと決心すること。

一部始終（いちぶしじゅう）　始めから終わりまで。転じて、こまごまとしたことまで全部。

一望千里（いちぼうせんり）　見わたす限りひろびろとしていること。「一望千頃」に同じ。

一網打尽（いちもうだじん）　一網で魚を取りつくすこと。転じて、一度に悪人や罪人を全部捕らえること。

一目瞭然（いちもくりょうぜん）　一目見ただけではっきりわかること。

一陽来復（いちようらいふく）　寒い冬が過ぎて暖かい春が来ること。転じて、よくないことの後にいいことがめぐってくること。

一蓮托生（いちれんたくしょう）　浄土に往生して同じ蓮の上で暮らすこと。転じて、仲間がみな行動や運命を共にすること。

一攫千金（いっかくせんきん）　一度に大金を手に入れること。

一家団欒（いっかだんらん）　家族が集まってなごやかにしていること。

一喜一憂（いっきいちゆう）　喜んだり心配したりすること。

一気呵成（いっきかせい）　一息に作りあげること。

一騎当千（いっきとうせん）　一人で千人を相手にできるほど強いこと。「一人当千」に同じ。

一挙一動（いっきょいちどう）　一つ一つの動作。

一挙両得（いっきょりょうとく）　一つのことを行い、二つの利益を得ること。「一石二鳥」に同じ。

一刻千金（いっこくせんきん）　春のひとときが千金にも値すること。転じて、楽しいとき、すばらしい季節。

一視同仁（いっしどうじん）　差別なく、すべての者を平等に愛すること。

一瀉千里（いっしゃせんり）　川の水がひとたび流れ出すと、たちまち千里も流れること。転じて、物事の速くはかどること、文章や弁舌がよどみないこと。

一宿一飯（いっしゅくいっぱん）　一晩泊めてもらったり、一度の食事を恵んでもらったりすること。

一触即発（いっしょくそくはつ）　互いがちょっと触れると、すぐに乱闘、戦争状態が起こりそうな、危機をはらんでいる状態。

一所懸命（いっしょけんめい）　一か所の領地に命をかけること。転じて、真剣に物事をすること。

一進一退（いっしんいったい）　進んだりあともどりしたりすること。よくなったり悪くなったりすること。

一心同体（いっしんどうたい）　二人以上の人が心を一つにして結びつくこと。

一心不乱（いっしんふらん）　一つのことに集中して、他の事のために心の乱れることのないさま。

一世一代（いっせいちだい）　能役者や歌舞伎俳優などが引退する前に、これを限りと得意の芸を演ずること。

一石二鳥（いっせきにちょう）　石を一つ投げて二羽の鳥を得ること。転じて、一つの行為から二つの利益を得ること。「一挙両得」に同じ。

一知半解（いっちはんかい）　十分に理解していないこと。

一朝一夕（いっちょういっせき）　短い時間。

一長一短（いっちょういったん）　長所もあるし、短所もあること。

一刀両断（いっとうりょうだん） 一刀のもとに物をまっぷたつに断ち切ること。決断の速やかなこと。
一得一失（いっとくいっしつ） 得もあれば損もあること。
意馬心猿（いばしんえん） 心が欲望のために動いておさえきれないことを、馬や猿が騒ぐのを制しがたいのにたとえていったことば。「心猿意馬」とも。
威風堂々（いふうどうどう） 堂々として犯しがたい様子。
韋編三絶（いへんさんぜつ） 書物のとじひもが三度も切れるくらい精読すること。読書に熱心なことのたとえ。
意味深長（いみしんちょう） 意味が深くて含蓄のあること。言外に他の意味を含むこと。
因果応報（いんがおうほう） よい原因からは必ずよい結果が、悪い原因からは必ず悪い結果が生ずること。
因循姑息（いんじゅんこそく） しきたり通りにし、間に合わせの態度をとること。改革精神に乏しいこと。「因循苟且」に同じ。
隠忍自重（いんにんじちょう） じっとがまんして軽々しい行動をとらないこと。
有為転変（ういてんぺん） 世の中の移り変わりが激しく、はかないこと。
右往左往（うおうさおう） 大勢の者がうろたえて右に行ったり左に行ったりすること。
右顧左眄（うこさべん） 右を見たり左を見たりしてためらうこと。「左顧右眄」ともいう。

有象無象（うぞうむぞう） 天地の間に存在する有形無形の物の総称。大勢のつまらぬ者ども。
海千山千（うみせんやません） いろいろな経験を積んでいること。
紆余曲折（うよきょくせつ） 遠まわりで曲がりくねっていること。事情がこみいって複雑なこと。
雲散霧消（うんさんむしょう） 雲のように散り、霧のように消えて、あとかたもなく姿を消すこと。「霧散雲消」「雲散鳥没」に同じ。
栄枯盛衰（えいこせいすい） 人や家が栄え衰えること。
英明闊達（えいめいかったつ） 物事の道理に通じていること。
栄耀栄華（えいようえいが） 栄えおごること。社会的地位が高く華々しいこと。
会者定離（えしゃじょうり） 会う者は必ず離れる運命にあること。無常のたとえ。
円転滑脱（えんてんかつだつ） 人と争わず巧みに物事を行うこと。
遠交近攻（えんこうきんこう） 遠い国と交わり近い国を攻めること。
横行闊歩（おうこうかっぽ） 思いのまま、大手を振ってのし歩く。勝手気ままにふるまうこと。
往事茫々（おうじぼうぼう） 昔の事は遠くて明らかでないこと。
温厚篤実（おんこうとくじつ） やさしくて情が厚いこと。
温故知新（おんこちしん） 昔のことを学んで、そこから新しい知識を得ること。

厭離穢土（おんりえど） 汚れたこの世を嫌い離れること。
鎧袖一触（がいしゅういっしょく） よろいの袖をちょっと触れる程度の軽い力で、相手をたやすく打ち負かすこと。
外柔内剛（がいじゅうないごう） 外面は柔らかく内面は強いこと。
快刀乱麻（かいとうらんま） もつれた麻を切れ味のよい刀で断ち切る。もつれた物事を明快に処理するたとえ。
偕老同穴（かいろうどうけつ） 夫婦が共に生き共に老い、同じ墓に葬られること。
格物致知（かくぶつちち） 事物の理をきわめ、知識を深くすること。
臥薪嘗胆（がしんしょうたん） 薪の上に寝、胆をなめること。復仇のために苦労すること。転じて、将来の成功のために身を苦しめて自分の心を励ますこと。
佳人薄命（かじんはくめい） 美人は短命であるということ。とかく美人は不幸な目にあいやすいというたとえ。
花鳥風月（かちょうふうげつ） 花と鳥と風と月。風流心の対象となる自然の風物。
隔靴掻痒（かっかそうよう） 靴を隔ててかゆいところをかくこと。物事が徹底せずもどかしいこと。
合従連衡（がっしょうれんこう） 中国の戦国時代に、六つの国が南北に同盟して秦にあたった策と、六つの国が東西にそれぞれ秦に仕えた策のこと。
我田引水（がでんいんすい） 自分の都合のいいようにはからうこと。

画龍点睛（がりょうてんせい） 物事を完成させるための大切な最後の仕上げ。
苛斂誅求（かれんちゅうきゅう） きびしく租税などを取りたてること。
夏炉冬扇（かろとうせん） 夏のいろりと冬の扇。時節はずれで役に立たないことのたとえ。
感慨無量（かんがいむりょう） 身にしみて胸がいっぱいになること。
侃々諤々（かんかんがくがく） 剛直で、はばかることなく直言するさま。
汗牛充棟（かんぎゅうじゅうとう） 車に積んで引かせると牛に汗をかかせ、室内に積み重ねると棟木まで届く。蔵書の多いことのたとえ。
換骨奪胎（かんこつだったい） 古人の詩文の形式や着想を換えて自分のものにすること。
冠婚葬祭（かんこんそうさい） 元服、婚礼、葬式、祖先の祭りの四大礼。
勧善懲悪（かんぜんちょうあく） よい行いを励まし、悪い行いをこらしめる。
完全無欠（かんぜんむけつ） 完全で少しも欠点や不足のないこと。
艱難辛苦（かんなんしんく） つらく苦しいこと。
頑迷固陋（がんめいころう） かたくなで道理がわからず見方が狭いこと。
閑話休題（かんわきゅうだい） それはさておき。話を本論に戻す時に用いることば。
気焔万丈（きえんばんじょう） 意気込みの盛んなこと。
機会均等（きかいきんとう） 各人が利

益を受ける機会を平等にすること。

危機一髪（ききいっぱつ）　今にも危ういことが起こりそうな状態。危い瀬戸際。

危急存亡（ききゅうそんぼう）　生きながらえるか亡びるかの危い瀬戸際。

規矩準縄（きくじゅんじょう）　物事の手本。

奇策縦横（きさくじゅうおう）　人の思いつかないはかりごとを自由自在に出すこと。

起死回生（きしかいせい）　死にかかった状態から生き返らせること。

旗幟鮮明（きしせんめい）　旗の色の鮮やかなこと。自分の考え方をはっきりさせること。

起承転結（きしょうてんけつ）　漢詩の絶句の構成。起句で書き起こし、承句はそれを続け、転句で変化を与え、結句で全体をまとめて結ぶ。

喜色満面（きしょくまんめん）　顔いっぱいに喜びを表すこと。

疑心暗鬼（ぎしんあんき）　疑いの心が起こると、つまらぬことまでが恐ろしくなること。

奇想天外（きそうてんがい）　思いも寄らないような不思議なこと。

気息奄々（きそくえんえん）　息も絶え絶えな様子。

喜怒哀楽（きどあいらく）　喜びや怒りや哀しみや楽しみ。

牛飲馬食（ぎゅういんばしょく）　牛や馬のように飲んだり食べたりする量の多いこと。

旧態依然（きゅうたいいぜん）　もとのままで進歩のないこと。

急転直下（きゅうてんちょっか）　事態が急に変化して、物事が解決すること。

行住坐臥（ぎょうじゅうざが）　日常の生活のこと。

驚天動地（きょうてんどうち）　世の中を震撼させること。

興味津々（きょうみしんしん）　特に興味、関心を示すこと。

狂瀾怒濤（きょうらんどとう）　乱れに乱れた情勢。

虚々実々（きょきょじつじつ）　ありったけの力や技を出しきって戦う様子。

曲学阿世（きょくがくあせい）　真理を曲げて、世間の気に入るようにこびへつらうこと。

旭日昇天（きょくじつしょうてん）　勢いのいいこと。

玉石混淆（ぎょくせきこんこう）　いいものと悪いものが一緒になっていること。

虚心坦懐（きょしんたんかい）　先入観を捨て、広く平らかな心を持つこと。

毀誉褒貶（きよほうへん）　けなすこととほめること。

金科玉条（きんかぎょくじょう）　これ以上ない大切なきまり。

欣喜雀躍（きんきじゃくやく）　喜んで小踊りすること。

緊褌一番（きんこんいちばん）　心をひきしめて事にあたること。

金枝玉葉（きんしぎょくよう）　天子の一門。樹木の技葉が美しく茂っているのにたとえる。

禽獣夷狄（きんじゅういてき）　人の道をわきまえていないことのたとえ。

金城鉄壁（きんじょうてっぺき）　きわめて堅くしっかりしていること。

金城湯池（きんじょうとうち）　金で造った城と湯のように熱い池の意味で、堅くて近寄りがたい城や堀をいう。

空前絶後（くうぜんぜつご）　過去にも将来にも、それと似たことがないたとえ。ごくまれなこと。

空理空論（くうりくうろん）　役に立たない理論。

苦心惨憺(胆)（くしんさんたん）　非常に苦しんで物事をやりとげようとするさま。

君子豹変（くんしひょうへん）　君子は、豹の斑点が変わりやすいように、悪から善へ移ることが早いということ。

群雄割拠（ぐんゆうかっきょ）　多くの英雄が、あちこちにあらわれて互いに争うこと。

軽挙妄動（けいきょもうどう）　軽はずみな行いをすること。

経世済民（けいせいさいみん）　国家を治め人民を救済すること。

軽佻浮薄（けいちょうふはく）　軽はずみで浮わついていること。

鶏鳴狗盗（けいめいくとう）　鶏の鳴きまねをして関所の門を開かせたり、犬の格好をして物を盗んだりすることの小利口な者をいう。

月下氷人（げっかひょうじん）　仲人、媒酌人のこと。「月下老人」ともいう。

牽強付会（けんきょうふかい）　無理にこじつけること。

乾坤一擲（けんこんいってき）　すべてを出し尽くして勝負すること。

捲土重来（けんどじゅうらい・けんどちょうらい）　負けた者が再び勢いを盛り返して相手を攻めること。

堅忍不抜（けんにんふばつ）　じっと我慢すること。

権謀術数（けんぼうじゅっすう）　人を陥れるはかりごと。

行雲流水（こううんりゅうすい）　浮かぶ雲と流れる水のことで、自然をいう。また、成り行きにまかせて行動するたとえ。

厚顔無恥（こうがんむち）　厚かましくて恥を知らないこと。

綱紀粛正（こうきしゅくせい）　物事の根本を厳しく正すこと。

剛毅木訥（ごうきぼくとつ）　心が強く飾り気のない人。

巧言令色（こうげんれいしょく）　上手な物言いと、あいそのよい顔つき。

荒唐無稽（こうとうむけい）　言うことがでたらめで、根拠のないこと。

好評嘖々（こうひょうさくさく）　評判がよくて口々にほめそやすこと。

公平無私（こうへいむし）　公平で私情が入らないこと。

豪放磊落（ごうほうらいらく）　心が大きくて、つまらぬことにこだわらないこと。

公明正大（こうめいせいだい）　考えや物言いが、正しく堂々としていること。

甲論乙駁（こうろんおつばく）　両者が議論しあい、なかなか結論の出ないこと。

高論卓説（こうろんたくせつ）　非常に

すぐれた議論や説。

呉越同舟（ごえつどうしゅう）　仲の悪い者どうしが一緒にいること。

狐疑逡巡（こぎしゅんじゅん）　疑い迷ってためらうこと。

孤軍奮闘（こぐんふんとう）　ただ一人で激しく戦うこと。

古今無双（ここんむそう）　昔から今までに比べる者がいないこと。

虎視眈々（こしたんたん）　虎のような鋭い眼で、機会を狙って見まわすこと。

孤城落日（こじょうらくじつ）　ただ一つの城と西に傾く日のことで、勢いが衰えてもの寂しいこと。

古色蒼然（こしょくそうぜん）　古びている様子。

故事来歴（こじらいれき）　事柄の由緒・起源・歴史のこと。

五臓六腑（ごぞうろっぷ）　肺・心・肝・腎・脾の五臓と、大腸・小腸・胃・胆・膀胱・三焦の六腑のことで、腹の中・心の中をいう。

五風十雨（ごふうじゅうう）　五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降ることで、気候がよいこと。平和なことにもいう。

鼓腹撃壌（こふくげきじょう）　世が治まり、人々が楽しんでいること。

鼓舞激励（こぶげきれい）　人の気をふるいたたせ、励ますこと。

孤立無援（こりつむえん）　ただ一人でだれの援助もないこと。

五里霧中（ごりむちゅう）　五里四方の霧の中に立たされて方角を失うことから、手がかりがなくどうしようもないこと。

欣求浄土（ごんぐじょうど）　極楽浄土に往生することを喜び求めること。

金剛不壊（こんごうふえ）　非常に堅くてこわれないこと。

言語道断（ごんごどうだん）　もってのほかであること。

斎戒沐浴（さいかいもくよく）　飲食や言動を慎んで身を清めること。

才気煥発（さいきかんぱつ）　能力の働きが鋭いこと。

才子多病（さいしたびょう）　能力のある人はとかく病気がちであること。

才色兼備（さいしょくけんび）　すぐれた能力と美しい容貌を兼ね備えていること。

三寒四温（さんかんしおん）　三日間ぐらい寒さが続いて四日間ぐらい温かい日が続く、これが繰り返される天候。

三々五々（さんさんごご）　三あるいは五というように、ばらばらなこと。

山紫水明（さんしすいめい）　山が紫に見え、水が清く流れることで、山水の美しいこと。

三拝九拝（さんぱいきゅうはい）　何度も何度も丁重におじぎをすること。

三面六臂（さんめんろっぴ）　仏像が一身に三つの顔と六つの腕を持っていることで、一人で何人分もの働きがあること。

自画自賛（じがじさん）　自分で描いた絵に、自分で賛を記すこと。転じて、自分で自分をほめること。

自家撞着（じかどうちゃく）　一人の言動が、前と後とでつじつまの合わないこと。

時機尚早（じきしょうそう）　あることをするのにまだ適当な時機でないこと。

色即是空（しきそくぜくう）　この世のすべての物は形があるが、それは仮のもので、本質は空であり、不変のものではないということ。

自給自足（じきゅうじそく）　自分に必要なものを自分で作り、まかなうこと。転じて、自分の力で生活すること。

自業自得（じごうじとく）　自分でやったことの報いを自分で受けること。

獅子奮迅（ししふんじん）　獅子が狂ったように、勢い激しく奮闘すること。

自縄自縛（じじょうじばく）　自分の縄で自分を縛ることで、自分で自分を苦しめること。

時代錯誤（じだいさくご）　時代から遅れることで、昔のままでいること。

質疑応答（しつぎおうとう）　質問したり答えたりすること。

質実剛健（しつじつごうけん）　飾り気がなく強いこと。

実践躬行（じっせんきゅうこう）　自分からふみ行うこと。

七転八倒（しってんばっとう）　何度も転んだり倒れたりすることで、転げまわって苦しみもだえる形容。

疾風迅雷（しっぷうじんらい）　速い風と激しい雷のことで、すばやく激しいこと。

四分五裂（しぶんごれつ）　ちりぢりばらばらになること。

自暴自棄（じぼうじき）　やけになり、自分で自分をだめにすること。

揣摩臆測（しまおくそく）　勝手に推測すること。

四面楚歌（しめんそか）　周囲すべて敵で孤立無援なこと。

自問自答（じもんじとう）　自分で尋ねて自分で答えること。

弱肉強食（じゃくにくきょうしょく）　強い者が弱い者の肉を食うことで、弱者の犠牲があって強者が栄えること。

寂滅為楽（じゃくめついらく）　煩悩の世界を離れて涅槃の境地を真の楽しみとすること。

縦横無尽（じゅうおうむじん）　思うままにふるまうこと。

周章狼狽（しゅうしょうろうばい）　あわてふためいてうろうろすること。

秋霜烈日（しゅうそうれつじつ）　秋の霜と夏の激しい日のこと。刑罰などが非常に厳しいたとえ。

十人十色（じゅうにんといろ）　人の好み・考え・なりふりなどが、一人一人違うこと。

主客転倒（しゅかくてんとう）　主人と客がさかさまになること。重要なこととそうでないことを取り違える意。

熟読玩味（じゅくどくがんみ）　内容を奥深く読み味わうこと。

熟慮断行（じゅくりょだんこう）　よくよく考え、思い切って実行すること。

取捨選択（しゅしゃせんたく）　必要なものと不要なものとを選び分けること。

守株刻舟（しゅしゅこくしゅう）　切り株を守って兎が株に当たって死ぬのを待つことと、舟に印をつけて川に落ちた剣を探すこと。いたずらに旧習にこ

だわり、融通のきかぬたとえ。

酒池肉林（しゅちにくりん）　酒の池と肉の林ということで、豪奢を極めた酒宴をいう。

首尾一貫（しゅびいっかん）　始めから終わりまで、一つの考えで貫き通すこと。

順風満帆（じゅんぷうまんぱん）　帆いっぱいに追い風を受けること。転じて、物事が順調に進むこと。

盛者必衰（じょうしゃひっすい）　盛んな者は必ず衰えるということ。いいことはいつまでも続かないというたとえ。

生者必滅（しょうじゃひつめつ）　命ある者は必ず死ぬということ。

常住坐臥（じょうじゅうざが）　いつも。ふだん。

枝葉末節（しようまっせつ）　取るに足らぬつまらないこと。

諸行無常（しょぎょうむじょう）　あらゆるものは常に移り変わること。

支離滅裂（しりめつれつ）　ばらばらで筋道の立たないこと。

神出鬼没（しんしゅつきぼつ）　神や鬼のように自由自在に現れたり隠れたりすること。

信賞必罰（しんしょうひつばつ）　ほめるべき者はほめ、罰すべき者は必ず罰すること。

針小棒大（しんしょうぼうだい）　針のように小さいことを棒のように大きく言うこと。

深謀遠慮（しんぼうえんりょ）　深いはかりごとと遠い先々の思いと。用意周到な計画をいう。

人面獣心（じんめんじゅうしん）　顔は人で、心は獣であること。冷酷な者、人情を知らぬ者をいう。

森羅万象（しんらばんしょう）　この世のすべてのもの。

酔生夢死（すいせいむし）　何もせずにいたずらに一生を終えること。

晴耕雨読（せいこううどく）　晴れた日には耕し、雨の日には書を読むこと。転じて、退職してのんびりと暮らすこと。

生殺与奪（せいさつよだつ）　生かし殺し与え奪うこと、それが自由にできること。

青天白日（せいてんはくじつ）　無実の罪の疑いが晴れること。

精励恪勤（せいれいかっきん）　一心に励み、勤めるさま。

清廉潔白（せいれんけっぱく）　心が清くてうしろ暗いことがないこと。

是々非々（ぜぜひひ）　正しいことを正しいとし、誤りを誤りとすること。

切磋琢磨（せっさたくま）　互いに励ましあって向上すること。

切歯扼腕（せっしやくわん）　歯をくいしばり腕を握りしめること。非常にくやしがる形容。

絶体絶命（ぜったいぜつめい）　危険な状態からどうしても逃れることのできないこと。

浅学非才（せんがくひさい）　学問・能力の未熟なこと。

千客万来（せんきゃくばんらい）　お客がたくさんやってくること。

千軍万馬（せんぐんばんば）　多くの兵と馬。経験が豊かなこと。

千載一遇（せんざいいちぐう）　千年に一度会うこと。これ以上ない機会。

千差万別（せんさばんべつ）　いろいろと違っていること。

千紫万紅（せんしばんこう）　いろいろの花。

千辛万苦（せんしんばんく）　いろいろな苦しみ。

戦々恐々（せんせんきょうきょう）　恐れおののいているさま。

前代未聞（ぜんだいみもん）　それまでに聞いたことがないこと。

前途遼遠（ぜんとりょうえん）　ゆく末はるか遠いこと。

千篇一律（せんぺんいちりつ）　多くの詩がみな同じ調子で変化のないこと。転じて、物事がみな一様で変化のないこと。

千変万化（せんぺんばんか）　さまざまに変化すること。

先憂後楽（せんゆうこうらく）　仁者は世の人に先立って天下のことを心配し、世の人に遅れて楽しみを味わうこと。

創意工夫（そういくふう）　物事を新しく創り出し、あれこれ考えてよい方法を得ること。

率先躬行（そっせんきゅうこう）　だれよりも先んじて自ら実践すること。

率先垂範（そっせんすいはん）　だれよりも先んじて手本を示すこと。

大器晩成（たいきばんせい）　鐘や鼎のような大器は簡単にはできないこと。転じて、大人物は、その発達は遅いが、後に大成することをいう。

大義名分（たいぎめいぶん）　人として守るべき大切な道と、名称に応じて守るべきけじめのこと。

大言壮語（たいげんそうご）　大きなことを言うこと。

大山鳴動（たいざんめいどう）　大きな山が揺れ動くこと。

泰然自若（たいぜんじじゃく）　ゆったりとして落ち着いているさま。

大胆不敵（だいたんふてき）　度胸があってものおじしないこと。

大同小異（だいどうしょうい）　ほぼ同じで、細かい点で違いがあること。

大同団結（だいどうだんけつ）　考えを異にする者が、ある目的のために小異を捨てて一緒になること。

多岐亡羊（たきぼうよう）　方法がいろいろあって、どうしていいかわからないこと。

暖衣飽食（だんいほうしょく）　たくさん衣服を着て体を暖め、食事をたくさんとって腹をふとらせること。

単刀直入（たんとうちょくにゅう）　前置きを置かずに、いきなり本論に入ること。

談論風発（だんろんふうはつ）　意気盛んに議論すること。

遅疑逡巡（ちぎしゅんじゅん）　ぐずぐずすること。

彫心鏤骨（ちょうしんるこつ）　心に彫り骨にちりばめること。詩文などを苦心してみがきあげるたとえ。

朝令暮改（ちょうれいぼかい）　朝方に命令を下して夕暮れには改めることであてにならないこと。

直情径行（ちょくじょうけいこう）　思った通りを言ったり行ったりすること。
猪突猛進（ちょとつもうしん）　猪がまっすぐに突き進むように、かまわずに進むこと。
治乱興亡（ちらんこうぼう）　天下が治まったり亡んだりすること。
適材適所（てきざいてきしょ）　しかるべき才能を持った者を、しかるべき場所につけること。
徹頭徹尾（てっとうてつび）　始めから終わりまで。
天衣無縫（てんいむほう）　天人の衣服には縫い目のあとがないことで、技巧を凝らさず、自然のままでしかも美しいこと。
電光石火（でんこうせっか）　いなずまや、石から出る火のように、極めて短い時間をいい、行動が非常にすばやい時に用いる。
天災地変（てんさいちへん）　自然の変化によって受ける災難のこと。
天神地祇（てんじんちぎ）　天の神と地の神。
天真爛漫（てんしんらんまん）　汚れがなく、思うままにふるまうこと。
天長地久（てんちょうちきゅう）　天地が長久であるように、万物がいつまでも続くこと。
輾転反側（てんてんはんそく）　眠られずに幾度も寝返りを打つこと。
天罰覿面（てんばつてきめん）　悪事に対しては天の罰がまちがいなく下されること。
天変地異（てんぺんちい）　天地間に起こる異変。
天佑神助（てんゆうしんじょ）　天や神の助け。
当意即妙（とういそくみょう）　その場にふさわしく、即座に機転を働かせること。
同工異曲（どうこういきょく）　細工は同じだがおもむきが違うこと。違うようだがほぼ似ていること。
道聴塗説（どうちょうとせつ）　善言を聞いても自分のものにしないこと。
東奔西走（とうほんせいそう）　東や西に走りまわること。忙しいさま。
独立自尊（どくりつじそん）　人に頼らず自分の尊厳を保つこと。
独立独歩（どくりつどっぽ）　人に頼らず自分の信ずるとおりに実行すること。
徒手空拳（としゅくうけん）　素手のこと。
内柔外剛（ないじゅうがいごう）　内は柔らかく外は強いこと。
内憂外患（ないゆうがいかん）　内外ともに心配事があること。
七転八起（ななころびやおき）　何回転んでも負けずに起きあがることで、たび重なる失敗にも屈せずに奮起するたとえ。
難攻不落（なんこうふらく）　いくら攻めても陥落しないこと。
南船北馬（なんせんほくば）　中国の南方は船、北方は馬が交通機関であることから、方々に旅行すること。
二束三文（にそくさんもん）　数が多くても非常に安いこと。
日進月歩（にっしんげっぽ）　日に日に進歩すること。
二律背反（にりつはいはん）　一つの命題から、矛盾する二つの命題が導かれること。
博引旁証（はくいんぼうしょう）　広く用例や証拠を挙げて事を論ずること。
白砂青松（はくさせいしょう）　白い砂と青い松。海辺の景色の美しさを表すことば。
薄志弱行（はくしじゃっこう）　意志が弱く、物事を実行する気力に乏しいこと。
博覧強記（はくらんきょうき）　広く書物を読んで、よく記憶していること。
薄利多売（はくりたばい）　利益を少なくしてたくさん売ること。
馬耳東風（ばじとうふう）　人の意見・批評などを聞き流して心にかけないこと。
破邪顕正（はじゃけんしょう）　邪道を打ち破って、正道を現すこと。
八面六臂（はちめんろっぴ）　一人で多方面に活躍すること。
八方美人（はっぽうびじん）　だれにも愛想よくふるまうこと。
波瀾万丈（はらんばんじょう）　波の起伏が激しいように、事件などの起伏・変化が激しいこと。
盤根錯節（ばんこんさくせつ）　いりくんで解決困難なこと。
半信半疑（はんしんはんぎ）　半ば信じ半ば疑うこと。
繁文縟礼（はんぶんじょくれい）　規則・礼法・手続きなどが複雑で煩わしいこと。
美辞麗句（びじれいく）　美しく飾りたてたことば。
美人薄命（びじんはくめい）　顔かたちの美しい女は、とかく若死にすることが多いということ。
悲憤慷慨（ひふんこうがい）　悲しみ憤ること。
百家争鳴（ひゃっかそうめい）　さまざまな立場の者が自由に論争すること。
百花繚乱（ひゃっかりょうらん）　多くの花が咲き乱れるさま。
百鬼夜行（ひゃっきやこう）　妖怪が夜歩きまわること。転じて、多くの人が醜怪な行動をすること。
百発百中（ひゃっぱつひゃくちゅう）　発射する弾がすべて命中すること。転じて思惑がすべて当たること。
比翼連理（ひよくれんり）　愛情の深い夫婦のたとえ。
風光明媚（ふうこうめいび）　山水の景色が美しいこと。
風声鶴唳（ふうせいかくれい）　おじけづいた人が、ちょっとした物音にも驚き恐れること。
不易流行（ふえきりゅうこう）　不易は、詩的生命の基本的な永続性を持った体。流行は、詩における流転の相で、その時々の新風の体。この両者は共に風雅の誠から出るもので、根元は同じということ。
不倶戴天（ふぐたいてん）　同じ天の下には生きていられないの意で、主君や父のかたきにつける形容。
不言実行（ふげんじっこう）　あれこれ言わず、黙って行うこと。

不惜身命（ふしゃくしんみょう） 自分の命を惜しまず、仏道に尽くすこと。

不即不離（ふそくふり） つきもしないし、離れもしないこと。

不撓不屈（ふとうふくつ） 心が固くて困難に屈せぬこと。

不偏不党（ふへんふとう） どちらにもかたよらず、公平で中立を守ること。

附和雷同（ふわらいどう） 一定の考えを持たず、わけもなく他人の説に賛成すること。

粉骨砕身（ふんこつさいしん） 骨を粉にし、身を砕くほどに、力の限りを尽くすこと。

焚書坑儒（ふんしょこうじゅ） 秦の始皇帝が、書物を焼き儒者を生き埋めにしたことから、学問・思想を圧迫すること。

文人墨客（ぶんじんぼっかく） 文筆や書画に親しみ、風雅な人。

平身低頭（へいしんていとう） すっかりおそれいるさま。

片言隻語（へんげんせきご） ほんのわずかなことば。

暴飲暴食（ぼういんぼうしょく） やたらに食べたり、酒を飲んだりすること。

砲煙弾雨（ほうえんだんう） 戦争の激しいありさま。

暴虎馮河（ぼうこひょうが） 無謀な行動をとること。

傍若無人（ぼうじゃくぶじん） そばにだれもいないかのように勝手気ままにふるまうこと。

茫然自失（ぼうぜんじしつ） 気がぬけてぼんやりしたさま。

抱腹絶倒（ほうふくぜっとう） 腹をかかえ倒れそうになるほど大笑いすること。

奔放不羈（ほんぽうふき） 何物にも束縛されず、勝手気ままにふるまうこと。

本末転倒（ほんまつてんとう） 大切な事とそうでない事を混同すること。

未来永劫（みらいえいごう） 未来永久にわたること。

無為自然（むいしぜん） 手を加えないで、あるがままの状態であること。道家の教え。

無我夢中（むがむちゅう） 何かに心を奪われ、我を忘れること。

矛盾撞着（むじゅんどうちゃく） つじつまのあわないこと。

無知蒙昧（むちもうまい） 知識がなく物事に暗いこと。

無念無想（むねんむそう） 無我の境地に入って何も思わないこと。

無味乾燥（むみかんそう） おもしろ味がないこと。

無欲恬淡（むよくてんたん） 欲がなくあっさりしていること。

明鏡止水（めいきょうしすい） 曇りのない鏡と静かな水面。心が静かで一点の曇りもないことのたとえ。

明眸皓歯（めいぼうこうし） 美しい瞳と白い歯。美人の形容。

面従腹背（めんじゅうふくはい） 表面では服従するようなふりをして、心では反対すること。

孟母三遷（もうぼさんせん） 孟子の母が子の教育のために、墓地の近くから市中へ、さらに学校の近くにと、三度も住居を移したという故事。

門前雀羅（もんぜんじゃくら） 「門前雀羅を張る」の略。門の前に雀を取る網を張るばかりに訪れる人がなく寂しいさま。

夜郎自大（やろうじだい） つまらぬ人間が、広い世間を知らないでいばること。

唯我独尊（ゆいがどくそん） 自分だけが偉いとうぬぼれること。

勇往邁進（ゆうおうまいしん） 目的に向かってひたすら突き進むこと。

優柔不断（ゆうじゅうふだん） ぐずぐずしていて決断力に乏しいこと。

優勝劣敗（ゆうしょうれっぱい） 優れた者が勝ち、劣った者が負けること。

有職故実（ゆうそくこじつ） 朝廷や武家の、古来の法令・儀式・制度など。

有名無実（ゆうめいむじつ） 名前だけで実質の伴わないこと。

悠々自適（ゆうゆうじてき） 俗事に煩わされず、心静かにのんびりと過ごすこと。

油断大敵（ゆだんたいてき） うっかり注意を怠ると大きな失敗を招くといういましめ。

余韻嫋々（よいんじょうじょう） 声が細長く続いて絶えることのないさま。

羊頭狗肉（ようとうくにく） 羊の頭を看板に掲げて犬の肉を売ること。転じて、見せかけと実物とが一致しないこと。

余裕綽々（よゆうしゃくしゃく） ゆったりとゆとりのあること。

利害得失（りがいとくしつ） 利益と損害。

離合集散（りごうしゅうさん） 離れたり集まったりすること。

理非曲直（りひきょくちょく） 道理にかなっていることと、はずれていること。

流言飛語（りゅうげんひご） 根拠のないうわさ。

竜頭蛇尾（りゅうとうだび） 竜の頭と蛇の尾。初めは勢いがよく、終わりがふるわないこと。

粒々辛苦（りゅうりゅうしんく） 一粒一粒に苦労をこめ、こつこつと苦心すること。米を作る農民の非常な苦労から出たことば。

良風美俗（りょうふうびぞく） よい風習。

臨機応変（りんきおうへん） その場に臨んで物事を適当に処理すること。

老少不定（ろうしょうふじょう） 死は年齢に関係なく、いつ訪れるかわからないということ。

老若男女（ろうにゃくなんにょ） 老人も若者も男も女も、みな。

六根清浄（ろっこんしょうじょう） 六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）から起こる欲望を断ち切って、清らかになること。

和気藹々（わきあいあい） なごやかな気分が満ちあふれているさま。

和光同塵（わこうどうじん） 優れた知徳を隠して、俗世間の中に交わっていること。

和洋折衷（わようせっちゅう） 日本の様式と西洋の様式を合わせること。

反対語（意味が反対になる） 対照語（二語で一対になる）

愛護—虐待
赤字—黒字
悪評—好評
甘口—辛口
暗愚—賢明
安全—危険
安楽—苦労
已然—未然
一定—不定
移動—固定
違反—遵守
違法—合法
陰鬱—明朗
韻文—散文
迂回—直行
雨季—乾季
運動—静止
永遠—瞬間
鋭角—鈍角
栄転—左遷
栄誉—恥辱
演繹—帰納
遠心—求心
遠大—狭小
延長—短縮
王者—覇者
往信—返信
応分—過分
大手—搦手
奥書—端書
解雇—採用

開国—鎖国
解散—召集
開始—終了
解放—束縛
快楽—苦痛
加害—被害
家禽—野禽
拡大—縮小
擱筆—起筆
各論—総論
可決—否決
仮設—常設
過度—適度
華美—質素
官学—私学
歓喜—悲哀
簡潔—煩雑
閑職—激職
幹線—支線
乾燥—湿潤
簡単—複雑
貫徹—挫折
完敗—圧勝
灌木—喬木
陥没—隆起
刊本—写本
緩慢—敏速
寛容—厳格
簡略—詳細
記憶—忘却
既決—未決

起工—竣工
起稿—脱稿
奇襲—正攻
帰順—反逆
起床—就寝
奇数—偶数
帰着—出発
吉報—凶報
起点—終点
機敏—遅鈍
起伏—平坦
義務—権利
給水—排水
急性—慢性
許可—禁止
仰角—俯角
虚偽—真実
凝固—融解
強硬—柔軟
虚数—実数
共同—単独
驕慢—謙譲
緊張—弛緩
勤勉—怠惰
具体—抽象
愚直—狡猾
愚鈍—利発
君子—小人
軽快—鈍重
鶏口—牛後
軽視—重視

形而上—形而下
軽率—慎重
経度—緯度
軽薄—重厚
軽微—甚大
軽蔑—尊敬
嫌悪—愛好
謙虚—高慢
倹約—浪費
原理—応用
高遠—卑近
高雅—低俗
公海—領海
攻撃—防御
高尚—低俗
向上—堕落
強情—従順
公転—自転
購入—売却
興奮—冷静
巧遅—拙速
巧妙—拙劣
公約数—公倍数
交流—直流
興隆—滅亡
合力—分力
硬論—軟論
子方—親方
固定—浮動
孤峰—連峰
困難—容易
根本—枝葉
債権—債務

栽培—自生
雑然—整然
散在—密集
斬新—陳腐
散漫—緻密
質疑—応答
自然—人工
失効—発効
質素—贅沢
質問—解答
自動—他動
支配—従属
雌伏—雄飛
釈放—拘禁
主観—客観
主食—副食
善美—醜悪
集結—離散
就任—離任
出家—還俗
饒舌—寡黙
拾得—遺失
需要—供給
順境—逆境
駿馬—駄馬
序盤—終盤
上昇—下降
承諾—拒絶
消滅—発生
自律—他律
自立—依存
進撃—退却
紳士—淑女
進取—退嬰
進展—停滞

親密—疎遠
青眼—白眼
成功—失敗
生産—消費
生息—死滅
正則—変則
正道—邪道
整頓—乱雑
静寂—喧騒
精読—乱読
精密—粗雑
成年—未成年
正犯—従犯
精兵—小兵
正比例—反比例
正編—続編
正装—略装
節約—濫費
絶対—相対
是認—否認
接近—離反
先頭—後尾
全貌—一斑
創刊—廃刊
創業—守成
早熟—晩成
創造—模倣
俗語—雅語
促進—抑制
粗製—精製
粗野—優雅
脱退—加入
退場—入場

胎生—卵生
多額—少額
高値—安値
宅診—往診
多作—寡作
大胆—小心
単一—複合
単純—複雑
短慮—深慮
恥辱—名誉
中央—周辺
抽象—具体
中枢—末梢
徴収—納入
直喩—隠喩
直列—並列
抵抗—屈服
定例—臨時
頭韻—脚韻
得意—失意
特別—普通
独創—模倣
特殊—一般
独立—隷属
鈍感—敏感
内角—外角
内向—外向
内包—外延
内容—外観
難解—平易
濃厚—稀薄
能弁—訥弁
破壊—建設
舶来—国産
暴露—隠蔽

繁栄—衰微
販売—購買
繁忙—閑散
必然—偶然
表面—裏面
貧賤—富貴
譜代—外様
副業—本業
文明—野蛮
分解—合成
分散—集中
分析—総合
分裂—統一
保守—革新
放任—統制
豊富—欠乏
暴落—高騰
本局—支局
本義—転義
本家—分家
無常—常住
有為—無為
裕福—貧困
優勝—劣敗
予習—復習
与党—野党
落第—及第
楽天的—厭世的
楽観—悲観
理論—実践
隣接—遠隔
冷遇—優遇
冷静—興奮
老練—幼稚

国語の学習

（参考） 漢字の読み書き能力の平均正答率(%) 〈国立教育研究所：昭和50年11月，12月実施〉

（読み） 項目		小6	中3	高2	（書き） 項目		小6	中3	高2
小・中・高共通問題	貴重品	79.6	93.7	98.6	小・中・高共通問題	講演会	8.8	29.5	48.4
	外科の医者	62.5	82.6	94.3		関心をもつ	26.5	56.3	58.6
	険しい山道	83.5	98.4	99.2		利益をあげる	56.2	82.0	90.7
	虫めがねで拡大	89.6	96.5	98.7		服装を整える	68.5	83.1	90.7
	親しい友人	66.6	82.2	88.6		お金を預ける	31.7	59.9	69.9
車が渋滞する			63.5	81.2	討論する			65.5	78.6
雨で仕事が妨げられる			87.1	96.0	明朗な少年			47.5	
知事の選挙		91.3			朗らかな				34.1
治水工事		29.6			目の動きを観測した		41.9		
試合に敗れる		82.2			トラックでミカンを輸送した		46.8		
資料を基にする		95.2			修学旅行に出かけた		74.9		
鉄ぼうが苦手		81.2			速い列車		69.4		
セーターを無造作に着る			88.8		調べる		90.6		
拾得物を交番にとどける			38.7		災害の対策			78.8	
生活を省みる			68.8		看病する			52.0	
職責を遂行しよう				79.0	美化に努める			40.9	
柔和な顔立ち				74.3	救済する				48.0
人を侮ってはならない				51.9	紛争が起きる				31.6
					文化祭に招かれる				82.1

■常用漢字新旧字体対照表

（常用漢字の中でその字体が旧漢字の字体と異なったもののほとんどを示す）

音（訓）	新	旧
ア	亜	（亞）
アク・オ	悪	（惡）
アツ	圧	（壓）
あつかう	扱	（扱）
アン	暗	（暗）
イ	囲	（圍）
〃	医	（醫）
〃	為	（爲）
〃・ユイ	遺	（遺）
〃	違	（違）
イチ	壱	（壹）
イツ	逸	（逸）
イン	飲	（飮）
〃	隠	（隱）
〃	韻	（韻）
ウ	羽	（羽）
ウン	運	（運）
エイ	栄	（榮）
〃	営	（營）
〃	衛	（衞）
〃	鋭	（鋭）
エキ	益	（益）
〃	駅	（驛）
エツ	悦	（悅）
〃	謁	（謁）
〃	閲	（閱）
エン	円	（圓）
〃	延	（延）
〃	塩	（鹽）
〃・オン	遠	（遠）
〃	沿	（沿）
〃	鉛	（鉛）
〃	煙	（煙）
〃	援	（援）
〃	縁	（緣）
オウ	往	（往）
〃	横	（橫）
〃	応	（應）
〃	欧	（歐）
〃	殴	（毆）
〃	翁	（翁）
〃	桜	（櫻）
〃	奥	（奧）
おそれ	虞	（虞）
オン・イン	音	（音）
〃	温	（溫）
〃	穏	（穩）
カ	仮	（假）
〃	価	（價）
〃	禍	（禍）
〃	過	（過）
ガ	芽	（芽）
〃・カク	画	（畫）
〃	雅	（雅）
ガ	餓	（餓）
カイ・エ	会	（會）
〃・〃	絵	（繪）
〃	回	（囘）
〃	灰	（灰）
〃	海	（海）
〃	悔	（悔）
〃	懐	（懷）
〃	壊	（壞）
ガイ	害	（害）
〃	劾	（劾）
〃	該	（該）
〃	慨	（慨）
〃	概	（槪）
カク	拡	（擴）
〃	覚	（覺）
〃	核	（核）
〃	隔	（隔）
〃	較	（較）
ガク	学	（學）
〃・ラク	楽	（樂）
〃	岳	（嶽）
カツ	割	（割）
〃	轄	（轄）
〃	渇	（渴）
カン	寒	（寒）
〃・ケン	間	（間）
〃	簡	（簡）
〃	勧	（勸）
〃	歓	（歡）
〃	観	（觀）
〃	漢	（漢）
〃	関	（關）
〃	館	（館）
〃	巻	（卷）
〃	陥	（陷）
〃	寛	（寬）
〃	緩	（緩）
〃	環	（環）
〃	還	（還）
ガン	顔	（顏）
キ	気	（氣）
〃	祈	（祈）
〃	起	（起）
〃	帰	（歸）
〃	危	（危）
〃	既	（既）
〃	飢	（飢）
〃	幾	（幾）
〃	機	（機）
〃	器	（器）
ギ	偽	（僞）
〃	戯	（戲）
〃	犠	（犧）
キツ	喫	（喫）
ギャク	逆	（逆）
キュウ	旧	（舊）
〃	急	（急）
〃	及	（及）
〃	吸	（吸）
〃	級	（級）
〃	糾	（糾）
キョ	挙	（擧）
〃	巨	（巨）
〃	拒	（拒）
〃	距	（距）
〃・コ	虚	（虛）
〃	拠	（據）
キョウ	教	（敎）
〃・ゴウ	強	（强）
〃・ケイ	境	（境）
〃	鏡	（鏡）
〃	峡	（峽）
〃	狭	（狹）
〃	恐	（恐）
〃・ゴウ	郷	（鄕）
キョウ	響	（響）
ギョウ	暁	（曉）
キン・ゴン	勤	（勤）
〃	謹	（謹）
〃	近	（近）
ク	区	（區）
〃	駆	（驅）
グ	具	（具）
クウ	空	（空）
グウ	遇	（遇）
クン	薫	（薰）
〃	勲	（勳）
ケイ・キョウ	経	（經）
〃	径	（徑）
〃	茎	（莖）
〃	軽	（輕）
〃	契	（契）
〃・エ	恵	（惠）
〃	啓	（啓）
〃	掲	（揭）
〃	継	（繼）
〃	鶏	（鷄）
ゲイ	芸	（藝）
〃	迎	（迎）
ゲキ	撃	（擊）
ケツ	欠	（缺）
〃	潔	（潔）
ゲツ・ガツ	月	（月）
ケン	券	（劵）
〃	圏	（圈）
〃	研	（硏）
〃	兼	（兼）
〃	謙	（謙）
〃	憲	（憲）
〃・ゴン	権	（權）
〃	県	（縣）
〃	険	（險）
〃	検	（檢）
〃・ゲン	験	（驗）
〃	倹	（儉）
〃	剣	（劍）
〃	肩	（肩）
〃・コン	献	（獻）
〃	遣	（遣）
〃	顕	（顯）
ゲン・ゴン	厳	（嚴）
コ	戸	（戶）
〃	雇	（雇）
〃	顧	（顧）
ゴ	呉	（吳）
〃	娯	（娛）
〃	誤	（誤）
コウ	広	（廣）
〃	鉱	（鑛）
〃	効	（效）
〃	校	（校）
〃	絞	（絞）
〃	耕	（耕）
〃・オウ	黄	（黃）
〃	港	（港）

読み	新字体	旧字体
〃	構	(構)
〃	購	(購)
〃	講	(講)
〃	恒	(恆)
〃	荒	(荒)
〃	慌	(慌)
〃	控	(控)
ゴウ	号	(號)
コク	告	(告)
〃	酷	(酷)
〃	国	(國)
〃	黒	(黑)
〃	穀	(穀)
〃	刻	(刻)
こむ	込	(込)
サ	鎖	(鎖)
サイ	採	(採)
〃	菜	(菜)
〃	彩	(彩)
〃	砕	(碎)
〃・セイ	歳	(歲)
〃	斎	(齋)
〃	済	(濟)
〃	剤	(劑)
サク	削	(削)
さく	咲	(咲)
サツ・サク	冊	(册)
〃・サイ・セツ	殺	(殺)
ザツ・ゾウ	雑	(雜)
サン	参	(參)
〃・ザン	惨	(慘)
〃	蚕	(蠶)
〃	産	(產)
〃	賛	(贊)
ザン	残	(殘)
シ	糸	(絲)
〃	姉	(姊)
シ・ジ	次	(次)
〃	姿	(姿)
〃	資	(資)
〃	諮	(諮)
〃	歯	(齒)
〃	視	(視)
〃	祉	(祉)
シ	飼	(飼)
ジ・ニ	児	(兒)
〃	辞	(辭)
シツ	湿	(濕)
ジツ	実	(實)
シャ	写	(寫)
〃	社	(社)
〃	者	(者)
〃	煮	(煮)
〃	舎	(舍)
〃	捨	(捨)
〃	斜	(斜)
ジャ	邪	(邪)
シャク	釈	(釋)
〃	勺	(勺)
〃	爵	(爵)
ジャク	弱	(弱)
シュ・ス	主	(主)
ジュ	寿	(壽)
シュウ	収	(收)
〃	周	(周)
〃	週	(週)
〃	習	(習)
〃・シュ	衆	(衆)
〃	終	(終)
〃	臭	(臭)
ジュウ	住	(住)
〃・ジュ・ショウ	従	(從)
〃	縦	(縱)
〃	渋	(澁)
〃	獣	(獸)
シュク	祝	(祝)
〃	粛	(肅)
ジュツ	述	(述)
〃	術	(術)
シュン	瞬	(瞬)
ジュン	巡	(巡)
〃	遵	(遵)
ショ	処	(處)
〃	初	(初)
〃	所	(所)
〃	暑	(暑)
〃	諸	(諸)
〃	署	(署)
〃・チョ	緒	(緖)
〃	庶	(庶)
ジョ	叙	(敍)
ショウ	肖	(肖)
〃	消	(消)
〃	硝	(硝)
〃	称	(稱)
〃	証	(證)
〃	商	(商)
〃	勝	(勝)
〃	焼	(燒)
〃	渉	(涉)
〃	将	(將)
〃	奨	(奬)
〃	祥	(祥)
ジョウ	状	(狀)
〃	乗	(乘)
〃	剰	(剩)
〃・セイ	情	(情)
〃	条	(條)
〃	浄	(淨)
〃	城	(城)
〃	嬢	(孃)
〃	譲	(讓)
〃	醸	(釀)
〃	畳	(疊)
ショク・ジキ	食	(食)
〃	触	(觸)
〃	飾	(飾)
〃・シキ	織	(織)
〃	職	(職)
〃	嘱	(囑)
シン	真	(眞)
〃	慎	(愼)
〃	進	(進)
〃・ジン	神	(神)
〃	侵	(侵)
〃	浸	(浸)
〃	寝	(寢)
ジン	刃	(刄)
〃	尋	(尋)
〃	尽	(盡)
〃	迅	(迅)
ズ・ト	図	(圖)
スイ	衰	(衰)
〃	遂	(遂)
〃	粋	(粹)
〃	酔	(醉)
〃	穂	(穗)
ズイ	随	(隨)
〃	髄	(髓)
スウ・ス	数	(數)
〃	枢	(樞)
せ	瀬	(瀨)
セイ・ショウ	青	(靑)
〃	清	(淸)
〃	晴	(晴)
〃	精	(精)
〃・シン	請	(請)
〃・ジョウ	静	(靜)
〃・ショウ	声	(聲)
〃	聖	(聖)
〃・ジョウ	成	(成)
〃・〃	盛	(盛)
〃	誠	(誠)
〃	婿	(壻)
ゼイ	税	(稅)
セキ	籍	(籍)
セツ	接	(接)
〃	雪	(雪)
〃・ゼイ	説	(說)
〃・セチ	節	(節)
〃	窃	(竊)
〃	摂	(攝)
ゼツ	絶	(絕)
セン	専	(專)
〃	浅	(淺)
〃	銭	(錢)
〃	践	(踐)
〃	船	(船)
〃	戦	(戰)
〃	選	(選)
〃	遷	(遷)
〃	扇	(扇)
〃	潜	(潛)
〃	繊	(纖)
ゼン	全	(全)
〃	前	(前)
〃	禅	(禪)
ソ	祖	(祖)
ソウ	争	(爭)
〃	総	(總)
〃	双	(雙)
〃	壮	(壯)
〃	荘	(莊)
〃・ショウ	装	(裝)
〃	掃	(掃)
〃	僧	(僧)
〃	層	(層)
〃	捜	(搜)
〃	送	(送)
〃	遭	(遭)
〃	巣	(巢)

読み	新字体	旧字体
ソウ	騒	騷
ゾウ	増	增
〃	憎	憎
〃・ソウ	贈	贈
〃	造	造
〃	蔵	藏
〃	臓	臟
ソク	即	卽
〃	速	速
ゾク	属	屬
〃	続	續
〃	賊	賊
ソン	尊	尊
ダ	妥	妥
〃	堕	墮
タイ・ダイ	台	臺
〃・テイ	体	體
〃・ツイ	対	對
〃	退	退
〃	帯	帶
〃	滞	滯
〃	隊	隊
〃	逮	逮
たき	滝	瀧
タク	沢	澤
〃	択	擇
タツ	達	達
ダツ	脱	脫
タン	単	單
〃	炭	炭
〃	担	擔
〃	胆	膽
〃	嘆	嘆
〃	誕	誕
ダン	断	斷
〃	団	團
〃	暖	暖
〃	弾	彈
チ	置	置
〃	値	値
〃	遅	遲
〃	痴	癡
チク	築	築
〃	逐	逐
チャク	嫡	嫡
チュウ	注	注
〃	柱	柱
〃	昼	晝
〃	虫	蟲
〃	駐	駐
〃	鋳	鑄
チョ	著	著
チョウ	朝	朝
〃	潮	潮
〃	調	調
〃	彫	彫
〃	徴	徵
〃	懲	懲
〃	聴	聽
〃	庁	廳
チョク・ジキ	直	直
〃	勅	敕
チン	朕	朕
〃	鎮	鎭
ツイ	墜	墜
〃	追	追
ツウ・ツ	通	通
つぼ	坪	坪
テイ	呈	呈
〃	程	程
〃	帝	帝
〃	締	締
〃	逓	遞
テキ	的	的
〃	敵	敵
〃	適	適
〃	滴	滴
〃	摘	摘
テツ	鉄	鐵
〃	迭	迭
テン	点	點
〃	添	添
〃	転	轉
デン	伝	傳
ト・ツ	都	都
〃	途	途
トウ	冬	冬
〃	当	當
〃	党	黨
〃	唐	唐
〃	糖	糖
〃	盗	盜
〃	稲	稻
〃	謄	謄
〃	騰	騰
〃	闘	鬪
〃	逃	逃
〃	透	透
ドウ	童	童
〃・トウ	道	道
〃	導	導
トク	徳	德
〃・ドク・トウ	読	讀
トク	匿	匿
ドク	独	獨
〃	毒	毒
トツ	突	突
とどける	届	屆
ナイ・ダイ	内	內
ナン	難	難
ニ	弐	貳
ニク	肉	肉
ニュウ	乳	乳
ニン	忍	忍
〃	認	認
ネイ	寧	寧
ノウ・トウ・ナ・ナツ・ナン	納	納
〃	悩	惱
〃	脳	腦
ハ	派	派
ハイ	拝	拜
〃	廃	廢
バイ	売	賣
〃	倍	倍
〃	陪	陪
〃	賠	賠
〃	梅	梅
ハク・バク	博	博
〃	薄	薄
〃	迫	迫
バク	縛	縛
〃	麦	麥
ハツ・ホツ	発	發
〃	髪	髮
バツ	抜	拔
ハン	飯	飯
〃・バン	半	半
〃・〃	伴	伴
〃	判	判
〃	畔	畔
〃	繁	繁
バン	晩	晚
〃	蛮	蠻
ヒ	卑	卑
〃	碑	碑
〃	避	避
〃	秘	祕
ビ	鼻	鼻
〃	微	微
ヒツ	匹	匹
ひめ	姫	姬
ヒョウ	評	評
ヒン	浜	濱
〃	賓	賓
ビン	敏	敏
フ	負	負
〃	富	富
〃	婦	婦
〃	浮	浮
〃	敷	敷
〃	譜	譜
ブ	侮	侮
〃	部	部
フク	服	服
〃	福	福
〃	覆	覆
フツ	払	拂
ブツ	仏	佛
ヘイ・ビョウ	平	平
〃	丙	丙
〃	柄	柄
〃	並	竝
〃	併	倂
〃	弊	弊
〃	幣	幣
ヘン	辺	邊
〃	返	返
〃	変	變
〃	偏	偏
〃	編	編
〃	遍	遍
ベン	弁	辨
〃	〃	瓣
〃	〃	辯
ホ・フ・ブ	歩	步
〃	舗	舗
ボ	簿	簿
ホウ	包	包
〃	抱	抱
〃	胞	胞
〃	砲	砲

読み	新字体（旧字体）
〃	飽（飽）
〃	宝（寶）
〃	邦（邦）
〃	豊（豐）
〃	崩（崩）
〃	峰（峯）
〃	縫（縫）
ボウ・モウ	望（望）
〃・〃	亡（亡）
〃	忙（忙）
ボウ	忘（忘）
〃	房（房）
〃	冒（冒）
〃	帽（帽）
ボク	墨（墨）
ボツ	没（沒）
ホン	翻（飜）
マ	麻（麻）
〃	摩（摩）
〃	魔（魔）
マイ	毎（每）
マン	万（萬）
〃	満（滿）
ミャク	脈（脈）
むすめ	娘（娘）
メイ・ミョウ	明（明）
〃	迷（迷）
メン	免（免）
モウ	盲（盲）
〃・コウ	耗（耗）
モク	黙（默）
ヤク	約（約）

読み	新字体（旧字体）
〃	訳（譯）
〃	薬（藥）
〃	躍（躍）
ユ	輸（輸）
〃	愉（愉）
〃	諭（諭）
ユウ	勇（勇）
〃・ユ	遊（遊）
〃	猶（猶）
ヨ	予（豫）
〃	余（餘）
〃	与（與）
〃	誉（譽）
ヨウ	要（要）
〃	腰（腰）
〃	様（樣）
〃	養（養）
〃	曜（曜）
〃	揺（搖）
〃	謡（謠）
〃	容（容）
〃	溶（溶）
ヨク	浴（浴）
〃	欲（欲）
〃	翌（翌）
〃	翼（翼）
ライ	来（來）
〃	頼（賴）
ラン	乱（亂）
〃	覧（覽）
〃	欄（欄）
リツ・ソツ	率（率）

読み	新字体（旧字体）
リャク	略（畧）
リュウ	隆（隆）
リョ	旅（旅）
〃	虜（虜）
リョウ	両（兩）
〃	猟（獵）
リョク・ロク	緑（綠）
リン	隣（鄰）
ルイ	涙（淚）
〃	塁（壘）
〃	類（類）
レイ・ライ	礼（禮）
〃	励（勵）
〃・リョウ	霊（靈）
〃	隷（隸）
〃	齢（齡）
レキ	歴（歷）
〃	暦（曆）
レン	練（練）
〃	錬（鍊）
〃	連（連）
〃	恋（戀）
〃	廉（廉）
ロ	炉（爐）
ロウ	労（勞）
〃	浪（浪）
〃	朗（朗）
〃	郎（郞）
〃	廊（廊）
〃	楼（樓）
ロク	録（錄）
ワン	湾（灣）

●字体の選定について

現在、普通に使われている常用漢字の字体は、昭和五十六年、内閣告示として出された『常用漢字字体表』に定められている。この表は、

漢字を使用する上の複雑さは、その数の多いことや、その読みかたの多様であることによるばかりでなく、字体の不統一や字画の複雑さにもとづくところが少なくないから、当用漢字表制定の趣旨を徹底させるためには、さらに漢字の字体を整理して、その標準を定めることが必要である。（内閣訓令第一号より）

として、『常用漢字表』の漢字につき、字体の標準を示したものである。次にこの表より、字体選定の例を要約しておく。［（）内は旧漢字］

① 活字に従来用いられた形をそのまま用いたもの

安　衣　演

② 活字として従来二種以上の形のあった中から一を採ったもの

効（效）　叙（敍・敘）　姉（姊）

略（畧）　島（嶋）　冊（册）

商（商）　編（編）　船（舩）

③ 従来活字としては普通に用いられていなかったもの

a 点画の方向の変わった例

半（半）　兼（兼）　妥（妥）

羽（羽）

b 画の長さの変わった例

告（吿）　契（契）　急（急）

c 同じ系統の字で、または類似の形で、小異の統一された例

拝・招（拜・招）　全・今（全・今）

月・期・朝・青・胃（月・期・朝・靑・胃）　起・記（起・記）

d 一点一画が増減し、または画が併合したり分離したりした例

者（者）　黄（黃）　郎（郞）

歩（步）　成（成）　黒（黑）

e 全体として書きやすくなった例

亜（亞）　倹（儉）　児（兒）

f 組み立ての変わった例

黙（默）　勲（勳）

g 部分的に省略された例

応（應）　芸（藝）　県（縣）

h 部分的に別の形に変わった例

広（廣）　転（轉）

■常用漢字の筆順の原則

筆順の原則をまとめると、次のようになる。

① 上から下へ
- 三　一　二　三
- 工　一　丅　工
- 客　丶　宀　ゥ　客

② 左から右へ
- 川　丿　川　川
- 学　丶　丷　⺍　学
- 派　氵　沂　派

例外（簡単な繞〈にょう〉（辶）など）はあとから）
- 近　斤　近
- 建　聿　建
- 直　直　直

③ 横画から縦画へ
- 十　一　十
- 七　一　七
- 共　一　十　廾　丑　共
- 用　月　月　用
- 耕　耒　耔　耕　耕

例外
- 田　冂　田　田
- 曲　冂　巾　曲　曲
- 王　一　丁　干　王

④ 中央から左右へ
- 小　亅　小　小
- 赤　土　赤　赤　赤
- 当　丨　⺌　业　当
- 楽　白　伯　泊　楽
- 承　フ　了　孑　手　承　承

例外
- 性　丶　丶　忄　性

⑤ 外側から内側へ
- 火　丶　丷　火
- 国　丨　冂　国　国
- 内　丨　冂　内
- 月　丿　刀　月　月

例外
- 田　丨　冂　冂　田　田
- 区　一　ヌ　区
- 歯　止　齿　歯　歯

⑥ 左の払いから右の払いへ
- 文　亠　ナ　文
- 金　ノ　𠆢　金
- 人　ノ　人

⑦ 貫く画は最後に
- 中　口　中
- 書　⺕　聿　書　書
- 平　一　ㄗ　亚　平
- 子　フ　了　子
- 女　く　女　女
- 母　L　口　母　母

例外
- 世　一　廿　世
- 里　ロ　甲　里
- 重　一　肀　重　重

⑧ a 横画から左の払いへ
- 左　一　ナ　左
- 友　一　ナ　方　友
- 在　一　ナ　𠂇　在

b 左の払いから横画へ
- 右　ノ　ナ　右
- 有　ノ　ナ　有
- 布　ノ　ナ　布

■常用漢字音訓表の「付表」（昭和56年10月1日内閣告示をもとに作成したもの。）

読み	表記
あす	明日
あずき	小豆
あま	海女
いおう	硫黄
いくじ	意気地
いちげんこじ	一言居士
いなか	田舎
いぶき	息吹
うなばら	海原
うば	乳母
うわき	浮気
うわつく	浮つく
えがお	笑顔
おかあさん	お母さん
おじ	叔父・伯父
おとうさん	お父さん
おとな	大人
おとめ	乙女
おば	叔母・伯母
おまわりさん	お巡りさん
おみき	お神酒
おもや	母屋〔母家
かぐら	神楽
かし	河岸
かぜ	風邪
かな	仮名
かや	蚊帳
かわせ	為替
かわら	河原〔川原
きのう	昨日
きょう	今日
くだもの	果物
くろうと	玄人
けさ	今朝
けしき	景色
ここち	心地
ことし	今年
さおとめ	早乙女
ざこ	雑魚
さじき	桟敷
さしつかえる	差し支える
さつきばれ	五月晴
さなえ	早苗
さみだれ	五月雨
しぐれ	時雨
しない	竹刀
しばふ	芝生
しみず	清水
しゃみせん	三味線
じゃり	砂利
じゅず	数珠
じょうず	上手
しらが	白髪
しろうと	素人
しわす（「しはす」とも言う。）	師走
すきや	数寄屋〔数奇屋
すもう	相撲
ぞうり	草履
だし	山車
たち	太刀
たちのく	立ち退く
たなばた	七夕
たび	足袋
ちご	稚児
ついたち	一日
つきやま	築山
つゆ	梅雨
でこぼこ	凸凹
てつだう	手伝う
てんません	伝馬船
とあみ	投網
とえはたえ	十重二十重
どきょう	読経
とけい	時計
ともだち	友達
なこうど	仲人
なごり	名残
なだれ	雪崩
にいさん	兄さん
ねえさん	姉さん
のら	野良
のりと	祝詞
はかせ	博士
はたち	二十〔二十歳
はつか	二十日
はとば	波止場
ひとり	一人
ひより	日和
ふたり	二人
ふつか	二日
ふぶき	吹雪
へた	下手
へや	部屋
まいご	迷子
まっか	真っ赤
まっさお	真っ青
みやげ	土産
むすこ	息子
めがね	眼鏡
もさ	猛者
もみじ	紅葉
もめん	木綿
もより	最寄り
やおちょう	八百長
やおや	八百屋
やまと	大和＝（大和絵 大和魂等）
ゆかた	浴衣
ゆくえ	行方
よせ	寄席
わこうど	若人

常用漢字表

(1945字)

●太字は『当用漢字表』に新しく加わった95字。

【ア】亜哀愛悪握圧扱安案暗【イ】以衣位囲医依委威胃為尉異移偉意違維
慰遺緯域育一壱逸芋引印因姻員院陰飲隠韻【ウ】右宇羽雨運雲【エ】永泳
英映栄営詠影鋭衛易疫益液駅悦越謁閲円延沿炎宴援園煙**猿**遠鉛塩
演縁【オ】汚王**凹**央応往押欧殴桜翁奥横屋億憶虞乙卸音恩温穏【カ】下化
火加可仮何花佳価果河科架夏家荷華菓貨**渦**過嫁暇禍**靴**寡歌箇**稼**課
蚊我画芽賀雅餓介回灰会快戒改怪**拐**悔海界皆械絵開階解塊壊懐貝
外劾害**涯**街慨該概**垣**各角拡革格核**殻**郭覚較隔閣確獲嚇穫学岳楽額
掛**潟**括活**喝**渇割滑**褐**轄且株刈干刊甘汗**缶**完肝官冠巻看陥乾勘患貫寒喚堪換敢棺
款間閑勧寛幹感漢慣管関歓監緩憾還館環簡観艦鑑丸含岸岩眼**頑**顔願【キ】企危机気
岐希忌汽奇祈季紀軌既記起飢鬼帰基寄規喜幾揮期棋貴棄旗器輝機騎技宜偽欺義
疑儀戯擬犠議菊吉喫詰却客脚逆虐九久及弓丘旧休吸朽求究泣急級糾宮救球給窮
牛去巨居拒拠挙虚許距魚御漁凶共叫狂京享供協況峡**挟**狭恐恭胸脅強教郷境橋**矯**
鏡競響驚仰暁業凝曲局極玉斤均近金菌勤琴筋禁緊謹**襟**吟銀【ク】区句苦駆具愚空偶
隅遇屈掘繰君訓勲薫軍郡群【ケ】兄刑形系径茎係型契計恵啓掲**渓**経**蛍**敬景軽傾携継
慶憩警鶏芸迎鯨劇撃激欠穴血決結傑潔月犬件見券肩建研県倹兼剣軒険圏堅検
嫌献絹遣権憲賢謙繭顕験懸元幻玄言弦限原現減源厳【コ】己戸古呼固孤弧故枯個庫
湖雇誇鼓顧五互午呉後娯悟碁語誤護口工公孔功巧広甲交光向后好江考行坑孝抗
攻更効幸拘肯侯厚恒**洪**皇紅荒郊香候校耕航貢降高康控慌黄港硬絞項**溝**鉱構綱酵
稿興衡鋼講購号合拷剛豪克告谷刻国黒穀酷獄骨込今困**昆**恨根婚混紺魂墾懇【サ】左
佐査砂唆差詐鎖座才再災妻砕宰栽彩採済祭斎細菜最裁債催歳載際在材剤財罪**崎**
作削昨索策酢搾錯咲冊札刷殺察撮擦雑**皿**三山参**桟**蚕惨産**傘**散算酸賛残暫【シ】士子
支止氏仕史司四市矢旨死糸至伺志私使刺始姉枝祉**肢**姿思指施師紙脂視紫詞歯嗣
試詩資飼誌雌賜諮示字寺次耳自似児事侍治持時滋慈辞磁璽式識軸七失室疾執湿
漆質実芝写社車舎者射捨赦斜煮**遮**謝邪**蛇**勺尺借**酌**釈爵若弱寂手主守朱取狩首殊
珠酒種趣寿受授需儒樹収囚州舟秀周宗拾秋臭修終習週就衆集愁酬醜襲十**汁**充住
柔重従渋銃獣縦叔祝宿淑粛縮**塾**熟出述術俊春瞬旬巡盾准殉純循順準潤遵処初所
書庶暑署緒諸女如助序叙徐除小升少召匠床抄肖**尚**招承昇松沼昭**宵**将消症祥称笑
唱商渉章紹訟勝掌晶焼焦硝粧詔証象傷奨照詳彰障衝賞償礁鐘上丈冗条状乗城浄
剰常情場畳蒸**縄****壌**嬢錠譲醸色食植殖飾触嘱織職辱心申伸臣身辛侵信津神**唇**娠振
浸真針深紳進森診寝慎新審震薪親人刃仁尽迅**甚**陣尋【ス】図水吹垂炊帥粋衰推酔遂

盛清逝省牲星政斉青性征姓制声西成生正世井是瀬畝セ寸杉据数崇枢髄随錘穂睡

節摂雪設接窃拙折切籍績積跡責惜席隻析昔赤石斥夕税整請静誓製精誠聖勢晴婿

漸禅然善前全鮮繊薦選遷線潜銑銭践戦船旋栓扇染洗浅泉専宣先占仙川千絶舌説

装葬喪創窓巣曹掃桑挿捜倉送草荘相奏走争早壮双礎塑訴疎組粗措素租祖阻ソ繕

存率卒続賊属族俗測側速息促則足束即臓贈蔵憎増像造藻騒霜燥操槽遭総層想僧

滝題第台代大態滞隊貸替逮袋泰帯退胎怠待耐体対太駄惰堕妥打多他タ損尊孫村

チ壇談暖弾断段男団鍛誕端嘆短淡探胆炭単担丹棚奪脱達但濁諾濯託拓卓沢択宅

貯著駐鋳衷柱昼注抽忠宙沖虫仲中嫡着茶窒秩築蓄逐畜竹置稚痴遅致恥値知池地

追ツ鎮賃陳朕珍沈勅直懲聴調澄潮徴跳腸超脹朝鳥頂釣眺彫張帳挑長町兆庁弔丁

敵適滴摘笛的泥締艇程提堤偵停逓訂庭帝貞亭邸抵底定弟呈低廷テ坪漬塚痛通墜

豆投当灯冬刀怒度努奴土塗渡都途徒吐斗ト電殿伝田転添展点店典天撤徹鉄哲迭

動胴洞同騰闘謄頭糖踏稲統筒等答登痘湯棟搭塔陶盗悼党透討桃島唐凍倒逃到東

入日肉弐尼二ニ難軟南内ナ曇鈍豚屯届突凸読独毒篤徳督得特匿峠導銅働道童堂

排配俳肺背杯拝婆馬覇破派波把ハ濃農脳能納悩ノ燃粘念年熱寧ネ認忍妊任尿乳

反閥罰抜伐髪発鉢八肌畑箱爆縛漠麦薄博舶迫泊拍伯白賠買媒陪培梅倍売輩廃敗

飛卑非肥披彼批否妃皮比ヒ盤蛮番晩藩繁範頒煩搬飯販般畔班版板坂判伴帆犯半

貧浜品猫描病秒苗標漂評票俵表氷百姫筆泌必匹鼻微備美尾避罷碑費扉悲被秘疲

副服伏風封舞部武侮譜賦膚敷腐普富符婦浮赴負附怖府扶布付父夫不フ瓶敏頻賓

癖壁米弊幣塀閉陛柄並併兵平丙ヘ聞文分奮憤墳噴雰紛粉物仏沸払覆複腹福復幅

胞泡法放抱宝奉邦芳包方簿暮慕墓募母舗補浦捕保歩ホ勉便弁編遍偏変返辺片別

朴木北謀膨暴貿棒帽傍望紡剖冒某肪房防忘妨坊忙乏亡縫褒飽豊報訪崩砲峰倣俸

密岬魅味未ミ漫慢満万抹末又膜幕埋枚妹毎魔磨摩麻マ盆凡翻奔本堀没撲墨僕牧

門黙目網猛耗盲妄毛模茂モ綿面免滅鳴銘盟迷明命名メ娘霧夢無務矛ム眠民妙脈

ヨ優融憂誘雄遊裕猶郵悠幽勇有友唯癒輸諭愉油由ユ躍薬訳約役厄野夜ヤ匁問紋

雷来羅裸ラ翼翌欲浴抑曜謡擁養窯踊様腰溶陽葉揺揚庸容要洋羊用幼預誉余予与

良両了慮虜旅硫隆粒竜留流柳略律立陸離履裏痢理里利吏リ欄濫覧卵乱酪落絡頼

齢隷霊零鈴例戻励冷礼令レ類塁累涙ル臨隣輪倫厘林緑力糧療寮領僚量陵猟涼料

腕湾枠惑賄話和ワ論録六漏楼廊浪朗郎労老露路炉ロ錬練廉連恋裂烈劣列歴暦麗

文学の歴史

図説編

紺糸縅鎧（こんいとおどしよろい）　源平合戦のころの典型的な形をあらわしている壮重華麗な鎧である。胴の部分は、黒漆塗の鉄と皮の小板を紺糸でとじ合わせて作られており、両側の大袖の部分は、この時代の通例どおり六段で仕立てられている。平重盛が厳島神社に奉納したものと伝えられているが、それにふさわしい精緻なできばえである。胴高（胸板から草摺裾まで）七二・〇cm、大袖高さ四二・八cm、同幅三一・五cm。

（厳島神社蔵）

▼万葉集（桂本）⇨P148

▲持統天皇（狩野探幽画）

大伴家持▲（上畳本歌仙絵・五島美術館蔵）

▲古事記（真福寺本・宝生院蔵）⇨P147

◀藤原宮の木簡

▼高松塚古墳壁画（奈良県明日香村）

▲仁徳天皇陵

◀琴を引く男子像

▲鳥毛立女屏風（正倉院蔵）

◀富士山
……語り継ぎいひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は （山部赤人）

▼志賀の辛崎
ささなみの志賀の辛崎幸くあれば 大宮人の船待ちかねつ（柿本人麻呂）

▼熟田津
熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ 今は漕ぎいでな （額田王）

▼磐代
磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまたかへり見む （有間皇子）

▲大和三山
香具山は畝火雄々しと耳梨と相あらそひき…… （天智天皇）

▶大宰府跡
大宰帥大伴卿の冬の日に雪を見て京を憶ふ
沫雪のほどろほどろにふり重けば 平城の京師し思ほゆるかも （大伴旅人）

2 日本文学の世界　中古

◀紀貫之（上畳本歌仙絵・五島美術館蔵）

◀小野小町（角倉素庵歌仙絵）

▶竹取の翁（竹取物語絵巻・宮内庁書陵部蔵）⇨P152

▶扇面法華経冊子（四天王寺蔵）

▲京都御所

大内裏

大内裏は政事・公事などがつかさどられる、平安京の中心であった。

①**朝堂院**　正庁。即位・大嘗会などの大礼が行われる。**大極殿**はその正殿。

②**豊楽院**　節会・射礼・相撲などの饗宴が催された。

③**神祇官**　神々への祭典をつかさどり、諸国の官社を総管した。

④**太政官**　八省を統率し、諸国の政治を総理する役所。

▶清少納言（東京国立博物館）

内裏

内裏は、大内裏の内に位置する天皇の居所である。

①**紫宸殿**　正殿。朝賀や公事を行うところ。南殿ともいう。

②**仁寿殿**　もと天皇の常御殿であったが、のちに内宴や相撲、蹴鞠などを行った。

③**清涼殿**　天皇の常の御座所。四方拝（⇨P62）・叙位・除目などが行われた。

④**後涼殿**　渡殿で清涼殿とつづいている女御たちの御殿。

⑤**後宮**　女房の伺候した七殿五舎（常寧殿・承香殿・貞観殿・弘徽殿・登華殿・麗景殿・宣耀殿、昭陽舎・淑景舎・飛香舎・凝華舎・襲芳舎）をいう。

⑥**滝口所**　宮中の警護にあたる武士の詰め所。

▲陸路の旅（石山寺縁起・石山寺蔵）　十一世紀の初め，一条天皇の母東三条院が石山寺に参詣するために逢坂山を越えるところ

▲海路の旅（北野天神縁起・北野天満宮蔵）　筑紫に配流される菅原道真の一行

平安京

●平安京の規模　東西1508丈（約5.2km），南北1753丈（約4.5km）

一条大路　正親町小路　土御門大路　鷹司小路　近衛大路　勘解由小路　中御門大路　春日小路　大炊御門大路　冷泉小路　二条大路　押小路　三条坊門小路　姉小路　三条大路　六角小路　四条坊門小路　錦小路　四条大路　綾小路　五条坊門小路　高辻小路　五条大路　樋口小路　六条坊門小路　楊梅小路　六条大路　左女牛小路　七条坊門小路　北小路　七条大路　塩小路　八条坊門小路　梅小路　八条大路　針小路　九条坊門小路　信濃小路　九条大路

西京極大路　無差小路　山小路　菖蒲小路　木辻大路　恵止利小路　馬代小路　宇多小路　道祖大路　野寺小路　西堀川小路　西靱負小路　西大宮大路　西櫛笥小路　皇嘉門大路　西坊城小路　朱雀大路　坊城小路　壬生大路　櫛笥小路　東大宮大路　猪隈小路　堀川小路　油小路　西洞院大路　町尻小路　室町小路　烏丸小路　東洞院大路　高倉小路　万里小路　富小路　東京極大路

大内裏（⇨P132）　右京　左京　宇多院　淳和院　東市　西市　羅城門　西寺　東寺　花山院　高倉院　六条院　現在の京都御所　世尊寺　法成寺　広隆寺　双ヶ岡　六角堂　六波羅蜜寺　三十三間堂　法性寺　桂川　鴨川　はなぞの　にじょう　たんばぐち　にしおおじ　きょうと

平安京は，七九二年，唐の都長安を模して築かれた。整然と区画され，南北と東西を貫く道路を組み合わせて「樋口富小路」などということにより，両者の交差する一画が示された。

①朱雀大路　都を左京と右京に分断する大路。道幅約84メートルあったといわれる。南端にあったのが羅城門。
②神泉苑　皇居直属の自然庭園。
③穀倉院　朝廷の倉庫。
④鴻臚館　外国使節のための館舎。
⑤京職　司法・警察機関。
⑥検非違使庁　治安維持機関。
⑦大学寮　官立の官吏養成機関。
⑧弘文院⑨勧学院⑩奨学院　貴族の子弟のための学校。
⑪綜芸種智院　空海創設の学校。

＊以下は貴族の私邸や後院（譲位後の天皇の居所のこと）
❶一条院　藤原伊尹の邸宅。
❷染殿　藤原良房の邸宅。
❸京極殿　藤原道長の邸宅。「土御門殿」ともよばれた。
❹高陽院　藤原頼道の邸宅。
❺東三条院　藤原頼忠の邸宅。
❻閑院　藤原冬嗣の邸宅。
❼堀川殿　藤原基経の邸宅。
❽河原院　源融の邸宅。
❾紅梅殿　菅原道真の邸宅。
❿朱雀院⓫亭子院　宇多天皇の後院。
⓬冷泉院　嵯峨天皇の後院。

▲木曽の最期（平家物語絵巻・岡山美術館蔵）

▲平家納経（厳島神社蔵）

▲屋島の戦い（源平合戦図屏風・埼玉県立博物館蔵）

▼一の谷の戦い（源平合戦図屏風・霊松寺蔵）

能・狂言

能は，舞台でシテ（主役）・ワキ（相手役）などの役者が囃子方（伴奏）や地謡（合唱）をともない謡曲をうたい，舞いやしぐさをする総合芸術。世阿弥により大成された。狂言は，能とともに室町時代に完成した演劇で，せりふ中心の写実的庶民的な喜劇。

▲猿楽の様子（春日若宮祭礼絵巻・春日大社蔵）

▶能舞台平面図

▼謡曲『安宅』

▲翁の面

▶狂言『靭猿』

▲藤原定家

▲小倉山（京都市右京区嵯峨）⇨P210

▲方丈記（大福光寺本・大福光寺蔵）⇨P173

▼兼好法師画像（藤原光成画・常楽寺蔵）

▶双が岡（京都市右京区御室）

▼松永貞徳肖像（実相寺蔵）

▼飯尾宗祇肖像（南部家蔵）

▼井原西鶴時代の貨幣（大判）

（裏）　（表）

▲洛中洛外図（町田家蔵）

◀大晦日さだめなき世の定哉（西鶴）

▲商家の店先（『日本永代蔵』初版本さし絵）

◀井原西鶴（芳賀一晶筆）

⇨P184

◀出立　奥の細道図屏風（蕪村筆）より

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。……

行く春や鳥啼き魚の目は涙

◀平泉（高館より北上川を臨む）

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり……。

夏草やつはものどもが夢の跡

◀立石寺　立石寺

山形領に立石寺という山寺あり。

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

松尾芭蕉（破笠筆）

歌舞伎・浄瑠璃

歌舞伎は，出雲の阿国の歌舞伎踊りを起源とする所作・音楽をともなったせりふ劇で，今日なお日本の代表的な演劇である。浄瑠璃は，三味線に合わせて語る語り物のことで，江戸初期には人形操りと組み合わされ，後に竹本義太夫・近松門左衛門により独自の芸術にまで高められた。

▲遊女歌舞伎の一座（四条河原図屏風・静嘉堂）

◀人形浄瑠璃舞台写真（近松門左衛門『冥途の飛脚』）

近松門左衛門▶（杉森多門筆）

⇨P188

▼与謝蕪村（月溪筆）

◀与謝蕪村の画

小林一茶（小林春甫筆）▶

▲やれ打つな蠅が手をする足をす（一茶）

▼賀茂真淵歌

本居宣長歌　天照す神のまもりのかたければとはにうごかぬ高御座かな(宣長)▶

▶本居宣長

▼劇場内部（鳥井清忠筆　リッカー美術館蔵）

▶竹本義太夫

▶山東京伝

5 近・現代文学地図①

北海道 東北 関東

宗谷　北の岬（辻邦生）

若い詩人の肖像（伊藤整）

岩内　生れ出づる悩み（有島武郎）

小樽

石狩　石狩川（本庄陸男）

札幌　リラ冷えの街（渡辺淳一）

ロビンソンの末裔（開高 健）

空知　空知川の岸辺（国木田独歩）

室蘭　海に生くる人々（葉山嘉樹）

函館　蟹工船（小林多喜二）　若い人（石坂洋次郎）　一握の砂（石川啄木）

阿寒湖　森と湖のまつり（武田泰淳）

十勝　火山灰地（久保 栄）

釧路　挽歌（原田康子）

◀小樽市街

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも（『白き山』所収）

▲斎藤茂吉の第一歌集『赤光』表紙

▶最上川

あれが阿多多羅山。あの光るのが阿武隈川。（「樹下の二人」『智恵子抄』所収）

▲『樹下の二人』の原稿

◀安太太良山

わが故郷に帰れる日汽車は烈風の中を突き行けり。（「帰郷」『氷島』所収）

▲萩原朔太郎の故郷前橋市

◀萩原朔太郎の処女歌集『月に吠える』の表紙

一夕友とともに歩して銀街を過ぎ木挽町に入らんとす。（『漫罵』）

▲明治初年の銀座通り図

◀北村透谷自筆原稿

▲『人間失格』の初版本表紙

▲『斜陽』の初版本表紙

◀太宰治の生家（金木）

バスはかなりこんでいた。わたしは小泊まで二時間立ったままであった。（『津軽』）

▲石川啄木が遊んだ大森浜（函館）

◀石川啄木の処女歌集『一握の砂』の表紙

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる
（『一握の砂』所収）

小泊
津軽（太宰治）

八甲田山▲
八甲田山死の彷徨
（新田次郎）

雫石
小岩井農場〈春と修羅　所収〉
（宮沢賢治）

月山▲
月山（森　敦）

最上川
白き山（斎藤茂吉）

遠野
遠野物語
（柳田国男）

仙台
藤野先生（魯迅）
青葉繁れる（井上ひさし）

▲安太太良山
智恵子抄
（高村光太郎）

伊香保　不如帰（徳富蘆花）

前橋　月に吠える
（萩原朔太郎）

桐生
田舎教師（田山花袋）

武蔵野（国木田独歩）
田園の憂鬱（佐藤春夫）
土（長塚　節）

石下

司令の休暇（阿部昭）

武蔵野

東京

土浦　雲の墓標
（阿川弘之）

鵠沼

鎌倉
新能
（立原正秋）

矢切
野菊の墓
（伊藤左千夫）

逗子
太陽の季節
（石原慎太郎）

千羽鶴
（川端康成）

東京
- 伝通院　浮雲（二葉亭四迷）
- 銀座　漫罵（北村透谷）
- 下谷　たけくらべ（樋口一葉）
- 感応寺　五重塔（幸田露伴）
- 神田〜本郷　こころ・三四郎（夏目漱石）
  雁（森鷗外）
- 新宿　幸福（安岡章太郎）

▲漱石山房図（津田青楓画）

◀『こころ』の初版本表紙

……字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。（『こころ』）

国境の長いトンネルを抜けると、雪国だった。（『雪国』）

▲サイデンステッカー訳『雪国』初版本の表紙

▲ノーベル文学賞受賞式での川端康成（昭43）

『雪国』の舞台（湯沢）▶

風立ちぬ、いざ生きめやも。
ふと口をついて出てきたそんな詩句を、私は私にもたれているおまえの肩に手をかけながら口の裡で繰り返していた。（『風立ちぬ』）

▲『菜穂子』初版本の表紙

▶八ケ岳

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ。
（「千曲川旅情の歌」『落梅集』所収）

▲島崎藤村の第一歌集『若菜集』初版本の表紙

▶千曲川

こうしてみると、雪子ばかりではない。自分もやはり生粋の関西人であり、どんなに深く関西の風土に愛着しているかがわかる。（『細雪』）

▲芦屋の住宅街

◀『細雪』の原稿

わが国の、昔から名勝といわれているものは、どれをみても、まことに細やかなできである。特に、天の橋立は、三景のうちでも、いちばん繊細な造化のようである。（「天の橋立」・小林秀雄『考えるヒント』所収）

▲天の橋立

● 京都
- 北山・古都（川端康成）
- 金閣寺・金閣寺（三島由紀夫）
- 羅城門跡・羅生門（芥川龍之介）
- 嵯峨野・雁の寺（水上勉）
- 祇園・みだれ髪（与謝野晶子）

● 湯沢
雪国（川端康成）

● 飯山
破戒（島崎藤村）

● 金沢
性に目覚める頃（室生犀星）
歌のわかれ（中野重治）
北の海（井上靖）

● 小諸
千曲川旅情の歌（島崎藤村）

● 安曇野
安曇野（臼井吉見）

▲ 八ヶ岳
風立ちぬ・菜穂子（堀辰雄）
おそれといふ感情（唐木順三）

● 城崎
城の崎にて（志賀直哉）

● 天の橋立

● 由良
山椒大夫（森鷗外）

● 長良川
長良川（豊田穣）

● 妻籠
夜明け前（島崎藤村）

細雪（谷崎潤一郎）

● 芦屋

● 京都

▲ 比叡山
虞美人草（夏目漱石）

▲ 富士山
富嶽百景（太宰治）
富士山（草野心平）

● 神戸
蒼氓（石川達三）

● 大阪
夫婦善哉（織田作之助）
春琴抄（谷崎潤一郎）

● 奈良
大和古寺風物誌（亀井勝一郎）
大和路・信濃路（堀辰雄）

● 熱海
金色夜叉（尾崎紅葉）

● 松阪
城のある町にて（梶井基次郎）

● 神島
潮騒（三島由紀夫）

● 伊豆
伊豆の踊子（川端康成）
斜陽（太宰治）
しろばんば（井上靖）
修禅寺物語（岡本綺堂）

● 紀ノ川
紀ノ川（有吉佐和子）

▲ 高野山
高野聖（泉鏡花）
滝口入道（高山樗牛）

その想念とは、こうであった。「金閣を焼かなければならぬ。」（『金閣寺』）

▲『金閣寺』初版本の表紙

◀金閣寺

▶羅城門跡より東寺を望む

『羅生門』初版本の外箱▼

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。（『羅生門』）

5 近・現代文学地図③

中国
四国
九州

◀小豆島『二十四の瞳』のモデルとなつた分校跡

◀『暗夜行路』初版本の表紙
◀大山

疲れきってはいるが、それが不思議な陶酔感となって彼に感ぜられた。彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然に溶け込んでいくのを感じた。（『暗夜行路』）

松山市にある子規堂
▶河東碧梧桐短冊
▲子規写生帖
▲高浜虚子色紙

▲大浦天主堂
▶『沈黙』初版本の表紙

踏むがいい。私はおまえたちに踏まれるため、この世に生まれ、おまえたちの痛みを分かつため、十字架を背負ったのだ。（『沈黙』）

◀津和野にある森鷗外の生家

▲山口にある中原中也詩碑

原爆ドーム

〈あのときは、とてものどが渇いておった。水が飲みたくて飲みたくて、たまらなんだ。…〉そんなことを思い出したりして、毛筆で清書にとりかかった。（「黒い雨」）

5 近・現代文学地図④ 海外

アメリカ合衆国
- アラスカ物語（新田次郎）
- ジョン万次郎漂流記（井伏鱒二）
- アメリカ感情旅行（安岡章太郎）
- 南太平洋ひるね旅（北杜夫）

イギリス
- 倫敦塔（夏目漱石）

ドイツ
- 舞姫（森鷗外）
- 夜と霧の隅で（北杜夫）

フランス
- ふらんす物語（永井荷風）
- 旅愁（横光利一）
- 巴里に死す（芹沢光治良）
- 遥かなノートル・ダム（森有正）
- モンマルトル日記（辻邦生）

ギリシア
- アポロンの島（小川国夫）

イスラエル
- 死海のほとり（遠藤周作）

ソビエト連邦
- おろしや国酔夢譚（井上靖）

中国
- 敦煌・蒼き狼（井上靖）
- 山月記・李陵（中島敦）
- アカシヤの大連（清岡卓行）
- 麦と兵隊（火野葦平）

ビルマ
- ビルマの竪琴（竹山道雄）

フィリピン
- 俘虜記・野火（大岡昇平）
- 海底油田（小松左京）

▲漱石の下宿（ロンドン）

◀留学時代の鷗外

▲ブランデンブルク門

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とをもちて、たちまちこのヨーロッパの新大都の中央に立てり。（『舞姫』）

▲敦煌（千仏洞）

▲蔵経堂を見る井上靖

「…匿し穴は鳴沙山の千仏洞だ。その石窟の奥に格好な匿し穴を二つ三つ探してある。（『敦煌』）

パリ党とベルリン党とは、……目の色まで変わっているその様は、日本の知識階級を抽象したそっくりそのままの現れのように矢代には見えた。（『旅愁』）

『旅愁』初版本の表紙▼

文学の歴史
斜陽
太宰治
朝、食堂でスウプを一さじ、すつと吸つてお母さまが、
「あ。」
と幽かな叫び声をお挙げになつた。
「髪の毛？」
スウプに何か、イヤなものでも入つてゐたのかしら、と思つた。
「いいえ。」

■上代文学史年表(大和・奈良時代)

時代概説

○「上代」という時代
「縄文式時代」→「弥生式時代」→「古墳時代」
「狩猟・漁労中心」→「水田農耕中心」
「集団」→「村落」→「小国家」→「大和朝廷の国家的統一」
「口唱文芸」→「文字文芸・記載文芸」
このような移り変わりを含む長い時代である。

○七・八世紀の文化と社会
大陸文化の流入、仏教伝来などにともなって、聖徳太子の時代を中心に「飛鳥文化」が栄える。大化改新を経て「氏族制社会」にかわって「律令制社会」が完成される。文化的には「白鳳文化」から奈良時代の「天平文化」へと移る。

○奈良時代の文芸
八世紀前半は神話・伝説・説話とかかわりの深い『古事記』『日本書紀』『風土記』など、叙事的な作品が中心となる。八世紀後半は『万葉集』や、わが国最初の漢詩集『懐風藻』などの韻文が目立つ。叙事文芸から叙情文芸へ、集団の文芸から個人の文芸へという流れである。八世紀のこれらの作品は七世紀までの文学活動の整理・総決算となっている。

○上代の文学理念
感動の直接的な表現を基本とする「まこと」、『宣命』に見える「明き浄き直きまことの心」が生活の中心であり、そこから文芸意識がしだいに明確になって行く段階にある。

西暦	年号	おもな作品
七〇九	和銅2	柿本人麻呂歌集(歌集・柿本人麻呂) これ以前
七一二	和銅5	古事記(歴史書・太安万侶)
七一五	霊亀1	播磨風土記(地誌・作者未詳) これ以前
七一八	養老2	常陸風土記(地誌・作者未詳) これ以前
七三三	天平5	出雲風土記(地誌・作者未詳)
〃	〃	類聚歌林(歌集・山上憶良) これ以前
七五一	天平勝宝3	懐風藻(漢詩文・作者未詳)
七五二	天平勝宝4	仏足石歌(歌謡・作者未詳)
七五九	天平宝字3	万葉集(歌集・大伴家持ら) これ以後
七八九	延暦8	高橋氏文(史書・作者未詳)

▲播磨国風土記(三条西家本)

▲法隆寺金堂

学術・教育書 *社会

*法隆寺建立(六〇七)
*遣唐使開始(六三〇)
*大化改新(六四五)
*壬申の乱(六七二)
*大宝律令(七〇一)
*平城京遷都(七一〇)
*『風土記』撰進の命(七一三)
日本書紀(史書・舎人親王・七二〇)

▲日本書紀(卜部兼方本)

*東大寺大仏開眼(七五二)
歌経標式(歌論・藤原浜成・七七二)
*最澄延暦寺を建立(七八八)

古事記

▲古事記（真福寺本）

西暦	事　項
六二八	（推古三六）推古天皇崩御。『古事記』の記事はここまでで終わる。
六七二	壬申の乱。
六八六	（朱鳥元）天武天皇崩御。
六九四	（持統 八）藤原宮遷都。
七〇一	（大宝元）大宝律令。
七〇八	（和銅元）和銅開珎を作る。
七一〇	（和銅 三）平城京遷都。
七一二	（和銅 五）太安万侶『古事記』を完成。
七一三	（和銅 六）『風土記』編纂の詔。
七一八	（養老 二）養老律令。
七二〇	（養老 四）『日本書紀』（舎人親王ら）を完成。
七五一	（天平勝宝 三）『懐風藻』なる。
七六〇	（天平宝字 四）このころ、『万葉集』なるか。
七八四	（延暦三）長岡京遷都。

〔書名〕　今日ではコジキと読むが本居宣長はフルコトブミと読み、成立当初の読みは不明である。古事は故事に通じ、「古人から伝えられた事を記したもの」という意味でつけられたと考えられる。

〔編者〕　太安万侶（？―七二三）。文武・元明・元正の三人の天皇に仕え、『日本書紀』の編纂にも関与した。

〔成立〕　和銅五年（七一二）元明天皇の勅命により、なる。序文によると、天武天皇は氏姓の尊卑に基づく社会秩序の確立を意図し、諸氏族に伝承されていた「帝紀」と「旧辞」の正伝を作ろうと企て、稗田阿礼に「帝皇の日嗣」（帝紀）と「先代の旧辞」（旧辞、本辞）とを誦習させたが、天皇は半ばにして崩御した。その遺志を継いで、元明天皇は編纂事業を継承し、太安万侶に命じて完成させた。

〔内容・構成〕　上・中・下の三巻からなる。序文では編纂の動機と過程が語られている。上巻は天地開闢以来の神の世の物語、中巻以下は人の世の物語である。中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までのことを記してある。中巻は、多分に神話的要素を含んでいる。下巻ではもはや神と人との交流はなく、現実性を帯びたものになっている。

上巻はもろもろの神話・歌謡にすべて有機的なつながりを持たせ、立体的な神話体系をなしている。これに対し、中巻以下は天皇一代ごとにまとめられた系譜や物語を皇位継承順に並べるという平板な構成をとっている。古拙な文体ではあるが古代人の朗らかな生が躍動しており、政治的意図を超えて人間の怒り、歓び、悲しむ姿を描き出すことに成功している。

〔文体〕　口承性を取り入れた変体の漢文体。和歌は後世「万葉仮名」と名づけられた一字一音式の仮名を用いて表記されている。文脈を途中で切らない「語り」の口調の工夫が見られ、繰り返しによって、文章に韻律美を持たせ、漢文的な対句法を用いている。

〔史的評価〕　わが国現存最古の典籍。神話伝説を豊富に擁し、奈良朝までの古代人の文化と生活を広く吸収してできた古典である。史書、神典など、時代や立場によって、さまざまにとらえられてきたが、「古人の真心」の息づくこの書は、偉大な国民古典として命脈を保っていくことだろう。

〔『古事記』冒頭・例文〕

天地初発之時、於二高天原一成神名、天之御中主神〔訓高下天云阿麻下效此〕。次高御産巣日神。次神産巣日神。此三柱神者、並独神成坐而隠レ身也。次国稚如二浮脂一而、久羅下那州多陀用幣琉之時〔琉字以上十字以音〕、如二葦牙一因二萌騰之物一而成神名、宇麻志阿斯訶備比古遅神〔此神名以音〕。次天之常立神〔訓常云登許訓立云多知〕。此二柱神亦、独神成坐而、隠レ身也。

天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は、天之御中主神〔高の下の天を訓みてアマと云ふ。下此に效へ〕。次に高御産巣日神。次に神産巣日神。此の三柱の神は、並独神と成坐して身を隠したまひき。次に国稚く浮脂の如くにして、久羅下那州多陀用幣琉時〔琉の字以上十字は音を以ゐよ〕、葦芽の如、萌騰る物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遅神〔此の神の名は音を以ゐよ〕。次に天之常立神〔常を訓みてトコと云ひ、立を訓みてタチと云ふ〕。此の二柱の神も独神と成坐して身を隠したまひき。（本居宣長『古事記伝』による。〔　〕内は細字二行の注である）

（注）○高天原＝天上に想定された世界。○独神＝男女一対の夫婦でなく単独の神。○久羅下那州＝海月のように。

▲古事記伝
（本居宣長自筆本）

記紀歌謡　『古事記』や『日本書紀』には多くの歌謡が収めてある。本来は民謡だったものが特定の登場人物の詠んだ歌として、記・紀の筋の中に取り入れられたものが多い。筋を離れて鑑賞できる素朴な歌である。すべて一字一音の表記になっている。

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻碁微爾　夜幣賀岐都久流　曽能夜幣賀岐袁　（八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を）

これはスサノオの命の歌とされている。

万葉集

▶万葉集(元暦校本)

西暦	事項
四五六	(雄略元)雄略天皇即位。『万葉集』巻一巻頭の長歌の作者。
	〈万葉第一期〉
六二九	(舒明元)舒明天皇即位。
六四五	(大化元)大化改新。
六五五	(斉明元)斉明天皇即位。
六五八	(斉明 四)有間皇子の謀反。
六六八	(天智 七)天智天皇即位。
六七二	壬申の乱。翌年、天武天皇即位。
	〈万葉第二期〉
六八六	(朱鳥元)大津皇子刑死。
六九四	(持統 八)藤原京遷都。
六九六	(持統一〇)高市皇子薨。

〔書名〕「万葉集」の意味については、(1)多くの歌の集、(2)多くの時代の集、(3)紙数の多い集の三つの説がある。「葉」には「世」「代」の意味があり、万世にわたって長く語り続けよという祝福をこめて命名されたとする(2)の説が妥当であろう。

〔編者〕各巻の編纂の方針が著しく異なっているところから(構成・内容の項参照)、複数の各巻撰者の存在を想定することができる。その作業を最終的にまとめた人が普通いう意味での編纂者で、平安時代に有力だった橘諸兄説、契沖が唱えた大伴家持説などがある。大伴家持が何らかの形で編纂にかかわったのは、ほとんど動かすことのできない事実だと今日では考えられている。

〔成立〕成立年代はさだかでない。宝亀二年(七七一)以後とする説、宝亀八、九年とする説などがある。

〔内容・構成〕四五〇〇余の歌を収め、二〇巻からなる。天皇から庶民まで、作者の階層は拡がり、時代の幅も、真偽は別として一六代仁徳天皇から四七代淳仁天皇の代までの数百年、地域も陸奥国から筑紫国までというスケールを持ち、国家的な規模で編纂が行われたことが推定される。

分類は、相聞・挽歌・雑歌の三つの部立を基本とする。**相聞**は、相手の事を心にかけ問いあうもので、恋歌が大半である。**挽歌**は、本来は死者の棺をひく時に歌ったもので、死者を悼む歌。**雑歌**とはこの二つに属さない行幸・宴会などの歌。しかし、これは一定しておらず、表現態度(正述心緒・寄物陳思・譬喩歌)や内容(羈旅歌・有由縁歌)や歌体(長歌・旋頭歌など)によって分類されたものもあり、巻々で異なる。

歌体は、**短歌**(五・七・五・七・七)が全体の九割以上を占め、ほぼ四二〇〇首。次が**長歌**(五・七・五・七……五・七・七)で約二五〇首。**旋頭歌**(五・七・七・五・七・七)が六〇首、**仏足石歌**(五・七・五・七・七・七)が一首、後世の連歌と同一のもの——一人が上の句(五・七・五)を作り、もう一人がそれに応じて下の句(七・七)を作る——が一首ある。

『万葉集』は「古歌集」「柿本朝臣人麻呂歌集」「類聚歌林」「笠朝臣金村歌集」「高橋虫麻呂歌集」「田辺福麻呂歌集」などの先行歌集を参考にして成立した古代の歌の集大成で、精選されたものではないが、観念的な心象の世界に沈潜せず、生活に密着したものが感じられる。背景となる激動の時代と相まって、さまざまな人間ドラマを織りなしている。反逆者の名のもとに殺された皇子を思う姉の慟哭、防人の夫を案じる妻の直情、冷徹な権力者の意外な横顔、東国の民謡に見られるのどかさが歌われ、感情を率直に歌いあげる伸びやかな「ますらをぶり」を基調として、古代人のエネルギーがうかがわれる。

〔表記〕いわゆる**万葉仮名**で記されている。日本民族には文字がなく、中国から伝わってきた漢字を用いて日本語を表した。「春過而夏来良之　白妙能　衣乾有　天之香来山」という具合である。その書き表し方はさまざまであるが、単なる表記ではなく、字の用い方に文学意識、美意識をうかがうことができる。

〔歌風の変遷〕万葉の時代は前後三世紀にわたる。主要歌人の活動時期、作品の背景となる社会的、政治的情勢を考慮して、四期に分ける。

第一期　壬申の乱平定(六七二)まで。大化の改新を中心とする激動期で、和歌は伝説から分離し、叙情詩として独立したが、歌謡から定型長歌に至るまでの過渡的なものも含んでいる。万葉の黎明期である。大化の改新をなしとげた皇室には創造的雰囲気がみなぎっており、宮廷歌人が中心となる。みずみずしい情感、素朴な中に明朗で爽やかな歌いぶりは、古代的美しさに満ちている。代表歌人には舒明・斉明・天智・天武の諸天皇や有間皇子・額田王がいる。

○冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　さかざりし　花もさけれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木葉を見ては　もみちをば　取りてぞしのふ　青きをば　置きてぞ嘆く　そこし恨めし　秋山吾は　(巻一・一六・額田王)

○磐白の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへり見む　(巻二・一四一・有間皇子)

第二期　壬申の乱平定から奈良遷都(七一〇)までの約四〇年間で、歌数・歌人も増した。大化の改新以後の古代国家の伸長は著しく、律令制は完成し、繁栄と安定を見た。天皇は絶対的権威を持つようになり、皇室賛歌や宮廷挽歌がふえ、宮廷職業歌人が出現した。この時期に、長歌・短歌の形式が完成し、特に長歌の発展はめざましい。第三期と並んで万葉の隆盛期である。代表歌人は、宮廷職業歌人の柿本人麻呂で、枕詞・序詞・対句・繰り返しなどの技法を駆使した絢爛たる長歌は、重

七〇八　(和銅元)このころ、人麻呂、挽歌を作る。人麻呂、石見国で没。

七一〇　(和銅三)奈良遷都。

〈万葉第三期〉

七一六　(霊亀二)山上憶良、伯耆守となる。

七一八　(養老二)大伴旅人、中納言となる。

七二八　(神亀五)このころ、大伴旅人、太宰帥となり九州へ下る。

七三一　(天平三)大伴旅人没。

七三三　(天平五)山上憶良このころ没。

〈万葉第四期〉

七四六　(天平一八)大伴家持、越中守となる。

七三七　(天平九)山部赤人このころ没。

七五七　(天平宝字元)橘奈良麻呂の変。

七五九　(天平宝字三)家持、因幡の国庁で新年の詠歌。『万葉集』中、最も新しい歌。『万葉集』このころ、一応の形をなすか。〔万葉時代の終わり〕

七六四　(天平宝字八)藤原仲麻呂の謀反。

七七〇　(宝亀元)家持、参議となる。

七八三　(延暦二)家持、中納言となる。

七八五　(延暦四)八月二八日家持没。

厚な響きを持ち、『万葉集』中最も秀れたものである。彼は真に古代的なものの完成者であった。このほかに叙景歌人の祖、高市黒人や持統天皇・大津皇子・大伯皇女などがいる。

○玉だすき　畝火の山の　橿原の　日知の御代ゆ　生れまし　神のことごと　つがの木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに　おもほしめせか　天ざかる　夷にはあれど　石走る　淡海の国の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の　繁く生ひたる　かすみたち　春日の霧れる　ももしきの　大宮処　見れば悲しも　（巻一・二九・柿本人麻呂）

第三期　奈良遷都から天平五年（七三三）までの二〇年余。国家の体制は整備したが、壮麗な都の陰には政治的陰謀がうずまき、律令制の持つ矛盾が深刻になり、社会不安が生じ始めた。こうした情勢の中で個に目ざめた人々が批判的、内省的な眼を見開く。代わりに歌は古代的な伸びやかさを失い、洗練され個性的なものとなった。代表歌人は、山部赤人・山上憶良・大伴旅人・高橋虫麻呂らである。山部赤人は叙景歌にすぐれ清澄な歌いぶりを特徴とする。山上憶良・大伴旅人は共に人事詠を得意とする。高橋虫麻呂は伝説歌を得意とし、浪漫的に歌いあげている。

○恋しけば形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり（巻八・一四七一・山部赤人）

○いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ　（巻一・六三・山上憶良）

○世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（巻五・七九三・大伴旅人）

○葦屋の菟原処女の奥津城を往き来と見れば哭のみし泣かゆ（巻九・一八一〇・高橋虫麻呂）

第四期　天平六年から天平宝字三年（七五九）の約二五年間で、天平文化の爛熟期である。東大寺造営・大仏開眼という咲く花の匂うが如き華やかさの裏では、不安と動揺があり、律令制の行き詰まりが深刻になってきた。こうして、歌も線の太さと張りを失っていった。万葉の爛熟期・黄昏である。遊戯的な傾向が強くなり、技巧に流され、よき時代を回顧する感傷的なものも見られた。長歌は衰微し、短歌が盛んに作られた。代表歌人は大伴家持であり、その繊細優美な作風は『古今和歌集』のものに近い。ほかには田辺福麻呂・笠女郎・中臣宅守・狭野茅上娘子らがすぐれている。

○たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとぞ思ふ　（巻六・一〇四三・大伴家持）

○振仰けて若月見れば一目見し人の眉引おもほゆるかも　（巻六・九九四・大伴家持）

○新しき年の始の初春の今日ふる雪のいや重け吉事　（巻二〇・四五一六・大伴家持）

○あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし　（巻一五・三七二三・狭野茅上娘子）

○あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらにねのみし泣かゆ　（巻一五・三七三二・中臣宅守）

東歌と防人歌　『万葉集』中に特異な位置を占めるのが東歌・防人歌である。東歌の地方は中央から遠く離れ閉ざされた世界で、長く根強く存在した。作者は無名の庶民で、その歌も長く人々に歌いつがれてきた民謡的な色彩が濃い。生活に密着した素朴な情感が東国の方言で歌われている。だが、東国は決してのどかな田園ではなかった。強大な中央集権の下で、さまざまな苦役を負わされがちな不遇の地であった。苛酷な労働、重い税、それにもまして苦しいのは防人という兵役であった。三年交替で辺境を守備するのだが、その間、田は荒れ、帰らぬ人となる防人も多かった。防人歌とは防人とその周囲の人々の歌である。

○吾が恋はまさかも悲し草まくら多胡の入野のおくもかなしも　（巻一四・三四〇三・東歌）

○吾が面の忘れむ時は国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲はせ　（巻一四・三五一五・東歌）

○葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ　（巻一四・三五七〇・防人歌）

○大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて　（巻二〇・四三二八・防人歌）

〔史的評価〕　文学意識を持った初の記載文学として、文学史上に高い位置を占める。創作文芸中、最も早く完成した和歌というジャンルの揺籃期から爛熟期までをその裡にたどることができる。また、集団の文芸から個の文芸へと移りかわっていく過程も含んでいる。『万葉集』の命脈は長く保たれ、後の勅撰集にも多大な影響を与えたが、確かな評価を受けるのは近世になって国学者たちの研究を待たねばならなかった。

▲甘樫の丘からの風景（前方は耳成山）

■中古文学史年表（平安時代）

時代概説

〇「中古」という時代
平安遷都（七九四）から鎌倉幕府創始（一一九二）まで約四〇〇年間。「律令制社会」から藤原氏を中心とする「貴族社会」へ移り、摂関政治は道長の時代に頂点に達する。院政期を経て武士階級の進出が目立ち始め、中世となる。

〇漢詩文の時代から仮名文学の時代へ
平安朝初期は漢詩文勅撰集の時代。九世紀後半から和歌が復興し、十世紀初頭の『古今集（こきんしゅう）』は、この流れを決定的にした。仮名による散文は『土佐日記（とさにっき）』以下の日記文学、『伊勢物語（いせものがたり）』などの歌物語、『竹取物語（たけとりものがたり）』などの伝奇物語を生んだ。

〇宮廷女流文学の開花
一条天皇の時代は中古文学（王朝文学）の頂点で、皇后定子（ていし）の後宮では『枕草子（まくらのそうし）』が、中宮彰子（しょうし）の後宮では『源氏物語（げんじものがたり）』があらわれる。後宮や大斎院選子（だいさいいんせんし）を中心とする斎院などの文芸サロンでは、数多くの才女たちが男性貴族・知識人と対等にその才能を発揮するようになった。

▲貝合わせに用いられた貝（内側に源氏絵が描かれている）—貝合わせは平安時代の宮廷で起こった遊戯

西暦	年号	おもな作品	学術・教育書 ＊社会
七九七	延暦16	三教指帰（さんごうしいき）（思想書・空海（くうかい））	続日本紀（史書・菅野真道ら・七九七） ＊平安京遷都（七九四） 古語拾遺（史書・斎部広成（いんべのひろなり）・八〇七）
八一四	弘仁5	凌雲集（りょううんしゅう）（漢詩文集・小野岑守（みねもり）ら）	
八一八	〃9	文華秀麗集（ぶんかしゅうれいしゅう）（漢詩文集・藤原冬嗣（ふゆつぐ）ら）	＊空海高野山金剛峯寺建立（八一六）
八二三	〃14	日本霊異記（にほんりょういき）（説話集・景戒（きょうかい））このころ	文鏡秘府論（評論文学・空海・八二〇ごろ）
八二七	天長4	経国集（けいこくしゅう）（漢詩文集・良岑安世（よしみねのやすよ）ら）	日本後紀（史書・藤原緒嗣ら・八四〇）
八三五	承和2	性霊集（しょうりょうしゅう）（漢詩文集・空海（くうかい））これ以前	続日本後紀（史書・藤原良房ら・八六九）
			＊基経関白となる（八八〇）
八八七	仁和3	在民部卿家歌合（ざいみんぶきょうけうたあわせ）このころ	＊阿衡事件（八八八）
八九三	寛平5	寛平御時后宮歌合（かんぴょうのおんときさいのみやうたあわせ）これ以前	＊遣唐使廃止（八九四）
		竹取物語（たけとりものがたり）（物語・作者未詳）このころ	
九〇五	延喜5	古今和歌集（こきんわかしゅう）（歌集・紀貫之（きのつらゆき）ら）	日本三代実録（史書・藤原時平ら・九〇一）
		伊勢物語（いせものがたり）（物語・作者未詳）このころ	古今和歌集序（歌論・紀貫之・九〇五ごろ）
九三五	承平5	土佐日記（とさにっき）（日記・紀貫之）	＊承平の乱（九三五）、天慶の乱（九三九）
九四〇	天慶3	将門記（しょうもんき）（軍記物語・作者未詳）	倭名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）（辞書・源順・九三一〜九三七の間）
九五一	天暦5	後撰和歌集（歌集・源順（したごう）ら）	和歌体十種（歌論書・壬生忠岑・九四五）
		大和物語（やまとものがたり）（物語・作者未詳）このころ	
九六七	康保4	平中物語（物語・作者未詳）このころ	＊安和の変（九六九）
九七四	天延2	蜻蛉日記（かげろうにっき）（日記・藤原道綱母（みちつなのはは））このころ	
九八二	天元5	宇津保物語（うつほものがたり）（物語・作者未詳）このころ	
九八四	永観2	三宝絵詞（さんぼうえことば）（説話集・源為憲（ためのり））	往生要集（おうじょうようしゅう）（仏教書・源信・九八五）
		落窪物語（おちくぼものがたり）（物語・作者未詳）このころ	
九九六	長徳2	枕草子（まくらのそうし）（随筆・清少納言（せいしょうなごん））このころ	
一〇〇七	寛弘4	和泉式部日記（いずみしきぶにっき）（日記・和泉式部か）このころ	
		源氏物語（げんじものがたり）（物語・紫式部）寛弘年間ごろ	
一〇〇九	〃6	拾遺和歌集（歌集・花山院か）これ以前	
一〇一〇	〃7	紫式部日記（むらさきしきぶにっき）（日記・紫式部）このころ	

▲阿弥陀如来像

○貴族的文芸と庶民的文芸

中古後期、院政時代になると、『源氏物語』の後を追う物語も数多く作られたが、新しく**歴史物語**とよばれる『**栄花物語**』や『**大鏡**』があらわれる。また初期以来作られていた**説話文学**の分野では、『**今昔物語集**』のような集大成もあらわれた。これらは貴族社会全盛期を懐古する一面を持つ一方、今まで注目されなかった庶民的なものを取り上げ、それにふさわしい新しい文体を作り出して行く。

○中古の文学理念

上代の素朴に対して、貴族社会では優美繊細な情趣、中庸をえた調和を尊重する。「**もののあはれ**」はそういう王朝貴族の生活の中から生み出され、日本文学の伝統的な基調を作った。「あはれ」を中心に、「をかし」「長高(たけたかし)」の三者で、この時代の文学の諸傾向をあらわすこともできる。「あはれ」は悲しみ苦しみに共感できる情、「をかし」は明るい知性、「長高」は男性的な雄々しさとでもいえよう。

○中古文学と宗教

仏教は社会のあらゆる面に浸透し、特に**浄土思想**の普及によって、厭離穢土(けがれた現世をいとい離れ)、欣求浄土(死後は極楽浄土に生まれることを求める)ということばは当時の人の共通して持つ世界観、人生観となった。「宿世」という運命観とともに、この時代の文学は、仏教を抜きにしては考えられない。

西暦	年号	作品
一〇一三	長和2	**和漢朗詠集**（歌集・藤原公任）このころ
一〇三〇	長元3	栄花物語〔正編〕（歴史物語・作者未詳）このころ
一〇五三	天喜1	浜松中納言物語（物語・菅原孝標女か）このころ
一〇六〇	康平3	**更級日記**（日記・菅原孝標女）このころ
一〇六四	〃7	本朝文粋（漢詩文集・藤原明衡）このころ
一〇七三	延久5	成尋阿闍梨母集（日記・成尋阿闍梨母）このころ
一〇七六	承保3	狭衣物語（物語・禖子内親王家宣旨か）このころ
一〇八六	応徳3	後拾遺和歌集（歌集・藤原通俊）
一一〇七	嘉承2	江談抄（説話集・大江匡房）このころ
一一〇九	天仁2	讃岐典侍日記（日記・藤原長子）このころ
一一一九	元永2	**大鏡**（歴史物語・作者未詳）このころか
一一二〇	保安1	**今昔物語集**（説話集・作者未詳）このころ
一一二五	天治2	金葉和歌集（歌集・源俊頼）このころ
一一三四	長承3	打聞集（説話集・作者未詳）これ以前
一一五一	仁平1	詞花和歌集（歌集・藤原顕輔）
一一六九	嘉応1	**梁塵秘抄**（歌謡・後白河法皇）このころ
一一七〇	〃2	今鏡（歴史物語・寂超か）
一一七八	治承2	長秋詠藻（歌集・藤原俊成）
	〃	宝物集（説話集・平康頼か）これ以後
		平安末期成立の文学
		堤中納言物語（物語・作者未詳）
		夜半の寝覚（物語・菅原孝標女か）
		古本説話集（説話集・作者未詳）
		とりかへばや物語（物語・作者未詳）
一一八七	文治3	千載和歌集（歌集・藤原俊成）
一一九〇	建久1	**山家集**（歌集・西行）これ以前

＊前九年の役（一〇五一）
新撰髄脳（歌論書・藤原公任・一〇四一以前か）
和歌九品（歌論書・藤原公任・一〇四一以前）
＊平等院鳳凰堂建立（一〇五三）
＊後三年の役（一〇八三）
＊白河上皇院政開始（一〇八六）
俊頼髄脳（歌論書・源俊頼・一一一五）
＊藤原清衡中尊寺建立（一一二六）
奥儀抄（歌論書・藤原清輔・一一四四ごろ）
＊保元の乱（一一五六）
＊平治の乱（一一五九）
＊平清盛太政大臣（一一六七）
＊鹿谷の変（一一七七）
＊平氏滅亡（一一八五）

▲鹿谷の変（平家物語絵巻）

竹取物語

▶竹取物語（武藤本）

西暦	事項
七〇一	（大宝元）大伴御行没。『竹取物語』に同名の人物あり。
七一七	（養老元）石上麻呂没。七八歳。『竹取物語』に類似名の人物あり。
七八五	（延暦四）大伴家持没。『万葉集』巻十六に竹取の翁の歌あり。
八九〇	（寛平二）僧正遍昭没。七五歳。作者か。
八九五	（寛平七）源融没。七四歳。作者か。
九八三	（永観元）源順没。七三歳。作者か。宇津保物語の作者ともいう。
一〇〇八	（寛弘五）『源氏物語』に『竹取物語』の記事あり。
一〇七七	（承暦元）このころ『今昔物語』の原型成り、竹取説話の異伝を伝える。
一二二三	（貞応二）『海道記』はこの年の紀行で、鶯の卵からかぐや姫の生まれた話がある。

〔書名〕竹取物語。平安中期には「竹取の翁」「かぐや姫の物語」、中世・近世では「竹取の翁の物語」、現在では普通「竹取物語」とよばれる。

〔作者〕不明。(1)源順、(2)源融、(3)僧正遍昭などの説があるが、確証はない。仮名の文章力に長じ、漢籍の教養も深かった知識人だと推定される。

〔成立〕原型となる素朴な「竹取翁伝」のようなものがあり、これに文学的な飛躍を遂げさせたものが今の形の『竹取物語』と考えられる。成立時期は、仮名が普及したのちの作と考えられ、延喜以後天暦以前（九〇一～九五六）ごろが妥当であろう。

〔内容・構成〕(1)かぐや姫の生いたち、(2)五人の貴族と帝の求婚、(3)かぐや姫の昇天という三つの部分からなる。いずれも古代の説話(1)竹取翁譚、(2)妻争い説話、(3)羽衣伝説、を下敷きにしながら、たくみに話の展開を盛り上げている。

昔、竹取の翁というものがいた。ある日、竹の中に三寸ばかりの小さな女の子を見つけ育てると、三月ばかりで美しい女性に成人した。体から光を放つので、なよ竹のかぐや姫と名づけられた。多くの求婚者が現れたが中でも熱心な五人の求婚者がいた。しかし、いずれも姫の難題解決に失敗して、結婚ができなかった。最後に帝から入内の勧めがあったが、姫は固く辞退した。三年めの春ごろから姫は月を見て物思いにしずむようになった。月から迎えが来るのである。これを防ごうとする数多くの兵士たちの努力も空しく、姫は天の衣を着て昇天していく。

(1)のかぐや姫の生いたちと(3)の昇天の部分が幻想的ロマンの色彩を帯びているのに対し中間の求婚の話は、写実的で笑いの要素が濃い世態小説になっている。空想的な世界に現実が織り込まれ、欺瞞に満ちた上級貴族の生活を期せずして諷していると言えよう。

また一方、輝くばかりの美しさを持ち、地上の人間と結婚することなく、多くの人々の嘆きを残して昇天するかぐや姫の姿には、昔人の永遠の憧憬が託されている。

〔文体〕漢文訓読風な口調をとどめた和文である。淡々と事実を述べ、主観の表出を押さえた乾いた叙述法で、簡古素朴、ときには古拙に感じられる表現である。

〔史的評価〕『源氏物語』に「物語の出できはじめの祖なる竹取の翁」と記され、物語文学の元祖とされている。成立以来、多くの人々に愛読されて今日に至る。和文による初めての伝奇的な作り物語として、後続の諸作品に及ぼした影響は大きい。

〔『竹取物語』冒頭・例文〕

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の女に預けて養はす。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。（日本古典文学大系本による）

〔訳〕昔々、竹取の翁という者がいた。野山に分け入り竹を取っては、細工ものなどに使っていた。翁の名をさかき（讃岐の誤りかという）の造といった。翁の取る竹の中に根元が光るのが一本あった。変に思って近寄ってみると、竹の筒の中が光っている。それをよく見ると三寸ほどの人が、かわいらしい姿ですわっていた。翁がいうには「わしは、朝晩見回っている竹の中にいらっしゃることで判断した。（いつもの籠じゃなく）私の子におなりになるはずの人じゃろう」といって、大事に手の中へ包みこんで家へ持ち帰って来た。妻のおばあさんに預けて育てさせる。かわいらしいこと、この上ない。たいそう小さいので籠の中に入れて育てる。

▲『竹取物語』板本さし絵

民話と難題　『竹取物語』の五人の貴公子に与えられた難題は、「仏の御石の鉢」「蓬莱の玉の枝」「火鼠の皮衣」「龍の首の玉」「燕の子安貝」。『今昔物語』の同じ話では「空に鳴る雷」「打たぬに鳴る鼓」などの難問になっている。『日本霊異記』にはスガルという男が雷を捕らえた話がある。彼なら、かぐや姫と結婚できたかもしれない。「打たぬに鳴る鼓」は少し頭を使うと作れないものでもない。民話のほうでは結婚の条件に知恵をしぼる難題婿という一類がある。

伊勢物語

▲在原業平

■在原業平年譜

西暦	事項
八二五	（天長 二）業平誕生か。父、阿保親王。母、伊登内親王。
八二六	（天長 三）在原の姓を賜わる。
八四一	（承和 八）右近衛将監。
八四二	（承和 九）父死去。二条后高子誕生。
八四四	（承和一一）惟喬親王誕生。
八四七	（承和一四）蔵人。
八四九	（嘉祥 二）従五位下。
八六一	（貞観 三）母死去。
八六二	（貞観 四）従五位上。
八六三	（貞観 五）二月、左兵衛権佐。三月、次侍従。
八六五	（貞観 七）右馬頭。
八七二	（貞観一四）七月、惟喬親王出家。
八七七	（元慶元）従四位上。
八七九	（元慶 三）蔵人頭。
八八〇	（元慶 四）美濃権守。五月、死去。五六歳。

〔書名〕伊勢物語。「在五の物語」「在五中将日記」ともよばれた。在五とは在原業平のことである。これらの名称は平安朝末期に「伊勢物語」に統一されたと考えられる。「伊勢物語」とよばれたのは、業平原作に女流歌人の伊勢が手を加えたためだとか、物語中の伊勢斎宮の記事によるとか、諸説あるが、さだかではない。

〔作者〕不明。⑴業平の自記、⑵業平の自記に次男の滋春が書きついだもの、⑶業平の作に伊勢が補筆したもの、⑷紀貫之の作、⑸在原一門の作などの説があるが、現在のところは何とも言えない。

〔成立〕成立時期は、古今集以前―延喜（九〇〇）以前とする説と、古今集以後―延喜以後とする説に大別される。業平の家集『業平集』を参考として作られた原伊勢物語とでもいうべきものがあって、その生成増補の結果種々の異本が成立したと考えられる。

〔内容・構成〕伝本によって異なるが、約一二五段から成り、約二一〇首の歌を含む。配列法も伝本によって大きく差があるが、現存の『伊勢物語』は、初冠から始まって、辞世を詠むところで終わっているので、在原業平の歌を中心とし「昔、男ありけり」とぼかして語られる主人公の一代記風の構成といえる。二条后との恋物語、伊勢斎宮との恋物語、東下りの物語、惟喬親王との物語などが重要な枠を作り、これに関連する小話が付け加えられた形になっている。

内容的には、男女間の愛情の話が多い。幼なじみの少年少女の初々しい恋、別れた夫を思い遂に死に至る女の恋、つくも髪の老女の老いらくの恋、斎宮との禁断の恋などが描かれている。主人公に配される女性も、后、斎宮のような高貴の女性から下層の召し使いまで、純情な少女から、恋の手管を知りつくした女まで多種多様である。

この色好みの主人公は、理想の男性として造型されており、彼の奔放な生命力とその「みやび」の精神は、和歌と散文との交錯が生みだす叙情と相まって、平安貴族社会の人人に愛されてきた。

〔文体〕語彙は少なく、極度に単純化された文章を特徴とする。各段の始めは「昔、男ありけり」で始まるのが多く、「けり」の効果的な繰り返しで話を進めて行く。

〔史的評価〕歌物語という特殊なジャンルを開いた最初の作品。後続の『大和物語』や『平中物語』に与えた影響は大きく、『源氏物語』の構想にも影響を与え、引き歌にも使われている。中世の謡曲も『伊勢物語』から素材を取って成立したものが多い。

〔『伊勢物語』初段・例文〕

昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。思ほえず、ふる里に、いとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶ摺の狩衣をなむ着たりける。

　春日野の若紫の摺り衣しのぶのみだれ限り知られず

となむ、おひつきていひやりける。ついでおもしろき事ともや思ひけむ。

　みちのくのしのぶ文字摺たれ故に乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。（定家本による）

（訳）昔、男が元服して、奈良の都の春日の里に、所領のゆかりで鷹狩に行った。その里に、とても魅力のある姉妹が住んでいた。それをこの男がちらりと見てしまった。思いがけず、この旧都には不似合いなほどの美女を見てしまったので、男は気が動揺してしまった。男が、着ていた狩衣の裾を切り取って、これに歌を書いて送る。その男は、しのぶ摺りの狩衣を着ていたのであった。

　春日野の若々しい紫草のように美しいあなた方にお逢いして、この紫の信夫摺の模様さながら、私の心は限りなく乱れています。

とすぐ歌をよんでやった。事の成り行きに興味を抱いたのであろう。

　陸奥の信夫文字摺りのように心が乱れだしたのは、ほかならぬあなた故です。

という古歌の趣による歌です。昔の人は、こんなに情熱的な風雅なふるまいをしたのであった。

▲伊勢物語（三条西家本）

古今集

▲古今集（関戸本）

西暦	事項
七五九	（天平宝字 三）『万葉集』の年代明らかな最後の歌。
八一四	（弘仁 五）『凌雲集』。以後、漢詩文勅撰集の時代となる。
八四九	（嘉祥 二）興福寺大法師ら天皇の四十の賀に長歌を詠進。
八五一	（仁寿元）文屋康秀、僧正遍昭らの詠歌。《六歌仙時代》
八八七	（仁和 三）「民部卿行平歌合」このころ。以後、歌合が多い。
八九四	（寛平 六）遣唐使停止。
九〇五	（延喜 五）『古今集』真名序の記載年次。
九一三	（延喜一三）「亭子院歌合」。この時の歌『古今集』に入る。
九三〇	（延長 八）醍醐上皇薨去。四六歳。

〔書名〕古今和歌集。略して古今集、古今ともいう。仮名序の最後にある、「古を仰ぎて今を恋ひざらめやも。」（「歌の初めて興った古を仰いで、この集の編まれた今の世を必ず恋うだろう。」）という意味をこめたと考えられる。

〔編者〕紀貫之、紀友則、壬生忠岑、凡河内躬恒の四人である。

〔成立〕延喜五年（九〇五）、醍醐天皇の勅命により成立。この後も若干の増補・改変が行われた。

〔内容・構成〕約一一〇〇首、二〇巻からなる。仮名・真名両序を備え、春（上下）、夏、秋（上下）、冬、賀、離別、羇旅、物名、恋（一―五）、哀傷、雑（上下）、雑体、大歌所御歌に分かれている。整然とした組織や巧みな歌の配列に、編者の行き届いた配慮を感じることができる。

歌体は短歌中心で、ほかに長歌五首と旋頭歌四首は雑体に収められている。作者数は一二〇余人、このほかに全歌数の四割を占める「読み人知らず」の歌があるのも、この歌集の特徴である。『万葉集』の素朴で雄大な「ますらをぶり」に対し、『古今集』はやさしく可憐な「たをやめぶり」の姿態美を持つ。技巧としては、掛詞・縁語が発達し、見立ての手法も盛んに用いられた。万葉時代に用いられた枕詞と序詞も、この時代にふさわしく改めて使用された。五七調から七五調への移り変わりも見ることができる。

〔歌風の変遷〕約一四〇年続いた古今集時代を三期に区分する。

読人しらずの時代　嘉祥二年（八四九）ごろまで。すなおに心情を述べた万葉風をとどめている歌が多い。↓例歌『百人一首』7安倍仲麻呂、11小野篁（P210参照）

六歌仙時代　嘉祥三年（八五〇）から寛平二年（八九〇）まで。仮名序で歴史的意義を認められ、作風を批評された僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主のいわゆる六歌仙が代表歌人である。前期の素朴な感情表現が優艶華麗な技巧的なものになっている。九世紀後半の若々しい文学的気分を反映した明るい浪漫的作風が特徴である。↓例歌『百人一首』8喜撰法師、9小野小町、12僧正遍昭、17在原業平、22文屋康秀（P210参照）

撰者時代　寛平三年（八九一）ごろ以後。歌合や贈答歌の行われた宮廷の生活を反映して、題材も局限された見立て本位の観念的作風である。比喩・縁語・掛詞などを用いて、洗練された優美で繊細な世界を形成する一方、言語遊戯に陥りやすい傾向がある。代表歌人は紀貫之ら撰者の他に、伊勢・素性法師などがいる。↓例歌『百人一首』35紀貫之、33紀友則、29凡河内躬恒、21素性法師、30壬生忠岑、36清原深養父、31坂上是則（P210参照）

〔史的評価〕漢詩文全盛から国風尊重へ変わる時代の流れを決定づけた最初の勅撰和歌集として、後世までもっとも尊重された。韻文・散文を問わず後の文学に与えた影響は大きく、古歌の規範とされた。また仮名で書かれた書物が公的な性格を与えられたことは、平安文学一般にとっても重要な意味を持つ。紀貫之の仮名序は本格的な文学論ともいえるもので、六歌仙批評に見られるように、個人批評を初めて行った点でも興味深い。

〔『古今集』序文冒頭・例文〕

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり。花に鳴く鶯、水にすむかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり。（定家本による）

〔訳〕和歌は、人の心を種にたとえるなら、それから生まれて人の口に出る葉であるといえる。この世に暮らす人々は用事の多いものなので、自分の思った事をその見聞したことに託して表現する、それが歌である。花に鳴く鶯、清流にすむ河鹿の声を聞くとすぐわかる。生きているものは、どれ一つとして歌をよまぬものはないのだ。力を入れずに天地の神々の心を動かし、目に見えぬ霊魂をも感動させ、男女の仲を親密にさせ、いかつい武人の心さえもなごやかにするのが歌なのだ。

▲紀貫之（上）と紀友則（下）

土佐日記

■紀貫之年譜

西暦	事項
八六八	(貞観一〇)このころ出生。
八九三	(寛平五)菅原道真編『新撰万葉集』に入集。
九〇五	(延喜五)四月『古今和歌集』撰者。
九〇七	(延喜七)九月、宇多法皇の大堰川御幸に供奉、歌、序を作る。
九一〇～九二九	(延喜一〇)少内記などを歴任。その(延長七)の間、九一三年、『亭子院歌合』に列し、また、多くの屏風歌を作る。
九三〇	(延長八)土佐守に任ぜられる。
九三五	(承平五)任を終え二月帰洛。後、『土佐日記』を書く。土佐在任中、醍醐天皇の勅命による『新撰和歌集』をまとめた。
九三八	(天慶元)周防国に赴く。
九四三	(天慶六)一月、従五位上。
九四五	(天慶八)三月、木工権頭。同年没。

〔書名〕 土佐日記。古くは「土左日記」と書かれ、日記著作後三・四〇年のころには広く「とさの日記」と呼ばれたらしい。書名は「土佐の国から京に帰るまでの出来事や感想などを日を追って記した路次の記」という意味であろう。

〔作者〕 紀貫之(八六八?―九四五)。平安時代前期の歌人で三十六歌仙の一人。従兄弟にあたる紀友則ほか凡河内躬恒、壬生忠岑らとともに『古今和歌集』編纂に従事し、一〇〇首を超える自詠と、史上初の歌論として名高い仮名序によって、当代歌壇第一人者としての実力を示した。『土佐日記』は作者が晩年に土佐守となって任地に赴き、四年後任地を出発してから、都へ帰着するまでの体験を綴ったものである。

〔成立〕 貫之の帰京は承平五年(九三五)二月一六日であるから、それ以後の成立。全編日記形式で書かれているが、(1)冒頭・末尾の照応、(2)読者を予想した表現、(3)「九日のつとめて…」といった書き出し、(4)日々の記事が有機的・構成的に書かれ、緊密な脈絡がある、(5)漢詩文に学んだ手のこんだ表現、などから判断すると、船中での覚書を後日推敲し、あらたな構想を加えて成ったものとみられる。貫之在世中から相当流布していたことから、承平五年かその翌年の成立であろう。

〔内容・構成〕 承平四年(九三四)一二月二一日、国司の館を出発、五五日を費やして帰京するまで一日の記事をも省かない日次の記の体裁をそなえ、それを女性の筆に仮託したものである。その内容は、五七首の和歌と歌論を含み、途次における送迎や別離、同船の人々の言動、自然の景観、風波や海賊に対する恐怖、帰京を待ち望む心情など多岐にわたっている。しかし中心になっているのは、土佐守在任中に急死した女児に対する切々たる愛惜の情であろう。和歌と文、相まっての悲嘆の表現は心境小説的で、日記を真の文芸作品たらしめている。また、随所に世相に対する作者の批判がみられ、誠実さに対しては深い感動と愛着、軽薄、打算に対しては非難と攻撃、そうした対人態度も看過しがたい。

〔文体〕 漢文で示しえなかった心の機微を仮名文字で表現することに成功している。漢文訓読語の硬さは隠せないが、簡潔な文体に漢文の長所も生かされている。文中、機知・諧謔・俳味が流れており、文章を特色あるものにしている。

〔史的評価〕 冒頭文に示されるように、女性の筆作という擬装の手段をとったことはこの日記に虚構性を加えることとなった。その結果、従来の男性の日記が漢文体で書かれ公的、備忘録的であったのに対して、これは私的、文芸的、創作的なものへと移行して、自照的要素や近代性を導き入れることになった。その波動は『蜻蛉日記』などにも影響し、王朝女流文学を完成させることになる。

〔『土佐日記』冒頭・例文〕

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。それの年の、十二月の二十日あまり一日の日の戌の刻に門出す。そのよし、いささかに、ものに書きつく。 (日本古典文学大系本による)

〔訳〕男も書くと聞いている日記というものを、女の私もやってみようと思って、書くのである。某年(実は承平四年)十二月二十一日の、午後八時ごろに出発する。その旅の様子を、少しばかり紙にかきつける。

▶土佐日記(青谿書屋本)

蜻蛉日記

▲藤原道綱母

■藤原道綱母年譜

西暦	事項
九三六	（承平 六）誕生か。
九五四	（天暦 八）兼家と結婚。父倫寧、陸奥守。
九五五	（天暦 九）道綱誕生。
九六四	（康保元）秋、母死去。
九六七	（康保 四）兼家、蔵人頭、次いで左中将。
九六八	（安和元）初瀬詣で。
九六九	（安和 二）重病となる。
九七〇	（天禄元）六月、唐崎祓。七月、石山寺参籠。八月、道綱元服。
九七一	（天禄 二）六月、鳴滝参籠。七月、父と初瀬詣で。
九七二	（天禄 三）兼家の娘を養女に迎える。
九七三	（天延元）広幡中川に隠棲。
九七四	（天延 二）兼家の異母弟遠度、養女に求婚。『蜻蛉日記』の記事本年で終わる。
九九五	（長徳元）道綱母没。

〔書名〕上巻終わりに「なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心地する、かげろふの日記といふべし。」とあり、作者自身の命名である。なお『大鏡』にも「かげろふのにき」の名称が見え、早くからこの名で世に知られていた。

〔作者〕藤原道綱母（九三六ごろ―九九五）。藤原倫寧の娘。一九歳と思われる年の秋、時の権勢家右大臣師輔を父に持つ兼家と結婚、これが女性としての受難を経験する端緒となる。平安中期の有数の歌人。本名は未詳。

〔成立〕全巻同時成立か各巻順次成立かには疑問がある。その内容から、安和二年（九六九）、天禄二年（九七一）といった時期が成立に何らかの関わりを持つと思われるが、確証はない。おそらく平素から兼家との贈答歌を中心に紀行文、日々の感想を断片的に書き集めていたと推察される。執筆動機は、序にいう「人にもあらぬ身の上」を語ることにあった。

〔内容・構成〕上・中・下三巻。上巻一五年、中巻三年、下巻三年の計二一年間にわたる生活記録である。

上巻　藤原兼家と結婚した天暦八年から安和元年までで、結婚して男を待つ受身の立場となった作者の苦悩が主に描かれ、その他、父の陸奥赴任、道綱誕生、町の小路の女への嫉妬、母の死などが挿話的に綴られる。

中巻　安和二年から天禄二年までで、左大臣高明の失脚などを折りまぜて、作者の病気、賭弓での道綱の勝利、唐崎の祓い、石山詣でと続き、全編のクライマックスといえる鳴滝参籠の記事がくる。ここでは作者の苦悩は深くなり、その心理描写に多く筆が費やされるが、鳴滝籠りのあたりからようやく、自己の人生を内省する澄んだ境地が開けてくる。

下巻　天禄三年から天延二年までの三年間で、中巻終わりの調和的な心境が受け継がれ、兼家をあたかも遠景の人のように客観的に眺める視線が目立つ。諦観を含んだ心象が身辺雑記的に記されると同時に、源兼忠女が生んだ兼家の娘を養女に迎えたことなどが物語的な人生図として描かれている。

〔文体〕昔から読みにくいとされる理由は文体そのものにある。この日記の方法は日常語による内的な独白であり、物事を論理的に規定するというのでなく、情念の動きのままに心の裡に浮かびあがるものを写し取り表現しようとする。そしてこういう方法によってこそ、苦悩する女心の照りかげりをありのままの情感に密着して造型し得たのであった。

〔史的評価〕平安時代の日記文学の代表的作品。序文にあるように、この作品は「そらごと」の物語ではなく、一人の女性の実人生をありのままに描くことを目的としたものであり、自己の内面を照らし出し客観化して描く自照文学の最初の作品として後の女流日記文学に大きな影響を与えた。また、当時の事件本位の作り事であった物語から個人の心理を描く散文文学への糸口ともなった作品である。

〔『蜻蛉日記』冒頭・例文〕かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすままに、世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かるそらごとだにあり……（日本古典文学全集本による）

〔訳〕このようにはかなく過ごした半生も過ぎて、世に頼りない有様で、生き方のけじめをつける事もなく暮らしている女があった。容貌にしても人並みとはいかず、思慮分別もないに等しく、こんな役立たずでいるのも当然だと心にいいきかせて、平凡な毎日を過ごすつれづれにまかせて、世間にあれこれたくさんある古物語の端々をのぞいて見ると、世間に多い作りごとまで、まことしやかに書かれている……。

▲蜻蛉日記（桂宮本）

本朝三美人　道綱の母は、『尊卑分脈』の系図の注記に「本朝三美人の内なり」と記されている。他の二人は、光明皇后、衣通姫、染殿の后（文徳天皇后）など、諸説があるが、どの説にも道綱の母は選に入っている。日記の序文で彼女が「かたちとても人にも似ず」と述べているのは謙遜のことばである。ただ、昔の美人は吉祥天女みたいにフックラしていた。日記の中で、あれだけ夫の不実をなげいていては、フックラした容貌にはなりにくいというなげきもあったかもしれない。

枕草子

西暦	事項
九六六	(康保三)清少納言誕生か。
九八一	(天元四)清女、橘則光と結婚か。
九九〇	(正暦元)正月、内大臣道隆の娘定子入内。
九九三	(正暦四)初冬、清女、宮仕え〔一八四〕。
九九四	(正暦五)二月、道隆、積善寺供養〔二七八〕。
九九五	(長徳元)四月、入道前関白道隆没、四三歳〔一六一〕。
九九六	(長徳二)一月、伊周、隆家の従者、花山法皇を射る。四月、伊周、隆家左遷〔一四三〕。六月、二条宮焼亡、中宮、高階明順の邸へ移る。
九九七	(長徳三)四月、伊周、隆家の罪が許される。
九九八	(長徳四)一二月、雪山を作る〔八七〕。
九九九	(長保元)一一月、左大臣道長の娘彰子、入内。
一〇〇〇	(長保二)二月、定子は皇后に、彰子は中宮になる。一二月、定子、第二皇女媄子出産、薨去。
一〇〇一	(長保三)清女、この年、宮仕えを辞去か。

〔書名〕 枕草子。「清少納言記」ともいう。「そうし」は「冊子」の音便。書名の由来は、跋文の次の話によるものとされている。

内大臣藤原伊周が皇后定子に紙を献上した時、定子が「これに何を書こうか」と相談されたのに、清少納言が「枕にこそは侍らめ〈枕デショウネ〉」と答えてこの紙をいただいた。これに書いたので「枕草子」という。

清少納言の答えにいう「枕」の意味も諸説がある。①跋文には、「一条天皇は史記〈中国ノ史書〉をお書きになる」とあるので、『史記』と「枕」との対照から、「史記」→「シキ」→「鞍褥」〈馬鞍ノ下ニ敷ク布〉から連想して「馬鞍」→「枕」と答えた、複雑な洒落。②もう少し単純に「敷妙の枕」という成語によるもの、③「白頭老監枕ノ書眠」(白氏文集・二五・「秘省後庁」と題する詩の句)など、中国の詩文による、④日本で当時、和歌用語解説書の類を「歌枕」と呼んだこととの関係、その他多くの説があるが、清少納言は、そういういろいろな解釈のできることばを利用して、書名をつけたのだろう。

〔作者〕 清少納言。父清原元輔は三十六歌仙の一人で『後撰和歌集』の編者の一人。はじめ橘則光と結婚して則長を生んだ。父の没後、一条天皇中宮定子のもとへ宮仕えに出て、一時は、則光との交際も復活したが、このほかに藤原実方、藤原行成、藤原斉信とも親しく、『枕草子』の中にもその応対が描かれている。中宮没後、宮仕えを退き、藤原棟世と結婚した(宮仕え前ともいう)。晩年は不遇な生活をしたらしい。『枕草子』のほかに家集『清少納言集』がある。

〔成立〕 長徳元年(九九五)ごろに初稿本ができていた。それ以後の事件を書き加えて、寛弘年間(一〇〇四ごろ)に再稿本がまとめられた。跋文によると、里にいた清少納言の所へ源経房がやって来て、清少納言が座布団をさし出したら、その上に『枕草子』が乗っていて、経房がこれを持ち去ってしまったと清少納言は書いている。これは長徳元、二年のころの事件であり、その時までに初稿本が成立していたと考えられる。

〔内容・構成〕 大きく四種類の形の異なる本が伝わっており、おのおの内容・構成が異なっている。『枕草子』の内容は大別して、次のように分類される。

1 類集的章段 ①「山は」「市は」「峯は」などの形で始まるもの。
②「すさまじきもの」「にくきもの」などの形で始まるもの。

2 日記的(回想的)章段 「上にさぶらふ御猫は(翁丸)」〔九〕の話のように特定の場所・日時で、清少納言が見聞きした事を記録したもの。〔 〕は日本古典文学大系本の段数

3 随想的章段

これらが前後の関係なく配列されているものを雑纂形態と呼び、類似の性格の章段がまとめてあるものを類纂形態と呼ぶ。この両形態の伝本は次のように分けられる。

三巻本・能因所持本——雑纂形態
堺本・前田家本——類纂形態

同じ雑纂形態でも、三巻本と能因所持本とでは、章段の数や配列がちがう。また三巻本でも学者によって章段の区切り方に相違がある。「日本古典文学大系」の数え方では、三一九段、プラス「一本」に見えるもの二九段の、合計三四八段。能因所持本は「日本古典文学全集」で三二三段となっている。

類纂形態の前田家本は「春はあけぼの」に始まる一冊、「めでたきもの」に始まる一冊、が類集的章段を集め、随想的章段、日記的章段の各々も別冊となっている。堺本は、日記的章段を欠き、それ以外のものを同類ごとに集めている。

現存する類纂形態の本は後の人が編集し直したもので、雑纂形態の本の方が原作に近い。

〔史的評価〕 中宮定子に仕えていた清少納言が、定子を中心にした日常を回想風に書いたのが日記的章段、そこに集まる女房たちの興味や感想を代弁して書いたのが類集的章段、随想的章段であろう。定子中宮の後宮の文化、その精神を巧みに書きとめたところに、第一の価値がある。また類集的章段に見られる、印象のままを連ねた文章の創出など清少納言の個性は、以後の文学に影響を与えるところが大きかった。『徒然草』のように随筆を書くという明確な意識はなかったであろうが、結果的には「随筆文学」というジャンルの開拓者となっている。

▲枕草子(柳原紀光筆)

源氏物語

■紫式部年譜

西暦	年	事項
九七〇	1	(天禄元)紫式部誕生。
九七三	3	(天禄三)弟惟規誕生。
九八六	17	(寛和二)父為時、式部大丞。
九九〇	21	(正暦元)藤原宣孝(後に紫式部の夫)御嶽参詣の逸話が『枕草子』に見える。八月、宣孝、筑前守。
九九六	27	(長徳二)父為時、越前守。晩秋、紫式部越前に行く。
九九八	29	(長徳四)春、紫式部、越前より帰京。晩秋ごろ、紫式部、宣孝と結婚。
九九九	30	(長保元)賢子、誕生。
一〇〇一	32	(長保三)春、為時帰京。四月、宣孝、死亡。秋ごろから、紫式部、『源氏物語』を執筆か。
一〇〇五	36	(寛弘二)一二月二九日、紫式部、彰子中宮へ出仕。
一〇〇七	38	(寛弘四)三月、興福寺の桜の取り入れ役を伊勢大輔に譲り、和歌を代作。
一〇〇八	39	(寛弘五)三月一四日、

〔書名〕 源氏物語。「源氏の物語」とも「光源氏の物語」ともいう。

〔作者〕 紫式部。父は藤原為時、母は藤原為信の娘。父為時は詩文の才のある学者だった。

〔成立〕 寛弘五年(一〇〇八)ごろには、宮中に流布していた。夫宣孝と死別した後、書き始めたものと考えられる。

『紫式部日記』寛弘五年一一月、敦成親王誕生五十日の祝宴の席で、藤原公任が、紫式部に向かって「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ(オリイッテオ尋ネシタイ、コノ辺ニ若紫ハイラッシャラヌカ)」と冗談を言ったという。公任が『源氏物語』の「若紫」の巻や、その作者が紫式部であることを知っていたからだと思われる。

〔内容・構成〕 五四巻。「若菜」の巻を上・下二巻に数えたり、「若菜」を一巻に数え、巻名だけの「雲隠」の巻を加えて、五四巻にするなど、いろいろな数え方がある。

主人公光源氏の誕生・恋愛・栄華から晩年に至る一生(正編、「桐壺」―「雲隠」)と、その没後の、子供たちの時代、薫・匂宮を中心とした「宇治十帖」(続編、「匂宮」「紅梅」「竹河」と、「橋姫」以下のいわゆる宇治十帖)とに分けられる。

正編、続編を、さらに三部に分けるのが、今日の普通の見方である。

第一部(桐壺―藤裏葉) 光源氏が高麗の相人の予言どおり、准太上天皇となり栄華を極める約四〇年。これに藤壺中宮、紫の上はじめ多くの女性との交渉が描かれる。

第二部(若菜―幻〔雲隠〕) 富や地位とはかかわりない人間の内面の苦しみを中心にして、光源氏の晩年が描かれる。

第三部(〔匂宮―竹河〕橋姫―夢浮橋) 京都の貴族の世界を中心とする第一部・第二部と違って、都を離れた宇治の僧庵を背景に、光源氏の子供たち、薫・匂宮と、宇治の八宮の姫君、大君・中の君・浮舟との恋が描かれる。

〔史的評価〕 四〇〇字の原稿用紙にして約二〇〇〇枚の長編という量、自然と人間の心理とを融合させて、平安時代の中庸・調和の理想である「もののあはれ」を十分に描き上げた質、いずれの点から見ても、日本の古典の最高峰をなす。以後の文学に与えた影響もきわめて大きい。ウエイリー、サイデンスティッカーなどによって翻訳され、全世界の読者から絶賛されている。

〔『源氏物語』須磨・例文〕

須磨の秋

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹きこゆるといひけむ浦波、よるよるはげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

注1このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり(『古今集』巻四・秋上)〈葉の落ちた木の間をもる月光を見ると、物思いの多い秋が来たなと感じる。〉

注2旅人の袂涼しくなりにけり関吹きこゆる須磨の浦風(『続古今集』巻一〇・羇旅)〈関をこして吹いて来る須磨の浦風に、旅人の袂がひるがえり、涼しさが感じられることだ。〉

須磨ではひとしほ、物を思はせる秋風が吹き初め、海はやゝ遠いのですけれども、行平の中納言の「関吹きこゆる」と詠んだ浦波が、なるほど夜はいつもたいそう近く聞えて、又となくあはれなものはかゝる土地の秋なのでした。

(谷崎潤一郎『新訳源氏物語』による)

▲源氏と頭中将の対面(須磨)
(源氏物語色紙絵)

紫式部と石山寺 平安朝の人は石山寺によく物詣でに行く。大斎院選子が、中宮彰子のところへ「何かおもしろい物語はなあい?」と尋ねられた時、相談にあずかった紫式部は、「新しいのをお作りになっては」と申し出て、彰子から新作物語作成の命令を受けると、石山寺へ参籠して物語の構想を練ったという伝説がある。石山寺には今も「源氏の間」という一室があって、ここで紫式部が『源氏物語』を書いたのだということになっている。紫式部は、ここで窓から琵琶湖の湖面に月影の映るのを眺めて、「今宵は十五夜なりけり」という須磨巻の一節から書き始めたというけれども、今、その室からは琵琶湖の水面は見えない。昔は水位が高くて見えたという説もあるが、いったい伝説はどこまでが本物で、どこまでがウソなのだろうか。

西暦	年齢	事項
		為時、正五位左少弁蔵人。このころ、『源氏物語』は宮中で好評、「日本紀の御局」とあだ名される。夏、中宮に楽府を進講。この冬、『源氏物語』の清書・製本作業が進む。この間、道長が局から草稿本を持ち去る。
一〇一〇	41	(寛弘 七)このころ、『紫式部日記』を編集。
一〇一一	42	(寛弘 八)二月一日、為時、越後守に転任。
一〇一三	44	(長和 二)このころ、小野宮実資の彰子訪問に、紫式部が取り次ぎ役をする。九月下旬、紫式部、宮廷を去り、年末、『紫式部集』を編集か。
一〇一四	45	(長和 三)正月、越後の父に歌を送る。正月二〇日ごろ、彰子の病に紫式部は清水寺参詣。二月ごろ、紫式部、死亡か。(旧説、一〇三一(長元 四)ごろ没。)六月、為時、辞任して帰京。紫式部の死によるものか。
一〇一六		(長和 五)四月二日、為時、出家、七〇歳。(今井源衛『紫式部』による)

■源氏物語人物系図 (黒線は血縁関係を示し、赤線は夫婦関係を示す)

帚木　雨の夜のつれづれに女の品定めをする源氏、頭中将、左馬頭、藤式部。（源氏物語色紙絵）

若紫　熱病にかかった源氏が北山の寺に祈禱に行ったとき、小柴垣の家を垣間見た様子で、紫の上が「いぬきという童が雀の子を逃した」と怒っている。（源氏物語色紙絵）

■源氏物語年表

巻名	源氏年齢	記事	関係人物（年齢）
《第一部》1 桐壺	一	○桐壺帝在位。○桐壺の更衣に若宮（光源氏）、誕生（第二皇子）。	
	三	（夏）桐壺の更衣、死去。（秋）靫負の命婦、故更衣の母を見舞う。	
	四	（春）弘徽殿の女御腹の一の宮（朱雀院）、立太子。	一の宮（朱雀院） 7
	六	○桐壺の更衣の母、死去。	
	七—一一	○高麗人の観相。○若宮、源氏となる。○先帝の四の宮（藤壺の女御）、入内。	
	一二	○源氏元服。左大臣の姫君（葵の上）と結婚。	葵の上 16
2 帚木 3 空蝉 4 夕顔	一七	（夏）源氏の宿直所で女性の品定め。翌晩、紀伊守の家に泊まり、空蝉とあう。 （夏）空蝉と誤って、軒端の荻とあう。 ○このころ六条の御息所に通う。（秋）夕顔の家に通う。○某院で夕顔急死。	六条の御息所 24 夕顔 19
5 若紫	一八	（春）北山で紫の上を見る。 （夏）藤壺懐妊。 （秋）紫の上の祖母帰京、死去。 （冬）紫の上を二条院に迎える。 6 末摘花　（春）末摘花に関心を持つ。（冬）末摘花にあう。 7 紅葉賀　（冬）十月、朱雀院で紅葉の賀。	紫の上 10 藤壺 23
	一九	（春）藤壺、皇子出産。（秋）藤壺、中宮となる。	皇子（冷泉院） 1
8 花宴	二〇	（春）南殿で桜花の宴。その夜、朧月夜（右大臣六の君）にあう。	
9 葵	二一	〔（桐壺帝譲位。朱雀帝即位。冷泉院立太子。）源氏、近衛大将。〕	
	二二	（春）六条の御息所の姫君、斎宮となる。（夏）葵の上と六条の御息所の車争い。 （秋）男子（夕霧）誕生、葵の上死去。（冬）源氏、紫の上と結婚。	斎宮（秋好中宮） 13 紫の上 14
10 賢木	二三	（秋）六条の御息所、斎宮と伊勢に下る。（冬）桐壺院崩御。	
	二四	（春）朧月夜は尚侍に、朝顔の姫君は斎院になる。（冬）藤壺中宮出家。	
	二五	（春）左大臣致仕。（夏）朧月夜の尚侍に通い、右大臣に発見される。 11 花散里　（夏）花散里を訪う。	
12 須磨	二六	（春）三月末、須磨へ下る。（秋）八月十五夜、京を思う。	
	二七	（春）三月上巳の祓の日、海岸で暴風雨にあう。 （春）明石の入道に迎えられて明石へ移る。（秋）明石の上にあう。	明石の上 18
13 明石	二八	（秋）源氏帰洛の宣旨下り、帰京、権大納言となる。 （冬）桐壺院追善の法華八講。 （冬）常陸宮邸、末摘花の生活窮乏。	

玉鬘　筑紫国より京に向かって船出した玉鬘(夕顔の娘)の一行。(源氏物語色紙絵)

篝火　源氏が玉鬘の所で、琴を教えたりしていたが、ある秋の夜、夕月が早く隠れたので暗い空に篝火をたかせて、琴を枕に臥した二人。(源氏物語色紙絵)

巻名	年齢	主な出来事	人物	
14澪標	二九	(春)東宮(冷泉院)元服。○朱雀帝譲位。	朱雀院	32
		○冷泉帝即位。○源氏内大臣。○明石の姫君誕生。	冷泉帝	11
		(秋)権中納言の姫君入内(弘徽殿の女御)。		
		○六条の御息所、死去。		
15蓬生		(夏)末摘花を訪う。		
16関屋		(秋)石山に詣でて空蝉一行に逢う。	六条の御息所	36
17絵合		(春)前斎宮入内(梅壺の女御)。○梅壺と弘徽殿と絵合。	梅壺の女御(秋好	
18松風	三一	(秋)明石の上、姫君と上京、大堰の山荘に住む。	中宮)	22
19薄雲		(夏)冷泉帝、出生の秘密を知る。(冬)明石の姫君を二条院の紫の上のもとに迎える。		
		(春)薄雲の女院(藤壺)薨去。(夏)桃園式部卿の宮死去。	薄雲の女院(藤壺)	37
20朝顔	三二	(秋)朝顔の斎院、桃園に移る。源氏、桃園を訪う。		
21乙女	三三	(夏)夕霧元服。雲居の雁と相親しむ。(秋)梅壺の女御立后(秋好中宮)。源氏太政大臣。	雲居の雁	14
	三四	(春)夕霧、進士に及第。(秋)夕霧、侍従となる。○源氏、六条院を造営。	夕霧	13
		(秋)八月、六条院落成。		
22玉鬘		(春)大夫の監、玉鬘に求婚。(夏)玉鬘、上京。		
	三五	(冬)明石の上、六条院へ移る。(秋)玉鬘、初瀬詣で。(冬)玉鬘、六条院に移る。	玉鬘	21
23初音		(春)六条院の新春。		
24胡蝶		三月末、六条院春の御殿で、船楽・管絃の遊び。(夏)玉鬘へ人々の懸想。		
25蛍		(夏)蛍兵部卿の宮、源氏が放った蛍の光で玉鬘を見る。○源氏の物語論。		
26常夏	三六	(夏)六条院釣殿で納涼。近江の君のうわさなどが話題となる。		
27篝火		(秋)源氏、玉鬘を訪い、篝火をたく。		
28野分		八月、野分の日、夕霧、六条院を見舞い、はじめて紫の上をかいま見る。		
29行幸		(冬)大原野行幸に、玉鬘はじめて実父内大臣を見る。		
		(春)玉鬘裳着。内大臣と対面する。		
30藤袴	三七	(秋)夕霧、宰相中将に昇進。○玉鬘、尚侍となる。		
31真木柱		(冬)玉鬘、髭黒大将と結婚。髭黒の北の方、娘(真木柱)、実家に帰る。	真木柱	12 13
	三八	(春)玉鬘、尚侍として参内。(冬)玉鬘、男子を出産。		
32梅枝		(春)薫物合。○明石の姫君裳着。○東宮元服。		
33藤裏葉	三九	(春)大宮の忌日、内大臣、夕霧に親しく語る。(夏)夕霧、雲居の雁と結婚。○明石の姫君入		

若菜(上)　女三宮の御殿での蹴鞠で、猫が走り出たすだれのはずれから、あこがれていた女三宮をはじめて見た柏木。（白描源氏物語色紙絵）

橋姫　八宮の姉妹が琴と琵琶とを合奏している姿を垣間見る薫。（源氏物語絵巻）

巻名	年齢	事項	人物	年齢
		内。(秋)源氏、準太上天皇となる。(冬)六条院に行幸。○年末、女三の宮の裳着。○朱雀院出家。○源氏、女三の宮の後見を受諾。	明石の姫君 女三の宮	11 13 14
《第二部》				
34 若菜上	四〇	(春)源氏、四十の賀。○女三の宮、六条院に迎えられる。(夏)明石の女御懐妊。		
	四一	(春)明石の女御、皇子出産。○六条院の蹴鞠の日、柏木、女三の宮を見る。		
		(春)六条院の賭弓の会。○蛍兵部卿の宮、真木柱と結婚。		
35 若菜下	四二～四五	〔四年経過〕この間の記事なし。		
	四六	○冷泉帝譲位、今上帝即位。○明石の女御腹の一の宮立太子。(冬)源氏住吉詣で。	今上帝	20
	四七	(春)紫の上病み二条院へ移る。○柏木、中納言となり女二の宮(落葉の宮)と結婚。		
		(夏)柏木、女三の宮とあう。○源氏、女三の宮と柏木の秘密を知る。		
		(冬)明石の女御、皇子(匂宮)を出産。○柏木、重病。	匂宮	1
36 柏木	四八	(春)女三の宮、男子(薫)を出産、受戒。○柏木死去。	柏木	32 33
37 横笛	四九	(春)柏木一周忌。(秋)夕霧、落葉の宮を訪う。	夕霧	28
38 鈴虫	五〇	(夏)女三の宮の持仏供養。(秋)源氏、女三の宮を訪い、鈴虫の宴を開く。		
39 夕霧		(秋)落葉の宮の母(一条御息所)急死。(冬)夕霧、落葉の宮と結婚。		
40 御法	五一	(春)紫の上、二条院で法華経供養。(秋)紫の上死去。	紫の上	43
41 幻	五二	源氏、紫の上を追慕して日を送る。(冬)出家の用意。		
(雲隠)	五三～六一	〔巻名のみで、本文はない。〕この間、源氏、出家、薨去。		
《第三部》	薫年齢一四	匂宮元服、兵部卿の宮とよばれる。		
44 竹河	一五	(夏)髭黒の大君、冷泉院に参る。		
	一六	(夏)中の君、尚侍として参内。		
42 匂宮	一九	薫、三位中将となる。		
45 橋姫	二〇	薫、宇治の八の宮を訪う。		
	二二	(秋)薫、八の宮の姫君(大君・中の君)をかいま見る。○薫、出生の秘密を知る。		
46 椎本	二三	(春)匂宮、宇治へ消息。(秋)八の宮死去。		
44 竹河		夕霧、左大臣、薫、中納言となる。		
46 椎本		(春)三条宮焼失。(秋)薫、大君に	大君	26
梅		(春)紅梅大納言(右大臣)の大君、東宮に参る。		

宿木　琵琶をかなでる匂宮と耳を傾ける中君。（源氏物語絵巻）

東屋　物語絵を手にしている浮舟と洗髪をすかせる中君の後ろ姿。（源氏物語絵巻）

47総角	二四	意中を訴える。○八の宮の一周忌。○匂宮、中の君にあう。○大君死去。	中君	24
43紅		○真木柱、姫君への匂宮の求婚にためらう。		
48早蕨	二五	（春）匂宮、中の君を二条院に迎える。		
49宿木		（夏）藤壺の女御（女二の宮の母）死去。（秋）匂宮と夕霧の六の君、結婚。○中の君、薫に異母妹（浮舟）のことを語る。（春）薫、権大納言兼右大将。○中の君、男子出産。○薫、女二の宮と結婚。（夏）薫、浮舟をかいま見る。	女二の宮 夕霧 浮舟	14 51 21
50東屋	二六	（秋）浮舟、二条院へ移る。○匂宮、浮舟に近づく。○薫、浮舟を宇治に移す。		
51浮舟	二七	（春）匂宮、宇治に行き、薫を装って浮舟にあう。○薫、匂宮、ともに浮舟を京に迎えようとする。		
52蜻蛉		（春）浮舟失踪、葬送。（夏）薫、宇治を訪う。		
53手習		（春）小野の尼君一行、宇治院で浮舟を発見。（秋）浮舟、受戒。（春）小野の妹尼、浮舟に素姓を問うが答えない。		
54夢浮橋	二八	（夏）薫、僧都の話から浮舟生存のことを知る。○薫、浮舟の弟（小君）を小野につかわすが、浮舟は面会を拒否し、小君はむなしく帰京。		

■物語享受の諸相（評論）

○「もののあはれをしる」といふこと、まづ、すべて「あはれ」といふは、もと、見るもの、聞くもの、触るることに、心の感じて出づる、嘆息の声にて、今の俗言にも、「ああ」と言ひ、「はれ」と言ふ、これなり。たとへば、月花を見て感じて、「ああ、みごとな花ぢや」、「はれよい月かな」などいふ。「あはれ」といふは、この「ああ」と「はれ」との重なりたるものにて、漢文に「嗚呼」などある文字を、「ああ」と読むもこれなり。

（訳）「もののあはれをしる」とはどういうことかというと、まず、一般に「あはれ」というのは、本来、見るもの、聞くもの、触れることに、心が感じて出る嘆息の声であって、現在の俗語でも、「ああ」と言い、「はれ」と言うのが、これである。たとえば、月や花を見て感動して、「ああ、みごとな花じゃ」「はれ、よい月かな」など言う。「あはれ」というのは、この「ああ」と「はれ」との重なりあったものであって、漢文において「嗚呼」などとある文字を「ああ」と読むのもこれである。

○また、後の世には、「あはれ」といふに、「哀」の字を書きて、ただ悲哀の意とのみ思ふめれど、「あはれ」は、悲哀には限らず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべて、「ああはれ」と思はるるは、みなあはれなり。されば、「あはれにをかしく」とも、「あはれにうれしく」とも、つらねて言へり。そは、をかしきにも、うれしきにも、「ああはれ」と感じたるを、「あはれに」とは言へるなり。

（訳）また、時代が下ると、「あはれ」という語に、「哀」の字を書いて、もっぱら悲哀の意とだけ思っているようであるが、「あはれ」は悲哀にはかぎらず、うれしいことにも、おもしろいことにも、たのしいことにも、興趣のあることにも、すべて、「ああはれ」と思われることはみな「あはれ」なのである。だから、「あはれにをかしく」とも、「あはれにうれしく」とも、並べて言っているのである。それは、興趣のあることにも、うれしいことにも、「ああはれ」と感じたことを、「あはれに」とは言ったのである。（本居宣長『源氏物語玉の小櫛』より）

和泉式部日記

〔書名〕 和泉式部日記。「和泉式部物語」という書名もある。

〔作者〕 和泉式部自作。この通説に対して第三者の著作という説、さらに、藤原俊成の老後の筆作という説もある。

〔成立〕 和泉式部の自作とすれば、寛弘五年（一〇〇八）の成立。日記中の彼女の恋愛の相手、帥宮敦道親王が、寛弘四年（一〇〇七）十月になくなったので、その喪に服していたころ、故宮を追憶して書いたものであろうというのが、通説である。

〔内容・構成〕 長保五年（一〇〇三）四月、宮の使いの童が和泉式部の所へ使いに来てから、宮との仲は急速に親しくなる。この時、彼女は帥宮の兄為尊親王という愛人と死別して喪に服していた時であった。宮は最後には彼女を自邸に引きとり、帥宮の北の方は、翌年正月、邸を出て小一条の祖母のもとに去ってしまう。この間、一〇か月の事件である。

記事の中に作者の錯誤と見られる部分があり、また、和泉式部の家集と日記の歌との間には密接な関係があって、日記の資料と日記の成立過程・構成については複雑な問題が多い。

〔史的評価〕 和泉式部の「日記」と見るか第三者が和泉式部を素材として書いた「物語」と見るかによって、その評価は分かれる。いずれにしても、和泉式部自身を作品中で「女」と第三人称で記し、普通、彼女の名前から連想される奔放多感な女性とは違った、つれづれと物思いに沈みながら自分の行動を反省する主人公を描き、贈答歌と地の文との微妙な行文の中に、二人の緊迫した心理を描きえたのは、平安朝の仮名作品の中でも高く評価される。

黒髪の乱れもしらずうち臥せば
まづ掻きやりし人ぞ恋しき（和泉式部）

■和泉式部年譜

西暦	事　項
九七八	（天元元）和泉式部誕生か。父は大江雅致、母は平保衡の娘。
九九六	（長徳二）このころ、橘道貞と結婚、小式部を生む。
九九九	（長保元）二月、道貞、和泉守となる。
一〇〇二	（長保四）六月、愛人の為尊親王没。二六歳。
一〇〇三	（長保五）四月一〇余日、帥宮敦道親王と贈答。一二月一八日、帥宮に迎えられて宮邸に入る。
一〇〇四	（寛弘元）一月、帥宮北の方、宮邸を退去。「日記」終わる。
一〇〇五	（寛弘二）宮の子（石蔵の宮）を生むか。
一〇〇七	（寛弘四）一〇月、帥宮没。二七歳。一三〇余首の挽歌を詠む。
一〇〇九	（寛弘六）中宮彰子に出仕。このころ藤原保昌と再婚。
一〇二五	（万寿二）小式部内侍没。和泉式部なお生存。

紫式部日記

⇩一二四ページ参照

〔書名〕 紫式部日記。「紫日記」と題する写本もある。

〔作者〕 紫式部。伝記は『源氏物語』の項参照。

〔成立〕 記事の内容から見て、寛弘七年（一〇一〇）夏ごろと考えられるが、はじめから今見られるような形に整理されていたか否かには問題もある。

〔内容・構成〕 寛弘五年（一〇〇八）秋から七年正月までの記事を含むが、寛弘五年の記事が最も多い。

寛弘五年――七月、土御門邸（道長の邸）の秋の風情から筆を起こし、九月一一日、中宮彰子の敦成親王（後一条天皇）御産前後の儀式を骨組みにして、人人の様子、宮仕えの感想を述べて年末に至る。

寛弘六年――正月の若宮の戴餅の儀の記事のあとは、女房の批評、自分の心境などに筆がそれている。この部分は手紙の文体で書かれているので、消息文が混入したものかともいわれている。

寛弘七年――元日、二日の儀式、一五日の敦良親王（後朱雀天皇）の五十日の祝いの記録で終わる。

年代不明の断片――寛弘五年の記事の終わりに、年次不明の記事があり、これは寛弘五年の記事の前、五・六月ごろの部分に相当すると考えられている。

日記残欠説――紫式部の家集に含まれる「日記歌」と呼ばれるものに照らして、現存の日記は冒頭の部分が欠けているのではないかという説がある。しかし、現存の日記は冒頭としてふさわしい形を備えているために、残欠説、非残欠説、消息文混入など、成立の問題とからんで諸説がある。

〔史的評価〕 漢文の記録類からは知りえぬ皇子誕生前後の人々の具体的な動きを生き生きと描いていること。また、『源氏物語』の作者の、孤独な思いと、自己凝視や批判精神が綿密に記されており、平安時代の知識階級の女性の精神の内面を今日に伝えてくれる。

▶紫式部

紫式部の人物寸評

○和泉式部――和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。（中略）はづかしげの歌よみやとはおぼえはべらず。〈和泉式部という人は実に趣深く手紙をやりとりしたものです。しかし、和泉には感心できない面がある。……こちらがきまり悪く思うほどのすばらしい歌人とは思われません。〉

○清少納言――清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。〈清少納言は実に得意顔をしてえらそうにしていた人です。あれほど利口ぶって漢字を書き散らしている程度も、よく見ると不十分な点がたくさんある。〉（『紫式部日記』による）

更級日記

▶更級日記（定家自筆本）

■菅原孝標女年譜

西暦	事項
一〇〇八	（寛弘五）孝標女誕生。
一〇二〇	（寛仁四）父、上総介の任を終え一家帰京。
一〇二一	（治安元）おばから『源氏物語』をもらう。
一〇二四	（万寿元）姉死去。
一〇三二	（長元五）父、常陸介。
一〇三六	（長元九）父帰京。
一〇三九	（長暦三）祐子内親王のもとに出仕。
一〇四〇	（長久元）橘俊通と結婚。
一〇四五	（寛徳二）このころ下野守俊通帰京。長男仲俊誕生。石山寺参詣。
一〇四六	（永承元）初瀬詣で。以後、毎年のように鞍馬、石山寺、太秦寺などへ物詣で。
一〇五五	（天喜三）弥陀来迎の夢を見る。
一〇五八	（康平元）信濃守俊通帰京。十月、死去。

〔書名〕定家自筆本に「更級日記」とある。書名の由来は、日記中の歌「月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ」による。この歌は『古今集』・『大和物語』の有名な「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」をふまえたものである。

〔作者〕菅原孝標女（一〇〇八―一〇五九以後）。父は上総・常陸の受領であったが、その家系は菅原道真に始まる学者の血統。母は藤原倫寧の娘で、『蜻蛉日記』の作者道綱母は、伯母にあたる。『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』などの作者であると伝えられている。

〔成立〕夫の橘俊通の死後、二・三年を経た康平三年（一〇六〇）ごろの成立。素材としてあらかじめ書き留められた歌稿（歌反故）を用いて執筆されたものとみられている。

〔内容・構成〕作者が一三歳の年から四〇年におよぶ自分の人生を回想的に年を追って綴ったもの。序にあたる部分に始まり、父が上総介の任を終えて上京する時の旅の記録、物語に魅せられた少女時代、祐子内親王（後朱雀天皇皇女）のもとへの宮仕えを経て、三三歳で結婚してからは一子仲俊の将来に期待をかける現実的な女性になる。が、夫との死別の後は、淋しさの中でひたすら仏の夢を信じた晩年が描かれている。物語を耽読した少女時代には、「后の位も何にかはせむ」と『源氏物語』の世界にひきこまれ、夕顔・浮舟など薄幸の女性にあこがれている。また、日記中に数多くの夢を記しているのも特色である。

〔文体〕詞書を拡大させただけの家集的な部分と、歌を含まず散文で自分の生涯の重点事項を語る部分とが日記の中に混在している。その両者の対照によって、作者のあこがれと悲しみの交錯した一生が効果的に述べられている。

〔史的評価〕序にあたる一節で作者は「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と実際育った上総の国にかえて虚構の舞台を設定し、自分を三人称で書いている。現実の自己とその生涯を対象化し、少女時代から晩年に至るひとつの「女の一生」を描こうとする意識は、私小説的な性格を備えた『蜻蛉日記』の系列をひく。定家に見いだされて『新古今集』以後の勅撰集に歌がとられ、また堀辰雄はこの作品を愛読して『姨捨』を書いた。夢と、あこがれとが破れ、最後は宗教にかすかな望みを抱く、平凡な人生の記録であるが、この作品には歌人・作家の詩心を揺さぶる不思議な魅力がある。

〔『更級日記』冒頭・例文〕

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々、語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、我が思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。（定家本による）

（注）あづま路の道の果て＝「あづま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」（『古今六帖』による。）

〔訳〕古歌にいわれる常陸より、もっと辺地に育った人（私）は、どんなにか鄙びてもいたろうに、どういうきっかけでか「世の中には物語というものがあるとか、それを何とかして読みたいわ」という思いにとりつかれた。他に気散じのすべもない昼間や宵の団欒の時、姉や継母などの大人たちが、あの物語、この物語、光源氏のすばらしさなどを断片的に話すのを聞くにつけて、物語へのあこがれはつのるばかりだったが、大人たちも、私の満足がゆくほどまでには物語の一部始終を、そらんじて話してくれるはずもない。

▲菅原孝標女の石山寺参詣（石山寺縁起）

本のとじ違い　現存最古の『更級日記』の写本は藤原定家の自筆本である。いつのころかこの本を修理した時、ページをとじ違えてしまった。とじ違えた本を写すから意味のわからぬ所や文章の続かない所ができてしまう。大正時代まで、読者はみなこれに悩まされた。定家自筆本が発見され、とじ違いが元に改められて、容易にこの作品が読めるようになったのは最近五十年足らずの事である。

大鏡

▶大鏡(東松本)

西暦	事項
八二六	(天長三)藤原冬嗣薨。『大鏡』大臣列伝の冒頭。
八五〇	(嘉祥三)文徳天皇即位。『大鏡』の天皇本紀の冒頭。
八七六	(貞観一八)『大鏡』の語り手、大宅世継の誕生。ただし万寿二年一九〇歳と矛盾。
一〇二五	(万寿二)雲林院菩提講に、世継・繁樹ら参会。
一〇三四	(長元七)後三条天皇誕生。『大鏡』の後日物語(流布本に見える追加部分)で、若侍が世継に再会。
一一一九	(元永二)『大鏡』の記録者が若侍に会う。後日物語による。
一一三三	(長承二)源雅定没。後日物語の作者か。

〔書名〕「大鏡」という名称は後人の命名か。『今鏡』の別称「小鏡」が「大鏡」に対する謙辞ととれることから、『今鏡』が成立したとされる一二世紀後半以前には「大鏡」という名が一般化していたと考えられる。語り手として登場する大宅世継にちなんだ「世継が物語」(『愚管抄』)、「世継の翁の物語」(『徒然草』)の名称も用いられていた。

〔作者〕未詳。作者の条件として、源氏関係の貴族階級男子、道長の事を詳しく伝聞でき、宗教にも相当の関心がある人物といったことが考えられ、藤原能信、源道方・経信父子、源俊明、源雅定、源顕房などが作者の候補とされている。

〔成立〕『大鏡』の記事の終わりは万寿二年(一〇二五)であり、『栄花物語』『今昔物語集』などを参考にしたらしい点を考え合わせ、一二世紀初めまでの成立であろう。

〔内容・構成〕『大鏡』は文徳天皇の嘉祥三年(八五〇)から後一条天皇の万寿二年(一〇二五)に至る一七六年間の歴史を、司馬遷の『史記』にならった紀伝体で叙述した歴史物語である。構成は、序・本紀・列伝・藤原氏の物語・昔物語の五部仕立てである。序で、この物語の語り手一九〇歳の大宅世継と聞き手一八〇歳の夏山繁樹とその妻、それに探求心、批判精神に富む三〇歳ぐらいの若侍という登場人物と、雲林院の菩提講で彼らが話すのを側にいる作者が筆録しているという舞台設定とが示される。本紀では一四代にわたる天皇について簡単なプロフィールが語られ、次に道長をクライマックスにおく摂関家藤原氏代々の主要大臣列伝、さらに鎌足から頼通までの藤原氏繁栄の物語と続き、最後に風流譚・信仰譚といった昔物語が語られている。『大鏡』の特色は、序で作品の目的―道長の栄華がどうして生まれたかを解き明かす―が世継の口を借りて示されていること、その方法として戯曲的対話形式がとられていることがあげられる。この対話形式という方法は、一面的な道長賛美に終始した『栄花物語』を『大鏡』が越える大きな要因になっている。すなわちそれぞれの視点が、世継の常識的な話に対する繁樹の異見、さらに若侍の真相暴露といった立体的構造を可能にし、深く人間の歴史の真実に迫り得ており、歴史が単なる過去のものとしてではなく、道長など具体的な人間に具現された生きたものとして読者に訴えかけてくる。

〔文体〕四人の語り手および彼らの話の中の人物のことばが、その性格や場面に応じたものになっており、簡潔で躍動的、男性的な筆致とあいまって、この作品の戯曲的効果を高めている。

〔史的評価〕歴史書には『日本書紀』などの六国史もあるが、『大鏡』は、はじめて仮名で歴史を書くことに成功した作品である。特に『大鏡』は作者の、歴史と人間を見る眼の確かさ、批判精神をも交えた叙述態度・方法の独自さで最高傑作としての位置を占め、『今鏡』『水鏡』『増鏡』と続く鏡物の祖として後代の歴史物語に多大な影響を与えている。

〔『大鏡』冒頭・例文〕先つ頃、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嫗といきあひて、同じ所に居ぬめり。あはれに、同じやうなるもののさまかなと見はべりしに、これらうち笑ひ、見かはして言ふやう、「年頃、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえあはせむ、このただ今の入道殿下の御有様をも申しあはせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひまうしたるかな。……」

(日本古典文学全集本による)

〔訳〕先日、雲林院の菩提講に参詣しましたら、並みの老人よりは格段に年をとって、異様な感じの老翁二人、老女一人の三人が偶然出あって同じ場所に坐っていたとお思いください。何とまあ似たもの同士の老人たちだわいと見ておりますと、老人たちは笑顔で互いに見交わして言いますには、(世継)「年来、昔の知人にお目にかかって、どうかして今まで見聞した世の様をもお話ししあいたい、今栄華の絶頂の入道道長殿下のごようすをもお話ししあいたいと念じておりましたが、ほんにまあ、うれしくもお会いしたことです。……」

▲菅原道真の霊，雷神となりて清涼殿を襲う(北野天神縁起)

今昔物語集

▶今昔物語集(野村本)

■説話集一覧

西暦	事項
八二三	(弘仁一四ごろ)『日本霊異記』〔景戒〕
九八四	(永観二)『三宝絵詞』〔源為憲〕
一一〇七	(嘉承二ごろ)『江談抄』〔大江匡房の談話〕
一一二〇	(保安元ごろ)『今昔物語集』
一一三〇	(大治五ごろ)『古本説話集』
一一三四	(長承三以前)『打聞集』
一一七八	(治承以後)『宝物集』〔平康頼〕
一二一五	(健保三ごろ)『古事談』『発心集』〔鴨長明〕『宇治拾遺物語』
一二五二	(建長四)『十訓抄』〔六波羅二臈左衛門入道〕
一二五四	(建長六)『古今著聞集』〔橘成季〕
一二八三	(弘安六年)『沙石集』〔無住〕

〔書名〕 今昔物語集。略して「今昔物語」とも。各説話の書き出しが「今ハ昔」とあることに由来する。

〔作者(編者)〕 未詳。現在伝わらない『宇治大納言物語』を増補発展させたものと見れば、宇治大納言源隆国が原作者となる。しかし、近年は南都北嶺などの僧侶を作者と考えそれも無名の一僧侶による趣味的なものか、白河院の庇護を受けた複数の僧侶が編纂したものかなど、説が分かれ細かい点は不明である。いずれの場合も『宇治大納言物語』とは無縁ではなく、これが『今昔物語集』成立に寄与したことは確かであろう。

〔成立〕 一二世紀前半。平安末期、一一二〇年前後、院政時代ごろの成立と思われる。

〔内容・構成〕 全三一巻(うち巻八・一八・二一の三つの巻は欠落)。一千有余の説話の集大成。第一巻〜第五巻が天竺(印度)の仏教説話、第六巻〜第九巻が震旦(中国)の仏教説話、第一〇巻が震旦の世俗説話、第一一巻〜第二〇巻が本朝(日本)の仏教説話、第二二巻〜第三一巻が本朝の世俗説話になっている。仏教説話とは仏教伝来に関する話、因果応報の話など、宗教的、教訓的色彩が強い話であり、世俗説話とは仏教的色彩のない話である。前者は『今昔物語集』の三分の二を占め、その素材の多くは漢文文献を出典としているが、具象的で生き生きした人間臭さを持つものが多い。後者は、前者よりはるかに文学的な色あいが濃い。その登場人物は貴族・受領・僧侶・武士・農民・商人・医者・学者などあらゆる階層から、さらに動植物・妖怪変化に至る。新興勢力として武士が力を得ていく過渡期に成立した『今昔物語集』は、たくましい生命力で生きる人間の姿をリアルに描きだし、そこから生まれてくる不思議、醜悪、怪異、笑いなどを非情なまでのまなざしでとらえている。人間世界の諸事象の集大成として永遠の生命を持つ作品である。

〔文体〕 和漢混交文の先駆をなす簡潔な表現で、口語も豊富に用いられている。文体的には、『源氏物語』に代表される流暢な平安女流文学から、巧みな語り物文芸である『平家物語』への線上に位置するものである。各説話とも「今ハ昔」で始まり、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」で結ばれ、説話のパターンを確立している。

〔史的評価〕 素材に庶民層はじめあらゆる階層を対象としたこと、簡潔な文体、話のテンポの早さなどは、平安文学史上特異な存在である。説話文学の代表として『宇治拾遺物語』など中世の説話に多大な影響を与え、またそのきびきびした語り口は後の軍記物の表現様式へとつながっていく。近代に至って、芥川龍之介・菊池寛らが『今昔物語集』に取材した傑作を書き、にわかに文学作品として注目を集め文学性を見いだされるに至った。

〔『今昔物語集』・例文〕

藤原ノ保昌ノ朝臣、値ニ盗人袴垂ニ語

今ハ昔、世ニ袴垂ト云極キ盗人ノ大将軍有ケリ、心太ク力強ク、足早、手聞キ、思量賢ク、世ニ並ビ无キ者ニナム有ケル。万人ノ物ヲバ隙ヲ伺テ奪ヒ取ルヲ以テ役トセリ。

(日本古典文学大系本の巻二五、第七による)

▶空を飛ぶ鉢(志貴山縁起)

空を飛ぶ鉢 十二世紀に作られた絵巻に『志貴山縁起』というのがある。大和の国の志貴山寺を再興した命蓮の説話を絵巻にしたものである。命蓮が飛ばした鉢が米倉をのせて離陸するのを、あっけにとられて眺める人々の表情もおもしろい。この話は『宇治拾遺物語』や『古本説話集』に同じ話がある。お寺の興りを説く「縁起」と説話、説話と絵など関連する分野は広い。

■『万葉集』『古今集』『新古今集』の比較（歌人の歌数には異説のあるものが多い。）

	万葉集	古今集	新古今集
成立	奈良時代後期 天平宝字三年(759)以後	平安時代初期 延喜五年(905)以後	鎌倉時代初期 元久二年(1205)以後
巻数歌数	20巻　4516首	20巻　1100首	20巻　1979首
撰者	不明（大伴家持説が有力）	紀貫之　凡河内躬恒　紀友則　壬生忠岑	源通具　藤原有家　〃定家　〃家隆　〃雅経　寂蓮
主要歌人(歌数)	額田王13　柿本人麻呂85　高市黒人18　山部赤人50　山上憶良77　高橋虫麿32　大伴旅人79　大伴家持479　坂上郎女85　笠女郎29	在原業平30　小野小町18　素性法師36　紀貫之102　紀友則46　凡河内躬恒60　壬生忠岑35　藤原敏行19　伊勢22　清原深養父17	西行94　慈円92　藤原良経79　藤原俊成73　式子内親王49　藤原定家46　藤原家隆43　寂蓮35　後鳥羽院33　宮内卿15
時代区分	第一期（近江飛鳥時代） 第二期（藤原宮時代） 第三期（奈良時代前期） 第四期（奈良時代後期）	第一期（読人しらず時代） 第二期（六歌仙時代） 第三期（撰者時代）	古代歌群（万葉・古今・後撰・拾遺集時代中心の歌群） 近代歌群（後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今集時代中心の歌群）
分類	雑歌　相聞　挽歌 （整っていない）	春(上下)　夏　秋(上下)　冬　賀・離別・羇旅　物名・恋(一―五)　哀傷・雑(上下)　雑体・大歌所御歌 （整然としている）	春(上下)　夏　秋(上下)　冬　賀・哀傷・離別　羇旅・恋(一―五)　雑(上中下)　神祇・釈教 （整然としている）
形式・格調	**五七調**｛二句切れ　四句切れ 初句切れはほとんどない 三句切れは少ない **助詞止が最も多い** 助動詞止が助詞止の$\frac{1}{2}$ 体言止・連体止が少ない 字余りを気にしない	**七五調が中心** 三句切れが多い181 **助動詞止が最も多い** 助詞止が助動詞止の$\frac{1}{2}$ 体言止少ない53 連体止はやや増加 字余りはほとんどない	**七五調が中心** 三句切れが多い483 初句が独立していく傾向（初句切れ108） **体言止は大変多い**470 助詞止・助動詞止は同数 倒置法が多い **連体止が多い**552
修辞	○**枕詞・序詞**が多い。 ○掛詞・縁語はほとんどない。 ○対句・反復	○**掛詞・縁語・比喩**が中心。 ○枕詞は使われるが種類が少ない。 ○擬人法	○**本歌取り**が多い ○掛詞・縁語は修辞の中心にならない。 ○枕詞も少ない。
作歌態度	○現実生活の感動を直線的に表現して**直感的・具象的**である。 ○情趣的なものだけでなく、現実生活に即した幅広い題材を豊富な用語でよみあげる。	○生活から遊離し、**観念的・遊戯的**な傾向が強い。 ○感情をあらわにすることなく、技巧をこらし、屈折のある表現で、情趣的な美的題材をよみあげる。	○心象を**象徴的**に表現し、美的官能の世界を構成しようとする。 ○ことばの韻律的な連なりによって、華麗で夢幻的な情調を出し、余情を重んじる。
歌風	感動 ○素朴　男性的　叙事的　直線的　ますらをぶり	情趣 ○優雅　女性的　叙情的　曲線的　みやび　たをやめぶり	幽玄　有心 ○艶麗　女性的　叙景的　複合的　夢幻的　唯美的　絵画的　音楽的
歌体	短歌4207　長歌265　旋頭歌62　仏足石歌1　短連歌1	短歌1091　長歌5　旋頭歌4	短歌1979

▲藤原道長
▲和泉式部

文学の歴史

■中世文学史年表（鎌倉・室町時代）

時代概説

○「中世」という時代

鎌倉幕府の開設（一一九二）から、徳川家康が天下を統一し江戸幕府創設（一六〇三）まで約四〇〇年間。源平の合戦、承久の乱、建武の中興、南北朝の対立抗争の過程で貴族は完全に実力を失い、室町足利幕府も力を失って、応仁の乱につづく戦国時代に入る。不安定な政局と戦乱とで動揺を続けた時代である。

○鎌倉期から南北朝期の文学

貴族と武士との対立は、文学にも二つの異なる傾向を生む。貴族社会の側では八代集の最後をかざる『新古今集』、新興武士の世界の側には『平家物語』が軍記物として完成される。

『宇治拾遺物語』以後、説話は教訓的・仏教的になって活力を失い、日記文学は京・鎌倉の交通が盛んになるに従って『十六夜日記』のような紀行に形を変える。歴史物語にも『愚管抄』『神皇正統記』のように著者の時代認識があらわに表明されるようになる。特に『方丈記』『徒然草』は動乱の社会が生み出した隠者の文学、草庵の文学としても、批評文学としても注目される存在である。

○室町期から戦国時代の文学

中古以来、貴族社会が生み出した文学形態はすべて衰退し、武家および庶民の生活に根ざす新しい文学形態が中心となる。

和歌にかわって連歌がさかんとなり

西暦	年号	おもな作品	学術・教育書 ＊社会
		鎌倉前期成立の文学（十三世紀前半） 保元物語（軍記物語・作者未詳） 宇治拾遺物語（説話集・作者未詳） 平治物語（軍記物語・作者未詳）	＊鎌倉幕府開く（一一九二）
一一九三	建久4	六百番歌合	
一一九五	建久6	水鏡（歴史物語・作者未詳）これ以前	古来風体抄（歌論書・藤原俊成・一一九七）
一二〇二	建仁2	千五百番歌合	無名草子（評論書・藤原俊成女か・一二〇二以前）
一二〇五	元久2	新古今和歌集（歌集・藤原定家ら）	近代秀歌（歌論集・藤原定家・一二〇九） 無名抄（歌論書・鴨長明・一二一〇ごろ）
一二一二	建暦2	方丈記（随筆・鴨長明）	
一二一三	建暦3	金槐和歌集（歌集・源実朝）このころ	
一二一五	建保3	古事談（説話集・作者未詳）これ以前	
〃	〃	発心集（説話集・鴨長明）このころ	
一二一八	建保6	平家物語（軍記物語・作者未詳）このころ	毎月抄（歌論書・藤原定家・一二一九）
一二一九	承久1	建春門院中納言日記（日記・建寿御前）	愚管抄（史論・慈円・一二二〇）
一二二三	貞応2	海道記（紀行文・作者未詳）	＊承久の乱（一二二一）
一二三二	貞永1	建礼門院右京大夫集（歌集・藤原伊行女）貞永年間	＊親鸞浄土真宗開始（一二二四）
一二三四	文暦1	新勅撰和歌集（歌集・藤原定家）	
一二三五	嘉禎1	小倉百人一首（歌集・藤原定家）	
一二四二	仁治3	東関紀行（紀行文・作者未詳）このころ	
一二五二	建長4	十訓抄（説話集・六波羅二臈左衛門入道）	
〃	〃	弁内侍日記（日記・後深草院弁内侍）	
一二五四	建長6	古今著聞集（説話集・橘成季）	正法眼蔵（仏教書・道元・一二五三）
一二五九	正元1	源平盛衰記（軍記物語・作者未詳）このころ	立正安国論（仏教書・日蓮・一二六〇）
一二六五	文永2	続古今和歌集（歌集・藤原為家）	吾妻鏡（史書・作者未詳・一二六六以前）

『菟玖波集』『新撰菟玖波集』などの準勅撰・勅撰連歌集が、新しい韻文学として芸術性を高める。庶民的な雑芸をふまえてこれを舞台芸術に高めた能楽は、観阿弥・世阿弥によって完成された。能楽に伴って発達した狂言は、王朝物語に代わるお伽草子と同じく、庶民性を伸ばして行く。

○中世の文学理念

中古の「あはれ」「をかし」などの諸要素は時とともに次第に複合して中世の「幽玄」「有心」「無心」などを生む。「幽玄」は中古の伝統を強くうけながら、中世の代表的な美の境地となった。「有心」とは、見るもの(主体)と、見られるもの(客体)とが一体化した境地、「無心」は、文学の世界ではもと初期の連歌などに使われたことばであるが、庶民性というのに近い一面をも持っている。「艶」ということばもよく使われるが、室町時代に入ると「氷の艶」というような新しい境地を見つけて行く。枯淡の美へ傾く中世の美は、近世の「わび」「さび」へつながって行くことになる。

○中世文学と人生観

旧仏教にかわる新仏教は思索することを教える。これは『正法眼蔵』などの宗教文学や五山文学を生む。儒教的な教養を根底においた武士道は、いさぎよい生死観という新しい価値を生む。仏教的無常観も草庵の文学、隠者の文学という世界の中で文学的創造力をえている。

西暦	年号	作品	事項
一二七一	文永8	風葉和歌集（歌集・藤原為家か）	万葉集註釈（註釈書・仙覚・一二六九）
〃	〃	岩清水物語（物語・作者未詳）これ以前	＊蒙古来襲〔文永の役〕（一二七四）
一二八〇	弘安3	**十六夜日記**（日記・阿仏尼）	
一二八三	弘安6	沙石集（説話集・無住）これ以前	歎異抄（仏教書・唯円・一二九〇以前）
一二九二	正応5	中務内侍日記（日記・伏見院中務内侍）	＊蒙古来襲〔弘安の役〕（一二八一）
			＊正中の変（一三二四）
			＊元弘の乱（一三三一）
一三〇六	徳治1	とはずがたり（日記・後深草院二条）このころ	＊建武中興（一三三四―一三三六）
一三一二	正和1	玉葉和歌集（歌集・京極為兼）	＊足利尊氏征夷大将軍となる（一三三八）
一三三〇	元徳2	**徒然草**（随筆・吉田兼好）これ以後	神皇正統記（史書・北畠親房・一三三九）
一三四六	正平1（貞和2）	風雅和歌集（歌集・花園法皇）	
一三五六	正平11（延文1）	**菟玖波集**（連歌集・二条良基・救済）	
一三七二	建徳3（応安5）	太平記（軍記物語）このころ	連歌新式（連歌論書・二条良基・一三七二）
一三七六	天授2（永和2）	増鏡（歴史物語・作者未詳）このころ	筑波問答（連歌論書・二条良基・一三七二ごろ）
一三八一	弘和1（永徳1）	新葉和歌集（歌集・宗良親王）	
		鎌倉後期、室町前期成立の文学	近来風体抄（歌論書・二条良基・一三八七）
		曽我物語（軍記物語・作者未詳）	＊南北朝合一（一三九二）
		義経記（軍記物語・作者未詳）	**風姿花伝**（能楽論書・世阿弥・一四〇〇〜一四〇二）
			至花道（能楽論書・世阿弥・一四二〇）
			申楽談儀（能楽論書・世阿弥・一四三〇）
一四三九	永享11	新続古今和歌集（歌集・飛鳥井雅世）	正徹物語（歌論書・正徹・一四五〇）
			ささめごと（連歌論書・心敬・一四六三）
			＊応仁の乱（一四六七）
一四八八	長享2	水無瀬三吟百韻（連歌集・宗祇ら）	吾妻問答（連歌論書・宗祇・一四七〇）
一四九五	明応4	**新撰菟玖波集**（連歌集・宗祇）	＊山城国一揆（一四八五）
			＊加賀一向一揆（一四八八）
一五一八	永正15	閑吟集（歌謡集・編者未詳）	＊鉄砲伝来（一五四三）
一五三九	天文8	新撰犬筑波集（俳諧集・山崎宗鑑）天文年間	＊ザビエル、キリスト教布教（一五四九）
一五四〇	〃9	独吟千句（俳諧集・荒木田守武）	
一五九三	文禄2	伊曽保物語（小説・キリシタン版）	＊豊臣秀吉関白（一五八五）

新古今集

▶新古今集（小宮本）

■二十一代集一覧

時代		勅撰集名	撰者
平安	三代集（八代集）	1古今	紀貫之ら
平安	三代集（八代集）	2後撰	清原元輔ら
平安	三代集（八代集）	3拾遺	花山院
平安	八代集	4後拾遺	藤原通俊
平安	八代集	5金葉	源俊頼
平安	八代集	6詞花	藤原顕輔
平安	八代集	7千載	藤原俊成
鎌倉	八代集	8新古今	藤原定家ら
鎌倉	十三代集	9新勅撰	藤原定家
鎌倉	十三代集	10続後撰	藤原為家
鎌倉	十三代集	11続古今	藤原為家ら
鎌倉	十三代集	12続拾遺	二条為氏
鎌倉	十三代集	13新後撰	二条為世
鎌倉	十三代集	14玉葉	京極為兼
鎌倉	十三代集	15続千載	二条為世
鎌倉	十三代集	16続後拾遺	二条為定
南北朝	十三代集	17風雅	花園院
南北朝	十三代集	18新千載	二条為定
南北朝	十三代集	19新拾遺	頓阿
南北朝	十三代集	20新後拾遺	二条為重
室町	十三代集	21新続古今	飛鳥井雅世

〔書名〕新古今和歌集。第八番目の勅撰集として、『古今集』の伝統を受け継ぎ、しかも新たな方向を目ざすという意味で名づけられた。略して新古今集ともいう。

〔編者〕後鳥羽院の院宣により、源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経、寂蓮の六人の撰者が撰に当たったが、後鳥羽院自身で実質的な中心となり編纂事業を進めた。

〔成立〕成立過程は四期に分けられる。第一期は、建仁元年(一二〇一)一一月三日、和歌撰進の院宣が下され、撰者により撰歌が奉られるまで。第二期は、院により撰進歌が吟味・取捨された精選時代。第三期は、歌の部類立・配列を行った部類時代である。こうして元久二年(一二〇五)三月二六日、一応の完成をみた。その後、歌の切り継ぎ(加除修正)作業は続けられ、最終的な成立は承元四年(一二一〇)以降と考えられる。この時期が第四期、切り継ぎ時代である。今日、『新古今集』の成立は、承元四年以降、建保四年(一二一六)の間と推定されている。

〔内容・構成〕歌数約二〇〇〇首、巻数二〇巻から成る。『古今集』にならって真名序と仮名序を備える。いずれも後鳥羽上皇が述べるところを藤原親経(真名序)、藤原良経(仮名序)が記した形式となっており、この歌集を編む上での意図・方針が明確にされている。

多数入撰者をみると、『新古今集』成立以前の歌人である西行九四首、俊成七二首、式子内親王四九首、同時代の歌人である慈円九一首、良経七九首、定家四六首、家隆四三首、寂蓮三五首、後鳥羽院三三首となっており、古代の歌人では紀貫之三二首、和泉式部二五首、柿本人麻呂二三首、つまり撰集にあたっては『新古今集』の同時代あるいは少し以前の歌人の歌に重点が置かれている。

各巻の歌はほぼ季節順に並べられ、古代歌人の歌の集まりが当代の歌の集まりと交互に配列されている。

集中、長歌は一首もなくすべて短歌のみで統一されている。

〔歌風〕『新古今集』の特色は、観念を感覚的に形象化するという象徴表現にあると言える。そしてそれを育てる基盤となったのが、当時盛んに行われた題詠であった。歌合わせといった公的な場で、定められた題について歌をよむこのやり方では、歌はもう現実の情景や場面にそくした直截的な心情表現ではなくなって、題詠という枠の中でできる限り複雑な内容を象徴的に表現する方向に変わってきた。その結果、華麗、優美、繊細、妖艶な叙情あふれる新古今的虚構世界が生まれた。『新古今集』の代表的歌人である俊成、定家はその世界で重んじられた余情美を、それぞれ「幽玄」「有心」という理念で説明し定着させている。

〔表現〕『新古今集』の歌には、象徴表現を支えるために様々な技巧が凝らされている。そのひとつに本歌取りがある。これは、歌の中のことばが本歌を連想させることにより、歌の世界が二重写しとなって余情を深める効果を持つものである。また序詞や掛詞も一首の意味を複雑化し内容を奥深くする効果を持つ。他に特徴ある表現方法として三句切れ、体言止めがある。この二つの技巧の併用で一首の歌は上句と下句の間に内容的なつながりを持たなくなり、それが表現の上で結びつけられることにより、叙情を重厚にしている。

〔史的評価〕『万葉集』『古今集』と並んで三大歌風の一つを形成するものである。その歌風形成の裏には源平動乱の暗い記憶を持ち、一時の平和の中にも貴族政権の崩壊を見ていた歌人達の眼があった。『新古今集』はそうした社会的激動のさ中で、現実世界を離れて構築したあやうい美の世界にほかならなかった。その影響は、心敬・宗祇らの連歌および連歌論、世阿弥の能楽論、芭蕉の俳論にと及び、近代に至っても明星派の与謝野晶子、象徴派の詩人達にその価値を認められている。

▲後鳥羽天皇像

新古今時代　新古今時代とは『後拾遺集』の芽生えの時代から『新勅撰集』のやや枯れた平淡な歌風に至る時期をいう。『小倉百人一首』の中から、この時期の勅撰集に見える歌人の歌をあげておく。(p.210参照)

57紫式部　74源俊頼　75藤原基俊　81後徳大寺左大臣　82道因法師　83藤原俊成　84藤原清輔　85俊恵法師　86西行法師　87寂蓮　89式子内親王　90殷富門院大輔　91藤原良経　94藤原雅経　95慈円　97藤原定家　98藤原家隆

方丈記

■鴨長明年譜

西暦	事項
一一五五	(久寿 二)長明誕生か。
一一七三	(承安 三)父長継没か。
一一八〇	(治承 四)四月、辻風。六月、福原遷都、福原に赴く(方丈記)。
一一八一	(養和元)大飢饉(方丈記)。『鴨長明集』を編む。
一一八四	(寿永 三)賀茂川近くに転居(方丈記)。
一一八六	(文治 二)伊勢に旅行。『伊勢記』を書く。
一二〇一	(建仁元)和歌所寄人。
一二〇四	(元久元)大原に出家遁世か(方丈記)。
一二〇八	(承元 二)日野外山に転居(方丈記)。
一二一一	(建暦元)鎌倉に下向。実朝に対面。この前後『無名抄』成る。
一二一二	(建暦 二)『方丈記』成る。このころ、『発心集』成る。
一二一六	(建保 四)死去。

▶鴨長明

【書名】文中に「その家のありさま、よのつねにも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり」とあって、作者が方丈の庵でこの書を著したことによる。

【作者】鴨長明(一一五五—一二一六)、鴨神社の禰宜、鴨長継の次男。少年時代は鳥羽上皇の皇女高松女院の北面に伺候したが十八・九歳で父の死に会い、家職を継ぐ望みを失って、以後は和歌、管絃に親しみ地下歌人として活躍する(『千載集』に一首、『新古今集』に一〇首入集)。五十余歳で出家し、大原での隠遁生活を経て日野外山に移り、方丈の庵を結んで『方丈記』『無名抄』『発心集』を著した。他に家集『鴨長明集』がある。

【成立】奥書きによると、建暦二年(一二一二)三月晦日ごろの成立である。

【内容・構成】ジャンルとしては随筆と考えられるが、単なる随筆ではなく、ひとつの主題を追求したエッセー(小論)としての色あいをもつ。その内容からおよそ四つの章段に分けられる。

まず、序章では、人の世の無常であることが川の流れに寄せて、詠嘆的な調子で語り始められる。次に二章では、彼の経験した天変地異、社会変動のありさまがまざまざと克明に描き出され、特に福原遷都の個所は詳細な見聞録をなしており、彼のルポライターとしての眼の確かさがうかがわれる。三章では、そうした外部的なことから彼の身近なところへと話題が移ってゆく。若いころからの自分の住居の変転を述べたあと、現在の住居すなわち方丈の庵の様子を、ひとつひとつの道具立てにまで言及して述べ、その閑寂な草庵生活の快適さ、意味深さを心地よげに嘆美する。しかし、終章では、一転してその方丈の生活にさえ疑問を抱かざるを得ない自分であることがあらわにされ、その矛盾に対し自問自答を試みた挙句「心さらに答ふる事なし」として黙してしまうのである。ここで作者は、自分の内面的矛盾をさらけ出し自己を追いつめる。ぎりぎりの線にまで自己を追いつめたところにこの一編の主題があり、解答できない自分を見いだし黙してしまったところに、この作者の真実があったと思われる。

【文体】和漢混交文。全体に情緒的な、しかしひとすじの力を秘めた文章である。対句・比喩を多く用い、その修辞的に整った格調の高さは読む者の心にしみとおる。

【史的評価】慶滋保胤の『池亭記』に影響を受けたと言われる。だが、たとえその構想には多少負うところがあったとしても『方丈記』は「記」といったところにとどまらず、すぐれた自照文学として『徒然草』とともに双璧をなすものである。また、鎌倉三代将軍源実朝の時代に成ったこの作品は、鎌倉文化の将来を予言している。一三世紀中ごろの『十訓抄』や一五世紀に能楽論を著した世阿弥の伝書にも『方丈記』のことばが引かれていて、古くからよく知られ、読みつがれてきた作品である。

【『方丈記』冒頭・例文】ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。(大福光寺本による)

【訳】川の流れは涸れることなく、常に流れていてそのくせ、もとの水ではない。水の淀みに浮かぶ水の泡は、あちらで消えたと思うと、こちらに新しいのができて、いつまでもそのままでいることはない。世にある人とその住居を見ても、やはりこの川面の様と同じ調子だ。

▲鴨長明が，晩年，方丈の庵をたてて住んだ日野山のふもと

長明の東下り

鎌倉の幕府のことを細かく書いた『吾妻鏡』の建暦元年十月十三日の記事によると、鴨長明が鎌倉へ下って源実朝に面会したのは飛鳥井雅経の推薦によるものだと書いてある。おそらく将軍の和歌の相手にと考えたのだろうが、その二年前から定家に師事していた源実朝は、五十余歳の世捨て人長明よりも新古今時代の花形、藤原定家のほうに魅力があったのだろう。『無名抄』という長明の歌道随筆は、実朝に見せるために書かれたものかもしれない。すごすご鎌倉から帰って来たからこそ『方丈記』も書けたのだとすると、人間の運命は不思議なものである。

平家物語

▶平家物語（龍谷大学本）

■軍記物語年表

西暦	事項
九四〇	（天慶 三）『将門記』。平将門の反乱を和臭の強い漢文で書く。
一〇六二	（康平 五）以後、『陸奥話記』。前九年の役の源頼義の陸奥討伐を書く。
一二二〇	（承久 二）ごろ、『保元物語』。保元の乱を書き、源為朝に照明を当てる。『平治物語』はその姉妹編で、源平合戦の結果、清盛の勝利に終わる事件を書く。
一二四〇	（仁治元）『平家物語』これ以前に、成立か。
一三七〇	（応安 三）『太平記』。南北朝の動乱を書く。このころ『曽我物語』『義経記』なども書かれたか。

〔書名〕平家物語。平家一門の繁栄から没落までの過程を描いていることによる。古くは「治承物語」と呼ばれたらしい。

〔作者〕未詳。『徒然草』に「この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり」とあるのが最も古い資料である。この行長については、前下野守で『玉葉』の作者九条兼実の家司であった行長であろうかと言われている。また、『尊卑分脈』にはその行長の従兄弟にあたる葉室時長が作者の一人と記されており、『徒然草』の行長は時長の誤りという説もあるが定かではない。いずれにしろ、原作者は一人とは考えられず、現在の十二巻に灌頂の巻を加えた形ができ上がるまでの代表的な作者が、行長あるいは時長であったと考えられる。

〔成立〕平信範の日記『兵範記』の仁治元年（一二四〇）に書かれた記事「治承物語六巻号平家候間書写候也」を信じるならば、同年以前の成立ということになる。もともとの原作は承久の乱以前、後鳥羽院の時代に成立していたであろうと推測される。原作の形は三巻程度で、それが琵琶法師に語り伝えられるうち幾人かの作者に増補加筆され、六巻、一二巻と増えていったと考えられる。琵琶法師について——『平家物語』は琵琶法師の語りによって広められたといわれる。琵琶法師とは、盲目の僧形をした芸人で京都を拠点として各地を巡り、琵琶を片手に社寺縁起や歴史物語を語った。そうした彼らにとって哀調を帯びた調子で始まる多くの合戦場面や悲劇を内に持つ『平家物語』は格好の語り物であった。

〔内容・構成〕まず冒頭の有名な「祇園精舎」の章段には、『平家物語』の基調をなす仏教的無常観が色濃く表れ、平家一族の興亡という生成流転の人間ドラマの骨組みが示される。

物語は主人公清盛の死を境に二つに大別される。前半は、清盛を中心にして平家の台頭と栄華とが描かれる。その栄華も清盛の嫡男で清盛の専横を押しとどめていた重盛の死（巻三「無文」）以後下り坂となる。高倉宮以仁王の令旨により、源頼朝、木曽義仲などが各地で平家追討に立ち上がり、風雲急を告げるさ中に清盛は死ぬ（巻六「入道死去」）。後半は、義仲の入京、平家一門の都落ちへと物語は展開する。巻九に義仲の最期が描かれ、巻十に平家の人々の悲劇が描かれたのち、巻十一で平家は滅亡する。巻十二は後日談とも言うべき章段で、あとに添えられた灌頂の巻（この巻を立てない諸本もある）は、平家一門の唯一の生存者である建礼門院の述懐が語られ、あたかも『平家物語』全体の縮図となっている。

以上の大きな流れの中に、合戦譚や恋愛譚、説話や主要人物に関するエピソードなどが織り込まれ、これにこの時代特有の因果応報の仏教思想や儒教思想がからみあって、一大人間絵巻を繰り広げている。

〔文体〕和漢混交文。場面に応じて巧みな変化を見せる。合戦場面では簡潔で力強い調子の文体を用い、情緒的な場面では流麗な七五調の和文体を用い、歌を配したりして王朝的な雰囲気を盛り上げている。会話文では当時の口語そのままに武家ことばや方言・俗語が飛び出し、場面場面を生かしている。他にも対句表現や擬態語・擬声語の多用が目立ち、平安時代とは明らかに異なる語法が随所に認められる。

〔史的評価〕新たに登場した武士たちの世界を平安貴族の世界と対照させながら生き生きと描き出し、「軍記物語」を文学史の中に位置づけている。

〔『平家物語』冒頭・例文〕祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ。ひとへに風の前の塵に同じ。（日本古典文学全集本による）

〔訳〕釈迦が説法したという祇園精舎の鐘の音は（病僧が臨終の時になると自然に鳴り出し）、諸行無常の響きを立てる。釈迦入滅の時、白色に変じたという沙羅双樹の花の色は、盛者も必ず衰えることのある道理を表している。驕り高ぶった人も末長くは続かず、ただ春の夜の夢のようにはかないものだ。勇猛な者も遂には滅びてしまう。全く風の前の塵と同じ有様である。

▲宇治川の先陣争いでの佐々木四郎高綱（一ノ谷・宇治川合戦図屏風）

■世界の文学

西暦	人名・書名〔事項〕
紀元前	
八〇〇?	ホメロス『イーリアス』『オデュッセイア』
六〇〇?	アイソーポス『イソップ寓話集』(―五〇〇)
五〇〇?	ピタゴラスの数学、ヒポクラテスの医学確立
四〇〇?	ヘロドトス『歴史』、ツキジデス『歴史』
四三〇	ソポクレース『オイディプース王』
四一一	アリストパネース『女の平和』
三五〇?	プラトン『ソクラテスの弁明』
三三〇?	アリストテレス『詩学』
二七〇?	アルキメデス『液体に浮ぶ物体について』
	ユークリッド『幾何学原論』
五四	キケロ『共和国について』
四八	カイサル『ガリヤ戦記』
三七	ヴェルギリウス『詩選』
三五	ホラティウス『風刺詩』
紀元	
一〇〇?	ギリシヤ神話集大成
	プルターク『プルターク英雄伝』
一〇四	タキトゥス『同時代史』(―〇九)
一〇五	中国の蔡倫、製紙法を発明
二〇〇?	ロンゴス『ダフニスとクロエー物語』
四〇〇	アウグスチヌス『告白録』
一二〇〇?	『アラビアン・ナイト』成立
一一九〇?	『ニーベルンゲンの歌』(―一三〇四)
一二六六	トマス＝アクィナス『神学大全』(―六七)
一三〇七	ダンテ『神曲』(―二一)
一三四九	ボッカチオ『デカメロン』
一三九三	チョーサー『カンタベリ物語』(―一四〇〇)
一四五〇?	グーテンベルク、活版印刷術を発明
一四六二?	フランソワ＝ヴィヨン『遺言書』
一五一一	エラスムス『痴愚神礼讃』
一五一六	トマス＝モア『ユートピア』
一五二〇	ルター『キリスト者の自由』
一五三二	ラブレー『第二之書パンタグリュエル』
	マキャヴェリ『君主論』
一五四三	コペルニクス『天体の回転について』
一五五二	ロンサール『恋愛詩集』

シェイクスピア

William Shakespeare(一五六四―一六一六)イギリスの劇作家・詩人。

一五九〇	○習作時代(―九五)『ロミオとジュリエット』
一五九五	○喜劇時代(―九九)『真夏の夜の夢』『ヴェニスの商人』
一五九九	○悲劇時代(―一六〇八)『ハムレット』『マクベス』『オセロー』『リヤ王』
一六〇八	○浪漫劇時代(―一一)『あらし』

シェイクスピアのころの芝居(エリザベス朝演劇)は公共劇場で上演された。公共劇場の構造は現代のそれとはちがって、建物の中央は吹きぬけの青天井で、照明は太陽光線にたより、雨の日は休演とする状態であった。舞台は張り出しで、客席との間に幕もなく、背景や装置は簡単なものであった。劇団に女優はいなかったので、声がわりする前の少年が女形を演じるよりほかなかった。だから、当時の芝居は、場面の情景効果や心理表現をするために、せりふを重んじ、ことばを主とする演技に頼らざるを得なかった。シェイクスピア劇のせりふが、現代人の目からは異常におしゃべりとも見え、また一面ことばの美しさと迫力とをそなえているのは、エリザベス朝演劇の制約からうまれた特徴なのである。

翻訳にさいして、日本の演劇状況が投影されるのも、興味深い。『ジュリアス・シーザー』(三幕一場)で、暗殺者がシーザーに剣をふりおろす瞬間のせりふである"Speak, hands, for me!"を

〝もう……この上は……腕ずくだ!〟(坪内逍遙訳)

と訳したのは歌舞伎的な演技にふさわしい想定であり、

〝この手に聞け!〟(福田恆存訳)

は、新劇ふうの演技行動を意識している。また、舞台語としてでなく、文学的な立場から訳されるものもある。

〝こうなれば、腕に物を言わせるのだ!〟(中野好夫訳)

ゲーテ

Johann Wolfgang von Goethe(一七四九―一八三二)ドイツの詩人・小説家・劇作家。

一七七四	『若きヴェルテルの悩み』
一七八六	イタリア旅行(―八八)
一七九五	『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(―九六)
一七九七	『ヘルマンとドロテア』
一八〇八	『ファウスト』(第一部)
一八〇九	『親和力』
一八一一	『詩と真実』(―三三)
一八一九	『西東詩集』
一八二一	『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(―二九)
一八三一	『ファウスト』(第二部)

「ゲーテにはすべてがある」といわれる。もし何か気のきいたことを言いたい時は、「ゲーテいわく……」と前おきするがよい、ゲーテならあらゆることを言っているはずだから心配いらない、などという冗談さえある。

『若きヴェルテルの悩み』のころのゲーテは、ドイツ的な個性を奔放に爆発させた〈シュトルム・ウント・ドラング〉(疾風怒濤時代)の闘士だった。しかしワイマル公国の宰相として政務を執り、自然科学研究に没頭するに至って、深化沈潜した観照の姿勢に移り、イタリア旅行を契機として、調和的な人間形成を目標とする古典主義の志向を確立した。フランス革命の混乱期に、彼は美しく力強いドイツの魂を『ヘルマンとドロテア』に描き、親友シラーのすすめによって『ウイルヘルム・マイスター』や『ファウスト』の筆を進める。前者はドイツ教養小説の規範とされ、後者は世界文学の至宝と呼ばれているが、それらは自然から生気をうけつつ近代人としての自己を形成しつづけてゆく精神の格調高い軌跡であった。晩年のゲーテは、端正な古典主義から自由な様式に移行していったが、そこにもよどみなく成長する生命と、苦悩までも生産的活動に転化させてゆくゲーテの精進の態度がみられる。生涯恋愛の人といわれるゲーテが、七十歳を過ぎてなお十八歳の乙女ウルリーケを恋して作った『マリーエンバート哀歌』は象徴的である。

る賞。

サンデー毎日新人賞（昭44・毎日新聞社）
小説の新人登龍門として創設。

【女流文学】

女流新人賞（昭33・中央公論社）
女流新人作家に与える賞。

田村俊子賞（昭35・田村俊子会）
田村俊子の名を記念して女流文学者の優秀作品に与える賞。

女流文学賞（昭36・中央公論社）
女流作家の最優秀作品に与える賞で、女流文学者賞を継承。

【評論】

エッセイスト・クラブ賞（昭28・日本エッセイストクラブ）
評論・随筆のすぐれた作品に与える賞。

吉野作造賞（昭41・中央公論社）

亀井勝一郎賞（昭44・講談社）
亀井勝一郎の名を記念して新人の文芸評論を対象に与えられる賞。

大宅壮一ノンフィクション賞（昭44・文芸春秋社）

日本ノンフィクション賞（昭49・角川書店）

【戯曲】

芸術選奨文部大臣賞（昭22・文部省）
脚本の応募原稿の優秀なものに与える。

岸田演劇賞（昭29・白水社）
岸田国士の名を記念して戯曲を対象に創設した賞。

【詩】

H氏賞（昭26・日本現代詩人会）
H氏（平沢貞一郎）後援で、新人の詩集に対して与える賞。

高村光太郎賞（昭32・高村光太郎記念会）

現代詩手帖賞（昭36・思潮社）

歴程賞（昭38・歴程社）

詩人会議新人賞（昭42・飯塚書店）

高見順賞（昭46・高見順文学振興会）

【短歌】

角川短歌賞（昭30・角川書店）

現代歌人協会賞（昭31・現代歌人協会）

短歌研究新人賞（昭33・短歌研究社）

迢空賞（昭42・角川書店）

【俳句】

現代俳句協会賞（昭23・現代俳句協会）

角川俳句賞（昭30・角川書店）

俳人協会賞（昭36・俳人協会）

蛇笏賞（昭42・角川書店）

【児童文学】

小学館文学賞（昭27・小学館）

国際アンデルセン国内賞（昭31・児童図書日本センター）

講談社児童文学新人賞（昭34・講談社）

日本児童文学者協会賞（昭36・日本児童文学者協会）

野間児童文芸賞（昭37・講談社）

赤い鳥文学賞（昭46・赤い鳥の会）

児童文芸新人賞（昭47・日本児童文芸家協会）

【その他】

朝日賞（昭4・朝日新聞社）

文化勲章（昭12・文部省）

菊池寛賞（昭13・日本文学振興会）

日本芸術院賞（昭16・日本芸術院）

読売文学賞（昭24・読売新聞社）

文化功労者（昭26・文部省）

毎日芸術賞（昭34・毎日新聞社）

大仏次郎賞（昭48・朝日新聞社）

46	36	下	宇能鴻一郎	「鯨神」
47	37	上	川村晃	「美談の出発」
49	38	上	後藤紀一	「少年の橋」
		〃	河野多恵子	「蟹」
50		下	田辺聖子	「感傷旅行」
51	39	上	柴田翔	「されどわれらが日々——」
53	40	上	津村節子	「玩具」
54		下	高井有一	「北の河」
56	41	下	丸山健二	「夏の流れ」
57	42	上	大城立裕	「カクテル・パーティ」
58		下	柏原兵三	「徳山道助の帰郷」
59	43	上	丸谷才一	「年の残り」
		〃	大庭みな子	「三匹の蟹」
61	44	上	庄司薫	「赤頭巾ちゃん気をつけて」
		〃	田久保英夫	「深い河」
62		下	清岡卓行	「アカシヤの大連」
63	45	上	古山高麗雄	「プレオー8の夜明け」
		〃	吉田知子	「無明長夜」
64		下	古井由吉	「杳子」
66	46	下	李恢成	「砧をうつ女」
		〃	東峰夫	「オキナワの少年」
67	47	上	宮原昭夫	「誰かが触った」
		〃	畑山博	「いつか汽笛を鳴らして」
68		下	山本道子	「ベティさんの庭」
		〃	郷静子	「れくいえむ」
69	48	上	三木卓	「鶸」
70		下	森敦	「月山」
		〃	野呂邦暢	「草のつるぎ」
72	49	下	阪田寛夫	「土の器」
		〃	日野啓三	「あの夕陽」
73	50	上	林京子	「祭りの場」
74		下	中上健次	「岬」
		〃	岡松和夫	「志賀島」
75	51	下	村上龍	「限りなく透明に近いブルー」
77	52	上	池田満寿夫	「エーゲ海に捧ぐ」
		〃	三田誠広	「僕って何」
78	52	下	高城修三	「榧の木祭り」
		〃	宮本輝	「螢川」
79	53	上	高橋三千綱	「九月の空」
		〃	高橋揆一郎	「伸予」
81	54	上	青野聡	「愚者の夜」
		〃	重兼芳子	「やまあいの煙」
82	54	下	森禮子	「モッキングバードのいる町」
84	55	下	尾辻克彦	「父が消えた」
85	56	上	吉行理恵	「小さな貴婦人」

33	35	上	池波正太郎	「錯乱」
44		下	寺内大吉	「はぐれ念仏」
		〃	黒岩重吾	「背徳のメス」
45	36	上	水上勉	「雁の寺」
46		下	伊藤桂一	「蛍の河」
47	37	上	杉森久英	「天才と狂人の間」
48		下	山口瞳	「江分利満氏の優雅な生活」
		〃	杉本苑子	「孤愁の岸」
49	38	上	佐藤得二	「女のいくさ」
50		下	安藤鶴夫	「巷談本牧亭」
		〃	和田芳恵	「塵の中」
52	39	下	安西篤子	「張少子の話」
		〃	永井路子	「炎環」
53	40	上	藤井重夫	「虹」
54		下	新橋遊吉	「八百長」
		〃	千葉治平	「虜愁記」
55	41	上	立原正秋	「白い罌粟」
56		下	五木寛之	「蒼ざめた馬を見よ」
57	42	上	生島治郎	「追いつめる」
58		下	野坂昭如	「アメリカひじき」
		〃	三好徹	「聖少女」
60	43	下	陳舜臣	「青玉獅子香炉」
		〃	早乙女貢	「僑人の檻」
61	44	上	佐藤愛子	「戦いすんで日が暮れて」
63	45	上	渡辺淳一	「光と影」
		〃	結城昌治	「軍旗はためく下に」
64		下	豊田穣	「長良川」
67	47	上	綱淵謙錠	「斬」
		〃	井上ひさし	「手鎖心中」
69	48	上	長部日出雄	「津軽世去れ節」他
		〃	藤沢周平	「暗殺の年輪」
71	49	上	藤本義一	「鬼の詩」
72		下	半村良	「雨やどり」
		〃	井出孫六	「アトラス伝説」
74	50	下	佐木隆三	「復讐するは我にあり」
76	51	下	三好京三	「子育てごっこ」
79	53	上	津本陽	「深重の海」
		〃	色川武大	「離婚」
80	53	下	宮尾登美子	「一絃の琴」
		〃	有明夏夫	「大浪花諸人往来」
81	54	上	田中小実昌	「浪曲師朝日丸の話」他
		〃	阿刀田高	「ナポレオン狂」
83	55	上	志茂田景樹	「黄色い牙」
		〃	向田邦子	「花の名前」他
84	55	下	中村正軌	「元首の謀反」
85	56	上	青島幸男	「人間万事塞翁が丙午」

主要文学賞解説

（ ）内は創設年・主催を示す。注記のないものは授賞は年一回。

【純文学】

芥川賞（昭10・日本文学振興会）
芥川龍之介の名を記念して文芸春秋社（菊池寛社長）が創設。純文学の優秀作品に年二回授賞。〈下表参照〉

野間文芸賞（昭16・野間奉公会）
講談社初代社長野間清治を記念した賞。

文学界新人賞（昭29・文芸春秋社）
新人作家を対象とした賞。

農民文学賞（昭30・日本農民文学会）
新しい農民作家の誕生を推進するためにつくった賞。

群像新人文学賞（昭33・講談社）
小説・評論の応募原稿より優秀なものに与える賞。

新日本文学賞（昭35・新日本文学会）
小説・評論の応募原稿より優秀なものに与える賞。

文芸賞（昭36・河出書房新社）
小説の応募原稿より優秀なものに与える賞。

太宰治賞（昭39・筑摩書房）
雑誌『展望』の復刊を機会に太宰治の名を記念して創設。

谷崎潤一郎賞（昭40・中央公論社）
谷崎潤一郎の業績をしのんで創設。

新潮賞（昭43・新潮文芸振興会）
「日本文芸大賞」は小説・評論・詩歌・戯曲を対象とし、新潮社文芸賞、新潮社文学賞を継承。「新人賞」は雑誌『新潮』の全国同人雑誌推薦小説特集を対象とし、同人雑誌賞を継承。

泉鏡花文学賞（昭48・金沢市）
泉鏡花の業績をしのんで創設。

平林たい子賞（昭48・平林たい子記念文学会）
平林たい子の業績をしのんで創設。

川端康成賞（昭48・川端康成記念会）
川端康成の業績をしのんで、短編を対象として創設。

角川小説賞（昭49・角川書店）
小説の応募原稿より優秀なものに与える賞。

【大衆文学】

直木賞（昭10・日本文学振興会）
直木三十五の名を記念して文芸春秋社（菊池寛社長）が創設。大衆文学の優秀作品に年二回授賞。〈下表参照〉

推理作家協会賞（昭22・日本推理作家協会）
推理小説の優秀作品に与えられる賞。

江戸川乱歩賞（昭29・日本推理作家協会）
江戸川乱歩の還暦を記念して推理作家の登竜門として創設。

オール読物推理小説新人賞（昭37・文芸春秋社）
推理小説の優秀なものに与える賞。年二回授賞。

小説現代新人賞（昭38・講談社）
小説の優秀なものに与える賞。年二回授賞。

吉川英治文学賞（昭41・吉川英治国民文化振興会）
吉川英治の名を記念して大衆文学のジャンルで新領域を確立したものに与え

芥川賞

回	昭和	受賞者・作品
1	10上	石川達三「蒼氓」
3	11上	鶴田知也「コシャマイン記」
	〃	小田嶽夫「城外」
4	下	富沢有為男「地中海」
	〃	石川淳「普賢」
5	12上	尾崎一雄「暢気眼鏡」
6	下	火野葦平「糞尿譚」
7	13上	中山義秀「厚物咲」
8	下	中里恒子「乗合馬車」
9	14上	半田義之「鶏騒動」
	〃	長谷健「あさくさの子供」
10	下	寒川光太郎「密猟者」
12	15下	桜田常久「平賀源内」
13	16上	多田裕計「長江デルタ」
14	下	芝木好子「青果の市」
16	17下	倉光俊夫「連絡員」
17	18上	石塚喜久三「纏足の頃」
18	下	東野辺薫「和紙」
19	19上	八木義徳「劉広福」
	〃	小尾十三「登攀」
20	下	清水基吉「雁立」
		〔第二次世界大戦のため中断〕
21	24上	由起しげ子「本の話」
	〃	小谷剛「確証」
22	下	井上靖「闘牛」
23	25上	辻亮一「異邦人」
25	26上	石川利光「春の草」
	〃	安部公房「壁」
26	下	堀田善衛「広場の孤独」
28	27下	五味康祐「喪神」
	〃	松本清張「或る『小倉日記』伝」
29	28上	安岡章太郎「悪い仲間」
31	29上	吉行淳之介「驟雨」
32	上	小島信夫「アメリカン・スクール」
	〃	庄野潤三「プールサイド小景」
33	30上	遠藤周作「白い人」
34	下	石原慎太郎「太陽の季節」
35	31上	近藤啓太郎「海人舟」
37	32上	菊村到「硫黄島」
38	下	開高健「裸の王様」
39	33上	大江健三郎「飼育」
41	34上	斯波四郎「山塔」
43	35上	北杜夫「夜と霧の隅で」
44	下	三浦哲郎「忍ぶ川」

直木賞

回	昭和	受賞者・作品
1	10上	川口松太郎「鶴八鶴次郎」他
2	下	鷲尾雨江「吉野朝太平記」他
3	11上	海音寺潮五郎「天正女合戦」他
4	下	木々高太郎「人生の阿呆」他
6	12下	井伏鱒二「ジョン万次郎漂流記」
7	13上	橘外男「ナリン殿下への回想」
8	下	大池唯雄「秋田口の兄弟」「兜首」
11	15上	堤千代「小指」他
	〃	河内仙助「軍事郵便」
12	下	村上元三「上総風土記」他
13	16上	木村荘十「雲南守備兵」
16	17下	神崎武雄「寛容」他
	〃	田岡典夫「強情いちご」他
18	18下	森荘已池「山畠」「蛾と笹舟」
19	19上	岡田誠三「ニューギニヤ山岳戦」
		〔第二次世界大戦のため中断〕
21	24上	富田常雄「面」「刺青」
22	下	山田克郎「海の廃園」
23	25上	今日出海「天皇の帽子」
	〃	小山いと子「執行猶予」
24	下	檀一雄「長恨歌」他
25	26上	源氏鶏太「英語屋さん」
26	下	久生十蘭「鈴木主水」
	〃	柴田錬三郎「イエスの裔」
27	27上	藤原審爾「罪な女」
28	下	立野信之「叛乱」
31	29上	有馬頼義「終身未決囚」
32	下	梅崎春生「ボロ家の春秋」
	〃	戸川幸夫「高安犬物語」
34	30下	新田次郎「強力伝」
	〃	邱永漢「香港」
35	31上	南条範夫「燈台鬼」
	〃	今官一「壁の花」
36	下	今東光「お吟さま」
	〃	穂積驚「勝烏」
37	32上	江崎誠致「ルソンの谷間」
39	33上	山崎豊子「花のれん」
	〃	榛葉英治「赤い雪」
40	下	城山三郎「総会屋錦城」
41	〃	多岐川恭「落ちる」
41	34上	渡辺喜恵子「馬淵川」
	〃	平岩弓枝「鏨師」
42	下	司馬遼太郎「梟の城」
	〃	戸板康二「団十郎切腹事件」

心境小説→私小説

新劇 歌舞伎・新派など既成演劇に対立して、ヨーロッパ演劇の影響を強く受けて新しく興った演劇をいう。明治四二年、小山内薫らが有楽座で自由劇場の旗上げ公演をしたのに始まる。大正期の築地小劇場の運動を経て、戦後は民芸・俳優座・文学座・ぶどうの会・雲の会などの劇団が活動している。

政治小説 特定の政治的イデオロギーを普及・宣伝するために書かれた小説をさし、文学史的には明治一〇年代の自由民権運動を背景とした小説群をさす。戸田欽堂の『情海波瀾』が初め。

戦後派 特に戦後派と称するのは昭和二一年に創刊された雑誌『近代文学』の同人たちをさす。旧プロレタリア文学批判と西ヨーロッパ的知性に基づく文学主体の確立をめざした。平野謙・埴谷雄高・野間宏・安部公房など。昭和三〇年以後に活躍する安岡章太郎・吉行淳之介・小島信夫・遠藤周作等を「第三の新人」の名で呼ぶ。

則天去私 夏目漱石の造語で、「天に則って私を去る」という晩年の文学理念であり、人生態度である。非人情を唱えて自然主義に対抗した漱石は、やがて人間のエゴイズムと対決する立場をとり、晩年には小我を捨てて天の大道につく境地に達した。『明暗』にみる態度。

大河小説 人間の成長の歴史を時代の流れに即して包括的にとらえようとする大規模な小説。マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』など。

第二芸術論 雑誌『世界』の昭和二一年一一月号に、桑原武夫が「第二芸術―現代俳句について」という論文を載せ、俳句は社会性・芸術性・思想性を欠く前近代的な第二流の芸術と評した論。

耽美派 明治四二年ころから反自然主義文芸として出現、美に最高の価値を与え、官能による美的享楽を理想とする流派。活躍の場は『スバル』『三田文学』『(第二次)新思潮』『パンの会』などで、代表作家は谷崎潤一郎と永井荷風である。

短編小説 四〇〇字詰の原稿用紙で一〇〇枚ぐらいまでを短編、一二〇～二五〇枚程度を中編、三〇〇枚以上のものを長編とするが厳密な区別はない。一〇枚以下の短編はコントとか掌編小説とか小品と言って区別する。

中間小説 通俗小説と純文学の中間に位する風俗小説に対して、戦後つけられた日本だけの造語。純文学作家が作品に読物的性質を与えようと、通俗小説のおもしろさを取り入れ適度の品位と文学性を持たせたもの。風俗小説は社会風俗や世相を中心に描いたもの。

追体験 人間を理解するために、相手と同じ体験を自分もしてみること。文芸作品の場合は表現をたどり、登場人物の体験を理解しながらたどること。

テーマ thema(独)主題。文学作品における根本思想・意図。論文などでは要旨という。

低徊趣味 夏目漱石の造語で、現実のわずらわしさをさけ、人生を余裕ある心で眺めようとする態度である。自然主義への反発と俳諧味・禅的倫理観などの関連がみられる。漱石の『草枕』の非人情の境地がこの趣味と一致する。非人情とは道徳や人情を越えた出世間的な美的境地。

比較文学 国際間の文学的関係の歴史を調べる学問。フランスでは実証的方法により、アメリカでは一般文学、世界文学としての文学の対比の方法により、ドイツでは文芸学的な方法により研究が進められている。

風刺文学 一般に知的で嘲笑・非難・攻撃を含む作品を言うが、特に時代・社会の欠陥・不合理を摘発・矯正する目的をもって作られた作品をさす。

伏線 小説や戯曲で、作者の意図を明確に示すための効果として、前半部にその後に起こる事件の暗示を与えたり、クライマックスに対応するサスペンスとしての前ぶれが設定されること。

プロット plot(英)筋・構想。劇や小説などの骨組みで、作者の意図のもとに進行する一連の出来事や行動からなる。プロットが因果関係に基づいて配列された出来事の物語であるのに対して、ストーリーは時間の順に配列された出来事の物語である。

プロレタリア文学 プロレタリアートの立場に立って、その階級的要求を主張する文学。大正期の『種蒔く人』の創刊に始まり、以後『文芸戦線』『戦旗』の創刊に及んで小林多喜二・葉山嘉樹らが登場。その後政治的弾圧を受けて壊滅したが、戦後、民主主義文学に受け継がれた。

プロローグ prologue(英)序詞、前口上。劇の開演にあたって劇の成立事情や上演の意図など導入的な口上を述べることば。作品では冒頭の部分。↔エピローグ(epilogue)結語、納め口上。

没理想論争 明治二四年、坪内逍遙と森鷗外との間で行われた現実主義と理想主義の対立を示す大論争。逍遙がシェイクスピアの作品に関して、「理想の見えざるところ(=没理想)」に偉大さがあり、理想をもって評釈するのは不要であるとしたのに対して、鷗外は理想なくして文芸なしと対立した。

ホトトギス派 明治三〇年に正岡子規の主宰で創刊され、高浜虚子に受けつがれた俳句雑誌『ホトトギス』による一派。客観写生を根本とし花鳥諷詠を方針とする。

本格小説 大正一三年に中村武羅夫が、トルストイの『アンナ・カレニナ』のように作者がかげにかくれ人間や社会を描く三人称小説こそ本格小説であり、心境小説・私小説は小説として欠陥があるとした。↔私小説・心境小説。

明星派 明治三三年に与謝野鉄幹主宰で創刊された詩歌雑誌『明星』による派。

モティーフ motif(仏)音楽・文学作品のテーマ・題材。創作のきっかけをなす動機の意もある。

私小説 作者自身を主人公とし、その日常生活における体験を文学的に追求する日本独自の小説形態で、破滅型を狭義の私小説、調和型を心境小説ともいう。葛西善蔵『子をつれて』は前者、志賀直哉『城の崎にて』は後者の例。

主要文芸用語50選

アイロニー irony(英) 皮肉。反語。ことばの表面の意味にかくれて、逆のことを対照的にほのめかす表現法。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』におけるアントニオのシーザー追悼演説などが有名。

アフォリズム aphorism（英） 警句。格言。ある原理や教訓の簡潔な表現。ギリシヤの名医ヒポクラテスによって用いられたという「芸術は長く、人生は短し」など。芥川龍之介の『侏儒の言葉』も有名。

アララギ派 短歌結社。正岡子規の没後、根岸短歌会の伊藤左千夫が明治四一年に発刊した雑誌『アララギ』による一派。大正中期以後現在に至るまで歌壇の中心。万葉調写生短歌を主張し、島木赤彦の鍛錬道の提唱や斎藤茂吉の実相観入説は注目される。

一元描写 田山花袋の平面描写論に反対し、岩野泡鳴が唱えた描写論。多元的視点に立つべきでなく、一主要人物に作者の主観を移入し、その人物の目を通して観察描写し、内部から一元的に統一する。↔平面描写

イメージ image(英) 映像・心象・形象。作品や描写が人の心にひきおこす直観的な表象をいう。本来視覚的なものだが、聴覚・嗅覚・触覚・味覚的イメージもあり得る。

印象批評 作品に対する自己の印象をもとにした批評。イギリスのウォルター＝ペイターやオスカー＝ワイルドらによって確立。わが国では小林秀雄の批評が印象批評として有名。↔裁断批評

SF science fiction(英)空想科学小説。今日ではSFの略称で呼ぶ。フランスのヴェルヌ『海底二万マイル』やイギリスのウェルズ『タイムマシン』などが本格的なSFの初め。日本では昭和三四年『SFマガジン』発刊後、星新一、小松左京らを中心に広まる。

エッセイ essai(仏) 随感・随想・随筆。フランスの思想家モンテーニュの随想録が初め。随筆はエッセイを含むが、エッセイのほうが思索的。評論ほど体系的な論理や客観性を持たない。

カタルシス katharsis(ギ) 浄化。悲劇の効果についてのアリストテレスの説。悲劇を見ることにより、抑圧されたあわれみと恐怖の念を解放し、浄化された快感を覚えること。

勧善懲悪 善をすすめ悪をこらす意で、仏教の因果応報思想や儒教的思想に基づく教訓性を中心とした「善人さかえ悪人ほろぶ」型の小説。江戸時代の読本や草双紙に見られる道徳観。

観念小説 作者の抱いているある観念を作品中に明白に出した小説。明治二八、九年ごろの泉鏡花の『夜行巡査』、川上眉山の『書記官』など。現代文学では写実小説と対立する埴谷雄高、安部公房らの存在論的小説などをいう。

教養小説 一人の青年の成長を描いた小説のことで、発展小説ともいう。ドイツで発達し、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』、日本では芹沢光治良の『人間の運命』などが有名。

虚構 fiction(英) 事実でないことを事実らしく仕組んで真実を表現すること。小説や物語を総称的にフィクションという。これに対し、歴史的記述や記録はノン・フィクションという。

記録文学 documentary(英) 現実に起こった事を忠実に記録した文学。日記・手記・記録・報告・旅行記・探検記などフランス語のルポルタージュに総括される類。＝ノン・フィクション。

クライマックス climax (英) 最高潮。漸層法。一般的には演劇・映画・小説・音楽などの最高潮の場面、やま場をいうが、修辞等ではしだいに盛りあげていく構成法をいう。

言文一致 近代口語文体形成のための主張や運動を指していうとともにその文体をもいう。二葉亭四迷の「だ」調、山田美妙の「です」調、尾崎紅葉の「である」調を経て、自然主義文学運動により確立。

硯友社 明治一八年、尾崎紅葉が山田美妙らと創立した文学結社で、機関紙『我楽多文庫』を刊行した。西鶴などの文体を復活させ、明治前期の写実文学を確立した。

コント conte(仏) 短編小説の一種。ウイットとユーモアをもって知的にまとめられた人生批評の味のあるもの。川端康成の『掌の小説』のような掌編小説や、英語のショート・ショート・ストーリーもこの一種。

裁断批評 一定の評価基準によって作品を判断する批評のしかた。近代以前ではアリストテレスの『詩学』が最高の規範。↔印象批評

サスペンス suspense(英) 宙ぶらりんの不安な状態。映画・小説の筋の展開において、持続的な不安をもって観客・読者をひきつける手法をいう。

社会小説 明治二八年ごろ、田岡嶺雲の主張が動機で主題を社会問題に置いた小説が書かれた。内田魯庵の『暮の二十八日』などプロレタリア文学の先駆的作品をいう。また同じ日清戦争後の社会変動を背景にして悲惨深刻な人間図を描いたものが深刻小説である。

ジャンル genre(仏) 様式。類型。形式内容によって特色づけられた芸術的構成の型や種類。小説・詩・劇・随筆などは文学のジャンルである。

純粋小説 横光利一が『純粋小説論』で〈純文学にして通俗小説〉を提唱し、偶然性の重視、第四人称の手法を主張した。ジイドの影響を受け、純文学と通俗文学との止揚をはかったもの。

純文学 大衆文学(通俗小説)が読者の慰安を目的として興味本位に書かれるのに対して、作者の芸術的感興のおもむくままに書かれた小説をいう。↓私小説・心境小説

白樺派 明治四三年に結成された文学集団で、雑誌『白樺』を刊行した。同人は学習院出身の武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らで、文学的には反自然主義の立場に立ち、思想的には個人主義・自由主義から人道主義へと発展した。大正期の文学の一中心をなした。

などがある。

【俳句】

飯田蛇笏 明治一八年(一八八五)〜昭和三七年(一九六二)。俳人。山梨県出身。ホトトギス派の中心俳人。作品に『山廬集』(昭 七)、『山響集』(昭一五)、『椿花集』(昭四一)などがある。

石田波郷 大正二年(一九一三)〜 俳人。愛媛県出身。人間探求派の俳人。作品に『鶴の眼』(昭一四)、『雨覆』(昭二三)、『借命』(昭二五)、『春嵐』(昭三二)、『酒中花』(昭四三)などがある。

荻原井泉水 明治一七年(一八八四)〜 俳人。東京都出身。新傾向俳句運動に参加、後に無季自由律を提唱。作品に『湧出るもの』(大 九)、『流転しつつ』(大一三)、『梵行品』(昭 七)、『千里行』(昭二一)、『長流』(昭二九)などがある。

加藤楸邨 明治三八年(一九〇五)〜 俳人。東京都出身。人間探求派の俳人。多くの門人を輩出させた。作品に『寒雷』(昭一四)、『颱風眼』(昭一五)、『沙漠の鶴』『野哭』(昭二三)、『山脈』(昭三〇)などがある。

中村草田男 明治三四年(一九〇一)〜 俳人。中国の福建省に生まれる。人間探求派の俳人。近代的自我を表現した。作品に『長子』(昭一一)、『火の鳥』(昭一四)、『万緑』(昭一六)、『銀河依然』(昭二八)、『母郷行』(昭三一)などがある。

日野草城 明治三四年(一九〇一)〜昭和三一年(一九五六)。俳人。東京都出身。新興俳句運動の推進者。作品に『花氷』(昭 二)、『青芝』(昭 七)、『転轍手』(昭一三)、『人生の午后』(昭二八)、『銀』(昭三一)などがある。

水原秋桜子 明治二五年(一八九二)〜 俳人。東京都出身。ホトトギス派の代表的俳人であったが、その平板さにあきたらず新興俳句運動に身を投じた。作品に『葛飾』(昭 五)、『秋苑』(昭一〇)、『古鏡』(昭一七)、『残鐘』(昭二七)、『晩華』(昭三九)などがある。

山口誓子 明治三四年(一九〇一)〜 俳人。京都府出身。新鮮な感覚と力強い描写力を持ったホトトギス派の俳人。作品に『炎昼』(昭一三)、『七曜』(昭一七)、『激浪』(昭一九)、『晩刻』(昭二二)、『和服』(昭三〇)などがある。

【評論・随筆】

江藤淳 昭和八年(一九三三)〜 評論家。東京都出身。著書に『作家は行動する』(昭三四)、『小林秀雄』(昭三四―三六)、『アメリカと私』(昭三九)、『成熟と喪失』(昭四一―四二)、『漱石とその時代』(昭四五)などがある。

加藤周一 大正八年(一九一九)〜 評論家・小説家。東京都出身。小説に『ある晴れた日に』(昭二五)、評論に『1946 文学的考察』(昭二二)、『雑種文化』(昭三一)、『文学と現実』(昭二三)、『言葉と人間』(昭五二)などがある。

亀井勝一郎 明治四〇年(一九〇七)〜昭和四一年(一九六六)。評論家。北海道出身。著書に『転形期の文学』(昭 九)、『大和古寺風物誌』(昭一八)、『現代人の研究』(昭二五)、『日本人の精神史研究』(昭三四―四一)などがある。

唐木順三 明治三七年(一九〇四)〜昭和五五年(一九八〇)。評論家。長野県出身。著書に『鷗外の精神』(昭一八)、『現代史への試み』(昭二四)、『中世の文学』(昭三〇)、『無用者の系譜』(昭三五)、『無常』(昭三九)などがある。

寺田寅彦 明治一一年(一八七八)〜昭和一〇年(一九三五)。物理学者・随筆家。東京都出身。著書に『冬彦集』『藪柑子集』(大一三)、『万華鏡』(昭 四)などがある。

中村光夫 明治四四年(一九一一)〜 評論家・劇作家・小説家。東京都出身。評論に『二葉亭四迷論』(昭一一)、『近代への疑惑』(昭二三)、『風俗小説論』(昭二五)、『志賀直哉論』(昭二九)、戯曲に『パリ繁昌記』(昭三四)、『汽笛一声』(昭三九)、小説に『わが性の白書』(昭三八)などがある。

平野謙 明治四〇年(一九〇七)〜昭和五三年(一九七八)。評論家。京都府出身。著書に『島崎藤村』(昭二二)、『政治と文学の間』(昭二二)、『芸術と実生活』(昭三三)、『昭和文学史』(昭三四)などがある。

柳田国男 明治八年(一八七五)〜昭和三七年(一九六二)。民俗学者・詩人。兵庫県出身。詩集に『抒情詩』(明三〇)、『山高水長』(明三二)、著書に『遠野物語』(明四三)、『山の人生』(大一五)、『雪国の春』(昭 三)、『木綿以前の事』(昭一四)、『不幸なる芸術』(昭二八)などがある。

【戯曲】

小山内薫 明治一四年(一八八一)〜昭和三年(一九二八)。劇作家・演出家・小説家。広島県出身。戯曲に『息子』(大一一)、『西山物語』(大一三)、『奈落』(大一五)、小説に『大川端』(明四一―大元)などがある。

岸田国士 明治二三年(一八九〇)〜昭和二九年(一九五四)。劇作家・小説家。東京都出身。戯曲に『チロルの秋』(大一三)、『紙風船』(大一四)、『牛山ホテル』(昭 四)、『歳月』(昭一〇)、小説に『暖流』(昭一三)などがある。

木下順二 大正三年(一九一四)〜 劇作家。東京都出身。作品に『風浪』(昭一四)、『夕鶴』(昭二四)、『蛙昇天』(昭二六)、『オットーと呼ばれる日本人』(昭三七)、『冬の時代』(昭三九)などがある。

久保栄 明治三四年(一九〇一)〜昭和三三年(一九五八)。劇作家・演出家・小説家。北海道出身。戯曲に『五稜郭血書』(昭八)、『火山灰地』(昭一二―一三)、『日本の気象』(昭二八)、小説に『のぼり窯』(昭二六)などがある。

倉田百三 明治二四年(一八九一)〜昭和一八年(一九四三)。劇作家・評論家。広島県出身。戯曲に『出家とその弟子』(大五―六)、『布施太子之入山』(大一〇)、『父の心配』(大一一)、評論に『愛と認識との出発』(大一〇)、などがある

三好十郎 明治三五年(一九〇二)〜昭和三三年(一九五八)。劇作家・詩人 佐賀県出身。作品に『鳥を切るのは誰だ』『疵だらけのお秋』(昭 三)、『浮標』(昭一五)、『炎の人』(昭二六)などがある。

森本薫 明治四五年(一九一二)〜昭和二一年(一九四六)。劇作家。大阪府出身。作品に『華々しき一族』(昭一〇)、『怒濤』(昭一九)、『女の一生』(昭二〇)などがある。

四二)などがある。

北原白秋 明治一八年(一八八五)～昭和一七年(一九四二)。詩人・歌人。福岡県出身。耽美派の代表的詩人。異国情緒と官能美が特色。詩集に『邪宗門』(明四二)、『思ひ出』(明四四)、歌集に『桐の花』(大二)、『白南風』(昭九)などがある。

草野心平 明治三六年(一九〇三)～ 詩人。福島県出身。『歴程』同人。アナーキズム系詩人。作品に『第百階級』(昭三)、『母岩』(昭一二)、『富士山』(昭一八)、『蛙』(昭二三)などがある。

立原道造 大正三年(一九一四)～昭和一四年(一九三九)。詩人。東京都出身。四季派の詩人。ソネット形式の繊細な叙情詩を残し夭折した。作品に『萱草に寄す』『暁と夕の詩』(昭一二)、『優しき歌』(昭二二)がある。

土井晩翠 明治四年(一八七一)～昭和二七年(一九五二)。詩人・英文学者。宮城県出身。浪漫派詩人。詩集に『天地有情』(明三二)、『暁鐘』(明三四)、翻訳に『イーリアス』(昭一五)、『オデュッセーア』(昭一八)などがある。

中原中也 明治四〇年(一九〇七)～昭和一二年(一九三七)。詩人。山口県出身。四季派の詩人。青春の歌ともいうべき詩風は若者の心を揺さぶってやまない。作品に『山羊の歌』(昭九)、『在りし日の歌』(昭一三)がある。

西脇順三郎 明治二七年(一八九四)～ 詩人・英文学者。新潟県出身。『詩と詩論』における批評活動により、シュールレアリスム詩の推進者となった。詩集に『Ambarvalia』(昭八)、『旅人かへらず』(昭二二)、『第三の神話』(昭三一)、評論に『超現実主義詩論』(昭四)、『シュルレアリスム文学論』(昭五)などがある。

堀口大学 明治二五年(一八九二)～ 詩人・翻訳家。東京都出身。フランスのシュールレアリスム詩紹介の第一人者。訳詩集に『月下の一群』(大一四)、創作詩集に『月光とピエロ』(大八)、『砂の枕』(大一五)、『人間の歌』(昭二二)などがある。

宮沢賢治 明治二九年(一八九六)～昭和八年(一九三三)。詩人・童話作家。岩手県出身。農村生活に目を向けた独創的詩人。詩集に『春と修羅』(大一三)、童話に『よだかの星』(大一〇頃)、『グスコーブドリの伝記』(昭七)、『銀河鉄道の夜』(昭二頃)などがある。

三好達治 明治三三年(一九〇〇)～昭和三九年(一九六四)。詩人。大阪府出身。昭和期の第一級詩人。知的で甘美な叙情詩風が特色。作品に『測量船』(昭五)、『南窗集』(昭七)、『艸千里』(昭一四)、『一点鐘』(昭一六)、『駱駝の瘤にまたがって』(昭二七)などがある。

村野四郎 明治三四年(一九〇一)～昭和五〇年(一九七五)。詩人。東京都出身。ドイツの新即物主義運動の影響を受けた。作品に『体操詩集』(昭一四)、『亡羊記』(昭三四)、『蒼白な紀行』(昭三八)などがある。

室生犀星 明治二二年(一八八九)～昭和三七年(一九六二)。詩人・小説家。石川県出身。『感情』を創刊し感情派として出発した詩人。多くの小説も発表した。詩集に『愛の詩集』『抒情小曲集』(大七)、小説に『性に眼覚める頃』(大八)、『あにいもうと』(昭九)、『杏っ子』(昭三二)などがある。

【短歌】

伊藤左千夫 元治元年(一八六四)～大正二年(一九一三)。歌人・小説家。千葉県出身。子規門下でアララギ派の歌人。歌集に『左千夫歌集』(大九)、小説に『野菊の墓』(明三九)などがある。

落合直文 文久元年(一八六一)～明治三六年(一九〇三)。歌人・国文学者。宮城県出身。浅香社を結成、和歌革新運動の推進者。作品に『萩之家遺稿』(明三七)、『萩之家歌集』(明三九)、『落合直文集』(昭二)などがある。

尾上柴舟 明治九年(一八七六)～昭和三一年(一九五七)。歌人・国文学者。岡山県出身。浅香社に参加、明治から昭和にかけ歌壇に大きく貢献した。作品に『静夜』(明四〇)、『永日』(明四二)、『白き路』(大三)などがある。

金子薫園 明治九年(一八七六)～昭和二六年(一九五一)。歌人。東京都出身。和歌革新運動に加わり、後に叙景詩運動を起こした。作品に『片われ月』(明三四)、『伶人』(明四〇)、『山河』(明四四)、『白鷺集』(昭一三)などがある。

木下利玄 明治一九年(一八八六)～大正一四年(一九二五)。歌人。岡山県出身。『白樺』同人。大正歌壇の代表的歌人。作品に『銀』(大三)、『紅玉』(大八)、『一路』(大一三)、『立春』(大一四)などがある。

佐佐木信綱 明治五年(一八七二)～昭和三八年(一九六三)。歌人・国文学者。三重県出身。和歌革新の一翼をになった歌人。歌学研究・門人養成にも力を注いだ。歌集に『思草』(明三六)、『遊清吟藻』(昭五)、『常盤木』(大一一)、『豊旗雲』(昭四)、研究書に、『歌学論叢』(明四一)、『日本歌学史』(明四三)、『和歌史の研究』(大四)、ほかに『万葉集』の研究がある。

島木赤彦 明治九年(一八七六)～大正一五年(一九二六)。歌人。長野県出身。大正初期から昭和にかけてのアララギ派の中心的歌人。歌集に『馬鈴薯の花』(大二)、『太虚集』(大一三)、『柹蔭集』(大一五)、歌論に『歌道小見』(大一三)などがある。

釈迢空 明治二〇年(一八八七)～昭和二八年(一九五三)。歌人・詩人・民俗学者・国文学者。大阪府出身。アララギ派から出発したが巨視的な立場に立った詩歌の歴史的洞察などで異色。歌集に『海やまのあひだ』(大一四)、『春のことぶれ』(昭五)、『遠やまひこ』(昭二三)、研究書に『古代研究』(昭四―五)、詩集に『古代感愛集』(昭二二)、小説に『死者の書』(昭一四)などがある。

長塚節 明治一二年(一八七九)～大正四年(一九一五)。歌人・小説家。茨城県出身。子規門下で客観的写生歌が特徴。作品に『鍼の如く』(大三)、小説に『土』(明四三)などがある。

若山牧水 明治一八年(一八八五)～昭和三年(一九二八)。歌人。宮崎県出身。柴舟門下で自然主義的傾向にあった。作品に『海の声』(明四一)、『別離』(明四三)、『死か芸術か』(大元)、『山桜の歌』(大一二)

に『当世書生気質』(明一八―一九)、戯曲に『桐一葉』(明二七―二八)、『牧の方』(明二九)、『役の行者』(大六)文学論として『小説神髄』などがある。

徳田秋声 明治四年(一八七一)～昭和一八年(一九四三)。小説家。石川県出身。自然主義の代表的作家。日本的私小説の一典型をなした。作品に『黴』(明四四)、『爛』(大二)、『あらくれ』(大四)、『仮装人物』(昭一〇―一三)、『縮図』(昭一六)などがある。

徳永直 明治三二年(一八九九)～昭和三三年(一九五八)。小説家・熊本県出身。ナップ時代のプロレタリア文学の代表的作家。作品に『太陽のない街』(昭四)、『妻よねむれ』(昭二一―二三)などがある。

永井荷風 明治一二年(一八七九)～昭和三四年(一九五九)。小説家・随筆家。東京都出身。耽美主義の代表的作家。小説に『ふらんす物語』『狐』(明四二)、『腕くらべ』(大五―六)、『濹東綺譚』(昭一二)、日記として『断腸亭日乗』(昭二二)などがある。

永井龍男 明治三七年(一九〇四)～ 小説家。東京都出身。都会的な感覚を持った短編小説の名手として知られる。作品に『黒い御飯』(大一二)、『胡桃割り』(昭二三)、『風ふたたび』(昭二六)などがある。

中野重治 明治三五年(一九〇二)～昭和五四年(一九七九)。小説家・詩人・評論家。福井県出身。プロレタリア文学の代表的詩人・作家。小説に『春さきの風』(昭三)、『村の家』(昭一〇)、『歌のわかれ』(昭一四)、『むらぎも』(昭二九)、詩集に『中野重治詩集』(昭一〇)などがある。

野間宏 大正四年(一九一五)～ 小説家。兵庫県出身。第一次戦後派の一人。本格小説作家として知られる。作品に『暗い絵』(昭二一)、『青年の環』(未完)、『真空地帯』(昭二七)、『さいころの空』(昭三三―三四)などがある。

埴谷雄高 明治四三年(一九一〇)～ 小説家・評論家。台湾生まれだが本籍は福島県。形而上的資質と詩的イメージを持ち特異な位置を占める。小説に『虚空』(昭三五)、『闇の中の黒い馬』(昭三八―四五)、『死霊・一～五章』、(昭二一―五〇)、評論集に『濠渠と風車』(昭三二)、『ドストエフスキー』(昭四〇)などがある。

林芙美子 明治三六年(一九〇三)～昭和二六年(一九五一)。小説家。山口県出身。昭和一〇年代に活躍した作家の一人。作品に『放浪記』(昭三)、『晩菊』(昭二三)、『浮雲』(昭二四―二五)などがある。

樋口一葉 明治五年(一八七二)～明治二九年(一八九六)。小説家・歌人。東京都出身。『文学界』同人と親しかったが、自身はみごとな写実性が特色。作品に『にごりえ』『十三夜』(明二八)、『たけくらべ』(明二八―二九)などがある。

二葉亭四迷 文久四年(一八六四)～明治四二年(一九〇九)。小説家・翻訳家。近代小説理論および言文一致文体の先駆者。小説に『浮雲』(明二〇―明二二)、『其面影』(明三九)、『平凡』(明四〇)、翻訳小説に『あひびき』(明二一)、文学論として『小説総論』(明一九)などがある。

堀田善衛 大正七年(一九一八)～ 小説家。富山県出身。第二次戦後派の代表的作家。作品に『広場の孤独』(昭二六)、『歴史』(昭二七)、『時間』(昭二八)、『海鳴りの底から』(昭三五―三六)などがある。

正宗白鳥 明治一二年(一八七九)～昭和三七年(一九六二)。小説家・劇作家・評論家。岡山県出身。自然主義の代表的作家。鋭い批評眼を持ち、評論家としても活躍。小説に『何処へ』(明四一)、『微光』(明四三)、『入江のほとり』(大四)、戯曲に『人生の幸福』(大一三)、評論に『作家論』(昭一六―一七)などがある。

宮本百合子 明治三二年(一八九九)～昭和二六年(一九五一)。小説家。東京都出身。昭和初期のプロレタリア文学の代表的作家。作品に『貧しき人々の群』(大五)、『伸子』(大一三―一五)、『播州平野』(昭二一)などがある。

武者小路実篤 明治一八年(一八八五)～昭和五一年(一九七六)。小説家・劇作家。東京都出身。白樺派の主導的作家。小説に『お目出たき人』(明四三)、『幸福者』『友情』(大八)、『真理先生』(昭二四―二五)、戯曲に『人間万歳』(大一一)、『愛欲』(大一五)などがある。

安岡章太郎 大正九年(一九二〇)～ 小説家。高知県出身。「第三の新人」の中心的作家。作品に『ガラスの靴』(昭二六)、『悪い仲間』(昭二八)、『遁走』(昭三一)、『海辺の光景』(昭三四)、『アメリカ感情旅行』(昭三七)などがある。

吉行淳之介 大正一三年(一九二四)～ 小説家。岡山県出身。「第三の新人」の一人。作品に『驟雨』(昭二九)、『原色の街』(昭二六)、『娼婦の部屋』(昭三三)、『砂の上の植物群』(昭三八)、『不意の出来事』(昭四〇)などがある。

【詩】

伊東静雄 明治三九年(一九〇六)～昭和二八年(一九五三)。詩人。長崎県出身。昭和一〇年代の四季派の詩人。『日本浪曼派』同人。作品に『わがひとに与ふる哀歌』(昭一〇)、『夏花』(昭一五)、『春のいそぎ』(昭一八)などがある。

上田敏 明治七年(一八七四)～大正五年(一九一六)。詩人・評論家・英文学者。東京都出身。西欧の象徴詩を紹介し、わが国の近代詩の確立に大きな影響を与えた。作品に訳詩集『海潮音』(明三八)、『牧羊神』(大九)、評論に『文芸論集』(明三四)などがある。

小野十三郎 明治三六年(一九〇三)～ 詩人。大阪府出身。批評的立場から現代詩の発展に大きな役割を果たした詩人。詩集に『半分開いた窓』(大一五)、『大阪』(昭一四)、『風景詩抄』(昭一八)、『重油富士』(昭三一)、評論に『詩論』(昭二二)などがある。

金子光晴 明治二八年(一八九五)～昭和五〇年(一九七五)。詩人。愛知県出身。戦時中から戦後にかけて反戦姿勢を貫いた。作品に『こがね虫』(大一二)、『落下傘』(昭二三)、『鬼の児の唄』(昭二四)、『蛾』(昭二三)、『人間の悲劇』(昭二七)などがある。

蒲原有明 明治九年(一八七六)～昭和二七年(一九五二)。詩人。東京都出身。明治三〇年代の象徴詩運動の第一人者。作品に『草わかば』(明三五)、『独絃哀歌』(明三六)、『春鳥集』(明三八)、『有明集』(明

主要文学者解説

【小説】

阿川弘之　大正九年（一九二〇）～　小説家。広島県出身。「第三の新人」の一人。学徒兵の体験をもとに描いた戦争文学で知られる。小説に『春の城』（昭二七）、『雲の墓標』（昭三〇）、『あひる飛びなさい』（昭三七―三八）、『山本五十六』（昭三九―四〇）、紀行文に『ヨーロッパ特急』（昭二八）などがある。

有島武郎　明治一一年（一八七八）～大正一二年（一九二三）。小説家。東京都出身。白樺派の代表的作家。作品に『カインの末裔』（大　六）、『小さき者へ』『生れ出づる悩み』（大　七）、『或る女』（大　八）、『惜みなく愛は奪ふ』（大　六）などがある。

有吉佐和子　昭和六年（一九三一）～　小説家。和歌山県出身。歴史小説、社会的問題小説など意欲作が多い。作品に『地唄』（昭三一）、『紀ノ川』（昭三四）、『香華』（昭三六―三七）、『華岡青洲の妻』（昭四一）、『恍惚の人』（昭四七）などがある。

石川達三　明治三八年（一九〇五）～　小説家。秋田県出身。社会的な問題意識を持つ風俗小説を書いて特異。作品に『蒼氓』（昭一〇）、『生きてゐる兵隊』『結婚の生態』（昭一三）、『四十八歳の抵抗』（昭三〇―三一）、『人間の壁』（昭三二―三四）などがある。

泉鏡花　明治六年（一八七三）～昭和一四年（一九三九）。小説家。石川県出身。浪漫的幻想的傾向を持つ観念小説家。作品に『夜行巡査』（明二八）、『照葉狂言』（明二九）、『高野聖』（明三三）、『婦系図』（明四〇）、『歌行燈』（明四三）などがある。

伊藤整　明治三八年（一九〇五）～昭和四四年（一九六九）。小説家・評論家。北海道出身。新心理主義の代表的作家。小説に『鳴海仙吉』（昭二一―二三）、『火の鳥』（昭二四―二八）、評論に『小説の方法』（昭二三）などがある。

梅崎春生　大正四年（一九一五）～昭和四〇年（一九六五）。小説家。福岡県出身。第一次戦後派の一人。作品に『風宴』（昭一四）、『桜島』（昭二一）、『日の果て』（昭二二）、『幻化』（昭四〇）などがある。

大岡昇平　明治四二年（一九〇九）～　小説家。東京都出身。第一次戦後派の一人。作品に『俘虜記』（昭二三）、『武蔵野夫人』（昭二五）、『野火』（昭二六）、『花影』（昭三三―三四）、『事件』（昭五二）などがある。

尾崎紅葉　慶応三年（一八六七）～明治三六年（一九〇三）。小説家。東京都出身。硯友社創設者。西鶴の影響を受けた雅俗折衷文体の小説で知られる。作品に『二人比丘尼色懺悔』（明二二）、『伽羅枕』（明二三）、『三人妻』（明二五）、『多情多恨』（明二九）、『金色夜叉』などがある。

梶井基次郎　明治三四年（一九〇一）～昭和七年（一九三二）。小説家。大阪府出身。昭和初期の新興芸術派の一人。鋭敏で強烈な感受性が特徴。作品に『檸檬』『城のある町にて』（大一四）、『冬の蠅』『桜の樹の下には』（昭　三）、『闇の絵巻』（昭　五）などがある。

菊池寛　明治二一年（一八八八）～昭和二三年（一九四八）。小説家・劇作家。香川県出身。通俗小説家として「文壇の大御所」と言われ、芥川賞・直木賞を創設、多くの新人を育成した。小説に『無名作家の日記』『忠直卿行状記』（大　七）、『恩讐の彼方に』（大　八）、『真珠夫人』（大　九）、戯曲に『父帰る』（大　六）、などがある。

国木田独歩　明治四年（一八七一）～明治四一年（一九〇八）。小説家・詩人。千葉県出身。浪漫主義作家として出発、後に自然主義的傾向を見せた。小説に『源叔父』（明三〇）、『武蔵野』『牛肉と馬鈴薯』（明三四）、『運命論者』（明三五）、詩に『独歩吟』（花袋らとの合著『抒情詩』に発表―明三〇）などがある。

幸田露伴　慶応三年（一八六七）～昭和二二年（一九四七）。小説家。東京都出身。擬古典派の代表。理想主義的傾向が強い。作品に『風流仏』（明二二）、『五重塔』（明二四）、『風流微塵蔵』（明二六）、『運命』（大　八）、『連環記』（昭一五）などがある。

小林多喜二　明治三六年（一九〇三）～昭和八年（一九三三）。小説家。秋田県出身。プロレタリア文学運動の指導的立場にあった作家。作品に『蟹工船』（昭　四）、『党生活者』（昭　八）などがある。

佐藤春夫　明治二五年（一八九二）～昭和三九年（一九六四）。小説家・詩人。和歌山県出身。耽美主義作家の一人。小説に『田園の憂鬱』（大　六）、『都会の憂鬱』（大一一）、『晶子曼陀羅』（昭二九）、詩集に『殉情詩集』（大一〇）、評論に『近代日本文学の展望』（昭二五）などがある。

椎名麟三　明治四四年（一九一一）～昭和四八年（一九七三）。小説家。兵庫県出身。戦後派作家の代表。作品に『深夜の酒宴』『重き流れのなかに』（昭二二）、『永遠なる序章』（昭二三）、『自由の彼方で』（昭二八―二九）、『美しい女』（昭三〇）などがある。

島尾敏雄　大正六年（一九一七）～　小説家。神奈川県出身。人間の潜在意識を探る独特な手法を用い、前衛的作家として知られる。作品に『出孤島記』（昭二四）、『夢の中での日常』（昭二三）、『死の棘』（昭三五）、『出発は遂に訪れず』『島へ』（昭三七）などがある。

庄野潤三　大正一〇年（一九二一）～　小説家。大阪府出身。「第三の新人」の一人。作品に『プールサイド小景』（昭二九）、『ガンビア滞在記』（昭三四）、『静物』（昭三五）、『浮き燈台』（昭三六）、『旅人の喜び』（昭三八）などがある。

武田泰淳　明治四五年（一九一二）～昭和五一年（一九七六）。小説家。東京都出身。戦後派作家の代表。作品に『司馬遷』（昭一八）、『蝮のすゑ』（昭二二）、『風媒花』（昭二七）、『ひかりごけ』（昭二九）、『森と湖のまつり』（昭三〇）などがある。

田山花袋　明治四年（一八七一）～昭和五年（一九三〇）。小説家。群馬県出身。自然主義の代表的作家。小説に『蒲団』（明四〇）、『生』（明四一）、『田舎教師』（明四二）、『時は過ぎ行く』（大　五）、『百夜』（昭　二）、随筆集に『東京の三十年』（大　六）などがある。

坪内逍遙　安政六年（一八五九）～昭和一〇年（一九三五）。小説家・劇作家・評論家・翻訳家。小説の写実主義の提唱者。小説

▲伊藤左千夫

▲『馬酔木』創刊号

▲島木赤彦

▲佐佐木信綱

▲北原白秋

▲若山牧水
▲与謝野鉄幹
▲『NAKIWARAI』表紙

■近現代俳人系譜
《日本派》
明治20年代〜30年代
正岡子規（ホトトギス・明30）
・客観的詠法
・写実主義
（「秋声会」系）
明28年
角田竹冷
尾崎紅葉
伊藤松宇
岡野知十
巌谷小波
川村黄雨
（「筑波会」系）
明27年
大野洒竹
佐々醒雪
笹川臨風
田岡嶺雲
大町桂月
沼波瓊音
内藤鳴雪
青木月斗（同人・大9）
松瀬青々（倦鳥・大4）
石井露月（俳星・明33）
松根東洋城（渋柿・大4）
岡本癖三酔（新緑・大5）
夏目漱石
《新傾向派》
明治40年代
河東碧梧桐（層雲・明44）（海紅・大4）（碧・大12）（三昧・大14）
・無中心論
・自然主義俳句
《定型律派》
大正2年ごろ
高浜虚子（ホトトギス・明31）
・客観写生
・花鳥諷詠
高浜年尾（ホトトギス・昭26継）
川端茅舎（華厳・昭14）
飯田蛇笏（雲母・大4）
前田普羅（辛夷・大13）
原石鼎（鹿火屋・大10）
渡辺水巴（曲水・大5）
村上鬼城
臼田亜浪（石楠・大4）
《新興俳句運動》
昭和初期〜
日野草城（旗艦・昭10）
水原秋桜子（馬酔木・昭3）
山口誓子（天狼・昭23）
杉田久女（花衣・昭7）
中村汀女（風花・昭24）
星野立子（玉藻・昭5）
高野素十（芹・昭28）
松本たかし
山口青邨（夏草・昭5）
富安風生（若葉・昭3）
阿波野青畝（かつらぎ・昭4）
大須賀乙字
《自由律派》
大正2年ごろ
荻原井泉水（層雲・明44）
中塚一碧楼（海紅・大4）
・季題無用論
・自由表現論
《プロレタリア俳句運動》
昭和5〜7年
栗林一石路（俳句生活・昭9）
小沢武二（旗・昭5）
橋本夢道（俳句生活・昭9）
尾崎放哉
種田山頭火
篠田悌二郎（初鴨・昭11）
西東三鬼（断崖・昭27）
平畑静塔（京大俳句・昭8）
橋本多佳子（七曜・昭23）
秋元不死男（氷海・昭24）
《人間探求派》
昭和12・3〜
中村草田男（万緑・昭21）
加藤楸邨（寒雷・昭15）
石田波郷（鶴・昭12）
大野林火（浜・昭21）
金子兜太（海程・昭37）
富沢赤黄男（薔薇・昭27）
楠本憲吉

■近現代詩人系譜
新体詩の発生
『新体詩抄』(明15)
外山正一
井上哲次郎
矢田部良吉
『於母影』(明22)
森鷗外
落合直文
井上通泰
小金井喜美子
浪漫詩風 明20年代～30年代
『文学界』(明26)
北村透谷
島崎藤村
戸川秋骨
馬場孤蝶
上田敏
平田禿木
『帝国文学』(明28)
塩井雨江
武島羽衣
大町桂月
土井晩翠
『文庫』(明28)
河井酔茗
横瀬夜雨
伊良子清白
『抒情詩』(明30)
田山花袋
国木田独歩
宮崎湖処子
『明星』(明33)
与謝野鉄幹
石川啄木
北原白秋
薄田泣菫
木下杢太郎
象徴詩風 明38
上田敏
薄田泣菫
蒲原有明
北原白秋
口語自由詩 明40年代
川路柳虹
相馬御風
耽美派 明末～大
『スバル』(明42)
北原白秋
木下杢太郎
理想主義
千家元麿
山村暮鳥
高村光太郎
室生犀星
民衆詩派
『民衆』(大7)
白鳥省吾
千家元麿
室生犀星
山村暮鳥
理知派 大6～14
萩原朔太郎
日夏耿之介
佐藤春夫
西条八十
堀口大学
宮沢賢治
未来派 大末
平戸廉吉
神原泰
ダダイズム 大末
萩原恭次郎
高橋新吉
岡本潤
アナーキズム 大末
萩原恭次郎
壺井繁治
西沢隆二
プロレタリア詩 昭3～8
伊藤信吉
窪川鶴次郎
西沢隆二
中野重治
壺井繁治
超現実派 昭3～8
『詩と詩論』(昭3)
春山行夫
北川冬彦
安西冬衛
西脇順三郎
吉田一穂
村野四郎
北園克衛
四季派 昭8
『四季』(昭8)
三好達治
丸山薫
中原中也
立原道造
津村信夫
伊東静雄
田中冬二
室生犀星
堀辰雄
神保光太郎
萩原朔太郎
歴程派 昭10
『歴程』(昭10)
高村光太郎
草野心平
小野十三郎
逸見猶吉
山之口貘
中原中也
高橋新吉
金子光晴
戦後詩
『荒地』(昭22)
鮎川信夫
三好豊一郎
田村隆一
黒田三郎
中桐雅夫
北村太郎
吉本隆明
『列島』(昭27)
関根弘
安東次男
木島始
井手則雄
長谷川竜生
『現代詩』(昭29)
壺井繁治
安東次男
金子光晴
伊藤信吉
吉本隆明
荒地
1
歴程

▲『荒地』創刊号

▲『歴程』創刊号

河東碧梧桐

西暦	年号	年	事項
一八七三	明六	1	二月二六日、愛媛県に誕生。
一八八七	二〇	15	伊予尋常中学入学。高浜虚子を知る。
一八九〇	二三	18	子規の添削を受ける。
一八九六	二九	24	『新声』の俳句欄選者。
一九〇六	三九	34	全国旅行第一次開始。『続春夏秋冬』
一九一〇	四三	38	『三千里』
一九一五	大四	43	『新傾向句集』『海紅』創刊。
一九一六	五	44	乙字編『碧梧桐句集』
一九二三	一二	51	『碧』創刊。
一九二五	一四	53	『三昧』創刊。
一九二九	昭四	57	ルビ付句風顕著となる。
一九三三	八	61	還暦祝賀会で俳壇引退表明。
一九三七	一二	65	二月一日没。

子規門下の時代　河東碧梧桐は松山市に父静渓の五男として生まれた。師事した正岡子規は、碧梧桐より六歳年長であるが、静渓の漢学塾へ通っていたこともあって、両者は早くから交渉を持つこととなった。また、伊予尋常中学校で同級となった高浜虚子も碧梧桐を介して子規に結ばれ、ここに後の明治の俳壇を代表することになる三人の交渉が始まった。その後三高に入学した虚子を追って碧梧桐も同校へ進んだが、二人はその後の、二高転学、退学、上京といった過程も共にし、その間の下宿も共にするほどの交遊ぶりであった。その間の生活ぶりは全く無頼のものであったが、その底には、人生への悩みと芸術への意気込みを蔵していたのであった。そうした遊蕩生活のうちにも、子規の導きの下で二人の句作は進み、子規が選者となった新聞『日本』の俳句欄（「日本俳句」）にはその初回から顔を出し、子規門下の新鋭として徐々に認められるに至った。

明治三一年の子規派の選集『新俳句』では、碧梧桐は子規に次ぐ数の句が入集し、新俳句の代表的俳人の地位を固めた。こうして虚子と共に子規門下の双璧と見られるに至った碧梧桐は、明治三五年の子規の死去に伴い、「日本俳句」の選者を受け継ぎ、子規の意図した俳句の革新をさらに強力に推し進めようと努力したのである。

新傾向時代　その後、碧梧桐門下には有力な新人が育ってきたが、明治三九年、碧梧桐は、自派の句を集めて『続春夏秋冬』を編むと共に、俳句の一層の進展を求めて全国旅行に出発した。（ちなみに、碧梧桐はその生涯を通じて旅をしており、一年の大半を旅で送ることもしばしばだった。）この旅中の句の新しさを評価した門人の大須賀乙字は、それを「俳句の新傾向」として論じ、それを口火に新傾向運動が起こることとなった。そして、その新風は急速に俳壇をおおい、碧梧桐派の全盛時代を招来することとなったのである。

そうした中で、明治四二年第二次全国旅行に出発した碧梧桐は、各地の少壮俳人と触れ合い、全国に新風をひろめると共に、逆に彼らの句に触発されて俳句の新しい可能性を見いだしていった。特に岡山県玉島の句会において得た句により、「感じを一点に纏める」ことを句に中心点があると言って評価する従来の作法と異なって、人為的作法を捨てて自然そのものに接近する方法を見いだし、そこからいわゆる「無中心論」を唱えるに至った。

碧梧桐はこのように、若い俳人と共に、自らの前作をも否定するような勢いで前進を続けたが、ここに至って早くもその内部に分裂が生じることとなった。例えば乙字は、「無中心」の句を、雑報的なもので「穿ちを主としない川柳」だと言って非難した。

自由律時代と晩年　碧派分裂の後、碧梧桐は中塚一碧楼らと新たに『海紅』を創刊する。そこでの句風は、平易単純であり、定型にこだわらず口語も認めるようになる。いわゆる自由律俳句が生み出されたのである。その後の個人雑誌『碧』の中では、碧梧桐は自己の俳論の集大成を試みている。その俳論は碧梧桐の求めて来たものを如実に示しているが、その大きな特徴の一つは、彼の問題意識が主として詩想に関して注がれており、俳句という詩形式の独自性の解明にはあまり注意が払われていないという点である。

晩年まで変貌を続けた碧梧桐は、『三昧』においてはルビ句に新しい可能性を認めた。ルビ句とは、ルビ（振仮名）を利用して、詩語とその内容を表す字句を並置し、俳句の表現性を高めようというものである。しかし、次第に碧梧桐自身は自ら認めたこの句法についてゆけないものを感じるようになった。昭和八年、還暦祝いに際して自らを俳句の前線からの落伍者と断じた碧梧桐は、それ以後俳句界から引退するのである。

以上のように、碧梧桐は常に俳句の新しさを求め続け、遂には道に踏み迷ったと言ってもよいのだが、彼の道程は、俳句そのものの否定論までを含んだ俳句の可能性の探求の道だったのである。

□作品解説

三千里　紀行文集。明治三九年八月から四〇年一二月まで東北・北海道・北陸を巡歴した第一次全国旅行の記録で、『一日一信』の題で連載した文章をまとめたもの。巻末に旅中に得た句がまとめられている。新傾向俳句の胚胎が認められる意味で注目すべき紀行文集である。

▲子規句集の編集会議をする碧梧桐と虚子（右）

高浜虚子

西暦	年号	年	事項
一八七四	明七		二月二二日、愛媛県に誕生。
一八八七	二〇	13	河東碧梧桐を知る。
一八九一	二四	17	正岡子規と文通。
一八九二	二五	18	第三高等中学校入学。
一八九八	三一	24	『ホトトギス』編集開始。
一九〇七	四〇	33	『風流懺法』『斑鳩物語』
一九〇八	四一	34	国民新聞入社。『俳諧師』
一九一三	大二	39	俳壇復帰。
一九一五	四	41	「柿二つ」
一九二八	昭三	54	花鳥諷詠、客観写生唱える。
一九三六	一一	62	渡欧。
一九三七	一二	63	『五百句』
一九四七	二二	73	「虹」「愛居」
一九五五	三〇	81	『六百五十句』
一九五九	三四	85	四月八日、脳溢血で死去。

俳人としての出発　高浜虚子は明治・大正・昭和の三代にわたり、俳人・写生文作家として活動した。彼は正岡子規の遺業を継承しながら、同じ子規門下の河東碧梧桐とは別に、伝統的・客観的な写生による作句法を説き、花鳥諷詠詩としての俳句を発展させた。また、雑誌『ホトトギス』の編集者として、夏目漱石の『吾輩は猫である』を世に紹介し、多くのすぐれた俳人を育成した功績もある。

虚子は本名池内清、もと松山藩の武士池内信夫の五男として生まれた。生家は子規の育った家と背中合わせの場所にあった。池内家はその後、風早郡柳原村西ノ下に移り農業を始めたが、幼年期を過ごした西ノ下の美しい風光は、父から教えられた能楽の世界とともに、虚子の感性を豊かにはぐくんでいった。

中学時代、同級の碧梧桐を通じて子規を知ったことは、虚子の生涯を決定することになった。子規と文通を始め、彼に勧められるままに俳句を学んだのである。碧梧桐とはその後、京都の三高、仙台の二高で一緒に学んだが、共に学業に見切りをつけて中退し、明治二七年、上京して子規のもとより俳人として立つようになったのである。明治三一年、虚子は松山の柳原極堂から雑誌『ホトトギス』を譲り受け、東京での発行を始めた。その東京版第一号には、虚子の最初の写生文である「浅草寺のくさぐ〵」も発表されている。

写生文小説へ　明治三五年九月、子規は虚子と碧梧桐に自分亡きあとを託して世を去ったが、その後数年間の虚子は俳句から遠ざかり、本格的に写生文小説を書くようになった。『鶏頭』に収められた『風流懺法』や『斑鳩物語』などは虚構と写生とがほどよく調和されたものであり、低徊趣味（世俗的な苦しみにとらわれず常に余裕のある態度で東洋的詩美の世界に遊ぶこと）・余裕派小説（人生の大事に及ぶような問題には関係を持たず告白や主観的描写もなく、作者が客観的な姿勢を崩すことのない小説）と称されて、当時の文壇の中心的存在であった自然主義文学と対比された。一般にはこのように評された虚子の小説であったが、その後の『俳諧師』や『続俳諧師』では自らの青年時代を克明に描き、自然主義の影響も避けられなくなっていた。

俳壇復帰　こうして虚子が俳句から遠ざかっている間に、俳壇では碧梧桐を中心とする新傾向運動が生まれていた。その運動は、単に自然や人事を客観的に詠ずるだけでなく、俳句にも近代的自我や俳句者の個性を生かすために形式にとらわれず現実社会を鋭く見つめ、それに肉薄するような句を作ろうとするものであった。この運動は文壇の自然主義思潮の隆盛と相まって急速に大きくなりつつあったのである。

この新傾向運動の勢いに子規以来の新俳句の危機を感じた虚子は、大正二年、俳壇復帰を決意し、『ホトトギス』に「六ケ月俳句講義」や「俳句の作りやう」を連載して新傾向俳句に対抗した。虚子は「平明にして余韻のある俳句」を鼓吹し、季題や定型をあくまで守ろうとしたのである。大正末年から昭和初年にかけては俳句方法としての〈純客観写生〉、俳句理念としての〈花鳥諷詠〉を提唱し、俳句とは単に風景を詠ずるのではなく、春夏秋冬の移り変わりによって起こってくる自然界・人事界の現象を諷詠するものだと規定した。

ホトトギス派の長老　こういう虚子の精力的な活動はホトトギス派の巻き返しを成功させ、大正三年前後、大正末年前後、昭和五年前後には才能ある俳人たちが虚子のもとに集まって同派の繁栄が築かれていった。ことに大正末年前後は水原秋桜子・阿波野青畝・高野素十・山口誓子が輩出し、四S時代と呼ばれて一世を風靡した。その後、秋桜子や誓子は虚子に離反し、俳句に主観表現の技巧と新鮮な叙情性を求める新興俳句運動を起こしたが、虚子は中村草田男ら優秀な人材を育成し、その俳壇における勢力は依然として揺るがなかった。

昭和一一年には娘と欧州に旅して、句会や講演会に出席した。戦後は桑原武夫の俳句第二芸術論による批判にもあったが、虚子の所信は変わらず、常に静観の姿勢を保ち、その句風はさらに円熟味を増していった。

□作品解説

五百句　句集。明治二七年から昭和一〇年までの間に詠まれた句のうちで虚子が自選したものを集めている。平明な写生のうちに深い趣をたたえている句が多い。

▲『ほととぎす』第一号表紙

斎藤茂吉

西暦	年号	年	事項
一八八二	明一五		五月一四日、山形県に誕生。
一九〇二	三五	20	第一高等学校入学。
一九〇五	三八	23	斎藤家の次女てる子の婿養子として入籍。東京帝国大学医科大学進学。
一九〇六	三九	24	伊藤左千夫に入門。
一九一三	大二	31	『赤光』
一九二一	一〇	39	『あらたま』
一九二七	昭二	45	青山脳病院長に就任。
一九二九	四	47	『短歌写生の説』
一九三四	九	52	『柿本人麿』
一九四〇	一五	58	『寒雲』『暁紅』
一九四二	一七	60	『白桃』
一九四五	二〇	63	故郷上山疎開。
一九四七	二二	65	帰京。
一九五三	二八	70	二月二五日、心臓喘息で没。

生い立ち　斎藤茂吉は、守谷熊次郎・いくの三男として生まれた。上山小学校高等科卒業後、親は中学進学を考えていなかったが、縁戚で東京浅草に医院を開いていた斎藤喜一郎（紀一）が茂吉を養子に望み、茂吉は上京して開成尋常中学校に通うことになった。斎藤姓を名のるのはこの時からである（ただし、正式の入籍は明治三八年のことである）。医者としての道はこの上京のときに決定づけられたといえる。

『竹の里歌』との出会い　茂吉の短歌への関心は開成中学時代に示されている。中学三年から五年にかけて詠まれた歌が、当時の書簡の中に残されているのである。後年茂吉は、「明治三八年（二四歳）一月、神田の貸本店より正岡子規先生の『竹の里歌』を借り読み、作歌の志あり」と書いているが、作歌の志は『竹の里歌』を手にする以前にすでにあったと見るべきである。『竹の里歌』中の「柿の実のあまきもありぬ柿の実のしぶきもありぬしぶきぞうまき」、「人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは」といった歌に茂吉は、日常現実世界での感情がやすやすと自由に歌われているのを見て驚嘆したのであった。茂吉は子規との出会いによって、自己の作歌の方向をつかんだのである。子規没後の根岸派は伊藤左千夫を中心に『馬酔木』を刊行していたが、茂吉は『馬酔木』を購読し始め、やがて左千夫に入門することになる。

諦念　養父斎藤紀一は青山脳病院を設立し、病院の将来を計って茂吉を次女てる子の婿養子とした。この時期の茂吉の手紙には、「元来小生は医者で一生を終らねばならぬ身」であり、「小生は骨を砕き精を灑いで俗の世の俗人と相成りて終る考へにて又是非なき運命に御座候」などと書きつけられていて、自己の運命に対する諦念があったことが知られるのである。ウイーンとミュンヘンで精神医学の研究に従事しての帰途、茂吉は青山脳病院全焼の報を受け取り、帰国後は病院再建に奔走しなければならなかった。こうした苦労の中での作歌を茂吉は自ら「業余の吟」と称しているが、このことばにも自己の運命に対する諦念がこめられていよう。そしてそれは茂吉の生涯を貫く思いであった。

家庭生活　茂吉の家庭生活は楽しいものではなかった。茂吉とてる子の結婚は大正三年、茂吉三二歳、てる子一八歳のことである。茂吉は一四歳年下の幼な妻を愛そうと努めたが、てる子は茂吉に愛を示さなかった。二人の間の溝は深まり、茂吉が長崎医学専門学校教授として現地に赴任していた三年間（大正六年～九年）も、一緒に暮らしたのはその半分にも満たなかったし、ヨーロッパ留学の三年間（大正一〇年～一三年）も別れ別れに暮らしていた。その後昭和八年にはてる子の奔放な行状が新聞に暴露されるという事件が起き、それをきっかけに二人は別居し、この別居は、昭和二〇年六月青山の家を焼かれたてる子が茂吉の疎開先、故郷金瓶にやって来るまで続いた。そうした別居生活の中で茂吉と永井ふさ子との恋愛が生まれた。ふさ子は短歌の上での茂吉の弟子である。三年以上にわたるこの恋愛は結局破れざるを得なかったが、茂吉の歓喜・苦悩は新しい歌境を開いていった。一種色っぽい叙情の動きは歌集『暁紅』に表れている。

戦中から戦後まで　昭和一六年一二月八日、太平洋戦争が勃発すると、他の多くの文学者と同様、茂吉も戦争賛歌を歌うようになる。たとえば、

一億のみ民ことごとく御軍とおもほゆるときこころは躍る

といった歌を残している。茂吉は昭和二〇年四月金瓶に疎開し、戦後の二一年一月には大石田に移っている。それらの地での歌詠は主に自然詠で、東京を離れた茂吉に大きな自然と自己との対峙において作歌する境地が開かれたのである。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

にその境地が示されていよう。茂吉の帰京は昭和二二年一一月、その死に至るまで精力的な作歌活動は衰えることがなかった。

□作品解説

赤光　第一歌集。明治三八年から大正二年八月までの歌八三四首を逆年代順に収録。茂吉の根源的な詩的発想が随所にあらわれている歌集である。中でも「おひろ」と題する四四首と、「死にたまふ母」五九首の連作が大作である。

▲エジプトでピラミッドの見物をする斎藤茂吉（大正10）

石川啄木

西暦	年号	年	事項
一八八六	明一九	1	二月二〇日、岩手県に誕生。
一八九八	三一	13	盛岡中学入学。
一九〇二	三五	17	『明星』に短歌一首掲載。盛岡中学退学。上京。
一九〇五	三八	20	『あこがれ』
一九〇六	三九	21	渋民小学校に勤務。
一九〇八	四一	23	上京。短歌数百首を制作。
一九〇九	四二	24	東京朝日新聞社へ就職。「ローマ字日記」
一九一〇	四三	25	「食ふべき詩」「時代閉塞の現状」『一握の砂』
一九一一	四四	26	発病。
一九一二	四五	27	四月一三日、病死。『悲しき玩具』

故郷渋民村　石川啄木の父は岩手県の小村、日戸村の常光寺住職石川一禎であった。啄木が生まれて約一年の後、隣村の渋民村宝徳寺の住職に任ぜられ、一家は渋民村に移り住むこととなった。渋民村は、岩手県の中心都市盛岡市の北、一六キロにあり、東に姫神山、西に岩手山を望む北上川沿いの村である。この村で啄木は、両親の愛を一身に受けながら幼年期を過ごした。後年不幸にもこの村を去らねばならなかったが、彼は渋民村への愛着を持ち続け、故郷渋民村を歌った数多くの歌を残している。

明星派の若き詩人　明治三一年に入学した盛岡中学で、啄木の文学への関心は芽生えた。やがて先輩の金田一京助を通じて、当時浪漫主義文学の中心であった『明星』を知るに及んで、その文学熱は一層高まった。そのあげく、中学五年生の秋、啄木は文学で身を立てるべく、学校を退学し上京する。しかしほとんど何の目算もないままに決行されたこの試みは、わずか四か月で失敗に終わり、病に倒れた彼は翌年二月、空しく故郷へもどらざるを得なかった。病が癒えるとともに再び作品を発表し始め、明治三六年一二月には「愁調」と題した詩五編が『明星』に掲載された。この詩が好評を呼び、以後啄木は『明星』を中心に次々と詩を発表し、次第に人々の注目を集めるようになった。明治三七年秋、彼は詩集の刊行を目的に再び上京し、友人等の協力を得て、翌年、処女詩集『あこがれ』を刊行した。この詩集によって啄木は、明星派の若き詩人としての地位を確保した。

生活苦との闘い　『あこがれ』刊行の前年、啄木の身辺に一つの暗い出来事が起こった。父一禎が宝徳寺住職の職を追われたのである。生活力を失った父に代わって啄木の肩に、新妻節子を加えた一家五人の生活がかかってきた。この時から生涯にわたる生活苦との闘いが始まる。生計を立てるため、彼は渋民小学校に代用教員として勤めた。しかし、一禎の宝徳寺への復職をめぐって起こった村内の争いの影響を受け、明治四〇年わずか一年で免職となった。追われるようにして故郷渋民村を離れた啄木は、生活の糧を求めて北海道へ渡った。以後約一年間、代用教員や新聞記者などをしながら、函館・小樽・釧路等を転々とした。釧路では一応生活の安定を得るが、文学への志を断ち切れず、明治四一年春、家族を函館に残し、単身上京した。このころ啄木は自然主義文学に関心を寄せ、小説家を目指したが、彼の小説は売れず、東京での生活は困窮の一途をたどった。

『一握の砂』　ようやく明治四二年三月、同郷の先輩の厚意を得て東京朝日新聞社に校正係として就職し、一応、生活の基礎を定めた。しかし積み重なる借財のため、家族を迎えることができず、上京を促す家族との間で苦悩を続けねばならなかった。ローマ字で記されたこのころの日記(『ローマ字日記』)には、こうした家をめぐる苦悩や、文学者として低迷を続ける苦渋が綴られている。他方、上京直後から啄木は、日々の生活の中に生じる感情や、苦しい生活の合い間に心に浮かぶ、故郷や北海道への追想を短歌に歌っていた。自己の生活感情を大胆に吐露したこれらの歌は、次第に人々の注目を集め、明治四三年には処女歌集『一握の砂』が刊行された。こうして啄木は歌人として再びその名が知られるようになった。

社会主義への接近　明治四三年六月、幸徳秋水ら数十名が天皇暗殺を企てたかどで逮捕されるという大逆事件が起こった。啄木はこの事件に烈しい衝撃を受け、社会主義関係の文献を読み漁り、社会主義へと接近していった。彼は『時代閉塞の現状』を書き、自然主義文学を批判するとともに、土岐善麿と雑誌を計画し、青年への思想的啓蒙活動へ乗り出そうとした。しかし明治四四年、病に倒れ、この計画は実現されずに終わった。発病後は、病と生活苦に苦しみながらも、革命に寄せる想いを長詩「はてしなき議論の後」に歌い、歌集『悲しき玩具』の編集をした。だが歌集刊行を見ることなく、肺結核のため二七歳の短い人生を閉じた。

□作品解説

一握の砂　第一歌集。全体は関連する歌ごとにまとめられた五つの章よりなる。主として口語調を用い、日常の生活に即して、そこに生じる感情を率直に歌った歌が多い。また、一首を三行に分けて書くという新しい書き方を試みている。

▲北上川畔の啄木碑
（遠景は岩手山）

与謝野晶子

西暦	年号	年	事項
一八七八	明一一	1	一二月七日、大阪府に誕生。
一八八八	二一	11	堺女学校入学。
一八九九	三二	22	浪華青年文学会加盟。
一九〇〇	三三	23	与謝野鉄幹を知る。
一九〇一	三四	24	『みだれ髪』鉄幹と結婚。
一九〇四	三七	27	「君死にたまふこと勿れ」
一九〇五	三八	28	『恋衣』
一九〇六	三九	29	『舞姫』
一九〇九	四二	32	『源氏物語』口語訳執筆。
一九一二	四五	35	渡欧。
一九一四	大三	37	『夏より秋へ』
一九一九	八	42	『火の鳥』
一九二九	昭四	52	『晶子詩篇全集』
一九三八	一三	61	『新新訳源氏物語』(~昭一四)
一九四二	一七	65	五月二九日、自宅で死去。

少女時代

与謝野晶子は大阪府堺の菓子商老舗駿河屋、鳳宗七の三女として生まれた。宗七は趣味豊かで鳳家には蔵書も多く、晶子は一一歳ごろから『源氏物語』に心を惹かれ、家人に隠れて読みふけり、物語中の女の幾人かに自分を比較して微笑むという風であったという。宗七は家業に熱心でなかったため、彼女は女学校を出るころから、病身の母を助けて一家の中心となって働いた。そうした気苦労の多い生活のなかで、晶子は歌を詠んでは雑誌へ投稿するようになっていった。明治三二年二月、浪華青年文学会の機関誌『よしあし草』に鳳小舟のペンネームで「春月」と題する新体詩を発表した。

『みだれ髪』の時代

まもなく晶子は『よしあし草』同人、覚応寺の若住職、河野鉄南を知る。鉄南を兄のように思慕した晶子であったが、次第に自らの心情を大胆に訴えるようになっていた。

　やは肌のあつき血潮にふれも見で
　さびしからずや道を説く君

と歌われた「君」は鉄南を指すともいわれる。が、一方、鉄南を通じて彼の幼なじみであった与謝野鉄幹に『明星』へ投稿を乞われた晶子は、同誌に詩歌を寄せ、鉄幹との交流がはじまってゆく。

明治三三年八月、鉄幹と初対面の機会を持ち、鉄幹とともに過ごした一週間余りの日々によって、晶子の師鉄幹に対する感情はにわかに燃えあがり、彼女を全く以前とは異なった人間に生まれ変わらせた。彼女の歌は以前とは見違えるばかりに激しい情熱を示すようになり、翌年にはさらに煩悶する心のうちを直截に歌う、より激しいものとなっていった。明治三四年六月、遂に彼女は生家を捨てて鉄幹のもとへ走り、鉄幹とともに新しい生活を開始する。こうして晶子の青春の記念碑というべき『みだれ髪』の世界は結実した。

『明星』の時代

結婚後しばらくの間、鉄幹、晶子の家は、新詩社同人たちのサロンとしてにぎわい、このサロンを中心に『明星』は全盛期を迎え、晶子は名実ともに『明星』の女王としての生活を送る。『みだれ髪』に続き、『小扇』『恋衣』『舞姫』などの歌集を続々と刊行し、その歌三昧の生活のなかで彼女は鉄幹との間に次々と子をもうけ、母として妻としての多忙な、そして決して楽ではない生活を送った。

『明星』終刊後

明治四一年一一月、『明星』が終刊されると、子だくさんの与謝野家の生活は窮乏をきわめ、晶子はやがて生活の糧を得るために自宅で『源氏物語』の講義を開いた。それは後に彼女のライフワークとなった『源氏物語』口語訳の端緒となった。そうした苦しい生活にあっても、晶子の創作意欲はいっこうに衰えず、毎年のように歌集は刊行された。さらに、『明星』終刊後、精神的支柱を喪失した夫鉄幹の再起を願い、彼を渡欧させ、自分もまもなく後を追って欧州へ旅立った。それは晶子自身の転身の出発点ともなったのである。以後、晶子は盛んになり始めた女性解放運動の潮流に乗って、評論家として婦人問題を論じ、啓蒙につとめた。また、芸術的な自由教育を目指した文化学院の設立に携わり、新しい教育の実践者としても活躍したが、晶子のそうした思想的啓蒙的側面は、遂に作歌活動と有機的なつながりを示すには至らなかった。

晩年

昭和一〇年三月、晶子にとって最愛の人であり、最後まで師であった夫鉄幹が逝った。

　わが上に残れる月日一瞬に
　よし替へんとも君生きて来よ

と晶子はその悲しみを詠んでいる。夫に先立たれてからの晶子は、『源氏物語』の改訳に心血を注ぐかたわら、折を見て旅を続け、そこで夫を追慕する歌を詠んでいる。昭和一四年の夏、晶子は遂に『新新訳源氏物語』全八巻を完成、『源氏物語』の口語訳に取り組み始めてから三〇年の歳月が流れていた。昭和一五年五月、脳溢血で倒れ、一七年、波乱に富んだ六五歳の生涯を閉じた。

□作品解説

みだれ髪　第一歌集。三九九首収録。短歌史上浪漫的短歌隆盛の輝かしい糸口となった歌集。集中の歌はいずれも芳醇な浪漫的心情をもって奔騰する官能を賛嘆し、時には驕慢と思わせるほど、自らの肉体を自賛し、あるいは聖なるものを人間の場におろして歌材とするなど、新しさに満ちている。その青春の情熱の賛美は封建的因習の下で抑圧されていた人間性の解放を求める声であり、因習に対する大胆な挑戦であったといえる。

▲『みだれ髪』さし絵（藤島武二画）

正岡子規

西暦	年号	年	事項
一八六七	慶三	1	九月一七日、愛媛県に誕生。
一八八〇	明一三	14	松山中学入学。
一八八三	一六	17	松山中学を中退。上京して共立学校入学。
一八八四	一七	18	大学予備門入学。
一八八七	二〇	21	俳句を作る。
一八九〇	二三	24	東京帝国大学国文科に入学。
一八九二	二五	26	「獺祭書屋俳話」を連載。
一八九五	二八	29	短歌を発表。日清戦争に従軍。帰途喀血。
一八九八	三一	32	「歌よみに与ふる書」
一九〇〇	三三	34	写生文の会「山会」を開く。
一九〇一	三四	35	「墨汁一滴」
一九〇二	三五	36	九月一九日、自宅で死去。

生い立ち　正岡子規の本名は常規、父隼太は松山藩の下級武士、母八重は藩儒大原観山の長女であった。父隼太は明治五年に死んでいる。少年時代の子規は経済的に恵まれた生活は送れなかったが、祖父の観山が子規に漢文の教育をほどこした。松山中学に進んでからは、自由民権思想の影響を受け政治家になろうとの志をいだいた。一七歳で上京したのもその志を実現するためである。翌年には旧松山藩主久松家の給費生となり、大学予備門に入学、明治二三年には文科大学に入学した。

大学時代　大学時代の子規は哲学、特にハーバート・スペンサーに親しんだ。哲学に親しむ一方で、明治一八年帰郷の際には井手真棹に和歌を学び、二〇年帰郷の際には大原其戎に俳句を学んでいる。この時期の子規には哲学青年と文学青年とが同居していたわけだが、哲学に学んだ合理主義精神は、後の短歌俳句革新の理論に生かされていると見ることができる。例えば、初期文章を集めた「筆まかせ」の中に「最簡単ノ文章ハ最良ノ文章ナリ」というスペンサーの文体論を紹介した部分があり、このような文体論は子規の革新理論の中核をなすものだったと考えられるのである。

発病　学年試験に落第して大学を中退する明治二五年には、六月より新聞『日本』に「獺祭書屋俳話」を連載し始め、俳句理論家としての姿をあらわし始める。一二月には日本新聞社の社員となった。日清戦争に従軍したのは『日本』へ記事を送るという名目であったが、現地に着いた時には既に休戦状態で実質的には戦争を見ずに終わった。

子規が大喀血したのは帰国の船上である。既に結核の徴候は明治二二年ごろにあらわれていたが、子規はそれほど気にもとめず、好きな野球をやったり旅行に出かけたりしていた。船中で大喀血したのは明治二八年五月のことであるが、翌年三月には結核菌に膝をも冒され、以後歩行不能となった。病床での苦痛は、「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。僅かに指頭を以てこの脚頭に触るれば天地震動、草木号叫、女媧氏未だこの足を断じ去つて、五色の石を作らず」(『病牀六尺』)といった文にもしのばれる。しかし、子規はそのような苦痛にへこたれることなく、短歌革新の書「歌よみに与ふる書」を書き、その実践たる歌作をなしている。病床の子規がこのような仕事をなし得たのは、子規の合理主義的、現実主義的精神によると考えられる。

その死　明治三五年五月五日、『病牀六尺』を新聞『日本』に掲載し始めたが、同年九月一七日が最後となった。一八日に次のような絶筆三句をよんで、一九日死亡した。

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をとゝひのへちまの水も取らざりき

生涯の全句数は一八〇五六句、短歌は二三三九首であった。

□作品解説

歌よみに与ふる書　歌論書。明治三一年二月一一日から同年三月三日まで一〇回にわたって新聞『日本』に連載された。子規は「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」といってのけ、源実朝を、「あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を沢山残したかも知れ不申候。兎に角に第一流の歌人と存候」と賛美している。また、和歌が腐敗した原因を「小さき事を大きくいふ嘘」にあるといい、しかし「和歌の精神こそ衰へたれ形骸は猶保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳駆するを得べき事を保証致候」といっている。『歌よみに与ふる書』全編の執筆動機も短歌再興にあったと考えられる。

それでは具体的にどうすべきかという点については、「和歌俳句の如き短き者には主観的佳句よりも客観的佳句多し」、また、「用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積り」であるといい、「自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本来の主意に御座候」と結んでいる。

▲子規の絶筆三句

萩原朔太郎

西暦	年号	年	事項
一八八六	明一九	1	一一月一日、群馬県に誕生。
一九一〇	四三	25	慶応義塾大学予科入学。同月退学。
一九一三	大二	28	「みちゆき」
一九一七	六	32	『月に吠える』
一九一八	七	33	『詩の原理』
一九一九	八	34	上田稲子と結婚。
一九二二	一一	37	『新しき欲情』
一九二三	一二	38	『青猫』『蝶を夢む』
一九二五	一四	40	『純情小曲集』
一九二八	昭三	43	『萩原朔太郎詩集』
一九二九	四	44	稲子と離婚。
一九三四	九	49	『氷島』
一九三八	一三	53	大谷美津子と結婚。『日本への回帰』
一九三九	一四	54	『宿命』
一九四二	一七	57	五月一一日、自宅で死去。

幼年時代　萩原朔太郎は萩原密蔵の長男として生まれた。密蔵は後に前橋医師会長に選ばれるなど信望の高い医師であり、母ケイの父、始は群馬県下の部長を歴任するなど、萩原家は町の上流階級で、朔太郎は恵まれた環境の中で育った。ある時、洋行帰りの親戚の家で目にしたオルゴールをどうしても手離そうとせず、困った両親がわざわざ横浜まで手をつくして異国の高価な機械を買って与えたこともあるという。また彼らは朔太郎に地方都市では手に入らないような絵本や童話も東京の土産として与えたらしい。音楽に対する関心、見知らぬ世界、都会や西洋に対する憧憬など、彼のロマンチックな性格はこうしてつくられていった。小学校時代は体が弱く、神経質で臆病であった。読書を好み、音楽好きでハーモニカや手風琴（アコーディオン）をいつも手にしていたという。童話では『不思議の国のアリス』が大好きだった。

中学時代　幼い時から孤独のうちに夢みがちだった朔太郎は、中学に入るや急速に文学に傾斜してゆく。二年生の時、校友会誌に短歌を数多く発表、回覧雑誌を出す。一八歳の時には『明星』に短歌三首が掲載され、「新進中の新進」と、はやくも今後の活躍を期待されたが、その初期短歌には『みだれ髪』模倣の跡が歴然としている。

高校・放浪時代　中学を卒業した年、彼は高校入試に失敗したようである。何回か高校を変えても遂に学業に興味を持てず、一〇年近くあてどない日々を送った。明治四四年から五年にかけて上京し、東京に放浪した。この間、音楽家になろうと志し、上野音楽学校（今の東京芸術大学）を受験しようと準備したが実現しなかった。そのかわり、このころからマンドリンを習いはじめ、後年マンドリン倶楽部の指揮者になるに及んでいる。東京ではオペラや演劇を通して西洋近代の芸術思潮の息吹に触れ非常に感動したりもするが、おおかたは「生を憧憬する心と生を厭ふ心」との内面の戦いに疲れ、生涯の目的を定めえぬ苦悩の日々であった。

『月に吠える』の時代　大正二年、『朱欒』五月号に「みちゆき」（のち「夜汽車」と改題）など五編の詩が掲載され詩壇へのデビューとなる。同号に室生犀星の「小景異情」を見いだし、感激のあまり渇仰のありたけを書き送り、生涯変わらぬ友情がはじまる。三年には山村暮鳥をも知り、三人で人魚詩社を興し、翌年『卓上噴水』を創刊。朔太郎の詩的出発は当初、犀星の叙情詩の影響のもとに行われたが、やがて暮鳥を通じ、朔太郎自身の語るところの、その「精神的立体詩」「未来派の精神」の強烈な洗礼のもとに『月に吠える』の世界を築き上げたのである。同詩集はひろく注目されたが、風俗壊乱の理由で危うく発禁になるところを、「恋を恋する人」「愛憐」を削除して了解をえた。

『青猫』の時代　大正六年二月、発表された「沖を眺望する」以後、『青猫』の世界が展開される。この時期から、詩人は批評家であるという認識に立ってアフォリズムを書き、文化一般について考え、『詩の原理』の執筆を開始する。八年五月には、上田稲子と結婚、一四年二月には妻子を伴って上京、大井町に仮寓の後、四月には田端に転居。近在の犀星、龍之介と頻繁に往来した。また、堀辰雄、中野重治も知るようになる。

『氷島』の時代　昭和三年から妻稲子を中心に家庭は内外で紛糾していたが遂に破綻をきたし、四年七月に離婚した。二児を伴い一旦帰郷、秋に単身上京し赤坂檜町のアパート乃木坂倶楽部に入居するが、まもなく父が発病し帰郷する。失意のうちにもあわただしい日々を過ごし一年間全く詩作が中絶。六年三月「帰郷」他五編を『詩・現実』に発表し、『氷島』の骨格がほぼできあがる。この時期、多くのアフォリズム集、詩・文学評論集が刊行された。一三年には大谷美津子と再婚するが後別居となるなど、孤独のうちに晩年を過ごし、肺炎のため自宅で死去した。

□作品解説

月に吠える　詩集。朔太郎自らいうところの「傷める生命」―故郷を捨てた詩人の孤独と不安と憂愁―を、「生理的恐怖感」としてとらえ、その異常なまでの感覚を、ことばのリズムとイメージによって形象化。口語自由詩を完成し、近代詩の表現段階に新たな領域を導き入れた、近代詩史上画期的な詩集。

▲『懈怠』さし絵（田中恭吉画）

高村光太郎

西暦	年号	年	事項
一八八三	明一六		三月一三日、東京に誕生。
一八九七	三〇	14	東京美術学校予科に入学。
一九〇二	三五	19	東京美術学校彫刻科卒業。
一九〇六	三九	23	アメリカ渡航。
一九〇八	四一	25	パリに移る。
一九〇九	四二	26	帰国。
一九一一	四四	28	詩作開始。
一九一四	大三	31	『道程』長沼智恵子と結婚。
一九二五	一四	42	ヴェルハアラン詩集『天上の炎』訳刊行。
一九三一	昭六	48	智恵子に精神異常の徴候。
一九三八	一三	55	智恵子没。
一九四一	一六	58	『智恵子抄』
一九四五	二〇	62	五月、岩手県花巻市に疎開。
一九五〇	二五	67	『典型』
一九五六	三一	73	四月二日没。

生い立ち

高村光太郎は彫刻家光雲の長男として生まれた。当時光雲は「神仏人像彫刻師一東斎光雲」の看板をかけて裏長屋に住み、苦しい生活をしていた。彫刻師の家に生まれた光太郎は道具などを自然におぼえ、周囲からは父の道をつぐことは当然のことと見なされていた。そうした空気の中で光太郎は東京美術学校彫刻科に進学する。光太郎には文学趣味があり、一〇歳を過ぎるころから物語類や漢籍を読んだりして、美術学校時代には新詩社に加入し短歌を『明星』に発表している。卒業前後までの光太郎の生活は、文学趣味を満足させながら順調に彫刻の修業をつづけていたといえる。光太郎の内面に決定的な転換をもたらした機会は、明治三九年から三年余にわたる欧米遊学であった。

欧米遊学

光太郎の欧米遊学は美術学校教授岩村透の勧めによるが、光太郎自身は必ずしも気がすすまなかったようである。父の、自分が老年にならないうちに行って来いという意見もあって日本を旅立ったのである。まずアメリカに渡ったが、私費留学で金が不自由ということもあってアメリカ人彫刻家の助手をしながら勉強をした。生活は楽ではなかったけれども光太郎がそこで味わったのは、「私の精神と肉体とは毎日必ず『生まれて初めて』のことを経験し、吸収した。世界中が新鮮だった」という感慨である。光太郎は、新しい世界が自分の前に開けるのを感じた。つまり「日本的倫理観の解放」を味わったのである。翌四〇年にはロンドンに渡り、四一年にはパリに渡った。パリでは光太郎はロダンの家を訪問している。ロダンはその時留守だったが、ロダンのデッサンや制作中の彫刻を見たことは忘れることのできない感動として残った。渡米前にすでに光太郎はロダンを英訳本で読み、強い感銘をうけており、ロダンの仕事から近代彫刻家の精神を学びとったのであった。光太郎がこの欧米遊学で学んだものは、近代の個の精神であり、その延長上にある近代彫刻家の精神であった。

帰国

近代精神に目ざめた光太郎に、封建的倫理の支配する日本が否定すべきものと見えたのは当然であった。しかしながらフランスから帰国した光太郎を再びとり囲んだのは封建倫理の世界であり、そのような世界は光太郎一人の力でつき破れるものでもなく、そこにデカダンの意識が生まれる。帰国の前年に発足していた北原白秋らのパンの会に加わり、その頽唐趣味にみちた雰囲気に感銘したのも、光太郎におけるデカダンと呼応するところがあったからである。『道程』前半には、反抗、あきらめ、デカダンの三つの意識がうたわれている。

智恵子との出会い

光太郎からデカダン意識をぬぐい去ったものは、長沼智恵子との出会いであった。愛が光太郎の心を浄化し、光太郎は意志的・意欲的な自分の生をつくりあげようとするのである。『道程』後半には自己完成をめざすヒューマニスト詩人の姿が描かれている。智恵子が精神分裂症となっても光太郎の愛は変わるものではなかったが、家事雑務・看病に追われて彫刻も詩もつくれない時期がしばらく続いた。そして智恵子の死は光太郎に、その芸術制作の目標を失わせたのである。光太郎の芸術は智恵子との生活の上に成り立っていたのだった。智恵子の死によって空虚感にとらわれていた時期に戦争はますます拡大しており、光太郎は戦争詩にのめりこんでゆく。

　記憶せよ、十二月八日。
　この日世界の歴史あらたまる。

で始まる、日米開戦の一二月八日を賛美する詩（「十二月八日」）が書かれるにいたるのである。

戦後

昭和二〇年五月に光太郎は岩手県花巻市に疎開し、そこで終戦を迎えるが、戦後も同県太田村に小屋を作り、七年間の農耕自炊生活を送って東京にもどろうとしなかった。自己流謫の意識からである。そのような生活の中で書かれた連詩『暗愚小伝』二〇編では、自己の生涯を顧みて自身を「暗愚」と評しており、そこに光太郎の自己批判が見られる。それはまた、近代日本の自己批判ということもできるのである。

□作品解説

智恵子抄　詩集。智恵子との愛のはじまりから死までの三〇年間にわたる作品を集めたもの。「あどけない話」「樹下の二人」「山麓の二人」「レモン哀歌」などが収録されている。

▲智恵子夫人（中）とその母（左）と

小林秀雄

西暦	年号	年	事項
一九〇二	明三五		四月一一日、東京に誕生。
一九二四	大一三	22	永井龍男らと『山繭』創刊。
一九二九	昭四	27	「様々なる意匠」
一九三〇	五	28	「アシルと亀の子」
一九三五	一〇	33	「ドストエフスキイの生活」
一九四二	一七	40	『無常といふ事』の連作
一九四六	二一	44	『モオツアルト』
一九四八	二三	46	『人間の進歩について』
一九五一	二六	49	「ゴッホの手紙」
一九五四	二九	52	「近代絵画」
一九六四	三九	62	『考へるヒント』
一九六五	四〇	63	「本居宣長」(〜昭五二)

文学的形成　小林秀雄は、東京神田に、生まれた。父は様々の事業を試みた技術者であった。府立一中・一高文科丙類を経て、東京帝国大学仏文科に進んだ。この間、一中で一級先輩だった夭折の詩人富永太郎と交わり、フランスの象徴派詩人、なかんずくランボーに深く影響された。また、富永を介して知り合った中原中也との、執拗な親近感と反感とが混じり合った交際は、小林の自我の底まで試されるような厳しい経験で、小林の成熟の上で無視することのできないものであった。他にこのころの小林の周囲には、河上徹太郎、青山二郎、永井龍男、大岡昇平らの友人がいた。特に青山は、早く骨董に親しみ、文学の世界にいる小林に対してことば以前の「もの」が語りかけて来る意味を教え、後の小林の批評に大きな影響を残した。

近代批評の創始者　昭和四年、『改造』の懸賞論文二席入選の「様々なる意匠」で文壇に登場した。(ちなみに、一席入選は宮本顕治が芥川龍之介を論じた「敗北の文学」であった。)当時、批評家はすべてある流派に属し、その流派の発展に努めるべきものとされていたのに対し、小林のこの論文は、文学の本質的な在り方を探ろうとする独創的なもので、各流派の「意匠」の背後に隠された素朴な「文学」観を厳しく指摘した。続いて『文芸春秋』に連載した「アシルと亀の子」以下の評論では、当時支配的であったプロレタリア文学の観念性を撃ち、それにより、プロレタリア文学に対抗する芸術派の旗手と目されるようになった。しかし、小林の真意は、その芸術派をも含めた昭和初期文学全体の持つ古さ、観念性への批評にあったのであり、次第に指導的批評家の位置に押し上げられながらも、自らの孤立を深くしたのであった。

歴史の発見　昭和一〇年『私小説論』で日本の近代小説の成立からの特性を考察し、『ドストエフスキイの生活』で作家の存在の仕方を論じた小林は、同時代文学への発言をやめるようになる。第二次大戦へと向かうこの時期の小林の同時代への発言としては、直接社会を対象とした社会時評などがあるが、次第に沈黙へ入っていったのであった。このころ小林は、ことばによる解釈の通用しない「もの」の世界に親しみ、同時に、解釈を拒絶してしまう歴史・古典の世界にわけ入り始めていたのであった。昭和一七年の『当麻』以下の中世古典に関する論文は、彼が動かし難い歴史の実体と、人間の「内面」の独立した強さを捕らえ得たことを示しており、近代が生み出した混乱の中で小林がとった態度をはっきり示している。これ以後、小林は独自の思想家になったと言ってよく、この態度は戦後まで貫かれるものである。また、この時確立された文体は、散文が持ち得る純粋性をきわめたものである。

戦後　戦後にわかに活況を呈した言論界にあって、一年余りの沈黙の後、小林が発表したのは『モオツアルト』であった。この事実が示すように、戦後の小林は時代の表層の潮流に関わらず、古今東西の天才たちと切り結ぼうとし始める。その対象となるのは、モーツアルトをはじめとする音楽家であり、『ゴッホの手紙』『近代絵画』等に見られるような画家であり、ベルグソン等の哲学者であり、伊藤仁斎、荻生徂徠、本居宣長等の日本の学者である。つまり、文芸批評のわく組みを越えて、広く人間の創造的叡知に関わる世界を明らかにしていこうとするものである。その他、時々の事物に触れての感想やエッセイなどでも、自由な思考を展開し、それらの文章は『考へるヒント』等の書物に収められている。

□作品解説

無常といふ事　随筆。戦時中発表された「当麻」「無常といふ事」「平家物語」「徒然草」「西行」「実朝」の六編を収録。解釈や分析が横行し、空疎なことばの氾濫する近代への批判を基調に、「解釈を拒絶して動じない」歴史の姿が見事に定着させられている。

本居宣長　評論。昭和四〇年から五一年にかけて雑誌『新潮』に連載されたものをまとめたもの。近代批評の祖である小林が、ランボオ、ドストエフスキイ、モオツアルト……とたどって最後に至り着いた感のする大著。宣長の学問の奥深くに入ってゆき「宣長の肉声」をひき出そうとした小林の意図が見事に結実しており、評論の域を越えた一個の芸術作品となっている。

▲『本居宣長』表紙

北村透谷

西暦	年号	年	事項
一八六八	明元	1	一二月二九日、神奈川県に誕生。
一八八一	一四	14	東京へ移住。
一八八三	一六	16	自由民権運動に参加。
一八八五	一八	18	民権運動から離脱。
一八八七	二〇	20	石坂ミナとの恋愛。キリスト教に入信。
一八八八	二一	21	石坂ミナと結婚。
一八八九	二二	22	『楚囚之詩』
一八九一	二四	24	『蓬萊曲』
一八九二	二五	25	『厭世詩家と女性』
一八九三	二六	26	『人生に相渉るとは何の謂ぞ』『明治文学管見』『内部生命論』
一八九四	二七	27	五月一六日、自宅で縊死。

政治家を志す

北村透谷は小田原に生まれた。小田原藩の藩医だった祖父の下で、武士の子としての厳格な躾を受けて育った。小さいころの透谷は、近所の子供を集めて戦闘遊戯をすることを好み、『三国志』等を愛読し英雄豪傑にあこがれていた。こうして彼の内には、天下国家にかかわろうとする士族意識がはぐくまれていった。明治一四年、透谷は父母と共に東京に移住した。この年板垣退助を総理として自由党が結党され、自由民権運動はその最高潮期を迎えようとしていた。透谷はその影響を受け、政治家になることを志した。幼少期からの天下国家にかかわろうとする〈アンビション〉はそこに集中され、青年党と称する少年グループを結成し、演説の稽古をするなど活発に運動した。

自由民権運動

小学校卒業後、青年党グループは四散してしまい、小学校時代の政治熱もいったんは消えるが、明治一六年ごろ、三多摩地方の民権運動家と接触するようになって、再び燃え上がった。彼は、三多摩地方の民権運動家のアジトを渡り歩き、時には小間物の行商をしながら、民権運動の思想宣伝をした。この間に、生涯の友となった自由党青年政客大矢正一と知り合い、数か月間、生活をともにしたこともあった。政府側の相次ぐ弾圧の前に、民権運動は次第に混迷の度を深め、明治一八年、大井憲太郎等は、大阪事件を計画し、その運動資金を得るため、強盗を企てた。透谷も盟友大矢正一からその企てに参加するよう求められたが、彼はそれを断り、頭を剃って運動から離脱した。それまで熱病のごとく一身を占めていた政治的〈アンビション〉は崩壊し、運動への懐疑と、同志の誓いを破った卑怯者という意識は、透谷の内部に深い苦悩をもたらした。

実世界から想世界へ

失意の底にあった透谷の心の支えとなったのは、三多摩地方の民権運動の大立物石坂昌孝の長女ミナであった。ミナは明治二〇年に横浜のミッションスクールを卒業後、東京にあった父昌孝の隠れ家に帰っていたが、透谷はしばしばここを訪れ、失意と孤独を慰めた。八月に至って、二人の仲は急速に進展したが、ミナには既に婚約者がおり、透谷はミナの栄誉を思い絶交を決意した。恋愛の断念を通じて彼はキリスト教に入信した。やがてミナとの関係は元にもどり、明治二一年、二人は結婚した。ミナとの恋愛と、それをきっかけとしたキリスト教への入信を通じて透谷は、それまでの自己を否定し、政治・商業等の「実世界」ではなく、文学・宗教という精神の世界、「想世界」に生きようと決意した。

〈空の空なる〉戦い

想世界に生きることを決意した透谷は、明治二二年、劇詩『楚囚之詩』を世に問い、続いて二四年、劇詩『蓬萊曲』を自費出版した。しかし、専ら観念の内部での葛藤を描いたこれらの作品は、その難解さも手伝って当時ほとんど評価されなかった。彼が一躍人々の注目を集めるのは、明治二五年『女学雑誌』に掲載された「厭世詩家と女性」によってである。これ以後、小説『我牢獄』や数多くの評論を発表する。翌二六年には、『人生に相渉るとは何の謂ぞ』を書き、文学は功利を求めるべきものではなく、「人間の霊魂を建築せんとする」「空の空なる」戦いであると主張し、山路愛山と論争した。続いて、『明治文学管見』を書き、近代文学とは何かを追求し、『内部生命論』では、あるべき文学として「内部の生命」を根底に据えた文学を主張した。こうして彼は日本の民衆に即した近代文学の創出を求めて「空の空なる」戦いを戦った。しかし、一人孤立して戦わねばならなかったこの戦いの中で、肉体的にも精神的にも深く傷つき、明治二七年、自ら命を絶った。

□作品解説

蓬萊曲 劇詩。明治二四年に自費出版。三齣八場よりなり、全体を通じて時間は夜に設定されている。内容は、闇の中で、修行者柳田素雄が道士鶴翁、露姫等と問答を交しながら蓬萊山を登って行き、最後に山頂で大魔王と問答を行うというもの。

内部生命論 評論。文学は、それが「人間の根本の生命」、すなわち「内部の生命」をつかみ得ているか否かを基準にして論じられるべきであり、同時に「内部の生命」をつかむことは貴族的思想を打破して平民的思想を興す道であることを主張し、続けて「内部の生命」と文学との関係を論じている。

▲『文学界』創刊号

北　杜夫（一九二七〜　）

生い立ち

北杜夫は、歌人斎藤茂吉の次男である。一〇歳ごろより昆虫採集に熱中、以後ほとんど偏執的とも思われるほど、昆虫学への興味を示す。一八歳で父のもとを離れ旧制松本高校へ入学した時、初めて父茂吉の歌集を読み感動。以後、短歌を、ついで詩を作り始めた。やがてトーマス・マンの小説にひかれ、将来もの書きになる決心をする。大学進学の際、動物学科を志望したが父に反対され、やむなく医学部に入学するがマンの著作を集中的に読み、授業は欠席しがちだった。二三歳の時初めて北杜夫の筆名で「百蛾譜」を『文芸首都』に投稿、四月号に掲載された。その年、マンの『ブデンブローク家の人々』を模したものを書こうと創作ノートに「神尾家の人びと」の仮題を記し、これが後に『楡家の人びと』となった。

どくとるマンボウ誕生

北杜夫が水産庁の調査船の船医になったのは、なんとしてもヨーロッパに行きたかったためである。照洋丸の話がころがり込んだ時、船を見に行った北はあまりの小ささに驚き、さすがに航行をためらった。友人たちが沈んだ時はあきらめろと気やすく言って元気づけると、「バカ、おれが死ぬことは、日本文学にとっての一大損失となるのだぞ」と、微笑みながらもわめいたそうだ。そして友人にもしもの場合の遺稿の整理を頼んだ遺言を残して船に乗ったという。この半年間の航海から後の『どくとるマンボウ航海記』が生まれたのである。

■主要作品　『霊媒のいる町』（昭三一）、『どくとるマンボウ航海記』『夜と霧の隅で』（昭三五）、『楡家の人びと』（昭三九）、『白きたおやかな峰』（昭四一）

大江健三郎（一九三五〜　）

戦後教育を受ける

大江健三郎の生家は村有数の素封家であったが、戦後は農地改革によって没落しつつあった。小学校を戦前の国民学校、中学校以後を戦後教育で過ごしたことは、大江に、自分は戦後民主主義をバックボーンとして生きる人間だという明確な意識を植えつけた。近年の、広島・沖縄に取材したルポルタージュにもその精神は貫かれている。

東大時代

東大に入学後は一時学生運動に接近したこともあったが、まもなくサルトルを耽読するようになった。大江の卒業論文もサルトルであり、初期作品にもサルトルの影が色濃く投影されている。東大在学中の昭和三二年、東京大学新聞の五月祭賞の懸賞小説に「奇妙な仕事」で応募、受賞した。この小説が毎日新聞の「文芸時評」に取り上げられたことから文壇の注目を集め、以後『死者の奢り』などの好短編を発表、学生作家として華々しく文壇に登場した。三三年には『飼育』によって芥川賞を受賞し、確かな思想に支えられた叙情を激賞された。長編『われらの時代』を書きあげて東大を卒業、折からの安保騒動に政治的関心を深めた。

戦後世代の定着

三六年に発表した『セヴンティーン』は前年の社会党委員長浅沼稲次郎刺殺事件にヒントを得た作品で、以後も『ヒロシマ・ノート』や『沖縄ノート』などのルポルタージュで戦後世代の政治的立場を表明し続けている。大江は、戦後世代の精神状況を独自の素材と文体とで定着させた作家である。

■主要作品　『飼育』（昭三三）、『芽むしり仔撃ち』（昭三三）、『性的人間』（昭三八）、『個人的な体験』（昭三九）、『万延元年のフットボール』（昭四二）、『ピンチランナー調書』（昭五一）

開高　健（一九三〇〜　）

その青春

開高健は昭和五年大阪に生まれ、一八年、一三歳で父を失った。時代はすでに個人的不幸をかこつことを許さず、彼は否応なく戦争と敗戦をはさむ社会的混乱の中で「勤労動員に狩り出され又闇市を彷徨う」と回想される青春の日を送ることになる。さらに二〇歳余りで大学在学中に結婚した事情も加わって、学生時代も生活のための旋盤見習工、語学教師等の職を転々としつつ、乱読に明け暮れる日々が続いた。『青い月曜日』や『見た・揺れた・笑われた』等の小説に描写されているこの若い日の読書は、飢えたり殴られたりするのと同じ「ほとんど肉体的といってよい体験」であったという。歴史と社会という巨大な檻の中に人間存在の肉体と精神を同次元でとらえようとする開高の視点は、この混乱期の、互いに共鳴しあう生活と読書体験とを通じて培われたのである。

旅・ルポルタージュ・文学

昭和三一年、洋酒会社の宣伝課員として上京した開高は、企画にその有能ぶりを発揮して活躍する一方、三三年には『裸の王様』で芥川賞を得て認められた。三五年中国と東欧に招かれたのを皮切りに、彼の作家活動は、九死に一生を得る体験をしたというベトナム戦争の取材を頂点として、国内外の旅及びそのルポルタージュと切り離せないものとなる。以来鋭い観察力と豊かな感覚によってとらえた同時代の様々な生が、彼の文学の有力なモチーフとなって今日に至っている。

■主要作品　『パニック』『裸の王様』『巨人と玩具』（昭三二）、『日本三文オペラ』（昭三四）、『輝ける闇』（昭四三）、『夏の闇』（昭四七）

安部公房（一九二四〜　）

前衛作家

安部公房は『終わりし道の標べに』で、異色の戦後派作家として登場した。この小説の冒頭に記された、「何故に人間はかく在らねばならぬのか？……」という問いは、その後安部が一貫して問い続けた問いであるといえる。人間の存在そのものを問題とするこの難解な問いに答えるため、彼は自然主義的な小説手法を捨て前衛的な手法を採用し、また、思想的にはコミュニズムに近づいていった。『赤い繭』『壁』等に示された、日本の近代文学の伝統にはない、超現実的、寓話的な手法は人々の注目を集め、昭和二六年には『壁』によって芥川賞を受賞している。その後も『飢餓同盟』『けものたちは故郷をめざす』『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』等の力作を発表し、現代の不毛性をえぐりながら、その中での人間的な生の可能性を追求し続けている。彼は日本では異端視されがちであったが、海外では早くから注目されており、特に『砂の女』は、アメリカほか数か国で翻訳されている。

戯曲家として

彼はまた、戯曲の分野においても、超現実的な手法を駆使した。『制服』『どれい狩り』『幽霊はここにいる』をはじめとして、谷崎潤一郎賞を受賞した『友達』、前衛的手法と、リアリズム演劇との統一を試みた『榎本武揚』等多くの傑作を生み出している。最近では、自ら演出にも乗り出し、また小説においても、問題作『箱男』を発表する等、小説・演劇の両分野に渡って世界の最先端に立って活躍している。

■主要作品　小説に『赤い繭』(昭二五)、『壁』(昭二六)、『砂の女』(昭三七)、『箱男』(昭四八)、『密会』(昭五二)、戯曲に『幽霊はここにいる』(昭三三)、『友達』(昭四二)

高橋和巳（一九三一〜一九七一）

誠実な思想家

高橋和巳は既に京都大学在学中より創作を志し、処女作『捨子物語』を同人誌に発表している。一方彼はまた、中国文学研究者としても研鑽を積み、昭和三四年、大学院博士課程を終えた。同時に同人誌『VIKING』に参加している。それ以後一時期を除いて、彼は中国文学研究者としての学究活動と創作活動を並行して行った。漢詩の世界に美を見いだしていた高橋和巳にとって、小説の世界は、荒涼たる心を抱いてもがき苦しむ世界であった。一人の知識人の破滅への道を描いた『悲の器』をはじめとして、学生時代の政治運動の体験をもとに、戦後の学生運動の挫折を描いた『憂鬱なる党派』、敗戦後、社会的に自己を葬るため孤島に一人住む、かつての国家主義者を描いた『散華』、一人の宗教的指導者を通じて、人間における観念の意味を問うた『邪宗門』等を通して、彼が追求し続けたのは、人間にとって思想・観念とは何であり、それを存在理由とする知識人が、現代を誠実に生きていく道はどこにあるのか、という問いであった。ただに小説においてばかりではなく、昭和四四年より闘われた京大闘争にあっては、自らその渦中に飛び込み、身をもって思想者としての誠実とは何かの問いに答えようとした。しかしながら、苦渋に満ちた思想的営為の果てに彼の肉体は結腸癌に冒され、昭和四六年、三九歳の若さで他界した。

■主要作品　小説に『悲の器』(昭三七)、『散華』(昭三八)、『憂鬱なる党派』(昭四〇)、『邪宗門』(昭四〇—四一)、『我が心は石にあらず』(昭四二)、評論集に『孤立無援の思想』(昭四一)、『わが解体』(昭四六)

遠藤周作（一九二三〜　）

日本人と基督教の狭間で

遠藤周作は幼年時代を満州の大連で送った。十歳の時、父母が離婚したため母に連れられて内地にもどり、神戸市に住んだ。伯母がカトリック信者であったことから、伯母と母とに連れられてカトリック教会に通い出し、一二歳で洗礼を受けた。のち母と別れ父の家にひきとられるが、彼が青年期、日本人としての自己の感覚と基督教との矛盾に苦しむようになった時にも、カトリック信者であることを放棄しなかったのは、ひとつには信仰が彼と母との間の絆になっていたためであろう。そうした〝矛盾〟を出発点として彼は大学時代、『神々と神と』をはじめ、評論を書き始める。この思想上の問題をさらに深刻なものにしたのは三年間の留学生活だった。ヨーロッパにおいて、とりわけ文化伝統の持つ重みを否応なく感じさせるフランスでの生活を通して、彼は以前にもまして東西文化の質的差異を覚えた。帰国直後に書かれた『アデンまで』には、そうした文化認識と共に白人の有色人種に対する差別観が描かれている。

闘病生活

留学は彼が健康を害することによって中断されたが、昭和三五年に再び肺患が悪化、三回の大手術を受け、三年にわたる闘病生活を余儀なくされた。大患は彼の作家生活に留学につぐもう一つの転機を形成し、病後、人間の弱さを深くとらえた『男と九官鳥』『私のもの』『四十歳の男』など短編の秀作が次々と書かれた。

■主要作品　『白い人・黄色い人』(昭三〇)、『海と毒薬』(昭三二)、『おバカさん』(昭三四)、『沈黙』(昭四一)、『死海のほとり』(昭四八)

三島由紀夫

西暦	年号	年	事項
一九二五	大一四		一月一四日、東京に誕生。
一九三一	昭六	6	学習院初等科に入学。
一九四一	一六	16	「花ざかりの森」を連載。
一九四四	一九	19	東京帝国大学法学部に入学。
一九四九	二四	24	『仮面の告白』
一九五一	二六	26	世界一周旅行。『禁色』
一九五四	二九	29	『潮騒』
一九五六	三一	31	『近代能楽集』『金閣寺』
一九五九	三四	34	「橋づくし」『鏡子の家』
一九六〇	三五	35	「宴のあと」
一九六一	三六	36	「憂国」
一九六五	四〇	40	「春の雪」
一九六六	四一	41	『英霊の声』
一九六八	四三	43	「楯の会」結成。「文化防衛論」
一九七〇	四五	45	一一月二五日、割腹自殺。

終戦まで

三島由紀夫ほど早熟の才を示した作家は日本近代文学史上まれである。少年時代の三島は「何が何でも小説家になりたいと思つてゐた」(『私の遍歴時代』)、そのような少年であったが、一三歳の時にすでに創作を試みている。終戦までの初期作品群を特徴づけているのは古典的・ロマン的傾向で、それは学習院の恩師清水文雄を通じて、雑誌『文芸文化』と接触をもったことによっている。『文芸文化』は現実(戦争)からほとんど遊離して、日本の古典美を語るのが主たる雑誌であった。『花ざかりの森』は、そのような傾向をもっともよく表している。

戦争末期の三島をとらえていたのは「夭折」の夢想で、その夢想においては個人の終末と時代的社会的な終末とが一致していた。したがって死ぬ機会が失われた終戦は、彼にとって「不幸」な出来事なのであった。

ギリシアの発見

少年期の夢想を終戦によって破られた三島は、作家として別の道を歩み始める。『煙草』によって戦後文壇に認められ、書き下ろした長編『仮面の告白』によって作家としての評価は定まった。三島に重要な転機をもたらしたのは、二六年一二月から翌年四月にかけての世界旅行である。とくにギリシアに「肉体と知性の均衡」を見いだしたことにより、感受性ばかり強い自分自身を否定する契機を得たのである。帰国後に書かれた『潮騒』は、自然と人間とが一体化し、近代的精神のかげりなど帯びていない若者を描いた、古代ギリシア賛歌である。昭和三〇年からは自身の肉体を鍛えるべく、ボディ・ビルを始めている。

人生の出現

十代の前半から小説を書き始めて自己の美意識を構築してきた三島に、人生あるいは行為という問題が意識されてきたのは、生来の虚弱体質をボディ・ビルによって改造する試みと表裏をなすものであった。『金閣寺』は、美意識が人生をどのようにつきぬいてゆくかをテーマとし、三島の転換を画する作品である。さらに『鏡子の家』においては、戦後という時代をどのように生きてゆくかをテーマとしている。

二・二六事件三部作

やがて三島は『憂国』『十日の菊』『英霊の声』という二・二六事件に取材した三部作を書くことになるが、その動機は、「昭和の歴史は敗戦によって完全に前期後期に分けられたが、そこを連続して生きてきた私には、自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠を、どうしても探り出さなければならない欲求が生まれてきてゐた」(『二・二六事件と私』)ところにあった。二・二六事件を、三島由紀夫の内なる「神」が死んだ実感を手がかりにとらえなおそうとしたのである。そして、「自分の連続性の根拠」として、また、「神」を生き返らせるために、「文化の全体性の統括者としての天皇」(『文化防衛論』)の復活を求めるようになる。また、文化と軍事両方が帰一する根源が天皇であるから軍事大権も天皇に回復されなければならない、としたのである。同じ時期に、三島は「文武両道」を唱え「楯の会」を結成して軍事訓練を始めたりしたが、そうした言動はあまり真剣に受け取られなかった。

その死

それだけに三島の死が与えた社会的衝撃は大きかった。昭和四五年一一月二五日、東京市ケ谷の自衛隊駐屯地で憲法改正のために自衛隊の蹶起を訴えた後、割腹自殺したのである。戦後日本の虚妄を衝く『豊饒の海』四巻の完成の日であった。

□作品解説

仮面の告白 中編小説。上流階級に生まれた主人公「私」の、幼年期から青年期にかけての多感な性の歴史を描く半自伝的な作品。

潮騒 長編小説。ギリシアの牧歌的な恋物語『ダフニとクロウ』を下敷きにし、南の海のさわやかな光と匂いを思わせる、若者新治と初江の恋愛物語。

金閣寺 長編小説。昭和二五年七月の金閣寺放火事件に題材をとっているが、内容は現実の事件そのままではなく、金閣寺の美にとりつかれた青年の心理劇となっている。主人公の「私」は吃音で、その吃音が「私」と外界とを隔てている。それとちょうど同じ関係で金閣寺は、「私」と人生との間に立ちはだかっているのである。「私」は自分の人生を手に入れるために金閣寺を焼く。これが物語のあら筋だが、作者はこの作品で自身の美意識を焼き滅ぼそうとしたのだと考えられる。

天人五衰(最終回)
―豊饒の海 最終巻―
三島由紀夫

▲『天人五衰』(豊饒の海)原稿

井上 靖

西暦	年号	年	事項
一九〇七	明四〇		五月六日、北海道に誕生。
一九三二	昭七	25	九大中退。京都帝大入学。
一九三六	一一	29	毎日新聞入社。
一九四九	二四	42	「猟銃」「闘牛」
一九五〇	二五	43	芥川賞受賞。
一九五一	二六	44	「白い牙」
一九五三	二八	46	「あすなろ物語」「風林火山」
一九五五	三〇	48	「淀どの日記」「黒い蝶」
一九五六	三一	49	「氷壁」
一九五七	三二	50	中国旅行。「天平の甍」
一九五八	三三	51	「楼蘭」
一九五九	三四	52	「敦煌」「蒼き狼」
一九六〇	三五	53	「しろばんば」
一九六三	三八	56	「風濤」
一九六四	三九	57	「後白河院」
一九六六	四一	59	「おろしや国酔夢譚」

生いたち　井上家は代々伊豆の医家であった。靖は軍医の父と共に各地を転転としたが、七歳の時父母のもとを離れて湯ケ島に帰った。靖を育てた祖母かのは亡祖父の愛人であり、彼女は本家に対する自己の立場の安定を図るためにも靖を引き取ったのである。かのは靖を溺愛し、靖もかのを慕ったが、こういう特殊な境遇は人間の関係と心理への視力を彼の裡に培った。また、夭折した美しい叔母のまちのイメージは幼い靖の胸にすみつき、後の作品に描かれる女性像に投影されることになる。

沼津中学時代は仲間達とかなり自由な日を送り、また初めて詩を知った。金沢の四高時代は理科だった。家業を継ぐものと自認していたからである。彼は専ら柔道に励んでいたが、三年になって退部してからは詩への興味が再燃し、室生犀星の詩にも魅了されて詩作を始めるようになった。彼は大学進学を文科志望にかえた。京大時代も詩作を続けるが、靖には将来の希望もなく暗い時代だった。結婚し子供ができると生活も苦しくなった。こういう時、『サンデー毎日』の懸賞小説募集に応じた作『流転』で千葉亀雄賞を受け、その縁で彼は毎日新聞に入ることになったのである。

記者時代　以後一五年間にわたる記者生活は、後の作家井上靖の形成に多く資するところがあった。彼は職場での競争からおりざるをえなかったが、この競争放棄の生活が彼に冷静な観察力と抑制の美学を定着させたのである。また、学芸部で与えられた宗教欄の担当は仏教に関する識見を深めて歴史小説への素養となり、同時に彼に調べることも教えた。美術批評を受け持ったことは、彼の詩や小説に著しい、イメージを核とした絵画的手法に結実したと考えられる。

小説家としての出発　終戦。新しい時代を迎えて、何かしなければならぬという焦燥が彼を見舞った。彼はつき上げてくる自己表現の欲望を感じた。『猟銃』を書きながら彼は小説家として立つ決心をしていた。この作品は好評で迎えられ、次いで『闘牛』により芥川賞を受賞すると、作家井上靖は堰を切ったように書き始めたのである。

作品の特徴　『猟銃』『闘牛』に続く現代小説は、『白い牙』『ある偽作家の生涯』『黒い蝶』『射程』『氷壁』など多い。そこに展開される人間のドラマは波瀾に富み、作者のストーリー・テラーとしての資質も示しているが、物語の果てには、「人生の白い河床」(詩『猟銃』)が――孤独な生の寂寥が、スタティックな詩情となって浮かび上がっている。

現代小説に並行して歴史小説も書いていく。中でも『戦国無頼』『風と雲と砦』『風林火山』などは娯楽的要素が強く、井上自身区別して時代小説と呼んでいる。だが、それらの作品も戦国時代という非情な歴史の渦の中にのみ込まれてゆく人間の孤独と悲哀を描き、作家井上靖の詩情に貫かれている。

他方、井上のいう歴史小説は、なるべく史実を尊重しようとするもので、『天平の甍』『楼蘭』『敦煌』『蒼き狼』などに始まる。これらは特に西域物といわれ、彼が早くから心をひかれていた中国の西域――多くの民族が興亡を繰り返す中央アジアの荒涼たる自然を背景とし、人間の営為と歴史の潮流との対照の中に独自の小説世界を生み出している。さらに『風濤』『おろしや国酔夢譚』では、正確なものだけが美しいという思念から、叙述を史実で固めんとする傾向を深め、『後白河院』では複数の眼によって真実の人間像をとらえようと試みた。

また、井上は『あすなろ物語』『しろばんば』『私の自己形成史』他の自伝的小説や随筆で自己の感受性成育の跡をたどってきたが、近年の『月の光』『桃李記』などの私小説風な作品では、老年の意識とともに、自然にかつ自由に描くという筆致が濃くなっている。

□作品解説

闘牛　中編小説。終戦直後、新興新聞の編集長津上は、社運を賭した闘牛大会を開催したが大失敗する。津上は孤独で傍観者的であり、井上文学に出てくる主人公の典型。

氷壁　長編小説。冬の前穂高東壁でナイロン・ザイルが切れた。主人公魚津恭太は友のその転落をめぐって社会の疑惑を受け、苦しむ。その友の妹との恋。恋の成就を賭けて自然に挑み、そして敗れる死の山行は清浄な詩美に包まれて哀切である。

▲『氷壁』の舞台・穂高

年	年号	年齢	事項
一九三七	一二	29	療のため入院。初代と心中未遂。離婚。「二十世紀旗手」
一九三八	一三	30	「満願」「姥捨」
一九三九	一四	31	石原美知子と結婚。「富嶽百景」『女生徒』
一九四〇	一五	32	「駈込み訴へ」「走れメロス」「ろまん燈籠」
一九四一	一六	33	『東京八景』、『新ハムレット』
一九四二	一七	34	『正義と微笑』
一九四三	一八	35	「帰去来」『右大臣実朝』
一九四四	一九	36	『新釈諸国噺』『津軽』
一九四五	二〇	37	『惜別』『お伽草紙』「パンドラの匣」
一九四六	二一	38	「冬の花火」「春の枯葉」
一九四七	二二	39	「トカトントン」『ヴィヨンの妻』 一一月一二日、太田静子が治子を出産。『斜陽』
一九四八	二三	40	「桜桃」「人間失格」「グッド・バイ」 六月一三日、山崎富栄と入水自殺。

て生きようと決意したのである。石原美知子と見合いし井伏の媒酌で結婚、甲府市御崎町に新居を構え、健全な小市民の暮らしを志した。以後創作に専念し、作風も『晩年』『二十世紀旗手』時代の実験的な前衛小説から『満願』『富嶽百景』などの精緻な短編小説に転じ、それらはおおむね、この人生により美しいものがそれとしてありうる、その明るい面を取り出そうとする姿勢をもって書かれた。こうして『走れメロス』『駈込み訴へ』『新ハムレット』など、古典を現代に生かした秀作を続々と発表し、敗戦までの間、生涯で最も生活が安定し、文学的にも充実した時期を送った。特に、ほとんどの作家が時局との迎合から文学的に荒廃し、あるいは文学をやめてしまった戦争末期、『右大臣実朝』『お伽草紙』などの太宰の創作活動は、当時文学を志す青年たちに唯一、かすかな希望をもたらす通風口であったといっても過言でなかった。

戦後・『人間失格』まで

だが、戦争中は一庶民として戦争を容認した太宰は、戦時をくぐりぬけた多くの文学者と同じく、戦後、文学的立場において苦境に立たされた。はやくも戦後の民主主義的風潮に便乗的な文壇ジャーナリズムの傾向に憤った太宰は、「無頼派」の立場から友人知己に保守党加盟を宣言したりするが、時代の精神的空白と混乱に抗するものを築き得ず、次第に文学者としての生活も疲弊してゆく。昭和二一年に書かれた戯曲『冬の花火』は、マッカーサー司令部の検閲で上演中止となった作品だが、そこで太宰は主人公島田数枝に、「ばかばかしい、みんな、ばかばかしい。これが日本の現実なのだわ。さあ、日本の指導者たち、あたしたちを救って下さい。出来ますか、出来ますか。えい、勝手になさいだ。あたし、東京の好きな男のところへ行くんだ。理想も落ちるところまで、落ちて行くんだ。へちまもあるもんか」といわせ、戦後の日本の現実社会に対する絶望を思いのたけぶちまけ、それに対する唯一のプロテストとして、『トカトントン』では「マタイ伝」の「身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者どもをおそれよ」ということばを取り上げ、以後ひたすらその聖句の名のもとに〝滅亡の美〟を描き出した。

昭和二二年一月、かねてより文通のあった太田静子が太宰の仕事部屋を訪れ、翌月太宰は彼女と一週間、足柄で過ごした。このとき静子から借りた日記をもとに『斜陽』が書き起こされた。三月には山崎富栄を知り、『斜陽』を書き続ける一方、仕事をする太宰の身辺の世話をする富枝との仲もすすんでいった。一一月一二日には太田静子が女児を出産するが、太宰は夏から結核が再発し、この年の暮れから心身の衰弱がめだっていった。二三年に入ってからも『人間失格』『桜桃』『グッド・バイ』と書き続けたが、五月には身心ともに極度に疲労・衰弱し、しばしば喀血するまでになっていた。そして遂に、六月一三日、山崎富栄と玉川上水に入水、四〇歳の生涯を閉じた。一九日になって遺体が発見され、その一周忌に、六月一九日が桜桃忌と名づけられた。

□作品解説

富嶽百景 中編小説。御坂峠に滞在中の、生活上転機にある自身が、富士という大自然に対した時の心象をスケッチ風に描いたものである。筆致も明るく闊達で、健康で澄み切ったユーモアがちりばめられている。

斜陽 中編小説。かず子の弟直治はデカダン文学青年であったが、大学中途で召集され、ひどい阿片中毒になって帰ってくる。弟を心配し、かず子は無頼の作家上原二郎を訪ねるが、そのときの思い出はそれまで恋愛を知らず結婚生活を送っていた彼女に〝ひめごと〟として残る。かず子は離婚した。やがて「日本で最後の貴婦人」として心から慕った母が死ぬと、一切を失ったかず子の生きる道は恋愛以外になかった。かず子は上原を訪ねるが、ふたりが一夜をともにした翌朝、直治は自殺していた。

人間失格 中編小説。死の直前の作。太宰文学の総決算。作家的出発に至るまでの精神的自叙伝。人間の心に潜む「おそろしいもの」を恐れる故に、家や世間、恋愛と革命に対して裏切りをなし続けた主人公大庭葉蔵は、ついに自身が周囲の人間から裏切られる。〝真実〟を希求するが故に、非人間的な社会から排斥され崩壊してゆく自己を描くこの作品のなかで、太宰は恐るべき人間不信と、救済希求の念を告白している。

▲太宰治（昭和23）
玉川上水付近で

太宰治

西暦	年号	年	事項
一九〇九	明四二	1	六月一九日青森県に誕生。
一九二三	大一二	15	県立青森中学校に入学。
一九二七	昭二	19	弘前高校英文科入学。
一九三〇	五	22	敬慕する井伏鱒二に会う。一一月、田部シメ子と江の島の海岸で投身自殺を図る。
一九三一	六	23	小山初代と結婚。
一九三三	八	25	「魚服記」「思ひ出」
一九三五	一〇	27	三月、自殺未遂。東大中退。「道化の華」「ダス・ゲマイネ」
一九三六	一一	28	『晩年』一〇月、パビナール中毒治

少年時代

太宰治は津島源右衛門、タネの六男として生まれた。本名は津島修治。津島家は当時「津惣」(後に∧源)と通称された青森県下有数の大地主で、金木銀行も経営した源右衛門は県会の有力議員でもあり、後に貴族院議員になっている。津軽に生まれ育ったこと、生家が大地主であったこと、六男坊として育ったこと、この三つは太宰治の生涯と文学を理解する上で重要なことである。青年時代の左翼運動への参加と離反、そこから繰り返された自殺未遂にみられる自己滅却の衝動は、出身階級にまつわるコンプレックスによるところが大きい。また生母が病弱であったため、生まれるとすぐ乳母に育てられ、のち叔母きゑと子守りの越野たけに養育された。たけは『津軽』で描かれたように太宰にとって"永遠の女性"となった人だが、六男坊として生まれ、少年時代から肉親への愛に飢えていたことが、後に太宰に繰り返し自己の少年時代を作品化し、家について語らせることになったのであろう。

一六歳ごろから作家になることを秘かに願望し、校友会誌に創作を発表したり、同人誌を出し始めた。中学・高校時代を通じて創作を続け、多くの同人誌を刊行するが、それらの多くは芥川龍之介の稚拙な模倣を出ていない。しかし、この文学少年は兄たちと異なり、優秀な生徒として中学時代を過ごし、一家の期待を担って四年修了で弘前高校へ入学することになる。

高校・大学時代

高校へ入ってまもなく、かねて傾倒していた龍之介の自殺に激しい衝撃を受け、青森や浅虫の料亭に通いだすなど、生活の上でも変化を生じた。そのとき知った青森の芸妓小山初代と親しい仲になり、のち上京した彼女と同棲するようになる。こうした生活から秀才太宰の学業成績は下がる一方だった。しかしそれは放蕩や文学のためばかりではない。彼の高校時代には全国に共産主義運動がひろがり、ほとんどの大学、高校に共産党の組織ができた。弘前高校もこうした日本の情勢の例外でなく、太宰は高校二年のとき新聞雑誌部の委員となり、共産主義に接触した。翌年には出身階級に悩み、学業成績その他の問題がからんで最初の服毒自殺を図るなど、自身の政治活動の力の限界に負い目を抱きながらも、彼は政治と文学双方の活動を続けていこうとした。

昭和五年、大学入学後まもなく、かねてから敬慕する井伏鱒二に会い、以後永く師事することになる。秋には初代が上京し、家から義絶に近い状態で分家、結婚することになった。この年銀座のカフェーの女給田部シメ子と江の島で投身自殺を図った(このことは『道化の華』や『虚構の春』に描かれている)。その結果、シメ子だけが死に、太宰は自殺幇助罪に問われ、終生いやし得ぬ罪悪感を残すことになる。彼はすべての理想を失い、ニヒリズムの中でしばらく痴呆状態で暮らすばかりだった。が、そうした暗澹たる生活のなかで一点の希望の灯がともった。どうせ滅びるならこういう愚かしい男もいたのだということを書き残しておきたい、と遺書を書くつもりで『思ひ出』を書き始めたのである。昭和七年、二四歳のときのことであった(発表は昭和八年)。

作家としての出発・『晩年』の時代

こうして彼の創作活動は再開された。初めて太宰治のペンネームを使い、同人誌『海豹』をはじめ文芸雑誌に短編小説を続々と発表していった。けれども転向の傷痕は癒えず、昭和一〇年三月、都新聞社入社試験失敗による自殺未遂、翌月には急性盲腸炎に腹膜炎を併発し重態、その後鎮痛剤による薬品中毒に苦しむなど、依然として死と背中合わせの日々が続いた。

昭和一一年六月に刊行された処女短編集が『晩年』と題されたゆえんである。さらにこの年には、以前からの薬品中毒治療のため、周囲の人々の配慮によって精神病院へ強制入院させられるという事件が起きた。信頼していた先輩・友人たちから裏切られたというおもいは彼にとって大きなショックであった。退院後すぐ『HUMAN LOST』を書いたが、後年の『人間失格』のライト・モティーフもこのときの体験にある。さらに、この入院中に初代が親戚の青年と関係したことを知って衝撃を受け、初代と水上温泉へ行き自殺を図るが未遂に終わり、帰京後離婚することになる。そのことは、後『姥捨』に書かれたが、こうした度重なる絶望から太宰は書く気力も失い、二年近くほとんど筆を絶ち、荒廃と虚無の日々を送った。

再出発・『右大臣実朝』まで

昭和一三年、三〇歳の太宰は井伏鱒二の招きで御坂峠の天下茶屋に二か月間こもり、再出発を志す。文学と実生活を一致させることの不可能を知った太宰は、実生活においてではなく文学の中だけに表現者とし

堀 辰雄

西暦	年号	年	事項
一九〇四	明三七		一二月二八日、東京に誕生。
一九二五	大一四	21	東京帝国大学国文科入学。
一九二六	一五	22	『驢馬』創刊。
一九二七	昭二	23	「ルウベンスの偽画」(初稿)
一九三〇	五	26	「聖家族」
一九三二	七	28	「燃ゆる頰」
一九三三	八	29	「美しい村」
一九三四	九	30	「物語の女」
一九三六	一一	32	「風立ちぬ」(一三年に完結)
一九三七	一二	33	「かげろふの日記」
一九三九	一四	35	「ほととぎす」
一九四〇	一五	36	「姨捨」
一九四一	一六	37	「菜穂子」
一九四三	一八	39	「大和路、信濃路」
一九五三	二八	49	五月二八日、追分にて死亡。

幼年時代

堀辰雄は、父堀浜之助、母西村志気の間に生まれた。浜之助には正妻こうとの間に子供がなかったため、辰雄は堀家の嫡男として届けられた。しかし、母は翌々年辰雄を連れて堀家を出、後に上条松吉の妻となった。こうした事情を幼年期の辰雄は知る由もなかったが、それでもなお、自分の出生の秘密への予感があったことは事実である。ただ、当時の彼はそうした秘密を探り出す事はせず、逆にそれを受け入れ、その上でむしろ快活な少年時代を過ごしたようである。このような運命との関わり方は、現実の上に一つの別の世界を造り上げる事で現実を超えようとする堀辰雄の性癖の、最初のあらわれと見ることができ、それは現実の外の「物語の世界」へと誘ったのであった。

文学の世界へ

一高へ進学した堀辰雄は、寮で神西清と知り合い、数学者を夢みていた堀を文学へ向かわせる最初のきっかけとなった。同じころ室生犀星・芥川龍之介に知遇を得たが、特に龍之介には決定的な影響を受けた。彼によって開かれた眼でヨーロッパの詩人・作家達を見、自分の求めているものが現実の上に構成されたもう一つの世界、詩的世界であることを、知るようになって行く。また犀星の所に出入りしていた中野重治・窪川鶴次郎らと始めた雑誌『驢馬』には、毎号コクトオやアポリネール等の詩の翻訳や自作を載せ、彼自身の世界を作るための準備を徐々にしていった。

小説家として

堀辰雄が決定的な自己の作品を持ったのは、昭和五年の『聖家族』によってである。彼は、すべてが虚構によって構成されたラディゲの小説の中に自己の方法を見いだし、それによって自身の意識―不在の何物かによって現実が構成されているといった意識―をはじめて定着することに成功したのである。彼はこの作で文壇的にも小説家として出発することを得たのだが、同年最初の喀血を経験し、宿痾となった肺結核もこれと時を同じくすることとなった。

この後、堀は様々の作家を発見しつつ、同時にその影響を受けた作品を発表して行った。昭和七年にはプルーストに心を寄せ、その、瞬間の感動や印象から現実以上の存在を引き出す方法は、翌年の『美しい村』に生かされている。さらに昭和九年には、彼が最も傾倒したリルケに親しみはじめた。同年『マルテ・ロオリッツ・ブリッゲの手記』を翻訳し、この作品から、人間の世界は「死」と「神」とに最初からまた最後的に凌駕されているという思想を読みとったと述べている。つまり、ここで堀は、作家として行って来た試みの意味を、思想的課題としてはっきり意識したと言える。また、実生活面でも翌一〇年には婚約者矢野綾子の死を経験し、それは『風立ちぬ』の中に結晶する。『風立ちぬ』の中で堀は、最も近々と死に面しているが、同時にそうすることで作者は、自分が生きていることを確かに感じている。

『風立ちぬ』以後

『風立ちぬ』を書きあげた堀は、日本古典の世界に題材をとり、遠い過去の王朝時代の女性達を主人公として、『かげろふの日記』『ほととぎす』『姨捨』『曠野』などを書く。また昭和一六年には『菜穂子』を書くが、作者自身の意図にも関わらず、すでに『風立ちぬ』を書いた彼には、それを一個のロマンとして作り上げることはむずかしかった。『菜穂子』は当初意図した形ではなく、すでに物語が起こり得なくなった地点で書き始められているのである。

また、それらの作品を書きはじめたころからは、病気のあい間には奈良などに旅行を行い、『大和路、信濃路』にまとめられるような紀行文を書いている。しかし、終戦時ごろからはそれも不可能な体の状態となり、昭和二八年に信州追分の自宅で死去した。

□作品解説

美しい村　短編小説。「序曲」「美しい村」「夏」「旅の絵」の、軽井沢を舞台とした四つの短編から成る小説。四つの短編が、互いに独立しつつ物語の核心に深くつながって、一つの詩的世界を形成している。美しく磨き上げられた文章によって、人間の繊細な感情を見事に形象化している。

風立ちぬ　長編小説。「私」は、結核のためサナトリウムに入院する婚約者に付き添い、ともに生活を送る。サナトリウムの日々を、生と死それに愛を主題として克明に追ったこの作品は、その詩的文体と叙情性、そして「愛と死」という堀辰雄の一貫したテーマを結実させたものとして代表作となっている。

▲堀辰雄の婚約者　矢野綾子

井伏鱒二

西暦	年号	年	事項
一八九八	明三一		二月一五日、広島県に誕生。
一九一七	大六	19	早稲田大学予科一年に編入。
一九二三	一二	25	「幽閉」
一九二八	昭三	30	雑誌『文芸都市』の同人。
一九二九	四	31	「山椒魚」
一九三〇	五	32	『夜ふけと梅の花』
一九三五	一〇	37	「集金旅行」
一九三七	一二	39	『ジョン万次郎漂流記』
一九三八	一三	40	直木賞受賞。
一九三九	一四	41	「多甚古村」
一九四一	一六	43	陸軍に入隊。シンガポールへ行く。
一九四九	二四	51	「本日休診」
一九五〇	二五	52	「遥拝隊長」
一九六五	四〇	67	「黒い雨」(～昭四一)
一九六六	四一	68	文化勲章受賞。
一九七七	五二	79	『スガレ追ひ』

絵画から文学へ

井伏鱒二の生家は広島県の山村の大地主で、彼はそこの次男として生まれた。小説家を志していた兄の影響もあってか、井伏は、小学校五年のころには、村に回って来る巡回文庫を借りて、冒険小説や国木田独歩等を愛読していた。明治四五年、福山中学へ入学し、寄宿舎に入ったころから、彼は近視になったが、寄宿舎では、下級生が眼鏡をかけると、上級生が生意気だといって制裁を加えたため、眼鏡をかけることができなかった。このため近視の度は進み、視神経の疲労から神経衰弱にすらなり、次第に、引っ込み思案で孤独を好むようになった。当時寄宿舎では、小説を読むことが堅く禁じられていたこともあって、井伏は、こうした鬱屈した心を慰める道を絵画に求めた。在学中から日曜日ごとには郊外写生に出かけたりしていたが、大正五年、中学を卒業すると、三か月をかけて奈良、京都に写生旅行をし、そのスケッチを携えて、京都の日本画家橋本関雪のもとを訪れ、入門を乞うた。しかし、入門は許されず、井伏はやむなく兄の勧めに従って、文学に志望を変え、早稲田大学予科一年に入った。

長い習作時代

大正八年、早稲田大学文学部に進んだころより、小説を書き始め、在学中、いくつかの習作を書きためた。彼は、同級生の青木南八と親交を結び、彼の所へ動物に材料を採った幾編かの小説を送ったりしている。また、絵画への志も捨てきれず、大正一〇年には、日本美術学校別格科へ週に一、二回通っていた。彼は必ずしも勤勉な学生ではなかったが、比較的順調に学生生活を送っていた。ところが、大正一〇年、片上伸教授と衝突し、これがきっかけとなって、翌年早稲田大学を退学しなければならなくなった。同時に、美術学校もやめ、生活の糧を得るために、田中貢太郎の翻訳を手伝ったり、小さな出版社に勤めたりした。この間、同人雑誌『世紀』に参加し、学生時代の習作の一つ「幽閉」を発表した。『世紀』が、関東大震災のため廃刊となった後は、着実に創作を続けながら、同人雑誌等に少しずつ作品を発表していた。

庶民と共に

昭和に入ると、彼は徐々に注目されるようになった。雑誌『文芸都市』の同人となり、同誌に「谷間」「山椒魚」(「幽閉」を改作したもの)を発表して、ようやく文壇に認められるようになった。当時全盛をきわめていたプロレタリア文学に対抗して結成された新興芸術派の一員に彼も連なり、「新興芸術叢書」の一冊として、最初の作品集『夜ふけと梅の花』を刊行した。しかし、青春の鬱屈した心理や、田舎ののびやかな風俗を、独特のユーモアを交えたきめ細かな文体で綴っていた井伏は、新興芸術派の中でも異質であり、その存在も決して派手なものではなかった。昭和六年「丹下氏邸」を発表して以降、名もない庶民の生活を愛情を持って描いた作品が多くなり、それと共に円熟味も増してきた。昭和一〇年に『集金旅行』、一三年に『ジョン万次郎漂流記』、一四年に庶民的感覚のあふれる傑作『多甚古村』を書いている。

このころより時代は次第に戦争へと向かい、やがて太平洋戦争に突入する。こうした中で、井伏は一庶民として、大多数の戦争賛美者の非合理性・観念性を見抜きながらも、戦争に巻き込まれていかざるを得なかった市井の人々と共に進むという姿勢を保った。この姿勢は敗戦後も引き継がれ、昭和二四年に『本日休診』、二五年に戦争の非人間性を批判した『遥拝隊長』を発表した。昭和四〇年には、広島に落とされた原爆を一人の勤め人の目で描いた『黒い雨』を発表し、一貫した態度を示している。その後も、優れた随筆も交え、数多くの作品を発表して今日に至っている。

□作品解説

黒い雨 長編小説。連載当初「姪の結婚」と題されていたが、途中から「黒い雨」と改題された。被爆者であるために結婚できない姪を持ち、自身も原爆体験者である閑間重松の回想という体裁で、被爆直後の広島の惨状を描いた小説。原爆という政治的な題材を、あくまでも一人の勤め人の立場からだけ描くことによって、その悲惨さをリアルに表現し得ており、優れた原爆批判小説となっている。

▲『黒い雨』外箱の絵

川端康成

西暦	年号	年	事項
一八九九	明三二		六月一一日、大阪市に誕生。
一九二一	大一〇	22	第六次『新思潮』発刊。「招魂祭一景」
一九二四	一三	25	『文芸時代』創刊。
一九二六	一五	27	「伊豆の踊子」
一九二九	昭四	30	「浅草紅団」
一九三三	八	34	「禽獣」
一九三五	一〇	36	「夕景色の鏡」(『雪国』の断章。完結版『雪国』は23年刊。)
一九四二	一七	43	「名人」
一九四九	二四	50	「千羽鶴」「山の音」
一九五四	二九	55	「みづうみ」
一九六〇	三五	61	「眠れる美女」
一九六八	四三	69	ノーベル文学賞受賞。
一九七二	四七	73	四月一六日、ガス自殺。

十六歳の日記

川端康成の父栄吉は医師であったが、三歳の時に死別、翌年母も死に、祖父母の下で暮らす。祖母も数年後に死亡し、別に預けられていた姉も亡くなり、祖父と二人の生活が約一〇年間続く。このように、祖父だけが少年時の川端に残された唯一の肉親の情を経験しうる相手だったが、その祖父とも一五歳で死別する。こうした肉親の相次ぐ不幸によって、人生の入り口において「孤児」となった経験は、後に川端自身が言うように、川端文学の根底をなすものとなった。この、死を前にした祖父との日日を、ほとんど残酷とも言える正確さで写したのが、『十六歳の日記』である。この日記は、平易な行文の中に、死にゆく老人の姿を余す所なくとらえており、後年の川端の作品の特徴とされる、虚無の非情に基づいた透徹した眼を、このころの彼が既に所有していたことを示している。

新感覚派時代

祖父の死後は伯父の家に引きとられ、やがて一高、東大へと進む。東大では、石浜金作、今東光らと第六次『新思潮』を創刊し、その第二号に発表した「招魂祭一景」で菊池寛、久米正雄らの称賛を得、作家としての一歩を進めた。大正一三年大学を卒業し、当時の新進作家二〇人ほどが集まって創刊した『文芸時代』に加わる。同人には横光利一、中河与一、今東光らがいて、ここに新感覚派運動が起こった。新感覚派運動は、自我を感覚や神経の束と考え、これに新しい表現を与えることで文学の改革を成し遂げようとしたものだが、大正一五年の創作集『感情装飾』の斬新な作風で注目された川端は、横光と共に、その代表作家と目されるようになる。とはいっても、川端はその運動の中心的存在であったわけではなく、『感情装飾』以後の数年間はむしろ自己にふさわしい表現を求めて、苦しい模索を続けていたのである。

なお、大正の終わりから昭和の初期まで執筆した「文芸時評」も、自己の創作意識に立った的確な批評として、同時代の文学に大きな影響を与えたことも、忘れてはならない。

『雪国』など

昭和八年発表の『禽獣』は、川端の非情な眼と透徹した感覚が虚無の世界を生み出すことに成功した作品で、彼の模索に一つの区切りをつけるものとなった。そして、昭和一〇年からの『雪国』で彼は、自己の資質に見合う方法を見いだした。そこで川端が描く美しい自然も女も、実はすべて夢幻として作り出されるものであり、その幻のゆらめきの中に瞬時に描き出されたものこそが美や生命の実質であるというのが、彼の改めて発見した思想であった。

第二次大戦中はあまり作品を発表せず、反時代的意志に基づくように、王朝時代の物語の読書に没入したが、これが戦後の川端の文学へと大きくふくらんでゆくこととなった。

戦後

昭和二二年、死亡した横光利一への弔辞の中で「僕は日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」と語った川端は、「日本古来の悲しみのなかに帰ってゆく」(『哀愁』)ことを決意する。すなわち、戦後のアメリカ化と民主主義謳歌の風潮の中で、むしろ進んで孤立し、彼の孤独が作り出して来た文学世界に、失われようとしている日本の伝統的な文学の世界を通い合わせることによって、底知れぬ無の意識と幻想的な美しさに息を通わせ、独自の境地を作り上げようとしたのであった。『千羽鶴』『山の音』などの戦後の名作は、その見事な成功の例である。昭和四三年には日本人初のノーベル文学賞を受賞したが、昭和四七年自らの命を断った。

□作品解説

伊豆の踊子　中編小説。二〇歳の一高生である「私」が、伊豆の旅先で旅芸人の一家と道中を共にし、彼らと心を通わせ合うさまを、一四歳の踊り子との淡い恋愛感情を中心として描いた作品。

雪国　長編小説。島村は上越の温泉で駒子という芸者に会い彼女の純粋で無垢なあり方の美しさに心惹かれる。そうした島村の目にもう一人葉子という娘のひたむきな生きざまが強い印象を残す。島村という感性の鏡が映し出す瞬間の美を描いた叙情文学の名作。

▼『雪国』冒頭の場面
――国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。――

横光利一

西暦	年号	年	事項
一八九八	明三一	1	三月一七日、福島県に誕生。
一九一六	大五	19	早稲田大学高等予科入学。
一九二三	一二	26	「蠅」「日輪」「碑文」
一九二四	一三	27	『文芸時代』創刊。「頭ならびに腹」
一九二五	一四	28	「新感覚論」
一九二六	昭元	29	「ナポレオンと田虫」「春は馬車に乗って」
一九二八	三	31	中国旅行。「上海」(～昭六)
一九三〇	五	33	「機械」「寝園」
一九三四	九	37	「紋章」「時計」
一九三五	一〇	38	「純粋小説論」「家族会議」
一九三六	一一	39	欧州旅行。
一九三七	一二	40	「旅愁」(未完)
一九四七	二二	50	「夜の靴」一二月三〇日、胃潰瘍で死去。

資質の開花

新感覚派の代表横光利一は小説の神様といわれ、戦前の昭和文学を導いた作家である。彼は幼少のころ鉄道敷設技師の父に従い各地を転々としていた。中学のときはむしろ運動選手として活躍していたが、四年の時彼の文才を認める国語教師があらわれると、彼はにわかに文学に興味を持ち始め、小説家になろうという野心を抱いた。そして、工科希望の父の反対を押し切り、早稲田大学高等予科に進学した。

早稲田での横光は学業をよそに夢中になって小説を書き、雑誌・新聞に習作を投稿していた。当時の作品は私淑していた志賀直哉ふうの写実的方法と、持ち前の意匠に満ちた構成的方法の混入したものであったが、次第に後者が中心となり、大正一二年、『日輪』を発表して、その文体の斬新さで文壇に大きなショックを与えた。

戦う新感覚派

そのころ、第一次大戦後の西欧の新文学、表現主義・構成主義などの影響を受けていた若い作家たち横光・川端康成・片岡鉄兵らは、関東大震災で既成の社会や文化が混乱すると、翌大正一三年、新たに『文芸時代』を創刊し、「来りつつある新時代の道徳と美の建設」を目指して新感覚派を形成した。横光は『新感覚論』によって自派の宣言をし、「国語との不逞極る血戦時代」に突入したのである。創刊号に発表された彼の『頭ならびに腹』の冒頭文「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は小石のやうに黙殺された」にみられるように、言語の感覚的配列と飛躍的印象手法によって、彼は平板な自然主義・私小説の文壇に敢然と立ち向かった。

また彼らにはもうひとつの相手があった。大正一三年に発刊した雑誌『文芸戦線』を母体とした唯物史観によるプロレタリア文学で、横光は『ナポレオンと田虫』や『上海』などで対抗した。この時代は横光にとって「マルキシズムとの格闘時代」だったのである。

純粋小説論

昭和四年から五年にかけて、「意識の流れ」を追う新心理主義が西欧の新しい文芸思潮として日本に紹介されると、それによって横光は大きく転進した。昭和五年に発表された『機械』は新文学の出現として迎えられたのである。これは、「見えざる機械」である心理が人間を動かし続けるという認識のもとに、自意識の流動を独自的な心理描写でもって写し出した意欲的な試みであった。この新しい心理主義によって唯物史観と自然主義の包囲陣を脱出すべき血路を見いだした横光は、以後、『寝園』『時間』『雅歌』『紋章』などの力作長編を続々と書き表していった。

昭和一〇年の『純粋小説論』は、私小説の日常的必然性、及びプロレタリア文学の科学的必然性主張に反発して、現実認識における偶然性を重視し、その地点に芸術小説と大衆小説の融和した純粋小説を見いだそうとしたものである。その偶然論は小説の方法として実作に移されると『家族会議』となったが、一方思想としては、論理の飛躍を是認し、観念の神秘化と精神万能主義的傾斜を容認する方向に向かってゆく。

敗戦と晩年

昭和一一年、二・二六事件起こる。折しも横光は欧州航路の船中にあった。しかし、欧州は今の彼にとってそこは違和と孤独の地でしかなかった。ひたすら民族の意識を強めて帰国した彼は未完の大作『旅愁』を起稿した。パリに留学する青年たちの青春図絵の中に東洋対西洋の問題を追究し、解体した近代精神の再建を図って東洋伝統の精神主義への回帰を意図したこの作品は、横光が作家としての自己を賭けたものであったが、それだけに、戦況が悪化し、敗戦となると彼の失意は大きかった。疎開地における生活日記・敗戦日記である『夜の靴』は、禅や俳句を通じて寂しくも静かな晩年の息づかいを漂わせている。焼け野原の東京に帰った横光利一は間もなく死んだ。

□作品解説

旅愁 長編小説。パリを主要舞台として日本主義者の矢代、西洋主義者の久慈、その他の人物が、西洋対東洋の対決をテーマに議論を繰り広げるという一種の思想小説。これに矢代の恋愛も加えて描かれるが、これも相手の女性がカトリック信者であるという理由で矢代が結婚を思い悩むという思想的設定がなされており、全体に概念的・独断的傾向がみられる。未完。

▲『旅愁』原稿

西暦	年号	年齢	事項
一九二〇	九	29	長男比呂志誕生。「舞踏会」「秋」「南京の基督」
一九二一	一〇	30	中国を旅行。旅行後より神経衰弱になり、不眠症に悩む。
一九二二	一一	31	次男多加志誕生。「藪の中」「将軍」
一九二三	一二	32	「保吉の手帳から」「侏儒の言葉」連載開始(〜大一四)。
一九二四	一三	33	「少年」「十円札」
一九二五	一四	34	三男也寸志誕生。「大導寺信輔の半生」
一九二六	一五	35	肉体は極度に衰え、精神も異常をきたし始める。「点鬼簿」「玄鶴山房」
一九二七	昭二	36	「河童」「文芸的な、余りに文芸的な」七月二四日、田端の自宅で服毒自殺。遺稿「歯車」「或阿呆の一生」「西方の人」「続西方の人」

派のデモンストレーション〉の観を呈した。短編集『羅生門』に示された卓抜な技巧と、洗練された感覚、鋭い知性を武器として文壇に登場してきた龍之介は、反自然主義文学のチャンピオンと目されるようになった。自然主義派からの、実生活の重みが描かれていないという批判に対し、龍之介は『戯作三昧』『地獄変』等を書き、作家にとって真の人生とは、日常生活の中にではなく、作品を創る過程の中にだけ存在すると主張した。彼はまた、評論「芸術その他」を著し、作家は作品全体をその細部に至るまで、意識によって支配すべきであるという〈意識的芸術活動〉を提唱し、独自の芸術至上主義を主張した。

大正七年二月、龍之介は、かねてから婚約していた塚本文と結婚し、伯母フキを交えて、鎌倉で新生活に入った。大正八年、東京にもどるまでの鎌倉での一年間は、実生活の上でも彼の生涯中、最も幸福な期間であった。またこの時期は、芸術的にも彼の創作活動が一つの頂点に達した時期であり、『奉教人の死』『枯野抄』『戯作三昧』『地獄変』等が書かれている。これらの小説により、文壇の中堅作家としての位置を占めた。

ぼんやりとした不安

作家としての地位が確立されるにつれて、時間的に制約の多い海軍機関学校の教官を続けていくことは困難となり、彼は師漱石の例にならって、大正八年三月、大阪毎日新聞社の社員となった。再び田端の自宅にもどった龍之介は、以後創作に専念し、本格的な作家生活に入った。他方、大正九年三月には長男比呂志が生まれ、作家としても、また実生活においても、安定期を迎えるかのごとく見えた。

しかし、『奉教人の死』『地獄変』等で一つの頂点を窮めた彼の歴史小説は、このころから停滞の兆を見せ始めていた。このため、彼は作風の転換を図り、それまでの歴史小説一辺倒から転じて、現代小説も試みるようになった。『秋』を経て、現代小説への傾斜は次第に強まり、歴史小説は、『六の宮の姫君』を最後に書かれなくなった。代わって、身辺雑事に取材した一連の小説、『保吉の手帳から』『少年』等を書くようになった。

これより先、大正一〇年春、彼は毎日新聞社から派遣されて中国を旅行したが、この旅行以後、病気がちとなり健康は次第に悪化していった。これと並行するようにして、神経も衰弱し始め、睡眠薬なしでは一睡もできないようになった。大正一四年、芥川は半自伝小説『大導寺信輔の半生』を書き、それまでほとんど黙していた自己の生涯について語り、『点鬼簿』では、初めて実母の発狂を明かした。このころには、肉体も精神も病状が悪化し、「薬を食って生きている」ような生活を送らねばならず、精神の異常に悩んだ龍之介は、心の安らぎを切望し、それを得るために、しばしば自殺を考えた。

文学観も大きく変わり、かつての〈意識的芸術活動〉は否定され、志賀直哉の『焚火』のような、話らしい話のない、詩情あふれる小説に憧れるようになった。昭和二年、彼は発狂の恐怖に苛まれながら、『河童』『歯車』等を書き、最後の作品『続西方の人』を書き終えたあと、「将来に対するぼんやりとした不安」ということばを遺して、服毒自殺した。

□作品解説

羅生門　短編小説。『今昔物語集』中の「羅城門登上層見死人盗人話」に依拠しながら、人間は生きるためには必然的に悪を抱え込まねばならず、ただその悪を悪の名で許すことができるだけである、という暗い厭世主義的な人生観を描いている。

地獄変　短編小説。本朝第一の絵師良秀は、堀川の大殿に、地獄変の屏風絵を描くよう命じられる。しかし、見たものしか描けない彼は、自分の愛娘を牛車に乗せ、眼前で焼殺させるさまを壮絶な屏風絵として完成させる。そしてその晩自殺してしまうという内容の芸術至上主義の作品。

歯車　短編小説。題名の「歯車」は主人公の目の中に現れる幻視。六章に分けて「地獄よりも地獄的な」人生を生きている主人公の心象風景が描かれている。

▲『新思潮』創刊当時の龍之介と『鼻』の原稿

芥川龍之介

西暦	年号	年	事項
一八九二	明二五	1	三月一日、東京に誕生。
一九一三	大二	22	東京大学英文科入学。
一九一四	三	23	第三次『新思潮』に参加。「老年」
一九一五	四	24	「羅生門」
一九一六	五	25	久米正雄らと第四次『新思潮』を発刊。「鼻」が漱石に激賞される。東大を卒業。「芋粥」「手巾」
一九一七	六	26	「偸盗」「或日の大石内蔵助」「戯作三昧」
一九一八	七	27	塚本文と結婚。「蜘蛛の糸」「地獄変」「奉教人の死」「枯野抄」
一九一九	八	28	実父敏三死亡。

早熟な秀才

芥川龍之介は、新原敏三・ふく夫婦の長男として生まれた。辰年辰月辰日辰刻に生まれたとこから龍之介と名付けられたといわれている。龍之介が生まれて七か月目に、母ふくが突然発狂し、このため彼は、母の実家芥川家に引き取られることとなった。芥川家の当主は、ふくの実兄道章で、東京府に勤めていた。生後間もなく母のもとから離された龍之介は、以後この家で育てられ、明治三七年一三歳の時、正式に芥川家の養子になった。当時本所小泉町にあった芥川家は、代々江戸幕府の奥坊主を勤めた旧家で、道章の代になっても、一家そろって一中節を習ったり、道章が南画・篆刻・雑俳を好むといったように、江戸の文人的・通人的趣味が多分にある家であった。

江戸のなごりを留める下町で、こうした文人的趣味に囲まれて育った龍之介は、消えゆく下町の情景や、江戸趣味に引かれていたが、他方では、下町の旧家にありがちな外面だけをとりつくろう態度に次第に反発を抱くようになった。龍之介の文筆の才は、既に江東小学校時代から発揮され、一一歳のころには回覧雑誌を編集し、多くの文章を書いている。読書の面でも早熟で、芥川家にあった草双紙の類から始まって、高等小学校に入るころには、徳富蘆花の『思ひ出の記』や泉鏡花『化銀杏』等も読んだ。府立第三中学校へ入学した後、読書熱は一層高まり、蘆花・鏡花・独歩・漱石等の文学書を手当たり次第に濫読した。

華々しいデビュー

府立三中を優秀な成績で卒業した龍之介は、高等学校に無試験で入学することを許され、明治四三年第一高等学校文科に入学した。同級生には、久米正雄、菊池寛、恒藤恭などがいた。高等学校時代の龍之介は学者のような〈精神的に偉いもの〉を志し、旺盛な知識欲と読書欲にかられて様々な本を読み漁っていた。このころ龍之介が最も親しく交際したのは恒藤恭である。二人は、高校生らしい奔放な生活を送っていた久米や菊池らとは離れて、植物園に水彩画の写生に出かけたり、時には武蔵野の辺を散歩しながら、互いに、西田幾多郎やベルグソンについての議論を戦わせたりしていた。大正二年、彼は二七名中二番（一番は恒藤恭）の好成績で一高を卒業し、東京帝国大学英文科へ進んだ。恒藤は京都帝国大学の法科へ去った。かつては学者になることも考えていた龍之介であったが、大学での講義は彼を失望させるだけであった。恒藤とも離れ、講義への興味も失った龍之介は、一高時代の同級生で創作家を志していた久米正雄、松岡譲らと親しくなり、大正三年二月には、彼等と共に、第三次『新思潮』を発刊した。龍之介は、同誌に「大川の水」「老年」等を発表したが、雑誌は短命で、十号で廃刊となった。

このころ、彼は初恋を体験した。相手は、生家新原家とは古くから親交のあった吉田家の娘弥生であった。龍之介は、彼女に求婚しようとしたが、養家芥川家の強い反対に会い、結局この恋は実らぬままに終わった。この恋愛の挫折を通じて彼は、人間の醜さ・エゴイズムの強さを思い知らされた。愛の中にさえエゴイズムを認めざるを得なかった彼は、生存すること自体を苦痛と考える深いニヒリズムへと傾斜していった。こうしたニヒリズムを背景として書かれたのが、『羅生門』である。しかし、今日では芥川文学の代表作の一つに数えられるこの小説も、発表当時はほとんど注目されることがなかった。

大正五年二月、龍之介は、久米正雄、菊池寛らと再び『新思潮』（第四次）を刊行し、その創作号に「鼻」を発表した。これより先、彼は久米と共に夏目漱石宅で行われていた「木曜会」に出席し、以後漱石に師事していたが、「鼻」が漱石の目に止まり激賞を受けた。これより、彼は一躍文壇に登場することとなった。「鼻」に続いて、九月には「芋粥」十月には『中央公論』に「手巾」を発表するに及んで、新進作家としての地位を確立した。この年七月、彼は大学を卒業し、一二月、横須賀にあった海軍機関学校の嘱託教官（英語）となった。このため住まいを鎌倉、次いで横須賀に移し、土曜日ごとに東京に出て来るという、二重生活を続けながら、次々に作品を発表していった。

反自然主義のチャンピオン

大正六年五月、「羅生門」「鼻」「芋粥」等を集めた処女短編集『羅生門』が刊行された。これを祝って翌月、久米正雄、佐藤春夫らが呼びかけ、谷崎潤一郎、有島武郎らも出席して、『羅生門』出版記念会が開かれた。このころ文壇では、長く主流を占めていた自然主義文学に代わって、〈新技巧派〉と総称されていた、武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉、谷崎潤一郎等の反自然主義の立場に立つ若い文学者達がようやく台頭しつつあった。こうした中で、反自然主義派だけを集めて開かれた出版記念会は、さながら〈新技巧

志賀直哉

西暦	年号	年	事項
一八八三	明一六		二月二〇日、宮城県に誕生。
一九〇六	三九	23	東京帝国大学英文科入学。
一九一〇	四三	27	『白樺』創刊。『網走まで』
一九一二	大元	29	『大津順吉』「時任謙作」
一九一三	二	30	『留女』出版。「清兵衛と瓢箪」
一九一七	六	34	夏、父と和解。「城の崎にて」「和解」
一九二〇	九	37	「焚火」
一九二一	一〇	38	「暗夜行路」前編発表。
一九二七	昭二	44	「山科の記憶」
一九三三	八	50	「万暦赤絵」
一九三七	一二	54	「暗夜行路」完結。
一九四五	二〇	62	「灰色の月」
一九七一	四六	88	一〇月二一日死去。

少年時代　志賀直哉の父直温は、福沢門下の実業家で当時は第一銀行の石巻支店員だった。直哉が二歳の時、一家は上京して祖父母の家に住んだ。祖父直道は相馬藩に仕えた武士で、若いころは二宮尊徳の弟子であり、廉直できこえた人だった。幼時期の直哉は、じいさんばあさん子として育つ。ことに一二歳の時、母銀を失ったせいもあって祖母の溺愛が直哉の人間形成に大きな影響を与え、後年の父との対立の原因ともなった。少年時代の直哉は活発な子で、将来は大実業家か海軍軍人になることを夢みていたという。中学時代も学業に励むどころか、運動の虫といえるほどスポーツに熱中し、学習院中等科在学中には、二回落第した。そのため武者小路実篤、木下利玄、正親町公和と同級になる。こうして中等科を卒業するころ、急激に直哉の自我は形成された。一七歳のときには内村鑑三を訪ね、以後七年間その門に通い、その人格から強い感化を受けた。

『白樺』創刊と尾道・松江時代　明治三四年一八歳の時、足尾銅山鉱毒事件がおこり、社会的正義の立場から直哉は実業家の父と激しく対立、父との思想的対立の発端となった。さらに六年後、お手伝いとの結婚を主張したが、父をはじめ家族の反対にあって、以後小説家をめざす彼とこれを不満とする父との不和は深まる。こうした父との不和・対立は彼の文学の有力なモティーフとなった。明治四三年には武者小路らと『白樺』を創刊、創刊号に『網走まで』を発表し、以後毎号のようにすぐれた短編を発表しつづけた。その後、二九歳のとき『大津順吉』を『中央公論』に発表、文壇にデビューして作家として立つ決意を固める。だがこれにあくまでも反対する父との対立は決定的なものとなり、直哉は家を出、尾道(広島県)に赴き約一年間棟割長屋に独居、さらに松江に赴き以後昭和一三年まで東京を離れた。尾道で、父に抵抗して自我貫徹をなす英雄伝として「時任謙作」を起稿するが、父との心理的葛藤から仕事は進まず動揺を繰り返す。大正二年夏に、山の手線電車に轢かれた事故をきっかけとし、その自我貫徹の情熱は急落した。

『和解』まで　大正三年、直哉は武者小路の従妹、勘解由小路康と結婚。がそれは父の反対を押し切り、自ら除籍してなされたため父との対立は頂点に達した。すでに処女短編集『留女』出版のころから彼の文学は広く注目され、大正二年暮れには漱石から朝日新聞へ小説連載を勧められていたが、父との不和に彼自身深く悩み、その約束を果たすべく書きすすめた「時任謙作」の執筆は思うようにゆかず、遂に直哉はこれを辞退する。この不義理から作品の発表を遠慮するところもあり、以後三年間筆を執らず、夫妻で転々と移居し憂愁の日を過ごす。その間、生後二か月で長女が死亡するなど暗い出来事も重なり、死と自然が彼に親しいものとなった。こうした時期を経て直哉は、以前とは異なり自然との調和的な生を志向するようになってゆく。大正六年夏には長年にわたる父との不和を解消し、名作『和解』を一気に書きあげた。

『暗夜行路』の完成と晩年　大正一〇年には長年完成に腐心してきた長編『暗夜行路』前編を発表、翌年から後編を発表しはじめた。その執筆は断続的になされ、昭和一二年、足かけ一七年目に全編が完結した。戦後は、『灰色の月』を書いた他は、動植物に静かな親愛感を寄せた『山鳩』『朝顔』などの小品を時折発表した程度で、東洋風の隠者生活を悠々と送った。

□作品解説

和解　中編小説。父子対立は直哉の生涯最大の劇であり、前期志賀文学の中心的モティーフであるが、父との不和の最も激しかった段階から和解への三年間のことが描かれ、父と衝突して激昂・煩悶し、和解に到達して歓喜する鮮麗な生の劇のクライマックスがみごとに表現されている。

暗夜行路　長編小説。祖父と母との過失から生まれた主人公時任謙作は、青年時代その出生の秘密を知り苦悩する。結婚生活に入って静かな幸福を得たかと思えたが、妻の過失に再び苦しみ鳥取の大山にひとりやってくる。大山登山の途中で迎えた曙光を眺め、精神も肉体も溶け込んでゆく深い感動を覚えた謙作は、すべてを許す気持ちになる。主我主義者の主人公が不幸を乗り越え、前途に光明を見いだすまでの物語。

▲『暗夜行路』最終回さし絵

谷崎潤一郎

西暦	年号	年	事項
一八八六	明一九		七月二四日、日本橋に誕生。
一九〇八	四一	22	東京帝国大学国文科入学。
一九一〇	四三	24	第二次『新思潮』創刊。「刺青」
一九二四	大一三	38	「痴人の愛」
一九二八	昭三	42	「卍」「蓼喰ふ虫」
一九三一	六	45	「吉野葛」「盲目物語」
一九三二	七	46	「蘆刈」
一九三三	八	47	「春琴抄」「陰翳礼讃」
一九三五	一〇	49	「源氏物語」(口語訳)
一九四三	一八	57	「細雪」(〜二三)
一九四九	二四	63	「少将滋幹の母」
一九五六	三一	70	「鍵」
一九六一	三六	75	「瘋癲老人日記」
一九六五	四〇	79	七月三〇日没。

生い立ち

谷崎潤一郎は耽美派の作家として自然主義に対立し、豊麗な物語性を持つ作品世界で性と美を追究した。ことに日本の伝統美を描いた作品の評価は高い。潤一郎の生家は下町の活版所であり、当時暮し向きも裕福だった。折々見物した歌舞伎や錦絵の世界は彼の作品の色調を定め、また、母関が評判の美人であったことは、『母を恋ふる記』などに母性思慕の主題を引き出すこととなる。潤一郎の文才は早くから認められており、一高時代には彼は文学で身を立てようと決意するに至った。大学に入ってからは本格的に創作を始め、『誕生』などを雑誌に投稿していた。そして明治四三年、潤一郎は小山内薫・大貫晶川らと第二次『新思潮』を創刊し、そこに『刺青』を発表した。翌年、永井荷風の激賞を受けて、一躍文壇の注目を集めることとなったのである。

美神と悪魔

作家潤一郎の出発は、明治・大正の真・善・美の三位一体を理想とする伝統的・良識的な価値観への反逆であった。つまり、彼は自らの資質が唯一の真実と認めるところの美を通常倫理の枠から解き放ち、感性美そのものの価値を芸術の名において主張しようとしたのである。そこに美への全面的な拝跪の所以があり『刺青』『少年』『秘密』などの耽美的作品が書かれていった。しかしながら、何人も時代の子であることから免れえない。「私の心が芸術を想ふ時、私は悪魔の美に憧れる。私の眼が生活を振り向く時私は人道の警鐘に脅かされる」。美へのマゾヒズム的拝跪は、彼の中の健康な倫理観がとらせる態度だったのである。また、自らの思想を悪魔主義と呼んだのは、彼が自己の思念と社会的現実との相克から必ずしも自由ではなかったからである。『悪魔』『饒太郎』『異端者の悲しみ』などにはその苦渋の跡がたどれよう。このような悪魔主義的作品群の頂点が戯曲『愛すればこそ』であり、小説『痴人の愛』だったのである。

三角関係の中で

こういう潤一郎にとって夫婦関係は彼の思想と他者との現実における唯一の闘いの場だったはずである。晩年の『鍵』にその典型的な形象化があるが、この時の彼の眼はそれほど透明ではなかった。小田原在住時代、貞淑な妻千代子に飽き足らずその妹の妖婦性に心を奪われていた彼は、千代子に思いを寄せる友人佐藤春夫に妻を譲る約束をした。だが、潤一郎が翻意したため春夫との間は絶交に至った。潤一郎を苦悩させたこの確執は『神と人との間』『蓼喰ふ虫』にあらわれる三角関係とかかわっている。

伝統美への開眼

関東大震災によって東京や横浜は瓦礫の街と化した。谷崎は関西に移住したが、これが彼に大きな転機をもたらしたのである。上方に残る日本の伝統文化を再発見し、『卍』や『蓼喰ふ虫』では大阪ことばを用いて伝統美への関心を示し、さらに『吉野葛』では古典の世界を背景に母性思慕の主題を定着し、古典回帰を明瞭にした。続く『盲目物語』『武州公秘話』で一人称による物語体を採ることによって日本文の美しさを蘇生させ、『蘆刈』では夢幻的な謡曲仕立てに女性拝跪を描き込んだ。そして名作『春琴抄』が生み出されるのだが、これらの諸作には後に妻とする根津松子への慕情が秘められている。なお、これより先、昭和五年には千代子を春夫に渡すという、いわゆる妻君譲渡事件を経ている。松子と結婚した昭和一〇年から潤一郎は『源氏物語』の口語訳に心魂を傾けた。訳業は後二度の改訂に及んだが、最初の訳了後、大作『細雪』にとりかかり、戦時中の官憲の圧迫に耐えてひそかに書きついでいった。戦後は『少将滋幹の母』に母性思慕の極点を描き、さらに『鍵』『瘋癲老人日記』で老年と性を追究して衰えぬ創作力を示しながら七九歳の長寿を全うした。

□作品解説

刺青 短編小説。江戸の刺青師清吉は内気な娘の肌に己が魂を込めた念願の刺青を彫り上げたが、その時両者の位置が逆転して、清吉の心はうつろになり、娘は生まれかわって驕慢となる。奇抜な着想と極彩色の文章によって女の持つ官能美の至大さを描き、作者の唯美的・耽美的傾向を明示した出世作。

細雪 長編小説。阪神芦屋に住む蒔岡家の美しい四姉妹、派手で奔放な西洋趣味の妙子、内気で婚期の遅れた日本趣味の雪子、そして温容な幸子とその夫たちが折りなす物語は、四季の歳事や日常風俗の中に作者の永遠の女性像を浮き彫りにした優雅な絵巻物である。

◀谷崎潤一郎の書

西暦	年号	年齢	事項
一九〇三	三六	37	帰国。一高・東大講師となる。神経衰弱。
一九〇五	三八	39	「吾輩は猫である」「倫敦塔」
一九〇六	三九	40	「坊っちゃん」「草枕」
一九〇七	四〇	41	「野分」教職を辞し、朝日新聞入社。「虞美人草」連載。
一九〇八	四一	42	胃病発病。「坑夫」「夢十夜」「三四郎」
一九〇九	四二	43	「それから」満州・朝鮮旅行。
一九一〇	四三	44	『門』胃潰瘍手術。修善寺で吐血し、一時危篤状態。
一九一一	四四	45	文学博士号辞退。「現代日本の開化」など講演。
一九一二	大元	46	「彼岸過迄」「行人」
一九一三	二	47	神経衰弱。胃潰瘍再発。
一九一四	三	48	「こころ」講演「私の個人主義」
一九一五	四	49	「硝子戸の中」『道草』
一九一六	五	50	「明暗」連載中胃潰瘍悪化、一二月九日没。

専属作家として入社したのである。職業作家としての第一作『虞美人草』は彼としても力を奮って紙上連載したものだが、全編にちりばめられた絢爛たる文辞は当時の読者を魅了したものの、描かれた倫理が勧善懲悪に陥り、人物像もやや類型化を免れず、必ずしも出来映えはよくなかった。

『虞美人草』や『坑夫』を書いてひとつの行き詰まりに出会った漱石は、『夢十夜』で人間存在の不安を夢の世界を通して詩的に点描し、問題の原点に立ちもどろうとした。そして、『三四郎』において主人公を田舎から出て来たばかりの白面の青年に設定し、類型にとらわれず自然な写実的方法で描き始めた。ここに近代作家漱石の方法的再出発がある。次作『それから』は、自意識の強い知識人を主人公として、社会に対する人間の自然と愛の問題に迫った。これを漱石の主題的再出発といってもよい。続く『門』では、過去の罪に怯え、世間の片隅に生きる人間の不安を描いた。これら三作には順次テーマの展開があるとして〈三部作〉と呼ばれている。

修善寺大患　『門』を脱稿した漱石は胃潰瘍で入院し、明治四三年夏、転地療養のため修善寺に出かけたが、そこで大量吐血して人事不省になった。これがいわゆる〈修善寺大患〉である。くしくも生死の間をさまようことによって、求むべき解脱の境地を垣間見たのである。後年唱えたという「則天去私」とは、このような心境をさしていたのでもあろう。

翌年、社の依頼で各地を講演して回り、「現代日本の開化」では、日本の文明開化は「皮相上滑り」の開化だという鋭い批評を示している。漱石は日本の前途にも心を痛めていたのである。

我執の追究　再び小説を書き出した漱石は、『彼岸過迄』で人間の我執とそれゆえの罪の意識をえぐり出してみせた。漱石にとって解脱は生者としての日常現実の自己により見いだされなければならず、そのためにこそ厳しい自己検証が必要だったのである。さらに『行人』では自己の知的優越を信ずる人間が陥った懐疑と孤独――死か狂気か宗教しかないという所にまで追いつめられた近代知識人の苦悩を描き出している。そして、『こころ』においては、我執のために他を死に追いやった人間の罪の苦しみと、その明治知識人が時代に殉ずる姿を浮き彫りにした。

『明暗』の方法と晩年　ところで、『こゝろ』は漱石の生者の前提条件を逸脱して死を書いてしまったことになるが、それはおそらく、漱石が方法的袋小路に入り込んだからでもある。知でもって知の不能をあばいても解脱は出て来まい。ならば必要なのは作家の知を捨象すること、つまり、人間関係という現象を公平に書くことである。『道草』で敢えて過去の自己とその家庭を素材にしたのも、その最も困難な試錬としての意味を含めたものであろう。そしてその方法的結実が未完の大作『明暗』となったのである。ここで漱石は、虚々実々の我執に満ちた世界の関係と心理をそのまま写し出した。

こうして『明暗』を書きついでいた漱石は、胃潰瘍が悪化し、家族や弟子たちの見守る中で一二月九日、瞑目した。

□作品解説

吾輩は猫である　長編小説。猫が人間社会を観察し批評する形式を採り、風刺とユーモアに満ちた異色作。利欲に走る金田一党を、猫の飼い主苦沙弥先生とその門人たちが嘲笑する。作者の世相に対する怒りと鬱屈が俳諧的な笑いや駄洒落の中に溶かし込まれている。

坊っちゃん　中編小説。東京から松山の中学に赴任した江戸っ子教師が同僚の山嵐と共に、狡猾な教頭赤シャツやいたずらな生徒たちと戦ったあげく、教職を投げうって東京へ帰ってしまう。坊っちゃんの正義感と歯切れのよさで明るく爽快な作品となっている。

三四郎　長編小説。熊本から大学に入るために上京した三四郎は、故郷・学問・恋愛の三つの世界の間に揺れながら次第に自我意識に目覚めてゆく。彼は美禰子に心を引かれるが、彼女は「ストレイ・シープ（迷羊）」ということばを残して去ってゆく。青春の明るい詩情を漂わせているが、文明批評や生の不安の認識も折り込まれている。

こころ　長編小説。若いころ恋人のために友人Kを裏切って彼を自殺に追いやった先生は、罪の意識をにないながら生きのびて来たが、乃木大将の明治天皇への殉死を知り、自分も明治の精神に殉ずるとして自殺する。我執の恐ろしさが主たるテーマである。

▲漱石の筆蹟

夏目漱石

西暦	年号	年	事項
一八六七	慶三	1	二月九日、江戸牛込馬場下横町に誕生。
一八六八	明元	2	塩原家の養子。
一八七九	一二	13	東京府立一中入学。
一八八一	一四	15	実母死去。二松学舎に転校。
一八八四	一七	18	大学予備門予科入学。
一八八八	二一	22	夏目家復籍。
一八八九	二二	23	正岡子規を知る。
一八九〇	二三	24	箱根旅行。東京帝国大学英文科入学。
一八九三	二六	27	大学院入学。
一八九五	二八	29	松山中学校に赴任。
一八九六	二九	30	熊本の第五高等学校に赴任。中根鏡子と結婚。
一九〇〇	三三	34	イギリス留学。

生い立ち

漱石夏目金之助は江戸牛込の名主の家に生まれたが、すぐに里子やら養子に出され、九歳で実家に引き取られるまで実の父母を知らず、二二歳で夏目姓に復籍するまで養家の塩原姓を名乗らねばならなかった。こういう特殊な幼少年期を持ったことも、後の漱石の作品に大きな関わりがある。

小学校に入った漱石が受けた教育は、施行されたばかりの学制教育であった。それは明治政府の欧化政策を反映したものだが、そのアメリカ的教育理念は、彼の中に合理主義精神をはぐくんでゆく一つの契機となった。また同時に、彼は漢籍を好み、四書などの経典は厳格な儒教倫理観を彼の内に構成していった。漱石がいたく虚偽を嫌い、自己の内にも外にもそれを許さなかったことは人の知るところである。漱石の漢籍愛好は、府立一中を中退して漢学専門の二松学舎に通い始めたことにも表れている。ここで彼は唐詩などの漢詩の世界に遊び、自ら詩作するほどにその東洋的美意識を定着させた。こうして、漱石の精神の基底をなす合理主義精神、儒教倫理観、東洋的美意識が形成されていったのである。

青春と厭世

しかしながら、大学予備門（後の一高）受験を控えた漱石は兄にさとされると、文明開化の世に漢学者になっても仕方がないと考え直して、それまで嫌いだった英語を勉強しはじめた。こうして予備門に入り、さらに東京帝国大学に進むが、その際英文科を選んだことは、以後の彼の精神状態に様々の波紋を投げかけることとなった。彼が間もなく厭世主義に陥ったのも、自己の趣味に合わぬ選択をしたことにその原因の一端はあったであろう。こういう彼をいくらかでも救ったのは一高以来の正岡子規との親交と思想交流であり、子規の教えた句作であった。漱石の句は諧謔とユーモアに富むが、その中にも自己の心情の表現を託している。

松山落ち

明治二八年、漱石はそれまで教鞭をとっていた学校を辞して、単身四国の松山中学に赴任した。これが〈漱石の松山落ち〉であり、その理由は、いまだ謎に包まれている事件である。子規の故郷でもあるこの地で、漱石は俳句に親しみ、またここでの体験が『坊っちゃん』の素材となっている。

翌年熊本の五高教授に転じた漱石は、前年東京で見合いをした中根鏡子と結婚し、四か年を当地で過ごした。この間、「小説『エイルキン』の批評」ほかの研究成果を公にしたり、九州の各地を旅行している。そのように、このころの漱石は比較的穏やかな日々を送っていたようだが、彼の内部世界は必ずしもそうではなかった。たとえば、「人生」という一文では、自己のうちに潜む狂なるものに眼を凝らし「不測の変」への恐怖におののいている。彼の合理的精神では支配しえぬ自己の内奥が意識されているのである。彼に英国留学の命が下ったのはこういう時であった。

イギリス留学

夏目漱石は明治三三年、文部省の留学生としてロンドンに渡った。しかし、三四歳の人間を待っていたのは決して明るい世界ではなかった。彼は自己に課された英語研究の任務を果たさんと懸命になったが、乏しい官費と方法への懐疑は彼を窮乏と困惑に陥れたのである。こういう異国生活の中で彼が思い知ったものは、西欧と東洋日本との落差であり、自己と外界との隔絶感であった。そして苦闘二年余、模索の末に見いだした「自己本位」を、総体的に文学をとらえる方法として、また混沌の中から自己を救抜する方法として、彼は帰国する。

作家漱石の誕生

東京へもどった漱石は東京帝大と一高に迎えられ、英国で収集した文献をもとに「文学論」などを開講する。しかし、彼は依然教師をやめたいという苦悩や神経衰弱に悩まされ、家庭においては一時妻子と別居するほどであった。そういう明治三七年一二月、高浜虚子に勧められて書いたのが『吾輩は猫である』だった。意外な好評に気をよくした漱石は続編を次々と発表し、並行して、後に『漾虚集』に収められる『倫敦塔』他の短編を書きついだ。『吾輩は猫である』には世俗に抗する知識人たちの饗宴を戯画的に、『漾虚集』には生と死と愛のロマンを夢幻的に描き分けている。さらに、『坊っちゃん』を書き、『草枕』では山を旅する画工の視点によって自己の東洋的美意識を「低徊」的に解放したが、そこに観照された東洋的解脱を現実世界でも獲得すべく、漱石は『野分』の人物を下界に置いて現実世界と格闘させようとしたのである。

朝日入社から三部作へ

明治四〇年、創作意欲が高まるにつれて、漱石の教師廃業の念もいよいよ強まっていた。折しも、東京朝日新聞社から招聘の話があり、主筆池辺三山の人柄にも感ずる所あった漱石は、遂に帝大教官の地位を投げうって

西暦	年号	年齢	事項
一八九八	三一	27	『一葉舟』『夏草』
一八九九	三二	28	小諸義塾教師として小諸町に赴任。秦フユと結婚。
一九〇一	三四	30	『落梅集』
一九〇二	三五	31	「旧主人」発表禁止。
一九〇四	三七	33	『藤村詩集』
一九〇六	三九	35	『破戒』を自費出版。
一九〇八	四一	37	「春」
一九〇九	四二	38	『新片町より』
一九一〇	四三	39	「家」
一九一一	四四	40	「千曲川のスケッチ」
一九一三	大二	42	姪こま子との事件からフランスへ渡る。
一九一四	三	43	「桜の実の熟する時」
一九一八	七	47	「新生」第一部連載。
一九一九	八	48	「新生」第二部連載。
一九二三	一二	52	脳溢血に倒る。
一九二六	昭一	55	「嵐」
一九二九	四	58	「夜明け前」第一部連載。
一九三二	七	61	「夜明け前」第二部連載。昭和一〇年完結。
一九四三	一八	72	「東方の門」連載開始（未完）。八月二二日大磯にて死去。

二人のモデルがこの作品の執筆中に死に、そのため当初構想になかった二人の死（一人の死は予感としてだけ描かれているのだが）が取り込まれて小説が終わっている点は、小説が現実の後追いをするという形の日本の自然主義の独特な発達の仕方を、よく示している。このように、現実そのままの事件を描き、しかもそれを西欧自然主義のような社会的視野を交えずに、「家」内部の出来事のみで描くという方法をとったため、この小説の世界は狭くなったが、逆に「家」の持つ重苦しさ、旧家の血の退廃は、息苦しいほどのリアリティをもって描き出されることとなった。ここでは、「家」に関するどのような社会的見方も書かれていないが、藤村が自己の悩みを「家」の問題として正面から扱ったのはこれが最初であり、藤村はここで自分の最も重大な問題と交わったと言ってよい。この小説は自然主義を代表する小説となった。

「新生」事件　妻の没後、藤村は長男・次男を手許に置き、他の子供は他所に預けるという不自由な暮らしを続けていたが、その世話に出入りしていた姪との間に不倫な事件を起こした。これがいわゆる「新生」事件である。藤村はこの事件から逃れて大正二年から三年間フランスに滞在し（この間第一次大戦にあったりもした）再生をはかり、大正五年に帰国したが、再びあやまちを犯した。こうした因縁を断つべく、小説という形式で告白を行ったのが『新生』である。『新生』は宗教的色調のうちに再生を述べて終わっているが、これを姪こま子の父からの金銭的要求等に対する拒否という利己的動機から書かれたと見る人もおり、芥川龍之介が主人公を「老獪な偽善者」と呼んだような側面も複雑にからみ合っている。いずれにせよ、藤村がこの小説で自我の底をさらったという事は確かである。

続く大正年間には、童話・紀行・感想などの集を多数刊行し、また全集一二巻も出るなど、文豪藤村の名は大いにあがった。また、昭和二年には、すぐれた短編集『嵐』を出版している。

『夜明け前』から晩年まで　フランス滞在中に得ていた、「父とその時代」において「十九世紀日本の考察」をめぐらすという構想を具体化して、『夜明け前』を書きはじめたのは、昭和四年、藤村数え年五八歳の時である。平田派の国学の復古思想を信奉した父島崎正樹が、明治維新後の時代の大きな潮流によって、その思想を打ち砕かれ、焦燥のうちに座敷牢で狂死する姿を描いて、文明開化の時代を、ひいては自身の生きる現代という時代に対する自己の在り方を、藤村はあくまで追求したのであった。

『夜明け前』完成後の藤村は、自己の全作品の再整理に入り、また、昭和一〇年成立した日本ペンクラブの初代会長ともなって、公の面でも活躍した。昭和一一年、二度目の外遊に出た藤村は、フランスに再遊し、シャヴァンヌの壁画「東方の門」の前に立ち、ここに最後の長編『東方の門』が構想された。これは西洋と東洋との衝突という視点から日本についての再考察を行おうとしたものだが、昭和一八年、脳溢血による藤村の死去によって、第三章の中途で中断された。

□作品解説

若菜集　詩集。藤村の第一詩集で、詩五一編を収める。『新体詩抄』以来試みられてきた新体詩の夜明けを告げる詩集であり、我が国近代詩を最初に確立したものである。

破戒　長編小説。被差別部落に対する社会的偏見に苦しむ青年瀬川丑松に藤村の内面的な苦悩を、また差別とたたかう猪子蓮太郎に信州の教育者大江磯吉の生き方を重ねて構成されている。結局はその主題が社会的課題の展開よりも、個人的心理の告白におかれており、そのことが爾後の自然主義文学の性格を暗示するとともに、『破戒』の作品評価を多様にさせる原因となった。

家　長編小説。作者自身である小泉三吉の新しい家を中心に、木曽の二つの旧家小泉家（島崎家）と橋本家（藤村の姉の嫁ぎ先である高瀬家）の没落解体のさまを描いている。

夜明け前　長編小説。完成した作品としては、藤村最後の小説となった。藤村の故郷馬籠を中心に中山道一帯を舞台として、父正樹をモデルとした青山半蔵の一生を浮かび上がらせて、明治維新後の時代のうねりを「草叢の中から」描き上げた小説。

▼『夜明け前』の校正原稿と木曽妻籠宿

島崎藤村

西暦	年号	年	事項
一八七二	明五	1	三月二五日、筑摩県大八大区五小区馬籠村で誕生。
一八八一	一四	10	兄に伴われ東京に遊学。泰明小学校通学。
一八八八	二一	17	高輪の台町教会で受洗。
一八九二	二五	21	明治女学校英文科の教師となる。北村透谷・星野天知・平田禿木を知る。
一八九三	二六	22	明治女学校生徒との恋愛により、学校退職、教会退会。『文学界』創刊。
一八九六	二九	25	東北学院教師として仙台赴任。
一八九七	三〇	26	『若菜集』

出生から仙台赴任まで

島崎藤村は、明治五年木曽馬籠に島崎正樹の末子として生まれた。家は、明治維新まで代々馬籠宿の本陣・問屋・庄屋を兼ねていた名家で、父正樹はその第一七代の当主であった。正樹は平田派の国学の信奉者であり、幕末の激しい動揺の中で家産を傾け、維新後はわずかに戸長（今の村長）の職にあった。藤村が生まれたのは、正樹のこの戸長時代のことである。後のことになるが（明治一九年）、正樹は文明開化の時流への煩悶から狂死して果てるのであるが、こうした父の存在と、傾きつつある旧い家の問題は、藤村の生涯の最初から重い課題として存在したのである。

明治一四年、数え年わずか一〇歳の藤村は、そうした父の期待をになって東京に遊学している。しかも、藤村が最初に入ったのは、銀座の泰明小学校という、文明開化の日本の中心に位置する学校であった。次いで、いくつかの学校を経て入った明治学院は、文学者藤村を生むについて大きな役割を果たすこととなった。明治学院はミッションスクールで、教授陣の多くは外国人であり、キリスト教が一種の文学的雰囲気を醸し出し、また毎週文学会も行われるという学校であった。しかも同級には戸川秋骨、馬場孤蝶らがいて、和洋の詩・小説を読み語り合い、藤村は次第に文学を自己の生涯の事業と考えるに至った。

明治二四年同校卒業後、藤村は『女学雑誌』に翻訳を寄せ、またその縁で明治女学校の教師となった。また北村透谷らを知り、明治二六年には『文学界』を創刊し、文学的出発が行われた。『文学界』に当初発表された藤村の詩文は、まだ習作の域を出なかったが、早く自らの課題を自覚していた透谷の影響もあって、次第に独自の詩風の開花が準備されていった。一方、実生活面では、明治女学校の教え子佐藤輔子との恋愛事件、これによる学校退職と教会退会、さらには長兄の入獄などが相次ぎ、その上に明治二七年の透谷の自殺、輔子の病死などが重なり、若い藤村には背負いきれぬほどの生活の重荷と精神的苦しみが襲ったが、それらのすべてを東京に置き去りにするようにして、明治二九年東北学院の教師として仙台に赴任することになった。

詩人藤村

この仙台赴任前後から藤村の詩は進み、翌年『若菜集』としてまとめられた。この詩集は、「おぞき苦闘」を経た藤村の、願いの込められた叙情詩の集であった。『若菜集』は当時の青年達に新鮮な感動をもたらし、日本近代詩の黎明を告げる詩集としての位置を得た。続いて、『一葉舟』『夏草』『落梅集』といった詩集・詩文集を発表し、詩人として大きな業績を残し、土井晩翠と併称される詩壇の第一人者となった。

しかし、藤村の内心のうながしは、そうした地位を自ら捨てさせ、小説を書くための「研究」をはじめさせるに至った。『落梅集』は小諸生活の最初に書かれたが、それ以後は詩を捨て、後に『千曲川のスケッチ』にまとめられる写生文を練習し、フローベルの『ボヴァリー夫人』に倣った『旧主人』などを執筆し、周到な「研究」と準備を行って小説を書き出す事に備えた。

『破戒』から『家』まで

明治三八年、小諸での生活に別れを告げた藤村は、未完の『破戒』の原稿をかかえ、妻子四人を連れて上京した。幼女三人は、上京後の貧窮のうちに次々と死んだが、明治三九年『破戒』は完成し、『緑蔭叢書』第一編として自費出版され、大きな反響を呼び起こした。これはドストエフスキーの『罪と罰』に想を得たものであるが、社会的重圧の下で苦しむ被差別部落出身の青年の苦悩に、藤村内心の悩みを重ねて描き、我が国の自然主義を導く作品となった。確かに、新体詩という形式にはよく載せ得なかった藤村内心の課題が、この仮構された小説に表現されており、その意味において、藤村の小説家としての記念碑となったのである。

明治四一年には、夏目漱石と二葉亭四迷の推挽により、『春』を『東京朝日新聞』に連載する。この長編は『文学界』の同人をモデルとして、明治の青春群像を描き、近代の初期において自我に覚醒した青年たちの不幸をとらえ、あわせて『破戒』で内面の苦悩として表現したものを根源から描こうとしたものだが、全編を通してはそうした主題を持ちこたえておらず、後半は告白的性格が強くなっている。これには田山花袋の『蒲団』の成功が大きな影響を与えているとみられるが、藤村は、『春』の主題の変質とひきかえに告白の持つリアリティを選び取り、ここに日本の自然主義の方向が決定されたのである。

明治四三年には『家』が書きはじめられた。これは、島崎家と姉の婚家である高瀬家とをモデルとして、両家の現実の事件を追い、没落していく旧家を描いたものである。特に、この小説が書きはじめられた時には生きていた

西暦	年号	年齢	事項
一八九〇	二三	29	「舞姫」
一八九一	二四	30	没理想論争。「文づかひ」
一八九二	二五	31	「即興詩人」
一八九四	二七	33	日清戦争従軍。
一八九六	二九	35	『めざまし草』創刊。
一八九九	三二	38	第一二(小倉)師団軍医部長に任命される。
一九〇二	三五	41	『藝文』「萬年艸」創刊。
一九〇四	三七	43	日露戦争従軍。
一九〇七	四〇	46	陸軍軍医総監医務局長に就任。
一九〇九	四二	48	「平日」「キタ・セクスアリス」
一九一〇	四三	49	「沈黙の塔」「青年」
一九一一	四四	50	「妄想」「雁」
一九一二	大一	51	「興津弥五右衛門の遺書」
一九一三	二	52	「阿部一族」
一九一四	三	53	「安井夫人」
一九一五	四	54	「山椒大夫」「最後の一句」
一九一六	五	55	「高瀬舟」「渋江抽斎」を連載開始。医務局長を辞職。
一九一七	六	56	宮内省帝室博物館総長兼図書頭に就任。「北条霞亭」
一九二二	一一	61	七月九日没。

した。樋口一葉の『たけくらべ』(『文学界』明治二八年一月～二九年一月)を、「われは縦令世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも、この人にまことの詩人といふ称をおくることを惜しまざるなり」と鷗外が激賞したのも、この「三人冗語」においてである。

小倉左遷　鷗外の陸軍省での地位は順調に上昇していたが、軍医総監医務局長の地位をねらう同僚小池正直との間に疎隔が生じ、鷗外は小池の策謀により第一二師団軍医部長に任命されて小倉に左遷された。鷗外がいかに不満であったかは、小倉着任当初に「隠流」という号を使っていたことにもうかがわれる。小倉の三年間に創作は一編も書かれなかった。なお、二度目の妻荒木しげ子と観潮楼で結婚式をあげ、小倉に同行している。

鷗外が第一師団軍医部長に任ぜられて東京に帰るのは明治三五年三月である。帰京後は『藝文』を創刊、その後身として『萬年艸』を創刊した。が、明治三七年二月から始まった日露戦争に従軍したこともあって、この時期にはそれほど華々しい文学活動はなされていない。日露戦争から帰って後は、明治四〇年三月より毎月一回観潮楼歌会を開き、短歌会諸派の合流・革新をはかった。

文学活動の再開　鷗外が文学活動を再開するのは明治四二年三月に小説『平日』を発表して以後である。この年一月に『スバル』を発刊したことが創作意欲をかきたてたこともあろうが、他にも、結婚および軍医総監という軍医としては最高の地位を得て精神的な安定を得たこと、夏目漱石の登場に刺激されたことなどが外的要因として考えられる。『平日』以後、『追儺』『懇親会』『魔睡』『大発見』などが矢つぎばやに書かれている。

歴史小説から史伝へ　鷗外の最初の歴史小説『興津弥五右衛門の遺書』の稿が成ったのは大正元年九月一八日であった。この小説は乃木希典の殉死に衝撃をうけて書かれたもので、乃木の殉死は明治天皇の大葬がとり行われた大正元年九月一三日当日のことであったことから、鷗外の執筆動機が切迫したものであったことがうかがわれる。この作以後の鷗外は、『阿部一族』『佐橋甚五郎』『護持院原の敵討』『大塩平八郎』と歴史小説を書きついでゆく。明治四〇年以後の文壇では自然主義が主流となっていたが、鷗外は歴史小説を書く動機を次のように語っている。「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた。これが一つである。わたくしは又現在の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。これが二つである」(『歴史其儘と歴史離れ』)と。右の立場をさらに徹底させて『栗山大膳』に始まる史伝の世界が開かれてゆくことになる。最晩年の、一種の安心立命の境地である。

その死　鷗外は医務局長を辞職後、宮内省帝室博物館総長兼図書頭となった。『帝謚考』、『元号考』(未完)の仕事を残している。大正一〇年末から腎臓病の徴候があらわれ、翌年六月には病状が悪化し、七月九日に自宅で没した。

□作品解説

舞姫　短編小説。国家や家の期待をになって立身出世の道を歩む明治の青年太田豊太郎が、ヨーロッパ近代文明に接することで自我にめざめ、エリスとの恋愛に自己を投じてゆく。が、結局はエリスを捨ててもとの官僚社会に屈服してしまう。近代知識人の自我のめざめと挫折を描いた作品である。『うたかたの記』『文づかひ』とともに、鷗外のドイツ留学に根ざした三部作とされている。

高瀬舟　短編小説。瀕死の弟に苦痛をやわらげてくれとたのまれて弟を殺した喜助は、罪に問われて島流しとなった。彼を護送する同心庄兵衛に喜助が自分の現在の心境を語るという形式の作品。

渋江抽斎　史伝。江戸時代末、弘前藩の医官渋江抽斎の事跡を各種の史料を用いて忠実に再現しようとした史伝。ただ、鷗外は抽斎を歴史的人物としてつき離して描こうとしたのではなく、そこには敬慕と親愛の情がはたらいている。

◀映画『雁』(大映)の一場面

森鷗外

西暦	年号	年	事項
一八六二	文二	1	一月一九日、石見国鹿足郡津和野に誕生。
一八六七	慶三	6	弟篤次郎誕生。
一八七〇	明三	9	妹喜美子誕生。
一八七二	五	11	父に伴われて上京。西周邸に寄宿して進文学舎に通学。
一八七四	七	13	東京医学校予科に入学。
一八七九	一二	18	弟潤三郎誕生。
一八八一	一四	20	東京帝国大学医学部を卒業。陸軍省に出仕。
一八八四	一七	23	ドイツへ官費留学を命ぜられる。
一八八八	二一	27	ドイツより帰国。
一八八九	二二	28	『衛生新誌』『しがらみ草紙』創刊。「於母影」(訳)

生い立ち

鷗外森林太郎の生家は代々、津和野藩主亀井家の典医であり、林太郎で第一四代にあたる。父静泰（維新後は静男と改む）はその実直さを見込まれて一女ミ子（通称峰子）の婿となったのであり、森家に男子が生まれたことは大きな喜びであった。実妹喜美子（小金井家に嫁す）の記すところでは「神棚に燈明かがやき、祖母君涙さへ落として喜び給ふ」というふうで、祖父は孫の誕生二か月前に死去していたので、「これやがて祖父君の生まれかはり給へるよなど言ひつつ、家の人人やうやく愁の眉すこし開きつ。いかで此ちご、よく生したててと誰も誰も思ふ」（『森鷗外の系族』）といった喜びようであった。森家の長男林太郎は、家を興す期待をかけられた存在だったのである。

東京帝国大学入学

林太郎が東京に出てきたのは明治五年（一一歳）、旧藩主の上京に随行する父に従ってである。津和野時代にすでに漢籍を学びオランダ語も学んでいたが、上京後はドイツ語習得のため進文学舎に入った。明治七年に東京医学校予科に入学したが、この時一三歳で年齢不足であったために生年を二年繰りあげて万延元年（一八六〇）生まれとし、以後公称はこの生年に従った。東京医学校は明治一〇年に東京帝国大学医学部に改組になり、林太郎はその本科生となった。同窓には、小池正直（のちに軍医総監）、賀古鶴所らがいたが、特に賀古とは、遺書に「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ」と口授して賀古自身に記させるにいたるほどの親友となった。また、在学中に寄宿舎出入りの貸本屋から文学書を借りて愛読している。大学卒業は明治一四年、二〇歳であった。成績は二八人中八番であった。

ドイツ留学

卒業後の林太郎は、両親の希望に従って陸軍省に出仕することになった。プロシア陸軍衛生制度研究を命ぜられ、『医政全書稿本』一二巻を編述している。明治一七年にはドイツ留学を命ぜられ、八月に横浜を出航した。留学の目的は陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究であった。ドイツで林太郎が師事したのは、ライプニッツ大学教授ホフマン、ザクセン軍医監ロオト、ミュンヘン大学教授ペッテンコオフェル、ベルリン大学教授コッホで、研究の成果として「ビールの利尿作用について」等の論文を発表している。帰国後も林太郎は数多くの衛生学関係の論文を発表している。鷗外という号はドイツ留学中に用い始めたらしい。所持していたゲーテ全集の表紙に明治一九年一月の日付とともに「鷗外漁史」の署名が認められるからである。

エリス事件

鷗外がドイツから東京に帰ったのは明治二一年九月八日であったが、そのあとを追う形でエリスという名のドイツ女性が東京にやってきた。小説『舞姫』に描かれているエリスである。エリスは小説にあるように踊りもできるが、手芸ができるのでそれで自活するつもりでやってきたらしい。九月二四日から築地精養軒に泊まっていた。留学から帰って鷗外の前途は洋々という時に、異国の女性が追いかけてきた事件に森家の一族が驚愕・心痛したであろうことは想像に難くない。エリスをなだめあきらめさせる役割は妹喜美子の夫小金井良精と弟篤次郎とがあたり、二〇日余りの滞在の後エリスはドイツに帰国した。喜美子の回想では事件の結着がついたことを次のように記している。「誰も誰も大切に思つて居るお兄い様にさしたる障もなく済んだのは家内中の喜びでした」（『森鷗外の系族』）。鷗外が『舞姫』を発表したのは『国民之友』明治二三年一月号で、エリス事件の解決から一年余りの時間を経過してからであった。その期間は鷗外が心の整理をし、現実のエリス事件を作品の中に閉じこめるのに必要な時間だったということができる。

啓蒙活動

ドイツ留学から帰っての鷗外の文学活動は、『しがらみ草紙』によって開始された。創刊号に鷗外は「『柵草紙』の本領を論ず」を書き、戦闘的な啓蒙批評活動を開始したのである。その戦闘的な性格は、坪内逍遙との間にかわした没理想論争（明治二四年九月～二五年六月）によくあらわれている。また、原作以上だと評価されているアンデルセン『即興詩人』の名訳も、『しがらみ草紙』に連載されたものである。

鷗外が団子坂上（現東京都文京区）に観潮楼を構えたのは、最初の妻赤松登志子と離婚した後である。登志子との間には長男於菟が生まれたが、赤松家が鷗外を養子のごとく扱うのに耐えられず、鷗外は於菟をつれて赤松家の持家から出てしまい、この結婚は失敗に終わった。鷗外はその後、日清戦争に従軍、帰朝してからは『しがらみ草紙』の後身として『めざまし草』を創刊、幸田露伴・斎藤緑雨との合評を「三人冗語」のタイトルで掲載

▲『死霊』表紙

▲『限りなく透明に近いブルー』表紙

	昭和			
		(石牟礼道子)・死海のほとり(周作)・月山(森敦)・迷宮の星祭り(金井美恵子)	銀河と地獄—岩野泡鳴論(川村二郎)・評「こころ」の構造(昇平)・戯北斎漫画(矢代静一)	天気予報(白石かずこ)・詩メランコリックな怪物(長田弘)・短花鈿(たつゑ)
一九七四	49	異床同夢(藤枝静男)・沼の記憶(吉田健一)・追放と自由(恢成)・猫の草子(文子)・熱い日(たか子)・目まいのする散歩(泰淳)・あの夕陽(日野啓三)・土の器(阪田寛夫)	評二つの戦争体験(黒井千次)・評内的生活(秋山駿)・評わが内なる皇国史観(金達寿)・評不機嫌の時代(正和)・戯どうぶつ会議(井上ひさし)	詩空に小鳥がいなくなった日(俊太郎)・詩譚海(退二郎)・詩やわらかい闇の夢(鈴木志郎康)・短煙波の道(服部忠志)・俳飛花集(林火)・俳平遠(狩行)
一九七五	50	時に佇つ(稲子)・祭りの場(林京子)・夢魔の世界—「死霊」第五章(雄高)・甘い蜜の部屋(森茉莉)・岬(中上健次)・火宅の人(檀一雄)	評未来の文学者(健三郎)・評批評の歴程(二郎)・評漱石とアーサー王伝説(江藤淳)・評岡倉天心(信)・評現代小説の闇(秀昭)・戯七人みさき(松代)	詩田園に死す(修司)・詩遊星の寝返りの下で(信)・詩はかた(那珂太郎)・短湧井(三四二)・短独石馬(柊二)・俳西行の日(源義)・俳桜島(六林男)
一九七六	51	夢の碑(高井有一)・なんじゃもんじゃの面(京子)・限りなく透明に近いブルー(村上龍)・ピンチランナー調書(健三郎)・人称代名詞(野坂昭如)	評道化と再生への想像力(健三郎)・評『蕐露行』の構想(昇平)・評韓国の魂の冬(真継伸彦)・評日本文学史早わかり(才一)・戯案内人(公房)	詩わたしは燃えたつ蜃気楼(剛造)・詩羽虫の飛ぶ風景(中村稔)・詩サフラン摘み(吉岡実)・短蔓と薔薇(利雄)・俳弟子(星野麦丘人)・俳磊磈集(石塚友二)
一九七七	52	引潮(潤三)・行き帰り(後藤明生)・天の湖(高橋たか子)・墓まいり(川崎長太郎)・妄想(光夫)・三銃士(唐十郎)・母の霊(耕治人)・過ぎし楽しき年(阿部昭)	評『死の棘』論(健男)・評あるスパイの調書(謙)・随竹内好の追想(雄高)・評『悪霊』論(秀昭)・随作者弁明のこと(吉見)・評本居宣長(秀雄)・戯妖かし(静一)・戯水中都市(公房)	詩北入曽(吉野弘)・詩「月」そのほかの詩(康夫)・詩死者の砦(退二郎)・詩望楼(粒来哲蔵)・短少年(秦恒平)・短佐佐木幸綱歌集・俳不動(誓子)・俳涼夜(龍太)
一九七八	53	銃と十字架(周作)・フーシェ革命暦(邦生)・九月の空(高橋三千綱)・死んだ男(森万紀子)・夕暮まで(淳之介)・寵児(津島佑子)・華厳(伸彦)	評戦後日本文学史・年表(駿・光一・松原新一)・評戦後詩史論(隆明)・評神話と文学(栗田勇)・戯子午線の祀り(順二)・戯S・カルマ氏の犯罪(公房)	詩誤解(隆一)・詩霊智の歌(鷲巣繁男)・詩夜間飛行(吉原幸子)・短馬場あき子歌集・短旅人の耳(安田章生)・短山下陸奥全歌集・俳殺仏(永田耕衣)
一九七九	54	身世打鈴(古山高麗雄)・北の旗雲(高橋揆一郎)・落城記(野呂邦暢)・同時代ゲーム(健三郎)	評「無条件降伏」論争と文学(光一)・評横光利一の軌跡(梶木剛)・戯東海道おらんだ怪談(宮本研)	詩清水昶詩集・詩不帰郷(黒田喜夫)・短火を運ぶ(幸綱)・俳わが旅路(五所平之助)
一九八〇	55	帰路(立原正秋)・神聖喜劇(大西巨人)・狂風記(淳)・父が消えた(尾辻克彦)	随回想太宰治(野原一夫)・評日本文学史序説(周一)・戯元禄港歌(松代)	詩掌のなかの映画(清水哲男)・詩バルバラの夏(長谷川龍生)・短墨雫(長沢美津)

時代概説

大衆文学

昭和における大衆文学隆盛の時期は二度ある。平凡社から『現代大衆文学全集』全六〇巻が刊行された昭和二年から七年までの時期と、昭和四〇年代以後の時期とである。今日もその時期は継続していると見てよい。第一の時期は活字メディアの躍進と不況をのりきるためのダンピング商法とを背景として出現したと考えられる。第二の時期はテレビ時代に入って本が読まれなくなった状況を、出版業界が読者をとりもどそうとして出現したものである。いずれの場合にも出版業界の企画がからんでいるところに特色があり、作者もマスコミの注文に応じて大衆性のある小説を書く場合が多い。大衆文学は読者とともに描かれるともいえるわけで、その意義は決して失われるわけではないが、大衆文学状況によって文学の変質が問題となることも事実である。

▲『恍惚の人』表紙

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
昭和	一九六六	41	至福千年(淳)・甲乙丙丁(重治)・幻化(春生)・春の雪(由紀夫)・憂鬱なる党派(和巳)・贋の偶像(光夫)・沈黙(周作)・英霊の声(由紀夫)・夏の砦(辻邦生)・華岡青洲の妻(佐和子)・白きたおやかな峰(杜夫)・おろしや国酔夢譚(靖)	崎潤一郎の生涯と文学(整)・評高見順断片(謙)・戯サド侯爵夫人(由紀夫)・評昭和文学十四講(成瀬正勝)・評情況とはなにか(隆明)・評孤立無援の思想(和巳)・評常識について(秀雄)・戯黄金の国(周作)	珂太郎)・詩殉愛(惇夫)・短自註鹿鳴集(八一)・短六月の旗(青丘)・俳誕生(鷹羽狩行)・詩田舎のモーツァルト(喜八)・詩空気の箱(克衛)・詩葡萄の女(冬二)・短行く心帰る心(光子)・俳秋燕(源義)
	一九六七	42	万延元年のフットボール(健三郎)・レイテ戦記(昇平)・奔馬(由紀夫)・幕が下りてから(章太郎)・燃えつきた地図(公房)	評内と外からの日本文学(佐伯彰一)・評土着と情況(桶谷秀昭)・評新しき長城(和巳)・戯一目見て憎め(石川淳)	詩礼記(順三郎)・詩いつの日にも愛の詩を(高田敏子)・詩荘厳なる詩祭(松永伍一)・短雉(上田三四二)・俳万座(不死男)
	一九六八	43	海市(武彦)・輝ける闇(健)・三匹の蟹(大庭みな子)・わが子キリスト(泰淳)・残虐な抱擁(光晴)・暁の寺(由紀夫	評パトスの神話(磯田光一)・評日本の現代小説(光夫)・評文化防衛論(由紀夫)・評太陽と鉄(由紀夫)・戯雪の花火(正和)	詩いろいろの天使(串田孫一)・詩表札など(石垣りん)・短清明の節(空穂)・短黒豹(芳美)・俳酒中花(波郷)
	一九六九	44	暗室(淳之介)・スミヤキストQの冒険(由美子)・赤頭巾ちゃん気をつけて(庄司薫)・懲役人の告発(麟三)・アカシヤの大連(清岡卓行)	評全体小説と想像力(宏)・評わが解体(和巳)・評戦後批評家論(光一)・戯かさぶた式部考(秋元松代)・戯癩王のテラス(由紀夫)	詩蕩児の家系(大岡信)・詩大河童(宗左近)・短虹ひとたび(たつゑ)・短感幻楽(邦雄)・俳殉教(秋桜子)・俳操守(石原八束)
	一九七〇	45	心優しき叛逆者たち(光晴)・橋上幻像(善衛)・無名長夜(吉田知子)・天人五衰(由紀夫)・化石の森(慎太郎)・回転扉(河野多恵子)	評日本の「私」を求めて(彰一)・評核時代の想像力(健三郎)・評漱石とその時代(江藤淳)・戯愛の乞食(唐十郎)	詩黄金詩篇(吉増剛造)・詩血と野菜(天沢退二郎)・短形影(佐太郎)・俳枯野の沖(能村登四郎)・俳土がたわれは(兜太)
	一九七一	46	行隠れ(古井由吉)・嵯峨野明月記(辻邦生)・彼の故郷(小川国夫)・ちりがみ交換(重治)・死滅する鯨の代理人(健三郎	随三島由紀夫(康成)・評文学の回復は可能か(入江隆則)・随私の中の地獄(泰淳)・戯吸血姫(唐十郎)・戯写楽考(松代)	詩垂直旅行(十三郎)・詩頭脳の塔(剛造)・詩侏羅紀の果の昨今(心平)・短木丹木母集(保田与重郎)・俳春の道(龍太)
	一九七二	47	同心円のなかで(高橋たか子)・たった一人の反乱(丸谷才一)・たんぽぽ(康成)・れくいえむ(郷静子)・恍惚の人(佐和子)	評同時代としての戦後(健三郎)・評投身と救助—小林秀雄におけるマルクス(亀井秀雄)・評批評とは何か(秀昭)	詩水準原点(石原吉郎)・詩夢魔の構造(退二郎)・短万葉のうた(国世)・短藤棚の下の小室(柊二)・俳遠岸(狩行)
	一九七三	48	約束の土地(李恢成)・椿の海の記	評文学の自己責任(森川達也)・評	詩新年の手紙(隆一)・詩わたしの

内向の世代

昭和四〇年前後に文壇に登場した作家・批評家をひとまとめにして、イデオロギーぬきの内向的性格をもった文学世代として「**内向の世代**」とよんでいる。**阿部昭・小川国夫・黒井千次・後藤明生・古井由吉・饗庭孝男・秋山駿・柄谷行人・川村二郎**らが「内向の世代」に属する。**あくまでも自己の内面に固執しつつ現実を捉えようとする傾向**をもつ。これまでのリアリズムとは別の、非現実的描写をとり入れた独自の方法で、現実の不透明感や自己存在の不安定感を表現しようとしている。

▲古井由吉

▲小川国夫

▲阿部昭

西暦	昭和	小説	評論・戯曲ほか	詩歌
		楢山節考(深沢七郎)・氾濫(整)・橋づくし(由紀夫)・挽歌(原田康子)・	(武井昭夫)・戯鹿鳴館(由紀夫)	ロダンの首(角川源義)・俳母郷行(草田男)
一九五七	32	梨の花(重治)・点と線(清張)・天平の甍(靖)・海と毒薬(周作)・死者の奢り(大江健三郎)・パニック(開高健)・裸の王様(健)	評現代小説は古典たり得るか(由紀夫)・評奴隷の思想を排す(江藤淳)・戯明智光秀(恆存)・戯人と狼(光夫)	詩われに五月を(寺山修司)・詩返礼(富岡多恵子)・短砂の上の卓(高安国世)・短白い風の中で(たつゑ)・俳実生(星野立子)
一九五八	33	飼育(健三郎)・芽むしり仔撃ち(健三郎)・楼蘭(靖)・第四間氷期(公房)・娼婦の部屋(淳之介)・朝の歌(昇平)	評昭和文学盛衰史(順)・評神話の克服(江藤淳)・評日本のアウトサイダー(徹太郎)・評物語戦後文学史(秋五)	詩吉本隆明詩集・詩北国(靖)・詩僧侶(吉岡実)・短天に群星(修)・短日本人霊歌(邦雄)・俳道化師(岡部六弥太)
一九五九	34	敦煌(靖)・貴族の階段(泰淳)・日本三文オペラ(健)・われらの時代(健三郎)・鏡子の家(由紀夫)・海辺の光景(章太郎)	評西欧とは何か(周一)・評ふたたび政治小説を(光夫)・評考へるヒント(秀雄)・評抒情の論理(隆明)・戯千鳥(田中千禾夫)	詩氷った焔(清岡卓行)・詩世界へ(俊太郎)・詩亡羊記(村野四郎)・短相聞抄(善麿)・短麦の庭(柴生田稔)・俳童眸(飯田龍太)
一九六〇	35	宴のあと(由紀夫)・眠れる美女(康成)・いやな感じ(順)・パルタイ(倉橋由美子)・夜と霧の隅で(北杜夫)・忍ぶ川(三浦哲郎)	評日本浪曼派批判序説(橋川文三)・評現在の政治行動と文学(知二)・戯狼生きろ豚は死ね(慎太郎)・戯パリ繁昌記(光夫)	詩失はれた時(順三郎)・詩あなたに(俊太郎)・短一つ石(五味保義)・短おきな草(哀草果)・俳原泉(井泉水)
一九六一	36	憂国(由紀夫)・セヴンティーン(健三郎)・雁の寺(水上勉)・古都(康成)・闇の中の祝祭(淳之介)・瘋癲老人日記(潤一郎)	随年月のあしおと(和郎)・評文学・昭和十年前後(謙)・評純文学は存在し得るか(整)・戯有間皇子(恆存)・戯十日の菊(由紀夫)	詩単独者の愛の唄(山本太郎)・詩晩春の日に(冬二)・短青春の碑(芳美)・俳黙示(赤黄男)・俳旅愁(秋桜子)
一九六二	37	島へ(島尾敏雄)・楡家の人びと(杜夫)・庶民列伝(七郎)・砂の女(公房)・出発は遂に訪れず(敏雄)・悲の器(高橋和巳)	評実感的文学論(十返肇)・評純文学の過去と現在(順)・評純文学像の推移(整)・戯オットーと呼ばれる日本人(順二)	詩豊饒の女神(順三郎)・詩地中海(靖)・短一百光年(杉浦翠子)・短街上(国世)・俳変身(三鬼)・俳寒夜句三昧(蛇笏)
一九六三	38	狂ひ凧(春生)・砂の上の植物群(淳之介)・鮫(真継伸彦)・日常生活の冒険(健三郎)・剣(由紀夫)・闇の中の黒い馬(雄高)	評純文学は可能か(奥野健男)・評戦後文学をどう受けとめたか(健三郎)・評私小説と家庭小説(小島信夫)・戯世阿弥(山崎正和)	詩何処へ(飯島耕一)・詩サンチョ・パンサの帰郷(石原吉郎)・短雪道(哀草果)・短白き海(佐太郎)・俳流寓抄以後(万太郎)
一九六四	39	他人の顔(公房)・されどわれらが日々―(柴田翔)・個人的な体験(健三郎)・夕べの雲(潤三)・安曇野(吉見)	評純文学は消滅するか(日沼倫太郎)・随私の遍歴時代(由紀夫)・評「近代文学」派の問題(隆明)・戯喜びの琴(由紀夫)	詩第四の蛙(心平)・詩死の淵より(高見順)・短捜神(佐美雄)・短北を指す(たつゑ)・俳晩華(秋桜子)
一九六五	40	小町変相(文子)・黒い雨(鱒二)・	評自立の思想的拠点(隆明)・評谷	詩抒情の変革(長田弘)・詩音楽(那

時代概説

第三の新人

終戦後すぐに文壇に登場した野間宏・椎名麟三・梅崎春生らを第一のグループ、次に登場した堀田善衛・武田泰淳・大岡昇平・安部公房らを第二のグループとすれば、昭和二七～三一年に登場したグループは第三にあたる。これを第三の新人と称しているのである。**安岡章太郎・吉行淳之介・小島信夫・庄野潤三・三浦朱門・阿川弘之・遠藤周作**らがこれに属する。第一、第二のグループが観念性・思想性を重視したのに対し、戦後の日常性回復を背景として、**自己の資質や感受性を軸に日常性の意味を掘り下げようとする傾向**が共通して見られる。私小説の伝統をひきつぎ、細部描写を重視する方法をとっている。

▲第3の新人たち（左より吉行，遠藤，近藤，庄野，安岡，小島）

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
昭和			靖）・春の城（阿川弘之）・足摺岬（虎彦）・少将滋幹の母（潤一郎）・闘牛（靖）	再検討（光夫）・評共産主義的人間（小田切秀雄）・随父（幸田文）・戯夕鶴（順二）・戯跫音（内村直也）	（茂吉）・俳光炎（中島斌雄）
	一九五〇	25	武蔵野夫人（昇平）・遙拝隊長（鱒二）・鳴海仙吉（整）・チャタレイ夫人の恋人（ロレンス、整訳）・愛の渇き（由紀夫）・一九四五年夏（洋子）・赤い繭（安部公房）・舞姫（康成）	評現代文学の可能性（整）・評風俗小説論（光夫）・評白樺派の文学（本多秋五）・評昭和文学論（謙）・戯キティ颱風（恆存）・戯五稜郭血書（栄）・戯暗い火花（順二）	詩羅甸薔薇（吉田一穂）・詩六月のみどりの夜は（安東次男）・詩典型（光太郎）・詩樹木派（高見順）・短国歩のなかに（太田青丘）・俳瘤（秋元不死男）・俳曼珠沙華（野見山朱鳥）・俳霜林（秋桜子）
	一九五一	26	禁色（由紀夫）・真空地帯（宏）・壁（公房）・めし（林芙美子）・広場の孤独（堀田善衛）・冥府山水図（三浦朱門）	評伊藤整氏の生活と意見（整）・評谷崎潤一郎論（光夫）・評小林多喜二と宮本百合子（蔵原惟人）・戯蛙昇天（順二）	詩山芋（大関松三郎）・詩原民喜詩集・詩原爆詩集（峠三吉）・短晴川（柴舟）・短晩夏（柊二）・俳都鳥（中村汀女）
	一九五二	27	風媒花（泰淳）・玄海灘（金達寿）・ノリソダ騒動記（杉浦明平）・或る「小倉日記」伝（松本清張）・重いS港（井上光晴）	評日本文壇史（整）・評国民文学（臼井吉見）・評国民文学の問題点（好）・戯竜を撫でた男（恆存）	詩駱駝の瘤にまたがって（達治）・詩二十億光年の孤独（谷川俊太郎）・短雪間草（麓）・短帰潮（佐藤佐太郎）・俳雪片（素十）
	一九五三	28	この神のへど（順）・静かなる山々（直）・銀貨（永井龍男）・悪い仲間（安岡章太郎）・人工庭園（知二）・ひもじい月日（円地文子）	評第三の新人（山本健吉）・評女性に関する十二章（整）・評志賀直哉論（光夫）・随世にも不思議な物語（浩二）・評真実は訴える（和郎）	詩小熊秀雄詩集・詩若いコロニイ（北園克衛）・詩転位のための十篇（吉本隆明）・短日本挽歌（柊二）
	一九五四	29	むらぎも（重治）・驟雨（吉行淳之介）・潮騒（由紀夫）・アメリカン・スクール（小島信夫）・プールサイド小景（庄野潤三）・みづうみ（康成）	評近代絵画（秀雄）・評現代人の疎外（服部達）・評日本の近代小説（光夫）・戯葵の上（由紀夫）・戯ひかりごけ（泰淳）	俳銀河依然（草田男）・詩乾いた道（伸二郎）・詩ひとりの女に（黒田三郎）・短噴泉（青丘）・俳咀嚼音（能村登四郎）・俳帰心（秋桜子）
	一九五五	30	姨捨（靖）・流れる（幸田文）・雲の墓標（弘之）・白い人（遠藤周作）・森と湖のまつり（泰淳）・太陽の季節（石原慎太郎）	随忘れ残りの記（吉川英治）・随わたしの歩いた道（平塚らいてう）・評われらにとって美は存在するか（達）・戯どれい狩り（公房）	詩狼がきた（関根弘）・詩倖せそれとも不倖せ（入沢康夫）・詩愛について（俊太郎）・短倭をぐな（迢空）・俳少年（金子兜太）
	一九五六	31	地唄（有吉佐和子）・金閣寺（由紀夫）・処刑の部屋（慎太郎）・紫苑物語（淳）・書かれざる一章（光晴）・	随鴎外の思ひ出（小金井喜美子）・評もはや「戦後」ではない（好夫）・評戦後の戦争責任と民主主義文学	詩東洋の詩魂（伸二郎）・詩四千の日と夜（田村隆一）・詩天山（谷川雁）・短装飾楽句（塚本邦雄）・俳

戦後文学

太平洋戦争末期に窒息させられていた文学は、敗戦とともに息を吹き返した。戦後まもなく多数の新人が輩出し、**野間宏・椎名麟三・梅崎春生**らの**戦後派**は人間存在を根源から問いなおそうとする実存的志向を共通してもっていた。また、旧プロレタリア文学系の文学者、**宮本百合子・中野重治**らによって**新日本文学会**が結成され、新たに民主主義文学への出発がなされた。戦争終結後まもなくの文壇には**新戯作派(無頼派)**とよばれる作家たちもいた。**坂口安吾・太宰治・織田作之助**らで、彼らは戦後の混迷と虚無の中で既成の文学観を否定して激しい反逆姿勢をとった。その創作方法に戯作手法を用いたので新戯作派の名がある。

▲「播州平野」宮本百合子

			(岩田豊雄)・精神病学教室(石上玄一郎)・海戦(文雄)・得能物語(整)	和(秀雄)・評歴史文学論(岩上順一)・評当麻(秀雄)・評無常といふ事(秀雄)・評近代の超克(座談会、秀雄・啓治ら)	高志(木俣修)・短翼(大悟法利雄)・短愛国百人一首(日本文学報国会編)・俳雪国(青邨)・俳えごの花(たかし)
昭和	一九四三	18	東方の門(藤村)・細雪(潤一郎)・弟子(敦)・李陵(敦)・右大臣実朝(治)・東橋新誌(順)・光をかゝぐる人々(直)	評言霊の幸はひ(蓮田善明)・評司馬遷(武田泰淳)・評鷗外の精神(唐木順三)・評歴史の自覚(勝一郎)	詩海原にありて歌へる(惇夫)・詩富士山(心平)・詩春のいそぎ(静雄)・短牡丹の木(白秋)・俳白嶽(蛇笏)・俳磐梯(秋桜子)
	一九四四	19	新釈諸国噺(治)・劉広福(八木義徳)・一草一木(康成)・礎(健作)・津軽(治)	評道統論について(芳賀檀)・評鷗外と遺言状(重治)・評魯迅(竹内好)・戯おりき(十郎)・戯十二月八日(今日出海)	詩天地の間(藤原定)・短或る遍歴から(津村信夫)・詩暁の泉(片山敏彦)・短雪明(生方たつゑ)・俳霜晴(風生)
	一九四五	20	背に負うた子(健作)・微笑(麟太郎)・パンドラの匣(治)・黒猫(健作)・自在人(北畠八穂)	評神機到るの年(房雄)・評新日本文学の端緒(百合子)・評歌声よおこれ(百合子)	短千戈永言(達治)・短吉野朝之落葉(順)・短秋晴(善磨)
	一九四六	21	踊子(荷風)・赤蛙(健作)・灰色の月(直哉)・死霊(埴谷雄高)・わが胸の底のこゝには(順)・播州平野(百合子)・暗い絵(野間宏)・白痴(坂口安吾)・煙草(由紀夫)・桜島(梅崎春生)・かういふ女(平林たい子)・焼跡のイエス(淳)	評第二の青春(荒正人)・評堕落論(安吾)・評文学における戦争責任の追求(小田切秀雄)・評第二芸術—現代俳句について(桑原武夫)・評可能性の文学(織田作之助)・戯星の夜なら(水木洋子)・戯なよたけ(加藤道夫)	詩近代悲傷集(迢空)・詩大海辺(十三郎)・詩編笠(ひろし・ぬやま)・詩旅人(河上肇)・短つゆじも(茂吉)・短群鶏(宮柊二)・俳激浪(誓子)・俳早桃(林火)・俳病雁(石田波郷)
	一九四七	22	五勺の酒(重治)・深夜の酒宴(椎名麟三)・肉体の門(田村泰次郎)・ヴィヨンの妻(治)・ビルマの竪琴(竹山道雄)・夏の花(原民喜)・青い山脈(洋次郎)・斜陽(治)・蝮のすゑ(泰淳)	評近代文学の運命(中野好夫)・評1946文学的考察(加藤周一・中村真一郎・福永武彦)・評革命の文学と文学の革命(周一)・戯風浪(木下順二)・戯三年寝太郎(順二)	詩檻褸の旗(岡本潤)・詩古代感愛集(迢空)・詩水の精神(薫)・詩反響(静雄)・短寒燈集(八一)・短早梅集(吉野秀雄)・俳初鴉(高野素十)・俳晩刻(誓子)
	一九四八	23	虫のいろいろ(一雄)・雪夫人絵図(聖一)・俘虜記(大岡昇平)・桜桃(治)・人間失格(治)・テニヤンの末日(義秀)・永遠なる序章(麟三)・屍の街(大田洋子)・野火(昇平)	評実存主義(矢内原伊作)・随如是我聞(治)・評逃亡奴隷と仮面紳士(整)・評小説の方法(整)・戯速水女塾(国士)・戯最後の切札(福田恆存)・戯火宅(由紀夫)	詩落下傘(光晴)・詩日本沙漠(心平)・詩定本蛙(心平)・短早春歌(近藤芳美)・短麻ぎぬ(四賀光子)・俳重陽(秋桜子)・俳夜の桃(三鬼)
	一九四九	24	真理先生(実篤)・千羽鶴(康成)・仮面の告白(由紀夫)・猟銃(井上	評現代史への試み(順三)・評芸術と実生活(平野謙)・評近代文学の	詩花電車(冬彦)・詩鬼の児の唄(光晴)・短小園(茂吉)・短白き山

時代概説

モダニズム文学

プロレタリア文学が台頭、隆盛していった同じ時期に、別の方向をとった文学の流れが存在した。それらを**モダニズム文学**と総称している。**『文芸時代』**(大正一三年創刊)に拠った**新感覚派**がそのひとつである。新感覚派は知的感覚的方法による人間把握をめざした。**横光利一・川端康成**がこの派の中心である。プロレタリア文学が文壇に勢力をふるうようになった昭和初期には、新感覚派の流れを受けて**新興芸術派**が結成された。新興芸術派はプロレタリア文学に対抗する目的で結成されたのであり、とくに定まった文学理念をもっていたわけではなかった。モダニズム文学にはもうひとつ、**新心理主義**がある。ジョイスやプルーストの方法に学んで人間心理の流れを分析的に表現しようとしたもので、**伊藤整**が代表的存在である。

▲『文芸時代』創刊号

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
昭和	一九三八	13	(辰雄)・「暗夜行路」完結(直哉)・マルスの歌(淳)・天の夕顔(中河与一)・生きてゐる兵隊(達三)・糞尿譚(火野葦平)・厚物咲(中山義秀)・**麦と兵隊**(葦平)・幻談(露伴)・**石狩川**(陸男)・結婚の生態(達三)・還らぬ中隊(文雄)	保栄)・随源氏物語の現代語訳について(潤一郎)・評文学と国策(房雄)・評人生論ノート(清)・評神々の復活(亀井勝一郎)・評歴史について(秀雄)・評農民文学の現状(伊藤永之介)	俳花影(原石鼎)・評日本への回帰(朔太郎)・詩**在りし日の歌**(中也)・詩思弁の苑(山之口貘)・詩西康省(田中克己)・詩**蛙**(心平)・短吉野朝の悲歌(順)・短**万葉秀歌**(茂吉)・俳炎昼(誓子)・俳鷹(たかし)
	一九三九	14	如何なる星の下に(順)・源氏物語(潤一郎訳)・呉淞クリーク(日比野士朗)・**多甚古村**(鱒二)・歌のわかれ(重治)・女生徒(治)・生々流転(かの子)・空想家とシナリオ(重治)・丹青(知義)・歴史(榊山潤)・嵐のなか(健作)・霧の蕃社(中村地平)	評戦争文学批判(板垣直子)・評農民作家論(窪川鶴次郎)・評滅びの仕度(勝一郎)・評ねちねちした進み方の必要(重治)・評政治と文学(岩上順一)・評新たなる出発(健作)・戯白い歴史(内村直也)・戯鏡(十郎)	詩東洋の満月(蔵原伸二郎)・詩大阪(十三郎)・詩怒れる神(佐藤惣之助)・詩艸千里(達治)・詩宿命(朔太郎)・詩体操詩集(村野四郎)・詩鳥(神保光太郎)・短大陸巡遊吟(吉植庄亮)・短波濤(斎藤瀏)・短くれなゐ(佐美雄)・俳華厳(茅舎)・俳海門(大野林火)
	一九四〇	15	俗天使(治)・駈込み訴へ(治)・受胎告知(今日出海)・女体開顕(かの子)・夫婦善哉(織田作之助)・暦(壺井栄)・走れメロス(治)・姨捨(辰雄)・得能五郎の生活と意見(伊藤整)・オリンポスの果実(田中英光)・弥勒(稲垣足穂)	評政治と文学(和郎)・評錯乱の論理(花田清輝)・評ヨーロッパ文明の将来と日本(西谷啓治)・評歴史の中にある文学(徹太郎)・評国民文学への道(浅野晃)・戯大仏開眼(長田秀雄)・浮標(十郎)・戯大原幽学(成吉)	詩夏花(静雄)・詩幼年絵帖(神保光太郎)・詩萩原恭次郎詩集・詩行人の歌(喜八)・詩山之口貘詩集・短寒雲(茂吉)・短**鹿鳴集**(会津八一)・短魚歌(斎藤史)・俳旗(西東三鬼)・俳穂高(楸邨)
	一九四一	16	山姥(弥生子)・東京八景(治)・**菜穂子**(辰雄)・遠方の人(森山啓)・縮図(秋声)・長江デルタ(多田裕計)・花ざかりの森(三島由紀夫)・青果の市(芝木好子)・身の秋(浩二)・命短し(深田久弥)・曠野(辰雄)・侘日記(上林暁)	評古今的・新古今的(重治)・評民族の興隆と詩(芳賀檀)・評転向について(房雄)・評歴史と文学(秀雄)・評事変下の文学(直子)・評文学非力説(順)・評殉国の精神と日本文学の精神(晃)・評森鷗外(石川淳)・戯頼山陽(成吉)	詩春の犠牲(竹内勝太郎)・詩富永太郎詩集・詩無車詩集(武者小路実篤)・詩望郷(菱山修三)・詩**智恵子抄**(光太郎)・詩一点鐘(達治)・短みたみわれ(影山正治)・短白鳳(佐美雄)・俳海燕(橋本多佳子)・俳**万緑**(草田男)・俳天の狼(富沢赤黄男)
	一九四二	17	北方の魂(健作)・古譚(中島敦)・七つの荒海(田宮虎彦)・光と風と夢(敦)・海に行く(嘉樹)・海軍	評大東亜共栄圏への道(高坂正顕)・評攘夷の精神(与重郎)・評二葉亭四迷伝(光夫)・評戦争と平	詩涙した神(薫)・詩大いなる日に(光太郎)・詩日本頌歌(春夫)・短**白桃**(茂吉)・短四天雲晴(劉)・短

プロレタリア文学

大正末から昭和の初めにかけては、第一次世界大戦後の経済恐慌、関東大震災、さらに昭和初期の世界恐慌による経済混乱・農村恐慌があいつぎ、社会不安が増大した。このような社会背景からプロレタリア文学が生まれた。『種蒔く人』の創刊（大正一〇年）を出発点とし、『文芸戦線』創刊（大正一三年）、日本プロレタリア文芸連盟の結成（大正一四年）と、急速に勢いを増した。当初は葉山嘉樹に代表されるように、労働者による自然発生的な文学であったが、社会変革という目的意識をもたねばならぬことが青野季吉によって説かれて以後、次第に政治目的に奉仕する性格を強めていった。昭和六年の満州事変以降は官憲の弾圧を受け、あまりに厳しい政治主義に作家たちがついてゆけなくなったこともあって、昭和九年に組織的なプロレタリア文学運動は崩壊した。

▲『種蒔く人』創刊号

昭和					
	一九三三	8	枯木のある風景（浩二）・神前結婚（礒多）・町の踊り場（秋声）・転換時代（のち党生活者と改題）（多喜二）・若い人（石坂洋次郎）・春琴抄（潤一郎）・禽獣（康成）・風雨強かるべし（和郎）・万暦赤絵（直哉）・美しい村（辰雄）・暢気眼鏡（尾崎一雄）	評一聯の非プロレタリア的作品（百合子）・随芸について（潤一郎）・評故郷を失った文学（秀雄）・評不安の思想とその超克（三木清）・評創作方法上の新転換（直）・評私小説について（秀雄）・評社会主義リアリズムの問題について（百合子）・評末期の眼（康成）・随陰翳礼讃（潤一郎）	詩罰当りは生きてゐる（岡本潤）・詩 Ambarvalia（順三郎）・詩氷（冬彦）・短青牛集（千樫）・短立秋（順）・俳草の花（富安風生）
	一九三四	9	斧琴菊（鏡花）・紋章（利一）・不惜身命（有三）・村の次男（和田伝）・癩（島木健作）・白夜（村山知義）・白い壁（本庄陸男）・盲目（健作）・あにいもうと（犀星）・ひかげの花（荷風）・銀座八丁（麟太郎）・ダイヴィング（舟橋聖一）	評悲劇の哲学（シェストフ、阿部六郎・河上徹太郎訳）・評所謂転向について（佐野学）・評シェストフ的不安について（三木清）・評転向作家論（杉山平助）・評冬を越す蕾（百合子）・戯斬られの仙太（十郎）・戯鼬（真船豊）	詩山岳詩集（中西悟堂）・詩古き世界の上に（小野十三郎）・詩氷島（朔太郎）・詩閒花集（達治）・詩山羊の歌（中原中也）・短白南風（白秋）・短人間経（勇）・俳雑草園（山口青邨）・俳川端茅舎句集
	一九三五	10	第一章（重治）・夕景色の鏡（のち雪国と改題）（康成）・真実一路（有三）・故旧忘れ得べき（高見順）・蒼氓（石川達三）・村の家（重治）・道化の華（太宰治）・仮装人物（秋声）・起承転々（順）・再建（健作）	評芸術派の能動性（舟橋聖一）・評行動主義理論（小松清）・評転向作家論（中村光夫）・評純粋小説論（利一）・評反進歩主義文学論（保田与重郎）・評私小説論（秀雄）・戯断層（久板栄二郎）	詩小熊秀雄詩集・詩鶴の葬式（薫）・詩山鴫（田中冬二）・詩わがひとに与ふる哀歌（伊東静雄）・詩中野重治詩集・短旅雁（順）・短すだま（哀草果）・俳黄旗（誓子）・俳松本たかし句集・俳石田波郷句集
	一九三六	11	小説の書けぬ小説家（重治）・くれなゐ（稲子）・猫と庄造と二人のをんな（潤一郎）・冬の宿（知二）・第一義の道（健作）・いのちの初夜（北条民雄）・鶴は病みき（岡本かの子）・普賢（石川淳）・癩院受胎（民雄）・風立ちぬ（辰雄）	評トルストイについて（正宗白鳥）・評思想と実生活（秀雄）・評描写のうしろに寝てゐられない（順）・評思想と新生活（白鳥）・評文学者の思想と実生活（秀雄）・評日本の橋（与重郎）・評散文精神について（和郎）・戯彦六大いに笑ふ（十郎）	詩いやらしい神（冬彦）・詩花冷え（冬二）・詩母岩（心平）・詩藍色の蟇（大手拓次）・短朝雲（麓）・短暖流（五島美代子）・短苔径集（吉野秀雄）・俳白日（水巴）・俳長子（中村草田男）
	一九三七	12	二十世紀旗手（治）・路傍の石（有三）・濹東綺譚（荷風）・旅愁（利一）・汽車の罐焚き（重治）・幽鬼の街（整）・日蔭の村（達三）・生活の探求（健作）・かげろふの日記	評日本文学の伝統を思ふ（春夫）・評文学における日本的なるもの（百合子）・評現代日本の文化的状況（徹三）・評戦争と文学者（房雄）・戯新選組（知義）・戯火山灰地（久	詩萱草に寄す（立原道造）・詩厄除け詩集（鱒二）・詩鮫（光晴）・詩暁と夕の詩（道造）・短浅間の表情（杉浦翠子）・短白鷺集（金子薫園）・俳冬雲雀（秋桜子）・俳玄冬（誓子）・

時代概説

新現実主義

大正中期以降の作家たちは、自分たちの存在を明確にするために、それまで勢力をもっていた自然主義・白樺派・耽美主義のいずれとも異なる文学的傾向をとろうとした。それらを総称して新現実主義と呼んでいる。三つの文学グループが新現実主義に含まれる。第一は芥川龍之介・菊池寛らの『新思潮』（第三次は大正三年、第四次は大正五年刊）系で、理知による独自の人間解釈をめざした。第二は広津和郎・葛西善蔵らの『奇蹟』（大正元年創刊）派で、彼らは心理的リアリズムをめざそうとしていた。第三は佐藤春夫や室生犀星ら、浪漫主義の系譜の上に立つ作家である。

なお、もっとも狭い意味で新現実主義という場合には、『新思潮』派だけをさす。

▲『新思潮』創刊号

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
			きの風（重治）・真知子（弥生子）・放浪記（林芙美子）・一九二八年三月十五日（小林多喜二）・蓼喰ふ虫（潤一郎）	園を荒す者は！（武羅夫）・評所謂芸術大衆化論の誤りについて（重治）・戯傷だらけのお秋（三好十郎）	水）
昭和	一九二九	4	のんしゃらん記録（春夫）・不器用な天使（辰雄）・綾里村快挙録（片岡鉄兵）・鉄の話（重治）・蟹工船（多喜二）・夜明け前第一部（藤村）・太陽のない街（徳永直）・温泉宿（康成）・不在地主（多喜二）・屋根の上のサワン（鱒二）・浅草紅団（康成）	評形式主義理論の発展（中河与一）・評文学形式問答（谷川徹三）・評政治的価値と芸術的価値（平林初之輔）・評敗北の文学（宮本顕治）・評様々なる意匠（小林秀雄）・評芸術に政治的価値なんてものはない（重治）	評明治大正詩史（日夏耿之介）・詩軍艦茉莉（安西冬衛）・詩アナキスト詩集（鈴木柳介編）・詩白のアルバム（北園克衛）・詩車塵集（春夫）・評超現実主義詩論（西脇順三郎）・短豊旗雲（信綱）・短山麓（結城哀草果）・俳シャツと雑草（栗林一石路）
	一九三〇	5	日独対抗競技（阿部知二）・失業都市東京（直）・忍術武勇伝（貴司山治）・ブルジョワ（芹沢光治良）・南国太平記（直木三十五）・機械（利一）・聖家族（辰雄）・寝園（利一）・東倶知安行（多喜二）	評形式主義芸術論（与一）・評前衛の文学（勝本清一郎）・評ナップ芸術家の新しき任務（惟人）・評芸術派宣言（雅川滉）・評アシルと亀の子（秀雄）・評主知的文学論（知二）・戯瞼の母（長谷川伸）	詩木下杢太郎詩集・詩地獄の季節（ランボー、小林秀雄訳）・詩測量船（三好達治）・短春のことぶれ（迢空）・短植物祭（前川佐美雄）・短念珠集（茂吉）・短往還集（土屋文明）・俳葛飾（秋桜子）・俳普羅句集（前田普羅）
	一九三一	6	水晶幻想（康成）・吉野葛（潤一郎）・風琴と魚の町（芙美子）・盲目物語（潤一郎）・つゆのあとさき（荷風）・転換時代（藤森成吉）・ゼーロン（牧野信一）・武州公秘話（潤一郎）	評新しきシベリアを横切る（百合子）・評意識の流れと小説の構成（春山行夫）・評プロレタリア芸術運動の組織問題（惟人）・評芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争（惟人）・評ベルリンからの緊急討論（清一郎）	詩懸崖（菱山修三）・詩プロレタリア詩集（プロレタリア作家同盟編）・詩平戸廉吉詩集・短春（山下陸奥）・短鵠（順）・俳折柴句集（孝作）
	一九三二	7	のんきな患者（基次郎）・燃ゆる頬（辰雄）・餓鬼道（張赫宙）・鮎（丹羽文雄）・夜明け前第二部（藤村）・日本三文オペラ（武田麟太郎）・青年（房雄）・Xへの手紙（秀雄）・女の一生（有三）・蘆刈（潤一郎）	評新心理主義文学（伊藤整）・評プロレタリア文学の一方向（徳永直）・評芥川龍之介と志賀直哉（井上良雄）・評作家のために（房雄）・評政治と芸術・政治の優位性の問題（顕治）・随二つの絵（小穴隆一）・戯志村夏江（知義）	詩南窗集（達治）・詩帆 ランプ 鷗（丸山薫）・短水源地帯（夕暮）・俳青芝（草城）・俳草笛（星野麦人）・俳凍港（山口誓子）・俳雪国（普羅）・俳山廬集（飯田蛇笏）

反自然主義

日本における自然主義の方向が決定されるとまもなく、自然主義に批判的な文学思潮が形成された。大きく分けて三つの立場がある。ひとつは**森鷗外**と**夏目漱石**の立場であり、ともに外国文学に関する教養の上に立って時流にとらわれない理知的な作品を書き、**余裕派(高踏派)**と呼ばれている。第二は**耽美主義**であり、これは美の創造を第一義とする芸術至上主義の立場である。**永井荷風**や**谷崎潤一郎**がこの派の代表的作家である。第三は**白樺派**で、雑誌『白樺』(明治四三年創刊)の同人たちの文学傾向である。**武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎**らがその中心人物であるが、彼らは、人道主義の上に立ち自我の尊厳をどこまでも主張する理想主義的立場をとった。

◀『白樺』創刊号

時代	西暦	年
大正	一九二三	12
	一九二四	13
	一九二五	14
昭和	一九二六	1
	一九二七	2
	一九二八	3

(野上弥生子)・多情仏心(弴)
青銅の基督(善郎)・地獄(金子洋文)・子を貸し屋(浩二)・二銭銅貨(江戸川乱歩)・日輪(横光利一)・蠅(利一)・幽閉〈のち山椒魚と改題〉(井伏鱒二)
痴人の愛(潤一郎)・竹沢先生と云ふ人(善郎)・富士に立つ影(白井喬二)・聴き分けられぬ跫音〈「伸子」の一部〉(百合子)・頭ならびに腹(利一)・注文の多い料理店(宮沢賢治)
檸檬(梶井基次郎)・大導寺信輔の半生(龍之介)・濠端の住ひ(直哉)・十七歳の日記〈のち「十六歳の日記」と改題〉(康成)・大阪の宿(滝太郎)・淫売婦(葉山嘉樹)
セメント樽の中の手紙(嘉樹)・伊豆の踊子(康成)・絵のない絵本(林房雄)・春は馬車に乗って(利一)・嵐(藤村)・生きとし生けるもの(有三)・海に生くる人々(嘉樹)
玄鶴山房(龍之介)・ルウベンスの偽画(堀辰雄)・河童(龍之介)・無限抱擁(滝井孝作)・歯車(龍之介)・或阿呆の一生(龍之介)・丹下左膳(林不忘)
業苦(嘉村礒多)・キャラメル工場から(佐多稲子)・渦巻ける烏の群(黒島伝治)・鯉(鱒二)・卍(潤一郎)・放浪時代(龍胆寺雄)・冬の蠅(基次郎)・波(山本有三)・春さ

なし(寛)・評文学序説(土居光知)・戯ドモ又の死(武郎)
評階級闘争と芸術運動(青野季吉)・随侏儒の言葉(龍之介)・評日本改造法案大綱(北一輝)・戯同志の人々(有三)・戯海彦山彦(有三)
評本格小説と心境小説と(中村武羅夫)・評散文芸術の位置(和郎)・評文学革命と革命文学(佐々木孝丸)・評新感覚派の誕生(千葉亀雄)・戯古い玩具(岸田国士)・戯人生の幸福(正宗白鳥)
評再び散文芸術の位置に就て(和郎)・評感覚活動(利一)・評新感覚派(亀雄)・評新時代は斯く主張す(片岡鉄兵)・評女工哀史(細井和喜蔵)・戯平将門(青果)
評プロレタリアの文学運動(初之輔)・評無産階級文芸論(藤森成吉)・評自然生長と目的意識(季吉)・戯愛慾(実篤)・戯江戸城総攻(青果)・戯驟雨(国士)
評自然生長と目的意識再論(季吉)・評文芸的な余りに文芸的な(龍之介)・随芥川龍之介を哭す(佐藤春夫)・評芸術に関する走り書的覚え書(中野重治)・随漱石の思ひ出(夏目鏡子)
評新感覚派とコムミュニズム(利一)・評無産階級芸術運動の新段階(蔵原惟人)・評プロレタリア・レアリズムへの道(惟人)・評左傾について(鉄兵)・評誰だ? 花

真紅の溜息(深尾須磨子)・短靉日(石原純)・俳水巴句帖(渡辺水巴)
詩青猫(朔太郎)・詩ダダイスト新吉の詩(高橋新吉)・詩青き魚を釣る人(犀星)・詩こがね虫(金子光晴)・短竹乃里歌全集(茂吉・小泉千樫編)
詩春と修羅(宮沢賢治)・詩高層雲の下(喜八)・詩花巡礼(中西悟堂)・短太虚集(赤彦)・短林澗集(蕨真)・短一路(利玄)
詩風・光・木の葉(大木惇夫)・詩三半規管喪失(北川冬彦)・詩純情小曲集(朔太郎)・詩月下の一群(大学訳)・短海やまのあひだ(釈迢空)・短李青集(利玄)・俳井泉水句集(井泉水)
詩爪色の雨(サトウ・ハチロー)・詩半分開いた窓(小野十三郎)・詩雪明りの路(伊藤整)・短柿蔭集(赤彦)・短庭苔(岡麓)・俳南風(水原秋桜子)
詩富永太郎詩集・詩曠野の火(喜八)・短冬菜(水穂)・短生活を歌ふ(渡辺順三)・俳道芝(久保田万太郎)・俳花氷(日野草城)・俳澄江堂句集(芥川龍之介)
詩室内(竹内勝太郎)・詩枝の祝日(竹中郁)・詩貧しき信徒(八木重吉)・詩第百階級(草野心平)・短虹(夕暮)・短屋上の土(千樫)・俳多摩川(一碧楼)・俳皆懺悔(井泉

時代概説

自然主義

自然主義は一九世紀後半、フランスを中心に起こった、自然科学の方法を導入した文学思潮である。日本では明治三〇年代に小杉天外によってゾラの方法が試みられたが、充分な成果をあげ得なかった。日本の自然主義の方向が決定されたのは、田山花袋『蒲団』によってである。自我に目覚めた作家個人が自分自身の姿を描く、という方向である。島崎藤村が『破戒』という社会的視野をもった作品を書きながら、『春』以後は自己の身辺に取材した作品を書きついでゆくのも、『蒲団』に影響されるところが大きかったからである。こうして自然主義は、因襲に対する反抗や現実の醜悪さを暴露することはあっても社会的広がりをもたず、やがて日本独自の私小説、心境小説を生むことになった。

▲『蒲団』さし絵

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
大正	一九一六	5	渋江抽斎(鷗外)・高瀬舟(鷗外)・鼻(龍之介)・明暗(漱石)・善心悪心(里見弴)・芋粥(龍之介)・貧しき人々の群(中条百合子)	随貧乏物語(河上肇)・随ロダンの言葉(高村光太郎訳)・戯屋上の狂人(菊池寛)・戯項羽と劉邦(善郎)・戯出家とその弟子(倉田百三)	詩農民の言葉(福田正夫)・評日本に於ける未来派の詩とその解説(萩原朔太郎)・短舞ごろも(晶子)・短黒髪集(勇)・俳碧梧桐句集(大須賀乙字編)
	一九一七	6	西班牙犬の家(佐藤春夫)・偸盗(龍之介)・城の崎にて(直哉)・カインの末裔(武郎)・和解(直哉)・戯作三昧(龍之介)・神経病時代(広津和郎)	評理想主義的自然主義(森田草平)・評惜みなく愛は奪ふ(有島武郎)・随東京の三十年(花袋)・戯父帰る(寛)・戯地蔵経由来(正雄)	詩月に吠える(朔太郎)・詩狂へる歌(佐藤惣之助)・短寒紅集(杉浦翠子)・短長塚節歌集・俳炬火(臼田亜浪)・俳俳句提唱(荻原井泉水)・俳漱石俳句集
	一九一八	7	小さき者へ(武郎)・おかめ笹(荷風)・生れ出る悩み(武郎)・子をつれて(善蔵)・地獄変(龍之介)・学生時代(正雄)・田園の憂鬱(春夫)・奉教人の死(龍之介)・お絹とその兄弟(春夫)	評真人道主義作家の生れるまで(秋田雨雀)・評新しき村に就きて(実篤)・評現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論(泡鳴)・随偶像再興(哲郎)・戯俊寛(百三)	詩愛の詩集(室生犀星)・詩自分は見た(千家元麿)・詩抒情小曲集(犀星)・短伎芸天(川田順)・短泉のほとり(窪田空穂)・短渓谷集(牧水)
	一九一九	8	恩讐の彼方に(菊池寛)・或る女(武郎)・蔵の中(宇野浩二)・ある職工の手記(宮地嘉六)・友情(実篤)・性に眼覚める頃(犀星)・村の反逆者(神近市子)	評旧劇と新劇(小山内薫)・評志賀直哉論(広津和郎)・評葛西善蔵論(宇野浩二)・評新現実主義の文学(三上於菟吉)・随古寺巡礼(和辻哲郎)・戯藤十郎の恋(寛)	詩月光とピエロ(堀口大学)・詩日本象徴詩集(未来社同人編)・詩砂金(西条八十)・詩食後の唄(木下杢太郎)・短紅玉(利玄)・評童馬漫語(茂吉)
	一九二〇	9	死線を越えて(賀川豊彦)・小僧の神様(直哉)・舞踏会(龍之介)・性格破産者(江口渙)・真珠夫人(寛)・杜子春(龍之介)	評階級闘争の倫理的批判(長江)・評文芸の社会化とその得失を論ず(江口渙)・評第四階級の文学(中野秀人)・戯嬰児殺し(山本有三)	詩雀の生活(白秋)・詩槐多の歌へる(村山槐多)・詩牧羊神(敏)・評短歌に於ける写生の説(茂吉)・短氷魚(赤彦)
	一九二一	10	暗夜行路(直哉)・冥途(内田百閒)・赤い蠟燭と人魚(小川未明)・招魂祭一景(川端康成)・或る男(実篤)・三等船客(前田河広一郎)・理想の女(豊島与志雄)	評第二インターナショナルか第三インターナショナルか?(小牧近江)・評愛と認識との出発(百三)・評プロレタリアート芸術(嘉六)・評唯物史観と文学(平林初之輔)・	詩黒衣聖母(日夏耿之介)・詩十五夜お月さん(野口雨情)・詩明るい時(ヴェルハアレン、光太郎訳)・短あらたま(茂吉)・短寂光(吉植庄亮)・短雀の卵(白秋)・俳乙字句集(岩谷山梔子ほか編)
	一九二二	11	藪の中(龍之介)・都会の憂鬱(春夫)・トロッコ(龍之介)・海神丸	戯布施太子の入山(百三)・評宣言一つ(武郎)・評第四階級の文学(初之輔)・評芸術本態に階級	詩日本社会詩人詩集(福田正夫編)・詩空と樹木(尾崎喜八)・詩

浪漫主義

わが国における浪漫主義は、第一に、雑誌『文学界』(明治二六年創刊)の人々の文学傾向をさす。『文学界』の中心的存在であった北村透谷は『人生に相渉るとは何の謂ぞ』、『内部生命論』などによって文学芸術の自立を説き、文学そのものの価値を追求すべきことを主張した。それは、明治二〇年代になってもなお根深く残る封建道徳からの人間的解放を求めるものであった。

浪漫主義は、第二に、与謝野鉄幹・晶子らの『明星』(明治三三年創刊)派をさすものでもある。『明星』は明治三〇年代、市民社会の上昇期に乗じて自由な市民感情をうたいあげた文学雑誌で、この派の代表的存在である与謝野晶子の歌集『みだれ髪』は若い女性の自由奔放な感情世界をうたいあげている。

▲新聞ふうだった「明星」(1～5号まで)

明治	一九一〇	43	渦巻(上田敏)・家(藤村)・歌行燈(鏡花)・門(漱石)・青年(鷗外)・網走まで(志賀直哉)・別れたる妻に送る手紙(近松秋江)・土(長塚節)・普請中(鷗外)・かんかん虫(有島武郎)・刺青(谷崎潤一郎)・赤い船(小川未明)	ン、楠山正雄訳) 評自己の問題として見たる自然主義的思想(安倍能成)・評客観描写と印象描写(漱石)・随紅茶の後(永井荷風)・評自然主義は窮せしや(魚住折蘆)・評時代閉塞の現状(啄木)・随思ひ出す事など(漱石)・	詩霧(酔茗)・詩路傍の花(川路柳虹)・短独り歌へる(若山牧水)・短収穫(前田夕暮)・短NAKIWARAI(土岐哀果)・短酒ほがひ(吉井勇)・短一握の砂(啄木)・俳三千里(河東碧梧桐)
	一九一一	44	或る女のグリンプス(武郎)・お目出たき人(武者小路実篤)・妄想(鷗外)・少年(潤一郎)・泥人形(白鳥)・黴(秋声)・雁(鷗外)・百物語(鷗外)	戯人形の家(イプセン、抱月訳) 評善の研究(西田幾多郎)・評描写論(花袋)・随千曲川のスケッチ(藤村)・評元始女性は太陽であつた(平塚らいてう)・戯修禅寺物語(岡本綺堂)	詩思ひ出(白秋)・詩夜の舞踏(人見東明)・詩呼子と口笛(啄木)・短春泥集(晶子)・短路上(牧水)
大正	一九一二	1	彼岸過迄(漱石)・かのやうに(鷗外)・悪魔(潤一郎)・哀しき父(葛西善蔵)・大津順吉(直哉)・興津弥五右衛門の遺書(鷗外)・行人(漱石)	評「人形の家」論(青鞜同人)・評近代文学十講(厨川白村)・評黎明期の文学(御風)・戯道成寺(郡虎彦)・戯雪(久保田万太郎)	詩夜(百田宗治)・短青海波(晶子)・評童馬漫筆(斎藤茂吉)・短悲しき玩具(啄木)・短ほろびの光(伊藤左千夫)
	一九一三	2	清兵衛と瓢箪(直哉)・阿部一族(鷗外)・銀の匙(中勘助)・桑の実(鈴木三重吉)・大菩薩峠(中里介山)・逆徒(平出修)・范の犯罪(直哉)・護持院原の敵討(鷗外)	評新しき女の道(伊藤野枝)・随みゝずのたはこと(蘆花)・評生の要求と文学(片上伸)・評近世日本演劇史(伊原敏郎)・評ファウスト考(鷗外)・戯鉄輪(虎彦)	詩珊瑚集(荷風)・詩東京景物詩及其他(白秋)・詩白き手の猟人(露風)・短桐の花(白秋)・短馬鈴薯の花(島木赤彦・中村憲吉)・短赤光(茂吉)・俳はかぐら(中塚一碧楼)
	一九一四	3	大塩平八郎(鷗外)・堺事件(鷗外)・こころ(漱石)・安井夫人(鷗外)・老年(芥川龍之介)・桜の実の熟する時(藤村)・若き日の悩み(藤森成吉)・栗山大膳(鷗外)・黒い目と茶色の目(蘆花)	評生の創造(大杉栄)・随三太郎の日記(阿部次郎)・評自我生活と文学(御風)・戯わしも知らない(武者小路実篤)・戯牛乳屋の兄弟(久米正雄)・戯月項王(長与善郎)	詩獄中哀歌(加藤介春)・詩かなたの空(柳虹)・詩道程(高村光太郎)・詩白金之独楽(白秋)・短秋風の歌(牧水)・短銀(木下利玄)・短鍼の如く(長塚節)・俳牧唄(久米三汀)
	一九一五	4	あらくれ(秋声)・山椒大夫(鷗外)・入江のほとり(白鳥)・炭焼の娘(長塚節)・道草(漱石)・宣言(武郎)・最後の一句(鷗外)・羅生門(龍之介)・心づくし(水上滝太郎)	評悪魔主義の思想と文芸(泡鳴)・随妄人妄語(鷗外)・評最近の文芸及思潮(生田長江)・評我等如何に生くべきか(御風)・戯その妹(実篤)・戯法成寺物語(潤一郎)	詩最初の一人(百田宗治)・詩聖三稜玻璃(山村暮鳥)・短潮鳴(石榑千亦)・短切火(赤彦)・短雲母集(白秋)・短無花果(若山喜志子)・俳新傾向句集(碧梧桐)

時代概説

擬古典主義

明治一〇年代末から二〇年代にかけて、急速な欧化主義に対する反動が起こった。尾崎紅葉を中心とする硯友社の作家たちは、西鶴の手法を積極的に模倣しようとした。紅葉は『伽羅枕』『多情多恨』を書き、山田美妙は『夏木立』を書いた。硯友社の志向とは別に、理想的な古典世界を描こうとしたのが幸田露伴である。露伴は『五重塔』で男性的な力強い世界を描き、女性描写に巧みな紅葉と並び称された。右にあげた硯友社と理想主義とを総称して擬古典主義と呼ぶ。

擬古典主義は、表面的には欧化主義に対する反動であるが、写実主義と並んで明治新文学の文体を模索する運動だったと位置づけることができる。

▲『硯友社』の人々(円内，紅葉)

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
明治	一九〇三	36	重右衛門の最後(田山花袋)・地獄の花(永井荷風)・旧主人(島崎藤村)・藁草履(藤村)・魔風恋風(天外)・非凡なる凡人(独歩)・天うつ浪(露伴)・女教師(花袋)	とは如何なる人ぞ(樗牛)・随病床六尺(子規)・評自然主義とは何ぞや(長谷川天渓)・評東洋の理想(岡倉天心)・評社会主義神髄(幸徳秋水)・評戦争廃止論(内村鑑三)	(太田水穂)・詩短うもれ木(鉄幹)・詩独絃哀歌(有明)・詩From the Eastern Sea(ヨネ・野口)
	一九〇四	37	火の柱(木下尚江)・水彩画家(藤村)・良人の自白(尚江)	評露骨なる描写(花袋)・評日本の目覚め(天心)・戯日蓮上人辻説法(鷗外)・戯新曲浦島(逍遙)	詩君死にたまふこと勿れ(晶子)・短小扇(晶子)・短竹の里歌(子規)・詩短毒草(鉄幹・晶子)
	一九〇五	38	倫敦塔(夏目漱石)・吾輩は猫である(漱石)・青春(風葉)・幻影の盾(漱石)・薤露行(漱石)	随第二軍従征日記(花袋)・評予が見神の実験(綱島梁川)・評表象主義の文学(天渓)	詩お百度詣で(大塚楠緒子)・詩あこがれ(石川啄木)・詩夏姫(三木露風)・詩海潮音(上田敏訳)・短恋衣(山川登美子・増田雅子・晶子)・俳仰臥漫録(子規)
	一九〇六	39	野菊の墓(伊藤左千夫)・運命(独歩)・破戒(藤村)・坊つちゃん(漱石)・草枕(漱石)・其面影(四迷)・二百十日(漱石)	評囚はれたる文芸(抱月)・評共産党宣言(秋水・堺枯川訳)・評神秘的半獣主義(岩野泡鳴)・戯ベニスの商人(逍遙訳)	詩孔雀船(伊良子清白)・詩白羊宮(泣菫)・詩花守日記(横瀬夜雨)・短舞姫(晶子)
	一九〇七	40	婦系図(鏡花)・野分(漱石)・風流懺法(虚子)・南小泉村(真山青果)・虞美人草(漱石)・蒲団(花袋)・平凡(四迷)	評文学論(漱石)・評今の文壇と新自然主義(抱月)・評自然主義(上田敏)・戯第一人者(真山青果)	詩うた日記(鷗外)・短わがおもひ(金子薫園)・短静夜(尾上柴舟)
	一九〇八	41	坑夫(漱石)・何処へ(正宗白鳥)・一兵卒(花袋)・春(藤村)・生(花袋)・あめりか物語(荷風)・三四郎(漱石)・新世帯(秋声)	評現実暴露の悲哀(天渓)・評文芸上の自然主義(抱月)・評自然主義の無特色(後藤宙外)・随欺かざるの記(独歩)・戯生まれざりしならば(青果)・評新自然主義(泡鳴)	詩有明集(有明)・詩御風詩集(相馬御風)・詩口語詩の出発点(服部嘉香)・俳稿本虚子句集
	一九〇九	42	煤煙(森田草平)・耽溺(岩野泡鳴)・半日(鷗外)・ふらんす物語(荷風)・それから(漱石)・ヰタ・セクスアリス(鷗外)・田舎教師(花袋)・冷笑(荷風)・すみだ川(荷風)	随椋鳥通信(鷗外)・評文学評論(漱石)・評自然主義論最後の試練(相馬御風)・随新片町より(藤村)・随きれぎれに心に浮んだ感じと回想(啄木)・戯南蛮寺門前(木下杢太郎)・戯寂しき人々(ハウプトマ	詩邪宗門(北原白秋)・詩廃園(露風)・詩弓町より―食ふべき詩(啄木)・短佐保姫(晶子)・俳鳴雪句集(内藤鳴雪)・俳子規句集(碧梧桐、虚子編)

写実主義

写実主義(リアリズム)とは、現実をありのままに描写しようとする立場のことであり、一九世紀後半のヨーロッパでロマン主義に対立して唱えられた文学思潮である。日本へは明治二〇年代に移植され、**坪内逍遥『小説神髄』**では「模写」論として唱えられた。逍遥は自分の模写論に基づいて**『当世書生気質』**を書いたが、新時代の学生の生態を表面的に描くにとどまった。**二葉亭四迷『小説総論』**はロシア文学のリアリズム理論を学んで、逍遥の提唱をさらに徹底させている。二葉亭は自分の理論を小説**『浮雲』**で実践した。『浮雲』には主人公内海文三の苦悩が描かれており、その文体は近代的個人の内面を描くのに不可欠な**言文一致体**であった。近代の一個の人間像が実にリアルに描かれていたのである。

▲『浮雲』表紙と二葉亭四迷

年	明治			
		(幸田露伴)・色懺悔(尾崎紅葉)	草紙」の本領を論ず(鷗外)	(森鷗外ほか訳)
一八九〇	23	舞姫(森鷗外)・うたかたの記(鷗外)・一口剣(露伴)・巴波川(紅葉)・伽羅枕(紅葉)	評時勢に感あり(透谷)・評舞姫(忍月)・評気取半之丞に与ふる書(鷗外)	評日本韻文論(美妙)・短日本歌学全書(佐佐木弘綱・信綱)
一八九一	24	文づかひ(鷗外)・こがね丸(巌谷小波)・いさなとり(露伴)・かくれんぼ(斎藤緑雨)・五重塔(露伴)	評真善美日本人(三宅雪嶺)・評早稲田文学の没理想(鷗外)	詩新体梅花詩集(中西梅花)・詩蓬萊曲(透谷)
一八九二	25	三人妻(紅葉)・即興詩人(アンデルセン、鷗外訳)	評没理想の語義を弁ず(逍遥)・評厭世詩家と女性(透谷)	評獺祭書屋俳話(正岡子規)
一八九三	26	さゝ舟(露伴)・暁月夜(樋口一葉)	評人生に相渉るとは何の謂ぞ(透谷)・評内部生命論(透谷)	詩湖処子詩集(宮崎湖処子)・評芭蕉雑談(子規)
一八九四	27	滝口入道(高山樗牛)・大つごもり(一葉)	戯桐一葉(逍遥)	短亡国の音(与謝野鉄幹)
一八九五	28	たけくらべ(一葉)・変目伝(広津柳浪)・書記官(川上眉山)・夜行巡査(泉鏡花)・黒蜴蜓(柳浪)・にごりえ(一葉)・十三夜(一葉)	評西鶴の理想(島村抱月)・評聊か思ひを述べて今日の批評家に望む(島崎藤村)・評運命と悲劇(高山樗牛)	
一八九六	29	多情多恨(紅葉)・藪柑子(徳田秋声)・照葉狂言(鏡花)	随福翁百話(諭吉)・評朦朧体とは何ぞや(抱月)	詩詞藻(河井酔茗編)・短東西南北(鉄幹)
一八九七	30	金色夜叉(紅葉)・そめちがへ(鷗外)・源叔父(国木田独歩)・新羽衣物語(露伴)	随ふところ日記(川上眉山)・随トルストイ(徳富蘆花)・評日本主義を賛す(樗牛)・戯ハムレット(シエイクスピア、逍遥訳)	詩抒情詩(国木田独歩・柳田国男・田山花袋・太田玉茗・嵯峨の屋お室・湖処子)・詩若菜集(島崎藤村)・評俳人蕪村(子規)
一八九八	31	武蔵野(独歩)・辰巳巷談(鏡花)・忘れえぬ人々(独歩)・恋慕ながし(小栗風葉)	評審美新説(フォルケルト、鷗外訳)・随福翁自伝(諭吉)	詩一葉舟(藤村)・詩星落秋風五丈原(土井晩翠)・詩夏草(藤村)・評歌よみに与ふる書(子規)
一八九九	32	己が罪(菊池幽芳)・湯島詣(鏡花)	評日本之下層社会(横山源之助)	評雅言と詩歌(藤村)・詩天地有情(晩翠)
一九〇〇	33	乱菊物語(柳浪)・高野聖(鏡花)・思出の記(徳富蘆花)	随鷗外漁史とは誰ぞ(鷗外)・随自然と人生(蘆花)	詩鉄道唱歌(大和田建樹)・評短歌愚考(子規)
一九〇一	34	巌窟王(デュマ、黒岩涙香訳)・牛肉と馬鈴薯(独歩)・註文帳(鏡花)	評墨汁一滴(子規)・評美的生活を論ず(樗牛)・随一年有半(兆民)・戯社会の敵(イプセン、森皚峰訳)	詩無弦弓(酔茗)・詩落梅集(藤村)・詩ゆく春(薄田泣菫)・短みだれ髪(与謝野晶子)
一九〇二	35	黒潮(蘆花)・はやり唄(小杉天外)・	評審美極致論(鷗外)・評日蓮上人	詩草わかば(蒲原有明)・短つゆ艸

近代文学史年表（明治・大正・昭和時代）

（＊発行年は初出を原則とした。〈雑誌に発表のものは、雑誌掲載年次、書き下ろしのものは、単行本刊行年次、長期に渡るものは、初編発表年次〉　＊著作者名は初出の場合は姓名を示すが、二度めからは姓を略した。ただし同姓でまぎらわしいものはすべて姓を付した。　＊ジャンルは〈評論→評〉のように頭の文字で示した。ただし歌論・俳論は短歌・俳句欄に評として示した。）

時代概説

啓蒙思想
開化期から明治二〇年ごろまで、さまざまな方法によって新しい思想や科学に関する啓蒙活動が展開された。文学においては、まず、江戸時代以来の戯作が啓蒙の役目をにない、仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』、『安愚楽鍋』などが書かれた。これらは西洋や開化日本の目新しい風俗を描くにとどまった。翻訳も啓蒙活動に大きな位置を占めている。ルソー『民約論』の翻訳といった本格的なものもあるが、フランス革命に取材した小説が数編訳されたことが政治小説の隆盛を促した。政治小説の隆盛には自由民権運動の高まりという時代背景があり、政治小説の作者たちは民衆に自由民権思想を鼓吹するという目的をもっていたのである。**戯作・翻訳・政治小説**が、文学における啓蒙活動の三本柱であった。

▲『雪中梅』表紙

区分	西暦	年号	小説	評論・随筆・戯曲	詩・短歌・俳句
明治	一八六九	2		随蘭学事始（杉田玄白）	
	一八七〇	3	西洋道中膝栗毛（仮名垣魯文）	評西国立志編（スマイルズ、中村敬宇訳）	
	一八七一	4	安愚楽鍋（魯文）		
	一八七二	5		評自由之理（ミル、敬宇訳）・評学問のすゝめ（福沢諭吉）	
	一八七四	7	近世紀聞（条野採菊）	随柳橋新誌二編（成島柳北）・評百一新論（西周）	短義烈回天百首（染崎延房編）
	一八七五	8	寄笑新聞（梅亭金鵞）	評文明論之概略（諭吉）	
	一八七七	10	鹿児島征伐物語（篠田仙果）	評日本開化小史（田口卯吉）・評民約論（ルソー、服部徳訳）	
	一八七八	11	鳥追阿松海上新話（久保田彦作）	評開明新論（植木枝盛）	
	一八七九	12	高橋阿伝夜叉譚（魯文）	評民権自由論（枝盛）・戯人間万事金世中（河竹黙阿弥）	
	一八八〇	13	春風情話（スコット、坪内逍遙訳）・情海波瀾（戸田欽堂）		詩民権かぞへ歌（枝盛）
	一八八二	15	自由乃凱歌（デュマ、宮崎夢柳訳）・西洋血潮小暴風（デュマ、桜田百衛訳）	評民約訳解（ルソー、中江兆民訳）・人権新説（加藤弘之）	詩新体詩抄（外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎）
	一八八三	16	経国美談前篇（矢野龍渓）・人肉質入裁判（シェイクスピア、井上勤訳）	評維氏美学上冊（ヴェロン、兆民訳）	
	一八八四	17	巷説二葉松（宇田川文海）・鬼啾啾（ステプニャック、夢柳訳）	評日本人種改良論（高橋義雄）・戯自由太刀余波鋭鋒（シェークスピア、逍遙訳）	
	一八八五	18	竪琴草紙（山田美妙）・当世書生気質（逍遙）・佳人之奇遇（東海散士）	評詩歌の改良（逍遙）・評小説神髄（逍遙）	
	一八八六	19	緑簑談（須藤南翠）・雪中梅（末広鉄腸）・新粧之佳人（南翠）	評小説総論（二葉亭四迷）・評将来之日本（徳富蘇峰）	詩新体詞選（山田美妙ほか編）・詩少年姿（美妙）
	一八八七	20	花間鶯（鉄腸）・浮雲第一篇（二葉亭四迷）	随三酔人経綸問答（兆民）・評浮雲の褒貶（石橋忍月）	評国学和歌改良論（小中村義象・萩野由之）
	一八八八	21	東洋之佳人（散士）・あひゞき（ツルゲーネフ、四迷訳）・夏木立（美妙）	評言文一致論概略（山田美妙）・評批評論（大西祝）	詩孝女白菊の歌（落合直文）・評和歌改良論ヲ読ム（服部元彦）
	一八八九	22	細君（逍遙）・蝴蝶（美妙）・露団々	評小説論（森鷗外）・評「しがらみ	詩楚囚之詩（北村透谷）・詩於母影

▲『日本開化小史』表紙

▲『新体詩抄』表紙

狂歌選

○唐衣橘洲
涼しさはあたらし畳青すだれ妻子の留守にひとりみる月　（狂言鶯蛙集）
世にたつは苦しかりけり腰屏風まがりなりには折りかがめども　（徳和歌後万載集）

○四方赤良（蜀山人）
くれ竹のよの人なみに松たてて破れ障子をはるは来にけり　（万載狂歌集）
生酔の礼者を見れば大道を横すぢかひに春は来にけり　（狂歌才蔵集）

○朱楽菅江
染めできぬこんやの月をながむれば秋の最中はたしかあさって　（万載）
借金も今は包むにつつまれず破れかぶれのふんどしの春　（万載）

○元木網
賤の女がしらみの布子夏の来て恥をさらせり天のかぐ山　（狂歌若葉集）

○白鯉館卯雲
夜なくはめづらしからず昼の野へ虫のねごとをききにこそゆけ　（後万載）

○大屋裏住
鶯も蛙もおなじ歌仲間経よむもありただなくもあり　（万代狂歌集）

○浜辺黒人
歌よめどまだ渋ぬけぬ恥かきのへたは我が身に生まれつきつつ　（若葉）

○手柄岡持
ちぎられぬものとは今ぞしるこ餅一本箸のかたおもひにて　（後万載）

○酒上不埒
きのふこそ煤はとりしかいつのまに葉竹そよぎて門松ぞ立つ　（後万載）

○山手白人
にっこりと山も笑うてけさは又きげんよし野の春は来にけり　（後万載）
夕立のにごりにしむはいやいやと蓮はかぶりをふる池の中　（後万載）

○花道つらね
たのしみは春の桜に秋の月夫婦なかよく三度くふめし　（万載）

○節松嫁々
てる月の山ばかりかは里いものますのすみからすみのぼる影　（後万載）

○馬場金埒
雪ならばいくら酒手をねだられん花の吹雪の志賀の山駕　（万代）

○宿屋飯盛
背も腹も蚤にくはれてかゆければ夜の衣をかへしてぞ着る　（才蔵）
歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは　（才蔵）

○鹿都部真顔
あらそはぬ風の柳の糸にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ　（才蔵）

○つむりの光
ほととぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里　（万代）
母の乳父のすねこそ恋しけれひとりでくらふことのならねば　（才蔵）

○紀定丸
すかし屁の消えやすきこそあはれなれみはなきものと思ひながらも　（後万載）

○よみ人しらず
お富士さん雲の衣をぬがしゃんせ雪の肌が見たうござんす　（万載）

柳多留選

（初篇）
雷をまねて腹掛やっとさせ
初物が来ると持仏がちんと鳴り
子ができて川の字なりに寝る夫婦
武蔵坊とかく支度に手間がとれ
役人の子はにぎ〳〵をよく覚え
神代にもだます工面は酒がいり
鶏の何か言いたい足づかい
菅笠で犬にも旅の暇乞い
これ小判たった一晩居てくれろ
隣へもはしごの礼にあやめ葺き
源左衛門鎧を着ると犬が吠え
降参がすむと一度にひだるがり
雨やどり額の文字をよくおぼえ
嬉しい日母はたすきでかしこまり
こそぐって早くうけとる遠目鏡
清盛の医者は裸で脈をとり
道問へば一度にうごく田植笠
ひん抜いた大根で道をおしへられ
関取の乳のあたりに人だかり
銅仏は拝んだあとでたたかれる
母の手を握って巨燵しまはれる
昼買った蛍を隅へもってゆき
片棒をかつぐゆふべの鰒仲間
寝てゐても団扇の動く親心
抱いた子にたたかせてみる惚れた人
本降りになって出てゆく雨宿り
旅もどり子をさし上げて隣まで
母親はもったいないがだましよい
碁敵は憎さも憎しなつかしさ
粉のふいた子を抱いて出る夕涼
引越のあとから娘猫を抱き

（二篇）
団扇では憎らしい程たたかれず
母の名は親父の腕にしなびて居
婿の癖妹が先にみつけだし
迷い子の親はしゃがれて礼を言ひ
泣く時の櫛はこたつを越して落ち
医者衆は辞世をほめて立たれたり
牛方のあきらめてゆく俄か雨
やわ〳〵と引ったててきく葡萄の値
姑の日向ぼっこは内をむき
火の見番人の拾ふを見たばかり

（3）
屁をひっておかしくもない一人者
ねんねこの腰は左右へ少し振り
里帰り夫びいきにもう話し

（4）
女湯へ起きた〳〵と抱いて来る
美しい顔で楊貴妃豚を食ひ
目をふさぐ手を遠くからもってくる
武者一人叱られて居る土用干

（5）
うたた寝の顔へ一冊屋根に葺き
渡し守ひと棹もどす知った人
おさへれば薄はなせばきりぎりす
さがし出すたびのび上る猿ぐつわ
内談と見えて火鉢へ顔をくべ

（6）
じっとして居なと額の蚊を殺し

（7）
花の山幕のふくれるたびに散り

（8）
川留にてにはを直す旅日記

（14）
ぶつ真似は握りこぶしに息をかけ

（16）
風吹かばどころか女房嵐なり

（17）
乳貰ひは冬の月へも指をさし
初午はすみっこばかりさわがしい

（19）
あれと出るなと両方の親が言ひ
仙人さまァと濡れ手で抱きおこし

（22）
孝行のしたい時分に親はなし
月へ投げ草へ捨てたる踊りの手　（拾遺）
仲人は雨までほめて帰るなり　（同）

歌」・851

作者 藤原定家（一一六二—一二四一）。俊成（83）の子。有心体歌風を樹立。『新古今集』『新勅撰集』の撰者。歌論『近代秀歌』『毎月抄』、日記『明月記』、家集『拾遺愚草』など。『小倉百人一首』も彼の撰であるといわれている。

98 風そよぐ　ならの小川の　夕暮れは　みそぎぞ夏の　しるしなりける　　従二位家隆

大意 楢の葉に風のそよぐ、ならの小川の夕ぐれは（涼しくて秋みたいだが、この小川で人々が六月祓の）みそぎの行事をしているのを見ると、（今日はまだ）夏である証拠なのだなあ。

出典 新勅撰集・夏「寛喜元年女御入内の屛風」・192

作者 藤原家隆（一一五八—一二三七）。俊成（83）の養子、寂蓮（87）の婿。『新古今集』の撰者。家集『壬二集』。

99 人もをし　人もうらめし　あぢきなく　世を思ふゆゑに　物思ふ身は　　後鳥羽院

大意 ある人をいとおしく思い、またある人を恨めしくも思う。（思うにまかせぬ）この世をつまらないと思うために思い悩む私にとっては。

出典 続後撰集・雑中「題しらず」・1199

作者 後鳥羽院（一一八〇—一二三九）。第八十二代の天皇。承久の変に敗れ隠岐で没した。諸芸特に和歌にすぐれ、『新古今集』を撰ばせた。歌論に『後鳥羽院御口伝』。

100 ももしきや　ふるき軒端の　しのぶにも　なほあまりある　昔なりけり　　順徳院

大意 宮中の古い軒端に生えている忍ぶ草を見るにつけても、昔の聖代のことが思いしのんでもしのびきれないほど慕わしく思われることだ。

出典 続後撰集・雑下「題しらず」1202

作者 順徳院（一一九七—一二四二）。後鳥羽天皇の皇子で第八十四代の天皇。承久の変に敗れ佐渡で没した。歌学書に『八雲御抄』がある。

〈百人一首読みふだ〉

▲1の歌参照

▲40の歌参照

▲77の歌参照

▲9の歌参照

▲42の歌参照

▲87の歌参照

▲23の歌参照

▲53の歌参照

▲89の歌参照

作者 西行法師（一一一八—一一九〇）。俗名佐藤義清。出家後生涯を旅に送った。家集『山家集』。

87 村雨の　露もまだひぬ　まきの葉に　霧たちのぼる　秋の夕暮れ　　寂蓮法師

大意 (降りすぎた)むらさめのしずくもまだかわかない真木の葉に、白い霧がたち上ってくる秋の夕暮れよ。

出典 新古今集・秋下「五十首歌奉りし時」・491

作者 寂蓮法師（?—一二〇二）。俗名藤原定長。藤原俊成(83)の甥で一時は養子であった。『新古今集』の撰者。

88 難波江の　芦のかりねの　ひとよゆゑ　みをつくしてや　恋ひわたるべき　　皇嘉門院別当

大意 難波江の芦の刈り根の一節のように、旅の仮り寝の一夜のちぎりゆえに、命をかけて生涯恋いつづけることであろうか。

出典 千載集・恋三「摂政(兼実)、右大臣の時、家の歌合に、『旅宿逢恋』といへる心をよめる」・806

作者 皇嘉門院別当（生没年未詳）。十二世紀の人。皇嘉門院（崇徳皇后、関白忠通の娘聖子）に仕えた女房。

89 玉の緒よ　たえなばたえね　ながらへば　忍ぶることの　弱りもぞする　　式子内親王

大意 私の命よ、絶えるなら絶えてしまえ。このまま生き長らえるなら、(この恋を)心に秘めて耐えしのぶ力も弱って(人目につくようになる)かもしれないから。

出典 新古今集・恋一「百首歌の中に忍恋を」・1034

作者 式子内親王（?—一二〇一）。後白河天皇の皇女。賀茂斎院となり、後出家。生涯病気がちであった。

90 見せばやな　雄島のあまの　袖だにも　濡れにぞぬれし　色はかはらず　　殷富門院大輔

大意 (私の袖を、つれないあなたに)見せたいものだ。雄島の漁夫の袖でさえ、潮水のため濡れに濡れても、すこしも色は変わらない(のに、私の袖は悲しみの涙で血の色にかわっているのだ)。

出典 千載集・恋四「歌合し侍りける時、恋の歌とてよめる」・884

作者 殷富門院大輔（生没年未詳）。十二世紀終わりごろの人。殷富門院(式子内親王の姉亮子)に仕えた女房。

91 きりぎりす　鳴くや霜夜の　さむしろに　衣かたしき　ひとりかも寝む　　後京極摂政前太政大臣

大意 こおろぎが鳴く、寒々とした霜夜に、むしろの上に片袖をしいて私は独りわびしく寝ることかなあ。

出典 新古今集・秋下「百首歌奉りし時」・518

作者 藤原良経（一一六九—一二〇六）。関白忠通(76)の孫。九条兼実の子。『新古今集仮名序』の筆者。家集『秋篠月清集』。

92 わが袖は　潮干に見えぬ　沖の石の　人こそ知らね　乾くまもなし　　二条院讃岐

大意 私の袖は、引き潮の時も見えない沖の石のように、あなたは知らぬだろうが(恋の涙に)乾く間もないことである。

出典 千載集・恋二「石に寄する恋といへる心を」・759

作者 二条院讃岐（生没年未詳）。十三世紀初めごろの人。源頼政の娘。二条院の女房。また後鳥羽院中宮宜秋門院にも仕え、後出家した。

93 世の中は　常にもがもな　渚こぐ　あまの小舟の　綱手かなしも　　鎌倉右大臣

大意 世の中がいつまでも変わらないでほしいものだ。海辺をこぐ漁夫が小舟の綱手をひく情景は心にしみて情趣が深いことよ。

出典 新勅撰集・羇旅「題しらず」・525

作者 源実朝（一一九二—一二一九）。源頼朝の子。征夷大将軍、右大臣。甥の公暁に暗殺された。家集『金槐集』。

94 み吉野の　山の秋風　さ夜ふけて　ふるさと寒く　衣うつなり　　参議雅経

大意 吉野の山から秋風が吹き、夜がふけて、旧都の里は衣をうつ音がさむざむと聞こえてくることだよ。

出典 新古今集・秋下「衣をうつの心を」・483

作者 藤原雅経（一一七〇—一二二一）。藤原頼経の子。『新古今集』の撰者。和歌・蹴鞠の飛鳥井家をたてた。

95 おほけなく　うき世の民に　おほふかな　我がたつ杣に　墨染の袖　　前大僧正慈円

大意 身の程にすぎたことだが、現世の衆生のうえに、比叡山に住むことになった私の仏法の袖をおおって(仏の加護をいのる)ことであるよ。

出典 千載集・雑中「題しらず」・1134

作者 慈円（一一五五—一二二五）。関白忠通の子。藤原良経(91)の叔父。天台座主。史論書『愚管抄』の筆者。

96 花さそふ　嵐の庭の　雪ならで　ふりゆくものは　わが身なりけり　　入道前太政大臣

大意 桜の花を誘って吹く山風の庭の花ふぶき(が降る)のではなく、年をとって古りゆくものは私自身であるよ。

出典 新勅撰集・雑一「落花をよみ侍りける」・1054

作者 藤原公経（一一七一—一二四四）。藤原定家(97)の妻の弟。鎌倉方と結び、承久の変以後権勢を握った。

97 来ぬ人を　松帆の浦の　夕なぎに　焼くや藻塩の　身もこがれつつ　　権中納言定家

大意 (待っても)訪れてこない恋人を待っているつらさは、松帆の浦の夕なぎ時に、焼く藻塩が火にこがれるような思いだ。

出典 新勅撰集・恋三「建保六年内裏の歌合の恋の

れど、またその年もれにければ遣はしける」・1023

作者 藤原基俊(一〇六〇—一一四二)。藤原道長の曽孫。革新的な源俊頼と対立する保守的歌風の代表者。

76 わたの原　こぎいでて見れば　久方の　雲ゐにまがふ　沖つ白波　法性寺入道前関白太政大臣

大意 海原に舟をこぎだしてみると、遠くの空にうかぶ雲と見まがう沖の白波がみえるよ。

出典 詞花集・雑下「新院、位におはしまし時、『海上遠望』といふ事をよませ給ひけるによめる」・380

作者 藤原忠道(一〇九七—一一六四)。藤原兼実・慈円らの父。関白・摂政を歴任し、後出家した。(75)の歌の「契りおきし人」にあたる。書道法性寺流の祖。

77 瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　われても末に　あはむとぞ思ふ　崇徳院

大意 瀬の流れが早いので岩にせきとめられる急流が、二分されても再び合流するように、あなたとの仲も今は隔てられていても将来はきっと一緒になろうと思う。

出典 詞花集・恋上「題しらず」・228

作者 崇徳院(一一一九—一一六四)。第七十五代の天皇。保元の乱に敗れ讃岐に流され、白峯で没した。『詞花集』はその勅命により撰ばれた。

78 淡路島　かよふ千鳥の　鳴く声に　幾夜寝ざめぬ　須磨の関守　源　兼昌

大意 淡路島から渡ってくる千鳥の鳴く声に、幾夜目ざめたことだろうか、この須磨の関の番人は。

出典 金葉集・冬「関路千鳥といへる事をよめる」・288

作者 源兼昌(生没年未詳)。十二世紀前半の人。皇后宮少進。後、出家したらしいが伝未詳。

79 秋風に　たなびく雲の　絶え間より　もれいづる月の　影のさやけさ　左京大夫顕輔

大意 秋風にたなびく雲のきれめからもれ出た月光の清らかなことよ。

出典 新古今集・秋上「崇徳院に百首の歌奉りけるに」・413

作者 藤原顕輔(一〇九〇—一一五五)。歌道六条家の祖の顕季の三男。子に清輔(84)、孫に有家がいる。『詞花集』の撰者。

80 長からむ　心も知らず　黒髪の　乱れてけさは　ものをこそ思へ　待賢門院堀河

大意 末長く(愛すると誓ったあなたの)心もあてにできないので、今朝は乱れた黒髪のように、私の心もあれこれと思い乱れていることだ。

出典 千載集・恋三「百首歌奉りける時、恋の心をよめる」・801

作者 待賢門院堀河(生没年未詳)。十二世紀前半の人。待賢門院璋子に仕え、院の出家と共に尼となった。

81 ほととぎす　なきつるかたを　ながむれば　ただ有明の　月ぞのこれる　後徳大寺左大臣

大意 時鳥の鳴いた方角の空をながめると、(その姿は見えなくて)ただ有明の月が空にのこっているばかりだ。

出典 千載集・夏「暁に郭公を聞くといへる心をよみ侍りける」・161

作者 藤原実定(一一三九—一一九一)。藤原俊成(83)の甥。権勢欲の強い人と伝えられる。

82 思ひわび　さても命は　あるものを　憂きにたへぬは　涙なりけり　道因法師

大意 思い悩んで、それでも命はあるものだが、(恋の)つらさに耐えられずにあふれ出るものは涙であるよ。

出典 千載集・恋三「題しらず」・817

作者 道因法師(?—一一八二ごろ)。俗名藤原敦頼。崇徳院に仕えた。歌道執心の逸話が多い。

83 世の中よ　道こそなけれ　思ひ入る　山の奥にも　鹿ぞ鳴くなる　皇太后宮大夫俊成

大意 世のつらさから逃げる道もないことだ。俗世を避けようと思いこんできたこの深山にも鹿が(悲しげに)鳴いていることだなあ。

出典 千載集・雑中「述懐百首の歌よみ侍りける時、鹿の歌とてよめる」・1148

作者 藤原俊成(一一一四—一二〇四)。中世和歌の重鎮。幽玄の体を提唱。『千載集』の撰者。歌論『古来風体抄』家集『長秋詠藻』などがある。定家(97)はその子。出家して釈阿といった。

84 ながらへば　またこのごろや　しのばれむ　憂しと見し世ぞ　今は恋しき　藤原清輔朝臣

大意 (これから)生き長らえたら、(つらい)このごろのことをまたなつかしく思い出すだろうか。つらいと思っていた昔のことが今は恋しく思われる(のと同様に)。

出典 新古今集・雑下「題知らず」・1843

作者 藤原清輔(一一〇四—一一七七)。藤原顕輔の子。『続詞花集』の撰者。『奥儀抄』『袋草紙』の作者。

85 夜もすがら　物思ふころは　明けやらで　閨のひまさへ　つれなかりけり　俊恵法師

大意 (恋に悩んで)一晩中物思うこのごろは夜もなかなか明けやらず、寝室の戸のすきままでも、無情にも白んでくれないことだ。

出典 千載集・恋二「恋の歌とてよめる」・765

作者 俊恵法師(一一一三—?)。源経信(71)の孫。俊頼(74)の子。東大寺の僧。鴨長明はその弟子という。

86 なげけとて　月やは物を　思はする　かこち顔なる　わが涙かな　西行法師

大意 思い嘆けといって月が私に物を思わせるのか。(そうでもないのだが)月のせいでもあるかのように流れる(私の恋の)涙であるよ。

出典 千載集・恋五「月前恋といへる心をよめる」・926

きたりけるを見てよめる」・556

作者 行尊（一〇五五―一一三六）。参議源基平の子。延暦寺の座主を経て大僧正、天台座主となり、皇室の尊信をうけた。

67 春の夜の　夢ばかりなる　手枕に　かひなく立たむ　名こそ惜しけれ　周防内侍

大意（はかない）春の夜の夢のような（うわついた）腕枕のために、甲斐もなく浮き名が立つのは残念なことです。

出典 千載集・雑上「二月ばかり、月の明き夜、二条院にて人々あまた居明して物語などし侍りけるに、内侍周防よりふして『枕をがな』と忍びやかにいふを聞きて、大納言忠家『これを枕に』とて、腕を御簾の下よりさし入れて侍りければよみ侍りける」・961

作者 周防内侍（生没年未詳）。十一世紀後半の人。平棟仲の娘。本名仲子。後冷泉天皇以下四朝に宮仕えした。

68 心にも　あらでうき世に　ながらへば　恋しかるべき　夜半の月かな　三条院

大意 心ならずもこのつらい世に生きながらえたなら、今夜宮中で見る月が恋しく思い出されることであろう。

出典 後拾遺集・雑一「例ならずおはしまして、位などさらむとおぼしめしけるころ、月の明かりけるを御覧じて」・861

作者 三条院（九七六―一〇一七）。第六十七代天皇。冷泉天皇の子。母は藤原兼家の娘超子。藤原道長の政略のため不幸な生涯を送った。

69 嵐吹く　三室の山の　もみぢ葉は　竜田の川の　錦なりけり　能因法師

大意 山風の吹くみむろ山の紅葉が（吹き散らされて）竜田川の水面は錦を織りなしたように美しいことだ。

出典 後拾遺集・秋下「永承四年内裏歌合によめる」・366

作者 能因法師（九八八―一〇五二？）。橘諸兄の子孫。文章生であったが三十歳ごろ出家。白河の関の歌で有名。

70 寂しさに　宿を立ち出でて　ながむれば　いづこも同じ　秋の夕暮れ　良暹法師

大意 寂しさに（たえかねて）家の外に出てながめると、どこも同じ（さびしい）秋の夕暮れであるよ。

出典 後拾遺集・秋上「題しらず」・333

作者 良暹法師（生没年未詳）。十一世紀前半の人、父は僧、母は藤原実方家の女童であったというが伝未詳。

71 夕されば　門田の稲葉　おとづれて　芦のまろやに　秋風ぞ吹く　大納言経信

大意 夕方になると、門前の田の稲葉に音をたて、芦でふいた小屋に秋風が吹きわたってくることだ。

出典 金葉集・秋「師賢朝臣の梅津の山里に人人まかりて『田家秋風』といへる事をよめる」・183

作者 源経信（一〇一六―一〇九七）。博識多才で藤原公任と併称された。桂大納言とも呼ぶ。源俊頼（74）の父。『難後拾遺』の著がある。

72 音にきく　高師の浜の　あだなみは　かけじや袖の　ぬれもこそすれ　祐子内親王家紀伊

大意 うわさにきく高師の浜のあだ波のような、名高い浮気者のあなたの情はうけまいと思う。結局は波にぬれるように、涙で袖をぬらすことになるだろうから。

出典 金葉集・恋下「堀河院の御時、艶書合によめる」・501

作者 紀伊（生没年未詳）。紀伊守藤原重経の妹。後朱雀院中宮に出仕し中宮紀伊とよばれ、後朱雀院の第一皇女祐子内親王に仕えて一宮紀伊ともよばれた。

73 高砂の　尾の上のさくら　咲きにけり　外山のかすみ　立たずもあらなむ　前中納言匡房

大意 遠い峰のあたりに桜が咲いたなあ。近くの低い山のあたりに（眺めをさえぎる）霞が立たないでほしいよ。

出典 後拾遺集・春上「内のおほいまうち君（師通）の家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに『遙かに山桜を望む』といふ心をよめる」・120

作者 大江匡房（一〇四一―一一一一）。大江匡衡・赤染衛門の曽孫。博識多才の学者として著名。

74 うかりける　人を初瀬の　山おろしよ　はげしかれとは　祈らぬものを　源俊頼朝臣

大意（私に）つらくあたった人を（私にやさしくなってくれるようにと）初瀬観音に祈ったが、その初瀬の山おろしの風がはげしく吹くように、あの人が私に対していよいよつれなくなれとは祈らなかったはずだのに。

出典 千載集・恋二「権中納言俊忠の家に恋十首の歌よみ侍りける時、『祈れども逢はざる恋』といへる心を」・707

作者 源俊頼（一〇五五―一一二九）。源経信（71）の子。『金葉集』の撰者。歌論に『俊頼髄脳』、家集に『散木奇歌集』がある。

75 契りおきし　させもが露を　命にて　あはれ今年の　秋もいぬめり　藤原基俊

大意 させも草におく（恵みの）露のように、あなたが約束してくださったことばを頼りとして（わが子のお引き立てを待っていたが）ああ今年の秋も空しく過ぎるようだ。

出典 千載集・雑上「僧都光覚、維摩会の講師の請を申しけるを度々もれにければ、法性寺入道前太政大臣（忠通）に恨み申しけるを『しめぢが原』とはべりけ

わすれやはする　　大弐三位(だいにのさんみ)

大意 有馬山から猪名の笹原に風が吹くと、そよそよと笹がそよぐが、さあそのことだ、私は決してあなたを忘れはしない。（あなたの心がわりこそ心配なのだ）。

出典 後拾遺集・恋二「かれがれなる男の、おぼつかなくなどいひたりけるによめる」・709

作者 大弐三位（九九九―？）。藤原賢子(かた)。紫式部の娘。正三位大宰大弐高階成章の妻となって大弐三位、また藤三位とも呼ばれた。

59 やすらはで　ねなましものを　さ夜ふけて　かたぶくまでの　月を見しかな　　赤染衛門

大意 ためらわずに寝てしまったらよかったのに、（あなたが訪れてくるかと待っていて）夜がふけて山の端に傾くまでの月をながめあかしたことだ。

出典 後拾遺集・恋二「中の関白（道隆）、少将に侍りける時、はらからなる人に物いひわたり侍りけり。たのめて来ざりけるつとめて、女にかはりてよめる」・680

作者 赤染衛門（生没年未詳）。赤染時用の子となっているが実は平兼盛の娘。藤原道長の妻倫子に仕え、上東門院にも出仕した。『栄花物語』の筆者といわれる。

60 大江山　いくのの道の　遠ければ　まだふみも見ず　天の橋立(あまのはしだて)　　小式部内侍

大意 （母のいる丹後の国へは）大江山や生野を通ってゆかねばならず、遠いので、まだその辺や天の橋立は踏んでもみないし、母からの文（手紙）も見ていない。（私の歌を）母の代作だなどと考えないでほしい。

出典 金葉集・雑上「和泉式部、保昌に具して丹後の国に侍りけるころ、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼つぼねの方にまうで来て、『歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人は遣はしけむや、使はまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらむ』などたはぶれて立ちけるを、引きとどめてよめる」・586

作者 小式部内侍（一〇〇〇ごろ―一〇二五）。和泉守橘道貞の娘。母は和泉式部。母とともに上東門院に出仕。母に先だって夭折した。

61 いにしへの　奈良の都の　八重ざくら　けふ九重に　にほひぬるかな　　伊勢大輔(いせのたいふ)

大意 昔の奈良の都からきた八重桜が、今日は平安の都の宮中に美しく咲きにおっていることだ。

出典 詞花集・春「一条院の御時奈良の八重桜を人の奉りけるを、その折御前に侍りければ、その花を題にて歌よめと仰せごとありければ」・27

作者 伊勢大輔（生没年未詳）。十一世紀前半ごろの人。大中臣能宣の孫。上東門院に仕えた。

62 夜をこめて　鳥のそらねは　はかるとも　よに逢坂の　関はゆるさじ　　清少納言

大意 夜のあけぬうちに、鶏のなきまねで（函谷関(かんこくかん)の故事のように）だまそうとしても、私とあなたとが逢うという名の逢坂の関は決してそんないつわりを許しはすまい。

出典 後拾遺集・雑二「大納言行成、物語などし侍りけるに、内の御物忌に籠(こも)ればとて急ぎ帰りて、つとめて『鳥の声にもよほされて』といひおこせて侍りければ、『夜深かりける鳥の声は函谷関の事にや』といひつかはしけるを、立ち返り『これは逢坂の関に侍り』とあればよみ侍りける」・940

作者 清少納言（生没年未詳）。父は清原元輔。中宮定子に仕えた。『枕草子』の筆者。

63 今はただ　思ひ絶えなむ　とばかりを　人づてならで　いふよしもがな　　左京大夫道雅

大意 今となっては「きっぱり諦めよう」とだけを、じかにお目にかかって話せる方法があればよいのになあ。

出典 後拾遺集・恋三「伊勢の斎宮わたりよりまかり上りて侍りける人に、忍びて通ひける事を、おほやけも聞こしめして、守り女などつけさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければ、よみ侍りける」・750

作者 藤原道雅（九九三―一〇五四）。藤原伊周(これちか)（儀同三司）の子。前斎宮、三条院の皇女当子(まさこ)との悲恋は有名。

64 朝ぼらけ　宇治の川霧　たえだえに　あらはれわたる　瀬々の網代木(あじろぎ)　　権中納言定頼

大意 夜あけがた、宇治川の霧がとぎれとぎれに（晴れてきて）あちこちの瀬の網代木が次々に見えてくるよ。

出典 千載集・冬「宇治にまかりて侍りける時よめる」・419

作者 藤原定頼（九九五―一〇四五）。藤原公任（55）の子。和歌・書にすぐれた。小式部内侍（60）の「大江山」の歌の相手である。

65 恨みわび　ほさぬ袖だに　あるものを　恋に朽ちなむ　名こそをしけれ　　相模(さがみ)

大意 （男のつれなさを）恨みなげいて、涙の乾くまもない袖さえ（朽ちてしまうのは悲しいもので）あるのに、（浮き名を立てられて）私の名もすたってしまいそうだと思うとそれがいかにも口惜しいことだ。

出典 後拾遺集・恋四「永承六年内裏歌合に」・815

作者 相模（九九八？―一〇六一？）。源頼光の養女。相模守大江公資の妻。夫と別れ、脩子内親王の女房として出仕した。

66 もろともに　あはれと思へ　山桜　花よりほかに　しる人もなし　　前大僧正行尊

大意 お互いになつかしく思いあおう、山桜よ。桜花よりほかに（私の心を）わかってくれる人もいないことだ。

出典 金葉集・雑「大峰にて思ひもかけず桜の花の咲

は消えるように、(私の恋は)夜は情熱の火が燃え、昼は魂も消えるほど悩んでいることだ。

出典 詞花集・恋上「題しらず」・224

作者 大中臣能宣(九二一―九九一)。神職の家柄で、祭主に任ぜられた。『後撰集』の撰者。伊勢大輔(61)はその孫娘。

50 君がため　をしからざりし　命さへ　ながくもがなと　思ひけるかな　藤原義孝

大意 あなた(に逢う)ためには惜しくない、と思っていた命までもが、(こうして逢ったあとでは、かえって)長くあってほしいと思うことだよ。

出典 後拾遺集・恋二「女のもとより帰りてつかはしける」・669

作者 藤原義孝(九五四―九七四)。謙徳公伊尹の子。学才・性行とも優秀だったが天然痘のため夭折した。藤原行成はその子。

51 かくとだに　えやはいぶきの　さしもぐさ　さしも知らじな　燃ゆる思ひを　藤原実方朝臣

大意 このように(愛していると)だけでも(あなたに)言うことができようか(できそうもない)。伊吹山のさしも草のように、このように燃えている恋の思ひ(の火)を、あなたは知らないでいることだろうよ。

出典 後拾遺集・恋一「女にはじめてつかはしける」・612

作者 藤原実方(?―九九八)。一条天皇に仕え、左近中将の時、殿上で藤原行成に乱暴して、陸奥守に左遷されその地で没した。歌神として上加茂の末社にまつられた。

52 あけぬれば　暮るるものとは　知りながら　なほ恨めしき　朝ぼらけかな　藤原道信朝臣

大意 夜が明ければ、(やがて)暮れるものだ、(そうすればまた逢える)とわかっていながらも、やはり(朝の別れが名残おしく)うらめしい夜明けがたであるよ。

出典 後拾遺集・恋二「女のもとより、雪ふり侍りける日、かへりてつかはしける」・672

作者 藤原道信(九七二―九九四)。太政大臣藤原為光の子。義孝(50)のいとこ。粟田関白道兼の養子となり、天才的歌人と言われたが夭折した。

53 なげきつつ　ひとりぬる夜の　明くるまは　いかに久しき　ものとかは知る　右大将道綱母

大意 (あなたの来ないさびしさを)なげきながら独り寝の夜をすごす私にとって、夜あけまでの時間がどんなに長いものか、あなたにはわかるだろうか(わかりはしないだろう)。(あなたは、私が門をあけるのがおそいといっていらだっているが、そんな待ち遠しさなどは物の数でもないはずだと思う)。

出典 拾遺集・恋四「入道摂政(兼家)まかりたりけるに門をおそくあけければ、立ちわづらひぬと言ひ入れて侍りければ」・912

作者 道綱母(九三六ごろ―九九五)。伊勢守藤原倫寧の娘。本朝三美人の一人と称される。藤原兼家と結婚し道綱を生んだ。『蜻蛉日記』の筆者。

54 忘れじの　ゆく末までは　かたければ　今日を限りの　命ともがな　儀同三司母

大意 (いつまでも)忘れまいという誓いが将来まで(変わらないこと)は期待できないので、(そのことばをきいた、幸せな)今日を限りとして死んでしまいたいものだ。

出典 新古今集・恋三「中関白(道隆)かよひそめ侍りけるころ」・1149

作者 伊周母(?―九九六)。式部卿高階成忠の娘。中関白(藤原道隆)と結婚し、伊周、隆家、定子を生んだ。儀同三司は准大臣のことで伊周をさす。

55 滝の音は　たえて久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞こえけれ　大納言公任

大意 滝の水音はきこえなくなって久しい時がたったが、その名声だけは今もこの世に伝わっていることだ。

出典 拾遺集・雑上「大覚寺に人人あまたまかりたりけるに、古き滝をよみ侍りける」・449

作者 藤原公任(九六六―一〇四一)。太政大臣藤原頼忠の子。三舟の才(詩・歌・管絃)で有名。当代随一の知識人と称された。編著に『新撰髄脳』『金玉集』『和漢朗詠集』などがある。

56 あらざらむ　この世のほかの　思ひ出に　いまひとたびの　あふこともがな　和泉式部

大意 (私はもう)生きていないだろう。(せめて)あの世への思い出に(あなたと、もう一度だけ)逢いたいものである。

出典 後拾遺集・恋三「心地れいならず侍りけるころ人のもとにつかはしける」・763

作者 和泉式部(生没年未詳)。一一世紀初めごろの人。大江雅致の娘。最初の夫が和泉守だったので和泉式部と呼ばれた。小式部(60)はその娘。『和泉式部日記』は冷泉天皇の皇子帥宮敦道親王との恋愛記録。

57 めぐりあひて　みしやそれとも　わかぬまに　雲がくれにし　夜半の月かな　紫式部

大意 (久しぶりに)めぐりあった人が、なつかしいあなただとはっきりわからないうちに、あわただしくあなたは帰っていったことだ。まるで夜半の月がたちまち雲にかくれてしまうように。

出典 新古今集・雑上「早くよりわらは友だちに侍りける人の、年ごろ経て行きあひたる、ほのかにて、七月十日のころ月にきほひて帰り侍りければ」・1497

作者 紫式部(九七〇―一〇一四?)。藤原為時の娘。藤原宣孝と結婚し、大弐三位(58)を生んだ。夫の死後中宮彰子に仕えた。『源氏物語』『紫式部日記』を著す。

58 有馬山　猪名の笹原　風吹けば　いでそよ人を

皇の后藤原穏子に仕えた。右近とは父右近衛少将季縄の官名によるという。

39 浅茅生の　小野の篠原　しのぶれど　あまりて　などか　人の恋しき　　参議　等

大意 浅茅生の小野のしの原ではないが、(恋しさを)しのびこらえようとしても、思い余って(こらえきれぬほどに)どうしてこんなにもあなたのことが恋しくてならないのであろうか。

出典 後撰集・恋一「人につかはしける」・578

作者 源　等(八八〇―九五一)。嵯峨天皇の曽孫。

40 しのぶれど　色にいでにけり　わが恋は　ものや思ふと　人のとふまで　　平　兼盛

大意 私の恋は(人に知られまいと)心の中につつみかくしてきたが、(とうとう)顔色や様子に出てしまったことだ。「何か物思いがあるのか」と人がきくほどに。

出典 拾遺集・恋一「天暦の御時の歌合」・622

作者 平兼盛(?―九九〇)。光孝天皇の子孫で臣籍に下り平姓を称した。和歌・漢学に通じていた。赤染衛門の実父だとの説がある。

41 恋すてふ　わが名はまだき　立ちにけり　人知れずこそ　思ひそめしか　　壬生忠見

大意 (私があの人を)恋しているという浮き名が早くも立ってしまったよ。誰にも知れないようにと(心ひそかに)思いそめたのに。

出典 拾遺集・恋一「天暦の御時の歌合」・621

作者 壬生忠見(生没年未詳)。十世紀中ごろの人。壬生忠岑の子。生涯官途に不遇であったという。

42 契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　浪こさじとは　　清原元輔

大意 (あなたと私とは)約束をしたね、たがいに(涙でぬれた)袖をしぼりながら、末の松山を浪が越すことのないように(二人の愛もいつまでも変わるまい、と)。

出典 後拾遺集・恋四「心変はりて侍りける女に、人に代はりて」・770

作者 清原元輔(九〇八―九九〇)。深養父の孫、清少納言の父。天暦五年初めて置かれた和歌所の寄人となる。『後撰集』撰者の一人。

43 あひみての　のちの心に　くらぶれば　昔はものを　思はざりけり　　権中納言敦忠

大意 あなたと親しくなってのちの(いよいよつのる)恋しさにくらべれば、(契りを結ぶ)以前のあなたへの思いなどはものの数でもなかったことだ。

出典 拾遺集・恋二「題しらず」・710

作者 藤原敦忠(九〇六―九四三)。藤原時平の子。琵琶の名手で達人博雅の三位と併称された。右近(38)との恋愛は有名。彼の死は菅原道真の怨霊によるとされた。

44 あふことの　絶えてしなくば　なかなかに　人をも身をも　恨みざらまし　　中納言朝忠

大意 (あなたに)逢うことが全然ないなら、かえってあなたを恨んだり、自分(の不幸)をなげいたりしないだろうに。

出典 拾遺集・恋一「天暦の御時の歌合に」・678

作者 藤原朝忠(九一〇―九六六)。藤原定方(25)の子。歌道のみならず音楽(笙)の名手であった。

45 あはれとも　いふべき人は　思ほえで　身のいたづらに　なりぬべきかな　　謙徳公

大意 (私の死を)悲しいと言ってくれるような人は思い当たらないで、私は(あなたに思いこがれながら)むなしく死んでしまうことだろうよ。

出典 拾遺集・恋五「物いひ侍りける女の後に、つれなく侍りて、さらにあはず侍りければ」・950

作者 藤原伊尹(九二四―九七二)。貞信公(26)の孫。九七〇年右大臣、太政大臣になった。一条摂政とも呼ぶ。和歌所の最高責任者(別当)として『後撰集』を編ませた。謙徳公は死後のおくり名。

46 由良のとを　わたる舟人　かぢを絶え　ゆくへも知らぬ　恋の道かな　　曽禰好忠

大意 由良の海峡をわたる舟人が、かじを失って行方もわからず漂うように、私の恋の前途も不安なことであるよ。

出典 新古今集・恋一「題しらず」・1071

作者 曽禰好忠(生没年未詳)。十世紀後半の人。丹後の掾であったので曽丹と略称された。協調性に乏しい人柄だったという。家集『曽丹集』。

47 八重むぐら　しげれる宿の　さびしきに　人こそ見えね　秋はきにけり　　恵慶法師

大意 雑草のしげったこの河原院はさびしくて、訪れる人もないが、秋だけは(昔ながらに)やってきたことだ。

出典 拾遺集・秋「河原院にて、荒れたる宿に秋来るといふ心を人々よみ侍りけるに」・140

作者 恵慶法師(生没年未詳)。十世紀中ごろの人。播磨国の国分寺に属して仏典の講義を担当したという。

48 風をいたみ　岩うつ波の　おのれのみ　くだけて物を　思ふころかな　　源　重之

大意 風が激しいので、岩を打つ波がひとりでに砕け散るように、(私も恋人からの反応もなく)自分だけ心を砕いて物思いをするこのごろであるよ。

出典 詞花集・恋上「冷泉院、春宮と申しける時、百首歌奉りけるによめる」・210

作者 源重之(?―一〇〇〇)。地方官を歴任し、藤原実方の左遷に際して奥州に下り、その地で没した。

49 みかきもり　衛士のたく火の　夜はもえ　昼はきえつつ　物をこそ思へ　　大中臣能宣朝臣

大意 皇居の諸門を守る衛士の焚く火が夜は燃え、昼

を兼ねていた。賀茂川堤に家があったので堤中納言とも呼ばれた。

28 山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人めも草も　かれぬと思へば　　源宗于朝臣

大意 山里は冬がいちだんとさびしいものだ。訪れる人もなく、草も枯れてしまうと思うと。

出典 古今集・冬「冬の歌とてよめる」・315

作者 源宗于(?—九三九)。光孝天皇の孫。臣籍に下って源姓となり、右京大夫となった。

29 心あてに　折らばや折らむ　初霜の　おきまどはせる　白菊の花　　凡河内躬恒

大意 あて推量に折ったら折りとることもできるだろうか。初霜が白くおいて(どれが花か霜か)まぎらわしくさせている白菊の花よ。

出典 古今集・秋下「白菊の花をよめる」277

作者 凡河内躬恒(生没年未詳)。九世紀後半から十世紀初めの人。『古今集』撰者の一人で紀貫之と併称された歌人。

30 有明の　つれなく見えし　別れより　あかつきばかり　憂きものはなし　　壬生忠岑

大意 有明の月が(無情に空に残っているように、あなたの態度が)冷淡に見えたあの時の別れ以来、私にとって夜明けほどつらいものはない。

出典 古今集・恋三「題しらず」・625

作者 壬生忠岑(生没年未詳)。九世紀後半から十世紀前半ごろの人。『古今集』撰者の一人。

31 朝ぼらけ　有明の月と　みるまでに　吉野の里に　ふれる白雪　　坂上是則

大意 夜あけがた、有明の月の光がさしているのかと見ちがえるほどに、吉野の山里に降りつもっている白雪よ。

出典 古今集・冬「大和国にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる」・332

作者 坂上是則(生没年未詳)。坂上田村麿(最初の征夷大将軍)五代の孫。子の望城は『後撰集』の撰者。

32 山川に　風のかけたる　しがらみは　流れもあへぬ　紅葉なりけり　　春道列樹

大意 山あいの谷川に、風が(自然と)かけたしがらみは流れることもできずにたまっている紅葉だったよ。

出典 古今集・秋下「志賀の山ごえにてよめる」・303

作者 春道列樹(?—九二〇)。下級の受領らしいがくわしくは分からない。

33 久方の　光のどけき　春の日に　しづ心なく　花の散るらむ　　紀　友則

大意 日の光がのどかにさす春の日に(どうして)おちついた心もなく桜の花は散り急ぐのであろうか。

出典 古今集・春下「さくらの花のちるをよめる」・84

作者 紀友則(?—九〇七ごろ)。紀貫之のいとこにあたる。『古今集』の撰者であるが、その完成を見ずに没した。

34 たれをかも　しる人にせむ　高砂の　松もむかしの　友ならなくに　　藤原興風

大意 (年老いた私は)誰を親しい友としたらよいだろうか。(あの老松の)高砂の松にしても、昔からの友人というわけではないのだから。

出典 古今集・雑上「題しらず」・909

作者 藤原興風(生没年未詳)。九世紀後半から十世紀初めの人。官位は低かった。藤原浜成(最初の歌論書『歌経標式』の著者)の曽孫。

35 人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞむかしの　香ににほひける　　紀　貫之

大意 昔なじみのこの土地では、梅の花は昔にかわらぬよい香をはなって美しく咲いているが、(そこに住む)あなたの心は、さあどうであろうか。(どうやら心がわりをしているのではあるまいか)。

出典 古今集・春上「初瀬に詣づる毎に宿りける人の家に久しく宿らで、程へて後に至れりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむ宿りはあると言ひ出して侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる」・42

作者 紀貫之(八六八ごろ—九四五)。『古今集』の歌人望行の子。『古今集』の撰者。『古今集仮名序』を書いた。晩年土佐守となり紀行文『土佐日記』を残した。

36 夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを　雲のいづこに　月やどるらむ　　清原深養父

大意 (短い)夏の夜は、まだ宵だと思っているうちに明けてしまったが、(月も西の山に沈むひまもあるまいから)雲のどのあたりに月は宿っているのだろうか。

出典 古今集・夏「月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる」・166

作者 清原深養父(生没年未詳)。伝記は明らかでない。その孫に歌人清原元輔、曽孫に清少納言がいる。

37 白露に　風の吹きしく　秋の野は　つらぬきとめぬ　玉ぞ散りける　　文屋朝康

大意 (草葉の)白露に風がしきりに吹く秋の野は、緒で貫き通してない玉(のように露)が散ることだ。

出典 後撰集・秋中「延喜の御時歌めしければ」・308

作者 文屋朝康(生没年未詳)。九世紀後半から十世紀初めの人。文屋康秀の子という説もあるが伝記未詳。

38 忘らるる　身をば思はず　誓ひてし　人の命の　をしくもあるかな　　右近

大意 (あなたに)忘れられる(私の)身はどうなろうとかまわない。(それよりも、私への愛を神に)誓ったあなたの命が(誓いを破った神罰のために失われるのではないかと)惜しまれることだ。

出典 拾遺集・恋四「題しらず」・870

作者 右近(生没年未詳)。十世紀中ごろの人。醍醐天

出典 古今集・恋二「寛平の御時、后の宮の歌合の歌」・559

作者 藤原敏行（？―九〇七、一説九〇一）。和歌だけでなく書道にもすぐれ、空海と並び称された。

19 難波潟　みじかき芦の　ふしの間も　あはでこの世を　過ぐしてよとや　　伊勢

大意 難波潟に生えている芦の、短い節の間のように、ほんのちょっとの間も（あなたと）おあいしないで一生を過ごせとおっしゃるのですか（それはあんまりです）。

出典 新古今集・恋一「題しらず」・1049

作者 伊勢（八七七？―九三九？）。宇多天皇の后温子に仕え、のち宇多天皇の皇子を生み、さらに宇多天皇の皇子敦慶親王に愛されて中務（女流歌人）を生んだ。父が伊勢守であったので「伊勢」と呼ばれた。

20 わびぬれば　今はたおなじ　難波なる　みをつくしても　逢はむとぞ思ふ　　元良親王

大意 （二人の仲が世間に知れて、会うこともできない）つらい思いをしているからには、今はもう同じことだ。難波の浦の「みをつくし」ではないが（いっそのこと）、身を滅ぼしてもあなたに会いたいと思うことだ。

出典 後撰集・恋五「事いできて後に、京極の御息所につかはしける」・961

作者 元良親王（八九〇―九四三）。陽成天皇の第一皇子。色好みとして有名。「京極の御息所」は左大臣藤原時平の娘褒子で宇多天皇の御息所。

21 今来むと　いひしばかりに　長月の　有明の月を　まち出でつるかな　　素性法師

大意 「すぐに来よう」と（あなたが）いってよこしたばかりに、九月の（夜長を待ち明かして、あなたのかわりに、待ちもしない）有明の月が出てしまったことだ。

出典 古今集・恋四「題しらず」・691

作者 素性法師（生没年未詳）。俗名は良岑玄利。僧正遍昭が俗人であった時の子。清和天皇に仕えて左近将監であったが、父遍昭の意見によって出家したという。

22 吹くからに　秋の草木の　しをるれば　むべ山風を　嵐といふらむ　　文屋康秀

大意 吹くとすぐに秋の草木がしおれるので、なるほど山風のことを「荒らし」とよび、また文字で嵐と書くのであろうよ。

出典 古今集・秋下「是貞のみこの家の歌合の歌」・249

作者 文屋康秀（生没年未詳）。九世紀中ごろの人。六歌仙の一人。

23 月みれば　ちぢにものこそ　かなしけれ　わが身ひとつの　秋にはあらねど　　大江千里

大意 月を見るとさまざまにもの悲しい気持ちにさそわれることよ。私ひとりのためにおとずれた秋ではないのだけれど。

出典 古今集・秋上「是貞のみこの家の歌合によめる」・193

作者 大江千里（生没年未詳）。宇多天皇のころの人。漢学・和歌に長じ、清和天皇の師となった。在原行平・業平の甥にあたるといわれる。

24 このたびは　ぬさもとりあへず　手向山　紅葉の錦　神のまにまに　　菅家

大意 このたび（の旅）は（あわただしく出発したものですから）神にたむける幣も用意するひまがありませんでした。そこで、手向山の（この美しい）紅葉の錦を幣としてたむけます。神の御心のままに（どうかお受けください）。

出典 古今集・羇旅「朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にてよめる」・420

作者 菅原道真（八四五―九〇三）。文章博士。宇多天皇の信任をうけ右大臣になったが、左大臣藤原時平の讒言のため大宰権帥として九州に左遷され、その地で没した。死後天神（学問の神）として祭られている。

25 名にしおはば　逢坂山の　さねかづら　人にしられで　くるよしもがな　　三条右大臣

大意 （逢うとか寝るとかいう）名をもっているならば、逢坂山のさねかづらよ、（かづらを繰るように）人に気づかれないで（あなたのもとに）通うてだてがほしいものだなあ。

出典 後撰集・恋三「女のもとにつかはしける」・701

作者 藤原定方（八七三―九三二）。参議を経て、右大臣に昇った。和歌・管絃をよくした。

26 小倉山　峰のもみぢ葉　心あらば　今ひとたびの　みゆき待たなむ　　貞信公

大意 小倉山の峰の紅葉よ、もしお前に情趣を解する心があるならば、もう一度あるはずの行幸があるまで（散らないで）待っていてくれ。

出典 拾遺集・雑秋「亭子院（宇多）大井川に御幸ありて、行幸ありぬべき所なりと仰せ給ふに、ことのよし奏せむと申して」・1218

作者 藤原忠平（八八〇―九四九）。関白基経の四男。兄時平の死後氏長者として摂政・太政大臣・関白となった。性温厚で人望があり、左遷後の道真とも音信をつづけていた。貞信公は死後のおくり名。

27 みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　恋しかるらむ　　中納言兼輔

大意 みかの原をわき出て流れるいづみ川（の名のように私はあの人を）いつ見たというのでこんなにも恋しいのだろうか。（まだあったこともないあの人なのに）。

出典 新古今集・恋一「題しらず」・996

作者 藤原兼輔（八七七―九三三）。中納言と右衛門督

出典 古今集・雑下「題しらず」・983
作者 喜撰法師(伝未詳)。九世紀前半の人。六歌仙の一人。

9 花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに　　小野小町

大意 桜の(美しい)色はあせてしまったなあ。空しく、私が長雨をながめて物思いにふけっている間に。(私が恋の悩みに時をすごしている間に、容色もおとろえてしまったことよ)。
出典 古今集・春下「題しらず」・113
作者 小野小町(生没年未詳)。九世紀中ごろの女官。六歌仙の一人。多くの伝説があるが、正確な伝記未詳。

10 これやこの　行くも帰るも　別れては　知るも知らぬも　逢坂の関　　蟬丸

大意 これがまあ、(東国へ)行く人も(京に)帰る人も知る人も知らぬ人も、別れては逢うという、(逢うという名をもつ)逢坂の関なのだなあ。
出典 後撰集・雑一「逢坂の関に庵室を造りて住み侍りけるに、行きかふ人を見て」・1090
作者 蟬丸(伝未詳)。平安初期の人。宇多天皇の第八皇子敦実親王に仕えた雑色で、盲目の琵琶の名手と伝えられるが不明。

11 わたの原　八十島かけて　こぎ出でぬと　人には告げよ　海人のつり舟　　参議　篁

大意 広い海を、多くの島をめざして(配所の隠岐に)舟出したと、あの人に伝えておくれ、海人のつり舟よ。
出典 古今集・羇旅「隠岐の国に流されける時に船に乗りていでたつとて、京なる人の許に遣はしける」・407
作者 小野篁(八〇二—八五二)。歌人・漢学者。承和五年、副遣唐使として正使と争い、嵯峨天皇の怒りにふれて隠岐に配流、同七年許されて参議となった。

12 天つ風　雲の通ひ路　吹きとぢよ　をとめの姿　しばしとどめむ　　僧正遍昭

大意 空の風よ、雲の中の通路を吹きとざしてくれ。(天女のように美しい)舞姫の姿を、もうしばらく(この地上に)とどめて(その姿をながめ)たいから。
出典 古今集・雑上「五節の舞姫を見てよめる」・872
作者 僧正遍昭(八一六—八九〇)。俗名良岑宗貞。仁明天皇に仕えて蔵人頭になったが、天皇の死に会い、比叡山で出家した。六歌仙の一人。

13 つくばねの　峰より落つる　男女川　恋ぞつもりて　淵となりぬる　　陽成院

大意 筑波山の峰から流れ落ちる男女川の水がつもって淵となるように、私の恋心もつもりつもって、深い恋の淵となったことだ。
出典 後撰集・恋三「釣殿のみこにつかはしける」・777
作者 陽成院(八六八—九四九)。第五十七代の天皇。母は(17)の詞書の二条の后藤原高子。脳病のため乱行が多く在位八年で譲位。「釣殿のみこ」は光孝の皇女綏子。

14 みちのくの　しのぶもぢずり　誰ゆゑに　乱れそめにし　われならなくに　　河原左大臣

大意 (私の心は)陸奥のしのぶもぢずり(の模様のように乱れていますが、それは)誰のせいで(このように)乱れはじめたのでしょうか。(みんな、あなた故に心が乱れるのであって)私(のせい)ではありませんのに。
出典 古今集・恋四「題しらず」・724
作者 源融(八二二—八九五)。嵯峨天皇の皇子。臣籍に下り源姓を称した。風流・豪奢を好み、東六条に河原院を営み、また宇治の別荘(後の平等院)を造った。

15 君がため　春の野に出でて　若菜つむ　わが衣手に　雪はふりつつ　　光孝天皇

大意 あなたのために、春の野に出て若菜をつむ私の袖に(春の)雪が降りつづけることだ。
出典 古今集・春上「仁和のみかど、みこにおはしましける時、人に若菜たまひける御歌」・21
作者 光孝天皇(八三〇—八八七)。第五十八代の天皇。陽成天皇の廃立により即位、在位四年で没。

16 立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとし聞かば　今帰り来む　　中納言行平

大意 (あなたと)別れて、因幡の国に赴任して行っても、あの稲葉山の峰に生えている松のように、(あなたが私を)待っていると聞いたなら、すぐに帰ってまいりましょう。
出典 古今集・離別「題しらず」・365
作者 在原行平(八一八—八九三)。在原業平の異母兄。仁明天皇から宇多天皇まで六代に仕えた。文徳天皇の時須磨に流され、『源氏物語』の「須磨」のモデルになった。

17 千早ぶる　神代もきかず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは　　在原業平朝臣

大意 (人の代はもちろん)神代にも聞いたことがない、竜田川が(流れる紅葉で)真紅の色に水をくくり染めにしているということは。
出典 古今集・秋下「二条の后の東宮のみやす所と申しける時に、御屛風に竜田川に紅葉流れたるかたを書けりけるを題にてよめる」・294
作者 在原業平(八二五—八八〇)。清和・陽成の両朝に仕えた。在五中将と呼ばれる。『伊勢物語』の主人公に擬せられている。六歌仙の一人。

18 住の江の　岸に寄る波　よるさへや　夢の通ひ路　人目よくらむ　　藤原敏行朝臣

大意 住江の岸による波の「よる」ではないが、(昼間は人目をはばかるのはやむをえないにしても)夜までも、どうして夢の中の通い路で人目をさけるのであろうか。

小倉百人一首

名称　「百人一首」とは、百人のすぐれた歌人の歌を一首ずつ選んだ歌集の意。「小倉百人一首」の名は、藤原定家の京都小倉山の山荘のふすまの色紙に歌が書きつけられていたことから生まれたもの。

撰者　撰者については諸説があるが、藤原定家が選び、後の人が補修したとするものが一般的である。

成立　藤原定家の日記『明月記』の嘉禎元年（一二三五）五月廿七日の記述で、宇都宮頼綱（定家の子為家の妻の父）の望みに従い、天智天皇から藤原家隆までの歌人各一首を染筆したという。これに後の人が後鳥羽院・順徳院などの作品を補って現在のものが出事上がったのだろうとされる。

内容　次の表の通りで、すべて勅撰和歌集から選ばれている。

歌集＼分類	春	夏	秋	冬	恋	雑	羇旅	離別	(合計)
古今和歌集	4	1	6	2	4	3	3	1	24
後撰和歌集			2		4	1			7
拾遺和歌集			1		8	2			11
後拾遺和歌集	1		2		9	2			14
金葉和歌集			1	1	1	2			5
詞花和歌集	1				3	1			5
千載和歌集		1		1	8	4			14
新古今和歌集		1	4	2	5	2			14
新勅撰和歌集		1			1	1	1		4
続後撰和歌集						2			2
(合計)	6	4	16	6	43	20	4	1	100

1 秋の田の　かりほの庵の　苫をあらみ　わが衣手は　露にぬれつつ　　天智天皇

大意　秋の田の　かりほの庵の（稲をおさめる）仮小屋の（屋根にふいている）苫の目が粗いので、（張り番をしている）私の袖は露に濡れることだ。

出典　後撰集・秋中「題しらず」・302

作者　天智天皇（六二六―六七一）。第三十八代の天皇。中大兄皇子。六四五年大化の改新を断行、六六七年には都を近江の大津に移した。『万葉集』第一期の歌人。

2 春過ぎて　夏来にけらし　白妙の　衣ほすてふ　天の香具山　　持統天皇

大意　春が過ぎて夏が来たらしい。（夏になると）白い衣をほすという天の香具山（に白い衣が見えるよ）。

出典　新古今集・夏「題しらず」・175

作者　持統天皇（六四五―七〇二）。天武天皇の皇后。天皇の死後女帝として即位（第四十一代）。都を大和の藤原宮に移した。『万葉集』第二期の歌人。

3 あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　ながながし夜を　ひとりかも寝む　　柿本人麻呂

大意　（雌雄が谷をへだてて独り寝するという）山鳥の長く垂れた尾のように長いこの（秋の）夜を、私もひとりわびしく寝ることかなあ。

出典　拾遺集・恋三「題しらず」・778

作者　柿本人麻呂（生没年未詳）。持統・文武両朝に仕えた。宮廷歌人。『万葉集』第二期の代表的歌人。

4 田子の浦に　うちいでてみれば　白妙の　富士の高嶺に　雪は降りつつ　　山部赤人

大意　田子の浦に出てながめると、真っ白な富士の高嶺に雪が降りつもっていることだ。

出典　新古今集・冬「題知らず」・675

作者　山部赤人（生没年未詳）。奈良朝初期の下級官吏。『万葉集』第三期の代表歌人。

5 奥山に　もみぢふみわけ　鳴く鹿の　声きく時ぞ　秋はかなしき　　猿丸大夫

大意　奥山に（散った）紅葉を踏みわけ、（妻を求めて）鳴く鹿の声を聞くとき、秋のかなしさを感ずることだ。

出典　古今集・秋上「是貞のみこの家の歌合の歌」・215

作者　猿丸大夫（伝未詳）。伝承上の人物ともされる。

6 かささぎの　渡せる橋に　おく霜の　白きを見れば　夜ぞ更けにける　　中納言家持

大意　かささぎが（翼をつらねて）かけるという橋（にもなぞらえられる宮中の階）においた霜が白いのをみると夜もふけたことだなあ。

出典　新古今集・冬「題しらず」・620

作者　大伴家持（七一八？―七八五）。父は大伴旅人。大伴家の首長として浮沈の多い生涯を送った。『万葉集』の編者と考えられている。『万葉集』第四期の代表歌人。

7 あまの原　ふりさけみれば　春日なる　三笠の山に　いでし月かも　　安倍仲麻呂

大意　大空をはるかにながめやると（あの月は、かつて故郷の）春日の三笠山に出ていた月なのだなあ。

出典　古今集・羇旅「唐土にて月をみてよみける」・406

作者　安倍仲麻呂（七〇一―七七〇）。七一六年、遣唐留学生として出発。玄宗皇帝に仕えた。七五一年、帰国のため船出したが難破して果たさず、再び唐朝（粛宗）に仕えて唐で没した。詩人李白・王維らとの交遊があった。

8 わが庵は　都のたつみ　しかぞすむ　世をうぢ山と　人はいふなり　　喜撰法師

大意　私の庵は都の東南にあり、このように（閑静に）住んでいるが、世を住みづらく思ってこの宇治山にのがれているのだと世間の人は言っているようである。

鬢白し、何とて据ゑたる関の関屋の関守なれば　年の行くをば留めざるらん　（四句神歌・雑・328）

思ひは陸奥に、恋は駿河に通ふなり、見初めざりせばなかなかに、空に忘れて已みなまし　（四句神歌・雑・335）

我を頼めて来ぬ男　角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ、霜雪霰ふる水田の鳥となれ、さて足冷たかれ、池の萍となりねかし、と揺りかう揺り揺られ歩け　（四句神歌・雑・339）

君が愛せし綾藺笠　落ちにけり〳〵　賀茂河に河中に、それを求むとたづぬとせし程に　明けにけり〳〵　さらさら清けの秋の夜は　（四句神歌・雑・343）

遊びをせんとや生まれけむ　戯れせんとや生まれけん　遊ぶ子どもの声きけば　我が身さへこそ動がるれ　（四句神歌・雑・359）

女の盛りなるは　十四五六歳二十三四とか　三十四五にし成りぬれば　紅葉の下葉に異ならず　（四句神歌・雑・394）

舞へ舞へ蝸牛、舞はぬものならば　馬の子や牛の子に蹴ゑさせてん　踏み破らせてん　まことに愛しく舞うたらば　華の園まで遊ばせん　（四句神歌・雑・408）

吹く風に　消息をだに托けばやと思へども　よしなき野辺に落ちもこそすれ　（二句神歌・雑・455）

山伏の腰につけたる法螺貝の　丁と落ちていと割れ　砕けて物を思ふころかな　（二句神歌・雑・468）

▲梁塵秘抄（綾小路家本）

【閑吟集】

梅花は雨に、柳絮は風に、世はただ嘘にもまるる。　（10）

吉野川の花筏、浮かれてこがれ候よの、こがれ候よの。　（14）

葛城山にさく花候よ、あれをよと、よそに思うた念ばかり。　（15）

花の都の経緯に、知らぬ道をも問へば迷はず、恋路など通ひなれても紛ふらん。　（18）

散らであれかしさくら花、散れかし口と花ごころ。　（25）

さて何とせうぞ、一目見しおもかげが、身をはなれぬ。　（36）

柳のかげにお待ちあれ、人問はばなう、楊枝木切ると仰有れ。　（42）

なにせうぞ、くすんで、一期は夢よ、ただ狂へ。　（55）

ただ人は情あれ、槿の花の上なる露の世に。　（96）

よしやつらかれ、なかなかに、人の情は、身のあたよなう。　（115）

人買ひ舟は沖を漕ぐ、とても売らるる身を、ただ静かに漕げよ、船頭どの。　（131）

名残惜しさに出でて見れば、山中に、笠のとがりばかりが、ほのかに見え候。　（164）

うしろ影を見んとすれば、霧がなう、朝霧が。　（167）

▲閑吟集（図書寮本）

憂きも一時、うれしきも、思ひ醒ませばゆめ候よ。　（193）

あまり言葉のかけたさに、あれ見さいなう、空行く雲の速さよ。　（235）

人の心は知られずや、真実心は知られずや。　（255）

【松の葉】

鳥もかよはぬ山なれど、住めば都よわが里よ。　（巻一・本手鳥組）

比良や小松の朝がよひ、褄がぬれ候、磯うつ浪に。　（巻一・葉手）

吹けよ松風、あがれよ簾、今の小歌の主見たや。　（巻一・葉手）

露になりたや袂の露に、消えぬ憂き身のかこちぐさ、何を種とか我が思ひ。　（巻三・端唄・有馬）

さても優しの螢の虫や、しのぶ綯手の闇路を照らす、人の心も情あれ。　（巻三・端唄）

親は他国に子は島原に、桜花かやちりぢりに。　（巻三・二上り・薩摩節）

雨の降る夜はひとしほゆかし、いつにおろかはなけれども。　（巻五・投節・男）

声にあらはれ鳴く虫よりも、いはで螢の身をこがす。　（巻五・投節・女）

【小林一茶】

秋風やむしりたがりし赤い花　（おらが春・秋）

有明や浅間の霧が膳を這ふ　（七番日記・秋）

衰へや榾折りかねる膝頭　（希杖本一茶句集・冬）

心から信濃の雪に降られけり　（文化句帖・冬）

これがまあつひの栖か雪五尺　（七番日記・冬）

▶小林一茶終焉の旧宅（信濃・柏原）

涼風の曲りくねつて来りけり　（七番日記・夏）

雀の子そこのけそこのけお馬が通る　（おらが春・春）

露の世は露の世ながらさりながら　（おらが春・秋）

ともかくもあなたまかせの年の暮　（おらが春・冬）

亡き母や海見るたびに見るたびに　（七番日記・無季）

鳴く猫に赤ん目をして手毬かな　（八番日記・新年）

蚤のあと数へながらに添乳かな　（おらが春・夏）

這へ笑へ二つになるぞけさからは　（おらが春・新年）

春雨や食はれ残りの鴨が鳴く　（七番日記・春）

古郷やよるもさはるも茨の花　（七番日記・夏）

古郷は蠅まで人を刺しにけり　（おらが春・夏）

めでたさもちう位なりおらが春　（おらが春・新年）

やせ蛙負けるな一茶これにあり　（七番日記・春）

やれ打つな蠅が手をすり足をする　（八番日記・夏）

悠然として山を見る蛙かな　（七番日記・春）

雪とけて村いつぱいの子どもかな　（七番日記・春）

我と来て遊べや親のない雀　（おらが春・春）

【化政期】

後の月葡萄に核の曇りかな
夏目成美　（成美家集・秋）

たうたうと滝の落ちこむ茂りかな
井上士朗　（枇杷園句集・夏）

しら雲は遠いものなり菊の上
岩間乙二　（をののへ草稿・秋）

茶の花をかかへて虻の生きにけり
栗田樗堂　（萍窓集・冬）

古典朗詠・歌謡選

【和漢朗詠集】

東岸西岸の柳、遅速同じからず
南枝北枝の梅、開落已に異なり
慶滋保胤　（巻上・早春・11）

気霽れては、風新柳の髪を梳る
氷消えては、浪旧苔の鬚を洗ふ
都良香　（巻上・早春・13）

燭を背けては共に憐れむ深夜の月
花を踏んでは同じく惜しむ少年の春
白居易　（巻上・春夜・27）

池冷やかにして水に三伏の夏なし
松高うして風に一声の秋あり
源英明　（巻上・納涼・164）

林間に酒を煖めて紅葉を焼く
石上に詩を題して緑苔を掃ふ
白居易　（巻上・秋興・221）

三五夜中新月の色　二千里外故人の心
白居易　（巻上・十五夜・242）

秋の水漲り来つて船の去ること速かなり
夜の雲収まり尽きて月の行くこと遅し
郢展　（巻上・月・253）

雪は鵞毛に似て飛んで散乱す
人は鶴氅を被て立つて徘徊す
白居易　（巻上・雪・376）

春の風は暗に庭前の樹を剪る
夜の雨は偸かに石上の苔を穿つ
傅温　（巻下・風・397）

都府楼には纔かに瓦の色を看る
観音寺には只鐘の声を聴く
菅原道真　（巻下・閑居・620）

前途程遠し、思ひを雁山の暮の雲に馳す
後会期遥かなり、纓を鴻臚の暁の涙に霑す
後江相公　（巻下・餞別・632）

長生殿の裏には春秋富めり
不老門の前には日月遅し
慶滋保胤　（巻下・祝・775）

年々歳々花相似たり　歳々年々人同じからず
宋之問　（巻下・無常・791）

蝸牛の角の上に何事をか争ふ
石火の光の中に此の身を寄せたり
白居易　（巻下・無常・792）

朝に紅顔あつて世路に誇れども
暮に白骨となつて郊原に朽ちぬ
義孝少将　（巻下・無常・794）

【梁塵秘抄】

仏は常に在せども　現ならぬぞあはれなる　人の音せぬ暁に　仄かに夢に見えたまふ　（法文歌・仏歌・26）

筑紫の門司の関　関の関守老いにけり

山路来て何やらゆかしすみれ草　（野ざらし紀行・春）
行く春や鳥啼き魚の目は涙　（奥の細道・春）
よく見れば薺花さく垣根かな　（続虚栗・春）

【蕉門】

目には青葉山ほととぎす初鰹　山口素堂　（江戸新道・夏）
鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春　榎本其角　（宝晋斎引付・春）
名月や畳の上に松の影　榎本其角　（雑談集・秋）
梅一輪一輪ほどのあたたかさ　服部嵐雪　（遠のく・冬）
蒲団着て寝たる姿や東山　服部嵐雪　（枕屏風・冬）
がつくりと抜け初むる歯や秋の風　杉山杉風　（猿みの・秋）
卯の花をかざしに関の晴れ着かな　河合曾良　（奥の細道・夏）
長松が親の名で来る御慶かな　志太野坡　（炭俵・春）
こがらしに二日の月の吹き散るか　山本荷兮　（曠野・冬）
うらやまし思ひ切る時猫の恋　越智越人　（猿みの・春）
秋風や白木の弓に弦張らん　向井去来　（曠野・秋）
応々といへどたたくや雪の門　向井去来　（句兄弟・冬）
木がらしの地にも落さぬ時雨かな　向井去来　（風俗文選・冬）
何事ぞ花見る人の長刀　向井去来　（曠野・春）
下京や雪積む上の夜の雨　宮城凡兆　（猿みの・冬）
禅寺の松の落葉や神無月　宮城凡兆　（猿みの・冬）
幾人かしぐれ駈けぬく瀬田の橋　内藤丈草　（猿みの・冬）
うづくまる薬の下の寒さかな　内藤丈草　（枯尾花・冬）
十団子も小粒になりぬ秋の風　森川許六　（韻塞・秋）
かげろふやほろほろ落つる岸の砂　服部土芳　（猿みの・春）
焼けにけりされども花は散りすまし　立花北枝　（卯辰集・春）
叱られて次の間へ出る寒さかな　各務支考　（枯尾花・冬）

【与謝蕪村】

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら　（蕪村句集・夏）
易水にねぶか流るる寒さかな　（落日庵・冬）
遅き日のつもりて遠きむかしかな　（狭蓑集・春）
御手討の夫婦なりしを更衣　（落日庵・夏）
斧入れて香におどろくや冬木立　（秋しぐれ・冬）
公達に狐化けたり宵の春　（蕪村句集・春）
高麗船のよらで過ぎゆく霞かな　（俳諧新選・春）
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　（夜半叟・春）
さみだれや大河を前に家二軒　（安永六年句稿・夏）
四五人に月落ちかかるをどりかな　（落日庵・秋）
蕭条として石に日の入る枯野かな　（蕪村句集・冬）
しら梅に明くる夜ばかりとなりにけり　（から檜葉・春）
涼しさや鐘をはなるる鐘の声　（蕪村句集・夏）
寂として客の絶間の牡丹かな　（蕪村句集・夏）
絶頂の城たのもしき若葉かな　（蕪村句集・夏）
月天心貧しき町を通りけり　（蕪村句集・秋）
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　（明和五年句稿・秋）
菜の花や月は東に日は西に　（落日庵・春）
葱買うて枯木の中を帰りけり　（蕪村句集・冬）
白梅や墨芳しき鴻臚館　（蕪村句集・春）
春雨や小磯の小貝ぬるるほど　（蕪村句集・春）
春雨や人住みて煙壁を洩る　（五車反古・春）
春の海ひねもすのたりのたりかな　（其雪影・春）
不二ひとつうづみ残して若葉かな　（明烏・夏）
牡丹切つて気のおとろひし夕かな　（安永五年句稿・夏）
牡丹散つてうちかさなりぬ二三片　（俳諧新選・夏）
柳ちり清水かれ石ところどころ　（反古衾・秋）
夕立や草葉をつかむ群雀　（続明烏・夏）
ゆく春やおもたき琵琶の抱きごころ　（五車反古・春）

【中興期】

五月雨やある夜ひそかに松の月　大島蓼太　（蓼太句集・夏）
世の中は三日見ぬまに桜かな　大島蓼太　（蓼太句集・春）
夏旅や母のなき子がうしろかげ　加舎白雄　（白雄句集・夏）
人恋し灯ともしごろをさくらちる　加舎白雄　（白雄句集・春）
朝顔に釣瓶とられてもらひ水　千代女　（千代尼句集・秋）
何着てもうつくしうなる月見かな　千代女　（千代尼句集・秋）
秋なれや木の間木の間の空の色　横井也有　（蘿葉集・秋）
日くれたり三井寺おりる春のひと　加藤暁台　（暁台句集・春）
やぶ入りの寝るやひとりの親のそば　炭太祇　（太祇句選・春）
うき人に蚊の口見せる腕かな　黒柳召波　（春泥句集・夏）
やはらかに人分けゆくや勝角力　高井几董　（井華集・秋）
枯芦の日に日に折れて流れけり　高桑闌更　（半化坊句集・冬）

古典名句選

俳句中の赤字は季語を示し、（ ）の中は出典・季節を示す。

【蕉風以前】

元朝の見るものにせん富士の山　山崎宗鑑（俳諧古選・春）
手をついて歌申し上ぐる蛙かな　山崎宗鑑（阿羅野・春）
落花枝にかへると見れば胡蝶かな　荒木田守武（菊の塵・春）
しをるるは何かあんずの花の色　松永貞徳（犬子集・春）
ねぶらせて養ひたてよ花のあめ　松永貞徳（犬子集・春）
霞さへまだらにたつや寅の年　松永貞徳（犬子集・春）
巡礼の棒ばかりゆく夏野かな　松江重頼（藤枝集・夏）
まざまざといますがごとし魂祭　北村季吟（独琴・秋）
ながむとて花にもいたしくびの骨　西山宗因（懐子・春）
さればここに談林の木あり梅の花　西山宗因（談林十百韻・春）
これはこれはとばかり花の吉野山　安原貞室（一本草・春）
長持に春ぞ暮れゆく更衣　井原西鶴（落花集・夏）
浮世の月見すごしにけり末二年　井原西鶴（西鶴置土産・秋）
木枯の果はありけり海の音　池西言水（新撰都曲・冬）
にょつぽりと秋の空なる富士の山　上島鬼貫（大悟物狂・秋）
行水の捨てどころなし蟲の声　上島鬼貫（仏兄七久留万・夏）
白魚やさながら動く水のいろ　小西来山（続今宮草・春）
元日やされば野川の水の音　小西来山（生駒堂・春）

【松尾芭蕉】

あかあかと日はつれなくも秋の風（奥の細道・秋）
秋風や藪も畠も不破の関（野ざらし紀行・秋）
秋深き隣は何をする人ぞ（笈日記・秋）
曙や白魚白きこと一寸（野ざらし紀行・冬）
海士の屋は小海老にまじるいとどかな（猿みの・秋）
荒海や佐渡に横たふ天の河（奥の細道・秋）
あらたふと青葉若葉の日の光（奥の細道・夏）
石山の石より白し秋の風（奥の細道・秋）
猪もともに吹かるる野分かな（江鮭子・秋）
憂き我をさびしがらせよ閑古鳥（猿みの・夏）
海暮れて鴨の声ほのかに白し（野ざらし紀行・冬）
梅が香にのつと日の出る山路かな（炭俵・春）
梅若菜丸子の宿のとろろ汁（猿みの・春）
衰ひや歯に喰ひあてし海苔の砂（己が光・春）
おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな（曠野・夏）
枯枝に烏のとまりけり秋の暮（曠野・秋）
菊の香や奈良には古き仏たち（笈日記・秋）
象潟や雨に西施がねぶの花（奥の細道・夏）
草の戸も住み替る代ぞ雛の家（奥の細道・春）
草臥れて宿かるころや藤の花（笈の小文・春）
この秋は何で年寄る雲に鳥（笈日記・秋）
この道や行く人なしに秋の暮（其便・秋）
五月雨を集めて早し最上川（奥の細道・夏）
五月雨の降り残してや光堂（奥の細道・夏）
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店（薦獅子・冬）
閑かさや岩にしみ入る蟬の声（奥の細道・夏）
蛸壺やはかなき夢を夏の月（猿みの・夏）
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる（笈日記・冬）
旅人と我が名呼ばれん初時雨（続虚栗・冬）
父母のしきりに恋し雉子の声
（曠野・春）
塚も動けわが泣く声は秋の風
（奥の細道・秋）
夏草や兵どもが夢のあと
（猿みの・夏）
何の木の花とはしらず匂ひかな
（笈の小文・春）
奈良七重七堂伽藍八重桜
（泊船集・春）
野ざらしを心に風のしむ身かな
（野ざらし紀行・秋）
蚤しらみ馬の尿する枕もと
（奥の細道・夏）
芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな
（武蔵曲・秋）
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり
（猿みの・冬）
花の雲鐘は上野か浅草か
（続虚栗・春）
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏り
（炭俵・春）
病雁の夜寒に落ちて旅寝かな
（猿みの・秋）
古池や蛙飛びこむ水の音
（春の日・春）
ほろほろと山吹散るか滝の音
（笈の小文・春）
まづたのむ椎の木もあり夏木立
（猿みの・夏）
道のべの木槿は馬に喰はれけり
（野ざらし紀行・秋）
名月や池をめぐりて夜もすがら
（孤松・秋）
物いへば唇さむし秋の風（芭蕉庵小文庫・秋）

山ほととぎす（巻三・夏・201）

思ひあまりそなたの空をながむればかすみをわけて春雨ぞふる（巻一二・恋二・1107）

○西　行

とめこかし梅さかりなるわが宿を疎きも人はをりにこそよれ（巻一・春上・51）

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ（巻三・夏・262）

心なき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕ぐれ（巻四・秋上・362）

きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく（巻五・秋下・472）

津の国の難波の春はゆめなれや蘆のかれ葉に風わたるなり（巻六・冬・625）

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里（巻六・冬・627）

年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山（巻一〇・羇旅・987）

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ（巻一七・雑中・1617）

○寂　蓮

暮れてゆく春のみなとは知らねども霞に落つる宇治の柴舟（巻二・春下・169）

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮（巻四・秋上・361）

○慈　円

大江山傾く月のかげさえて鳥羽田の面に落つるかりがね（巻五・秋下・503）

わが恋は松を時雨のそめかねて真葛が原に風さわぐなり（巻一一・恋一・1030）

○式子内親王

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水（巻一・春上・3）

桐の葉もふみわけがたくなりにけりかならず人を待つとなけれど（巻五・秋下・534）

忘れてはうち嘆かるる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を（巻一一・恋一・1035）

○藤原家隆

鳰のうみや月のひかりのうつろへば浪の花にも秋は見えけり（巻四・秋上・389）

下紅葉かつ散る山の夕しぐれ濡れてやひとり鹿の鳴くらむ（巻五・秋下・437）

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づるありあけの月（巻六・冬・639）

明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月のすゑの白雲（巻一〇・羇旅・939）

○藤原定家

春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるるよこぐもの空（巻一・春上・38）

大空は梅のにほひにかすみつつくもりもはてぬ春の夜の月（巻一・春上・40）

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ（巻四・秋上・363）

駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ（巻六・冬・671）

玉ゆらの露もなみだもとどまらずなき人恋ふる宿の秋風（巻八・哀傷・788）

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし（巻一〇・羇旅・953）

○藤原有家

風わたる浅茅がすゑの露にだにやどりもはてぬ宵の稲妻（巻四・秋上・377）

○藤原良経

人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風（巻一七・雑中・1599）

○藤原雅経

うつりゆく雲にあらしの声すなり散るかまさきのかづらきの山（巻六・冬・561）

○藤原実定

なごの海の霞のまよりながむれば入日を洗ふ沖つ白波（巻一・春上・35）

○俊成卿女

風かよふ寝ざめの袖の花の香にかをるまくらの春の夜の夢（巻二・春下・112）

橘のにほふあたりのうたたねは夢もむかしの袖の香ぞする（巻三・夏・245）

おもかげのかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に（巻一二・恋二・1136）

○後鳥羽上皇

ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山かすみたなびく（巻一・春上・2）

見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ（巻一・春上・36）

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろき逢坂の関（巻一・春上・18）

み吉野の高嶺のさくら散りにけり嵐もしろき春のあけぼの（巻二・春下・133）

○藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしの若葉にこゆるしらなみ（巻一・春上・26）

○源通具

梅の花誰が袖ふれしにほひぞと春やむかしの月に問はばや（巻一・春上・46）

○宮内卿

薄く濃き野辺のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ（巻一・春上・76）

花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟のあと見ゆるまで（巻二・春下・128）

【その他】

○源実朝

大海の磯もとどろに寄する波われて砕けてさけて散るかも（金槐集・巻下）

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ（金槐集・巻下）

ものいはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ（金槐集・巻下）

○飯尾彦六左衛門

汝や知る都は野べの夕雲雀あがるを見ても落つる涙は（応仁記）

○賀茂真淵

信濃なるすがの荒野をとぶわしのつばさもたわに吹く嵐かな（賀茂翁歌集）

秋の夜のほがらほがらと天の原てる月かげにかりなきわたる（賀茂翁歌集）

○本居宣長

敷島の大和心を人問はば朝日にほふ山ざくら花（肖像自賛）

○良　寛

霞たつながき春日にこどもらと手まりつきつつ今日もくらしつ（良寛歌集）

月よみの光をまちて帰りませ山路は栗のいがの多きに（良寛歌集）

○田安宗武

信濃なる大野のみ牧春されば小草萌ゆらし駒勇むなり（天降言）

○楫取魚彦

天の原吹きすさみける秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり（楫取魚彦歌集）

○大隈言道

いつよりか入相の鐘はなりつらむこころづきたるはての一声（草径集）

猫の子の首の鈴が音かすかにもおとのみしたる夏草のうち（草径集）

○橘曙覧

楽しみはまれに魚煮て子らみながうましうましといひて食ふとき（志濃夫廼舎歌集）

楽しみはそぞろ読みゆく書のうちに我とひとしき人を見しとき（志濃夫廼舎歌集）

しなければ　（巻二・春下・88）

○**藤原敏行**

秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる　（巻四・秋上・169）

○**在原行平**

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ　（巻一八・雑下・962）

〈撰者の時代〉

○**素性法師**

みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける　（巻一・春上・56）

もみぢばの流れてとまるみなとには紅ふかき浪や立つらむ　（巻五・秋下・293）

そこひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて　（巻一四・恋四・722）

○**紀友則**

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる　（巻一・春上・38）

音羽山けさ越えくればほととぎす梢はるかに今ぞ鳴くなる　（巻三・夏・142）

秋風にはつ雁がねぞ聞こゆなる誰が玉梓をかけて来つらむ　（巻四・秋上・207）

○**伊　勢**

春霞立つを見すててゆく雁は花なき里にすみやならへる　（巻一・春上・31）

○**在原元方**

年の内に春は来にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ　（巻一・春上・1）

○**清原深養父**

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ　（巻六・冬・330）

○**凡河内躬恒**

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる　（巻一・春上・41）

わが宿の花見がてらに来る人は散りなむ後ぞ恋しかるべき　（巻一・春上・67）

かれ果てむ後をばしらで夏草の深くも人のおもほゆるかな　（巻一四・恋四・686）

○**紀貫之**

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ　（巻一・春上・2）

宿りして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける　（巻二・春下・117）

夏の夜のふすかとすればほととぎすなくひと声にあくるしののめ　（巻三・夏・156）

年ごとにもみぢ葉ながす竜田川みなとや秋のとまりなるらむ　（巻五・秋下・311）

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな　（巻八・離別・404）

○**坂上是則**

み吉野の山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり　（巻六・冬・325）

○**壬生忠岑**

くるるかと見ればあけぬる夏の夜をあかずとや鳴く山ほととぎす　（巻三・夏・157）

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ　（巻四・秋上・194）

風ふけば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か　（巻一二・恋二・601）

○**春道列樹**

昨日といひ今日と暮してあすか川流れてはやき月日なりけり　（巻六・冬・341）

○**しろ女**

命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし　（巻八・離別・387）

【古今集以後】

○**源信明**

あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや　（後撰・巻三・春下）

○**藤原兼輔**

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな　（後撰・巻一五・雑一）

○**藤原公任**

朝まだき嵐の山の寒ければもみぢの錦着ぬ人ぞなき　（拾遺・巻三・秋）

○**沙弥満誓**

世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく舟のあとの白波　（拾遺・巻二〇・哀傷）

○**菅原道真**

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな　（拾遺・巻一六・雑春）

○**平兼盛**

たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の関は越えぬと　（拾遺・巻六・別）

○**（紀内侍）**

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ　（拾遺・巻九・雑下）

○**和泉式部**

もの思へばさはの螢もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る　（後拾遺・巻二〇・雑）

つれづれと空ぞみらるる思ふ人あまくだりこむものならなくに　（和泉式部集）

○**能因法師**

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを　（後拾遺・巻一・春上）

都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関　（後拾遺・巻九・羇旅）

○**曽禰好忠**

鳴けや鳴けよもぎが杣のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞ悲しき　（後拾遺・巻四・秋上）

○**源俊頼**

鶉なく真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮　（金葉・巻三・秋）

○**藤原道長**

この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることのなしと思へば　（袋草紙）

○**源義家**

吹く風をなこその関と思へども道もせに散る山桜かな　（千載・巻二・春下）

○**（平忠度）**

さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな　（千載・巻一・春上）

○**藤原俊成**　（新古今にも）

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　（千載・巻四・秋上）

○**西　行**　（新古今にも）

ねがはくは花の下にて春死なむその如月のもちづきのころ　（山家・春上）

▶桜を見に吉野に来た西行

【新古今集】

○**藤原俊成**

またや見む交野のみ野のさくら狩花の雪散る春のあけぼの　（巻二・春下・114）

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川　（巻二・春下・159）

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ

に知らゆな　（巻四・相聞・688）

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものを　（巻八・相聞・1500）

〈第四期〉

○笠女郎

相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づく如し　（巻四・相聞・609）

○厚見王

蝦鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花　（巻八・雑歌・1435）

○大伴家持

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女　（巻一九・雑歌・4139）

物部の八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花　（巻一九・雑歌・4143）

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも　（巻一九・雑歌・4290）

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも　（巻一九・雑歌・4291）

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば　（巻一九・雑歌・4292）

○狭野茅上娘子

君が行く道の長路を繰り畳ね焼き亡ぼさむ天の火もがも　（巻一五・相聞・3724）

逢はむ日の形見にせよと手弱女の思ひ乱れて縫へる衣ぞ　（巻一五・相聞・3753）

帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて　（巻一五・相聞・3772）

〈東　歌〉

多麻河に曝す手作さらさらに何ぞこの児の許多愛しき　（巻一四・武蔵国・3373）

信濃道は今の墾道刈株に足踏ましなむ履著け我が夫　（巻一四・信濃国・3399）

鳰鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも　（巻一四・下総国・3386）

稲舂けば皹る我が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ　（巻一四・未勘・3459）

〈防人歌〉

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘られず　（巻二〇・4322）

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる　（巻二〇・4346）

韓衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして　（巻二〇・4401）

草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手とつけろこれの針持し　（巻二〇・4420）

防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず　（巻二〇・4425）

〈旋頭歌〉

○柿本人麻呂（歌集）

君がため手力疲れ織りたる衣ぞ春さらばいかなる色に摺りてば好けむ　（巻七・1281）

水門の葦の末葉を誰か手折りしわが背子が振る手を見むとわれぞ手折りし　（巻七・1288）

▲柿本人麻呂画像

【古今集】

〈読み人知らずの時代〉

春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり　（巻一・春上・17）

さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞする　（巻三・夏・139）

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く　（巻四・秋上・172）

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり　（巻四・秋上・184）

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月　（巻四・秋上・191）

竜田川もみぢ乱れて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ　（巻五・秋下・283）

すがる鳴く秋の萩原あさたちて旅ゆく人をいつとか待たむ　（巻八・離別・366）

ほととぎすなくやさつきのあやめぐさあやめもしらぬ恋もするかな　（巻一一・恋一・484）

夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて　（巻一一・恋一・484）

行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり　（巻一一・恋一・522）

紫の一もとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る　（巻一七・雑上・867）

世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる　（巻一八・雑下・933）

〈六歌仙の時代〉

○僧正遍昭

はちす葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく　（巻三・夏・165）

名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな　（巻四・秋上・226）

皆人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ　（巻一六・哀傷・847）

○在原業平

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし　（巻一・春上・53）

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ　（巻九・羇旅・410）

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　（巻九・羇旅・411）

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちもねななむ　（巻一三・恋三・632）

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　（巻一五・恋五・747）

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため　（巻一七・雑上・901）

つひにゆく道とはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを　（巻一六・哀傷・861）

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君をみむとは　（巻一八・雑下・970）

○小野小町

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを　（巻一二・恋二・552）

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき　（巻一二・恋二・553）

いとせめて恋しきときはむば玉の夜の衣をかへしてぞきる　（巻一二・恋二・554）

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける　（巻一五・恋五・797）

わびぬれば身を浮草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ　（巻一八・雑下・938）

○文屋康秀

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき　（巻一・春上・8）

○大伴黒主

春雨のふるは涙か桜花ちるを惜しまぬ人

古典名歌選

【万葉集】

〈第一期〉

○磐姫皇后

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ　（巻二・相聞・85）

○舒明天皇

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも　（巻八・雑歌・1511）

○天智天皇

渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜あきらけくこそ　（巻一・雑歌・15）

○鏡王女

風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ　（巻四・相聞・489）

○有間皇子

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る　（巻二・挽歌・142）

○額田王

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな　（巻一・雑歌・8）

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや　（巻一・雑歌・18）

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る　（巻一・雑歌・20）

君待つと吾が恋ひ居ればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　（巻四・相聞・488）

○大海人皇子（天武天皇）

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも　（巻一・雑歌・21）

〈第二期〉

○天武天皇

よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見　（巻一・雑歌・27）

○持統天皇

春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山　（巻一・雑歌・28）

○大津皇子

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ　（巻三・挽歌・416）

○大伯皇女

わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡れし　（巻二・相聞・105）

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ　（巻二・相聞・106）

○石川郎女

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを　（巻二・相聞・108）

○柿本人麻呂

さざなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ　（巻一・雑歌・30）

さざなみの志賀の大曲淀むとも昔の人にまたも逢はめやも　（巻一・雑歌・31）

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月西渡きぬ　（巻一・雑歌・48）

石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか　（巻二・相聞・132）

小竹の葉はみ山もさやに乱げども吾は妹おもふ別れ来ぬれば　（巻二・相聞・133）

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも　（巻二・挽歌・208）

黄葉の散りゆくなべに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ　（巻二・挽歌・209）

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船近づきぬ　（巻三・雑歌・250）

天離る夷の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ　（巻三・雑歌・255）

もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも　（巻三・雑歌・264）

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ　（巻三・雑歌・266）

あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る　（巻七・雑歌・1088）

○高市黒人

いづくにか船泊すらむ安礼の埼漕ぎ廻み行きし棚なし小舟　（巻一・雑歌・58）

旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖へ漕ぐ見ゆ　（巻三・雑歌・270）

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る　（巻三・雑歌・271）

わが船は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり　（巻三・雑歌・274）

○志貴皇子

葦辺ゆく鴨の羽交に霜ふりて寒き夕は大和し思ほゆ　（巻一・雑歌・64）

石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも　（巻八・雑歌・1418）

○安倍女郎

わが背子は物な念ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなくに　（巻四・相聞・506）

〈第三期〉

○山上憶良

妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　（巻五・雑歌・798）

銀も金も玉も何せむにまされる宝子に及かめやも　（巻五・雑歌・803）

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば　（巻五・雑歌・893）

憶良らは今は罷らむ子哭くらむその彼の母も吾を待つらむぞ　（巻三・雑歌・337）

○大伴旅人

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて辛苦しかりけり　（巻三・挽歌・451）

妹として二人作りし吾が山斎は木高く繁くなりにけるかも　（巻三・挽歌・452）

験なき物を念はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし　（巻三・雑歌・338）

沫雪のほどろほどろにふり重けば平城の京師し念ほゆるかも　（巻八・雑歌・1639）

○山部赤人

若の浦に潮満ちくれば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る　（巻六・雑歌・919）

み吉野の象山の際の木末には幾許も騒く鳥の声かも　（巻六・雑歌・924）

ぬばたまの夜の深けゆけば久木生ふる清き河原に千鳥数鳴く　（巻六・雑歌・925）

春の野に菫採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける　（巻八・雑歌・1424）

○高橋虫麻呂

勝鹿の真間の井を見れば立ちならし水汲ましけむ手児奈し思ほゆ　（巻九・挽歌・1808）

○湯原王

吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして　（巻三・雑歌・375）

○笠金村

塩津山うち越えゆけば吾が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも　（巻三・雑歌・365）

○小野老

青丹よし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり　（巻三・雑歌・328）

○大伴坂上郎女

青山を横切る雲の著ろく吾と咲まして人

情趣をたたえた有心連歌に対し、庶民的で機知に富んだ滑稽な連歌を無心連歌と称した。それが、室町期の世阿弥の能楽論になると、禅などの影響から心を超越した無我の境地をいうように変わってきている。

かやうなれども、この内心ありと、よそに見えては悪かるべし。もし見えば、それは態になるべし。せぬにてはあるべからず。無心の位にて、我心をわれにも隠す安心にて、せぬひまの前後をつなぐべし。（世阿弥『花鏡』）

わび　「幽玄」を継承した閑寂で枯淡な味わいを表す理念。中世以降、世の中の無常観から隠者的な境地が尊ばれるようになり、室町期に入っては禅僧の五山文学などと結びついて、茶道・墨絵などが盛んになった。そうした当時の文化に共通するものがこの「わび」の理念である。

花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや。利久はわびの本意として、この歌を常に吟じ……。（安楽庵策伝『醒睡笑』）

【近　世】

さび　近世文学の中心理念であると同時に芭蕉俳諧の根本理念。「わび」と同様に閑寂な枯淡の境地であり、自然と一体化した世俗を超越した作者（主体）の精神が作品に反映したものといえよう。また芭蕉は「さび」が句の表に表れ、情趣を感じさせる句風を「しをり」、「さび」の境地に入っている繊細な美を「ほそみ」、荘重で品位のある美を「位」といっている。

さびは句の色なり。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば、老人の甲冑をたいし戦場に働き、錦繍をかざり御宴に侍りても、老の姿有るがごとし。賑かなる句にも、静かなる句にもあるもの也。今一句をあぐ。『花守や白きかしらをつき合はせ』去来。先師曰はく、さび色よくあらはれ、悦び候と也。（向井去来『去来抄』）

粋（すい）　元禄期の上方で理想とされた理念。遊里で享楽するのに必要とされた「遊びの哲学」ともいうべきもので、決して官能におぼれず、人情の機微を察知し、適切に物事に対処してゆけることをいう。主として浮世草子や浄瑠璃の世界に描かれている。

まことの粋はここへまいらず、内にて小判をよふで居まする。（井原西鶴『好色一代男』）

意気・通　上方の「粋」が江戸に移り、より多く知的な要素を加えたもの。黄表紙・洒落本・人情本などの理想的理念で、近世文学の爛熟的・退廃的な傾向を反映している。この「通」の境地にまで至らず外面のみまねるものを「半可通」、「通」や「意気」を全く解さないものを「野暮」と呼び、これらによって洒落本などの人物が造型されている。

跡にた山、本多の、意気に見へるやつは、翌助といふやつだ。（田舎老人多田爺『遊子方言』）

通だの通り者だのといはれて身体を潰すよりかも、野暮といはれて金をためた方が利方だの（式亭三馬『浮世床』）

▲式亭三馬と『浮世床』さし絵

〔参考〕

うがち　近世後期の文学に見られる特色のひとつで、隠された特殊事実や人情の機微をことさらに暴露し写実的かつ精細に描いてみせることをいう。

義理・人情　近世の封建社会制度と密接に結びついて生まれた文学理念。「義理」は、江戸時代の人々の生活を外側から規制した社会規範であり、しかも彼らの内側からの良心の声でもあった。これに対して「人情」は、そうした封建道徳などに規制されつつもあふれてくる人間の自然の情である。この二つの相反する理念は現実社会の中で矛盾し合い、人々はその葛藤に苦悶することになる。その相克の様を文学の世界に描き出したのが近松の浄瑠璃であった。

いやいやそれでは世間が立たぬ。どうぞ無事な吉左右を、と涙ながらに二足三足、行きては帰り、何と逢うても大事あるまいかい。なんの人が知りませう逢うてやって下さんせ。アア大坂の義理は欠かれまい。（近松門左衛門『冥途の飛脚』）

虚実皮膜　近松の芸術論。芸術はその表現において虚と実の間を理想とするというもので、事実そのままでは演劇は成り立たず、そこには美化・誇張が必要であるということ。

近松答へていはく……芸といふものは、実と虚との皮膜の間にあるものなり。なるほど、今の世、実事によく写すを好むゆゑ、家老はまことの家老の身振り、口上を写すとはいへども、さらばとて、まことの大名の家老などが、立ち役のごとく顔にべに・おしろいを塗ることありや。また、まことの家老は顔をかざらぬとて、立ち役がむしゃむしゃとひげははえなり、頭ははげなりに舞台へ出て芸をせば、慰みになるべきや。皮膜の間といふがここなり。虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みがあったものなり。（穂積以貫『難波土産』）

勧善懲悪　儒教思想と幕府の政教方針の影響を受けて生まれた理念。善を勧め悪を懲らすこと。江戸後期文学の読本・人情本・歌舞伎脚本などに多くみられ、特に読本の滝沢馬琴作『南総里見八犬伝』はその代表作である。

勧善懲悪は国政の始とかや。（近松門左衛門『嫗歌かるた』）

▲『八犬伝』さし絵

古典文芸理念

【上代】

まこと 上代文学の底流をなす精神である。『続日本紀』宣命（天皇の詔）に見られる「明き浄き直き誠の心」「諂ひ欺く心なく忠に赤き誠」などの一連のことばが示すように、上代人は「明き浄き直き心」＝〈誠〉をこのうえなく重んじた。それは心情を率直に述べようとする当時の芸術態度となって表れてくる。この「まこと」の精神は、のちの数多くの美的理念発生の母体ともなっている。

たとへば、ものあらはにいひ出でても、そのものより自然に出づる情にあらざれば、物我二つに成りて、その情誠に不至（服部土芳『三冊子』）

〔参考〕

ますらをぶり 賀茂真淵やその一門の歌人たちが提唱したもので、『万葉集』に見られるような男性的で力強くおおらかな歌風をいう。

たをやめぶり 女性的で優美・繊細な歌風。賀茂真淵が『万葉集』の「ますらをぶり」に対して『古今集』の歌風を批判してこう称した。

【中古】

あはれ 平安文学における代表的な美意識。優美で繊細な感情とそれを客観視できる知性とが調和した均整のとれた美的理念であり、情趣、悲哀・哀愁、同情・憐憫、愛情・慕情、賛嘆などの感情を表す。

心深しやなどほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。（紫式部『源氏物語』）

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。（清少納言『枕草子』）

もののあはれ 本居宣長が『源氏物語』を「もののあはれ」の文学と評して以来、確立された文学理念。また、これから派生した理念として中世の「幽玄」がある。

さて人は、何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきこころをしりて、感ずるを、もののあはれをしるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うごかず、感ずることなきを、物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也。されば物のあはれのふかく、人の情の感ずること、恋にまさるはなし。忍びがたきすぢは、殊に恋に多くして、神代より、世々の歌にも、其すぢをよめるぞ、殊におほくして、心ふかくすぐれたるも、恋の歌にぞ多かりける。（本居宣長『源氏物語玉の小櫛』）

をかし これも平安文学の代表的な美意識。「あはれ」「もののあはれ」がしみじみとした情緒美を表すのに対して、「をかし」は明るい知性的な美である。内面からわきあがる感動を主情的に表現するのではなく、景物を感覚的にとらえ主知的・客観的に表現する傾向をもっているため、鑑賞・批評のことばとして歌合の判詞などにもよく用いられている。『枕草子』が、この美的理念に基づいて書かれた代表作とされ、『源氏物語』を「もののあはれ」の文学というのに対し、「をかし」の文学と呼ばれる。

夏はよる。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。（清少納言『枕草子』）

長高（たけたかし） 本来、身長・物の高さなどの意であるが、中古以来文芸理念として「あはれ」「をかし」の優美さに対する男性的な雄々しさ、壮大で崇高な美をいうようになった。和歌では、この「たけたかし」すなわち「格調の高さ」が評価のひとつの規準とされ、中世に至って歌体のひとつに数えられた。

一には、式部（和泉式部）が二首の歌を今見れば、「遙かに照せ」といふ歌は、詞も姿もことの外にたけ高く、また景気もあり。（鴨長明『無名抄』）

【中世】

幽玄 中世文学を中心に見られる美的理念。もともと仏教用語で「うかがい知ることのできない神秘的な」「奥深い」などの意味で用いられていたこのことばを、美的理念として最初にとりあげたのは藤原俊成である。彼によると、「幽玄」とは「静寂美」を基調に「たけたかし」「繊細美」「艶」などが複合した奥深い美としてとらえられている。つまり上代の心情を直接的に述べた「まこと」が根底にありながらその率直さはすでになく、言外にただよう余情を美としてとらえたものと考えられる。この理念はのちに藤原定家の「有心」、世阿弥の妖艶美、芭蕉の「さび」などに継承展開されてゆく。

幽玄の体――詮はただ詞に現れぬ余情、姿に見えぬ景気なるべし。心にも理深く詞にも艶極まりぬれば、これらの徳は自ら備はるにこそ。たとへば、秋の夕暮れ空の気色は、色もなく声もなし。いづくにいかなる故あるべしとも覚えねど、すずろに涙こぼるるごとし。（鴨長明『無名抄』）

有心 俊成の「幽玄」を継承した理念で、やはり余情を重んじるが、より技巧的で妖艶な美が主調となっている。藤原定家はこの「有心」をもって和歌の最高理念とした。「有心」とは表現内容（心）と表現様式（詞）の両方が優れて一体化した境地をいう。

さてもこの有心体は余の九体にわたりて侍るべし。其故は幽玄にも心あるべし。長高にもまた侍るべし。残りの体にもまたかくのごとし。げにげにいづれの体にも、実は心なき歌はわろきにて候。（藤原定家『毎月抄』）

無心 有心に相対する理念。文学では初め連歌の世界で用いられ、和歌的な

和漢朗詠集 歌謡集。長和二年(一〇一三)ごろ成立。撰者は藤原公任。朗詠は詩歌・漢文の名句に節をつけてうたうことで、平安貴族の間で流行した。この集では、そうした朗詠にふさわしい漢詩漢文の佳句約五九〇首、『古今集』『拾遺集』の秀句二二〇首がまとめられている。

梁塵秘抄 歌謡集。嘉応元年(一一六九)ごろ成立。撰者は後白河院。二〇巻(現存二巻)。平安後期に民間・貴族間ともに流行した今様と呼ばれる世俗の歌謡を『歌詞集』一〇巻、『口伝集』一〇巻の形に編纂したもの。一二世紀ごろの生活・風俗が色濃く反映されており、和歌に見られないその独特の芸術性は、近代の作家や歌人に影響を与えている。

山家集 歌集。成立未詳。作者は西行。自撰かどうか疑問であり、成立年代も定かではない。当時の歌壇の主流が題詠歌であったのに対し、この集では西行の自由な立場からの即興歌が多く、また西行独自の人生観が表出された歌も多い。歌調は、平明枯淡で清澄な味わいに満ちている。

金槐和歌集 歌集。建暦三年(一二一三)成立。作者は源実朝。一巻。実朝の二二歳までの作を収めたと言われる。歌数六六三首。賀茂真淵、正岡子規、斎藤茂吉らによってその万葉調が激賞されてきたが、当時の歌壇を支配した王朝風の歌も少なくない。

建礼門院右京大夫集 歌集。貞永元年(一二三二)ごろ成立。作者は藤原伊行女。一巻。作者自身の歌三〇三首、他の人の歌五六首の計三五九首が収められている。平資盛との恋と死別が書かれ、歌風も切々として味わい深い。

菟玖波集 連歌撰集。延文元年(一三五六)成立。編者は二条良基。二〇巻・総句数二一九〇句。連歌で初めての准勅撰集。南北朝時代に隆盛を極めた連歌の秀作を各時代にわたって集めた一大撰集。仮名序・真名序を備え、部立も和歌集にならっている。この集により連歌はその文学的地位を確立した。

新撰菟玖波集 連歌撰集。明応四年(一四九五)成立。編者は宗祇・兼載。二〇巻・総句数二〇五二句。准勅撰集。永享前後から明応三年までの約六〇年間の作品を収める。宗砌以下の七賢の句が主流。この集により連歌は和歌を圧倒した。

▲新撰菟玖波集

【俳諧・俳文】

新撰犬筑波集 俳諧撰集。天文八年(一五三九)ごろ成立。山崎宗鑑編。和歌連歌全盛時代に反動として流行した言い捨てとしての俳諧の中からおもしろい作品を集めたもの。内容は奔放自由で卑俗な笑いにあふれている。

新増犬筑波集 俳諧論集。寛永二〇年(一六四三)刊。松永貞徳作。上巻『油糟』、下巻『淀川』より成る。宗鑑の『新撰犬筑波』に対し新しい作法書として書かれたもので、当時の貞門俳諧を知る手がかりともなる。

虚栗 俳諧撰集。天和三年(一六八三)刊。榎本其角編。春・夏・秋・冬の四部から成り、発句と連句を交互に配している。蕉門を中心に、貞門・談林派の作をも加えている。芭蕉の新風確立をめざした過渡期的な書。

去来抄 俳論書。安永四年(一七七五)刊。向井去来作。四巻。芭蕉および蕉門の人人の俳諧・俳論を集成したもの。「先師評」「同門評」「故実」「修行教」の四部から成る。「さび」「しをり」「不易流行」など蕉風俳諧の本質に迫る論を展開している。

三冊子 俳論書。安永五年(一七七六)刊。服部土芳編。三巻三冊。「白冊子」「赤冊子」「忘れ水」の三部から成る。「不易流行」「風雅の誠」を説く芭蕉の主張や、実作に対する批評など師の教えを忠実に書き著した書。

風俗文選 俳文集。宝永三年(一七〇六)刊。森川許六編。一〇巻五冊。蕉門の人々の俳文一一六編を収録したもの。芭蕉ほか、許六・支考・去来・李由・丈草・其角らの文章を収めている。

独言 随筆・俳論。享保三年(一七一八)刊。上島鬼貫作。「まことの外に俳諧なし」という「誠」説を中心に作者独自の俳論と俳諧歴が述べられた随筆集。

蕪村七部集 俳諧撰集。文化五年(一八〇八)刊。菊屋太兵衛ら編。二冊。芭蕉・其角などの七部集流行に乗じて本屋が勝手に編集した書。

夜半楽 俳諧撰集。安永六年(一七七七)刊。与謝蕪村作。一冊。自由詩ともいうべき有名な「春風馬堤曲」を収録。

新花摘 俳諧句文集。寛政九年(一七九七)刊。与謝蕪村作。一冊。其角の『華摘』にならい、亡母追善に夏行として書かれた。其角にまつわる話や狐狸談などが、素朴で簡潔な筆致でつづられている。発句と散文とのあいまった名文である。

鶉衣 俳文集。天明七年(一七八七)─文政六年(一八二三)。横井也有作。四編一二冊。和漢の故事・格言・自然といったものを機知に富んだ軽妙な文章で描いて、俳文のひとつの典型とされている。

おらが春 俳文俳句集。嘉永五年(一八五二)刊。小林一茶作。一冊。五七歳の元旦から歳末までの一年間の出来事や感想を記した日記形式の句文集。作者が五六歳の時生まれた長女さとへの愛情とその死に対する悲哀が中心にあり、他力本願の人生観が色濃く出ている。

▲おらが春

文学の歴史

無名草子 評論書。建久七年(一一九六)―建仁三年(一二〇二)成立か。作者は藤原俊成女か。一巻。老尼が耳にした若い女房たちの話といった筋立てで、物語批評に重点が置かれている。

近代秀歌 歌論書。承元三年(一二〇九)成立。作者は藤原定家。将軍源実朝に贈った書。秀歌例を八三八首(自筆本)あげながら、歌の歴史・心得を説いている。一大歌風をなした定家の和歌に対する見解が明快な筆致で書かれている。

無名抄 歌論書。承元三年(一二〇九)―四年(一二一〇)成立。作者は鴨長明。約八〇章段。歌論と同時に、歌に関しての長明の興味のおもむくまま歌人のエピソードや、歌壇の様子、歌枕・歌人の旧跡への探索を書いている。

毎月抄 歌論書。「和歌庭訓」ともいう。承久元年(一二一九)成立。作者は藤原定家。一巻。和歌十体について、特に有心体を貴重な体として論じ、ほかに和歌に用いる詞の問題、本歌取りなどを論じた書。定家の歌論を知る貴重な資料。

正徹物語 歌論書。永享二年(一四三〇)成立。作者は正徹。二巻。随筆風に書かれた歌論で、「徹書記物語」、「清巌茶話」とも呼ばれる。定家への傾倒が強く表明され、作者の歌に対する見解が明確に示されている。

ささめごと 連歌論書。寛正四年(一四六三)成立。作者は心敬。二巻。作者が紀州に下向中、人の求めに応じて書き著した書。作中、『新古今集』を範とした幽玄美への志向、芭蕉の先駆ともいえる「冷えさび」の風趣が語られている。

吾妻問答 連歌論集。文明二年(一四七〇)成立。作者は宗祇。一巻・二六か条。宗祇が武士たちの句作のために要点を細かく注記した書。実際的で初心者向けに懇切丁寧に書かれている。

【小説】

竹斎 仮名草子。江戸初期成立。作者は富山道冶かとも言われるが未詳。二巻。藪医者の竹斎が諸国をめぐり、名古屋ではでたらめな治療で滑稽を演ずるという話で、随所に狂歌がおりこまれ、機知に富んだ軽妙な文章、風刺のきいた笑いなどで仮名草子中の傑作となっている。

醒睡笑 仮名草子。元和九年(一六二三)ごろ。安楽庵策伝作。八巻三冊。説話類、民間伝承の笑話(小咄)、実際見聞した笑話一〇〇〇余を集め、それを四二項目に分類した笑話の集大成。後代の咄本・落語への影響が著しい。

世間子息気質 浮世草子。正徳五年(一七一五)刊。江島其磧作。気質物の最初。町人の息子たちの性格を類型化、誇張化して描き、意外さや滑稽味をだしている。この作は世間で非常な人気を博し、多くの追随作品が出版された。

雨月物語 読本。安永五年(一七七六)刊。上田秋成作。五巻・九編。中国の怪異小説の翻案や日本の説話類を典拠として書かれ、怪異場面の迫真性、構成の緊密さなど怪異小説の第一とされる作品である。

▲『雨月物語』表紙

金々先生栄華夢 黄表紙。安永四年(一七七五)刊。恋川春町作。二冊一〇丁絵入り小説。田舎の青年が江戸に出る途中茶店でうたた寝をし、三〇年の栄華の夢を見るという筋で、この作により黄表紙という呼称が起こった。

江戸生艶気樺焼 黄表紙。天明五年(一七八五)刊。山東京伝作。三冊一五丁。金持ちではあるが醜い鼻のぶ男艶次郎が、色男の評判をたてようと四苦八苦する話で、当時の江戸人気質をよく描いて黄表紙の代表作とされている。

椿説弓張月 読本。文化四年(一八〇七)~八年(一八一一)刊行。作者は滝沢馬琴。五編二九冊。悲運の英雄源為朝が配流の地、大島から琉球に渡り活躍するという空想小説である。読本最初の本格的長編小説であり、構想の大きさ、筋運びの巧みさで『八犬伝』と並び、史伝物の二大傑作となっている。また、『八犬伝』同様、勧善懲悪・因果応報がその根本思想となっている。

東海道中膝栗毛 滑稽本。享和二年(一八〇二)―文政五年(一八二二)刊。十返舎一九作。二〇編四三冊。正編と続編があり、主人公弥次郎兵衛・喜多八が東海道を大阪に行くまでが正編、そこから金毘羅・宮島などを回り、木曽街道を江戸にもどるのが続編である。この間の二人の滑稽な失敗談で全編笑いに満ちている。滑稽本の代表作。

浮世風呂 滑稽本。文化六年(一八〇九)―一〇年(一八一三)刊。式亭三馬作。四編九冊。銭湯を舞台とし、そこに出入りする様々な男女の生態を通して当時の世相を描き出した作品。三馬の代表作。

南総里見八犬伝 読本。文化一一(一八一四)―天保一三(一八四二)刊。滝沢馬琴作。九集五三巻一〇六冊。仁・義・礼・智・信・忠・孝・悌の八つの徳目を名前に持つ八犬士が活躍する波乱万丈の物語で、その構想の雄大さ、プロットの巧妙さは、本格的な長編小説としての風格を備えている。文章は華麗な七五調の行文であり、儒教的な勧善懲悪思想が作品の根底を貫いている。

偐紫田舎源氏 合巻・文政一二年(一八二九)―天保一三年(一八四二)。柳亭種彦作。『源氏物語』を翻案して室町時代のお家騒動を描いたもので、推理小説のような展開でおもしろさをねらっている。合巻物の代表作。

春色梅児誉美 人情本。天保三年(一八三二)―四年(一八三三)刊。為永春水作。四編一二冊。主人公丹次郎をめぐる三人の女の恋と葛藤を、江戸の風俗を背景に描いた作品。三人の女の義理と意気地をテーマに伝奇的なスタイルでまとめている。人情本の作風を決定づけた画期的な作品。

【詩歌集】

に始まり、四九歳に至るまでの自伝的作品である。数寄な運命をたどった作者の赤裸々な自己告白に特徴がある。

【紀行】

海道記 紀行文。貞応二年(一二二三)ごろ成立。作者未詳。一巻。洛外に出家遁世していた作者が、貞応二年から鎌倉へ旅行した時の紀行文である。自照性の強い文学的な作品。

東関紀行 紀行文。仁治三年(一二四二)ごろ成立。作者未詳。一巻。東山の辺に閑居していた作者が、仁治三年鎌倉に旅行した時の十日間余の紀行文に、鎌倉に滞在した二か月間の見聞を書き添えた作品。文学性の高さでは『海道記』に劣るが、文体の優美さからは古来よく読まれてきた。

十六夜日記 旅日記。弘安三年(一二八〇)ごろ成立。作者は阿仏尼。一巻。夫為家の死後起きた土地相続問題で、実子為相のために訴訟を起こそうと鎌倉に下った時の日記的紀行文。「道の記」「東日記」「長歌」の三部から成り、子を思う親の心情がにじみ出ている。

▲阿仏尼

【説話】

日本霊異記 説話集。弘仁一三年(八二二)—一四年(八二三)ごろ成立。編者は薬師寺の僧景戒。三巻・一一六話。わが国最古の仏教説話集で、後世の説話文学に影響を与えた。主に民間伝承に取材しており、当時の庶民生活を知る貴重な資料ともなっている。

三宝絵詞 説話集。永観二年(九八四)成立。編者は源為憲。仏・法・僧の三宝を尊ぶべき理由を絵入りで平易に説いたもの。漢字平仮名まじり文で書かれている。

江談抄 説話集。長治元年(一一〇四)—嘉承三年(一一〇八)成立。六巻。平安後期の漢詩人大江匡房の談話筆記を編集したもの。公事・漢詩文に関する説話が主である。

打聞集 説話集。長承三年(一一三四)以前成立。編者未詳。一巻。僧が説教の材料にするために聞き書き的に記した説話集。『今昔物語集』などと同時代に位相を異にして書かれたと考えられるが、民間にはあまり流布しなかったらしい。

宝物集 説話集。治承二年(一一七八)—四年(一一八〇)成立か。編者は平康頼か。説話をとおして仏法への帰依をすすめた書で、通夜の夜、人々が人間にとっての第一の宝は何かを話し合うという筋立てがとられている。

古本説話集 説話集。院政期ごろの成立か。編者未詳。二巻・七〇話。上巻は和歌説話、下巻は仏法説話を多く集める。他の説話集との関連が深く、資料的な価値が高い。

宇治拾遺物語 説話集。建暦二年(一二一二)—承久三年(一二二一)ごろ成立。編者未詳。一五巻。一九七の説話を収録。雑纂形態の説話集。『今昔物語集』『古事談』と共通する話が多く、それらの説話集との関連が考えられている。文章は他の説話集に比べよく整っており、物語としてもまとまっている反面、『今昔』のような力強さに欠ける。

古事談 説話集。建暦二年(一二一二)—建保三年(一二一五)ごろか。編者は源顕兼と伝えられる。六巻・四六一編。各巻は、それぞれ王道后宮・臣節・僧行・勇士・神社仏寺・亭宅諸道というテーマでまとめられている。清少納言など昔の人物の秘められたエピソードを多く伝える点が特徴。

発心集 説話集。健保三年(一二一五)ごろ成立。編者は鴨長明。八巻。発心・出家・往生などを中心に語られる仏教説話集。長明最晩年の作と推定され、各説話の後には長明自身の感想が述べられているが、ここでは『方丈記』の激越な調子は矛をおさめ、ある安らぎさえ漂っている。

十訓抄 説話集。建長四年(一二五二)成立。編者は六波羅二臈左衛門入道。三巻・二八二話。少年のための教訓書として書かれたもの。平易な文体で教訓的な事がらが一〇の徳目個条のもとに整然と編纂されているが、中には教訓からはずれた滑稽談も含まれている。

古今著聞集 説話集。建長六年(一二五四)成立。編者は橘成季。二〇巻・三〇編。各編を神祇・釈教・政道忠臣から草木・魚虫・禽獣に至る三〇項目に分類している点、各編ごとに小序を付し、各項の説話が年代順に並べてある点など、他の説話に類例をみない整然とした形式である。内容は全体に懐古的、貴族的性格が強いが、魚虫・禽獣編などでは視野の広がりが感じられ、庶民的、地方的な色彩が濃厚である。

沙石集 説話集。弘安六年(一二八三)成立、後増補。編者は無住法師。一〇巻・一三四編。卑近な説話をもって人々を仏教に帰依させることを目的として書かれた。滑稽談や庶民的な話が多い点に特徴がある。

【文学・芸能評論】

歌経標式 歌論書。宝亀三年(七七二)成立。作者は藤原浜成。一巻。序文・跋文と、本文に歌病(歌の欠点)七と歌体三をのせる。和歌四式の一つ。

古今和歌集序 延喜五年(九〇五)ごろ成立。真名序・仮名序がある。特に仮名序(紀貫之作)は歌論史上大きな意義を持ち、その六歌仙の評などが後世に与えた影響は多大である。

新撰髄脳 歌論書。長久二年(一〇四一)以前成立。作者は藤原公任。歌の本質・作法論、短歌・旋頭歌論を収める。

古来風体抄 歌論書。建久八年(一一九七)成立。作者は藤原俊成。二巻。式子内親王の要請で書かれたもので、作者のすぐれた和歌史観が示されており、歌論書として画期的な意義を持つ。

主要作品解説

【物　語】

大和物語　歌物語。天暦五年（九五一）ごろ一部成立、後増補。作者未詳。一七三段。前半は和歌中心、後半は伝説に取材した散文中心の歌物語となっている。打聞的、雑纂的な特徴を持つ。

平中物語　歌物語。「貞文日記」ともいう。康保二年（九六五）以前成立か。作者未詳。三八段。主人公平中（平貞文）と様々な女性たちがくり広げる恋愛談が、歌物語の形式で語られる。約一五〇首の歌が載せられている。

宇津保物語　物語。一〇世紀後半成立。古来、作者　源　順説が有力。二〇巻。前半は、藤原仲忠を中心とする琴の物語で伝奇的な色彩が濃いが、後半は、貴宮をめぐる求婚物語と政権争いを描いていて写実的様相を帯びてくる。

落窪物語　物語。一〇世紀末成立。作者未詳。四巻。継子いじめを主題に、平安前期の家庭生活を描いている。虐待されていた継子の姫君が左近少将道頼に救い出され、継母方は少将に復讐されるという一貫した物語で、構想もよくまとまっている。

狭衣物語　物語。一一世紀後半成立。作者は、後朱雀天皇の皇女禖子内親王の宣旨説がある。四巻。主人公狭衣の恋に煩悶する半生を描いたもので、『源氏物語』の影響が著しい。

浜松中納言物語　物語。一一世紀後半成立。作者は菅原孝標女か。現存五巻（首巻を欠く）。舞台を唐にまで広げて、主人公浜松中納言の恋愛を描いている。一三の夢によって筋が展開し、転生が語られるなど、非現実的、宗教的色彩が強い。

夜半の寝覚　物語。「夜の寝覚」ともいう。一一世紀後半ごろの成立。作者は菅原孝標女か。現存五巻（中間および末尾に欠失部分がある）。女主人公である寝覚の上の数奇な運命を中心に、男女の愛欲を描いた長編物語で、克明な心理描写に特色がある。

堤中納言物語　短編物語集。成立・編者ともに未詳。一〇の短編と一つの断章から成る。そのうち「逢坂越えぬ権中納言」の一編は、天喜三年（一〇五五）、小式部の作である。ひとつひとつの短編が近代的ともいえるまとまりを持ち、風刺や笑いの利いた独得な物語集である。

とりかへばや物語　物語。院政期成立。作者未詳。男女の兄妹が、姿を変えて育てられ成人したために数々の波乱が起こるという筋立てで、奇抜な構想、官能的退廃的な内容など、平安後期物語の特徴が顕著である。

栄花物語　歴史物語。正編は長元三年（一〇三〇）ごろ、続編は寛治六年（一〇九二）ごろ成立。作者は、正編赤染衛門、続編出羽弁説が有力。正編三〇巻、続編一〇巻。藤原道長の栄花を中心に、貴族社会の歴史を編年体で書き記した物語。概して道長賛美に終始し、『大鏡』のような批判精神に欠けるが、従来の歴史書では触れることのなかった歴史の裏面にも言及しており、歴史物語の先駆としての意義は大きい。

▲栄花物語（梅沢本）

太平記　軍記物語。建徳元年（一三七〇）ごろ成立。作者は小島法師か。四〇巻。後醍醐天皇から後村上天皇の時代に至る約五〇年間の動乱の様を「太平」の観点から描いたもの。近世には太平記読みにより講釈された。

義経記　軍記物語。「判官物語」「牛若物語」「義経物語」ともいう。室町初期成立。作者未詳。源義経に関する数々の物語いわゆる判官説話を集大成したもので、義経の生涯が悲劇的、同情的な立場から描かれている。

曽我物語　英雄伝記物語。鎌倉後期から室町前期成立。作者未詳。一二巻。曽我兄弟の仇討という歴史上の一事件を骨子とした伝記物語で、語り物として広く行われ、唱導的、説教的な性格をそなえている。

【日　記】

讃岐典侍日記　日記。天仁二年（一一〇九）ごろの成立か。作者は藤原顕綱女長子、堀河天皇のもとに仕え、のち典侍となった。二巻。上巻は堀河天皇の病気の様子が、下巻は天皇崩御後再び鳥羽天皇に仕えた約一年間のことが、切々とした親愛の情をもって描かれている。

成尋阿闍梨母集　歌日記。延久五年（一〇七三）成立か。作者は成尋阿闍梨母。二巻。作者が晩年になってわが子成尋阿闍梨（一〇一一～一〇八一）の入宋を中心に七年間の思い出を書きつづった日記。一七四首の歌が挿入されている。

建春門院中納言日記　日記。「たまきはる」「建寿御前日記」ともいう。建保七年（一二一九）までに作者自身の手により第一部が書かれ、死後定家によって遺稿が第二部として集められた。作者は藤原俊成女、建寿御前。一巻。第一部は回想記、第二部は挿話の形をとる。

弁内侍日記　日記。「弁内侍寛元記」「後深草院弁内侍日記」ともいう。建長四年（一二五二）ごろ成立。作者は後深草院弁内侍。寛元四年（一二四六）正月の後深草天皇即位から建長四年（一二五二）までの七年間の宮廷生活を明るく描いている。

中務内侍日記　日記。正応五年（一二九二）ごろ成立。作者は伏見院中務内侍藤原経子。一巻。作者が伏見天皇に仕えていた弘安三年（一二八〇）から正応五年（一二九二）までの一三年間の思い出をつづったもの。

とはずがたり　日記。正和二年（一三一三）までに成立。作者は後深草院二条。五巻。作者が後深草院に愛された一四歳の時

▲西山宗因

▲松永貞徳

◀上島鬼貫

▲炭太祇

▲与謝蕪村

▲小林一茶

文学の歴史

▲荷田春満

▲平田篤胤

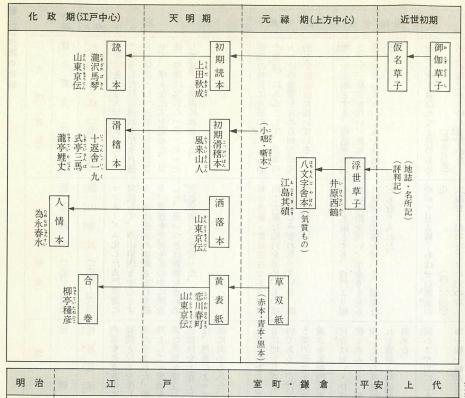
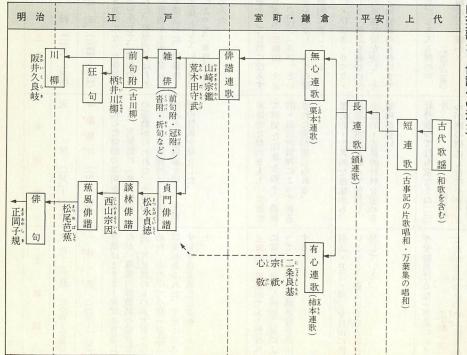
▲賀茂真淵

▲良寛

■主要季語一覧

	新年	春	夏	秋	冬
時候	新年・去年今年・旧年・元日・元朝・三ケ日・松の内・松過・小正月	立春・早春・余寒・啓蟄・春分・彼岸・暖か・花冷え・日永・遅日・長閑・八十八夜・夏近し・行春・晩春	立夏・薄暑・麦の秋・入梅・梅雨・短夜・夏至・梅雨明・暑さ・灼くる・涼し・極暑・土用・秋近し・晩夏	立秋・残暑・新涼・仲秋・八朔・二百十日・爽やか・冷やか・夜長・朝寒・夜寒・身にしむ・行秋	立冬・小春・霜夜・冷たし・冬至・年の暮・行年・大晦日・除夜・寒の入・小寒・凍る・冴ゆ・大寒・厳寒・節分
天文	初明り・初日・初空・初茜・初東雲・初凪・初霞・初東風	春時雨・東風・斑雪・春雨・霞・陽炎・朧月・花曇・蜃気楼・別霜	五月雨・梅雨晴・薫風・夕立・雷・虹・日盛・炎天・西日・朝焼・夕焼・夕凪	天の川・流星・稲妻・月・台風・野分・待宵・名月・十六夜・宵闇・露・鰯雲	初時雨・凩・初霜・時雨・初雪・北風・空風・寒波・霜・霰・雪・地吹雪
地理	初富士・若菜野	雪解・雪崩・残雪・凍解・薄氷・焼野・焼山・流氷・苗代・水温む	出水・植田・青田・皐月富士・滝・泉・清水・滴り・赤潮・土用波	秋出水・不知火・初潮・花野・落とし水・刈田・穭田	初氷・枯野・山眠る・狐火・霜柱・霧氷・水涸る・寒潮・氷・氷柱
生活	雑煮・初釜・屠蘇・年賀・年玉・数の子・門松・注連飾・鏡餅・寝正月・宝舟・初夢・独楽・羽子板・歌留多・獅子舞・書初・福笑い・初荷・寒稽古	山焼く・麦踏・梅見・春炬燵・畑打・苗床・接木・雪割り・草餅・桜餅・花見・観潮・干汐・凧・風車・風船・種蒔・茶摘・畦塗	更衣・袷・新茶・田植・早乙女・蛍狩・草取・鵜飼・夜釣・釣堀・蚊帳・単衣・浴衣・納涼・打水・行水・心太・風鈴・裸・寝冷え	虫売・虫籠・相撲・夜なべ・夜食・月見・松茸飯・新米・案山子・鳴子・乾柿・菊人形・蘆刈・稲刈・豊年・凶作・冬支度・紅葉狩	鷹狩・柴漬・寄鍋・熱燗・乾鮭・屏風・炭火・炭焼・焚火・炬燵・火鉢・風邪・咳・蒲団・火事・古暦・歳暮・御用納・年忘・餅・年越・雪見・竹馬
行事	初詣・破魔弓・松納・七種・七種粥・初寅・十日戎・鏡開・雪祭・藪入・初天神・追儺・豆撒・厄落・厄払・かまくら・事始	初午・針供養・雛・桃の節句・流し雛・鶏合・曲水・二日灸・新能・春日祭・御水取・涅槃・彼岸会・甘茶・花祭・桜祭・花供養・どんたく	端午・幟・吹流・矢車・武者人形・柏餅・粽・菖蒲湯・薬玉・賀茂祭・競馬・御田植・山開・祇園祭	七夕・中元・盆支度・草市・墓参・盂蘭盆・燈籠・重陽・恵比須講・誓文払・火祭	亥の子・御取越・十夜・酉の市・熊手・七五三の祝・帯解・袴着・御火焚・報恩講・顔見世
動物	初鶏・初鴉・初雀・初鶯・初声・初鳩・伊勢海老	白魚・公魚・鶯・田螺・鳥貝・初鮒・若鮎・雲雀・燕・鱒・蛤・桜貝・囀り・仔馬・蝶・蜂・蛙	鯖・初鰹・鰻・鯰・蟹・蛍・蝸牛・雨蛙・河鹿・目高・鮎・鰹・蠅・蟻・蚊・蚤・時鳥・水鶏・蟬・金魚・海月	虫・松虫・鈴虫・馬追・蟋蟀・螽蟖・蟷螂・蜉蝣・蜻蛉・雁・秋刀魚・鰯・鮭・蝗・渡り鳥・頬白・啄木鳥・鹿	鷲・鷹・梟・水鳥・鴨・鴛鴦・熊・狼・狐・狸・兎・都鳥・千鳥・鯨・河豚・鱈・鮪・鰤・海鼠・牡蠣・雪虫
植物	福寿草・橙・若菜・薺・根白草・御行・仏の座・野老・歯朶	梅・沈丁花・若草・柳・土筆・菫・蒲公英・蕨・蓬・椿・桃の花・彼岸桜・夏蜜柑・山吹・桜花・藤・馬酔木・菜の花	青葉・牡丹・菖蒲・苺・紫陽花・薔薇・枇杷・早苗・胡瓜・百合・月見草・百日紅・向日葵・茄子・桃・瓜	朝顔・撫子・南瓜・西瓜・桐一葉・芒・萩・葛・栗・梨・芋・菊・落穂・蜜柑・檸檬・松茸・柿・紅葉・胡桃・銀杏	山茶花・寒木・落葉・大根・葱・枯木立・枯草・枯尾花・枯葉・寒椿・寒梅・藪柑子・枇杷の花・水仙

■近世俳風の比較

	時期	代表俳人	活動	俳風	用語・付合	例句
貞門（古風）	寛永〜寛文（一六二四〜一六七三）	松永貞徳（一五七一〜一六五三）	山崎宗鑑や荒木田守武らによって流布した俳諧連歌を松永貞徳らが俳諧として連歌から独立させて、様々な法式を定めた。以後、俳諧は文芸の一ジャンルとして確定し全国に流布した。	俳諧の特質は用語の俳言（俗語や漢語）にあるとして、言葉の上だけの滑稽を求める知的形式的な言語遊戯に傾いている。	物付を主眼とする。縁語や掛詞を使い、俳言を用い、故事・古歌を利用しておかしみを詠出する。	ねぶらせて養ひたてよ花のあめ（松永貞徳） 巡礼の棒ばかりゆく夏野かな（松江重頼）
談林（新風）	延宝〜貞享（一六七三〜一六八八）	西山宗因（一六〇五〜一六八二）	マンネリズム化した貞門俳諧に対抗して、西山宗因を中心とする一派は法式の煩雑さを打ち破り、俳諧を庶民生活の中に開放した。思いつきは新奇をきわめ矢数俳諧などを行った。	軽妙洒脱・斬新奇抜であり、自由で大胆な趣向を求め、もっぱらおかしみをねらっている。破格表現が多い。	心付を主眼とする。貞門より幅広い用語を用い、字余りも見られ斬新な比喩を用いる。謡曲なども取り入れた。	やがて見よ棒くらはせむ蕎麦の花（西山宗因） 大晦日さだめなき世の定め哉（井原西鶴）
蕉風（正風）	元禄（一六八八〜一七〇四）	松尾芭蕉（一六四四〜一六九四）	内省を欠き放埒になった俳諧に疑問と反省を生じて、革新の気運が生まれた。松尾芭蕉は自然詩としての俳諧を主張し閑寂風雅な蕉風を確立した。滑稽性・遊戯性を主体としていた俳諧は、芭蕉によって、本格的な芸術に高められた。	私意私情を去って自然に没入する境地を目ざし、主観的・求道的である。「わび」「さび」という美的理念を確立し、人生の深遠さを象徴的に表している。	付合は匂い・ひびき・うつり・位を重んじる。俗語を軽妙に使用しながら風雅の情を表し、それを雅語と同価値のものにまで高めた。	閑かさや岩にしみ入る蟬の声（松尾芭蕉） 梅一輪一輪ほどの暖かさ（服部嵐雪）
天明調	天明（一七八一〜一七八九）	与謝蕪村（一七一六〜一七八三）	俗化した俳諧の革新を目的として、天明期に「蕉風復帰」の運動が行われた。その中心となった与謝蕪村は、南宋の画論から離俗論を唱え、天明調の俳風を確立した。	客観的な傾向をもち、絵画的で鮮明な印象を残す。浪漫的・叙情的精神によって創造された美が感じられる。	歴史的・古典的な趣味から、漢語や雅語を好んで使用し、小説的・古典的材料を求める傾向が強い。	牡丹散つて打ち重なりぬ二三片（与謝蕪村） わが宿の壁にしむ夜やきりぎりす（大島蓼太）
化政調	文化〜文政（一八〇四〜一八三〇）	小林一茶（一七六三〜一八二七）	俳諧はますます世間に普及したが、職業的俳諧師の輩出を見、月並調のものが大勢を占めた。その中で小林一茶は人間味があふれた、生活に根ざす句を作る異色な存在であった。	主観的・現実的であり野性味に富む。率直な感情表現によって、庶民の生活感情を詠出する。	俗語・方言・俚言を自由に使いこなし、擬人法を盛んに使用している。	やせ蛙負けるな一茶是にあり（小林一茶） これがまあつひの栖か雪五尺（小林一茶）

■近世文学のまとめ(近世小説の流れ)

近世初期	元禄期(上方中心)	天明期	化政期(江戸中心)

- 御伽草子 → 仮名草子 → 初期読本(上田秋成) → 読本(瀧沢馬琴・山東京伝)
- (地誌・名所記)(評判記) → 浮世草子(井原西鶴) → 八文字舎本(気質もの)(江島其磧)
- (小咄・噺本) → 初期滑稽本(風来山人) → 滑稽本(十返舎一九・式亭三馬・瀧亭鯉丈)
- 洒落本(山東京伝) → 人情本(為永春水)
- 草双紙(赤本・青本・黒本) → 黄表紙(恋川春町・山東京伝) → 合巻(柳亭種彦)

■(連歌から俳諧への流れ)

上代	平安	室町・鎌倉	江戸	明治

- 古代歌謡(和歌を含む) → 短連歌(古事記の片歌唱和・万葉集の唱和) → 長連歌(鎖連歌) → 無心連歌(栗本連歌)・有心連歌(柿本連歌)
- 有心連歌(柿本連歌):二条良基・宗祇・心敬 ⇢ 貞門俳諧
- 無心連歌(栗本連歌) → 俳諧連歌(山崎宗鑑・荒木田守武)
- 俳諧連歌 → 雑俳(前句附・冠附・沓附・折句など) → 前句附(古川柳)(柄井川柳) → 狂句・川柳(阪井久良岐)
- 俳諧連歌 → 貞門俳諧(松永貞徳) → 談林俳諧(西山宗因) → 蕉風俳諧(松尾芭蕉) → 俳句(正岡子規)

その他の人と作品

【国学関係】

○下河辺長流(一六二六—一六八六)
注釈書『万葉集管見』(寛文初)
○北村季吟(一六二四—一七〇五)
注釈書『源氏物語湖月抄』
『枕草子春曙抄』(延宝二)
○契沖(一六四〇—一七〇一)
注釈書『万葉代匠記』(元禄三)
語学研究書『和字正濫抄』(元禄六)
○荷田春満(一六六九—一七三六)
『創学校啓』(享保一三)
○賀茂真淵(一六九七—一七六九)
『万葉集考』(宝暦一〇)
『歌意考』(明和七)
○本居宣長(一七三〇—一八〇一)
歌論書『石上私淑言』(宝暦一三)
注釈書『古事記伝』(寛政二—文政五)
『源氏物語玉の小櫛』(寛政八)
随筆『玉勝間』(寛政六—文化九)
国学書『うひ山ぶみ』(寛政一一)
歌文集『鈴屋集』(寛政一〇)

*その他の歌文集

『挙白集』(木下長嘯子・慶安二)
『天降言』(田安宗武・文化四)
『うけらが花』(加藤千蔭・享和二)
『琴後集』(村田春海・文化七)
『泊洦舎集』(清水浜臣・文政一一)
『六帖詠草』(小沢蘆庵・文化元)
『桂園一枝』(香川景樹・文政一一)
『草徑集』(大隅言道・文久三)
『志濃夫廼舎歌集』(橘曙覧)

【漢学関係】

○林羅山(一五八三—一六五七)
『羅山文集』(慶長九)
○貝原益軒(一六三〇—一七一四)
教訓書『大和俗訓』(宝永五)
『楽訓』(宝永七)
○新井白石(一六五七—一七二五)
史書『藩翰譜』(元禄一四)
自伝『折たく柴の記』(正徳六)
聞書『西洋紀聞』(正徳五)
○室鳩巣(一六五八—一七三四)
随筆『駿台雑話』(寛延三)
○佐藤一斎(一七七二—一八五九)
『言志録』(文政六)
○頼山陽(一七八〇—一八三二)
史書『日本外史』(文化元)
○中江藤樹(一六〇八—一六四八)
教訓書『翁問答』
○荻生徂徠(一六六六—一七二八)
政治論『政談』(享保中)

【随筆・研究・教訓書など】

○石田梅岩(一六八五—一七四四)
心学書『都鄙問答』(元文四)
○湯浅常山(一七〇八—一七八一)
名将言行録『常山紀談』(元文四)
○伊勢貞丈(一七一五—一七八四)
有職故事解説書『貞丈雑記』(宝暦一三—天明四)
○松平定信(一七五八—一八二九)
随筆『花月草紙』(寛政八)
○杉田玄白(一七三三—一八一七)
医学書『蘭学事始』(文化一二)
○柳沢淇園(一七〇四—一七五八)
教訓随筆『雲萍雑志』(天保一四)
○富士谷成章(一七三八—一七七九)
国語学書『挿頭抄』(明和七)
『脚結抄』(安永七)
○塙保己一(一七四六—一八二一)
『群書類従』(文政二完成)
○石川雅望(一七五三—一八三〇)
『雅言集覧』(文政九)
○会田吾山(?—一七八七)
方言研究書『物類称呼』(安永七)
○鈴木牧之(一七七〇—一八四二)
地方風俗書『北越雪譜』(天保六)

【読本】

○近路行者〈都賀庭鐘〉(一七一八—?)
初期読本『英草紙』(寛延二)
○上田秋成(一七三四—一八〇九)
初期読本『雨月物語』(明和五)
随筆『胆大小心録』(文化五)
『癇癖談』(寛政三)
歌文集『藤簍冊子』(享和二)
○山東京伝(一七六一—一八一六)
『桜姫全伝曙草紙』(文化二)
○滝沢(曲亭)馬琴(一七六七—一八四八)
『椿説弓張月』(文化三—七)
『南総里見八犬伝』(文化一一—天保一二)

【草双紙】

○恋川春町(一七四四—一七八九)
黄表紙『金々先生栄華夢』(安永四)
『鸚鵡返文武二道』(天明九)
○朋誠堂喜三二(一七三五—一八一三)
黄表紙『文武二道万石通』(天明八)
○芝全交(一七五〇—一七九三)
黄表紙『大悲千禄本』(天明五)
○山東京伝(前出)
黄表紙『江戸生艶気樺焼』(天明五)
○柳亭種彦(一七八三—一八四二)
合巻『偐紫田舎源氏』(文化一二—天保一三)
考証随筆『用捨箱』(天保一一)

【洒落本】

○山東京伝(前出)
『令子洞房』(天明五)
『通言総籬』(天明七)

【人情本】

○為永春水(一七八九—一八四三)
『春色梅児誉美』(天保三)
『春色辰巳園』(天保四—六)

【滑稽本】

○風来山人〈平賀源内〉(一七二九—一七七九)
初期滑稽本『風流志道軒伝』(宝暦一三)
浄瑠璃『神霊矢口渡』(筆名・福内鬼外、明和七)
洒落本『田舎芝居』(筆名・森羅万象、天明七)
○式亭三馬(一七七六—一八二二)
『浮世風呂』(文化六)
『浮世床』(文化九)
○十返舎一九(一七六五—一八三一)
『東海道中膝栗毛』(享和二—文政五)
○滝亭鯉丈(?—一八四一)
『花暦八笑人』(文政三—天保五)

【川柳・狂歌】

○柄井川柳(一七一八—一七九〇)
『誹風柳多留』(川柳の前句付選句を呉陵軒可有が編集・初篇明和二)
○四方赤良〈太田南畝・蜀山人〉(一七四九—一八二三)
『万載狂歌集』(朱楽菅江と共編、天明三)
洒落本『深川新話』(筆名・山手馬鹿人、安永八)

年	年号	事項
一七〇三	元禄一六	この年から作者名を公表。五一歳。『曽根崎心中』上演。近松最初の世話物。△道頓堀に豊竹座創設。
一七〇五	宝永二	五三歳。近松、竹本座の座付作者となる。△竹田出雲、竹本座の座主となる。
一七〇九	宝永六	△坂田藤十郎没。以後近松、歌舞伎から遠ざかる。
一七一一	正徳元	五九歳。『冥途の飛脚』上演。
一七一四	正徳四	△近松、紀海音に対抗して力作を続発。
一七一五	正徳五	六三歳。『国性爺合戦』大当たりをとる。
一七二〇	享保五	六八歳。『心中天網島』
一七二一	享保六	六九歳。『女殺油地獄』
一七二四	享保九	七二歳。『関八州繫馬』が最後の作。一一月二二日没。

やがて、浄瑠璃は歌舞伎に圧迫されるようになり、近松半二(一七二五—一七八三)らが歌舞伎手法をとりいれて新しい形式を工夫したが、その後は衰退の一途をたどった。半二には『本朝二十四孝』『妹背山婦女庭訓』『伊賀越道中双六』などがある。

【歌舞伎】 大阪の並木正三(一七三〇—一七七三)は、浄瑠璃の手法を歌舞伎に移入して、歌舞伎全盛の機運を作った。『三十石艠始』などの作品がある。

正三の門下の並木五瓶(一七四七—一八〇八)は江戸に下り、上方・江戸の演劇を融合させた。その後の歌舞伎の発達は五瓶の作風や手法を基盤としたものといえる。『五大力恋緘』などの作品のほか、演劇論『戯財録』がある。

化政期の代表的な作者に、**鶴屋南北**(一七五五—一八二九)があり、生世話物(写実劇)、怪談劇にすぐれていた。『東海道四谷怪談』など。

幕末には**河竹黙阿弥**(一八一六—一八九三)が出て、世話狂言とくに盗賊を主人公とした白浪物の名作を書き、過去の歌舞伎の集大成者とみなされた。代表作に『蔦紅葉宇都谷峠』(文弥殺し)『花街模様薊色縫』(十六夜清心)『三人吉三廓初買』『青砥稿花紅彩画』(白浪五人男)などがある。なお黙阿弥は明治に入ってからも演劇改良運動に影響されて、活歴物に筆を染めたりしている。

【近松の作品】

出世景清 浄瑠璃。貞享三年二月初演。近松が義太夫のため書き下した最初の作品。時代物。平家の遺臣悪七兵衛景清が源氏に対し抵抗する筋。

曽根崎心中 浄瑠璃。元禄十六年五月初演。世話物。手代徳兵衛と遊女お初の心中事件を脚色したもの。お初の人形を名手辰松八郎兵衛がつかった。この作以後、世話物浄瑠璃・心中物が盛行した。

五十年忌歌念仏 浄瑠璃。宝永六年正月初演。世話物。姫路のお夏清十郎事件で、西鶴の『好色五人女』に描かれたもの。後世の歌舞伎にも影響した。

冥途の飛脚 浄瑠璃。正徳元年三月初演。世話物。飛脚問屋の忠兵衛と遊女梅川の事件に取材した恋愛悲劇。新口村の段は歌舞伎でも演じられて名高い。

国性爺合戦 浄瑠璃。正徳五年十一月初演。時代物。明朝再興のため活躍する和藤内(国性爺)を、雄大な構想と新奇な舞台技巧によって描いた。三年連続の興行記録を示し、解散寸前の竹本座を蘇生させた名作。

心中天網島 浄瑠璃。享保五年十二月初演。世話物。紙屋治兵衛と遊女小春の情死事件を脚色したもの。道行文の美しさが特に名高い。

女殺油地獄 浄瑠璃。享保六年七月初演。世話物。主役の河内屋与兵衛が、近松としては珍しく悪役の不良児として描かれている。

心中宵庚申 浄瑠璃。享保七年四月初演。世話物。八百屋半兵衛と女房お千代の情死事件を脚色したもの。紀海音の『心中二つ腹帯』も同じ題材である。

【近松断片】

〈転向〉 近松は都万太夫座の作者として歌舞伎の脚本を書いた。本来歌舞伎は役者が主で、脚本は従であったから、近松は名優坂田藤十郎のために、その得意芸を生かすために多くの作品を書いた。しかし近松が自由にその才能を発揮するためには、因襲的な歌舞伎を離れて浄瑠璃作者にならねばならなかったのである。そして、それが結果的には歌舞伎と浄瑠璃の交渉を密接にし、双方の発達をうながすこととなった。

〈世話物浄瑠璃〉 世話物浄瑠璃は、歌舞伎の世話狂言の手法をとりいれたものである。題材は、読み売り・祭文・踊り口説・絵草紙などで世間のうわさとなった事件を通して町人の世界を描いたもの。近松はとくに義理と人情の葛藤から生ずる悲劇を美化して表現した。彼の世話物の中では心中物(十一編)が最も多く、姦通物(三編)、犯罪物(四編)、狂乱物(二編)、殺人物(一編)などがかぞえられる。

【虚実皮膜論】

近松の演劇観は穂積以貫(一六九二—一七六九)の『難波土産』(元文三)に伝えられている。一般にこれを虚実皮膜論と呼んでいる。

芸といふものは実と虚との皮膜の間にあるものなり。なるほど今の世、実事によくうつすのを好むゆゑ、家老は真の家老の身ぶり口上をうつすとはいへども、さらばとて真の大名の家老などが立役の如く、顔に紅脂白粉を塗る事ありや。また真の家老は顔を飾らぬとて、立役がむしやむしやと髭は生へなり、頭ははげなりに舞台へ出て芸をせば、慰みになるべきや。皮膜の間といふがこれなり。虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みがあったものなり。

近松門左衛門

▶近松門左衛門(杉森多門筆)

西暦	年号	事項
一六五三	承応二	近松誕生。
一六六二	寛文二	△道頓堀に操芝居が始まる。
一六七八	延宝六	二六歳。『夕霧名残の正月』上演。名優坂田藤十郎の当たり芸となる。以後、近松は藤十郎と提携して世話物歌舞伎を確立する。
一六八四	貞享元	△竹本義太夫、道頓堀に竹本座を開設。
一六八六	貞享三	三四歳。義太夫のため『出世景清』を上演。これ以前の浄瑠璃を古浄瑠璃と呼ぶ。
一六八七	貞享四	三五歳。近松、

近松以前

【古浄瑠璃】 浄瑠璃は、室町時代の中ごろおこった語り物で、代表的作品『浄瑠璃物語(十二段草子)』からその呼称が生まれた。もともと琵琶や扇拍子で語られていたものだったが、中世末に堺に渡来した三味線と結び、さらに傀儡子(人形使い)と提携することによって、演劇の形式をとるようになった。これが、操芝居である。

したがって浄瑠璃とは、操芝居のための戯曲、音楽のことであり、さまざまな流派があった。そのなかで名人とされた者に薩摩浄雲、杉山丹後掾らがあり、浄雲の流れをくむ者に、金平節の桜井丹波少掾、嘉太夫節の宇治加賀掾、播磨節の井上播磨掾らがある。

のち、竹本義太夫が竹本座によって、近松と結んで浄瑠璃形態を完成するに及んで、義太夫以前のものを古浄瑠璃と呼んで区別している。

【初期の歌舞伎】 慶長の初めごろ、出雲のお国が京都で興行した「カブキ踊り」が世上に喜ばれたことから、女歌舞伎がさかんに行われた。しかし風紀上の立場から寛永年間にはたびたびの取り締りの末、禁止される。これにかわって美少年による**若衆歌舞伎**が行われるようになったが、これもまた風紀上好もしくないとして禁止され、美少年の象徴ともいうべき前髪を剃らせた野郎額にして許可することになった。これが**野郎歌舞伎**である。こうした変化は、舞踊本位であった歌舞伎を、科白本位の芝居へと移行させていった。

科白劇が要求されると、多幕物(続き狂言)が生まれてくるようになり(万治・寛文ごろ)、そのためには狂言本(脚本)や、その専門作者が必要とされるようになってくる。もっとも、延宝八年、作者としてはじめて名前を出した富永平兵衛は、そのため世の物笑いとなった。それくらいに狂言作者の地位は卑しめられていたのであった。

江戸は上方とちがい、寛永初年に中村勘三郎が猿若狂言を興行し、江戸歌舞伎の開祖とされたが、これは壬生狂言に似た素朴な芝居であった。その後も荒事芸などが好まれ、科白劇への成長は遅れた。

近松門左衛門

【歌舞伎作者】 近松は本名を杉森信盛といい、もと武士の出である。京都で一条昭良に仕え、山岡元隣について貞門俳諧を学んでいる。天和・貞享ごろに至って、彼は浄瑠璃・歌舞伎作者として華やかに登場した。浄瑠璃では宇治嘉太夫(加賀掾)・竹本義太夫(筑後掾)に、歌舞伎では坂田藤十郎一座に筆をとったが、主力を注いだのは名優藤十郎の存在した歌舞伎に対してであった。当時の身分意識から、狂言作者は侮蔑の対象とされていたが、彼はあえてその作者名を公然と掲げ、劇壇に画期的な前進をもたらした。

【浄瑠璃作者】 **竹本義太夫**が大阪道頓堀の竹本座に拠ったとき、近松は彼のために『出世景清』を書いてその前途を祝福したが、その後両者は緊密な関係を保った。近松の初めて書いた世話浄瑠璃『曽根崎心中』の好評を機に、義太夫は座本を引退し、竹田出雲掾があとをつぎ、近松は座付作者として迎えられる。義太夫は太夫として出勤したから、近松の作品は義太夫によって語り生かされた。同じ道頓堀に創設された豊竹座の作者紀海音は、近松の好敵手であったから、義太夫の死後も近松は二代義太夫(政太夫)を助けて晩年まで制作を続けたのである。

【世話物・時代物】 近松の浄瑠璃作品九十編のうち、時代物は七十編、世話物は二十四編を占める。

時代物とは、過去の時代の公家・武家社会に材をとり、五段組織で構成されたものである。事件の規模も大きく、登場人物や舞台装置も豪華で、世人からも歓迎されたし、近松もその主力を注いでいる。

世話物とは、当代の庶民社会の出来事をとりあげて、三段組織で構成されたものである。事件も人物も私的で小規模であるが、時代物が浪漫的であるのに対して、世話物は現実的で、名もない庶民を主人公としてこれにすぐれた人間性を付与している。

近松の世話物は、とりわけ「義理・人情」の葛藤の世界を中心として人間の諸相を描いており、「虚実皮膜の間」(『難波土産』)に演劇の真をつくりだそうとしたとされている。

近松以後

【浄瑠璃】 竹本座の近松に対抗した豊竹座の**紀海音**(一六六三―一七四二)は、『椀久末松山』『お染久松袂の白しぼり』『心中二つ腹帯』などのすぐれた作品を残している。

その後、竹本座に**竹田出雲**(一六九一―一七五六)、豊竹座には並木宗輔(一六九五―一七五一)らが出て、人形芝居の全盛期に入る。出雲には『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』など、宗輔には『一谷嫩軍記』などの作品がある。ただしこれらの作品は合作形式であり、語りも分担されるようになった。

年	年号	事項
一六八四	貞享元	四一歳。秋『野ざらし紀行』の旅に出発。郷里伊賀上野に帰る。『冬の日』刊。
一六八五	貞享二	四二歳。郷里から江戸に帰る。
一六八六	貞享三	『春の日』刊。
一六八七	貞享四	四四歳。秋『鹿島紀行』の旅。冬『笈の小文』の旅に出発。
一六八八	元禄元	四五歳。秋『更科紀行』の旅に出発。江戸に帰る。
一六八九	元禄二	四六歳。春『奥の細道』の旅に出発。九月大垣着。『曠野』刊。
一六九〇	元禄三	四七歳。『幻住庵の記』成る。『ひさご』刊。
一六九一	元禄四	四八歳。『嵯峨日記』成る。冬江戸に帰る。『猿蓑』刊。
一六九二	元禄五	四九歳。芭蕉庵再興。
一六九四	元禄七	五一歳。大阪で一〇月一二日没。『炭俵』刊。
一六九八	元禄一一	『続猿蓑』刊。
一七〇二	元禄一五	『奥の細道』刊。

者は与謝蕪村(一七一六—一七八三)であるが、ほかに加藤暁台、高桑闌更、大島蓼太、加舎白雄らの人々がある。この期の俳諧には、各自の個性が多様に発揮されたものが多く、とりわけ洗練された感覚、知識的な趣味、高踏的な想像力など、芸術至上主義的な傾向が見られた。

○**夜半楽**(安永六刊) 蕪村編俳諧集。中に「春風馬堤曲」などの新形式詩を含む。

○**鶉衣**(天明七ごろ成る) 横井也有(一七〇二—一七八三)の俳文集。機知・技巧に富む。

【化政期の俳諧】 俳諧は大衆の間に大いに普及したが、それだけに平明で遊戯的な俳風におもむいた。小林一茶(一七六三—一八二七)はこの時期を代表する特異な俳人である。やがて、俳壇は天保期に入ると低俗・固定化した、いわゆる「月並俳諧」に堕してゆくのである。

○**おらが春**(嘉永五刊) 小林一茶の句文集。文政二年ごろの日録や発句をおさめる。

【芭蕉の作品】

野ざらし紀行(甲子吟行) 紀行。貞享元年八月、芭蕉は門人千里をつれて、江戸深川の庵を出発し、故郷伊賀に向かった。伊勢、伊賀を経て、吉野、山城、近江、美濃、名古屋などを遍歴、故郷で越年した後、奈良、京都、近江、尾張に旅し、甲斐を経て江戸に帰った。その時の紀行文であって、蕉風俳諧の確立期にあたる。

鹿島紀行 紀行。四年八月、門人曽良、宗波をつれて鹿島の月見に出かけた時の紀行文。

幻住庵記 紀行。四月はじめ、近江の石山の幻住庵に住んだ時の随筆。庵は蕉門曲水の世話によるもので、自然閑寂の境に生きる芭蕉の生活がよく表現されている。

奥の細道 紀行。元禄二年三月、江戸深川の芭蕉庵を出て、門人曽良とともに、松島、平泉、象潟など奥州を行脚し、北陸、美濃を経て、九月に大垣から伊勢に舟で出発するまでの紀行。旅程六百里、七か月の旅である。この旅の詩的円熟が『猿蓑』の完璧な芸術性を生んだとされる。

笈の小文 紀行。貞享四年一〇月、江戸を出発して郷里伊賀に志し、翌年には吉野、高野、和歌の浦、大阪を経て、須磨、明石に至って終わる紀行文。中に芭蕉の人生観、風雅観が明らかにされていて注目される。

俳諧七部集 俳諧集。芭蕉一代の俳諧のうち、代表的なもの七部を選んだもので、編者は佐久間柳居。『冬の日』『春の日』『曠野』『ひさご』『猿蓑』『炭俵』『続猿蓑』の七部。

【芭蕉の俳諧理念】

蕉風の根本的な精神は、さび・しおり・細みである。**さび**は閑寂な観照態度から生まれる情調であり、**しおり**は、さびに導かれて表現される余情をいい、自然の風物に作者の心が微細に通いあう姿勢を**細み**とよぶのである。

【俳諧について】

〔連句〕 中世の連歌の形式をうけつぎ、二人以上で交互に五七五と七七の句をつける、「俳諧の連歌」を連句という。江戸時代には一般に連句のことを「俳諧」と呼んだのである。

〔俳諧のよみかた〕 連句を一人でつづけるのを独吟、二人で続けるのを両吟といい、それ以上なら人数に応じて、三吟、四吟などという。五七五を長句、七七を短句とよび、前の句に続けることを付けるという。付ける句を付句、前の句を前句とよぶ。

〔俳諧の形式〕 定型としては、百句を連ねる百韻、五十句を連ねる五十韻があったが、蕉風になると三十六句からなる歌仙が多く行われた。これらの完成した作品を一巻とよぶ。

〔歌仙の書きかた〕 歌仙は、二つ折りの懐紙二枚の表と裏に書く。書き方は、

一ページめ(初折・表とよぶ) 六句
二ページめ(初折・裏) 十二句
三ページめ(名残折・表) 十二句
四ページめ(名残折・裏) 六句
} 計36句

〔句のよびかた〕 俳諧(連句)の最初の句を発句(または立句)といい、第二句を脇句、第三句を第三という。第四句以下は平句とよび、作品の最後の句を揚句(挙句)という。

〔句のきまり〕 一巻のなかには、四季の句(季語を入れた句)と雑の句(無季の句)と恋の句とがよまれる。また、歌仙では二花三月といって、必ず花の句を二句、月の句を三句よむことになっていて、その句の位置が原則的にきまっている。それを定座という。恋の句も一巻のうち二、三か所あるのがよいとされている。切れ字は発句にはなくてはならない。ただし発句以外の句にはあってはならないとされた。

〔付合〕 連句で前の句に次の句を付けることを付合という。付合において、貞門・談林では物付・詞付・心付などが行われたが、蕉風になると、前句の余情・余韻・格調などに応じた匂付が行われた。その付けかたを芭蕉は「匂・響・移り・位・俤」などのことばで言い表している。

松尾芭蕉

▶松尾芭蕉（破笠筆）

西暦	年号	事項
一六四四	正保元	芭蕉誕生。
一六五三	承応二	一〇歳。このころ藤堂良忠に仕官。△松永貞徳没。
一六六六	寛文六	二三歳。故郷を出奔して京都に出る。
一六七二	寛文一二	二九歳。『貝おほひ』成る。江戸に出る。
一六七五	延宝三	三二歳。『談林十百韻』参加。
一六八〇	延宝八	三七歳。深川芭蕉庵に入る。
一六八二	天和二	三九歳。初めて芭蕉の号を用いる。江戸大火。芭蕉庵焼失のため甲斐に滞在。△西山宗因没。
一六八三	天和三	四〇歳。芭蕉庵再建され、江戸に帰る。

芭蕉以前

【貞門俳諧】　宗鑑・守武の俳諧連歌の世界は、近世初頭、松永貞徳の貞門俳諧においてうけつがれ、花ひらいた。**松永貞徳**（一五七一―一六五三）は俳諧の本質を、形式的な言語の面からとらえ、俳言（俗語的表現）が含められていれば俳諧であるとした。したがって、貞徳は内容面で野卑猥雑におちいることを戒め、根底において俳諧は和歌連歌の道をはずれるものではないとしている。その著作には、俳諧集に『新増犬筑波集』、俳諧式目として『御傘』がある。

近世の俳諧は貞門によって確立され、多くの有能な俳人を生んだ。松江重頼（一六〇二―一六八〇）もその一人で、俳諧集『犬子集』、法式集『毛吹草』が名高い。

【談林俳諧】　貞門が伝統的な立場を捨てきれなかったことに対する反動として、**西山宗因**（一六〇五―一六八二）一派の談林俳諧がおこった。宗因は貞門の格式を打破し、現実に即して自由斬新な素材や用語をもって、清新なよみぶりを示した。『西翁十百韻』は彼の第一声であり、彼を中心とした『談林十百韻』によって俳壇は談林一色の勢いとなった。

貞門の俳諧は、前句の用語に縁のある物でつける「物付」が主であったが、談林は前句全体の意味によってつける「心付」の手法が主で、それだけに自由で新しい境地を開拓できた。

談林俳諧は、伝統破壊に急であったため、西鶴の大矢数のような興行に走るなど、真の芸術性を造型するゆとりがなかった。すなわち、談林俳諧は連句の付合から得た現実描写を散文に発展させるか、詩情に沈潜して文学伝統を新しく再生させるか、二つの方向を示唆したのである。前者の道を西鶴が歩んで浮世草子をなし、後者の道を芭蕉が歩んで蕉風俳諧をなした。芭蕉は「上に宗因なくんば吾吾が俳諧、今もつて貞徳の涎をねぶるべし。」（去来抄）といって、談林俳諧の史的意義を評価している。

松尾芭蕉

【貞門・談林時代】　芭蕉は伊賀上野に生まれた。本名松尾藤七郎、通称忠右衛門。一〇歳ごろから、侍大将藤堂家の嗣子良忠の小小姓として仕えたが良忠（俳号蟬吟）が北村季吟を師として貞門俳諧を学んだので、芭蕉も貞門に親しんだ。蟬吟の没後、芭蕉は郷里を脱走する。このころ彼の撰した『貝おほひ（二十番発句合）』には談林風な新しみがみられるが、さらに延宝期、江戸に入った芭蕉は『談林十百韻』『江戸両吟集』などに桃青の号で句を寄せ、明らかに談林俳諧への傾倒を示している。

【蕉風開眼時代】　延宝八年の冬、芭蕉は深川の草庵に入る。天和二年の暮れの江戸大火で類焼し、彼は一時甲州に行くが翌年再建された芭蕉庵に入る。この期間の芭蕉は『俳諧次韻』『武蔵曲』『虚栗』などに句を寄せているが、新風を開発しようとする動きが看取される。

【蕉風確立時代】　貞享元年『野ざらし紀行』の旅に立ってから、芭蕉は席の暖まる間もなく『鹿島紀行』『笈の小文（卯辰紀行）』『更科紀行』『奥の細道』の旅に出る。その間、門人らとの連句興行を重ね、芭蕉七部集のうちの『冬の日』『春の日』『曠野』（以上三つ荷兮編）を刊行している。蕉風は『冬の日』において若々しい情熱をもって確立されたといわれるが、この期の旅もまた芭蕉の人生観・芸術観を深め、その創造精神を純化して、蕉風俳諧の基盤をつくりあげるよすがであった。

【蕉風完成時代】　奥の細道の旅の後、芭蕉は伊賀、大津、京、奈良などを往来し、『幻住庵記』や『嵯峨日記』を書く。『ひさご』（珍碩編）『猿蓑』（凡兆・去来編）が刊行されたが、『猿蓑』こそは**蕉風俳諧の完成期の風格を示す**とされている。いったん江戸に帰った芭蕉は、九州をめざす旅の途次、大阪の花屋方で没した。『炭俵』（野坡・利牛・孤屋編）は没年の刊行であるが、ここには芭蕉晩年の**軽み**が示されていて、「また一つの新風を起こさる」（去来）と称えられた。

芭蕉以後

【蕉門】　芭蕉の門人のうち、おもだった者を**蕉門の十哲**という。榎本其角、服部嵐雪、向井去来、内藤丈草、各務支考、森川許六、杉山杉風、志太野坡、越智越人、立花北枝である。門人たちは芭蕉の没後、各自勝手な方向に歩みはじめ、蕉門は分裂堕落していった。

○**去来抄**　俳論集。向井去来（一六五一―一七〇四）の著。芭蕉や門下の俳論を誠実に集成したもの。

○**風俗文選**　俳文集。森川許六（一六五六―一七一五）の著。芭蕉以下蕉門の好俳文を集成したもの。

○**三冊子**　俳論集。服部土芳（一六五七―一七三〇）の著。蕉風の俳論や作法を、芭蕉の話とともに集録したもの。

【天明の復興】　芭蕉に帰れという、蕉風復興の声は宝暦ごろから胎動し、明和に唱えられ、安永・天明期に開花した。その中心となった

		一代男』刊。浮世草子のはじめ。△西山宗因没。
一六八四	貞享元	四三歳。『諸艶大鑑』刊。六月、一昼夜二万三千五百句独吟。
一六八五	貞享二	四四歳。『西鶴諸国咄』刊。
一六八六	貞享三	四五歳。『好色五人女』『好色一代女』刊。『本朝二十不孝』刊。
一六八七	貞享四	四六歳。『男色大鑑』『武道伝来記』刊。
一六八八	元禄元	四七歳。『日本永代蔵』『武家義理物語』刊。
一六九二	元禄五	五一歳。『世間胸算用』刊。
一六九三	元禄六	五二歳。八月十日死没。遺稿『西鶴置土産』刊。
一六九四	元禄七	『西鶴織留』刊。△芭蕉没。（五一歳）
一六九五	元禄八	『西鶴俗つれ〴〵』刊。
一六九六	元禄九	『万の文反古』刊。
一六九九	元禄一二	『西鶴名残の友』刊。

ていたが、**江島其磧**（一六六七—一七三六）に浮世草子『傾城色三味線』を書かせて出版した。これが人気を博したので、その後同系統の作品を「三味線もの」とも呼ぶ。其磧は自作が西鶴の模倣であることを公言しながら、新しい趣向も加え、『傾城禁短気』などの話題作を成した。

自笑・其磧は不和となり分立するが、其磧は『世間子息気質』『世間娘容気』など、人間を類型的に把握した説話集を作った。こういう作品群を「気質もの」と呼ぶ。

両者和解後の作品にも気質物や三味線物があるが、多くは歌舞伎浄瑠璃の翻案改作と見られる、職人的な商品に堕してしまっている。以上のような、八文字屋を中心として刊行された浮世草子を**八文字屋本**と呼んでいる。

其磧・自笑らの死後、八文字屋本は急速におとろえる。少しおくれて和訳太郎（上田秋成）の気質物『諸道聴耳世間猿』『世間妾気質』があるが、上田秋成が浮世草子の低俗をすてて初期読本の世界に移っていったように、時代は変わり、文化は江戸に中心を移してゆく。

【西鶴の主要な作品】

好色一代男 浮世草子。主人公世之介の生活を中心として、当時の好色風俗を描く。『源氏物語』五十四帖を模して、俳諧の手法を生かしている。在来の仮名草子の因襲性をすてて、生彩のある現実描写が見られる。浮世草子のはじめ。

好色五人女 浮世草子。当時世間の話題となった事件（お夏清十郎、樽屋おせん、おさん茂右衛門、八百屋お七、おまん源五兵衛）を物語化したもので戯曲的な発想がうかがえる。

好色一代女 浮世草子。一女性の流転の生涯を描く。仮名草子の比丘尼物の影響が見られるが、当時の身分社会相を深刻に観照している。

武道伝来記 浮世草子。九州から奥州に及ぶ各地の敵討ちを題材とした短編集。

武家義理物語 浮世草子。武士の精神の根底に流れている義理の精神のさまざまな相を描こうとした短編集。

日本永代蔵 浮世草子。寛永の刊本「長者教」にならい、形式的な教訓性をもたせて、町人の致富の工夫や手段を主題として描いた説話集。

世間胸算用 浮世草子。大晦日の借金決算に題材をしぼり、市井の庶民の哀歓を凝視し、鮮やかに描き出している。

【西鶴断片】

〈大矢数〉 西鶴は延宝五年、大阪生玉の本覚寺で一日一夜独吟千六百句の矢数俳諧を公開、興行した。この試みは俳壇に大きな反響を呼び、同年月松軒紀子は千八百句の速吟を、翌々年には大淀三千風が仙台で三千句独吟を成しとげた。そこで、西鶴は延宝八年、再度生玉において、一日一夜四千句の記録をつくった。一句平均二十一秒強ということになる。そして、宗因も没し、『好色一代男』刊行後の貞享元年、彼は俳壇への置土産のつもりであろうか、住吉社頭で三度めの矢数俳諧にいどみ、実に二万三千五百句をよんだのである。この時には榎本其角のほか多数の俳人が列座した。一句平均四秒足らずのスピードに、記録するゆとりもなく、ただ紙上に線を引いて句数を数えるのみであったという。わずかに残る発句は、

俳諧の息の根留めん大矢数

である。その後この記録に挑戦する者はない。

〈辞世〉 西鶴没後に刊行された『西鶴置土産』の巻頭には西鶴の辞世吟がのせられている。

人間五十年の究りそれさへ
我にはあまりたるにましてや
浮世の月見過しにけり末二年

西鶴は五十二歳でなくなったのである。芭蕉の、

旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる

や、蕪村の、

白梅の明くる夜ばかりとなりにけり

などとくらべて、資質や姿勢のちがいを考えさせられる。

〈遺稿〉 西鶴の死後、門人の北条団水は深く悲しんで、

力なや松をはなるる蔦かつら（追善発句）

とよみ、師の故庵を七年守りつづけた。そして西鶴の遺稿を整理して次々に刊行した。上の「年譜」に示す『西鶴置土産』以下の作品がそれである。

ただし、『西鶴置土産』を除いて、他の作品についてはその真偽についていろんな説がたてられている。なかには、『好色一代男』以外はすべて西鶴の作品ではないとする説まである。

▲『日本永代蔵』さし絵

井原西鶴

▲井原西鶴(芳賀一晶筆)

西暦	年号	事項
一六四二	寛永一九	西鶴誕生。
一六四四	正保元	△芭蕉誕生。
一六五三	承応二	△近松誕生。
一六五六	明暦二	一五歳。このころ、俳諧に志す。
一六六二	寛文二	二一歳。このころ、俳諧点者となる。
一六七五	延宝三	三四歳。妻、三児を残して病死。追善のため一日独吟千句を興行。
一六七七	延宝五	三六歳。独吟千六百句興行。『西鶴俳諧大句数』
一六八〇	延宝八	三九歳。一日独吟四千句を興行。翌年『大矢数』として刊。
一六八二	天和二	四一歳。『好色

西鶴以前

【仮名草子】 近世の初めから、西鶴の『好色一代男』が生まれるまでの時期にあらわれた散文学的な作品を総称して「仮名草子」と呼んでいる。

仮名草子は、町人文学の萌芽としての性格をもっていたが、その内容や様式は雑多だった。大きく三つに分類してみると(1)啓蒙教訓的な作品、(2)娯楽的な作品、(3)実用本位の作品、となろう。

啓蒙教訓的な作品としては、儒教や仏教の教義を問答形式で述べるもの(『清水物語』)、随筆風に述べるもの(『可笑記』)、特に女性の教訓を主眼とするもの、内外の説話を集めたもの(『伊曽保物語』)などが行われた。

娯楽的な作品としては、中世風の物語やお伽草子の流れに沿ったもの(『薄雪物語』)、ユーモラスな説話を集めたもの(『昨日は今日の物語』『醒睡笑』)、裁判や怪談の翻訳をしたもの(『御伽婢子』)、古典文学をパロディ化したもの(『仁勢物語』『尤の双紙』)などがある。

実用本位の作品には、当時の時事に関する見聞記的なもの(『切支丹物語』)、名所記的なもの(『竹斎』『浮世物語』)、評判記的なもの(『浪花鉦』)などがある。

これらは、幕府の文治政策や印刷術の発達を背景として、町人階級の知識欲に応じて生まれたものであったが、文学的には成熟したものとは言い難い。

○醒睡笑 一六二八年刊。安楽庵策伝(一五五四—一六四二)作。策伝が所司代板倉重宗の所望にこたえて笑話・小咄を集成・分類したもの。

○御伽婢子 一六六六年刊。浅井了意(一六一〇?—一六九一)作。怪談集。中国の『剪燈新話』などを翻案したもの。

○竹斎 一六二三年ごろ刊。富山道冶(一五七九—一六三八)作か。藪医者の竹斎が家来のにらみの介をつれて京から江戸へ下る滑稽道中記。後世に多くの模倣作を生んだ。芭蕉に「木枯しの身は竹斎に似たるかな」の句がある。

井原西鶴

【談林俳諧の西鶴】 西鶴は本名を平山藤五といい、大阪の富裕な町人だったといわれるが、その経歴は明らかでない。若くして家業を譲り、俳諧に志し、貞門に学んだが、後西山宗因の談林派に転じた。

延宝年間に入ると、西鶴は新風談林の急先鋒としてめざましい活躍をする。それは付合の活動にとどまらない。独吟から矢数俳諧(独吟千六百韻『西鶴俳諧大句数』・独吟四千句『大矢数』)にすすんで、多作速吟のうちに町人民衆の現実を自由奔放に表現した。その破格な異風は他派から「阿蘭陀流」とか「放埒抜群」などと攻撃されたが、後に浮世草子へと展開する内容や手法の基盤がここに認められるのである。

なお貞享元年、住吉の社前で興行した矢数俳諧では一昼夜で独吟二万三千五百句という、前人未踏の記録をつくっている。

【浮世草子】 天和二年、師宗因が死去した後、西鶴は『好色一代男』を刊行した。各章に西鶴自筆の挿絵がある。大阪で大いに行われ、二年後には江戸で菱川師宣の挿絵による別版が発行されるほどの人気を得た。これがいわゆる浮世草子のはじまりである。

その後西鶴は次々に新しい題材をとりあげて浮世草子を発表した。題材によって便宜的に分類すると、

(1)**好色物** 男女の恋愛・好色生活を扱ったもの——『好色一代男』『諸艶大鑑(好色二代男)』『好色五人女』『好色一代女』※『西鶴置土産』

(2)**武家物** 武家社会を背景に武士気質を扱ったもの——『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』

(3)**町人物** 町人の経済生活の種々相を扱ったもの——『日本永代蔵』『世間胸算用』※『西鶴織留』

(4)**雑話物** 諸国の奇話、主題別の雑話など——『西鶴諸国咄』『懐硯』『本朝二十不孝』『本朝桜陰比事』※『西鶴俗つれづれ』※『西鶴名残の友』※『万の文反古』

などがおもなものである。右の作品群を含めて、西鶴の作品なのか偽作なのか今なお明らかでないものもある。(※印の作品は死後遺稿として刊行された。)

西鶴以後

【模倣的作品】 西鶴の生存中に多くの模倣作が生まれたが、そのほとんどは好色物系統の卑俗なものだった。

西鶴の没後、浮世草子は社会情勢の沈滞を反映して、教訓臭の強いもの、際物的な興味によりかかるもの、脚色の甚だしいもの、退廃的なものなどが行われるにとどまった。おもなものとしては、西沢一風『新色五巻書』・『御前義経記』、夜食時分『好色万金丹』、北条団水『昼夜用心記』『日本新永代蔵』、月尋堂『今様二十四孝』、錦文流『棠大門屋敷』などがあるが、西鶴に遠く及ばない。

【八文字屋本】 京都の書肆、八文字屋の主人自笑(?—一七四五)ははじめ役者評判記を刊行し

らが活躍したころ）

(2)後期（江戸中心時代）

a 安永・天明期（川柳・狂歌・黄表紙・洒落本などのおこったころ）

b 文化・文政期（読本・滑稽本などの行われたころ）

が目安となるであろう。後期に入ると、幕藩体制の矛盾や破綻があらわになるにつれて、幕政の改革や文化面に対する取り締り、弾圧があいついだ。将軍膝元の江戸町人の文学は権力に迎合するものか、享楽本位の退廃的なものになりがちであった。

○近世の文学理念

文学理念においても、元禄期にあっては芭蕉の「わび」の精神、西鶴の人間凝視、近松の「虚実皮膜」の芸術論など、新しい課題を掘りおこすものが見られたのであるが、安永・天明期には「粋・通」などの遊戯的な美意識が重んじられ、文化・文政期に至っては、馬琴の勧善懲悪思想のような、官製道徳への追従を示すものが見られるにすぎなかった。

○漢学と国学の隆盛

近世には漢学と国学がめざましい興隆をみせた。幕府の朱子学派重用と、これに対する陽明学派・復古学派などの活躍、さらに漢学に刺激された国学の古学復興の推進・大成がそれであり、それぞれに多くの研究書や関連作品を生んでいる。

年	年号	作品	関連事項
一七八三	天明3	万載狂歌集（狂歌・四方赤良ら）	貞丈雑記（有職故実研究書・伊勢貞丈・一七八四）
一七八五	天明5	江戸生艶気樺焼（黄表紙・山東京伝）	
一七八七	天明7	鶉衣（俳文集・横井也有）	
〃	〃	通言総籬（洒落本・山東京伝）	＊寛政の改革（一七八七―一七九三）
一七九一	寛政3	仕懸文庫（洒落本・山東京伝）	＊寛政異学の禁（一七九〇）
一七九五	寛政7	玉勝間（随筆・本居宣長）	源氏物語玉の小櫛（注釈書・本居宣長・一七九六）
			古事記伝（注釈書・本居宣長・一七九八）
一八〇一	享和1	父の終焉日記（日記・小林一茶）	
一八〇二	享和2	東海道中膝栗毛・初篇（滑稽本・十返舎一九）	
一八〇七	文化4	椿説弓張月（読本・滝沢馬琴）	
一八〇八	文化5	蕪村七部集（俳諧集・与謝蕪村）	
一八〇九	文化6	浮世風呂（滑稽本・式亭三馬）	
一八一〇	文化7	琴後集（和歌・村田春海）	古道大意（思想書・平田篤胤・一八一一）
一八一四	文化11	南総里見八犬伝・初篇（読本・滝沢馬琴）	
一八一九	文政2	おらが春（俳文・小林一茶）	群書類従（叢書・塙保己一・一八一九）
一八二〇	文政3	花暦八笑人（滑稽本・滝亭鯉丈）	大日本沿海輿地全図（伊能忠敬・一八二一）
一八二五	文政8	東海道四谷怪談（歌舞伎・鶴屋南北）	
一八二八	文政11	桂園一枝（和歌・香川景樹）	雅言集覧（国語辞書・石川雅望・一八二六）
一八二九	文政12	偐紫田舎源氏・初篇（合巻・柳亭種彦）	嬉遊笑覧（随筆集・喜多村信節・一八三〇）
一八三二	天保3	春色梅児誉美（人情本・為永春水）	
			＊蛮社の獄（一八三九）
			＊天保の改革（一八四一―一八四三）
一八五三	嘉永6	与話情浮名横櫛（歌舞伎・瀬川如皐）	
一八六〇	万延1	三人吉三廓初買（歌舞伎・河竹黙阿弥）	
一八六二	万延3	青砥稿花紅彩画（歌舞伎・河竹黙阿弥）	
			西洋事情（政治地誌・福沢諭吉・一八六六）

▲福沢諭吉

■近世文学史年表(江戸時代)(作品年時は刊行または成稿の年で示す。)

時代概説

○「近世」という時代

江戸幕府の創設(一六〇三)から明治維新(一八六八)までの約二七〇年間を近世(江戸時代・徳川時代)とよぶ。

この時代は、封建体制のもとに幕府の権力統制が強まり、身分制度が確立したが、同時に城下町や交通の発達、商工業の発展、貨幣経済の普及などによって、町人が経済的に武士階級を圧倒するようになった。

○平民文学の隆盛

町人の経済力の充実にあわせて、幕府の文治政策の普及や、木版印刷の進歩などが、平民文学の発達をうながす背景となった。平民文学を三つの系列に分けてみると、

(1)**俳諧系文学**(連句・発句・俳文・雑俳など)
(2)**戯曲系文学**(浄瑠璃の詞章・歌舞伎の脚本など)
(3)**小説系文学**(仮名草子・浮世草子・草双紙・洒落本・読本・滑稽本・人情本など)

となろう。

これを、文学の中心の所在地とその消長によって時代的に区分すると、

(1)前期(上方中心時代)
a 啓蒙期(仮名草子や、貞門俳諧が行われたころ)
b 元禄期(芭蕉・近松・西鶴

西暦	年号	おもな作品	学術・教育書 *社会
一六二三	元和9	醒睡笑(噺本・安楽庵策伝)	*女歌舞伎を禁止(一六二九)
〃	〃	竹斎(仮名草子・富山道冶か) これ以前刊	
一六六六	寛文6	御伽婢子(仮名草子・浅井了意)	
一六八二	天和2	**好色一代男**(浮世草子・井原西鶴)	*鎖国令(一六三九)
一六八三	天和3	虚栗(俳文・榎本其角)	*若衆歌舞伎を禁止(一六五二)
一六八六	貞享3	出世景清(浄瑠璃・近松門左衛門)	源氏物語湖月抄(注釈書・北村季吟・一六七三)
一六八八	元禄1	**日本永代蔵**(浮世草子・井原西鶴)	*竹本座創設(一六八五)
一六九〇	元禄3	幻住庵記(俳文・松尾芭蕉)	**万葉代匠記**(注釈書・契沖・一六九〇)
一六九二	元禄5	世間胸算用(浮世草子・井原西鶴)	和字正濫抄(語学書・契沖・一六九三)
一七〇二	元禄15	**奥の細道**(俳文・松尾芭蕉)	*豊竹座創設(一七〇三)
			去来抄(俳論・向井去来・一七〇三)
			三冊子(俳論・服部土芳・一七〇二)
一七〇三	元禄16	曽根崎心中(浄瑠璃・近松門左衛門)	
一七〇六	宝永3	風俗文選(俳文集・森川許六)	大和俗訓(教訓書・貝原益軒・一七〇八)
一七一一	正徳1	傾城禁短気(浮世草子・江島其磧)	
〃	〃	冥途の飛脚(浄瑠璃・近松門左衛門)	西洋紀聞(外国地誌・新井白石・一七一五)
一七一五	正徳5	**国性爺合戦**(浄瑠璃・近松門左衛門)	**折たく柴の記**(自叙伝・新井白石・一七一六)
一七三八	元文3	難波土産(演劇論・穂積以貫)	*享保の改革(一七一六―一七四五)
			*出版取り締り令(一七二一)
一七四六	延享3	菅原伝授手習鑑(浄瑠璃・竹田出雲ら)	創学校啓(国学書・荷田春満・一七二八)
一七四八	寛延1	仮名手本忠臣蔵(浄瑠璃・竹田出雲ら)	駿台雑話(随筆集・室鳩巣・一七三二)
一七四九	寛延2	英草紙(読本・都賀庭鐘)	*赤本・黒本出はじめる(一七四二ごろ)
一七五〇	寛延3	誹諧武玉川(前句付集)	自然真営道(安藤昌益・思想書・一七五三)
一七五八	宝暦8	三十石艠始(歌舞伎・並木正三)	
			*宝暦事件(一七五八)
一七六五	明和2	**誹風柳多留・初篇**(前句付集)	万葉考(注釈書・賀茂真淵・一七六〇)
一七六八	明和5	雨月物語(読本・上田秋成)	
			*明和事件(一七六七)
一七七五	安永4	金々先生栄華夢(黄表紙・恋川春町)	脚結抄(語学書・富士谷成章・一七七三)
一七七七	安永6	新花摘(俳文・与謝蕪村)	解体新書(医学書・杉田玄白・一七七四)
〃	〃	伽羅先代萩(歌舞伎・奈河亀輔)	物類称呼(方言辞書・越谷吾山・一七七五)

■能楽解説

五番立	名称	内容	曲名（（　）内は作者名。ないものは世阿弥。）
別格	翁（式三番）	公式の場で最初に演じられる祝禱の歌舞。能役者と狂言役者が共演。	
一番目物	脇能（神物）	翁の次に演じられる。神がシテとなることが多い。大半は夢幻能。祝言を主眼とする。	高砂・老松・絵馬・竹生島（不明）・東方朔（金春禅鳳）・賀茂（金春禅竹）
二番目物	修羅物（男物）	武将をシテとする。修羅道に落ちる話があるため、修羅物という。大半は夢幻能。	八島・忠度・清経・頼政・実盛・田村・朝長・巴（不明）
三番目物	鬘物（女物）	女性がシテで優美な舞を舞う。多くは王朝の物語などに現れる女性の霊。大半は夢幻能。	井筒・定家（禅竹）・二人静・檜垣・羽衣・熊野・夕顔
四番目物	雑物（狂物）	他の分類に入らない能・物狂の能・執心物の能・遊狂物の能などがあり、多くは現在能。	道成寺（観世信光）・安宅（信光）・鉢木・花筐・隅田川（観世元雅）・砧
五番目物	切能（鬼物）	一日の最後に演じられる能。鬼・天狗など超自然的な存在をシテとする。多くは夢幻能。	鵺・山姥・猩々・鞍馬天狗（宮増）・土蜘蛛（不明）・紅葉狩（信光）・船弁慶（信光）

■狂言解説

名称	内容	曲名
脇狂言	祝言を基調とするめでたい狂言。にぎやかに謡いどめ、シャギリどめ、笑いどめで結ぶ。	末広がり・三本の柱・福の神・松脂・煎物・鍋八撥・餅酒・佐渡狐・毘沙門
大名狂言（大名物）	主として大名をシテとするもの。大名とは中世では大名田の所有者。祝言的な要素が多い。	粟田口・今参・入間川・蚊相撲・鬼瓦・萩大名・文蔵・二人大名・武悪・墨塗
小名狂言（太郎冠者物）	太郎冠者をシテとするもの。太郎冠者は狂言では下人の通称として用いられる。	居杭・栗焼・舟船・成上り・棒縛・附子・柑子・鐘の音・察化・あかがり
聟・女狂言	夫婦・男女間の愛情が主に取り上げられている。聟の失敗を舅がとりなしたりする話が多い。	夷毘沙門・二人袴・水掛聟・鶏聟・船渡聟・石神・鈍太郎・右近左近・釣針
鬼・山伏狂言	強いはずの鬼や山伏が実は弱く法力のないことが戯画化されている。	朝比奈・節分・鬼の継子・鬮罪人・神鳴・清水・蟹山伏・禰宜山伏・柿山伏・蝸牛
出家・座頭狂言	僧を滑稽化して描いた出家狂言と座頭の失敗談を描いた座頭狂言の二つがある。	宗論・腹不立・悪太郎・花盗人・金津・伯養・猿座頭・鞠座頭・月見座頭
集狂言（雑狂言）	盗人を扱った盗人物や物の名称などを言い争う争い物などがある。	瓜盗人・子盗人・茶壺・長光・酢薑・芥川・舎弟・以呂波・胸突・花子

■能と狂言の用語解説

能楽　中世の猿楽・田楽から発生し、室町時代に観阿弥・世阿弥によって大成された歌舞劇。仮面を用いるなど独自の様式をもつ。

シテ（能）　能の中心人物。原則として面をつけ舞う。

ワキ（能）　脇役。舞台上の動きは少ない。

アイ（能）　前後二場の間を勤める。

ツレ（能）　シテ・ワキに従って出る。

夢幻能　シテがまず化身で現れ、後、本体で語るという設定の能。

現在能　シテが現実の人間として描かれる能。

狂言　猿楽・田楽から発生し、能と分化したと考えられる。能の幕間に演じる一幕物の喜劇。

シテ（狂）　狂言の中心人物。オモともいう。

アド（狂）　シテ役に対する脇役。副人物。

〈上演順〉

翁→脇能→狂言→二番目物→狂言→三番目物→狂言→四番目物→狂言→五番目物

■能と狂言の比較

	能	狂言
様式	歌舞劇 仮面劇	対話劇 素面劇
題材	古典	日常
流派	観世・宝生・金春・金剛・喜多	大蔵・和泉・鷺（明治以降衰退）
性格	悲劇的 貴族的 象徴的	喜劇的 大衆的 写実的

▲能舞台（羽衣）

▲寂蓮
▲藤原俊成
▲源実朝像
▲細川幽斎
▲飯尾宗祇

■主要私撰集・私家集一覧

時代	作品名	編著者
平安時代	新撰万葉集	菅原道真
	句題和歌	大江千里
	新撰和歌集	紀貫之
	古今六帖	未詳
	曽丹集	曽禰好忠(私家)
	和泉式部集	和泉式部(私家)
	散木奇歌集	源俊頼(私家)
	成尋阿闍梨母集	成尋阿闍梨母(私家)
鎌倉時代	建礼門院右京大夫集	藤原伊行女(私家)
	金槐集	源実朝(私家)
	風葉和歌集	藤原為家
	夫木和歌抄	藤原長清
室町時代	新葉和歌集	宗良親王
	草庵集	頓阿(私家)
	草根集	正徹(私家)・正広
江戸時代	挙白集	木下長嘯子(私家)

■清和源氏略系図

▲源頼朝

▲木曽義仲

▲源義経

▲平清盛像

■六家集一覧

時代	作品名	編者
平安時代	長秋詠藻	藤原俊成
鎌倉時代	山家集	西行
	拾遺愚草	藤原定家
	壬二集	藤原家隆
	拾玉集	慈円
	秋篠月清集	藤原良経

▲平重盛

▲平知盛

世阿弥

▶花伝第六花修(世阿弥筆)

西暦	事項
一三六三	(貞治 二)世阿弥誕生。初名藤若。
一三七四	(応安 七)将軍義満に認められる。
一三八一	(永徳元)このころ三郎元清と名のる。
一三八四	(至徳元)父死去。
一四〇一	(応永 八)このころから世阿弥と称した。
一四〇二	(応永 九)『風姿花伝』
一四二〇	(応永二七)『至花道』
一四二二	(応永二九)出家、長男元雅に地位を譲る。
一四二三	(応永三〇)『三道』
一四二四	(応永三一)『花鏡』
一四二八	(正長元)『拾玉得花』。将軍義教、世阿弥父子を圧迫。
一四三〇	(永享 二)『申楽談儀』
一四三二	(永享 四)長男元雅没。
一四三三	(永享 五)『却来花』
一四三四	(永享 六)佐渡に流され、以後の動勢不明。
一四四三	(嘉吉 三)死去。

〔生い立ち〕 世阿弥の父、観阿弥清次(一三三三—一三八四)は、大和猿楽観世座の創始者。世阿弥の生まれた当時、観阿弥は大和地方を中心に台頭してきたところで、曲舞の長所を取り入れた新しい猿楽の音曲を起こし、近江猿楽や田楽の優れた点を取り入れるなどして観世座を率いて能界を制覇した。

幼いころから観世座の一員だった世阿弥は一二歳の時、洛東今熊野で父が催した猿楽で父とともに将軍足利義満に見いだされる。義満は父子を後援し、特に世阿弥に対する寵愛の深さは余人の目をひくものがあった。能役者としての世阿弥のスタートは恵まれたものであった。しかし、観阿弥が没し二一歳の世阿弥は二代目棟梁となる。このころには近江猿楽が義満の贔屓を受けており、世阿弥はその芸風を取り入れ能の向上をはかっている。

〔芸能の開花と晩年〕 応永一五年、義満が死に、次の義持は田楽を好んだ。世阿弥はその義持の好みに応じて芸風を変化発展させた。

応永二九年(一四二二)、六〇歳の世阿弥は出家したがその息子達によって観世座は繁栄を続けた。このころ、卓抜した能楽論が著されている。しかし、応永三五年(一四二八)、将軍義教の迫害を受け、永享六年佐渡へ流されてからは、彼の消息はようとしてわからない。

〔能楽論〕 彼の能楽論は秘伝として世に知られなかったが、明治四二年の『世阿弥十六部集』公刊以来研究が進み、現在二〇種が知られている。

風姿花伝(略称「花伝」) 応永九年成立。父の教えを骨子として修行論・演出方法など能の全般にわたる論を展開している。

至花道 応永二七年六月成立。習道体系論として稽古上の重要な心得を「二曲三体の事」「無主風の事」、「闌けたる位の事」、「皮肉骨の事」、「体用の事」の五ヵ条に分けて解説している。

花鏡 応永二五年ごろほぼ成立、完成は応永三一年。長男元雅に授与された秘伝書で、幽玄論、初心不可忘論など世阿弥の経験からにじみ出たことばが、すぐれた理論展開をみせ、世阿弥能芸論の極致であるといわれている。

〔「花」について〕 世阿弥の能論の主題は、『風姿花伝』にも「能に花を知る事、無上第一なり」とあるように、「花」であった。花とは、能が観客に与える感動—例えば、新鮮な驚き、珍しさ、美への憧憬といったものを表す比喩である。そして、「花」は「能を尽くし、工夫を極めて後」に、つまり厳しい稽古の末にようやく獲得できるものなのである。

〔能と狂言〕 能とは「猿楽の能」の略。呼称の源流は奈良時代に大陸から伝えられた庶民的芸能に発する。曲芸・軽業などの即興芸だったが、田の神を祭る神事芸能の「田楽」や、大寺院で法会の後に行われる「延年」などの影響下に芸を整え、集団(座)を作った。「猿楽の能」は畿内各地にあった諸座の総称でもある。能は謡い・囃子・所作(舞・演技)から成る舞台芸術であるが、その謡いの詞章が謡曲である。象徴的・夢幻的芸術として完成された能に対して、「狂言」は能と能の合い間に演じられ、能より現実的要素の強い、対話と所作を伴う劇である。狂言は滑稽・軽妙・皮肉・庶民性などの特色を持つ。

▲謡曲「田村」の舞台写真

▲中将(能面)
二番目物のシテに使われる代表的な男性の面

▲小面(能面)
シテやツレがつける代表的な女性の面

能楽論・連歌論

文芸理論は、和歌の実作の後に歌論があらわれて歌人の自覚をうながすように、その文芸が興隆におもむく時期には、その推進力となる。能楽論は、歌論・連歌論に影響される所が多く、幽玄・花などという理念用語は、中世の各文芸に共通して用いられた。ただ能は、舞台芸術である点、修行論、技術論などの面ではおのずから歌論・連歌論とは違った側面を持っている点が注目される。

徒然草

▶徒然草（烏丸本）

■吉田兼好年譜

西暦	事　項
一二八三	(弘安 六)兼好誕生か。
一三〇一	(正安元)後二条天皇の蔵人に召される。
一三〇七	(徳治 二)従五位左兵衛佐に任ぜられる。
一三〇八	(延慶元)以後、三〇歳までの間に出家か。
一三一五	(正和 四)このころ修学院にこもる。
一三二四	(正中元)二条為世から『古今集』の家説を受ける。このころ比叡山、横川に隠棲。
一三三〇	(元徳二)『徒然草』執筆開始か。
一三三五	(建武 二)内裏千首和歌に詠進。
一三三八	(暦応元)二条為定邸の歌合に出席。
一三四四	(康永 三)足利直義の高野山奉納和歌詠進。
一三四五	(貞和元)このころ『自撰家集』成るか。
一三五〇	(観応元)死去か。

〔書名〕　序段の「つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて……」という冒頭文による。ただし、書名は兼好の死後、後人がこの作品を編纂した時に「徒然草」としたと言われている。

〔作者〕　吉田兼好（一二八三？—一三五〇？）。本姓は卜部。京都吉田神社の神官の家系に生まれた。父は卜部兼顕。後宇多上皇の時代に北面の武士として左兵衛佐に至るが、三〇歳前後で出家。隠者となった後も、歌人・知識人として武家や貴族と交遊を続けている。二条派の歌人としては四天王の一人に数えられ、家集『兼好法師集』がある。

〔成立〕　作品の大部分が元徳二年（一三三〇）末から、元弘元年（一三三一）秋にかけての約一年間の短期間に成ったとする説が一般にいわれているが、これに対し長期にわたり逐次成立したとする説も最近提出されている。これには、無常観、文体の変遷を根拠に序段から三〇段あたりまでは元応元年（一三一九）ごろに執筆されていたとする二部説や、さらに三回に分けたとする三部説があり、成立時期の研究は、各章段のテーマ・内容の研究と並行して今後も進められる必要がある。

〔内容・構成〕　序のほか二四四段。各段はそれぞれ独立した主題を持って書かれている。その内容は、説話あり、処世訓あり、自然観照文ありといったように実に多岐にわたっており、作者の眼が人間生活のあらゆる部分に向かって光っていることを感じさせる。しかも、その眼は時により、場合に応じて視点を変え、ある段では酒を賛美し、ある段ではその害を説くなど、いわゆる思想の矛盾が随所に見られる。しかし、それは社会や人間に限りない興味を抱く作者が、現実世界が見せる様々な矛盾した貌を眺めた時のいつわりのない生活感情の流露であったと思われる。また、その矛盾を根底でつなぐものは、当時、時代を支配していた無常観であり、しかもそれは、個人の体験や思考に裏打ちされた作者独自の無常観である。兼好は、「期する所、ただ老いと死とにあり。その来たる事すみやかにして、念々の間にとどまらず」（七四段）といい、ゆえに「大事を思ひ立たん人は去りがたく、心にかからん事の本意をとげずして、さながら捨つべきなり」（五九段）と無常の自覚を説く。また、「世はさだめなきこそ、いみじけれ」（七段）、「折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ」（一九段）と世の中の無常であることを賛美している。こうした彼の無常観は、多彩な内容に焦点を与え、作品の価値を永遠のものにしている。

〔文体〕　古来、名文の誉れが高い。内容に応じて和漢混交文や和文を使いこなし、係り結びの曲調を用いて文章に陰影を与えている。全体に平易な印象を与え、会話の部分は特に生き生きと描かれている。

〔史的評価〕　中世から、歌人・連歌師などに愛読され、その卓抜したユーモアは連歌・俳諧に大きな影響を与えていた。近世に至っては浄瑠璃・浮世草子にまで影響を与え、慶長から幕末までの版行は五〇種を越えるベストセラーであった。作品中に点在する兼好独特の美意識は、中世的なものへの先駆けをなし、「さび」の美的世界へ通じるものとして、高く評価されている。

〔『徒然草』冒頭・例文〕

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。　（烏丸光広本による）

（訳）所在なさにまかせて、終日硯に向かって、心に浮かんでは次々消えて行くとりとめもない事どもを、何ということもなく書きつけると、妙に気違いじみた気持ちになることだ。

▲吉田兼好（扶桑隠逸伝）

兼好の恋文代作事件　幕府の実力者である師直は、美しいという評判の女性に手紙を送ろうとして、その代作を兼好に依頼した。しかしこれが全く役立たずに終わったので、「物の用に立たぬやつだ、もう兼好を屋敷に入れるな」と怒ったという話。『太平記』巻二一「塩冶判官讒死事」に見える。全面的には信じられないが、彼の家集には他人に代わって恋の歌を作ったりはしているから、全くの作り話でもなかったかもしれない。

▶琵琶法師

◀主上を迎える平家一門（平治物語絵巻）

■『平家物語』年表

天皇：崇徳 1141 近衛 1155 後白河 1158 二条 1165 六条 1168 高倉 1180 安徳 1183 後鳥羽

上皇：鳥羽 1156 崇徳 1164 …… 1158 後白河 二条 1165 六条 1176 （後白河） 1180 高倉 1181 （後白河）……（後白河院1192崩御）

年号（西暦）	事項 〔 〕内は関係巻名
長承元（一一三二）	3・13 平忠盛、昇殿を許される。11・23 忠盛に対する殿上の闇討ち事件〔1殿上闇討〕
久安二（一一四六）	2月 清盛、安芸の守となる〔1鱸〕
久安三（一一四七）	6月 延暦寺僧徒、忠盛・清盛を強訴。
保元元（一一五六）	7・10 保元の乱〔1鱸〕
平治元（一一五九）	12・9 平治の乱〔1鱸〕
永万元（一一六五）	7・29 延暦寺の大衆、清水寺を焼く〔1清水寺炎上〕
仁安二（一一六七）	2・11 清盛、太政大臣になる。5・17。辞任。
仁安三（一一六八）	2・11 清盛出家〔1禿髪〕
承安元（一一七一）	12・14 清盛の娘徳子入内。この年、鹿が谷で謀議開始〔1我身栄華〕
治承元（一一七七）	4・13 延暦寺衆徒、神輿を奉じ朝廷に強訴〔1御輿振、内裏炎上〕 5・29 鹿が谷の謀議露見〔2西光被斬〕 6・1 鹿が谷の変〔2新大納言流罪〕
治承二（一一七八）	11・12 安徳天皇生まれる〔3御産〕
治承三（一一七九）	8・1 重盛死去〔3医師問答（小松殿死去）〕 11・20 清盛、後白河法皇の院政を停止。鳥羽殿に幽閉〔3法皇被流〕
治承四（一一八〇）	2・21 安徳天皇即位〔4厳島御幸〕 5・10 頼朝、以仁王の令旨を受ける〔4源氏揃〕 6・2 福原遷都〔5都遷〕 8・17 頼朝、伊豆で挙兵〔5大庭早馬〕 9・7 木曽義仲の挙兵。 10・23 富士川の戦い〔5富士川合戦〕 12・28 平重衡、南都焼き打ち〔5奈良炎上〕
治承五（一一八一）	閏2・4 清盛死去〔6入道の死去〕
寿永元（一一八二）	9・9 義仲、横田河原で城長茂を破る〔6横田河原合戦〕
寿永二（一一八三）	5・11 義仲、倶利伽羅谷で平家軍を破る〔7倶利伽羅落〕 7・25 平家、安徳天皇を奉じ都落ち〔7主上都落〕〔7維盛都落〕 7・28 義仲入京〔8山門御幸〕 閏10・1 重衡、水島で行家を破る〔8水嶋合戦〕 11・29 重衡・知盛、室山で義仲を破る〔8室山合戦〕
寿永三（一一八四）	1・21 義仲、義経らに破れ、粟津で戦死〔9宇治川〕〔9木曽最期〕 2・5 三草山の戦いで義経、平資盛を破る〔9三草勢揃〕 2・7 一の谷の戦いで義経、平家軍に大勝〔9坂落〕〔9忠度最期〕 3・10 重衡、鎌倉へ護送〔10海道下〕
寿永四（一一八五）	2・18 屋島の戦いで義経勝利〔11嗣信最期〕 2・21 義経、平家軍と志度で戦う〔11志度合戦〕 3・24 義経、平家軍を壇の浦で破る。一族入水〔11壇浦合戦〕
文治元（一一八五）	6・21 宗盛、近江篠原で斬殺〔11大臣殿被斬〕 9月 建礼門院、寂光院に入る〔灌頂大原入〕 11・3 義経、都を出る〔12判官都落〕
文治二（一一八六）	4・20すぎ 後白河法皇、大原御幸〔灌頂大原御幸〕
建久二（一一九一）	2月 建礼門院死去〔灌頂女院死去〕

▲三条河原の清盛（平治物語絵巻）

一五八〇	モンテーニュ『随想録』(―八八)
一五九七	ベーコン『随筆集』第一巻
一六〇二	シェイクスピア『ハムレット』
一六〇五	セルバンテス『ドン・キホーテ』(―一五)
	ガリレイ『天文対話』
一六三六	コルネイユ『ル・シッド』(―三七)
一六三七	デカルト『方法叙説』
一六六四	ラ＝ロシュフコー『箴言』
一六六六	モリエール『人間嫌い』
一六六七	ミルトン『失楽園』
一六六八	ラ＝フォンテーヌ『寓話』(―九四)
一六六九	ラシーヌ『ブリタニキュス』
一六七〇	パスカル『パンセ』
一六七七	スピノザ『論理学』
一六七八	ラ＝ファイエット夫人『クレーブの奥方』
	バニヤン『天路歴程』(―八四)
一六八七	ニュートン『プリンキピア』
一六八八	ラ＝ブリュイエール『人さまざま』
一七一九	デフォー『ロビンソン・クルーソー』
一七二〇	ライプニッツ『単子論』
一七二六	スウィフト『ガリヴァー旅行記』
一七三〇	マリヴォー『愛と偶然の戯れ』
一七三一	プレヴォー『マノン・レスコー』
一七四八	モンテスキュー『法の精神』
一七四九	フィールディング『トム・ジョーンズ』
一七五一	グレイ『墓畔の哀歌』
	ディドロ、ダランベールら『百科全書』を発刊する(―七二)
一七五九	ヴォルテール『カンディド』
一七六〇	スターン『トリストラム・シャンデイ』
一七六一	ディドロ『ラモーの甥』
一七六二	ルソー『エミイル』
一七六四	ヴィンケルマン『古代美術史』
一七六六	ゴールドスミス『ウェイクフィールドの牧師』
	レッシング『ラオコオン』
一七七五	ボーマルシェ『セビリヤの理髪師』
一七七六	ギボン『ローマ帝国衰亡史』(―八八)
	アダム＝スミス『国富論』
一七七九	レッシング『賢者ナータン』
一七八一	シラー『群盗』

バルザック

Honoré de Balzac (一七九九―一八五〇)

フランスの小説家。

一八三〇	事業失敗・破産。
一八三一	『風流滑稽譚』(―三七)
一八三二	『ルイ・ランベール』
	『ツールの司祭』
一八三三	『ウージェニー・グランデ』
一八三四	『〝絶対〟の探求』
	『ゴリオ爺さん』(―三五)
一八三五	『谷間のゆり』
一八四六	『従妹ベット』
一八四七	『従兄ポンス』

バルザックは、二十年間にわたる大小九十編の小説を総合して「人間喜劇(コメディー・ユメーヌ)」と題した。それは小説群による十九世紀フランスの社会史を形づくろうとし、また科学的な観察や描写による社会分析や批判を意図したものであった。彼は「人間喜劇」を三つの部門にわけて、その数多い小説を類別している。一つは、人間の情熱の発現の結果おこる社会の種々相を描く「風俗研究」、二つはその原因を探求する「哲学的研究」、三つはそれの原理を示す「分析的研究」である。

「人間喜劇」の登場人物は二千人に及び、舞台はフランス全土にわたり、扱われた時代は大革命直後から二月革命直前に至る。題材は社会全般にまたがる人間のあらゆる営みがとりあげられている。とりわけ彼の作家的観点が個々の人間に据えられるのではなく、社会機構や階級的背景の描写分析に集中されているのが注目されるが、しかも作品としては、人間の普遍的な典型を鮮烈に創造しているのである。

ユゴーはバルザックの墓前で〝彼はすべての人から何かを引き出す。ある人からは幻影を、他の者からは希望を、また別の人からは情熱の叫びを〟と述べている。バルザックは科学的手法を小説の領域にとりいれ、題材を破格的に開拓し、小説の概念を拡大したが、それは同時に読者の心をも幅ひろく開かせたのであった。

ツルゲーネフ

Ivan S. Turgenev (一八一八―一八八三)

ロシアの詩人・小説家。

一八五一	領地内の農奴解放。年貢軽減など。
一八五二	『猟人日記』
一八五六	『ルージン』
一八五九	『貴族の巣』
一八六〇	『その前夜』『初恋』
一八六二	『父と子』
一八六七	『煙』
一八七一	『春の水』
一八七七	『処女地』
一八八二	『散文詩』

醜い容貌と歪んだ心をもったみなし子の娘が、幼時から虐待され侮蔑されて育った。成人後、ふとしたことから遺産がはいって、巨万の富と領地とを手に入れた。彼女は日々夫といがみあい、息子をいじめ、そして多勢の農奴や召し使いに、かつての自分の不幸をお返しするかのように残酷な刑罰を与えつづけてゆく。その女こそはツルゲーネフの母親であり、悲しみにみちた眼でこれをみつめていた少年がツルゲーネフであった。

〝ロシアでは周囲のすべてが、怒り、不安、嫌悪の情をもよおさせる〟といって、若いツルゲーネフは、ベルリンやパリに留学するが、やがて五〇年、横暴な母の死を機に領地に帰って、農奴を解放した。『猟人日記』の諸短編には、農奴制度に対する彼の戦いが、その知性と才能と詩心とのすべてを挙げて示されている。

〝私は自分の憎むものと同じ空気を吸っていることはできない。私の眼に、この敵ははっきりした形をもち、一定の名をもっている。それは農奴制度である〟

彼の祈りは、誇張のない自然描写、声を荒げない人間愛、そして静かな詩的憂鬱のなかに、かえって力強くひびくのである。アレクサンドル二世は、

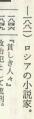
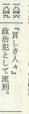
〝私は皇太子のころ、『猟人日記』を読んで、以来農奴を解放しようという一念を失ったことはなかった〟

と述べ、事実、彼は六一年にこれを廃止したのだった。

西暦	人名・書名〔事項〕
	カント『純粋理性批判』
	ペスタロッチ『ゲルトルード』
一七八二	ラクロ『危険な関係』
一七八七	サン＝ピエール『ポールとヴィルジニー』
一七八九	ブレイク『無垢の歌』
一七九一	ボズウェル『サミュエル・ジョンソン伝』
一七九四	コンドルセ『人間精神の進歩史』
一七九七	ヘルダーリン『ヒュペーリオン』(—九九)
一七九八	マルサス『人口論』、ラプラス『天体力学』
一七九九	ノヴァーリス『青い花』
一八〇一	ガウス『整数論』
一八〇八	ゲーテ『ファウスト』第一部
	クライスト『ペンテジレーア』
	フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』
一八一二	グリム兄弟『こどもと家庭のための童話集』
	バイロン『チャイルド・ハロルドの遍歴』
	ヘーゲル『大論理学』
一八一三	オースティン『自負と偏見』
一八一五	コンスタン『アドルフ』
一八一八	フランクリン『自伝』
一八一九	スコット『アイヴァンホー』
	アーヴィング『スケッチブック』
	ショウペンハウエル『意志と表象としての世界』
一八二〇	ラマルチーヌ『瞑想詩集』
	ホフマン『牡猫ムルの人生観』
一八二一	シェリー『アドネイース』
一八二二	グリルパルツァー『金羊毛皮』
一八二三	ラム『エリア随筆』(—三三)
	プーシキン『エヴゲニー・オネーギン』(—三〇)
	グリボエードフ『知恵の悲しみ』
一八二七	ハイネ『歌の本』
	ギゾー『ヨーロッパ文明史』
一八三〇	スタンダール『赤と黒』
	コント『実証哲学講義』
一八三三	カーライル『衣服哲学』
一八三四	ポー『黒猫』、ミュッセ『ロレンザッチョ』
一八三五	バルザック『谷間のゆり』
	アンデルセン『即興詩人』『童話集』
一八三九	レールモントフ『現代の英雄』

ドストエフスキー

Fjodor M. Dostoevskij (一八二一—一八八一) ロシアの小説家。

一八四六	『貧しき人々』
一八四九	政治犯として流刑。(—一八五四)
一八六一	『死の家の記録』(—一八六二) 『虐げられし人々』
一八六六	『罪と罰』
一八六八	『白痴』
一八七〇	『永遠の良人』
一八七一	『悪霊』(—七二)
一八七五	『未成年』
一八七九	『カラマーゾフの兄弟』(—八〇)

ドストエフスキーは、人間の内面的・心理的な矛盾と相克を追求して、近代小説に新しい可能性をひらいた。もともと彼の時代は、農奴制的圧政と資本主義的搾取の二重の抑圧に苦しむ貧しい人々と、革命的な思想をもつ都市知識人(雑階級人)とが、矛盾にみちた社会に生きていた過渡期であった。彼ははじめ空想的社会主義に接近していたが、政治犯として五年間のシベリア流刑の後は、人道主義による社会改造の可能性を否定し、人間の本性のなかに非合理な黒い実存の流れをみようとするようになった。しかも、作品は彼の意図をこえて、生きた人間の精神を奥底からゆさぶり、その毒はかえって閉ざされた状況における人間回復への強い願いを燃えたたせる機能をはたしてきたのであった。

『罪と罰』を論じた小林秀雄はこう言っている。

〃これは犯罪小説でも心理小説でもない。いかに生くべきかを問うた、或る「猛り狂った良心」の記録である〃

〃ただ「葦」であるには「考え」がありすぎ、ただ考えるには葦でありすぎる〃

〃ラスコーリニコフは監獄に入れられたから孤独なのでもなく、人を殺したから不安なのでもない。この影は、一切の人間的なものの孤立と不安を語る異様な背景を背負っている。……聞こえる者には聞こえるであろう。「すべて信仰によらぬことは罪なり」(ロマ書)と〃

トルストイ

Lev N. Tolstoj (一八二八—一九一〇) ロシアの思想家・小説家・劇作家。

一八五二	『幼年時代』
一八五三	クリミヤ戦争従軍。
一八六一	農奴解放令。
一八六八	『戦争と平和』(—六九)
一八七五	『アンナ・カレーニナ』(—七八)
一八八六	戯曲『闇の力』
一八九〇	『クロイツェル・ソナタ』
一八九九	『復活』
一九〇一	正教会から破門さる。
一九一〇	家出し、駅頭で死。

トルストイは一生を通じて霊と肉との相克に苦しみながらも求道の歩みをつづけた。ルソーが「自然に帰れ」と教えたことばを、彼は文字通り実践しようとし、地主貴族の生まれでありながら「百姓(ムジーク)の真実のみがロシアの救いである」として、大地によせる魂を忘れることがなかった。

一八八〇年代の末ごろ、ロザリヤという十六歳の乙女が、大学を卒業したばかりの青年に誘惑されたため、売笑婦に堕落し、ついに謀殺の容疑で入獄するという事件があった。トルストイはこれに心を動かされ、幾度か筆をとっては作品化しようとして果たさなかった。ところが九五年にドゥホボール教徒事件がおこった。ドゥホボール教徒とは、原始キリスト教の一派で、地上一切の権威を認めず、神のもとに無抵抗・同胞主義を守ろうとしていたため、ロシア政府はあらゆる迫害を加え、ついにコザック兵らをして彼らを殺害(一千余人)したのであった。しかも教徒らは信仰を堅持して変わらないので、政府は彼らに国外追放を命じた。けれども教徒らは旅費をもっていなかったので、トルストイは急いで作品を書きあげ、原稿料のすべてを、教徒らのカナダ移住費として提供したのであった。トルストイ晩年の大作『復活』はこうして生まれたのだが、トルストイの生活と文学とのありかたを彷彿とさせる話材といえよう。

年	作品
一八四〇	メリメ『コロンバ』、ヘッベル『ユーディット』
一八四一	エマーソン『エッセイ集』
一八四二	ゴーゴリ『死せる魂』
一八四三	ラスキン『近代画家論』
一八四四	デュマ『モンテ・クリスト伯』(—四五)
一八四七	サッカレー『虚栄の市』(—四八) **E＝ブロンテ『嵐が丘』** C＝ブロンテ『ジェーン・エア』
一八四八	ミシュレ『フランス革命史』 マルクス、エンゲルス『共産党宣言』 ミル『経済学原理』
一八四九	シュトルム『みずうみ』 キェルケゴール『死に至る病』
一八五〇	ホーソン『緋文字』、テニソン『イン・メモリアム』
一八五一	**メルヴィル『白鯨』**
一八五二	ストウ夫人『トム爺の小屋』、デュマ『椿姫』
一八五三	ケラー『緑のハインリヒ』
一八五四	ネルヴァル『火の娘』
一八五五	ホイットマン『草の葉』
一八五七	**フローベル『ボヴァリイ夫人』** **ボードレール『悪の華』**
一八五九	ゴンチャロフ『オブローモフ』 ディケンズ『二都物語』 ダーウィン『種の起原』
一八六一	エリオット『サイラス・マナー』
一八六二	**ユゴー『レ・ミゼラブル』、ツルゲーネフ『父と子』**
一八六四	**トルストイ『戦争と平和』**(—六九)
一八六五	キャロル『不思議の国のアリス』
一八六七	マルクス『資本論』(—九四)
一八六八	オールコット『若草物語』
一八七三	**ランボー『地獄の季節』**、ドーデー『月曜物語』
一八七六	マラルメ『半獣神の午後』 マーク＝トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』
一八七七	ゾラ『居酒屋』
一八七八	ファーブル『昆虫記』
一八七九	イプセン『人形の家』、H＝ジェイムズ「デイジー・ミラー」、**ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』**、 メレディス『我意の人』
一八八三	**モーパッサン『女の一生』**、リラダン『残酷物語』、 スティブンソン『宝島』、コルローディ『ピノキオの

モーパッサン

Guy de Maupassant (一八五〇—一八九三)
フランスの小説家。

年	事項
一八七二ごろ	役人生活のかたわら、フローベルに師事。
一八八〇	『脂肪の塊』
一八八一	『メゾン・テリエ』
一八八三	『女の一生』
一八八五	『ベラミ』
一八八八	紀行『水の上』 『ピエルとジャン』
一八八九	『死の如く強し』
一八九二	発狂して自殺未遂。翌年精神病院で死去。

『ボヴァリイ夫人』の作者フローベールは、フランス自然主義文学の第一人者であったが、その唯一の弟子は「わたしのギイ」と呼んでいたモーパッサンである。フローベルはギイに、

〃この世の中には、石ころ一つでも、まったく同じものはない。その石がその石以外のものではないことを的確に表現せよ〃

という意味のことを厳格に指導した、とモーパッサンは『ピエルとジャン』の序文に書きとどめている。

この厳格で慈愛深い師が、はじめて激賞して「後世に残る名作だ」と喜んだのが『脂肪の塊』であった。そしてこの作品が発表され、弟子が名声を得た年に、フローベルは死んでいる。

モーパッサンの母ロオラは、フローベルの幼な友だちであった。彼女は芸術に理解が深く、わが子の天分を存分に発揮させるためにフローベルに指導を頼んだのであった。女性の不幸な運命を描いて驚異的な反響を呼んだ『女の一生』の、女主人公のジャンヌにはその母の一面が投影しているし、その自然描写には母と少年時代を送ったエトルタ地方の風物が美しくとりあげられているといわれている。

彼が死ぬ前、老母に心配させまいと、わざと元気なふりで書き送った手紙は、人の心を打つものがある。

ロマン＝ロラン

Romain Rolland (一八六六—一九四四) フランスの小説家・劇作家・思想家。

年	事項
一九〇三	『ベートーヴェンの生涯』
一九〇四	『ジャン・クリストフ』(—一二)
一九一三	戯曲『信仰の悲劇』
一九一五	ノーベル文学賞受賞。
一九二二	『魅せられたる魂』(—三四)
一九二五	戯曲『愛と死の戯れ』
一九三五	評論『闘争の十五年』
一九四二	自伝『内面の旅路』

われらに光と空気を与えよ。われらの魂を解放せしめよ。――虚偽と停滞とに対して苦闘しつつ、真実にむかって羽ばたこうとする自由な魂、太陽の子としての孤独をいだきつつ、新旧両時代のかけ橋となろうとする魂、それがジャン・クリストフの魂である。

〃わたしは存在の一切ではない。わたしは虚無と戦う生命なのだ。夜のうちに燃えるほのおなのだ。わたしは夜ではない。永遠の戦いなのだ。わたしは永遠に戦う自由意志なのだ。さあ、わたしといっしょに戦うがよい。燃えるがよい〃

〃汝、死すべきものよ、神をさしてゆけ。汝、苦しむべきものよ、苦しみにゆけ。人は幸福であるために生きているのではない〃

神はクリストフにこう教え、クリストフはわれわれにこう呼びかける。そして、そこにロマン＝ロランの生きかた――苦悩と戦いとのなかから喜びと創造がうみだされ、犠牲と死をこえて生への解放と飛躍が約束される生きかたが示される。

〃死して生まれよ！〃と、ロランは言う。〃前進する生命。死のなかにおいてすら、わたしたちは前方にいるであろう〃

『ジャン・クリストフ』の主人公も、『魅せられたる魂』のアンネットも、ロランの「生の夢」であった。

西暦	人名・書名〔事項〕
	冒険』、ガルシン『紅い花』 ニイチェ『ツァラトストラはかく語りき』(—一八八五) ベーベル『婦人論』
一八八六	デ=アミーチス『クオレ』
一八八八	ストリンドベリ『令嬢ジュリー』
一八八九	ブールジェ『弟子』、ハウプトマン『日の出前』
一八九〇	ハムスン『飢え』
一八九一	ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』、ハーディ『テス』、W=モリス『無何有郷だより』
一八九三	ルナール『にんじん』 シュニッツラー『アナトール』
一八九四	キプリング『ジャングル・ブック』 ダヌンツィオ『死の勝利』
一八九六	シェンキヴィチ『クオ・ヴァディス』
一八九七	ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』
一九〇〇	シュニッツラー『輪舞』 フロイト『夢判断』
一九〇一	シェストフ『悲劇の哲学』
一九〇二	ゴリキー『どん底』
一九〇三	バーナード=ショー『人と超人』、ロンドン『荒野の呼び声』、チェホフ『桜の園』
一九〇四	ロマン=ロラン『ジャン・クリストフ』(—一九一二) バリー『ピーター・パン』
一九〇六	ヘッセ『車輪の下』
一九〇七	アルツィバーシェフ『サーニン』
一九〇八	バルビュス『地獄』、メーテルリンク『青い鳥』
一九〇九	ジッド『狭き門』、ウェルズ『トーノ・バンゲイ』
一九一〇	リルケ『マルテの手記』
一九一二	フランス『神々は渇く』
一九一三	プルースト『失われた時を求めて』第一巻
一九一五	モーム『人間の絆』
一九一六	カフカ『変身』、サンドバーグ『シカゴ詩集』、ジョイス『若き芸術家の肖像』
一九一七	ヴァレリー『若きパルク』
一九二〇	マルタン=デュ=ガール『チボー家の人々』(—一九四〇) A=トルストイ『苦悩の中を行く』(—一九四一) チャペック『ロボット』 アラン『芸術論集』
一九二一	ハシェク『兵士シュベイクの冒険』(—一九二三)

ジッド

André Pual Guillaume Gide（一八六九—一九五一）フランスの小説家・批評家。

一八九一	『アンドレ・ワルテルの手記』
一八九五	『パリュード』
一九〇二	『背徳者』
一九〇九	『狭き門』
一九一四	『法王庁の抜け穴』
一九一九	『田園交響楽』
一九二〇	『一粒の麦もし死なずば』
一九二六	『贋金つくり』
一九四七	ノーベル文学賞受賞。

『田園交響楽』のなかで、盲目の少女ジェルトルードは、その目が開いたとき、こう告げる。

〝あなたのおかげで視力があたえられたとき、眼の前に開けた世界は、あたしが想像していたより、ずっと美しいものでした。ほんとに日の光がこうも明るく、風がこうも清らかで、空がこうもひろびろとしていようとは夢にも思っていませんでした。けれどもまた、人間の額がこうまで憂いにみちていようとは、決して想像していませんでした〟

キリストは〝もし盲（めしい）なりせば罪なかりしならん〟と言ったが、ジッドは福音書の自由解釈による、生きかたの悲劇を、少女に託して提示している。だが、問題は『背徳者』のミシェルの自己崩壊や、『狭き門』のアリサの自己犠牲のありかたとともに、無解決のまま対比されているのである。

ジッドの精神形成には、宗教的・哲学的に複雑な要素が混じっていて、作品の真意をとらえにくいといわれている。そして、それは人間性の自由を誠実に追求しつづけたジッドが、絶対を把握したなどと軽々しく信ずることなく「断片的真理」を通じて「絶対」に近づこうと努力したあかしであろう。

ジッドの作品は、問題解決のための討論ではなく、問題についての生きた観点であったのである。

モーム

William Somerset Maugham（一八七四—一九六九）イギリスの小説家・劇作家。

一八八四	孤児となる。
一八九七	医師の資格をとる。
一九一三	『人間の絆』(—一五)
一九一九	情報部で諜報活動。
一九一九	『月と六ペンス』
一九二一	『木の葉のそよぎ』
一九二九	『アシェンデン』
一九三〇	『お菓子とビール』
一九三八	随想『要約すると』
一九四四	『剃刀の刃』
一九四九	『作家の手帳』

モームの作品は、一般に通俗性に富むといわれる。それは表現が平明・単純であり、機知や皮肉を十分に生かした、いわば現代の風俗喜劇ともいうべき性質をそなえているためである。

モーム自身、回想に〝わたしは二〇代には残忍、三〇代には軽薄、四〇代には皮肉屋、五〇代にはちょっといける、六〇代には皮相、と評された〟（一九六二）と書いている。だが、彼の通俗性とは、人間存在の不可解な根元を直視したうえでの、東洋的な余裕といってよいものであろう。

モームが、余裕ぬきの真剣な気がまえで書いたものに『人間の絆』がある。

スピノザが『エティカ』に〝人が情念を支配し制御し得ない状態を、きずなに縛られた状態とよぶ〟と言っているが、この作品の題名はここから出ている。そういう絆に縛られた主人公ケアリが、どのような体験と苦悩とを経て成長し、一人の自由のあるじとなることができたか、という精神的自伝がこれである。もっとも、ケアリにとっての絆とは、人生の幸福という幻影への空しい追求であった。そして彼がその追求に敗れて到達した自由とは、これまで考えていたあらゆる価値の空しさの自覚にほかならなかった。——モームが、彼自身のカタルシス（浄化）のために書いたものである。

年	作品
一九二三	ピランデルロ『作者を探す六人の登場人物』 ジョイス『ユリシーズ』、エレンブルグ『フリオ・フレニト』、T・S・エリオット『荒地』
一九二四	ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』、トーマス・マン『魔の山』、オニール『楡の木蔭の欲情』
一九二五	ウルフ『ダロウェイ夫人』 ドライサー『アメリカの悲劇』
一九二七	モーリヤック『テレーズ・デケイルウ』 ハイデガー『存在と時間』
一九二八	ロレンス『チャタレー夫人の恋人』、ショーロホフ『静かなドン』(—四〇)、ブレヒト『三文オペラ』
一九二九	コクトー『恐るべき子供たち』、フォークナー『響きと怒り』、T・ウルフ『天使よ、故郷を見よ』、レマルク『西部戦線異状なし』
一九三〇	ドス・パソス『U・S・A』
一九三一	サン＝テグジュペリ『夜間飛行』、パール・バック『大地』 イリフ＝ペトロフ『黄金の仔牛』
一九三二	モーリヤック『蝮のからみあい』 コールドウエル『タバコ・ロード』 オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』(—三四)
一九三三	マルロー『人間の条件』、カロッサ『指導と信従』 トインビー『歴史の研究』
一九三四	H・ミラー『北回帰線』
一九三六	モンテルラン『若き娘たち』、ヘミングウェイ『キリマンジャロの雪』、ミッチェル『風と共に去りぬ』
一九三八	サルトル『嘔吐』
一九三九	スタインベック『怒りの葡萄』
一九四〇	ヘミングウエイ『誰がために鐘は鳴る』 ケストラー『真昼の暗黒』
一九四二	カミュ『異邦人』
一九四三	サルトル『存在と無』
一九四五	ファジェーエフ『若き親衛隊』
一九四六	イリイン『人間の歴史』
一九四七	T・ウィリアムズ『欲望という名の電車』
一九四八	グリーン『事件の核心』、メイラー『裸者と死者』
一九四九	アラゴン『レ・コミュニスト』(—五一)、ジュネ『泥棒日記』、A・ミラー『セールスマンの死』、ゲオルギュ『二十五時』 ボーヴォワール『第二の性』
一九五一	サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』

ヘッセ

Hermann Hesse (一八七七—一九六二)
ドイツの詩人・小説家。

一九〇四	『ペーター・カーメンツィント(郷愁)』
一九〇六	『車輪の下』
一九一〇	『ゲルトルート(春の嵐)』
一九一四	『ロスハルデ』
一九一五	『クヌルプ』
一九一九	『デーミアン』
一九三〇	『知と愛』
一九四三	『ガラス玉演戯』
一九四六	ノーベル文学賞受賞。

『郷愁』は、ヘッセを作家として世に出した作品である。主人公のペーターは、都会文明に幻滅し、心のふるさとを自然のなかに見いだす。この、自己に忠実な生きかたを模索する、孤独な魂のもちぬしは、そのままヘッセの姿を投影したものであり、その後のヘッセの作品の基本的な性格となってもいる。

ヘッセには『孤独者の音楽』(一九一四)と題する詩集があるが、彼の小説のすべては「孤独者の告白」と呼んでいいかもしれない。

現在までの最上のヘッセ論といわれるクルチウスの批評によると、ヘッセの小説は主観の世界にのみ安住し、表現もうまくないなどといわれている。その点は認めるとしても、ヘッセ自身の

〝私は本来小説家ではない。小説とはもともと人間行為の表現である。しかし私は孤独な一個の人間を表現したいのだ〟

ということばはその作風を端的にあらわしている。

〝私の課題は、客観的に最上のものを示すことではなくて、自分のものを(それが悩みにすぎぬにせよ、嘆きにすぎぬにせよ)、できるだけ純粋に誠実に示すことである〟

〝人間の真の天職は自分自身に達することである〟

というところに、ヘッセの姿勢がとらえられよう。

ヘミングウエイ

Ernest Hemingway (一八九九—一九六一)
アメリカの小説家。

一九一八	北伊戦線で重傷。
一九二六	『日はまた昇る』
一九二七	『殺し屋』
一九二九	『武器よさらば』
一九三六	『キリマンジャロの雪』 スペイン内乱参加。
一九四〇	『誰がために鐘は鳴る』 約十年間戦争に参加。
一九五二	『老人と海』
一九五四	ノーベル文学賞受賞。
一九六一	猟銃による死。

『キリマンジャロの雪』の冒頭にこうある。

〝キリマンジャロは高さ一九七一〇フィートの雪に覆われた山で、アフリカ大陸の最高峰といわれている。西側の頂上はマサイ語で〈神の家〉と呼ばれている。この西側の頂上に近くひからびて凍りついた豹の死体が横たわっている。こんな高みにまで豹が何を求めてやってきたのか、誰も説明できるものはいない〟

ヘミングウエイの作品の基本的な主題は、原始的な力強さをもつ人間の意志と情熱とが、それをはばむ運命の抵抗とたたかうところにある。それはほとんど死を素材とし、死と対決する生命の火花が主題を強めるかたちとなって示される。

ヘミングウエイは「失われた世代」の代表作家とされ、その文体はハードボイルドと呼ばれた。伝統から断絶し、非情に耐え、現実の奥底に虚無を認める精神的姿勢がそこにあった。彼は、人間のもっとも見事で激烈な行動でさえ、運命の沈黙の力の前では、はかなく消え去ってゆくものだとする。人間は本質的にはすべて敗北者なのである。ただ——人間の人間たる価値は、敗北に直面していかにふるまうか、にかかっている。敗北とは、決して屈服ではないのだ——。

晩年の『老人と海』は、彼の主題を、古典的象徴の域に達する迫力で表現したものと評されている。

西暦	人名・書名〔事項〕
一九五二	ゴールディング『蠅の王』
一九五四	サガン『悲しみよこんにちは』
	エレンブルグ『雪どけ』（一五五）
一九五六	パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』
	オズボーン『怒りをこめて振り返れ』
一九五七	ケロアック『放浪』
一九五九	ロス『さようなら、コロンブス』
一九六〇	アプダイク『走れうさぎ』
一九六一	アクショーノフ『星の切符』
一九六二	ボールドウイン『もう一つの国』、ソルジェニーツィン『イワン・デニーソヴィチの一日』
一九六五	クノー『青い花』
一九六六	ナボコフ『絶望』
一九六八	ユードック『ブルーノの夢』
一九七〇	ボルヘス『ブロディーの報告書』

▲映画『悲しみよこんにちは』の一場面

サン＝テクジュペリ Antoine de Saint-Exupéry（一九〇〇—一九四四）フランスの小説家

一九二〇	航空隊に入る。
一九二六	定期空路操縦士となる。
一九二九	『南方郵便機』
一九三一	『夜間飛行』
一九三九	『人間の土地』
	第二次大戦に従軍志願。
一九四二	『戦う操縦士』
一九四三	童話『星の王子さま』
一九四四	基地から出撃したまま消息を絶つ。

『星の王子さま』の作者サン＝テクジュペリは、すぐれた飛行操縦士であった。彼は古武士的な精神と、英雄的な行動とを、その文学作品に結晶させた。

〝ぼくは信じる、自分がもし炭坑夫だったら、必ずや地下に人生の教訓を掘り出そうと努力したはずだと。つまり、ぼくにあっては、飛行機は、目的でなく手段だ。自分を作りあげる手段だ。農夫が鋤を用いて畑を耕すように、ぼくは飛行機で自分を耕すだけだ〟

と彼は言っている。そして、彼にとって「自分を耕す」とは、人間の尊厳の意味を問い、人間の高貴さを立証すること、つまり行動の倫理の追求であった。そしてさらに、倫理の根底をなすものは、人道的大義のために自己を滅却する姿勢であった。

〝たとえ、それがどんなに小さかろうと、ぼくらが自分たちの役割を認識したとき、はじめてぼくらは平和になれるのだ。そのとき初めて、ぼくらは平和に生き、平和に死ぬことができるのだ。生命に一つの意味を与えるものは、死にも一つの意味を与えるはずだから〟

〝命を軽んじることを、たいしたことだとは思わない。その死がもし、自分が引きうけた責任観念に深く根ざしていない限り〟

人間の幸福は、自由の中に存するのではなく、義務の甘受の中に存する、と語って、彼は戦死したのである。

スタインベック John Steinbeck（一九〇二—一九六八）アメリカの小説家。

一九〇二	カリフォルニア生まれ。
一九三二	『天の牧場』
一九三五	『トーティア・フラット』
一九三六	『勝算なき戦い』
一九三七	『二十日鼠と人間』
一九三九	『怒りの葡萄』
一九四二	『月は沈みぬ』
一九四七	『気まぐれバス』
一九五二	『エデンの東』
一九六二	ノーベル文学賞受賞。

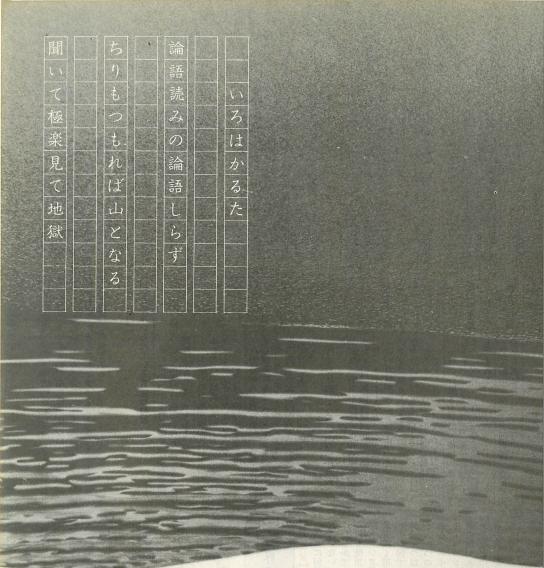
スタインベックは、生まれ育ったアメリカ西部の自然や人間を素材とし、海洋生物学研究から生まれた人間観を骨格として、その作品を形成しているといえよう。彼の作品の基調となっているのは、人間の生命本能に対する愛情と、それを抑圧するものへの怒りであり、その描きかたは、具体的な事物を写実的に描写しながら、その背景となる世界観や人間観を象徴的に描きこんでゆくという、奥行きと展望をもたせたものとなっている。

こうしたスタインベックの特徴を、もっともよくあらわした作品が『怒りの葡萄』である。

『怒りの葡萄』は、旧約聖書の「出エジプト記」とその続編にもとづいた構成により、土地を失ったオクラホマの貧農一家の悲劇的運命を描いている。砂塵という天災と機械化されたトラクター耕作に追われた一家が、父祖の地を捨てて長途カリフォルニアに移住するが、その地も、百万エーカーを所有する一人の地主のために十万の農民が飢える地獄にすぎなかった。カ州の沃野に実を結んだのは悲惨な農民たちの「怒りの葡萄」であった。こうした内容を、作者は冷静非情な筆致で浮きぼりにしてゆく。特徴的なのは、奇数章は全部物語の背景条件を説明し、偶数章で人物や事件や筋をとりあげていることで、荒けずりの行動的流動的な表現手法とともに、この作品に立体化された緊迫感と展望をもたらしている。

言語の概説

言語

【言語とは】

広い意味では動物も言語(ことば)をもっているといわれるが、狭い意味の「言語」は人類に特有のものである。学問上の言語とは、口で話して耳で聞く**音声言語**（話しことば）を主としてさし、手で書いて目で読む**文字言語**（書きことば)をも含むのが普通である。音声言語は、一回限りの個人的、個別的な要素を有するとともに、その人の属する集団に共通の社会習慣的要素をもっている。

【言語の構造】

言語の発音運動や音声には、音素・音節・アクセント素などの社会習慣的要素がある。これらの要素を総称して「**音韻**」といい、その構造体系を音韻体系という。

話し手が相手に伝えようとする直接経験(意識内容)のことを「**意味**」という。一定の音声に一定の意味が連合するという社会習慣があるので、聞き手は「了解する」ことができるのである。

文は、「**単語**」によって構成され、「**音調**」（イントネーション）がこれに加わっている。単語は、その形や職能や構成法などに従ってこまかく分析・分類・体系化される。一つの言語における単語の総体を「**語彙**」という。

【言語の機能】

人類の音声言語は複雑な構造と体系をもち、すぐれた記号性をそなえている。

音声以外の記号として最も重要なものは文字言語である。どんな未開の種族でも音声言語を有しないものはないが、文字言語を有しない種族は少なくない。また自分の言語とはまったく違った外国語を文字言語として用いる例も多い。

限られた地域に固有の「方言」のほかに、「共通語」(あるいは標準語）が広い地域に普及していることがある。また世界の多くの言語の中には、「国際語」として広く用いられるものがある。さらに、人工的に作った言語を「国際補助語」として用いようとする運動もある。エスペラント語はその例である。

【言語の種類】

○社会で用いられている言語の種類

種類	説明
自然語	その民族の中で自然に発達した言語。一定の民族だけに用いられているときは民族語とよぶこともある。
混合語	二つ以上の自然語が混合して用いられるもの。中国語に英語・ポルトガル語・マライ語などを加えたピジン・イングリッシュや、わが国の外来語多用など。
半人工語	自然語を人工的に整理、簡略化して特別の使用にあてようとするもの。オグデンの「ベイシック・イングリッシュ」（八五〇語・一九三〇年）や、土居光知氏の「基礎日本語」(一一〇〇語・一九四三年)など。
人工語	特定の目的のため人工的に作られた言語。(1)国際補助語—国際的な共通性を意図したもの。規則的な図式派言語（エスペラントやイドなど）と、自然語の形に近い自然派言語（科学用のインテルリングワなど）がある。(2)プログラミング言語—コンピューター操作のため作られた言語。機械語、アセンブリー言語、コンパイラー言語など。
身ぶり言語	からだの動きや表情で情報伝達をおぎなうもの。サイン言語、身体言語ともいう。耳の聞こえぬ人への手話法、指話法も含まれる。
視覚言語	見てわかる言語。交通標識、各種の表示マークなど。

○語法による言語の種類

種類	説明
孤立語	単音節語で語形変化がない。単語の順序が文法上の役割をする。中国語・チベット語・ビルマ語。
屈折語	語尾変化・活用・語幹変化などで文法上の関係を示す。英語・フランス語・ドイツ語・ロシヤ語
膠着語（こうちゃく）	付属語・接辞などで単語をつなぐ。日本語・朝鮮語・トルコ語・ツングース語・蒙古語など。
抱合語	接辞や目的語などが抱き合わされて一単語となるもの。アイヌ語・アメリカインディアン語。
集合語	抱合語のさらに甚だしいもの。エスキモー語・アステック語など。

世界の言語

【その状況】

世界に何種類の言語があるか、正確な調査はまだなされていない。約二千五百種類をはるかに超えていることはたしかである。

最も使用人口の多い言語は中国語（約七億)、ついで英語とロシア語(共に二億五千)といわれる。国際語として最も広く用いられるのは英語である。

その国で公式に用いる言語(公用語)を「**国語**」というが、二つ以上の言語を国語とする国も少なくない。また一方一つの言語が多くの国で国語として用いられる例もある。スイスでドイツ語・フランス語・イタリア語・レト＝ロマン語の、四つの公用語が認められているのは前者の例であり、スペイン語がアルゼンチン、ボリビア、チリなど中南米の二十か国で公用語となっているのは後者の例である。

【世界の語族】

世界の言語を、一つの祖語から分かれたと証明できる、いわゆる同系語に分類したものを、「語族」という。語族の分類は、諸種の困難や考え方のちがいなどから、専門家によりまちまちであり、研究も十分に進んではいない。分類の一例を示せば次の通りである。

(1)インド・ヨーロッパ語族
(2)セム・ハム語族
(3)ネグロ・アフリカ語族
(4)ウラル・アルタイ語族
(5)シナ・チベット語族
(6)アウストロネシア語族
(7)アメリカ・インディアン語族

【世界における日本語】

日本語は、一つの国において用いられている唯一の言語であって、世界でも珍しい例である。日本語が世界のどの語族に属するかについては、まだ明らかではない。古代日本語の特色の①語頭にラ行音・濁音がない、②母音調和、③音節が母音で終わる、④接尾語や活用、⑤語順などの点を考えて、チベット語派、ビルマ語派、マライ・ポリネシア語派などと類似しているとする説があるが、法則性の発見にまでは至っていない。近年は、朝鮮語やウラル・アルタイ諸言語との親近性が特に強く主張されている。

世界の文字

【文字の種類】

世界で用いられている文字の種類は約五〇とされる。

文字を大別すると、アルファベット式文字(ローマ字・かななど)と、非アルファベット式文字(漢字・楔形文字など)とになる。アルファベット式文字は表音文字(音標文字)とも呼ばれ、これはさらに音節文字(かなのように一字が一音節をあらわすもの)と、音素文字(ローマ字のように、音素である母音や子音をあらわすもの)とにわけられる。非アルファベット式文字は、きまった音のほかに意味をもそなえているので表意文字(表語文字、単語文字と呼ぶこともある)とよばれる。表意文字は、単語のそれぞれをあらわす文字が必要であるため、文字の数が非常に多くなるが、表音文字は、ことばの音の種類が多くないため、用いられる文字の数も限られてくる。

たとえば表音文字のローマ字は52字、ロシア文字は64字、ギリシア文字は49字(いずれも大文字と小文字との合計)にすぎないが、表意文字(漢字)の場合、中国では当用漢字にあたるものを二千字示している。日本も大体同程度を必要としている。

日本では漢字のほかにかたかな、ひらがな、ローマ字などの表音文字を併用している。朝鮮では母音文字10、子音文字14を組みあわせたハングル(諺文)とよぶ音節文字を専用とする方針を出しているし、中国でも人民文字と呼ぶ簡略体漢字を公布し、ローマ字を補助文字として公式に用いることになっている。

【文字の発達】

絵を用いて言語をあらわした絵文字から、象形文字や楔形文字が発達したといわれる。金石文字・甲骨文字から生まれた漢字や、エジプトの神聖文字は象形文字であり、古代近東で粘土板に彫られたのが楔形文字である。

神聖文字を母胎としたエジプト文字(フェニキヤ文字)はアルファベット式文字の祖先である。エジプト文字の系統からアラム文字(シリヤ文字・アラビア文字・インド文字を生んだとされる)・ヘブライ文字が生まれ、また、このフェニキヤ文字と深い関係をもつギリシャ文字がBC10世紀ごろに整備され、24の音素文字を確立した。現在のアルファベット式文字の代表であるローマ字は、ギリシャ文字の系統をひくラテン文字から生まれたものである。

○絵文字(表意文字)

	中国古文	ヒッタイト文字	エジプト文字	シュメール文字
人				
牛				
空				
星				
太陽				
水				
木				
家				
道				
町				

○漢字(表意文字)

甲骨	金文	篆書	隷書	楷書	行書	草書
			人	人	人	人
			馬	馬	馬	馬
			木	木	木	木
			刀	刀	刀	刀
			皿	皿	皿	皿
			鳥	鳥	鳥	鳥
			旅	旅	旅	旅
			幸	幸	幸	幸

○アルファベット式文字

エジプト 文字	音価	フェニキア 文字	音価	古典ギリシャ 文字	音価	古ラテン 文字	音価	アラビア 文字	音価
𓄿	'a	𐤀	'	Α	a	A	a	ا	'
𓇋	i.j	𐤁	b	Β	b	(B)	(b)	ب	b
𓂝	'a	𐤂	g	Γ	g	C	c	ت	t
𓅱	w	𐤃	d	Δ	d	D	d	ث	t̲
𓃀	b	𐤄	h	Ε	e	E	e	ج	ǧ
𓊪	p	𐤅	w			F	f	ح	ḥ
𓆑	f	𐤆	z	Ζ	z	日	h	خ	ḫ
𓅓	m	𐤇	ḥ	Η	ē	I	i	د	d
𓈖	n	𐤈	ṭ	Θ	th	K	k	ذ	d̲
𓂋	r	𐤉	y	Ι	i	L	l	ر	r
𓉔	h	𐤊	k	Κ	k	M	m	ز	z
𓎛	ḥ	𐤋	l	Λ	l	N	n	س	s
𓐍	ḫ	𐤌	m	Μ	m	O	o	ش	š
𓄡	h̲	𐤍	n	Ν	n	Γ	p	ص	ṣ
𓊃	s	𐤎	s	Ξ	x	Ϙ	q	ض	ḍ
𓋴	s'	𐤏	'	Ο	o	P	r	ط	ṭ
𓈙	š	𐤐	p	Π	p	S	s	ظ	ẓ
𓈎	q	𐤑	ṣ			T	t	ع	'
𓎡	k	𐤒	q	Ρ	r	V	u	غ	ġ
𓎼	g	𐤓	r	Σ	s	Y	v	ف	f
𓏏	t	𐤔	š	Τ	t	+	x	ق	q
𓍿	t̲	𐤕	t	Υ	u			ك	k
𓂧	d			Φ	ph			ل	l
𓆓	d̲			Χ	kh			م	m
				Ψ	ps			ن	n
				Ω	ō			ه	h
								و	w
								ي	y

○楔形文字

元来の絵文字	ジェムデト・ナスル文字	古代バビロニア	アッシリア文字	
				鳥
				魚
				ろば
				牛
				太陽
				すき
				足

○ハングル(諺文(おんもん))

子音字

字母	音価	字母	音価	字母	音価
ㄱ	g	ㅅ	s	ㅍ	p
ㄴ	n	ㅇ	',ŋ	ㅎ	h
ㄷ	d	ㅈ	j		
ㄹ	r	ㅊ	c		
ㅁ	m	ㅋ	k		
ㅂ	b	ㅌ	t		

母音字

字母	音価	字母	音価	字母	音価
ㅏ	a	ㅗ	o	ㅡ	w
ㅑ	ya	ㅛ	yo	ㅣ	i
ㅓ	ə	ㅜ	u		
ㅕ	yə	ㅠ	yu		

○ローマ字の変遷

		𐤀	A	Α	ɑ	A
		𐤁	8	B	B	B
		𐤂	˥	Γ	Γ	G
		𐤃	△	Δ	Δ	D
		𐤄	Ǝ	Є	Є	E
		𐤆	I	Z	ʒ	Z
		𐤊	ꓘ	K	K	K
		𐤋	˥	λ	Λ	L
		𐤌	M	M	M	M
		𐤍	И	N	N	N
		𐤏	o	O	O	O
		𐤐	˥	Π	Π	P
		𐤓	4	P	P	R
		𐤔	3	C	C	S
		𐤕	T	T	T	T

○インド系譜文字

	アショーカ	グプタ	北インド デーヴァ・ナーガリー	北インド グジャラーティー	北インド ベンガーリー	北インド オリヤー	南インド カナラ	南インド テルグ	南インド タミル	チベット	ビルマ	タイ	カンボディア	ジャワ	マカッサル	バタク
a	𑀅	𑀅	अ	અ	অ	ଅ	ಅ	అ	அ	ཨ	အ	อ	អ	ꦄ	𑻱	ᯀ
ka	𑀓	𑀓	क	ક	ক	କ	ಕ	క	க	ཀ	က	ก	ក	ꦏ	𑻠	ᯂ
ta	𑀢	𑀢	त	ત	ত	ତ	ತ	త	த	ཏ	တ	ต	ត	ꦠ	𑻦	ᯖ
pa	𑀧	𑀧	प	પ	প	ପ	ಪ	ప	ப	པ	ပ	ป	ប	ꦥ	𑻣	ᯇ
ya	𑀬	𑀬	य	ય	য	ଯ	ಯ	య	ய	ཡ	ယ	ย	យ	ꦪ	𑻬	ᯛ

○いろいろな文字

（ギリシアの文字）

Σῆμα πατὴρ Κλειβούλος ἀποφθιμένω
Ξενοφάντῳ θῆχε τόδ' ἀντ' ἀρετῆς σαοφροσύνης.

（フェニキアの文字）

（アラビアの文字）

استطن الجمهوريه العربيه طلاله
دافريقيا الجنوبيه بريتوريا شتلا يكيبو

（エジプトの文字）

KL E O P A TR A

（ロシアの文字）

Как молоцой Добрыюишка Никитинец,
かの若き勇士　ダブルイニヤ=ニキーチッチのように，
Он хоцил-гулял по чистому полю,
彼は　きれいな野原を　歩きまわった。

（バビロニアの文字）

i	m	mat	kak	ut
天	地	家	仕事	太陽

（中国の簡略字体）

个(個)门(門)马(馬)车(車)冈(岡)见(見)气(気)
长(長)仆(僕)叶(葉)汉(漢)动(動)权(権)后(後)
伞(傘)农(農)寻(尋)买(買)进(進)坏(壊)认(認)
泪(涙)怜(憐)练(練)钟(鐘)复(復)笔(筆)虑(慮)

日本語

【日本語の特色】

日本語は、日本の民族語であると同時に、公用語であり、国語(国家語)である。その言語の系統はまだ不明で、どの語族と関係をもっているかはっきりしていない。

○音韻上の特色

①音韻の種類がすくない。
②言語音の単位は音節である。
③音節の構造が単純。一母音、または一子音と一母音から成る(開音節とよぶ)。
④一音節を一拍とかぞえる(リズムが単調)。
⑤「ン(撥音)」「ツ(促音)」を一音節とする。
⑥清音・濁音の意識がある。
⑦アクセントは音の強弱によるものではなく、音の高低による。
⑧発音するとき、唇の開閉がすくない。

○語彙上の特色

①同音語・同義語が多い。また、擬声語・擬態語や畳語が多い。
②助数詞が発達している。
③女性だけが使うことば(女房ことば・女ことば)が発達している。
④古い和語よりも漢語外来語が多い。

○文法上の特色

①単語に自立語と付属語とがある。(膠着語・付着語とよばれる)
②体言は語形変化をしないし、性別や単数・複数の区別も厳密ではない。また、前に冠詞がつかない。
③用言は活用があって語形変化する。(助動詞も。)
④文中の単語の順序はかなり自由。ただし原則的には、ⓐ主語のあとに述語がくる、ⓑ修飾語は被修飾語の前にくる、ⓒ目的語・補語は、主語と述語との間にくる、ⓓ文の種類(疑問文・命令文・感嘆文など)によって単語の順序をかえなくてよい、ⓔ打消・推量などの付属語が文末にくるので、終わりまで聞かないと区別がし難い、などの特色がある。
⑤主語の省略されることが多い。
⑥敬語法が発達している。

○表記法の特色

①表意文字(漢字)と表音文字(かたかな・ひらがな・ローマ字)とをまぜて用いる。使用文字数が多い。
②漢字の多くには、音と訓のよみかたがある。また書体には楷書・行書・草書の三体がふつう用いられる。
③正書法がまだ確立していない。
④分かち書きはふつう行われない。
⑤書式は縦書きも横書きも行われている。

【方言・共通語】

言語が、社会的・地理的条件によって分化し、音韻・文法・語彙の上で相違のあるいくつかの言語の集団にわかれたとき、その集団の全体をさして方言という。一般的には、標準語に対して地方語をいい、また特殊な単語や言いまわしだけを方言とよぶが、学問的には、ある地域に行われる言語全体をさしているので、他の地域の言語と同じ部分も含められる。

異なった方言を用いている人々の間に用いられる共通の言語を**共通語**という。各地方の政治や文化の中心地の言語がその地方の共通語となりがちである。全国的に共通する共通語は東京語である。共通語は自然発生的なものであるから、そのままの形では標準語とはいえない。標準語は、共通語を人為的に改良・統一し国家が制定する理想的な言語であるが、わが国にはまだ標準語はきまっていない。

○日本の方言区画 （東条操『国語の方言区画』による）

- 本土方言
  - 東部方言
    - 北海道方言
    - 東北方言（北奥方言、南奥方言）
    - 関東方言（東関東方言、西関東方言）
    - 東海・東山方言（越後方言、長野・山梨・静岡方言、岐阜・愛知方言）
    - 北部伊豆諸島方言
    - 八丈島方言
  - 西部方言
    - 北陸方言
    - 近畿方言
    - 中国方言（東山陰方言、東山陽方言、西中国方言）
    - 雲伯方言
    - 四国方言（阿讃予方言、土佐方言）
  - 九州方言
    - 豊日方言
    - 肥筑方言（筑前方言、中南部方言）
    - 薩隅方言
- 琉球方言……………
  - 奄美方言
  - 沖縄方言
  - 先島方言（宮古方言・八重山方言・与那国方言）

○日本の方言区画図 （東条操『日本方言学』による）

○方言周圏論

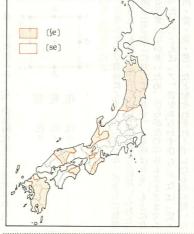
民俗学者の柳田国男が『蝸牛考』で唱えた学説である。柳田氏は、「文化の中心地で新しいことばが起こり、それが勢力を得ると、今まで用いられていたことばは、新語に押されて徐々に外へ外へと押しやられていく。それは、まるで、池に石を投げ入れた時に起こる波紋のように、新語を使う文化中心地のまわりに、古語を使う地域のいくつかの輪ができる。その結果、発生の古い語ほど文化中心地から遠い地域に見いだされ、離れた辺境の地でことばの一致が見られることになる。」と述べている。

たとえば、「蝸牛」は、日本の文化中心地である京都で、古くは「ナメクヂ」ということばが使用されていた。そこへ新しく「ツブラ」ということばができるとその勢力に押されて「ナメクヂ」はその周辺においやられる。その後、「カタツムリ」、「マイマイツブロ」、「デンデンムシ」などの新しいことばができるにつれて、古いものから順次、京都より遠くへ伝播していく。その結果、東北と九州と全くかけ離れた地域で同じ方言事象が見られるという現象がおこる。

ところで、この説をすべての事象にあてはめて解釈しようとすると誤解がおきる。必ずしも辺境の方言事象が古いとは限らないし、すべての事象が京都中心に同心円を描くとは限らないからである。が、やはり、この説は、方言分布を説明する上で一つの原理として永久に生きるものであろう。

○アクセントのちがいの比較

（日本の方言アクセント型の代表例として，共通語・京都・鹿児島の三種を対応させたもの。）

拍	共通語		京都	鹿児島	語例
1		平板 エガ（柄が）			柄・蚊・血・名・葉・日……
1		頭高 エガ（絵が）			絵・木・酢・手・菜・火……
2		平板 アメガ（飴が）			飴・牛・梅・枝・顔・柿・鼻（柄・蚊・血）…
2		尾高 イシガ（石が）			石・紙・川・夏・橋 足・家・犬・腕・鍵
2		頭高 ウミガ（海が）			海・帯・空・箸・麦 秋・汗・両・猿・春
2		平板 イク（行く）			行く・産む・売る・着る・為る・煮る……
2		頭高 アウ（会う）			食う・編む・打つ・来る・出る・見る……
3		平板 アガル（上がる）			上がる・当たる・浮かぶ・明ける・借りる・枯れる……
3		中高 アマル（余る）			余る・祈う・祝う・動く・移る・選ぶ…… 起きる・落ちる・掛ける・歩く・隠す
2		頭高 ヨイ（良い）			良い・無い…… （良か・無か）
3		平板 アカイ（赤い）			赤い・浅い・厚い・甘い・遅い （赤か・浅か……）
3		中高 アツイ（熱い）			熱い・黒い・白い・高い・近い （熱か・黒か……）

○「～だ」（断定の助動詞）の言い方のちがい分布図

（「〈赤い〉花だ」「花じゃ」「花や」のどの言い方をするか。）

○「セ」と「シェ」のちがい分布図

（「先生」を「センセイ」、「シェンシェイ」のどちらに発音するか。）

○「ガ」行音の発音の分布図

（共通語では「音楽」「鍵」などを，[oŋŋaku][kaŋi]と発音する。この鼻音[ŋ]を，破裂音[g]で発音する地方が多い。）

日本の文字

【かな文字】

漢字は本来表意文字だが、漢字を母胎とし、その音をかりて、日本語の表記に便利なように記号化した表音文字をかな文字という。かなは「仮名(仮の文字)」の意で、漢字のことを「真名(ほんものの字)」とよぶのに対したよび名である。

○万葉がな

漢字を日本語の発音にあてはめた方法として代表的なものである。上古におこなわれたが、『万葉集』に多く使用されているのでこう呼ばれる。音仮名と訓仮名とに分けられる。

- 音仮名
  - 正音(本来の音を用いたもの)　法師・餓鬼
  - 借音(音だけを借用したもの)　也麻(山)・宇美(海)・奈都可思(懐かし)
  - 略音(音の一部を略したもの)　吉・撒
- 訓文字
  - 正訓(字の意味にそったもの)　山・川・宮
  - 借訓(訓を他に利用したもの)　夏樫(懐かし)・待(松)・龍(立つ)
  - 義訓(意味をあてはめたもの)　西渡・寒
  - 戯訓(たわむれてよむもの)　重二(四)・山上復有山(出)

たとえば「ヌ」音をあらわす万葉がなには、音仮名として「奴・濃・農・努・怒」、訓仮名として「宿・寝・沼」が用いられている。

暮去者　小倉乃山尓鳴鹿者
今夜波不鳴寐宿家良思母

(夕されば　小倉の山に鳴く鹿は　こよいは鳴かず　いねにけらしも)

○かたかなの成立

漢文を訓読するとき、その行間に万葉がなの一部を記号として書きこんだのがかたかなのおこりである。たとえば「ア」は「阿」の、「イ」は「伊」の偏から生まれたものであるが、字体はさまざまで、統一されたのは明治に入ってからであった。

阿アア	伊イイ	宇ウウ	江エエ	於オオ
加カカ	幾キキ	久クク	介ケケ	己ココ
散ササ	之シシ	須スス	世セセ	曽ソソ
多タタ	千チチ	川ツツ	天テテ	止トト
奈ナナ	二ニニ	奴ヌヌ	祢ネネ	乃ノノ
八ハハ	比ヒヒ	不フフ	部ヘヘ	保ホホ
末ママ	三ミミ	牟ムム	女メメ	毛モモ
也ヤヤ		由ユユ		与ヨヨ
良ララ	利リリ	流ルル	礼レレ	呂ロロ
和ワワ	井ヰヰ		恵ヱヱ	乎ヲヲ
(ㇾ)ンン				

○(ヲコト点)

漢文を読みくだすために、漢字の字面に記入した記号で、多くの流派があった。奈良時代末ごろ考案された。

ヲコト　ト　ハ　ス　テ　ニ　カ　ム　ノ

花ヲ　花ノ　花ハ

○ひらがなの成立

万葉がなを草書体にくずした「草がな」がさらに簡略化されたもので、主として和歌や手紙などに用いられた。漢字(男文字)に対して「女手」とも呼ばれる。もとになる万葉がなが多いため、ひらがなの字体もさまざまであった。たとえば「ア」音をあらわすひらがなは「安・阿・愛・亜・悪」などをそれぞれくずしたものが用いられた。かたかなと同じく明治に入って統一されたが、昔使われていて、現在使われなくなったひらがなのことを変体がなと呼ぶ。

安ああ	以いい	宇うう	衣ええ	於おお
加かか	幾きき	久くく	計けけ	己ここ
左ささ	之しし	寸すす	世せせ	曽そそ
太たた	知ちち	川つつ	天てて	止とと
奈なな	仁にに	奴ぬぬ	祢ねね	乃のの
波はは	比ひひ	不ふふ	部へへ	保ほほ
末まま	美みみ	武むむ	女めめ	毛もも
也やや		由ゆゆ		与よよ
良らら	利りり	留るる	礼れれ	呂ろろ
和わわ	為ゐゐ		恵ゑゑ	遠をを
无んん				

○かたかなのいろんな字体

ア	イ	ウ	エ	オ
阿	伊	宇	江	於
阝	イ	宀	工	於
阝		宀		才
ア	イ	ウ		

○ひらがなのいろんな字体

あ	い	う	え	お
安	以	宇	衣	於
安	以	宇	衣	於
あ	い	う	え	お
あ	い	う	え	お

語法・文法の変遷

時代	動詞	形容詞	形容動詞	助動詞
奈良時代まで（上代）	○活用の種類が八種。（下一段活用はなかった） ○已然形には「ば」がつかなくても条件法として用いた。 ○接尾語「く・らく」の多用。（言はく　見らく）	○活用の種類が二種。（ク活用・シク活用） ○未然形と已然形に「―け」「―しけ」の形があった。（遠けども・全けむ、など） ○「語幹＋み」の形があった。（山高み・野をなつかしみ） ○語幹に単独の用法があった。（いたく泣く・遠の朝廷、など） ○「こそ」の結びが連体形となった。（草こそ茂き）	○活用は、ナリ活用の芽ばえがみられる。	○この時代だけのもの。 「ゆ・らゆ」（受身・可能・自発） 「す」（尊敬・親愛） 「しむ」（使役） 「な」（打消「ず」の未然形） 「に」（打消「ず」の連用形） 「ましじ」（打消推量）
平安時代（中古）	○活用の種類が九種。（いま学習している古典文法と同じ） ○音便が発生した。 ○敬語法がととのった。 ○補助動詞が発達した。 ○サ変の複合動詞の多用。 ○連体止め（余情表現）の発生。	○活用の種類が二種。 ○カリ活用が固定化した。 ○「―け」「―しけ」が衰えた。 ○音便が発生。 ○語幹に「の」をつける形が多くなった。（おもしろの音） ○「こそ」の結びが已然形となった。	○ナリ活用が成立した。 ○漢文訓読の影響でタリ活用が発生しはじめる。	○新たにできたもの。 「めり」「べらなり」（推量） 「まほし」（希望） 「たり」（断定） 「す」「さす」（使役・尊敬） 「しむ」（尊敬） 「る」「らる」の尊敬の意味。 ○形が変わったもの。
鎌倉・室町時代（中世）	○活用の種類が八種。（ラ変が四段にかわった） ○可能動詞が発生。（読める・書ける、など） ○連体形で文の終止が行われた。 ○二段活用が一段化する傾向。 ○音便が一般化した。	○ク活用とシク活用の区別消失。（「―し」→「―しい」） ○シク活用の終止形が「―しし」となり、後にイ音便化した。（美し→美しし→美しい） ○連体形のイ音便を終止形に用いた。（高き→高い） ○連用形のウ音便が一般化。（美しく→美しう）	○活用の種類が二種。（ナリ活用・タリ活用） ○タリ活用は文章語に使用。 ○ナリ活用の連体形に「―な」、終止形に「―な」「―ぢゃ」、連用形に「―で」が用いられる。	○新たにできたもの。 「ない」（打消） 「だ・ぢゃ」（断定） 「たし・たい・たがる」（希望） 「さうだ」（伝聞） 「やうだ」（比況） 「まらする→ます」（丁寧） ○形が変わったもの。
江戸時代（近世）	○活用の種類は五種。（四段・上一・下一・カ変・サ変） ○四段の五段化発生。（読まう→読もう） ○仮定表現の変化（未然形＋ば→仮定形＋ば） ○撥音便が多用された。	○活用形の種類は一種。 ○未然形「から」が「かろ」に、連用形「かり」が「かつ」に。 ○未然形「く・しく」、連体形「かる」、命令形「かれ」がしだいに消滅。 ○仮定表現の変化。（未然形＋ば→已然形＋ば）	○ナリ活用一種となる。 ○タリ活用は、連用形「―と」、連体形「―たる」を残して、おとろえた。 ○ナリ活用に未然形「―だろ」、連用形「―だつ」が発生。	○新たにできたもの、また確立されたもの。 「よう」（推量） 「なんだ」（過去打消） 「らしい」（推量） 「です」（丁寧） 「た」（過去） 「まい」（打消推量）
明治以後（近代・現代）	○活用の種類は五種。（現代かなづかいにより四段が五段に） ○外来語の動詞化。（ダブる） ○サ変動詞の五段・上一段化。（信ずる→信じる、訳する→訳す） ○上一段の五段化。（報いられない→報われない）	○活用の種類は一種。 ○仮定表現として「よいなら」「美しいなら」の形が確立。	○活用の種類は一種。（ナリ活用の口語形容動詞） ○命令形がない。 ○仮定表現として「静かなら」の形が確立。 ○タリ活用は「―と」だけ残存。	○近世と大差はない。 ○新たにできたもの。 「そうだ・そうです」（様態） ○「です・ます」（丁寧）が多用される。 ○打消の「ぬ（ん）」がおとろえ「ない」が多用される。

助動詞	助詞
「ふ」(継続・反復) 「け」(「き」の未然形) 「ま」(「む」の未然形) 「らしき」(「らし」の連体形) 「ませ」(「まし」の未然形) 「けら」(「けり」の未然形)	○この時代だけのもの。 格助詞＝連体修飾の「つ・な」連用修飾の「ゆ・ゆり・よ」 係助詞＝強意の「なも・そ」 副助詞＝類推の「そら」、強意の「い」 終助詞＝希望の「な・がも」、あつらえの「なも・ね・に・がね」、詠嘆の「かも」 間投助詞＝詠嘆の「い・ゑ・ろ」
「まじじ」→「まじ」 ○消滅したもの。 「ゆ・らゆ」・「す」・「ふ」・「な」「に」「け」「ま」など	○新たにできたもの。 格助詞＝同格の「の・が」、列挙の「や・か」 接続助詞＝打消の「で」、逆接の「が」「ものの」、理由の「からに」 副助詞＝例示の「など」 終助詞＝「かし」「かし」「ばや」「がな」「かな」 ○係り結びの法則が確立した。
「たり」→「た」、「る・らる」→「れる・られる」、「す・さす」→「せる・させる」、「む」→「う・よう」、「まじ」→「まい」、「ず」→「ぬ」 ○消滅したもの。 「らむ」「けむ」「まし」「まほし」「めり」「じ」「き」「けり」「ごとし」「つ」「ぬ」「べし」「り」など	○新たにできたもの。 格助詞＝場所・手段の「で」 接続助詞＝仮定の「ても」、逆接の「けれども」 副助詞＝疑問の「やら」、強意の「ばし」 ○「に」と「へ」が混用される。 ○「が」と「の」が分離する。 ○「だに・すら」→「さへ」 ○係り結びの法則が混乱する。
	○新たにできたもの。 接続助詞＝理由の「で・ので」、逆接の列挙の「し・たり」、逆接の「のに」 副助詞＝程度の「くらい」、限度の「きり・だけ・しか」 終助詞＝「の」「ね」「せ」「な」
	○近世後期とほぼ同じ。 ○終助詞に「かしら」「わ」「よ」などが発達。 ○「より」がおとろえ「から」が多用される。

音韻の変遷

時代	
奈良時代まで(上代)	○音節の種類が多い。(清音60～61、濁音27) ○キ・ヒ・ミなど19の音節に、甲類・乙類の二種(母音の差異)があった。これを区別する表記を上代特殊かなづかいという。 ○音節が結合する場合、母音調和とよばれる制約があった。 ○ラ行音や濁音が語頭におかれなかった。 ○漢字の音は原音に近かった。 ○ハ行音の子音は[ɸ]で、もっと昔は[P]だったらしい。 ○撥音・促音・拗音は、国語としては、なかったらしい。
平安時代(中古)	○音節の種類が減った。(清音44～47、濁音20) ○甲類・乙類の区別がなくなり、ほぼ甲類に統一される。 ○母音調和などの制約がゆるむ。 ○ラ行音・濁音が語頭にも用いられはじめた。 ○撥音・促音が発生。 ○イ音便・ウ音便が発生。 ○ハ行音が、語中・語尾でワ行音に転化。(ハ行転呼音) ○漢字音は国語の音韻に近づけて発音された。 ○連声がおこった。(三位→さんみ、仁和寺→にんなじ)
鎌倉・室町時代(中世)	○音節の種類は、清音44、濁音20。 ○イとヰ、エとヱの区別消滅。 ○音便が一般化した。 ○オ列長音がうまれた。(「アウ」[au]が「オー」[ɔː]に、「エウ」[eu]が「ヨウ」[joː]になるなど) ○合拗音(クヰ、クヱ)などが、直音(キ、ケなど)になった。 ○半濁音(パ行音)があらわれた。
江戸時代(近世)	○音節の種類は、清音44、濁音18。 ○語頭にくるハ行音が[ɸ]から[h](現代と同じ)になる。 ○「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の発音の区別が消滅した。 ○「エ・ヱ」[ie]が[e]に、「オ・ヲ」[wo]が[o]になった。 ○[ɔː]音と[oː]音の区別がなくなり、すべて[oː]になる。 ○エ列長音がうまれた。(「エイ」「アイ」が「エー」になる) ○合拗音(クヮなど)が直音(カなど)になった。 ○パ行音が独立音節として確立。
明治以後(近代・現代)	○音節の種類は前代と同じ。 ○外国語の流入により、国語にはなかった発音が用いられるようになった。([ti][tu][di][fa][vi]など)

語彙の変遷

時代	内容
奈良時代まで（上代）	○固有の大和ことば（上代語）が中心。 ○漢語が摂取されている。呉音が多い。儒教などの用語が主だがウマ（馬）、ウメ（梅）、ゼニ（銭）など日常語化したものも多い。 ○梵語（古代インド語）が、漢字で音訳され、仏教と共に移入された。（塔、舎利、菩薩など） ○朝鮮語も多く伝来した。（寺、仏、甲など）
平安時代（中古）	○漢語が普及し、日本語化する。漢音がしだいにふえる。（念ず、装束く、乱がはし、頓に、病者、修験者など） ○仏教が普及し、忌み詞がおこる。（仏を「中子」、僧を「髪長」、経を「染紙」というなど） ○漢文訓読語が、従来のことばとはちがった形で成立。 ○京都語がおこり、中央語として確立。
鎌倉・室町時代（中世）	○漢語や梵語が一般化する。 ○唐音が伝来する。（饅頭、普請、行脚、蒲団など） ○ポルトガル語が伝来する。（タバコ・パン・カステラなど） ○女房ことばが成立する。（おなか、おひやなど）
江戸時代（近世）	○漢語が日常生活用語として浸透する。 ○オランダ語が伝来。（蘭学の影響）（メス、ガラス、コーヒーなど） ○上方ことばに対し、江戸ことばが発達。
明治以後（近代・現代）	○漢語による新造語がふえる。（西欧文化の輸入、翻訳や、新しい生活様式の発達による） ○西欧語がとりいれられる。（「外来語」の項参照） ○言文一致の傾向が強まる。 ○共通語が発達する。 ○和製の外国語や、外国語の日本語化されたものが用いられる。 ○マス・コミによる新造語や流行語がさかんになる。

表記法（文字・文体などの変遷）

時代	内容
奈良時代まで（上代）	○漢字が伝来した。 ○漢文体による表記。（日本書紀・懐風藻など） ○音訓併用の折衷体による表記。（古事記） ○宣命体による表記。（祝詞・宣命） ○万葉がなによる表記。（万葉集） ○漢字を、表意、表音の両面から活用し、表記法の開拓をおこなっている。
平安時代（中古）	○漢字が公文書・記録類をはじめ文字の主流を占める。（男文字とよばれる） ○かたかなが発明される。漢字を略体化し、漢文訓読のための記号としたもの。 ○ひらがなが発明される。漢字をくずしたもの。（女文字） ○かな文（物語・和歌など）や、かなまじり文（今昔物語など）、変体漢文（江談抄など）などの文章が作られた。
鎌倉・室町時代（中世）	○漢字が普及し、和製漢字や、あて字使用などが行われる。 ○かたかなの字体が安定。 ○ひらがなの字体はまだ不安定。 ○定家かなづかいが確立。 ○キリスト教宣教師らによる、ローマ字の口頭語表記。 ○和漢混交文（平家物語・太平記など）が行われる。
江戸時代（近世）	○文字が一般庶民に普及しはじめる。 ○国学者らによる、歴史的かなづかいの研究、整理。 ○候文が書簡や公用文などに用いられる。 ○擬古文が行われる。 ○口語体をまじえた文章が町人文学を中心にひろまる。 ○蘭学の影響によるローマ字の使用があった。
明治以後（近代・現代）	○義務教育制度により、国民の文字力が充実。 ○漢字、かたかな、ひらがな、ローマ字などの書体や表記法が整備統一される。 ○当用漢字、教育漢字の制定。 ○現代かなづかいの制定。 ○送りがなのつけ方が問題化。 ○言文一致体が発達。 ○西欧語・ローマ字が日常生活に浸透する。

文・文節・単語

1 文

まとまった一つの意味と一つづきの音声をもつことばを文という。文がいくつか集まって構成され、一つの主題によって統一された作品を文章という。

2 文節

文を、それ以上小さく切ると、発音するにも不自然になり、意味もわかりにくくなるような一くぎりを文節という。

3 単語

文節をさらに小さくわけた、言語の最小単位を単語という。単語のうち、はっきりした内容をもち、それだけで一つの文節となることができるものを自立語、それだけでは文節となることができず、常に他の語に付属して、ある働きをしたり、ある意味を添えたりするものを付属語という。一単語として独立しないで、常に自立語の前か後かに熟合して、単語の一部分となるものがある。前につくものを接頭語、後につくものを接尾語という。

文の成分と構造

1 文の成分（文節の種類）

a主語　ほととぎす鳴く。花が美しい。

b述語　ほととぎす鳴く。花が美しい。

c修飾語　風いみじう吹く。（連用修飾語）
黒い雲が出た。（連体修飾語）

d接続語　雨降る。されど行かむ。

e補助語　月を見たまふ。吾輩は猫である。

f対等語　花、鳥を友とす。白くて、大きな花。

g独立語　あな、うらやまし。風よ、吹け。

2 文節相互の関係

a主語・述語の関係
夜　更けぬ。　鳥が　鳴く。

b修飾・被修飾の関係
いと　をかし。　かわいい　猫ですね。

c接続・被接続の関係
雨　降れど　行かむ。　A　及び　Bを　除く。

d補助・被補助の関係
これ　花に　あらず。　父は　元気で　ある。

e対等の関係
清く　冷たき　こと　限りなし。

f独立の関係
いざ　帰りなむ。　みなさん、　出かけましょう。

3 連文節

二つ以上の文節が、一つの文節のような資格で、他の文節と連なる場合、これを連文節という。

その　女　世の　人には　まされりけり。

4 文の構造

主語・述語の関係が一文中にどのように含まれているかによって分類される。

a単文―主語・述語の関係が一回だけで成る文。

b複文―主語・述語の関係が二回以上ある文。
花　散りぬ。　まちがいは　誰にも　ある。
雨などの　降るさへ　をかし。

c重文―主語・述語の関係が二回以上あり、それらがたがいに対等の関係にある文。
花が　咲き　鳥が　歌う。

単語と品詞

1 単語の種類

a単純語―それ以上くぎることができないもの。（花・美しい・いいえ・しかし・書く、など）

b複合語―二つ以上の単語が結合して一つの意味をあらわすもの。（秋風・遠のく・山焼き、など）

c畳語（じょうご）―同じ単語が二つ重なって一つの単語となったもの。（人々・山々・返す〳〵、など）

d派生語―接頭語や接尾語が熟合しているもの。（小川・さ衣・み山・たばかる、けだかい・こどもたち・さびしげ・寒さ・春めく、など）

2 品詞

単語を、職能・形態・意義によって分類したものを品詞という。

a職能―主語・述語・修飾語など、文や文語を構成するはたらきをいう。

b形態―法則的な形、主として活用のしかたをいう。

c意義―たとえば、名詞は「事物の名をあらわす」というような、共通の意味をいう。

品詞各説

1 名詞

【名詞の種類】

a 普通名詞―同類の事物に通じて用いられるもの。(心・春雨・ふみ、など)

b 固有名詞―人名・地名・書名など、特定の物をあらわすもの。(清少納言・奈良など)

c 数詞―事物の数量、または順序をあらわすもの。(三人・四羽・八番など)

d 形式名詞―もとの意味を失って、形式的に用いられるもの。(まま・こと・ものなど)

e 代名詞―事物を直接さして、その名のかわりに用いられるもの。人をさすものを人代名詞(人称代名詞とも)、事物・場所・方向をさすものを指示代名詞という。

2 副詞

【副詞の種類】

a 状態の副詞―事物の状態や時などをあらわし主として動詞を修飾。(ふと・たちまち)

b 程度の副詞―動作や状態の程度を示し、主として用言を修飾。(いと・やや・すこし)

c 陳述の副詞―これをうける述語に一定の言い方を要求し、それと呼応する。(この副詞とそれをうける述語との関係を副詞の呼応という。)

◇程度の副詞は、他の副詞や体言を修飾することがある。

なほしばし待つ。もっとはっきり言え。
ただひとり行く。わずか一羽残った。

3 連体詞

「この・その・わが」などは、口語では連体詞

〔品詞分類表〕

- 単語
  - 自立語
    - 活用がない
      - 主語となる……(体言)……(1)名詞
      - 修飾語となる……
        - 主として用言を修飾する……(2)副詞
        - 体言のみを修飾する……(3)連体詞
      - 接続語となる……(4)接続詞
      - 独立語となる……(5)感動詞
    - 活用がある―述語となる…(用言)
      - ウ段音で言い切る(文語ラ変は「り」)……(6)動詞
      - 文語「し」口語「い」で言い切る……(7)形容詞
      - 文語「なり・たり」口語「だ」で言い切る…(8)形容動詞
  - 付属語
    - 活用がある……(9)助動詞
    - 活用がない……(10)助詞

○代名詞(文語)の種類

		自称(話し手)	対称(聞き手)	他称 近称	他称 中称	他称 遠称	不定称
人称代名詞		わ・われ	な・なんぢ	こ・これ	そ・それ	か・かれ	た・たれ
指示代名詞	事物			これ	それ	かれ	なに・いづれ
	場所			ここ	そこ	かしこ	いづこ
	方向			こなた	そなた	かなた	いづかた

○陳述の副詞(文語)の例

打消を要求	あへて・いさ・え・いまだ・たえて・つゆ・ゆめ・をさをさ・よも・さらに・よに
仮定を〃	たとひ・もし・よし・いかに
推量を〃	おそらく・けだし・さだめて
比況を〃	あたかも・さながら
当然を〃	すべからく・まさに・よろしく
願望を〃	いかで
禁止を〃	な(終助詞の「そ」でうける)・ゆめ
疑問・反語を要求	いかが・など・なに・いかで・あに・いづくんぞ

○代名詞(口語)の種類

		自称(話し手)	対称(聞き手)	他称 近称	他称 中称	他称 遠称	不定称
人称代名詞		わたくし・わたし・ぼく	あなた・きみ・おまえ	これ	それ	かれ・あれ	だれ・どなた
指示代名詞	事物			これ	それ	あれ	どれ・なに
	場所			ここ	そこ	あそこ	どこ
	方向			こちら	そちら	あちら	どちら

○陳述の副詞(口語)の例

打消を要求	決して・まったく・全然・あまり・まだ
打消推量を要求	よもや・まさか
仮定を〃	たとえ・もし・かりに
推量を〃	おそらく・きっと・たぶん・さぞかし
比況を〃	まるで・ちょうど
疑問・反語	どうして・なぜ・なんで

だが、文語では「こ・そ・わ」は名詞（代名詞）で、「の・が」は助詞である。

4 接続詞

【接続詞の種類】

a 対等の関係を示すもの
並列・添加・選択の三種がある。

b 条件と結果との関係を示すもの
順接・逆接の二種がある。

c 話題の転換を示すもの

5 感動詞

【感動詞の種類】

a 感動の意をあらわすもの
（あな・あはれ・すは・おや・あら・まあ）

b 呼びかけの意をあらわすもの
（いかに・いざ・なう・おい・もし・よう）

c 応答の意をあらわすもの
（いな・いや・おう・はい・いいえ・うん）

6 動詞

【活用の種類】

口語動詞の活用は五種類であるが、文語動詞の活用は九種類である。

【文語】	【口語】
四段活用 ラ行変格活用 ナ行変格活用	五段活用
下一段活用 上一段活用 上二段活用	上一段活用
下二段活用	下一段活用
カ行変格活用	カ行変格活用
サ行変格活用	サ行変格活用

【活用形】

活用によって変化した語形を、活用形という。

○連体詞（文語）の例（傍線部分）

さる人　いんじ年　さんぬる日　いはゆる折琴　ある人
きたる三日　さる五日　さしたる事　させる人　あらゆる山

○接続詞（文語）の例

対等の関係	並列	および・ならびに・はた・また
	添加	しかも・かつ・なほ
	選択	あるひは・または・もしくは・はた
条件と結果の関係	順接	ゆゑに・さらば・されば・しからば・かれば・しかして・よつて・かくて・すなはち
	逆接	されど・されども・さるに・さりながら・さるは・しかるに・しかるを・しかれども・ただし・もつとも
話題の転換		さて・しかるあひだ・そもそも・それ

○動詞（文語）の活用表

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
四段	書く	書	か	き	く	く	け	け
上一段	見る	○	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上二段	落つ	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
下一段	蹴る	○	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段	得	○	え	え	う	うる	うれ	えよ
ラ変	あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ
ナ変	死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
カ変	来	○	こ	き	く	くる	くれ	こ（よ）
サ変	す	○	せ	し	す	する	すれ	せよ

○連体詞（口語）の例（傍線部分）

この本　その家　あの花　どの方面　かの君　わが国
ある人　小さな犬　大きな木　とんだ話　たいした人物
あらゆる書物　いわゆる呼び屋

○接続詞（口語）の例

対等の関係	並列	および・また
	添加	それから・それに・なお・しかも
	選択	それとも・または・もしくは・あるいは
条件と結果の関係	順接	したがって・そうして・そこで・そうすると・それだから・それゆえ・だから・では・そんなら・それで・それでは
	逆接	が・けれども・しかし・しかしながら・しかも・それでも・だが・ただし・ところが・でも
話題の転換		さて・そもそも・ところで・では

○動詞（口語）の活用表

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
五段活用	書く	書	か こ	き い	く	く	け	け
上一段活用	見る	○	み	み	みる	みる	みれ	みよ みろ
下一段活用	受ける	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ けろ
カ行変格活用	くる	○	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ行変格活用	する	○	さ せ し	し	する	する	すれ	せよ しろ

活用形には次の六つがある。

(1)未然形　(2)連用形　(3)終止形　(4)連体形
(5)已然形(文語)・仮定形(口語)　(6)命令形

【音便】

動詞の音便は、四段・ラ変・ナ変(文語)、五段(口語)の連用形に生じる。

a　イ音便　咲きて→咲いて　泳ぎて→泳いで
b　ウ音便　思ひて→思うて　頼みて→頼うで
c　撥音便　呼びて→呼んで　死にて→死んで
d　促音便　立ちて→立つて　ありて→あつて

【補助動詞】

動詞が、本来の意味と自立性を失って、助動詞のように上の文節を補助するのに用いられた場合、これを補助動詞という。

見たまふ　養ひたてまつる　申し侍り
お帰りなさる　見ていただく

【自動詞・他動詞】

動詞の中には、それ自身の動作や作用をあらわす自動詞と、他に対するはたらきかけ、または他のものを作りだすはたらきをもつ他動詞とがある。

a　自動詞・他動詞の活用が同じもの。
　水が増す(自)・水を増す(他)
b　終止形は同じでも活用のちがうもの。(文語だけ)
　舟沈む(自・四)・舟を沈む(他・下二)
c　語の一部が共通しているもの。
　離る・離す、焼く・焼ける

7　形容詞・形容動詞

【音便】

a　ウ音便　近く→近う　楽しく→楽しゅう
b　イ音便(文語だけ)　よきかな→よいかな
c　撥音便(文語だけ)　よかるなり→よかんなり　あはれなるめり→あはれなんめり

○動詞活用(文語)の見わけかた

a　おぼえておくべきもの
ナ変―死ぬ・往ぬ(二語だけ)
ラ変―あり・をり・侍り・いまそかり(四語)
下一―蹴る(一語)
上一―着る・似る・煮る・干る・見る・顧みる・試みる・射る・鋳る・居る・率る
カ変―来(一語)
サ変―す(一語・ただし複合語が多い)

b　右以外の動詞には「ず」(打消)をつけてみると、未然形の活用語尾の音が、
四段―ア段音となる。(書かず・読まず、など)
上二―イ段音となる。(起きず・落ちず、など)
下二―エ段音となる。(受けず・述べず、など)

○形容詞(文語)の活用

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	よし	よ	く から	く かり	し (かり)	き かる	けれ (かれ)	かれ
シク活用	美し	美	しく しから	しく しかり	し	しき しかる	しけれ	しかれ

○形容動詞(文語)の活用

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ナリ活用	静かなり	静か	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	堂々たり	堂々	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

○動詞活用(口語)の見わけかた

a　おぼえておくべきもの
カ変―くる(一語)
サ変―する(一語・ただし複合語が多い)

b　右以外の動詞には「ない」(打消)をつけてみると未然形の活用語尾の音が、
五段―ア段音となる。(書かない・読まない、など)
上一―イ段音となる。(起きない・落ちない、など)
下一―エ段音となる。(受けない・述べない、など)

○形容詞(口語)の活用

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
○	よい 正しい	よ 正し	かろ	く かっ	い	い	けれ	○

○形容動詞(口語)の活用

種類	基本形	語幹	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
○	静かだ	静か	だろ	だっ で に	だ	な	なら	○

【助動詞（文語）の注意事項】

る・らる・す・さす・しむ

○「れ給ふ」「られ給ふ」の「れ」「られ」に尊敬の用法が少ないのに対し、「せ給ふ」「させ給ふ」の「せ」「させ」は尊敬の用法が多く、最高敬語（天皇か天皇に準じるお方に対する高い敬意を表す。ただし、中古文の地の文の中に用いられた場合。）を示す。

ず

○「ず」の連体形「ぬ」・已然形「ね」と、完了の助動詞「ぬ」の終止形「ぬ」・命令形「ね」との識別。

①未然形に接続→打消　連用形に接続→完了
②連体形の「ぬ」→打消　終止形の「ぬ」→完了
已然形の「ね」→打消　命令形の「ね」→完了

じ・まじ

○「じ」は、意味上は「む」の打消に近く、「まじ」は、「べし」の打消に近い。「じ」は、上代・中古に用いられ、中世には「まじ」が多用される。（後に「まい」となる。）

む・らむ・けむ

○「む」は未来、「らむ」は現在、「けむ」は過去を推量する。

○「む」の仮定・婉曲、「らむ」「けむ」の伝聞・婉曲の意味は、連体形（体言を修飾している場合）において用いられることが多い。

○「らむ」には、次のような用法がある。

①直接見ている事実に対して用いられる→原因推量
（ナゼ……ナノダロウカ。……ダカラ……ダロウカ。）
②直接見ていない事実に対して用いられる→現在推量
（今ゴロハ……テイルダロウ。）

むず(んず)

○推量の助動詞「む」と、格助詞「と」と、サ変動詞「す」との続いた「むとす」が、熟合して「むず(んず)」という助動詞になった。主として中世に用いられ、意味は「む」と同じである。

まし

○助動詞（文語）一覧

接続	助動詞の種類		主な意味	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型	接続
未然形	受身・尊敬	る	受身・尊敬	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段型	四段・ナ変・ラ変の未然形
		らる		られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ		右以外の動詞の未然形
	可能・自発	る	可能・自発	れ	れ	る	るる	るれ	○		四段・ナ変・ラ変の未然形
		らる		られ	られ	らる	らるる	らるれ	○		右以外の動詞の未然形
	使役・尊敬	す	使役・尊敬	せ	せ	す	する	すれ	せよ		四段・ナ変・ラ変の未然形
		さす		させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ		右以外の動詞の未然形
		しむ		しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ		用言の未然形
	打消	ず	打消	ず ざら	ず ざり	ず ○	ぬ ざる	ね ざれ	○ ざれ	特殊型	活用語の未然形
	打消推量	じ	打消推量・打消意志	○	○	じ	(じ)	(じ)	○	不変化型	
	推量	む(ん)	推量・意志・希望・適当・勧誘・ていねいな命令・仮定・婉曲	(ま)	○	む(ん)	む(ん)	め	○	四段型	
		むず(んず)		○	○	むず(んず)	むずる(んずる)	むずれ(んずれ)	○	サ変型	
		まし	反実仮想・意志・希望・推量	ましか (ませ)	○	まし	まし	ましか	○	特殊型	
	願望	まほし	願望	まほしく まほしから	まほしく まほしかり	まほし	まほしき まほしかる	まほしけれ	○	形容詞型	動詞と助動詞（す・さす・ぬ）の未然形
連用形	過去	き	過去	(せ)	○	き	し	しか	○	特殊型	活用語の連用形（カ変・サ変には未然形にもつく）
		けり	過去・詠嘆	(けら)	○	けり	ける	けれ	○	ラ変型	
	完了	つ	完了・強意・並列	て	て	つ	つる	つれ	てよ	下二段型	活用語の連用形
		ぬ		な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ変型	
		たり	完了・存続	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)	ラ変型	
	推量	けむ	過去推量・過去原因推量・過去の伝聞・過去の婉曲	○	○	けむ	けむ	けめ	○	四段型	
	願望	たし	願望	たく たから	たく たかり	たし	たき たかる	たけれ	○	形容詞型	動詞と助動詞（る・らる・す・さす）の連用形

○未然形「ませ」は、上代に用いられた。中古には、「ませば」の意味（仮定条件）を表すのに「ましかば」を用いるようになって、「ましか」が未然形になった。

○反実仮想とは、事実に反することを仮に想像することで、英語の仮定法に近い表現法である。

> ……ませ（ましか）ば、……まし。
> ……せ（過去助動詞「き」の未然形）ば、……まし。

の構文で表現するのが普通である。

き・けり

○「き」は、作者自身が直接経験したことを回想する場合に用いられることが多いのに対し、「けり」は、作者が他から伝聞したこと（間接経験）を回想する場合に用いられることが多い。

○「けり」の詠嘆は、今まで気づかなかった事実に気づいて「……ダッタンダナア。」と、驚いたり感動したりするのが基本である。

○「き」が、カ変・サ変の動詞に付くときは、特殊な接続をする。（斜線部は接続しない。）

			き	し	しか
カ変	未然形	こ	＼	こ－し	こ－しか
	連用形	き	＼	き－し	き－しか
サ変	未然形	せ	＼	せ－し	せ－しか
	連用形	し	し－き	＼	＼

○「けり」の已然形「けれ」と、形容詞の已然形活用語尾「けれ」との識別。

> 「けれ」の上のことばが、連用形→助動詞「けり」

つ・ぬ

○「ぬ」は、自動詞に付き、自然推移的・無作為的・無意志的動作の完了を表す。「つ」は、他動詞に付き、作為的・意志的動作の完了を表す。

○「つ」「ぬ」が強意を表す時は、推量の助動詞とともに用いられる。

てむ・つべし・てまし・つらむ

接続	種類	助動詞	意味	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型	接続
終止形	推量	べし	推量・意志・決意・適当・勧誘・命令・当然・義務・可能	べく べから	べく べかり	べし	べき べかる	べけれ	○	形容詞型	活用語の終止形（ラ変型には連体形につく）
		らむ	現在推量・現在の原因推量・現在の伝聞・現在の婉曲	○	○	らむ	らむ	らめ	○	四段型	
		らし	推定	○	○	らし	らし （らしき）	らし	○	不変化型	
		めり	婉曲・推量	○	（めり）	めり	める	めれ	○	ラ変型	
	打消推量	まじ	打消推量・打消意志・打消当然・禁止・不可能推量	まじく （まじから）	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○	形容詞型	
	伝聞・推定	なり	伝聞・推定	○	なり	なり	なる	なれ	○	ラ変型	
体言連体形	断定	なり	断定	なら	なり に	なり	なる	なれ	（なれ）	形容動詞型	体言と活用語の連体形
体言		たり		たら	たり と	たり	たる	たれ	（たれ）		体言
その他	完了	り	完了・存続	ら	り	り	る	れ	（れ）	ラ変型	動詞サ変の未然形・四段の已然形
	比況	ごとし	比況・例示	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○	形容詞型	体言・用言の連体形・助詞（が・の）

○上代の助動詞一覧表

接続	助動詞	意味	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型	接続
未然形	ゆ	受身・可能・自発	え	え	ゆ	ゆる	○	○	下二段型	四段・ナ変・ラ変動詞の未然形
	らゆ		らえ	○	○	○	○	○		「寝」（一語だけ）の未然形
	す	尊敬	さ	し	す	す	せ	せ	四段型	四段動詞の未然形
	ふ	動作・作用の反復・継続	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ		

なむ・ぬべし・なまし・ぬらむ

○「つ」の未然形・連用形「て」と、接続助詞「て」との識別。

「て」の下に来る語が、未然形か連用形に接続する助詞・助動詞であれば、完了の助動詞の「て」。

たり・り

○完了の「たり」と、断定の助動詞「たり」と、形容動詞活用語尾「たり」との識別。

連用形に接続→完了「たり」
体言に接続→断定「たり」
形容動詞の語幹に付く→形容動詞活用語尾「たり」

○完了「り」の連体形「る」と、受身・尊敬・可能・自発の助動詞「る」との識別。

①サ変の未然形か、四段の已然形に接続→完了「る」
四段・ナ変・ラ変の未然形に接続→受身等「る」
②連体形→完了「る」 終止形→受身等「る」

○口語助動詞「た」は、この「たり」の「り」が落ちて中世になって現れた。

たし・まほし

○中古には「まほし」が多く用いられていたが、中古末期から中世初期に「たし」が用いられ始める。口語助動詞の「たい」は、「たし」の連体形「たき」が音便で「たい」となって生まれた。

べし・らし

○「べし」も「らし」も、強い確信を持って推量する時に用いられるが、特に「らし」は、確実な根拠に基づく客観的な推量(推定)に用いられ、普通、文中に根拠を示す表現が示されている。

○「べし」が基になってできた助動詞に「べらなり」があった。主として中古の和歌に用いられた。

めり・なり

○「めり」は、目で見たことについての推量、「なり」は、耳で聞いたことについての推量に用いられる。

【助動詞(文語)の参考事項】

る・らる・す・さす・しむ

○可能の「る・らる」は、平安時代では、打消の言い方とともに用いられるのが普通である。

つゆまどろまれず。(源氏物語・桐壺)

○受身の主語は生物であるのが普通だが、次のように無生物が主語になることもある。

にくきもの、すずりに髪の入りてすられたる。(枕草子・二八段)

○「母、子に泣かる」のように、自動詞(泣く)も受身の言い方に用いられる。

○戦記物語では、使役の「す・さす」が受身の意を表すことがある。

我が身手負ひ、家の子郎等多く討たせ、馬の腹射させて引き退く。(平家物語)

○「す」「さす」「しむ」が謙譲語とともに用いられて謙譲の意を表すことがある。「参らす」「聞こえさす」などがそれであるが、これらは普通には謙譲の意味を表す一つの動詞として取り扱われている。

乾鮭(からさけ)といふものを、供御(くご)に参らせられたりけり。(徒然草・一八二段)

ず

○「ず」の活用は、次のようにまとめることができる。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	○	○	○
	(な)	(に)	○	ぬ	ね	○
	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ

右の表の「な」「に」は奈良時代に用いられた。「ざり」の系列は、「ずあり」が縮約して、「ざり」となったもの。

む

○推量・意志の意味の「む」が、反語文の文末に用いられている場合、全体として可能(不可能)の意味を表すことが多い。

いふかたなう心憂しと思へども、何わざをかはせん。(蜻蛉日記・上)

○「む」が、適当・勧誘の意に用いられる場合は、多く「こそ……め」「てむ」「なむ」の形で現れる。

忍びては参り給ひなむや。(源氏物語・桐壺)

○「む」の已然形「め」は、「や」「やは」「やも」「かも」(反語の意味を表す助詞)とともに用いられることがある。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも(金槐集・下)

○推量の助動詞「む」の未然形「ま」に接尾語「く」と形容詞の「欲し」のついた「まくほし」が縮約されて助動詞「まほし」となる。

き・けり

○古くは「き」の未然形に「せ」という形があり、接続助詞「ば」とともに「せば」という形で用いられ、下の語句が助動詞「まし」で結ばれることが多い。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし。(古今集・五三)

○未然形の「けら」は用法が限られていて、奈良時代に助動詞「ず」や、接尾語「く」につづく場合にのみ用いられた。

梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや(万葉集・八一七)

つ・ぬ

○完了の助動詞「つ」の連用形に「けり」の接続した「てけり」は戦記物語などでは「て」と「けり」との間に撥音を生じ、「けり」が「げり」と濁音化している。

首ねぢ切って捨ててんげり。(平家物語・巻一一)

○鎌倉時代以後、終止形が、並列の意を表すのに用いられた。

浮きぬ沈みぬ、五六町こそ流れたれ。(平家物語・巻五)

乗っては下りつ、下りては乗っつ、あらましごとをぞしたまひける。(平家物語・巻三)

べし

○連用形「べく」にウ音便、連体形「べき」にイ音便がある。また連体形「べかる」が撥音便で「べかん」と

○ラ変型の活用語の連体形が、「めり」「なり」に付くときには、「あンめり」・「あンなり」・「多かンめり」・「なンなり」のように撥音便となり、その撥音「ン」が表記されないことがある。

○推量の「なり」と断定の助動詞「なり」と、形容動詞活用語尾「なり」との識別。

> 終止形に接続→推量「なり」
> 体言・連体形などに接続→断定「なり」
> 形容動詞の語幹に付く→形容動詞活用語尾「なり」

なり・たり

○「なり」は、体言・連体形以外にも、いろいろの語に接続できる。(助詞・副詞など)

○「なり」の連体形は、「……ダ、デアル」の意味のほかに、「……ニアル、……ニイル」という存在の意味や、「……トイウ」の意味などに用いられる。

○「たり」は、中古初期から、漢文訓読文に用いられ、中世もその流れをくんだ和漢混交文には使われたが、かな文字系統のものには用いられなかった。

○「なり」の連用形「に」と、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」と、助詞(格助詞・接続助詞)の「に」と、形容動詞の連用形活用語尾「に」との識別。

> ①体言・連体形に接続。下に補助動詞(あり・さぶらふ・はべり・おはすなど)が来る。「にて」(ては接続助詞)の形をとって、「……デアッテ」という意味を表す。→断定の「に」
> ②連用形に接続し、下に連用形接続の助動詞が来る。→完了の「に」
> ③連用形に接続し、連用修飾語となる。→格助詞
> ④連用形に接続し、接続語となる。→接続助詞
> ⑤形容動詞の語幹に付く。→形容動詞活用語尾「に」

○「なり」の連用形「に」に、「や」「か」「こそ」などが付いて、文が終わることがある。下に「あらむ」「あらめ」などの省略された形である。

なり、この「ん」を表記しないことがある。

いとど忍びがたくおぼすべかめり。　(源氏物語・匂宮)

○上代「べし」の語幹に、原因・理由を表す接尾語「み」がついて、「べみ」という形で用いられた。

秋萩を散り過ぬべみ手折り持ち見れどもさぶし君にしあらねば　(万葉集・二二九〇)

また、形容詞の未然形に「——け」の形があったように、「べし」の未然形にも「べけ」があった。

○「べから・べかり・べかる」の形は、「べし」の連用形「べく」と「あり」とが熟合したものである。この活用は、形容詞の補助活用と同じく、他の助動詞が接続するときに用いられる。同様の活用が「ず」「まほし」「たし」「まじ」にもある。

らし

○「らし」が、ラ変動詞「あり」や、助動詞「けり」「なり」などに付く場合は、次のように「る」が省略されることが多い。

あるらし→あらし　けるらし→けらし　なるらし→ならし

○「らし」の連体形・已然形はほとんど係り結びの場合に用いられる。

○「らし」は、江戸時代以後になると、活用語の連体形や体言に接続し、活用も形容詞シク活用型になった。これは形容詞を作る接尾語の「らし」から発展したものといわれている。

○「らし」の連体形「らしき」は奈良時代に用いられた。

いにしへもしかにあれこそうつせみも妻をあらそふらしき　(万葉集・一三)

たし・まほし

○願望の助動詞・助詞をまとめると次のようになる。

品詞	語	意味	接続
助動詞	まほし	…タイ・…テホシイ	未然形
	たし	…タイ・…テホシイ	連用形
助詞	ばや	…タイ	未然形
	なむ	…テホシイ	
	もがな	…タイ・ガホシイ	種々

＊上代の助動詞

ゆ・らゆ

○「ゆ」「らゆ」は平安時代の「る」「らる」に相当するものである。

○「ゆ」「らゆ」は平安時代以後、動詞や連体詞の一部として形をとどめている。

〈動　詞〉　覚ゆ　聞こゆ　思ほゆ
〈連体詞〉　あらゆる　いはゆる

○「らゆ」は「寝(い)の寝(ね)らえ」の形しかなく、可能の意味だけである。

す

○平安時代以後、「す」は動詞の一部として残っている。

おぼす(四段動詞)……「思ふ」の尊敬語
聞こす(四段動詞)……「言ふ」「聞く」の尊敬語

ふ

○「ふ」がラ行四段動詞に接続する場合、上の動詞未然形「ら」が「ろ」に音変化することがある。

移らふ→移ろふ

＊助動詞の分類のしかた

助動詞を分類する基準には、次のようなものがある。

○**活用の形式を基準とする分類**

1　動詞型、形容詞型、形容動詞型
2　特殊型

○**意味用法を基準とする分類**

受身・可能・自発・尊敬・使役・打消・推量など。

○**接続のしかたを基準とする分類**

1　動詞に接続するもの
2　形容詞にも接続するもの
3　形容動詞にも接続するもの
4　体言にも接続するもの
5　助詞にも接続するもの

○**機能を基準とする分類**

1　動作の主体に直接関係あるもの
2　書き手の判断に直接関係あるもの
a　陳述を与えるもの　b　陳述を助けるもの

【助動詞（口語）の注意事項】

れる・られる

○五段の動詞に「れる」をつけて可能を表す場合（「書かれる」）と、可能動詞（下一段活用「書ける」）とを混同しないこと。

○五段・サ変以外の動詞に「れる」（「られる」が正しい接続）をつけて「見れる」「出れる」「来れる」というのはまちがい。これらを一語の可能動詞とも考えない。（可能動詞は、五段動詞から出たもの。）

せる・させる

○「見せる」「着せる」と「見させる」「着させる」とを混同しないこと。前者は、一語の下一段動詞であり、後者は「見る」「着る」に「させる」が付いたもの。

ない

○形容詞の「ない」と混同しないこと。

形容詞の「ない」		助動詞の「ない」
連用形に付く。	↔	未然形に付く。
美しくない		書かない
静かでない		
書きたくない		書きたがらない
副助詞「は・も」に付く。	↔	付かない。
美しくは(も)ない		
助動詞「ぬ(ん)」と交代	↔	できる。
できない。		書かぬ(ん)

た

○イ音便・撥音便につく場合「だ」となる。断定の助動詞「だ」と混同しないこと。

彼は大いに喜んだ。（過去）→連用形に接続

彼は大喜びだ。（断定）→体言に接続

○「た」は、さらに「命令・勧誘、確認・詠嘆」を表す。

さあ、買った、買った。（命令・勧誘）

今日は、日曜だったね。（確認・詠嘆）

そうだ（そうです）

○様態の「そうだ」と伝聞の「そうだ」とを混同しない

●助動詞（口語）一覧

接続	種類	助動詞の	主な意味	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	活用の型	接続
未然形	受身	れる	受身・尊敬	れ	れ	れる	れる	れれ	れろ れよ	下一段型	五段の未然形 サ変の未然形「さ」
	尊敬	られる	受身・尊敬	られ	られ	られる	られる	られれ	られろ られよ		右以外の動詞の未然形
	可能	れる	可能・自発	れ	れ	れる	れる	れれ	○		五段の未然形 サ変の未然形「さ」
	自発	られる	可能・自発	られ	られ	られる	られる	られれ	○		右以外の動詞の未然形
	使役	せる	使役・尊敬	せ	せ	せる	せる	せれ	せろ せよ		五段の未然形 サ変の未然形「さ」
	尊敬	させる	使役・尊敬	させ	させ	させる	させる	させれ	させろ させよ		右以外の動詞の未然形
	打消	ない	打消	なかろ	なかっ なく	ない	ない	なけれ	○	形容詞型	動詞・助動詞の未然形
	(否定)	ぬ(ん)	打消	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○	特殊型	
	推量	う	推量・意志	○	○	う	(う)	○	○	不変化型	五段・形容詞・形容動詞の未然形
		よう	推量・意志	○	○	よう	(よう)	○	○		右以外の動詞の未然形
連用形	過去 完了	た	過去・完了 存続	たろ	○	た	た	たら	○	特殊型	活用語の連用形
	推量	そうだ	様態・推量	そうだろ	そうだっ そうで そうに	そうだ	そうな	そうなら	○	形容動詞型	動詞型活用語の連用形 形容詞・形容動詞の語幹
	(様態)	そうです	丁寧な様態 丁寧な推量	そうでしょ	そうでし	そうです	(そうです)	○	○	特殊型	

こと。

	接続	活用
様態の「そうだ」	連用形に（形・形動には語幹に）	形動型（完全）
伝聞の「そうだ」	終止形に	形動型（不完全）

○「そうです」は、「そうだ」の語幹「そう」に、ていねいの助動詞「です」がついたものとする説がある。この場合は、「ようです」も、「よう」＋「です」とする。

まい

○最近、「まい」の接続にかなりの混乱が見られる。

来まい。来るまい。来まい。（カ変）

すまい。するまい。せまい。（サ変）

落ちるまい。受けるまい。（上一・下一）

正しくは、来まい、しまい、落ちまい、受けまい。

らしい

○助動詞の「らしい」と接尾語（形容詞を作る）の「らしい」とを混同しないこと。

A　Aさんは先生らしい人だ。

B　向こうから来る人は、どうも先生らしい。

Aは接尾語（「先生らしい」で形容詞。）、Bは助動詞。接尾語は「…っぽい」「…じみた」と交代できる。助動詞は「らしい」の上に「である」を入れることができる。

だ

○断定の助動詞と形容動詞の活用語尾の「だ」との混同をしないこと。

A　彼はすなおだ。彼は幸福だ。（形容動詞）

B　彼は生徒だ。彼の求めているのは幸福だ。（助動詞）

Aの場合は、「すなおだ」「幸福だ」の前に連用修飾語（たとえば「とても」）をとることができるが、Bはとることができない。逆に、Bの場合は、「生徒だ」「幸福だ」の前に連体修飾語（たとえば「大きな」）をとることができるが、Aはとることができない。

連	希望	たい	希望	たから	たく たかっ	たい	たい	たけれ	○	形容詞型	動詞型活用語の連用形
		たがる	希望	たがら たがろ	たがり たがっ	たがる	たがる	たがれ	○	五段型	
	丁寧	ます	丁寧	ませ ましょ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし	特殊型	動詞・助動詞の連用形
終止形	（打消推量）	まい	打消推量・打消意志	○	○	まい	（まい）	○	○	不変化型	五段の終止形 その他は未然形
	推量	らしい	推定	○	らしく らしかっ	らしい	らしい	らしけれ	○	形容詞型	体言 動詞・形容詞の終止形 形容動詞の語幹
	伝聞	そうだ	伝聞	○	そうで	そうだ	○	○	○	形容動詞型	動詞型活用語の連用形 形容動詞の語幹
		そうです	丁寧な伝聞	○	そうでし	そうです	○	○	○	特殊型	
体言・連体形	比況	ようだ	同等・比較・例示・不確実な断定	ようだろ	ようだっ ようで ように	ようだ	ような	ようなら	○	形容動詞型	活用語の連体形 格助詞「の」 連体詞
		ようです	丁寧な同右	ようでしょ	ようでし	ようです	（ようです）	○	○	特殊型	
体言・助詞	断定（指定）	だ	断定（指定）	だろ	だっ で	だ	（な）	なら	○	形容動詞型	体言 助詞
		です	丁寧な断定（丁寧な指定）	でしょ	でし	です	（です）	○	○	特殊型	

9 助詞

【助詞の種類】

a 格助詞
主として体言について、その体言が、同じ文中の他の語に対して、どんな関係にあるかを示す助詞。

b 接続助詞
活用語について接続の文節をつくり、意味の上で上下の文節をつづける助詞。

c 係助詞
いろいろの語について、指示・疑問・反語などの意味を添え、文末にかかる助詞。(「は・も」以外の係助詞が文中にある場合は、その助詞のついた文節がかかってゆく文末の活用語に一定の約束係り結びの法則を要求する〈文語〉。)

d 副助詞
いろいろの語について、その語にある意味を添え、さらに、その助詞のついた文節が下の文節を修飾する、そういうはたらきをもつ助詞。

e 終助詞
主として文末にあって、禁止・希望・感動などの意味をあらわす助詞。

f 間投助詞
文節の終わりについて語勢を強め、または感動の意をあらわす助詞。

【助詞の分類のしかた】

	第一類	第二類	第三類	第四類
四分類	格助	接助	副助	終助
六分類	格助	接助	副助 係助	終助 間助
七分類	格助	接助 並列助	副助 係助	終助 間助

○助詞(文語)一覧

a 格助詞

語	おもな意味・用法	接続
が	主語・連体修飾語・体言の代用・対象語	体言・連体形・副助詞など
の	主語・連体修飾語・体言の代用・同格・比喩・対象語	
を	動作の目的・経過する場所や時間・動作の起点・動作の相手	
に	場所・時・帰着点・比較の基準・変化の結果・動作の目的・受身や使役の対象・原因理由・手段方法・比喩・強意・並列	
へ	方向方角	
と	共同の動作・変化の結果・引用・内容指示・比較・比喩・強意・並列・方法	
より	比較の基準・場所や時間の起点・経由・手段方法・原因理由・限定・即時	
から	起点・経由・原因理由・手段方法	
にて	場所・時・手段材料・原因理由・状態	
して	手段方法・共同の動作・使役の対象	
や	列挙	

b 接続助詞

語	おもな意味・用法	接続
ば	順接の仮定条件 順接の確定条件・単純な接続	未然形 已然形

○助詞(口語)一覧

a 格助詞

語	おもな意味・用法	接続
が	主語・対象語	体言・連体形・助詞の「の」など
の	主語・連体修飾語・体言の代用・並列・対象語	
を	動作の目的・経過する場所・動作の起点	
に	場所・時・帰着点・比較の基準・変化の結果・動作の目的・受身や使役の対象・原因理由・強意・並列	
へ	方向方角・帰着点・動作の対象	
と	共同の動作・変化の結果・引用・内容指示・比較・比喩・強意・並列・方法	
より	比較の基準・限定	
から	起点・経由・原因理由・受身の対象	
で	場所・時・手段材料・原因理由・状態	
や	列挙	

b 接続助詞

語	おもな意味・用法	接続
ば	順接(仮定条件・確定条件)・単純接続・列挙	仮定形
ても	逆接(仮定条件・確定条件)	連用形
と	順接(仮定条件・確定条件)・逆接の仮定条件・単純な接続	終止形

【係り結びの法則】

○文語で、係助詞「ぞ・なむ」(強意)、「や・か」(疑問・反語)が文中に用いられているとき、これをうける文末の活用語(終止形)が連体形となる。

花散りけり。→花ぞ散りける。

○係助詞「こそ」(強意)が用いられているとき、文末の活用語が已然形となる。

花散りけり。→花こそ散りけれ。

【係り結びの注意事項】

○結びの省略―係助詞をうける文末の活用語が省略されることがある。

悲しきことも多くなむ。(はべる)

いかなる御心地にか。(あらむ)

○結びの語の消去―結びの語が言い切りにならず、下の文に続くときには結びの語の資格を失う。これを結びの語の消去(流れる)という。

風なきに花ぞ散りければよめる歌。

○逆接用法―「こそ」の係り結びが文中に用いられる場合は、多く逆接となって下へつづく。

人こそ見えね秋は来にけり。(訪ねてくる人の気配こそないけれども秋はおとずれたことだ)

○挿入文(または引用文)中の係り結びは、その挿入文の文末において結ばれるべきものだから、全文の文末には影響を及ぼさない。

○上に疑問・反語の意をもつ副詞「いかで・いかに・など」があるときにも、連体形で結ぶ。

など歌はよまで、むげに離れたる。

○文末の用法―文末に用いられる場合、「ぞ」は体言・連体形に、「や」は終止形に、「か」は連体形につく。

何人の住むぞ。　ありやなしや。

こなたにあるか。

語	意味・用法	接続
と・とも	逆接の仮定条件	終止形・形容詞型の連用形
ど・ども	逆接の確定条件・ある条件下で予想と反対の事がらがおこる場合	已然形
が	逆接の確定条件・単純な接続	連体形
に	逆接の確定条件・順接の確定条件・単純な接続・添加・「につけても」の意	連体形・「ず」など
を	逆接の確定条件・順接の確定条件・単純な接続	連体形
て	逆接の確定条件・順接の確定条件・単純な接続(事実の連続・状態・中止・並列など)	連用形・助詞「と」など
して	単純な接続・順接の確定条件	連用形
で	打消して接続	未然形
つつ	動作の反復や継続・同時併行の動作・逆接の確定条件	連用形
ながら	逆接の確定条件・同時併行の動作	連用形・形容詞の終止形
ものの ものを ものから	逆接の確定条件	連体形

c 係助詞

語	意味・用法
は	ある事物を他の事物と区別しまた強調する
も	同じ趣の事物の中から一つをとりあげていう・並列をあらわす・強意をあらわす
ぞ・なむ	上の語句を強く指示する(強意)
こそ	上の語句を強く指示する(強意)
や(やは) か(かは)	疑問または反語をあらわす

語	意味・用法	接続
けれども	逆接の確定条件・単純な接続	終止形
が	逆接の確定条件	終止形
のに	逆接の確定条件	終止形・連体形
ので	順接の確定条件(原因理由)	連体形
から	順接の確定条件(原因理由)	終止形
て・で	逆接の確定条件・順接の確定条件・単純な接続(事実の連続・状態・中止・並列など)	連用形
し	列挙	終止形
たり	列挙	連用形
ながら	逆接の確定条件・同時併行の動作	連用形・形容詞の終止形

c 係助詞

語	意味・用法
は	ある事物を他の事物と区別しまた強調する
も	同じ趣の事物の中から一つをとりあげていう・並列をあらわす・強意をあらわす
こそ	上の語句を強く指示する(強意)
か	不確かなことをあらわす・選択の意をあらわす
さえ	極端な事例をあげて他を類推させる・限定して他をかえりみない意をあらわす・添加をあらわす
でも	極端な事例をあげて他を類推させる・ばくぜんとした指示をあらわす
しか	限定する意をあらわす(下に打消がくる)

【助詞（文語）の注意事項】

が・の

○平安時代中期までの文学作品に用いられている「が」は、すべて格助詞の「が」と考えてよい。

○「が」「の」が用いられている主語と呼応する述語は、言い切りにならないで他の文節（主として体言）を修飾するのが普通であった。

○中世に、人を表す体言に「が」がつけられる場合、その人に対する親愛、または軽蔑の気持ちが加わる。また、「の」の場合には尊敬の気持ちが加わった。

に

○格助詞「に」を用いて、尊敬すべき主体の場所（地位）を指示的にかかげ、主体の動作を表すことがある。

○「に」の識別

①連用形＋「に」→完了の助動詞
②連体形＋「に」→連体形の下に
　(1)体言が補える→格助詞
　(2)体言が補えない→接続助詞
③体言＋「に」→「に」のかわりに「なり」をつけた場合
　(1)言い切れる→断定の助動詞
　(2)言い切れない→格助詞

○「が」「に」「を」の識別

①体言＋が・に・を→格助詞
②連体形＋が・に・を
　(1)連体形の下に体言が補える→格助詞
　(2)連体形の下に体言が補えない→接続助詞

ば

○「ば」が助動詞の「ず」、および形容詞型の活用語未然形に続くときは、「ずは」「――くは」となることが多い。

d 副助詞

語	意味・用法
だに	一つをとりたてて他をかえりみない意をあらわす・程度の軽いものをあげて他に重いもののあることを推測させる
すら	程度の軽いものをあげて他に重いもののあることを推測させる
さへ	添加の意をあらわす
し	強意をあらわす
のみ	限定の意をあらわす・強意をあらわす
ばかり	限定の意をあらわす・程度をあらわす
まで	動作の範囲・限度・程度をあらわす
など	例示をあらわす・婉曲（えんきょく）にいうのに用いる

e 終助詞

語	意味・用法	接続
な	禁止	終止形・ラ変の連体形
そ	禁止(な〜そ)	連用形・カ変とサ変の未然形
ばや	自分の希望	未然形
なむ	他への願望	未然形
しか	自分の希望	連用形
もが	願望	体言・連用形・格助詞など
か	感動	体言・連体形
かし	念をおす・強意	完結した文の文末
な	感動	体言・完結した文の文末
よ	呼びかけ・感動	体言・完結した文の文末
は・も	感動	完結した文の文末

f 間投助詞

語	意味・用法
や	感動をあらわす・呼びかけ・並列をあらわす
を	調子をそえ軽い感動をあらわす

d 副助詞

語	意味・用法
なり	並列して選択の余地のあることをあらわす・最小の限度をあらわす
やら	不確実の意をあらわす・並列をあらわす
ほど	およその程度をあらわす・「につれて」の意
くらい	およその程度・軽くみる気持ちをそえる
だけ	限定をあらわす・程度をあらわす
まで	動作の範囲・限度をあらわす・添加をあらわす
ばかり	大体の程度・限定をあらわす
など	例示をあらわす・軽く扱う気持ちや謙遜の気持ちをそえる

e 終助詞

語	意味・用法	接続
な	禁止	終止形
か	疑問・反語・感動	体言・連体形
の	断定・質問	連体形
な	感動	終止形
ぞ	念をおす・強意	終止形
とも	強意	終止形
よ	念をおす・強意	体言・終止形・命令形
わ	軽い感動	終止形
こと	感動（女性語）	終止形
もの	不満・理由	終止形

f 間投助詞

語	意味・用法
ね(ねえ)	感動をあらわす・念をおし調子を強める
さ	念をおし調子を強める

とも

○「とも」には、確定した事柄を受け、それに拘束されない意を強調的に表す「修辞的仮定」の用法がある。

ささなみの志賀の大わだよど**むとも**昔の人にまたも逢はめやも　（万葉集・三一）

して

○「して」の識別

①連用形＋「して」→接続助詞「して」
②体言＋「して」→接続詞「して」
③（語幹）＋「して」→サ変動詞連用形＋接続助詞「て」

は・も

○「は」が、格助詞「を」に接続する場合は、「ば」と濁り「をば」となる。

名**をば**、さかきの造（みやつこ）となむいひける。　（竹取物語）

○「ぞ」「こそ」が「も」とともに用いられた「もぞ」「もこそ」は、「……すると困る」という意味になる。

烏（からす）など**もこそ**見つくれ。　（源氏物語・若紫）

ぞ・なむ・や・か・こそ

○「ぞ」「こそ」は和歌に多く用いられたが、「なむ」は和歌にはほとんど用いられず、会話や、作者の思いを述べる部分で用いられた。

○推量の助動詞「む」の已然形「め」＋反語の係助詞「や」＋詠嘆の終助詞「も」という形をとり、「めやも」となることがある。上代に多く用いられた。

紫草（むらさき）のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋**めやも**　（万葉集・二一）

○係助詞ではない「こそ」に、次のようなものがある。

①体言について呼びかけの意を表すもの。（接尾語）

右近の君**こそ**、まづもの見給へ。　（源氏物語・夕顔）

②動詞の連用形についてあつらえの意を表すもの（終助詞）。これは奈良時代だけの用法である。

うぐひすの待ちがてにせし梅が花散らずあり**こそ**思ふ児がため　（万葉集・八四五）

だに・すら・さへ

○口語の「さへ」には、文語の「だに」「すら」「さへ」のすべての意味があるから注意せよ。

○「だに」と「すら」とは意味上ほとんど差がないが、奈良時代には「すら」が多用された。「すら」は平安時代、「だに」に領域を侵されて衰えるが、漢文訓読体の中で生き続け、口語の「すら」に至る。

など

○「など」は複数を表さない。複数は、「ども」「たち」「ら」などの接尾語が表す。

し

○「し」の識別

①連用形＋「し」→過去の助動詞「き」の連用形

まま母なり**し**人は、宮仕へせしが……　（更級日記）

②「し」＋助詞（助動詞）→サ変の連用形

からうたづくりなど**し**ける。　（土佐日記）

③文中の「し」を省いても意味が変わらない→強意の副助詞

しまがくれゆく舟を**し**ぞ思ふ。　（古今集・四〇九）

なむ

○「なむ」の識別

①未然形＋なむ→他に対する願望の終助詞

入らせたまはぬさきに、雪降ら**なむ**。　（紫式部日記）

②連用形＋なむ→強意の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋推量の助動詞「む」

散り**なむ**後ぞ恋しかるべき。　（古今集・六七）

③その他の語＋なむ→強意の係助詞「なむ」

柿本人麻呂**なむ**歌の聖なりける。　（古今集・序）

ばや

○「ばや」の識別

①未然形＋ばや

(1)下に句が続いている→仮定の接続助詞「ば」＋疑問の係助詞「や」

着てにほは**ばや**人のしるべき　（万葉集・一二九七）

(2)そこで文が終わっている→願望の終助詞「ばや」

助け奉ら**ばや**。　（平家物語・敦盛最期）

②已然形＋ばや→確定の接続助詞「ば」＋疑問の係助詞「や」

寝れ**ばや**人の見えつらむ。　（古今集・五五二）

【助詞（口語）の注意事項】

が・の

○連体修飾語を表す「の」の中には、

兄の健一、魚のいきのいいやつ

のように、同格を表すと見られる用法がある。

で

○「で」の識別

①形容動詞の語幹＋「で」→形容動詞連用形語尾
からだは元気で、病気もしない。
②体言＋「で」→断定の助動詞「だ」の連用形
これが父で、あれが母です。
③連用形（撥音便・イ音便）＋「で」→接続助詞
本を読んでしまう。泳いでいる。
④「で」＋「も」→副助詞「でも」の一部
子供でも知っている。

か

○副助詞の「か」と終助詞の「か」の違い

①副助詞の「か」は、不定の意を表して、文中にあって上の語を下の語へかけていくはたらきをするが、終助詞の「か」は、文末で疑問の意を表す。

②副助詞の「か」は、反語を表すことはできないが、終助詞の「か」は、反語を表すことができる。

から・ので

○「から」「ので」は語感に多少の違いがある。

A　雨が降ったので、遠足を延期した。

B　雨が降ったから、遠足を延期した。

Aでは「遠足を延期した」という事実のほうに、Bでは「雨が降ったから」という理由（因果関係）のほうに重点がおかれているといってよい。

10 敬語表現

【敬語表現の種類】

a 話し手（書き手）が、話題の中の人物に対する敬意をあらわすもの。

①尊敬表現―話題の中の動作する人を敬うもの。

②謙譲表現―話題の中の動作する人を低めることによって、動作を受ける人を敬うもの。

b 話し手（書き手）が、聞き手（読み手）に対する敬意をあらわすもの。

③丁寧表現

【敬語表現の図解】

①尊敬表現

（話題） Ⓐ′ 高める A スル→Ⓑ ／ 話し手 （伝達）→ 聞き手

AとBとは同等の位置であったものを、AをA′の位置に高めて、動作する人に対する敬意をあらわす。

②謙譲表現

（話題） A スル 低める→Ⓑ Ⓐ′ 敬意 ／ 話し手 （伝達）→ 聞き手

AとBとは同等の位置であったものを、AをA′に低めると、相対的に動作を受けるBを高めた形になる。

③丁寧表現

（話題） ／ 話し手 （伝達） 敬意 ⇒ 聞き手

話題の内容に関係なく話し手が聞き手を敬う。

（注）A＝話題の中の動作する人
B＝話題の中の動作を受ける人

○敬語（文語）一覧

	品詞	語
尊敬	動詞	おはす・おはします・まします・ます・います〈行ク・来ル・イル〉いまそかり〈イル〉思ほす・おぼす・おぼしめす〈思ウ〉仰す・のたまふ〈言ウ〉たまふ・たぶ〈クレル〉みそなはす・御覧ず〈見ル〉大殿ごもる〈ネル〉あそばす〈スル〉聞こす・聞こしめす〈聞ク・食ウ〉召す〈招ク・衣食スル〉
	補助動詞	給ふ〈四段〉たぶ・おはす・おはします・ます・います・あそばす・めす
	助動詞	る・らる・す・さす・しむ・す〈四段〉
	名詞	帝・上・宮
	代名詞	そこ・きみ・いまし・みまし
	接頭語	おほ君・み格子・おほみ心・おん身・御衣（ぎょい）
	接尾語	関白殿・俊成卿・母ぎみ
謙譲	動詞	承る〈聞ク〉聞こゆ・聞こえさす〈言ウ〉さぶらふ・はべり〈仕エル・イル〉奉る・まつる〈与エル〉申す〈言ウ〉賜はる〈モラウ〉つかまつる〈仕エル・スル〉参る・まうづ・まかる・まかづ〈行ク・来ル〉奏す〈帝ニ言ウ〉啓す〈后ニ言ウ〉致す・存ず
	補助動詞	奉る・まつる・申す・仕うまつる・聞こゆ・参らす・給ふ〈下二段〉
	代名詞	おのれ・それがし・わらは
	接頭語	小生・愚考・拙者・拝見・弊藩
	接尾語	われら・者ども・犬め
丁寧	動詞	侍り・さぶらふ〈イル・アル〉
	補助動詞	侍り・さぶらふ・申す

○文語の敬語表現には、絶対敬語・最高敬語・自称敬語など、注意すべきものがある。

○敬語（口語）一覧

	品詞	語
尊敬	動詞	おっしゃる〈言ウ〉いらっしゃる〈行ク・来ル・イル〉なさる〈スル〉あがる・めしあがる〈食ウ〉くださる〈クレル〉あそばす〈スル〉
	補助動詞	いらっしゃる・おいでになる・あそばす・くださる・なさる・お―になる・お―なさる・ご―になる・ご―なさる・お―あそばす
	助動詞	れる・られる
	名詞	先生・閣下・殿下
	代名詞	あなた・きみ・貴下
	接頭語	お顔・ごりっぱ・令名・おみ足・貴社・尊名・おん見舞
	接尾語	父上・山田君・弟ご・兄さん
謙譲	動詞	申す・申しあげる〈言ウ〉あげる・さしあげる〈ヤル〉いたす〈スル〉まいる〈行ク・来ル〉おめにかかる〈アウ〉いただく〈モラウ・食ウ〉うかがう〈聞ク・訪ネル〉存ずる〈思ウ・知ル〉うけたまわる〈聞ク〉かしこまる〈承知スル〉
	補助動詞	お―申す・お―申しあげる・いたす・あげる・さしあげる
	名詞	家内・宅
	代名詞	わたくし・ぼく・手前
	接頭語	粗茶・拙宅・愚妻・小社・卑見・拝聴
	接尾語	わたくしども・ぼくら
丁寧	動詞	いたす・申す・ございます
	補助動詞	ございます
	助動詞	です・ます
	接頭語	お茶・ごはん

品詞（文語）の識別

語	句例	識別
し	三笠の山に出でし月かも。 花をし見れば物思ひもなし。 心して、あやまちすな。 花摘まして、我に賜へ。	過去の助動詞「き」の連体形。連用形に接続。 副助詞。省いても文意が通じる。 サ変動詞の連用形語尾。 奈良時代の尊敬の助動詞。未然形に接続。
しか	昨日こそ早苗とりしか。 父はいかになりしか。 何時しか年の暮れとなりぬ。 宮はしかのたまはせたり。	過去の助動詞「き」の已然形。係り結び。 過去の助動詞の連体形＋疑問の係助詞。 副助詞「し」＋疑問の助詞。 副詞。「そのように」の意。
せ	こころよげに笑はせたまふ。 照りもせず曇りもはてぬ月。 雨降りせばうれしからまし。 姿は闇に消え失せにけり。	尊敬の助動詞「す」の連用形。未然形に接続。 サ変動詞の未然形。 過去の助動詞「き」の未然形。反実仮想。 動詞「失す」の活用語尾。分解できない。
たり	勝者の態度は堂々たり。 小次郎、敗れたり。 君、君たり、臣、臣たり。	形容動詞の活用語尾。上が体言ではない。 完了の助動詞。連用形に接続。 断定の助動詞。体言に接続。
て	鳥啼きて山いよよ静かなり。 風すさまじう吹きてけり。 一夜待てど、音づれもなし。	接続助詞。連用形に接続し、上下を連結。 完了の助動詞の連用形。下が助動詞。 動詞「待つ」の已然形の語尾。
と	竹を切りて花筒としたり。 行列は粛然と進みゆきぬ。 釈迦は長者の子とありき。 はらはらと落葉降る。	格助詞。体言に接続。 形容動詞「粛然たり」連用形の語尾。 断定の助動詞「たり」。「で」と訳せる。 副詞の一部。状態の副詞。
とも	花、白雪かとも見ゆ。 弱敵たりとも侮るなかれ。	格助詞「と」＋係助詞「も」。 逆接・仮定条件の接続助詞。終止形に接続。
な	花散りなば、山を下らむ。 あなかしこ、人に聞かすな。 花の色はうつりにけりな。 春の鳥な鳴きそ鳴きそ。 家聞かな。名告らさね。 衣かすべき妹もあらなくに。	完了の助動詞「ぬ」の未然形。連用形に接続。 禁止の終助詞。文末の終止形に接続。 詠嘆の終助詞。文末につく。 禁止の副詞。下に、「連用形＋そ」を要求。 奈良時代の終助詞。他への願望。未然形に。 奈良時代の打消の助動詞。「く」は接尾語。

語	句例	識別
なむ	母なむ宮なりける。 桜花咲かば咲かなむ。 春さらば花も咲きなむ。 日暮れぬ。とく去なむ。	係助詞「なむ」。文末が連体形となる。 終助詞「なむ」。他への願望。未然形に。 完了の助動詞＋推量の助動詞。連用形に。 ナ変動詞「往ぬ」の語尾＋意志の助動詞。
なり	雲散りて月明らかなり。 人まつ虫の声すなり。 日記を書かむとするなり。	形容動詞の活用語尾。 伝聞・詠嘆・推定の助動詞。終止形に。 断定の助動詞。体言、連体形に接続。
に	この年二月にみまかりぬ。 遠く訪ひしに留守なりき。 そはいみじき笛にさふらふ。 高砂の尾上の桜咲きにけり。 心静かに念払を唱ふ。 無常の風たちまちに至る。 妹に別れてせむ術知らに。	格助詞。体言に接続。 接続助詞。逆接確定条件。連体形に接続。 断定の助動詞「なり」連用形。体言に。 完了の助動詞「ぬ」連用形。連用形に。 形容動詞の連用形の語尾。 副詞「たちまちに」の一部。 奈良時代の打消の助動詞。未然形に接続。
にて	海辺にて貝を拾ふ。 かの者はわが父にて候ふ。 兄は昨年死にてけり。	格助詞「にて」。体言に接続。 断定の助動詞「なり」＋接続助詞「て」。 ナ変動詞の語尾＋完了の助動詞の連用形。
ぬ	風とともに去りぬ。 年月は人を待たぬものぞ。	完了の助動詞。連用形に接続。 打消の助動詞。未然形に接続。
ね	色こそ見えね香やはかくるる。 夜ふけぬ。とく去りね。 家聞かな。名告らさね。	打消の助動詞の已然形。逆接用法。 完了の助動詞「ぬ」の命令形。強意。 奈良時代の終助詞。願望。未然形に接続。
ばや	紅葉すればや照りまさるらむ。 心あてに折らばや折らむ。 和歌ひとつよまばや。	順接確定条件「ば」＋疑問の係助詞。 順接仮定条件「ば」＋疑問の係助詞。 希望の終助詞。未然形に接続。
めり	竜田川紅葉乱れて流るめり。 幼くして漢籍を読めり。	推量の助動詞。終止形に接続。 動詞「読む」の語尾＋完了の助動詞「り」。
らむ	峯の白雪もとけぬらむ。 心知れらむ人に見せばや。 いかで情けあらむ人もがな。 雨降れば水まさるならむ。	現在推量の助動詞。終止形に接続。 完了の助動詞「り」未然形＋推量の助動詞。 ラ変動詞の語尾＋推量（婉曲）の助動詞。 断定の助動詞の一部＋推量の助動詞。
る	筆を取れば物書かる。 花の散るをなげきてよめる歌。 明日なむ人と別るる。	自発の助動詞。未然形に接続。 完了の助動詞「り」。已然形に接続。 動詞「別る」の連体形の語尾の一部。

品詞（口語）の識別

語	文例	識別
が	目がさめたが、まだ眠い。 目がさめたが、まだ眠い。 目がさめた。が、まだ眠い。	格助詞。体言に接続。 逆接確定条件の接続助詞。終止形に接続。 接続詞。文のはじめに用いてある。
けれど	寒いけれど仕事に出かけた。 彼は無知だ。けれど正直だ。 わたしが山田ですけれど。	逆接確定条件の接続助詞。終止形に接続。 接続詞。文のはじめに用いてある。 終助詞。完結した文のおわりにつく。
させる	朝早く掃除をさせる。 カラー写真を写させる。 生徒に古美術を見させる。	サ変動詞の未然形「さ」＋使役の助動詞。 動詞の未然形「写さ」＋使役の助動詞。 使役の助動詞。カ変・上一・下一につく。
そう	北国では雪が降ったそうだ。 今にも泣きそうな顔だ。 急にそう言われても困るよ。 そう、もう十年にもなるね。 たいそうなことを言うな。	伝聞の助動詞「そうだ」。終止形に接続。 様態の助動詞「そうだ」。連用形に接続。 副詞。一文節をつくる。 感動詞。接続も修飾もしないで独立。 形容動詞「たいそうだ」の一部。
だ	もうすっかり秋だ。 野菜のとりいれもすんだ。 祭りの風俗もはなやかだ。 友人の姉さんは美しいそうだ。 兄はいかにも悲しそうだ。 今夜も星が降るようだ。 日が暮れる。だが家は遠い。	断定の助動詞。体言に接続。 過去の助動詞「た」。音便について濁る。 形容動詞の語尾。 伝聞の助動詞「そうだ」の一部。終止形に。 様態の助動詞「そうだ」の一部。語幹に。 比況の助動詞「ようだ」の一部。連体形に。 接続詞の一部。文のはじめに用いてある。
だろう	多分犯人は彼女だろう。 山の宿はきっと静かだろう。 人目には気楽そうだろう。	断定の助動詞未然形「だろ」＋推量の助動詞。 形容動詞の未然形＋推量の助動詞。 様態の助動詞未然形＋推量の助動詞。
で	彼はりっぱな芸術家である。 山の頂上で握手をした。 こどもが二人（ふたり）遊んでいる。 彼女は聡明で明朗なひとだ。 その涙は真珠のようである。 明朝出発予定だそうである。	断定の助動詞「だ」の連用形。体言に接続。 格助詞。体言に接続。 接続助詞「て」。音便に接続して濁音化。 形容動詞の連用形の語尾。 比況の助動詞「ようだ」。「の」に接続。 伝聞の助動詞「そうだ」。終止形に接続。

語	文例	識別
でも	海でも川でも泳いだものだ。 いくら騒いでも怒られない。 手紙を読んでもくれない。 雪でも降りそうな空模様だ。 顔は晴れやかでも心は闇だ。 そう高価な品物でもない。 買いたい。でも、金がない。	格助詞「で」＋係助詞「も」。体言接続。 逆接の接続助詞。これ以上分解できない。 接続助詞「て」の濁音化＋係助詞「も」。 副助詞「でも」。 形容動詞の連用形語尾＋係助詞「も」。 断定の助動詞「だ」の連用形＋係助詞「も」。 接続助詞。文のはじめに用いてある。
な	学生なのに勉強をしない。 朝のさわやかな空気を吸う。 お化けの出そうな古屋敷だ。 小さな秋、みつけた。 まるでタヌキのような犬だ。 あまりひどいことをするな。 やあ、よく来てくれたな。	断定の助動詞「だ」の連体形。 形容動詞の連用形語尾。 様態の助動詞「そうだ」の連体形の一部。 連体詞。「大きな・どんな・そんな」も。 比況の助動詞「ようだ」の連体形の一部。 禁止の終助詞。文末にくる。 感動の終助詞。文末にくる。
ない	本を読む時間がない。 ちっとも本を読まない。 どうも合格はおぼつかない。	形容詞。独立して述語となっている。 打消の助動詞。未然形に接続。 形容詞「おぼつかない」の一部。
の	月の明るい夜のことだった。 もっと大きいのをください。 君、仕事はもうすんだの？ あの人は行ってしまった。	格助詞。体言や連体形に接続。 格助詞。体言の代用のはたらきをもつ。 終助詞。文末につく。 連体詞。「この・その・どの」も同じ。
ので	寒いので焚火（たきび）をはじめた。 このペンは君のではないか。	接続助詞。順接確定条件（理由）。 体言代用の格助詞＋断定の助動詞の連用形。
のに	顔は美しいのに口が悪い。 列車は朝早いのに乗ろう。	接続助詞。逆接確定条件。連体形に接続。 体言代用の格助詞＋格助詞「に」。
よう	ゆっくり話をしよう。 君のような人ははじめてだ。 あとで教員室に来るように。	意志の助動詞。未然形に接続。 例示の助動詞「ようだ」の連体形の一部。 終助詞「ように」の一部。軽い命令の意。
らしい	また物価があがるらしい。 いかにも男らしい男だ。	推定の助動詞。終止形に接続。 形容詞「男らしい」をつくる接尾語。
れる	この海でも真珠貝がとれる。 先生に呼ばれる。 警官に呼びとめられる。	動詞「とれる」の一部。（可能動詞） 受身の助動詞。未然形に接続。 受身の助動詞「られる」の一部。

ゆれる表記

——日常用いられることばの、漢字の使いかたについて問題になりやすいものを挙げ、その目安となる考えかたを示す。

「一所懸命」と「一生懸命」

中世、主として武士が「一か所の領地を、命にかけて生活の頼みとする」意味で「一所懸命」という語を用いた。それが後に「命がけで事をおこなうこと」の意味に転じるとともに、「一生懸命」とも書かれるようになった。現在では「一生懸命」のほうが一般的で新聞・放送やほとんどの教科書は「一生」のほうを採用している。

「回復」と「快復」

もとの状態にかえるという意味をあらわすには、一般的に「回復」を用いるが、病気が治ることをあらわす場合には、「全快」「快癒」などの連想もあって、従来「快復」と書くことが多い。

「恢復」は、「恢」が失われたものを再び手に入れる意味をもっていて、よい連想をともなうので、一般的にも病気の場合にも用いることができる。

「拡声器」と「拡声機」

一般に原理・構造などの単純なものを「器」で、複雑なものを「機」であらわす。たとえば、メガホンは「拡声器」で、マイク・アンプ・スピーカーなどの装置をそなえたものは「拡声機」である。そろばん・計算尺などは「計算器」、コンピューターなどは「計算機」である。「電話機」と「受話器」との使いわけもこの例である。

「管弦楽」と「管絃楽」

当用漢字制定の時、「管絃楽」を「管弦楽」と書き換えることにされた。しかし「弦」（弓のつる糸）は古来弦楽器に用いられたもので、中国の古書にも「管弦」と記されている。「絃」を「弦」に改めたのは、本来の表記にもどしたものといえる。

「起原」と「起源」

「源」（みなもと）は水源の意味であるが、「原」（はら）も文字のなりたちからいえば「厂」（がけ）と泉とを組み合わせたもので、「源」と同義である。だから「起原」「起源」は同じ意味と考えてよい。語ゲン・ゲン泉・ゲン流なども同様。今後は、みなもとの意味としては「財源・資源・震源・熱源」などのように「源」が用いられる傾向にあるが、「原料・原因・病原菌」など慣用の語を変えてはいけない。

「基準」と「規準」

本来「基準」は基礎となる標準、「規準」は手本となる標準という意味である。しかし実際にはその違いを明らかにしにくいので、現在では特に必要のある場合のほかは「基準」を用いるのがよいとされている。同様な例として「依嘱・気運・強剛・自修」などは、「委嘱・機運・強豪・自習」などを用いるのがよいとされている。

「劇務」と「激務」

「劇・激」ともに「はげしい」意味をもち、「ゲキ務」のほかにも「ゲキ暑・ゲキ職・ゲキ戦・ゲキ痛・ゲキ変・ゲキ烈」など多くの語に二通りの表記が行われた。しかし今後は「激」を用いるのが好もしいとされている。ただし「非常にはげしく危険」な「劇薬」と、その同類の「劇毒・劇物・劇剤」などに限って「劇」を用いることになるだろう。

「最小限」と「最少限」

「サイショウゲン」の反対語は「最大限」であるから「小」を用いるのがよい。「縮小・縮少」の場合も、その反対語は「拡大」であるから、これもやはり「小」の方がよい。

「歳」と「才」

年齢をあらわす「歳」のかわりに「才」を用いることは、慣用として便宜的に認められている。しかし正式には「歳」を用いるべきである。また年齢以外の「歳月・歳入・歳出・歳末」などには「才」を用いない。

「重体」と「重態」

「体」「態」ともに、ありさま・ようすの意味だから、病気の重いさまをいう場合、どちらを用いても誤りではないが、字画の少ない「体」を用いるのが適当とされる。「容体・容態」も同様。ただし「変体（仮名）」と「変態（心理）」、「実体（がない）」と「実態（調査）」などは使いわけなくてはいけない。

「車両」と「車輛」

当用漢字表による書き換えによって、「輛（くるま）」を「両（ふたつ）」で代用するようになったのだが、本来「両」は、車を数える単位として用いられていた文字だから古義の復活とみてよい。

「十周年」と「十週年」

「周」も「週」も本来ほとんど同じ意味の文字なので、現在は「周」に統一されている。「週」は一週間の意味に関する場合に限って用いる。

「受賞」と「受章」

賞品（賞状・賞金・賞杯・賞詞など）をうけるのが「受賞」である。芥川賞やレコード大賞をうけるのもこれ。勲章・褒章を受けるのが「受章」で、文化勲章や紫綬褒章などをうける場合がこれである。

「順法」と「遵法」

「順」は、さからわず従うこと、「遵」は、規範にのっとり従うことである。本来は「遵法」が用いられ初期の当用漢字表に「遵」は含まれていたのであるが、後に補正の際削られたため、現在は「順法」に書き換えることになっている。「遵守」「遵奉」なども同類。

「素性」と「素姓」

家柄や育ちの意味の「スジョウ」は仏教語の「種姓」からきたとされ、一般的に「素姓」と表記された。しかし現在では「根性」などの連想もあってか「素性」が一般的に用いられているのでそれに従ってよい。必ずしも起原にこだわらず、一般的な用い方に従う例としては「栄養（営）」「機転（気）」「親（深）切」「先頭（登）」などがある。

誤りやすい敬語

——日常生活に用いられる敬語表現の中から問題になりがちなものを挙げて、基準となる考えかたを示す。

田中様でございますか

「田中であるか」という問いかけにおいて、田中という人を尊敬する表現としては「田中様でいらっしゃいますか。」というのが適当である。「ございますか」は「あるか」をていねいに表現したにすぎず、田中様への敬意が示されてはいない。これは魚をさして「これは魚でございますか」と問うのと同じである。

お降りの方はございませんか

バスなどで、乗客へのていねい表現として用いてよい。しかし、論理的にはこれは、きいている乗客一同に対して「ありませんか」よりいっそうていねいな気持ちをあらわしたことばではあっても、「お降りの方」に対する直接な尊敬表現ではない。「お降りの方」を尊敬するには「いらっしゃいませんか」というのが適当である。

お求めやすいお値段

「お」と「になる」の間に動詞の連用形を入れて尊敬表現をつくるが、「求める」の尊敬表現は「お求めになる」である。「やすい」を加えると「お求めになりやすい」というべきである。形容詞に「お」をつけて「おうつくしい」「お強い」などということはあるが、動詞にあてはめて「お買いやすい・お読みやすい」などというのは標準的・一般的表現とはいえない。

御芳名・御尊父

「名前」ということばを尊敬をこめて表現する場合、「お・御」などの接頭語をつけて「お名前・御姓名」などとするのは普通である。しかし「芳名・尊名・高名」などは、それ自体尊敬の意のこもっていることばであるから、さらに「御」をつけるのは敬語の重複である。「尊父・令息・令室・父兄」なども同様。

御訪問される

正しい尊敬表現は「訪問される」「御訪問になる」「御訪問なさる」である。すなわち「サレル」「ゴ（オ）～ニナル」「ゴ（オ）～ナサル」が標準的な型である。元来「ゴ（オ）～スル」は、「お迎えする・お預りする」のように自己の動作について相手に敬意をあらわす謙譲表現だから、その下に尊敬の「レル」をつけるのは矛盾しているわけである。

先生は何時ごろ参られますか

「参る」は「行く・来る」の謙譲語であるから、自分の動作について用いるべきで、相手の動作につけるのは失礼である。尊敬の「れる」をつけても失礼に変わりはない。「いらっしゃいますか」などを用いるのがよい。ただし、「行く・来る」対象となる場所に敬意をはらう必要がある場合には「参られる」を用いるのは正しい表現である。

うちの子におもちゃを買ってあげる

「あげる」は本来、下の者が上の者に渡すいいかただから、他人に対して右のようにいうと、身内である自分の子を高めて待遇することになる。「買ってやる」でよい。もっとも最近女性用語としてさかんに使われるため、これを謙譲語とみるよりも、ことばをやわらげ上品らしく物をいうためのていねい語（美化語）と解する意見もあるが、現在のところ、まだ正しい表現とはいえない。

御質問がおありですか

「御質問がございますか」とともによく使われる。「ございます」はていねい語であるから、「はい、質問がございます」ということもできる。「おありです」は相手に対する尊敬表現であるから「はい、おありです」とはいえない。二つの質問ともに誤りではないが、直接相手を尊敬する気持ちをあらわすには「おありですか」の方が適当だといえる。

先生が申されました

「申す」は謙譲語だから、尊敬の「れる」をつけるのは矛盾している。前出の「参られる」と同様の誤用である。ただし、複合動詞となった「申し出る」「申し込む」などには、今日謙譲の意味は全くないので、「申し出られる」「お申し込みください」などのように尊敬表現に用いてもかまわない。

みんなを御紹介していただきたい

前記「御訪問される」の項でとりあげたように「御紹介する」は自分の動作につける謙譲語だから、尊敬すべき相手の動作について用いるのは誤りである。「紹介していただきたい」「御紹介いただきたい」などとすべきである。また「御紹介してください」も同様に誤りで、「紹介してください」「（御）紹介なさってください」「御紹介ください」などとすべきである。なお「御紹介を願う・御紹介をいただく・御紹介をたまわる」などは正しい表現。

手軽にお求めできる品物

「オ～デキル」は、「オ～スル」の可能表現である。「オ～スル」は前記のように謙譲表現であるから、これが可能の形になっても尊敬表現になることはない。だから、尊敬の「オ～ニナル」の型を用いて「お求めになれる」といわなくてはならない。

おかぜをひいた皇后陛下

「おかぜを召した」とすれば問題はない。しかし、敬語形を省略するなら、前の方を省いても後の方は省かないこと。「かぜをひかれた」とすればよい。「あらかじめ電話をなさって行く方が安全でしょう」も、「電話をして行かれる方が」とするのがよい。

お話しになられる

「話す」を敬語化すると「話される」「お話しになる」「お話しなさる（あそばす）」となる。「オ～ナル」と「レル」とを重複して用いるのは不適当。「おっしゃる」に「れる」をつけたり、「お召し上がり方」などといったりするのも同様に不適切。

正確な用語

――いい文章を書くためには、漢字表記や語形を正確に書くとともに、用語の意味・用法を誤りなくとらえることを心掛けよう。

意味・用法にずれはないか。

○若いころから肌の手当てを十分にすることです。（化粧品の広告）

「手当て」の意味はふつう「傷病に対する処置」の意だから、ここでは「手入れ」とするのがよい。

○日本画・彫像の美にあ然とみとれる参会者（村の広報）

「あ然」は「あきれて物が言えないようす」をあらわす語だから実情とずれている。「うっとりと」などとするとよい。

前後関係が照応しているか。

○代表団一行は、エールフランスの二つの便に分散してニューヨーク入りする。（新聞）

たった「二つの便」について「分散」というのは不適切。「分乗」であろう。

○厳に秘密漏えいを守らなければならない。（新聞）

前後の意味を一貫させるには「秘密漏えいをしないようにしなければならない」か、「秘密を守らなければならない」かにすべきである。

慣用語句を誤解してはいないか。

○日ごろ温厚なH選手すら、思わず柳眉を逆立てて怒った。（週刊誌）

「柳眉を逆立てる」は優美な若い女性が怒る時に用いる表現であって、男性のH選手にあてはめるのは誤用である。

○悪評サクサクの地元商店街／閉店時間、接客態度に消費者不満（新聞の見出し）

「サクサク（嘖々）」は、口々にほめそやすさまで、好評の時しか使わない。

○おへそをかかえて笑う。（週刊誌）

○ミカンが実もたわわに実っている。（市広報）

○間髪を移さず、ブラスバンド二百三十人が入場。（新聞）

なども慣用句が混乱して用いられたもの。

無意味な重ねことばはないか。

○工事はいまだに未完成だ。（新聞）

○この自転車には施錠がかけられてありません。（警察広報）

○お酒の弱い方に、もっとも最適なお酒です。（新聞広告）

○費用はおよそ千数百円です。（PTA広報）

○地鎮祭はわが国古来からの習俗的行事である。（新聞）

「犯罪をおかす」など、誤例は多い。

いろはかるた

江は江戸系、京は京系、大は大阪系とされるものを示す。△印はその他。

い	犬も歩けば棒にあたる	江
	一寸先は闇・石の上にも三年	京
	一を聞いて十を知る	大
ろ	論より証拠	江
	論語読みの論語しらず	京
	六十の三つ子	大
	六十の手習	△
は	花より団子	江・大
	針の穴から天のぞく	京
	憎まれ子世にはばかる	江
に	二階から目薬	京
	にくまれ子神直し	大
	似た者夫婦	△
ほ	骨折損のくたびれもうけ	江
	ほれたが因果	京
	仏の顔も三度	大
	仏つくって魂入れず	△
へ	屁をひって尻つぼめ	江
	下手の長談義	京・大
	下手の横好き	△
と	年寄りの冷や水	江
	豆腐にかすがい	京
	遠い一家より近い隣	大
	とんびが鷹を生む	△
	灯台もとくらし	△
ち	ちりもつもれば山となる	江
	地獄の沙汰も金しだい	京・大
	ちょうちんにつり鐘	△
り	律義者の子だくさん	江
	綸言汗の如し	京・大
ぬ	盗人の昼寝	江・大
	ぬかに釘	京
	濡れ手で粟（のつかみどり）	△
る	瑠璃も玻璃も照らせば光る	江
	類をもって集まる	京・大
を	老いては子に従え	江
	鬼も十八（蛇もはたち）	京
	鬼の女房に鬼神	大
	尾を振る犬は打てぬ	△
わ	割れ鍋にとじ蓋	江
	笑う門には福来る	京
	若い時は二度ない	大
か	かったいの瘡うらみ	江
	蛙のつらに水	京
	かげ裏の豆もはじけ時	大
	可愛い子には旅をさせ	△
	かせぐに追いつく貧乏なし	△
よ	よしのずいから天のぞく	江
	夜目遠目傘のうち	京
	横槌で庭を掃く	大
た	旅は道づれ世は情け	江
	立て板に水	京
	大食上戸の餅食らい	大
	尊い寺は門から	△
れ	良薬は口に苦し	江
	れんぎで腹切る	京・大
そ	総領の甚六	江
	袖すり合うも他生の縁	京・大
	損して得とれ	△
つ	月夜に釜をぬく	江・京
	爪に火をともす	大
	月にむら雲（花に風）	△
ね	念には念を入れ	江
	猫に小判	京
	寝耳に水	大
な	泣きつらに蜂	江
	済す時の閻魔顔	京
	習わぬ経は読めぬ	大
	泣く子と地頭（には勝てぬ）	△
ら	楽あれば苦あり	江
	来年の事を言えば鬼が笑う	京
	楽して楽知らず	大
む	無理が通れば道理ひっこむ	江
	馬の耳に念仏	京
	無芸大食	大

う
- 嘘から出たまこと　江
- 氏より育ち　京
- 牛を馬にする　大
- 瓜のつるになすびはならぬ　△
- 鵜のまねする烏（水におぼれる）　△

ゐ
- 芋の煮えたもご存じない（か）　江
- いわしの頭も信心から　京
- いり豆に花（が咲く）　大
- 井の中の蛙（大海を知らず）　△

の
- のど元すぎれば熱さを忘れる　江
- のみといえばつち　京
- 野良の節句ばたらき　大
- 能ある鷹は爪かくす　△

お
- 鬼に金棒　江
- 負うた子に教えられて浅瀬を渡る　京
- 陰陽師身上知らず　大
- 同じ穴のきつね（むじな）　△

く
- 臭い物には蓋をする　江
- 臭い物には蠅がたかる　京
- 腐っても鯛　京
- 果報は寝て待て　大

や
- 安物買いの銭失い　江
- 闇夜に鉄砲　京・大
- やぶから棒　△

ま
- 負けるが勝ち　江
- まかぬ種ははえぬ　京
- 待てば甘露（海路）のひよりあり　大

け
- 芸は身を助ける　江
- 下駄に焼き味噌　京
- 下戸の建てた蔵はない　大
- 喧嘩両成敗　△

ふ
- 文はやりたし書く手はもたず　江
- 武士は食わねど高楊枝　京・大
- ふくろうの宵だくみ　△

こ
- 子は三界の首っかせ　江
- これに懲りよ道斎坊　京
- 志は松の葉　大
- ころばぬ先の杖　△
- 紺屋の白ばかま　△

え
- 得手に帆をあげ　江
- 縁の下の力持ち　京
- 栄耀に餅の皮むく　京
- 閻魔の色事　△

て
- 亭主の好きな赤烏帽子　江
- 寺から里へ・天からふんどし　京
- 天道人を殺さず　大

あ
- 頭かくして尻かくさず　江
- 足もとから鳥が立つ　京
- あきないは牛のよだれ　△

さ
- 三返まわって煙草にしよ　江
- 竿の先に鈴　京
- さわらぬ神にたたりなし　大
- さるも木から落ちる　△
- 三人よれば文殊のちえ　△

き
- 聞いて極楽見て地獄　江
- 義理とふんどし　京・大

ゆ
- 油断大敵　江・大
- 幽霊の浜風　京

め
- 目の上の（たん）こぶ　江・大

み
- 身から出たさび　江
- 身は身で通る裸ん坊　京
- 身うちが古み　大

し
- 知らぬが仏　江
- しわん坊の柿の種　京
- 尻くらえの観音　大

ゑ
- 縁は異なもの（味なもの）　江
- 縁と月日は末を待て　京
- 縁の下の舞い　京
- 縁の下の力持ち　大

ひ
- 貧乏ひまなし　江
- ひょうたんから駒　京
- 貧僧の重ねどき　大
- ひょうたんでなまず　△

も
- 門前の小僧習わぬ経を読む　江
- 餅は餅屋　京
- 桃栗三年柿八年　大

せ
- 背に腹はかえられぬ　江
- 聖は道によりて賢し・雪隠で饅頭　京
- 背戸が馬もあいくち　大
- せいては事をしそんじる　△

す
- 粋は身を食う　江
- 雀百まで踊り忘れず　京
- 墨に染まれば黒くなる　大
- 好きこそものの上手なれ　△

京
- 京の夢、大坂の夢　江
- 京に田舎あり　京

日本のことわざ

悪銭身につかず　悪事でかせいだ金はすぐなくなること。

頭隠して尻隠さず　悪い点を一部隠して、全体を隠したつもりでいること。

あばたもえくぼ　愛する人に対しては、欠点までも美点に見えること。

雨降って地固まる　もめごとのあと物事が落ち着くこと。

石の上にも三年　一か所にがまんしていればいつかは成功するということ。

一文惜しみの百知らず　目前の小さな損害にこだわって将来の大損を考えないこと。

一寸の虫にも五分の魂　どんなにつまらない者にも、それなりの魂があること。

命あっての物種　何よりも命が大事との意。

言わぬが花　はっきり言わぬほうが値打ちがある。

魚心あれば水心　相手にその気持ちがあればこちらにも応ずる気持ちがおこること。

うそから出たまこと　まさかと思っていたことが事実となること。

うどの大木　大きいばかりで役立たぬこと。

江戸のかたきを長崎でうつ　恨みを別のところではらすこと。

縁は異なもの　人間の因縁は不思議なもの。

岡目八目　局外者のほうが当事者よりもよく情勢がわかること。

小田原評定　長びいてきまらない相談。

鬼の目にも涙　無慈悲な者にも一面の情があること。

帯に短し（たすきに長し）　どっちつかずで役にたたぬさま。

溺れる者はわらをもつかむ　困った時はどんなつまらぬ物にもすがりつくこと。

親の光は七光り　親の威光が子に及ぶさま。

女賢しくして牛売りそこなう　女がかしこいのはたかが知れていて、結局損害を招く。

快刀乱麻を断つ　もつれた物事をすっき

りと解決する。

壁に耳あり障子に目あり　秘密はとかくもれやすいというおしえ。

亀の甲より年の功　年長者の経験はおろそかにできないということ。

枯れ木も山のにぎわい　つまらぬものでもないよりましだの意。

木に竹をつぐ　物事のつながりが不自然なさま。

清水の舞台から飛びおりる　危険をかえりみず思い切って事を行う。

紺屋のあさって　約束期日があてにならず、延期しがちなこと。

細工はりゅうりゅう(仕上げを御覧じろ)　批評は結果を見てから言ってくれ、の意。

地震・雷・火事・親父　世の中で恐ろしいものを順にならべたもの。

士族の商法　手馴れぬ商売で失敗すること。

重箱のすみを楊枝でほじくる　つまらぬことまであれこれつつくこと。

上手の手から水がもれる　上手な人でも時に失敗する。

沈香もたかず屁もひらず　格別よい事も悪い事もしないこと。

住めば都　自分の住む所が一番よいこと。

背に腹はかえられぬ　せっぱつまったときに損得など考えられないさま。

船頭多くして船山にのぼる　さしずする人が多くて仕事がすすまないこと。

象牙の塔にこもる　学者が俗世間を離れて研究ばかりするさま。

その手は桑名の焼きはまぐり　その手に乗ってだまされたりはしない、の意。

損して得とれ　一時的な損をしてもあとでより大きな得となるようにせよということ。

対岸の火事　直接自分に利害関係のないこと。

高嶺の花　あこがれても手に入らぬもの。

蓼食う虫も好きずき　人の好みはまちまち。

棚から牡丹餅　思いがけぬ幸運にあうこと。

他人の飯を食う　世間にもまれて苦しい経験を積むこと。

旅の恥はかきすて　旅先ではどんな恥ずかしいことをしてもその場限りだ、の意。

卵に目鼻　愛らしい顔の形容。

月夜に提灯　あっても無用なもののたとえ。

出る杭は打たれる　出すぎたことをすると人から憎まれる。

敵は本能寺にあり　真の目的は別にあること。

天に唾する　他人を傷つけようとすると、かえって自分が傷つくことになる意。

問うに落ちず語るに落ちる　問われても言わないのに、自分が話すうちにうっかり真実を語ってしまうこと。

十日の菊、六日のあやめ　時期おくれで役に立たないこと。

十で神童、十五で才子、はたち過ぎればただの人　成長するにつれて平凡人になること。

毒をくらわば皿まで　一度悪事をしたら、とことんまで悪いことをしようとすること。

取らぬ狸の皮算用　まだ手に入らぬものを、手に入れたつもりになること。

泣く子と地頭には勝てぬ　道理のわからぬ者や権力者と争ってもむだだの意。

情けは人のためならず　人に情けをかけておけばいつかは自分のためになる。

難波の葦は伊勢の浜荻　各土地で呼び名がかわるように、風習もかわるものだの意。

生兵法は大怪我のもと　未熟者が身のほどしらずのことをすると大失敗を招く。

習うより慣れろ　学ぶより体験せよ。

二足の草鞋をはく　二つの職を兼ねる。

盗人に追い銭　損の上に損を重ねること。

盗人を捕らえて縄をなう　準備しないで、いざというときうろたえるさま。

寝た子をおこす　何も知らぬ者にいらぬ知恵をつけること。

のど元過ぎれば熱さを忘れる　すんでしまうと苦しさを忘れてしまう。

暖簾に腕押し　手ごたえのないさま。

腹も身のうち　食べすぎを戒めることば。

引かれ者の小唄　負けおしみで平気なふりをすること。

人の噂も七十五日　世間の評判もやがては消えてしまうということ。

人の褌で角力をとる　他人の物を利用して自分のことをする。

人を呪わば穴二つ　他人を傷つけようとすると自分にもその害が及ぶこと。

火のない所に煙は立たぬ　噂が出るからには根拠となる事実があるはずだ。

貧すれば鈍す　貧乏すれば人間がだめになる。

笛吹けど踊らず　手をつくしても人がこちらの思い通りに動かない。

古川に水絶えず　昔からの財産家は、衰えてもやはりそれなりのことがある。

判官びいき　弱者に味方したい気持ち。

仏(地蔵)の顔も三度　どんなおとなしい人でも何度も侮辱されれば怒るということ。

真綿で首をしめる　じわじわと苦しめる。

ミイラ取りがミイラになる　働きかけた者が逆に相手方に引き入れられること。

水清ければ魚すまず　清潔すぎると人がよりつかない。

三つ子の魂百まで　幼いときの性質は一生消えない。

昔取った杵柄　かつて習練したわざは後まで使える、の意。

無用の長物　大きいくせに役に立たない物。

餅は餅屋　専門分野にはやはり専門家があたるのがよい、の意。

本木にまさる末木なし　新しい知り合いよりは古い知り合いがよい。

焼け石に水　労力をかけても効果がないさま。

焼けぼっくいに火がつく　一たん切れていた男女の関係がよみがえること。

柳に雪折れなし　無理をしなければ安全

に生きてゆける意。
やはり野におけれんげ草　野人はやはり民間で生きてゆくのがよい。
弱りめに祟りめ　不運に不運が重なること。
わが仏(ほとけ)尊(たっと)し　自分の信ずることだけを重んじる態度をいう。

からだの部分に関する慣用語

(目)
目が利く　鑑識力がある。＝目が高い。
目が肥えている　多く見て鑑識力がある。
目が出る　①驚く。②幸運がめぐりくる。
目がない　①非常に好む。②鑑識力がない。
目が長い　寛容である。
目から鼻へ抜ける　聡明である。
目から火が出る　顔面を強打した感覚。
目で殺す　色目を使って悩殺する。
目と鼻(の先)　距離が近いさま。
目に余る　程度がはなはだしくて無視できぬさま。
目に入れても痛くない　非常に可愛がる。
目に角(かど)を立てる　怒った目つきをする。
目正月　見て楽しむこと。＝目の保養。
目には目を　相手に同じ仕返しをすること。
目に物見せる　ひどいめにあわせる。
目の黒いうち　生きている間。
目の毒　見ると欲しくなるような物。
目の寄る所玉がよる　同類が集まる。
目引き袖引き　ことばに出さずうわさするさま。
目も当てられぬ　ひどくて正視できない。
目を疑う　びっくりするほど意外。
目を奪う　あまりのすばらしさに驚く。
目を掠(かす)める　ひそかにする。＝目を盗む。
目を皿にする　目を大きく見ひらく。
目を三角にする　こわい目つきをする。
目をつぶる　①死ぬ。②そしらぬふりをする。
目を抜く　人をごまかす。
目をはばかる　人にみられぬようにする。
目を光らす　きびしく見張る。
目を引く　人の注意をむけさせる。
目を細める　うれしさにほほえむ。

(鼻)
鼻が高い　得意なさま。
鼻であしらう　すげない態度をとる。
鼻で笑う　軽蔑して笑う。
鼻にかける　自慢する。
鼻につく　飽きていや気がおこる。
鼻の下が長い　①おろかだ。②女にあまい。
鼻の下が干(ひ)上がる　貧乏して食うに困る。
はなもひっかけぬ　相手にしない。
鼻を明かす　だしぬいて驚かせる。
鼻をうごめかす　自慢する。
鼻を折る　慢心をくじく。恥をかかせる。
鼻を突き合わせる　近くよりそう。
鼻つまみ　きらわれ者。
鼻を鳴らす　甘えたりすねたりするさま。
鼻をならべる　一線にならぶ。

(口)
口が合う　言うことが一致する。
口があく　①事がはじまる。②弁解できる。
口が奢(おご)る　美食になれる。
口がかかる　芸人などが客から招かれる。
口が堅い　言ってならぬ事は他言せぬ性質。
口が酸(す)っぱくなる　繰り返して言う。
口がすべる　言ってならぬ事をつい言う。
口が減らない　へらずぐちをきく。
口が曲がる　罰当たりな事を言ったときうける罰。
口から先へ生まれる　口数の多い者をいう。
口に合う　飲食物が好みの味と一致する。
口に風を引かせる　言った事がむだになる。
口に年貢はいらぬ　勝手な放言のたとえ。
口にのぼる　うわさされる。
口に糊する　貧しく生活する。
口に乗る　①話題にされる。②だまされる。
口に針がある　ことばに悪意がこもっている。
口の下から　話したすぐ後から。
口のはたが黄色い　若くて未熟のさま。
口の端(は)にかかる　話のたねにされる。
口は重宝(ちょうほう)　口先だけなら何とでも言えるの意。
口八丁手八丁　ことばも行動も達者なさま。
口をかける　わたりをつける。申し入れる。
口を固める　①他言を禁ずる。②約束する。
口をそろえる　同じことを言う。
口をとがらせる　怒りや不満の表情。
口をぬぐう　そしらぬふりをする。
口をよせる　巫女(みこ)が霊魂を呼び語らせる。
口を割る　白状する。

(耳)
耳が痛い　弱点をつかれて、聞くのがつらい。
耳が肥える　音曲をよく聞き分ける。
耳が早い　情報などをよく聞きこむ。
耳から口　すぐに受けうりして話す。
耳にさわる　聞いて不快だ。
耳にたこができる　同じ事を聞き飽きる。
耳にはさむ　ちらと聞く。
耳の穴をひろげる　注意して聞く。
耳の役に聞く　いやいやながら聞く。
耳を疑う　聞いた事が信じられないこと。
耳を貸す　相手の相談に乗る。
耳を澄(す)ます　注意して聞く。＝耳をたてる。
耳をそろえる　金額をきちんと整える。

(手)

手が上がる　技量が上達する。
手が空く　仕事がひまになる。
手が後ろにまわる　罪人として捕らえられる。
手が長い　盗癖がある。
手がふさがる　他の事をする余裕がない。
手が焼ける　めんどうを見て苦労する。
手に汗を握る　緊張・興奮・不安のさま。
手に余る　自分の力では及ばない。
手に乗る　①欺かれる。②自由になる。
手の切れるような　新しい紙幣の形容。
手も足も出ない　困りきったさま。
手をあげる　①降参する。②打とうとする。
手を負う　負傷する。
手を折る　指を折って数える。
手を切る　関係を清算する。
手を砕く　あれこれ手段をめぐらす。
手を拱く　①腕を組む。②考えこむ。③傍観する。
手を通す　礼服などを着る。
手を濡らさず　少しも骨を折らないで。

（足）

足がつく　露顕のいとぐちになる。
足が出る　赤字になる。
足が早い　①腐りやすい。②売れ行きがよい。
足が棒になる　足が疲れる。
足の裏の飯粒　つきまとわれてうるさいたとえ。
足を洗う　よくない社会から抜け出る。
足を奪う　交通の手段を奪う。
足をすくう　すきにつけこみ失敗させる。
足をのばす　①くつろぐ。②遠くへ行く。
足を引っぱる　人の仕事をさまたげる。
足を向けて寝ない　恩への感謝の態度。

（その他）

頭の黒い鼠　物をかすめとる悪い人。
頭の蠅を追う　自分一身の始末をする。
頭をはねる　うわ前をかすめ取る。
頭を丸める　出家する。
顔が立つ　世間への面目が立つ。
顔を汚す　面目をつぶす。＝顔に泥をぬる。
顔を貸す　頼まれて相談にのる。
胸に一物　ひそかに考える事があること。
胸に落ちる　得心がゆく。
胸をさする　怒りをおさえる。
胸をたたく　しっかり引きうける気持ち。
腹が痛む　身銭を切る。＝自腹を切る。
腹が黒い　根性が悪い。
腹が淋しい　金銭に困っている。
腹が煮える　激怒をおぼえる。
腹の皮をよる　大笑いするさま。
腹を合わす　心を通じて共謀する。
腹を肥やす　私利をむさぼる。
背中に眼はない　陰の悪事には気づかない。
へそが宿替えする　＝へそで茶をわかす。
へそを固める　かたく決意する。
へそを曲げる　機嫌をそこねて意地悪くなる。
爪が長い　欲深い。
爪に火をともす　ひどくけちであるさま。
爪の垢を煎じてのむ　その人にあやかる。
爪をとぐ　機会を待ちかまえる。
指をくわえる　①傍観。②はにかむ。③羨望。
指をさす　①指示。②非難。③見つもる。
毛のはえた　すこしたちまさった。
尻が暖まる　同じ位置に長くとどまる。
尻が長い　訪問などして長居をする。
尻に敷く　あなどってわがままをする。
尻に火がつく　物事がさし迫るさま。
尻に帆をかける　あわてて逃げだす。
尻の毛を抜く　人の油断をみてだます。
尻をもちこむ　事後の責任をとう。
尻を割る　かくしている事を暴露する。

動物にたとえた慣用句

犬と猿　仲のわるいたとえ。
犬の糞で敵を討つ　卑劣な手段で復讐する。
犬の遠吠え　臆病者がかげで威張るさま。
犬の逃げ吠え　逃げながら口返答するさま。
犬骨折って鷹にとられる　苦労して得た物を他に奪われる。
犬も食わぬ　まったく相手にされない。
犬も朋輩鷹も朋輩　地位の差はあっても同じ主人をもつ同僚であるの意。
犬をよろこばせる　嘔吐すること。
猫にかつおぶし　あやまちの起きやすいさま。
猫に小判　無知な者に真価がわからぬさま。
猫の手もかりたい　非常に忙しいたとえ。
猫の額　面積の狭いたとえ。
猫の目　たえず移りかわるさま。
猫も杓子も　何もかもすべての意。
猫よりまし　いないより多少は役立つこと。
猫をかぶる　本性をかくして上品ぶるさま。
猿が仏を笑う　小才の者が偉い人を嘲ける。
猿の尻笑い　自分の欠点を知らず人を笑う。
馬と猿　仲のよいたとえ。
馬には乗ってみよ　人には添うてみよの意。
馬の骨　素姓のわからぬ者をあざける語。
馬の耳に念仏　言ってもききめのないさま。
馬を牛にのりかえる　すぐれたものを捨てて劣ったものにかえるたとえ。
牛の歩み　進みぐあいの遅いたとえ。
牛の角を蜂がさす　何とも感じないさま。
牛のよだれ　だらだら続く。＝牛の小便。
牛にひかれて善光寺まいり　人に誘われて思いもよらなかった所へ行くこと。
うさぎの角　実際には無いことのたとえ。
うさぎの糞　きれぎれで続かないさま。
鼠が塩を引く　小事がつもって大事となる。

鼠に引かれそう　家で一人ぽっちでいるさま。
窮鼠猫をかむ　追いつめられた弱者の逆襲。
虎につばさ＝鬼に金棒。虎に角。
虎の尾をふむ　きわめて危険なさま。
虎の子　大切に秘蔵するもの。
狐につままれる　わけのわからぬさま。
狐の嫁入り　日がさしていて雨の降るさま。
狐を馬に乗せたよう　落着きのないさま。
狸の念仏　途中で立ち消えになるさま。
狸寝入り　眠ったふりをすること。
いたちの最後っ屁　最後の非常手段。醜態。
いたちの道　往き来がぷっつり絶えること。
河童の川流れ＝猿も木から落ちる。
河童の屁　物事がたやすくできること。
蛙の行列　むこう見ずなこと。
蛙の子は蛙　凡人の子はやはり凡人だの意。
蛙のつらへ水　平気な顔つきをいう。
蛙の頬かぶり　目先のきかないさま。
蛙の目借りどき　春の眠い時期をいう。
蛇が蚊をのんだよう　腹にたまらぬさま。
蛇の生殺し　決着をつけず不徹底なさま。
蛇の道はへび　同類の者はその道に詳しい。
烏の足あと　年とった人の目尻のしわ。
烏の髪　黒くてつややかな髪。
烏の行水　入浴の短いたとえ。
烏の鳴かぬ日はあっても　一日欠かさずの意。
雀百まで踊り忘れず　幼時の習慣は一生。
雀の涙　ほんのわずかなこと。
閑古鳥がなく　不景気でさびしいさま。
鶴の一声　権威者の一言で決着がつくこと。
はきだめに鶴　場に不相応な立派な人。
焼野の雉子夜の鶴　親が子を思う情。
雉子も鳴かずば打たれまい　無用の発言が災難を招くたとえ。
鳩に豆鉄砲　驚いてきょとんとしたさま。
鳶が鷹を生む　平凡な親がいい子を生む。
鳶に油揚をさらわれる　大事な物を横あいから奪われる。
いすかの嘴　物事がくいちがうこと。
鳥なき里の蝙蝠　すぐれた人のいない所でつまらぬ者が勢力をふるうさま。
立つ鳥あとを濁さず　去り際をきれいにする。

ことばの遊び

【しゃれことば】
○雨垂れの石で―ほ（惚・掘）れこんでいる。
○雨降りの太鼓で―なり（形・鳴）が悪い。
○石の地蔵様で―もの言わぬ。
○石屋の宿がえで―おもいおもい（思・重）
○井戸替の釣瓶で―あげたりさげたり。
○犬と猫の喧嘩で―にゃわん（似合わぬ）。
○植木屋の大風で―き（気・木）がもめる。
○うさぎの逆立ちで―耳が痛い。
○うどん屋の釜で―湯（言う）ばかり。
○鬼の死んだので―行き場がない。
○傘屋の小僧で―骨を折って叱られる。
○木曽の深山で―き（気・木）が多い。
○黒犬の尻で―面白く（尾も白く）ない。
○五月の鯉で―口ばかり。
○師走の蛙で―考える（寒蛙）。
○手水鉢の金魚で―癪（杓）にさわる。
○蜻蛉の鉢巻きで―目先が見えぬ。
○羽織のひもで―胸にある。
○春の日で―くれ（暮・呉れ）そうでくれぬ。
○火の見の鳥で―お高くとまっている。
○貧乏稲荷で―鳥居（取り柄）がない。
○仏の御器で―金椀（叶わぬ）。
○曲がった松の木で―柱（走ら）にゃならぬ。
○目のない鋸で―切っても切れぬ。
○大和の吊し柿で―蔕（下手）なりに固まる。
○夜明けの行燈で―うすぼんやり。

【回文】
―下から読んでも同じ文句となる文―
○如何にも苦い。
○池の名は知らず珍し花の景
○失せましたいかが致しませう。
○折るな枝鶯ひくう妙なるを
○仇が来たか。
○刈萱は惜しみて見しをはや刈るか
○啄木鳥の飛ぶや小藪と軒つづき
○消ゆる此の雪や早消ゆ残る雪
○草くきの葉に降る霜に見やるなる闇にもしるう庭の菊咲く
○草の名は知らず珍し花の咲く
○御意見がしみてして見し寒稽古
○繁る葉をかざして岩間闇くだく深山は出でし坂も遙けし
○竹屋が焼けた。（＝竹山焼けた。）
○友の名はそれ誰々ぞ花のもと
○永き日に小猫と小猫二匹かな
○松の木の雪やはや消ゆ軒のつま
○わたし負けましたわ。

【隠し題】
―歌中に物名をよみこむもの―
○尋ね問ひ辻に往ぬる道はさとり得とも生れゐる世をさとらざる憂し　荷田春満
（十二支全部をよみこんでいる）
○憂かりけり旅は来しかた行く先も姿やつると人の見むかも　小野古道友
（鳥名十種―鵜・雁・梟・ひわ・雉子・鷺・百舌・鶴・鳶・鴫）
○有明けの影のみ白みゆくものをさしも逢ふてふ名をいかにせむ　橘　枝直
（虫名十種―蟻・蚊・蚤・虱・蜘蛛・サシ〈蠅の幼虫〉・虻・蝶・ナオハムシ・イガムシ）
○あはれ秋の草に露おき月出でば生きて会はまし待ちもするがに　橘　枝直
（国名十―阿波・安芸・津・隠岐・紀伊・出羽・壱岐・安房・志摩・駿河）
○思ひつつ忍びは果てじ君なくば何とかならん長き行く末　橘　枝直
（木名十種・桧・つつじ・ひば・樒・桑・栂・楢・柿・柚・楠）

漢文の学習

図説編

「鼎」(かなえ)　鍋状の器に、一対の耳と三足を付したものをいう。普通は三足であるが、時に四角で四足のものもある。下から火を焚き、神にささげる肉類を煮るのに用いた。「鼎の軽重を問う」(春秋左氏伝)ということばがある通り、王権の象徴として重視され、礼器のうちで最も尊ばれた。ここにあげた鼎は殷代後期のもので、内壁に葦の紋章がある。高さ二二・七㎝、口径一八・七㎝。

▲黄河水源の泉

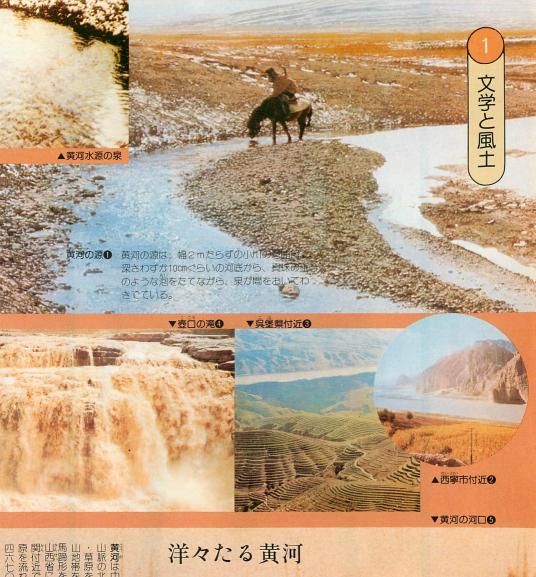
黄河の源❶ 黄河の源は、幅2mたらずの小川の湾曲部で、深さわずか10㎝ぐらいの河底から、真珠の玉のような泡をたてながら、泉が間をおいてわきでている。

▼壺口の滝❹

▼呉堡県付近❸

▲西寧市付近❷

▼黄河の河口❺

洋々たる黄河

黄河は中国第二の大河である。青海省巴顔喀拉山脈の北、約古宗列に源を発し、東流して高山・草原をへてのち、青海・四川・甘粛三省の高山地帯を貫流し蘭州に達する。ここで北折し、馬蹄形をえがいてさらに南に向かい、陝西省と山西省にまたがる黄土高原の間を奔流する。潼関付近で再び東に折れ、河南・山東両省の大平原を流れ、山東省墾利県で渤海にそそぐ。全長四六七〇㎞。

▲氷原地区の氷河

揚子江の源❻　唐古拉山脈の山々の氷河がとけた水、これ
子江の上流、沱沱河の水源である。

▼巫峡❽

▼瞿塘峡❼

黄河・揚子江略図

▲西陵峡❾

▼東中国海にのぞむ上海❿

雄大な揚子江

揚子江は中国最大の川である。西蔵高原に源を発し、万年雪をいただく山々から流れ出る水を集めて東に流れ、青海省で向きを南にかえて、金沙江となる。雲南・貴州高原の北側で急に方向を東にかえて四川盆地に入り、やがて水量を増し、すさまじい勢いで三峡に流れこむ。三峡を出ると流域は急にひらけ、流れもゆるやかになり、曲がりくねりながら大平原を流れ、江蘇・安徽省をぬって上海に至り東中国海にそそぐ。全長五五三〇km。

◀越王の矛（永春文庫蔵）
越王句践の子孫が持っていた銅矛。文字が金象嵌で入っている。字体は鳥書。

◀獣骨文字
中国最古の記録。甲骨文。これは牛の肩甲骨を用いたもの。

▲戦争の図
戦国時代の青銅の壺に描かれた図。上段は野戦、下段は水戦。

◀長沮・桀溺と論語
孔子が旅の途中で出会った二人の隠者。乱れた世を治めんとする孔子の徒労をあざ笑う。（「論語」微子篇）
⇨P343

◀屈原と漁父
⇨P342

◀始皇帝画像（北京歴史博物館蔵）
⇨P346

◀荊軻が秦王（始皇帝）を刺そうとする場面（山東武梁祠画像石より）
⇨P346

大鵬図▶
「荘子」逍遥遊篇に出てくる大鵬。羽の長さは幾千里。九万里の上空を南海の果てに飛び去る。
⇨P345

悠久の歴史を秘め

▲長城最東端にある山海関

▲長城最西端にある嘉峪関

項羽は秦に滅ぼされた楚の将軍の子孫。劉邦は沛の地主の息子で秦の小役人。秦末に挙兵し、ともに天下を争った。⇨P346

▲項羽

◀劉邦（高祖）

▶陳勝・呉広の率いる秦末の農民蜂起（B.C.二〇九）
秦の始皇帝、二世皇帝の圧政に反抗し、陳勝・呉広は農民をひきいて反乱をおこした。それを機に各地に反乱がおこり、やがて秦は滅亡する。⇨P346

▲官吏の出行図（遼寧省遼陽漢壁画）
山東省梁山県後銀山の後漢墓の壁画。官職をおびた墓の主が、供をそろえて出行する図で墓主生前の晴れ姿を描いたもの。

◀官軍と闘う黄巾軍
184年2月、張角のひきいる黄巾軍はいっせいに蜂起し、腐敗しきった後漢王朝に総攻撃を開始した。

▶廬山　江西省、鄱陽湖のほとりにそびえる名山。

▲峨眉山　四川盆地の西南にそびえる山。

西湖　浙江省杭州市の西にある名勝。

◀江南の春（江蘇省揚子江河口付近）

◀洞庭湖　湖南省北部にある大湖。

▲華清池
陝西省驪山のふもとにある。「春寒くして浴を賜う華清の池」（長恨歌）

◀白帝城にある「観星亭」の旧跡

▲洞庭湖畔にある岳陽楼

◀天山積雪図（清 華嵒画）

◀鉄塔（河南省開封市）

▶宋代士大夫のつどい（宋・馬遠筆）

▲タクラマカン砂漠 新疆ウイグル自治区に

◀「水滸伝」の英雄―林冲（京劇）⇨P358

▲三顧の礼 劉備は諸葛亮を三度訪ね、軍政の教えを請

◀山居図（元・銭選筆）

▼「西遊記」で知られる火焔山（甘粛省）
夕日を浴びると燃えるように 赤く輝くという。⇨P358

▼魯迅の故郷（紹興市）⇨P361

▲魯迅

3
歴史の足跡ー出土品
新中国においては考古学的発掘事業が精力的に進められ、陝西省臨潼県の秦の始皇帝陵、湖南省長沙市郊外の馬王堆漢墓などから、当時の人々の生活と文化を伝える遺物が続々と出土している。
始皇帝を埋葬した墓。この墓の東側に秦代の陶俑坑があり、広さは東西210m、南北60m、深さ4.6〜6.5m。陶俑とは、死者とともに埋葬した陶製の像。
秦始皇帝陵
随葬坑
◀陶俑坑の見取り図
秦　代
(1)
秦始皇帝陵
随装坑
(陝西省臨潼県❶)
▲秦始皇帝陵
(陝西省臨潼県)
▼銅鐘俑
◀武人俑
(高さ182cm)
▲陶馬俑の全身像
(高さ170cm)
秦　代
(2)
(湖北省雲夢県睡虎地❷)
▶秦代の竹簡
(度量衡統一に関する条文)
▲彩絵漆卮（高さ12cm）
▲闘獣文銅鏡
(直径10.4cm)
◀彩絵獣首鳳形勺
(水・酒をすくう道具)
(長さ14cm、高さ13.5cm)
◀彩絵漆盂（主食を盛るわん）
(直径30.5cm)
前漢時代
馬王堆墓
(湖南省長沙市郊外❸)
▼漆器のしゃもじ（最長65cm）
▼「君幸食」漆耳杯（さかずき）
(高さ5.5cm
長さ 18cm)
◀彩色帛画
T字形の絹絵で、上段に天上の景物、中央に従者に囲まれた出行の図、下部に地下の世界などが描かれている。
▼瑟（長さ116cm）
▶漆器の雲文角壺
(高さ50.5cm)
▼竹製の12音律管
(最長17.6cm)
▼笙に似た竽（長さ90cm）
328

出土品地図
新城
武威県
北京
河北
渤海
山西
安陽
山東
青海
甘粛
陝西
黄河
乾県
西安
洛陽
密県
河南
江蘇
安徽
南京
四川
湖北
雲夢県
浙江
0 500km
貴州
湖南
長沙市
江西
福建
後漢時代
(甘粛省武威県❹)
三国時代
(甘粛省酒泉❺)
嘉峪関と東方酒泉との間の新城公社で、魏から西晋時代に至る墓が発掘され、その中の磚(煉瓦)を積んだ壁に描かれたものである。
▼牛車の図
▲土を耕す図
▲一頭だて馬車
(幅 38cm 高さ24cm)
▼奔馬
(高さ34.5cm 長さ45 cm)
▶金縷玉衣
(長さ 170cm 肩幅 47cm 腕長 81cm)
▼瓶をさげる陶女俑
(高さ22.5cm、重さ540g)
◀香爐をかかげる陶女俑
(高さ22.5cm、重さ570g)
安陽隋張盛墓
(河南省安陽❻)
隋時代
▶碁盤
(長さ 10cm 幅 10cm 重さ380g)
宋時代
▲宋三彩瑠璃舎利盒
(河南省密県❾)
◀銀塔
(浙江省端安❿)
▼団扇をもつ宮女(李重潤墓の壁画)
懿徳太子墓
(陝西省乾県❽)
◀三彩馬
(高さ72 cm 長さ83.8cm)
唐時代
唐代長安地区遺祉
(陝西省西安❼)
和銅開珎 銀銭
開元通宝 金銭
開元通宝 銀銭

4
中国の歴史地図
孔子巡歴図
数字はそのときの孔子の年齢
現在の省境
河北
黄河
済水
臨淄
斉
37
山東
山西
晋
衛
邯鄲
曹
59
59
69
郈
成
36
夾谷
53
57
57
67
帝丘
56
曲阜
魯
匡
58
30
洛陽
30
桓魋の難
59
鄭
宋
商丘
周
60
58
淮陽
陳
葉
蔡の難
64
61
河南
63
安徽
江蘇
楚
新蔡
蔡
0
200km
中国古代青銅器(鼎)
(河南省安陽で出土)
泰山(羽毛画)
戦国時代要図
宋(前286年滅亡) 周(前256年滅亡)
魯(前256年滅亡) 韓(前230年滅亡)
趙(前228年滅亡) 魏(前225年滅亡)
楚(前223年滅亡) 燕(前222年滅亡)
斉(前221年滅亡)
秦(前221年天下統一)
燕
薊
趙
中山
易水
晋陽
楡次
黄河
邯鄲
斉
臨淄
泰山
魏
艾陵
曲阜
魯
瑯邪
洛水
薛
安邑
洛陽
大梁
宋
咸陽
周
商丘
雍
鎬
新鄭
渭水
函谷関
藍田
秦
韓
淮水
漢水
姑蘇山
呉
巫
巫山
楚
揚子江
郢
会稽
会稽山
雲夢沢
(洞庭湖)
汨羅
彭蠡沢
(鄱陽湖)
長沙
湘江
巴
函谷関内の道路
0
300km

▲砂漠に残るのろし台

前漢時代要図

匈奴
鮮卑
烏桓
羌
氐
居延
遼東
五原
雲中
代
広陽(薊)
雁門
中山
太原
井陘
泜水
趙(邯鄲)
黄河
汾水
洛水
臨晋
河東
河南(洛陽)
函谷関
渭水
咸陽
櫟陽
長安
覇上
鴻門
臨淄
淄川
膠東
済南
泰山
瑯邪
沛
彭城
下邳
泗水
淮陰
固陵
垓下
南陽
漢中
淮水
広漢
蜀(成都)
巴
前漢
漢水
烏江
姑蘇山
揚子江
会稽
南(江陵)
雲夢沢(洞庭湖)
彭蠡沢(鄱陽湖)
長沙
0 500km

漢の高祖長陵

シルクロードを行く隊商

西域への道

項羽・劉邦進撃図

▲秦の末（前207年）、懐王の命をうけた項羽と劉邦は、それぞれ河北と河南から各地の秦軍を撃破しつつ都の咸陽を目ざして軍を進めた。

背水の陣図

▲ 前204年、漢の将軍韓信が成安君陳余の率いる20万の趙軍を破ったときの両軍の位置。

三国時代要図
魏の曹操
鮮卑
烏桓
高句麗
遼東
酒泉
涼州
張掖
武威
匈奴
幽州
薊
太原
并州
冀州
臨淄
兗州
青州
羌
鄴
隴西
安定
渭水
馮翊
黄河
五丈原
長安
洛陽
官渡
彭城
下邳
淮水
徐州
広陵
漢中
雍州
魏
予州
蜀の劉備
剣門山
梁州
寿春
揚州
襄陽
荊州
揚州
呉
成都
益州
巴
荊州
揚子江
会稽
江陽
涪陵
赤壁
鄱陽
沅水
予章
長沙
蜀
牂柯
臨川
湘江
呉
建安
雲南
永昌
零陵
寧州
桂陽
呉の孫権
広州
蒼梧
鬱林
南海
交州
0
500km
長安・洛陽付近図
北京城北門
山西
甘粛
汾水
洛水
邠
涇水
奉先
大茘
鳳翔
鳴鳳嶺
扶風
武功
馬嵬（興平）
咸陽
函谷関
黄河
陝
新安
縄池
邙山
河陽
洛陽
鞏
嵩山
華
華陰
潼関
華山
渭水
驪山
藍田
長安（西安）
盩厔
終南山
陽城
陝西
河南
0
100km
大慈恩寺の大雁塔（陝西省長安）

▼蜀山図(伝周文筆)　李白は、蜀の山々をながめながら少年時代を送り、杜甫は、流浪の幾年かを家族とともに蜀で過ごした。

5
漢文学習資料
白玉鳥文巵(漢代)
器 物
観鳥捕蟬(章徳太子墓壁画)
服 装
鼎(煮たきの器)
鬲(煮たきの器)
豆(盛食の器)
盂(盛食の器)
簋(盛食の器)
卣(盛酒の器)
鍾〈壺〉(盛酒の器)
尊(盛酒の器)
爵(飲器)
角(酒器)
斝(酒器)
鑑(水器)
勺(ひしゃく)
玉斗(玉で作ったひしゃく)
斛(ます)
巵(さかずき)
羽觴(回し飲みする大杯)
童子
玄端(礼服)
褘衣(王后の服)
袞冕(天子の衣冠)
冕服
将軍
官吏
儒者
狐白裘
褘衣
袞衣
進賢冠
遠遊冠
通天冠
冕冠
釈冕
帯鉤
紳
璧
環
玦
笏
木梳
木篦
履
短履

▲彩絵陶楽人俑群

楽器

胡笳　洞簫　竽　笙

鐘　磬

木鐸　鼓

風鐸

琴

琵琶

箏

瑟

箜篌

▲指南車

車輿

駟（四頭だての馬車）

玉輅（天子の車）

元戎（戦闘用）

闘艦（戦闘用）

▲銅盔（かぶと）

武器

6 日本と中国の文化交流

年代	時代区分	日本	中国	時代区分
西暦紀元前 500 紀元 200 300	縄文・弥生	○倭の奴国王、後漢に遣使。光武帝より印綬を受ける(57) ○邪馬台国、卑弥呼、魏に遣使。親魏倭王の金印を受ける(239)	○金属(鉄器)・稲作技術の伝来 ○青銅器の伝来 ○日本(倭)の名称、初めて「漢書」に記録される(115ごろまで) ○百済の王仁が「論語」「千字文」を伝える(285？)	周 春秋 戦国 秦 前漢 後漢 三国
400 500 600	大和	○倭の五王、東晋・宋・斉・梁へ遣使(413～502) ○小野妹子、遣隋使として渡隋(607)	○楽浪・帯方の遺民、大量に移住。大陸文化の流入 ○仏教(仏典、仏像)伝来(538，または552)	晋 南北朝
700	飛鳥	○第一回遣唐使(犬上御田鍬)を派遣(630) ○白村江の戦(日本が唐・新羅の水軍に敗北)(663)	○隋・唐文化の移入はじまる	隋
800	奈良	○阿倍仲麻呂ら唐に留学(717)	○唐僧鑑真来朝、律宗を伝える(754) ○唐招提寺を建立(759)	唐
900 1000 1100	平安	○遣唐使廃止(13回派遣)(894) ○道真の詩、道風の書、大陸へ渡る(927) ○源信の「往生要集」を宋に贈る(986) ○(「和漢朗詠集」できる)(1040) ○平清盛、宋と貿易を行う(1173)	○最澄・空海帰国、天台宗・真言宗を開く(805,806) ○「白氏文集」(白居易)このころ渡来か ○呉・越初めて朝貢(935) ○宋の商人あいついで来航(982～) ○宋の商人、道長に「文選」と「白氏文集」を贈る(1006) ○栄西帰国、禅宗(臨済宗)を広める(1191)	五代 宋
1200 1300	鎌倉	○倭寇(1223)。以後、倭寇禁止令(1588)が出るまで続く	○道元帰国、曹洞宗を広める(1227) ○「杜工部集」このころ渡来か ○元軍来襲(文永・弘安の役)(1274・1281)	元
1400	南北朝	○幕府、建長寺・天龍寺の造営船を元に送る(1325,1341) (五山文学の隆盛)	○南宋文学の影響	
1500	室町	○足利義政、明に銅銭を求む(1483) ○幕府、遣明船を計画(1516)	○明、足利義満に国書を授け、日本国王と呼ぶ(1402) ○明から初めて勘合符が送られる(1404) ○明の倭寇禁圧を足利義持拒絶(1419)	明
1600	安土桃山			
1700 1800	江戸	○(林羅山、朱子学を確立)(1607) ○(中江藤樹、陽明学を提唱)(1630) ○(寛政異学の禁で朱子学が主流として固定)(1790)	○「水滸伝」このころ渡来か ○隠元和尚、来朝(1654)	清

＊「漢文の学習」編の一部の写真は『中国画報』より転載。

漢文の学習

春暁　孟浩然

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

■中国文学・思想系統図

時代	殷	西周	周（東周）春秋	周（東周）戦国	秦	前漢	後漢	三国	西晋	東晋	南北朝	隋	唐

B.C.1000　B.C.500　0　500

散文

古文

（史）
『書経』
『春秋』
『春秋左氏伝』
『国語』
『戦国策』
『史記』司馬遷
『漢書』班固
『後漢書』范曄

（文）
『論語』
『孟子』
『法言』揚雄
『論衡』王充
「出師表」諸葛亮

四六駢儷文
「三月三日曲水詩序」顔延之
「春夜宴従弟桃花園序」李白

擬古文

小説

［神話・伝説］
［神仙説話］『山海経』
［笑話］『笑林』
［志怪小説］『捜神記』
［逸話］『世説新語』
［仏教説話］『冥祥記』
［伝奇小説］「枕中記」「長恨歌伝」「人虎伝」

▼神話の帝王たち

韻文

（黄河流域の民歌）

四言古詩
『詩経』

▶周初の銅器に刻まれた文字

五・七言古詩
「古詩十九首」
［建安体］曹植・建安の七子
［正始体］竹林の七賢
［太康体］陸機・潘岳
［玄言詩］孫綽・王羲之
［田園詩］陶潜
［山水詩］謝霊運・謝朓
『文選』
［宮体詩］沈約・蕭綱『玉台新詠集』

律詩・絶句
沈佺期・宋之問
李白・杜甫
王維

楽府
（民歌）
▶宮廷の楽人
［呉歌・西曲］
▶石壕村を去る杜甫

（揚子江流域の民歌）

辞賦
『楚辞』屈原・宋玉
司馬相如「子虚・上林賦」
漢武帝「秋風辞」
班固「両都賦」
左思「三都賦」
陶潜「帰去来兮辞」
謝霊運「山居賦」
沈約「郊居賦」
李白「大猟賦」
杜甫「封西嶽賦」

思想

周公（礼・楽）

儒家
孔子（仁・礼）『論語』
孟子（性善説）『孟子』
荀子（性悪説）『荀子』
。始皇帝の儒家弾圧（焚書坑儒）
董仲舒
。五経博士を置く。国教となる。
劉向
鄭玄（訓詁学）
顔師古・孔穎達『五経正義』

道家
老子（柔弱無為）『老子』
列子『列子』
荘子（無為自然）『荘子』
張陵［道教］（五斗米道）
竹林の七賢（清談）
老荘研究の隆盛
。唐朝の保護で隆盛

諸子百家
墨子（兼愛）『墨子』　墨家
商鞅・韓非子『商君書』『韓非子』　法家
蘇秦・張儀（合縦連衡）　縦横家
公孫竜（詭弁・論理学）　名家
鄒衍（五行説）　陰陽家

仏教
。インドより仏教伝来
。北魏で仏教禁止
支遁・慧遠（仏教理論）
鳩摩羅什（仏典漢訳）
。仏教文化の隆盛
達磨（禅宗を伝える）
玄奘（経典をインド

中華人民共和国	中華民国	清	明	元	南宋	北宋	五代

1000　1500

「原道」「雑説」
韓愈
「捕蛇者説」
柳宗元
『資治通鑑』
司馬光
蘇洵
欧陽脩
曾鞏
王安石
蘇軾
蘇轍
(唐宋八大家)
『十八史略』
曽先之
『古文真宝』
『文章軌範』
[古文辞派]
李夢陽
[公安体]
袁宏道
顧炎武
銭謙益
『聊斎志異』

▶魯迅の詩「彷徨」

平話
『新編五代史平話』
『大唐三蔵法師取経記』
章回小説
(四大奇書)
『水滸伝』
『三国志演義』
『西遊記』
『金瓶梅』
『紅楼夢』
『儒林外史』
口語体小説
『阿Q正伝』
魯迅
『子夜』
茅盾

[諷諭詩]
白居易『白氏文集』
杜牧・李商隠
[西崑体]
楊億
[江西派]
蘇軾・黄庭堅
[散曲]
高啓
[台閣体]
[擬古派]
李夢陽
李攀龍『唐詩選』
[神韻派]
王士禎『唐賢三昧集』
[格調派]
沈徳潜『古詩源』
[性霊派]
袁枚
口語詩
郭沫若『女神』
聞一多『死水』

詞
温庭筠
『花間集』
[諸宮調]
[雑劇]
[院本]
元曲
馬致遠
『漢宮秋』
王実甫
『西廂記』
[南曲]
高明
『琵琶記』
[崑曲]
[徽調]
[京劇]

◀峨眉山

◀京洛送別図(沈周筆)

蘇軾「赤壁賦」

周敦頤[宋学]
(太極図説)
程顥・程頤
(性理の学)
朱熹[朱子学]
(宋学の集成)
『四書集注』
陸九淵[心学]
(朱子学と対抗)
王守仁[陽明学]
(知行合一)
顧炎武[考証学]
戴震ら
(考証学の大成)
康有為
(革新運動)
孫文
(三民主義)
毛沢東

◀現在の杭州

に求めに行く)
。禅宗の隆盛
。仏教研究の隆盛

◀咸陽城外仮橋

漢文の学習

■古代文学史年表(伝説時代～後漢時代)

歴史

中国の歴史は、三皇五帝の伝説時代から始まる。五帝の最後の天子舜に代わって、禹が**夏王朝**を建てた。夏とそれに続く殷・周を三代という。

前一七〇〇年ごろ、湯王は夏の暴君桀を倒して**殷**を建てた。この民族は青銅器の文明を持ち、農業や牧畜によって生活を支え、その遺跡である殷墟からは、亀の甲や牛の骨に刻まれた文字が発見されている。

殷王朝は河南省を本拠地としたが、前一一〇〇年ごろ、殷の暴君紂を倒して武王が建てた**周王朝**は、陝西省を本拠地とした。武王の父の文王は周の文化の基礎を築き、武王の弟の周公はその大成者で、孔子が師と仰いだ人である。

前七七〇年、平王は未開民族の難を避けて洛陽に都した。それまでを西周とよび、それ以後を東周とよぶ。また、東周前半を春秋時代、後半を戦国時代という。

春秋時代は周の封建制が崩壊していく時期で、いわゆる下剋上の世となり群雄が割拠した。春秋時代は覇

思想

中国の思想がいつ生まれたかは難しい問題であるが、すでに殷代にはそれらしいものは存在していたであろう。

周代になると、長男以外の皇子や功績のあった家臣に土地を与えて諸侯とする、いわゆる封建制をとり、世を治める者は、神を信仰し、祖先を崇拝して、礼楽を重んじた。

ところが、春秋時代になると封建制が崩壊しはじめた。孔子は仁と礼を説くことによって封建制を建て直そうとしたが、その理想とする世界観は、富国強兵をめざす当時の諸侯には容易に受け入れられなかった。

弱肉強食の戦国時代に入ると、この混乱した世をいかにして救うか、またいかにして生きるかということが、さまざまに考えられた。思想の統制もなく、中国思想史上、最もにぎわった時代で、世に**諸子百家**、また百家争鳴の時代といわれる。

その中で、孔子の思想の中心である仁を受け継ぐ孟子は性善説を、礼を受け継ぐ荀子は性悪説を唱えた。こ

文学

現在に伝わる最古の文学作品は、「五経」の一つ**『書経』**(堯・舜から周までの政治記録)の中のいくつかの文、同じく五経の一つ**『詩経』**の雅、頌などの詩で、周代初期のものである。

春秋時代、孔子は従来あった多くの詩の中から三〇〇余篇を選んで、中国最古の詩集『詩経』を編集し、また政治記録の書『書経』、占いの書の『易経』、魯国の歴史を中心に春秋時代の歴史をつづった『春秋』などを編集整理した。『春秋』の解説書**『春秋左氏伝』**は最古の史伝文学であり、春秋時代の八国の事跡を記した**『国語』**とともに、左丘明の編である。

戦国時代には、思想家の活躍はめざましいものがあったが、文学に情熱を燃やす者は少なかった。ただ、北方文学の『詩経』に匹敵するものとして南方に、揚子江流域の人々の幻想的な心情をうたった**『楚辞』**が生まれた。代表作家は屈原で、その作品は激烈で憂愁にみちた内容を持つ。

秦代には、文学としてみ

日本	中国	西暦	人名・書名(作品名)・史実
	三皇・五帝	(前)	(三皇〈伏羲・神農・女媧〉、五帝〈黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜〉)
	殷 成湯	一七六六	(湯王、桀を倒し、商を建てる)
	盤庚	一四〇〇ごろ	(亳に都し、国号を殷とする)
	西周 武王	一一二二ごろ	(鎬に都し、国号を周とする)
	東周 平王(春秋)	七七〇	(平王、洛陽に都し、東周とする)
	僖王	六七九	(斉の桓公、最初の覇者となる)
	霊王	五五一	**孔子**〔前五五一—前四七九〕**『書経』『詩経』『易経』『春秋』**(その死後、弟子たちによって『論語』が編集される)
	〃	五〇五	**曽参**〔前五〇五—前四三三?〕**『孝経』『大学』**
	〃	四九四	(呉王夫差と越王句践が会稽山に戦う)
	〃	四八四	(孔子、諸国遊説の後、魯に帰る)
	〃	四七九	**墨翟**〔前四八〇?—前三九〇?〕**『墨子』**
	〃	四七三	(句践、呉を破る)
		?	**左丘明**〔?—?〕**『春秋左氏伝』『国語』**
		?	**老聃**〔?—?〕**『老子』**
	貞定王	四七〇	列禦寇〔前四七〇—前三七五〕『列子』
	威烈王(戦国)	四〇三	(韓・魏・趙、諸侯に列し、戦国時代はじまる)
	顕王	三三八	**商鞅**〔?—前三三八〕**『商君書』**(商鞅、失脚し、処刑される)
	〃	三三七	申不害〔?—前三三七〕『申子』
	〃	三三五	楊朱〔?—前三三五〕(楊朱、利己主義を説く)
	〃	三三三	蘇秦〔?—前三一七〕(蘇秦、合従策を唱える)
	〃	三二八	張儀〔?—前三〇九〕(張儀、連衡策を唱える)
	慎靚王	三二〇	**孟軻**〔前三七二?—前二八九?〕**『孟子』**(梁の恵王に王道を説く)
	赧王	二九〇	**荘周**〔前三七〇?—前二七〇?〕**『荘子』**
	〃	二七八	**屈原**〔前三四三—前二九〇〕**「離騒」**(屈原、汨羅に投身す)
	〃	二五六	(秦、東周を滅ぼす)
	〃	二五五	**荀況**〔?—前二三八〕**『荀子』**(荀子、蘭陵の令となる)
	〃	二三五	呂不韋〔?—前二三五〕『呂氏春秋』(呂不韋、自殺す)
	〃	二三三	**韓非**〔前二九五—前二三三〕**『韓非子』**(韓非子、自殺す)
	〃	二二七	(燕の太子丹、荊軻を遣わし始皇帝を暗殺せんとして失敗)
	秦 始皇帝	二二一	(始皇帝、天下を統一)
	〃	二一三	(始皇帝、『詩』・『書』を焼く)

▼神話の帝王たち

◀韓非

者の時代ともいわれ、五覇(斉の桓公・宋の襄公・晋の文公・秦の穆公・楚の荘王)が代わるがわる台頭した。

こうした争いは、戦国時代に入ってますます激しくなり、韓・魏・趙・燕・斉・楚・秦のいわゆる「戦国の七雄」がしのぎを削った。合従の策を考えた蘇秦や、連衡の策をめぐらした張儀らの遊説家も現れた。七雄の争いの結果、最後の勝利を収めたのが秦の始皇帝で、前二二一年に天下を統一。

しかし、その苛酷な政治に耐えかねた人民を率いて、陳勝や呉広は中国ではじめての農民戦争を起こし、項羽や劉邦らもこれに呼応した。秦を倒した後、項羽と劉邦との間で、次の王位をめぐっての戦いがあった。結果は「三傑」(張良・蕭何・韓信)らの力によって劉邦が勝ち、漢の第一代の天子となった。七代目の武帝は郡県制をしき、領土の拡大をはかり、漢王朝の最盛期を築いた。

その後、王莽が一時天下を取ったが、漢の一族の劉秀がこれを倒し、後漢の一代目の天子光武帝となった。

れらを儒家という。

儒家に対しては、人間の作為を否定して無為自然の道を説く老子や荘子の道家があり、肉親愛を否定して兼愛(万人を平等に愛すること)を説く墨子の墨家がある。このほか、始皇帝が国家統一に用いた商鞅・韓非子の法家、君主も臣も共に耕せと説く農家、外交の策略を説く縦横家、自然哲学を説く陰陽家などがある。

しかし、始皇帝は天下統一の後、法家理論によって思想を統一し、焚書坑儒によって儒家の弾圧を行った。

漢代になってもなお法家思想の余韻が残っていたが、武帝の時代に五経(易・書・詩・礼・楽)博士が置かれて以後、儒家が主流となり、国教となった。そのため経学(経書の学問)が盛んになった。儒教を国教とすることは以後二千年も続き、他の思想が主流となることはなかった。後漢の明帝の時には、インドから仏教が伝えられ、宮中に、五帝の一人の黄帝と、老子・仏をまつるようになり、また後漢末には、五斗米道など、道教の初期の姿が見られた。

るべきものはほとんどない。

次の前漢の時代は、「漢文、唐詩、宋詞、元曲」のことばがあるように、文章が栄えた。とりわけ、司馬遷の『史記』は、上古から漢の武帝までの歴史をまとめ、以後の正史の模範とされ、文学書としてもすぐれた内容を持っている。このほか、劉向の『戦国策』『列女伝』がある。

韻文としては、項羽の「垓下の歌」、劉邦の「大風の歌」、武帝の「秋風の辞」、司馬相如、東方朔、枚乗、揚雄らの賦(長篇の韻文)、また楽府とよばれる民謡風のうたもある。

後漢の時代になると、前代に引き続いて賦が作られ、班固の「両都の賦」、張衡の「西京の賦」「東京の賦」などがその代表作品といえる。また蔡琰の「悲憤の詩」、無名氏の「焦仲卿の妻」のような民歌的なものが現れ、五言詩としての完成された形を示す「古詩十九首」がある。後者は特に五言詩の最古のものとして注目されている。また、張衡の「四愁詩」のごとく、七言詩も現れた。

王朝	皇帝	年	事項
	〃	二一二	(阿房宮成る。儒者を穴埋めにする)
	〃	二一〇	(始皇帝、崩ず)
	〃	二〇九	(陳勝、呉広の乱、起こる)
	〃	二〇六	(子嬰、降参して秦滅ぶ)
前漢	高祖	二〇二	項籍〔前二三二―前二〇二〕「垓下の歌」(項籍、自殺す)
	〃	一九五	高祖〔前二五四―前一九五〕「大風の歌」(高祖、崩ず)
	少帝弘	一八〇	(呂后の一族そむき、誅殺さる)
	文帝	一六九	賈誼〔前二〇一?―前一六九?〕『新書』「屈原を弔ふ賦」
	武帝	一四〇	枚乗〔?―前一四〇〕「七発」
	〃	一三六	(五経博士を置き、儒教を国教とする)
	〃	一二六	(張騫、大月氏国より十三年ぶりに帰国)
	〃	一二二	劉安〔前一七九―前一二二〕『淮南子』
	〃	一一七	司馬相如〔前一七九―前一一七〕「子虚・上林の賦」
	〃	一〇八	(武帝、朝鮮を滅ぼす)
	〃	一〇〇	(蘇武、匈奴に使いし囚われる)
	〃	九七	司馬遷〔前一四五―前八六〕『史記』
	〃	八七	武帝〔前一五七―前八七〕「秋風の辞」(武帝、崩ず)
	昭帝	八一	(蘇武、匈奴より帰る)
	〃	七四	(李陵、匈奴で死没)
	元帝	三三	(王昭君、匈奴に嫁ぐ)
	哀帝	六	劉向〔前七七―前六〕『説苑』『新序』『列女伝』
新	王莽	(後)八	(王莽、国号を新とし、前漢、滅ぶ)
	〃	一八	揚雄〔前五三?―一八〕『法言』『太玄経』『方言』
	〃	二三	(王莽、死没)
後漢	光武帝	二五	(劉秀、漢を再興し、洛陽に都す)
	章帝	八〇	(班超らを遣わし、西域を討つ)
	和帝	九二	班固〔三二―九二〕『漢書』「両都の賦」(班固、獄死)
	〃	一〇五	(蔡倫、紙を発明す)
	順帝	一三九	張衡〔七八―一三九〕「西京の賦」「東京の賦」「南都の賦」
	桓帝	一六六	馬融〔七九―一六六〕『孝経』注・『書経』注(党錮の禍)
	霊帝	一六九	(宦官横暴をきわめ、党人百余人、殺される)
	〃	一八四	(黄巾の賊、起こる)
	献帝	一九六	(曹操、大将軍となり、政治の実権を握る)
	〃	二〇八	(赤壁の戦いに曹操敗れる)

◀王昭君

詩経と楚辞

▶桃夭(詩経)

西暦	年	事項
B.C三四三	1	屈原、楚に誕生。
三三三	11	蘇秦、合従策を唱え、六国の相となる。
三二八	16	張儀、連衡策を唱え、秦の相となる。
三二三	21	楚の懐王、斉と断交し、秦を討つも勝たず。
二九九	45	秦、懐王を捕らう。懐王は後に秦に死す。この時、屈原は懐王を諫めるもきかれず。
二九八	46	楚の太子、王となる(頃襄王)。靳尚の讒言により左遷。
二九〇	54	汨羅に身を投じて死ぬ。

詩経

最古の詩集

『詩経』は中国最古の詩集である。周のはじめから春秋時代にかけての詩三〇五篇を孔子が選び集め、儒家の教えの書物とした。屈原の『楚辞』が揚子江流域に生まれた文学であるのに対し、『詩経』は黄河流域を中心として生まれた北方文学である。

『詩経』三〇五篇は、体裁上、三つに大別される。一つは国風と呼ばれ、地方の国々の民謡がまとめられており、全部で一六〇篇、二つは雅(小雅と大雅に分かれる)と呼ばれ、周王室の宮廷詩で、全部で一〇五篇、三つは頌と呼ばれ、周王室その他の祭祀の歌で、全部で四〇篇ある。

また、詩の作法に、賦(物事をありのままに述べる方法)、比(たとえを用いて述べる方法)、興(ある主題を歌うに先だち、それと似た現象を自然の中に見出し、それによって歌いおこす方法)の三つがあり、先の風・雅・頌と合わせて六義という。

『詩経』の詩は、中国における最も古い時期の歌として、四言の形式、くりかえしの多い表現など、素朴な面を持つと同時に、すでに脚韻の変化、比・賦・興の修辞法など、韻文としての技巧がほどこされており、以後の中国の詩の基本となった。

なお、『詩経』にはまえがきに相当する「大序」があり、その中で「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す」と、詩の理論を説明しているが、紀貫之の「古今和歌集の序」は、この大序を基にしたものである。

楚辞

不遇の忠臣 屈原の歌

屈原は、秦の重圧の下、極めて危険な状態に置かれていた楚国を救わんとして、王に進言を続け、うとまれて自殺した人である。

屈という姓は楚王の一族である。だから屈原に対する王の信頼はなみなみではなかった。物知りで政治に明るく、文章にも巧みで、諸侯との応対のうまい屈原は、国の内外にあって実力を十分に発揮した。あるとき、日ごろから彼の才能をねたんでいた同僚が、屈原の作った法令原稿を奪おうとした。屈原が与えずにいると、同僚は「屈原は法令を出すたびに、『自分しか作ることはできまい』と自慢しています。」と王に中傷した。これを信じた王は怒って屈原を退けた。

このころ、秦が「楚と縁組みしたい」と申し入れてきた。屈原は「秦は虎狼の国(残忍な国の意)だから信用できない」といって承知しないように勧めた。しかし楚王は、わが子子蘭の勧めに従って秦に出かけてとりこになり、結局は秦で亡くなった。国の人々も屈原も、楚王を秦に行かせた王子を憎んだ。屈原は「離騒」(憂いに遭う意)の中で、王をたすけて祖国を再び本来の姿に返したいと、たびたび述べているが、「忠臣と不忠の臣とを見分けることのできない」王を、どうすることもできなかったのである。

屈原は子蘭に憎まれ、靳尚の頃襄王への讒言により、江南(揚子江の南方)に追放された。髪をふり乱し、沢のほとりを歩く彼の顔はやつれ、身は枯れ木のようにやせ衰えていた。そこで漁父(漁師)と会い、二人の間に対話がかわされる。それが「漁父の辞」である。屈原はその中で「世を挙げて皆濁れるに、我独り清めり。世を挙げて皆酔へるに、我独り醒めたり。」と言う。この"孤り高し"として国を救い世を治めていこうとする屈原の儒家的な考え方は、"知恵の光を和らげ隠して俗世間の中に交われ"という漁父の道家的な考え方と対立する。屈原は漁父から、その生き方をいくら責められても、「潔白な身体に汚ない物は着けられない。そうするくらいなら、いっそ川に身を投じて魚のえさになるほうがましだ」と言い、そのまま石を懐にして汨羅(湖南省)の淵に飛びこんだ。屈原が死んで五五年の後、楚は秦に滅ぼされた。

『楚辞』には、「離騒」「漁父の辞」をはじめ、屈原の志と嘆きが、激烈に、また空想力豊かに歌われた作品が主として収められている。

▶屈原(横山大観筆)

端午の節句 屈原が汨羅に身を投じて死んだのは五月五日である。後の人々はこの日、竹の筒に米を入れ、川に投げて屈原を祭った。ところがあるとき、三閭大夫(屈原)と名のる男が現れ、「いつも祭ってもらえるのはありがたいが、食物は蛟竜がみな盗んでしまう。今後は竹筒を、蛟竜のこわがる楝の葉で包み、あや糸でくくって投げてほしい。」と言った。以後、人々はこのことばに従って屈原を祭った。この名残が、「ちまき」、鯉のぼりの「ふきながし」など、端午の節句の風習としてわが国に伝わっている。

論語と孔子

▲孔子

西暦	年	事項
B.C五五二	1	魯の昌平郷・陬邑に誕生。
五五〇	3	父叔梁紇死没。
五三二	21	魯の委吏。
五三一	22	司職の吏。
五二九	24	母顔徴在死没。
五一七	36	昭公の後を追い斉に行く。
五一〇	43	このころ斉より魯に帰り、弟子ふえる。
五〇〇	53	大司寇。
四九七	56	衛に行く。以後十四年間、陳・曹・宋・鄭・蔡などの諸国を遊歴。
四九六	57	衛から陳に行く途中、匡人の難にあう。
四八四	69	魯に帰り、弟子を教え、経書を整理する。
四七九	74	死没。

孔子は、晩年にわが生涯をふりかえって次のように言う。「私は一五歳で学問に志した。三〇歳で学問や思想が確立した。四〇歳で生き方に迷わなくなった。五〇歳で天から与えられた使命を悟った。六〇歳で人のことばに耳が傾けられるようになった。七〇歳で自分の思うままにおこなってもゆきすぎなくなった。」と。——その生涯は、まさに道を求める努力、精進の連続であった。

政治への志向　孔子は三歳で父を亡くし、貧しい生活を強いられた。幼少のころは、祭礼のまねごとをして遊んだり、村の長老から礼儀・作法や学問の道を学んだりしていた。二〇歳で祖国魯の委吏（会計係）、翌年には司職の吏（牧畜係）となった。その後も学問を続け、五〇歳を過ぎたころ、魯の大司寇（司法長官）の位を与えられた。孔子は学問を実際の政治に応用し、いくつかの成果をあげたが、他の重臣の圧力や孔子の才能をねたむ他国の妨害によって、理想とする政治を実現することはできなかった。

政治信念を果たすために、五五歳ごろから六九歳まで、魯を去って諸国を遊説するが、これもまた成功しなかった。以後は魯に帰り、門人の教育や『詩経』『書経』など経書の整理にあたった。

周の文王を師と仰ぎ、自らその後継者を自負する孔子は、政治に執着した。崩れつつあった封建制を復活させ、「仁」の思想を実現させるためには、政治を通じて行うことが最も効果的であると考えていたからである。しかし、目的を果たせなかった孔子は、弟子たちを教育し、経書を整理することによって、自分の信念を将来に託したのである。

「仁」について　『論語』二〇篇の作者は孔子ではない。孔子の死後、教えを受けた多くの弟子たちが、孔子やその門人たちの言行を集め、整理編集したのである。『論語』を読めば、孔子が学問、人間、政治、教育、社会について、どのように考えていたかがわかる。孔子は「仁」こそが、すべての基盤であるという。「仁」の語は『論語』に一〇五回使われているが、そのわりには定義は一定していない。あえて言えば「人間らしさ」ということであり、孔子の別のことばで言えば、「忠」（まごころ）であり「恕」（思いやり）であり、「礼」（社会的なきまり）であった。—社会の秩序と調和、人間と人間との関係を維持するためには、「仁」が必要である。「仁」は、子が親に、目下の者が目上の者に仕えることからはじまる。詩や音楽を学ぶことによって、「仁」の実践は広まり深められていく—このように説く孔子は、世に「仁」を広め深めるために、足かけ十五年間にわたって諸国を歩きまわったのであり、また弟子たちの教育にあたったのである。

孔子批判　孔子は「教育には差別はない」と言い、「我欲にうちかって礼にたちかえれ」と言う。この、階級の別なく人間を教育し、礼を重んじて社会の秩序と調和を回復しようとする考え方は、いわば孔子を「聖人」としてあがめる一つの要素であった。

ところで、立場を変えて孔子の言動を読んでいくと、必ずしも弱い人間の立場からのものばかりではない。その生存中から、既に孔子は非難されていたが、今世紀の魯迅は「孔子は権力者どもの聖人である。」として槍玉にあげ、また毛沢東の文化大革命の時代には、「孔子は奴隷主貴族の味方で、人民の敵である。」と批判され、やがて林彪事件とも結びつけられて、孔子は全面的に否定されることになった。しかし文革の時期が過ぎると、その時期の孔子評価が批判され否定されるようになり、さまざまな立場から孔子評価が行われるようになった。それは、封建制社会における思想という限界はあるにしても、そこに含まれている真理は、時代を越えて今もなお人々の心に響くものをもっているからであろう。

論語學而第一　何晏集解
子曰學而時習之不亦説乎
有朋自遠方來不亦樂乎
人不知而不慍不亦君子乎
有子曰其爲人也孝悌而好犯上者鮮矣
不好犯上而好作亂者未之有也
君子務本本立而道生
孝悌也者其爲仁之本與

▲論語（学而篇第一）

◀大成殿前で開かれた批林批孔の集会

孟子

西暦	年	事項
B.C.三七二?	1	鄒に誕生。
三五三?	20	このころ孔子の孫・子思の門人に学ぶ。
三三七	36	斉の都の臨淄に行き、稷下の学士に学ぶ。
三二三	50	梁の恵王に仁義を説く。
三二〇	53	斉の宣王に厚遇される。
三一四	59	宣王と意見があわず、斉を離れる。
三〇九	64	滕の文公に厚遇され、井田法などを実施。
三〇七	66	魯の平公を訪れたが中傷され、鄒に帰って門人を教育。
三〇三	70	『孟子』七篇を著す。
二八九	84	鄒で死没。

孔子の後継者　孟子は、孔子の孫である子思の門人に学び、孔子の思想を受けついだ人である。

孟子は孔子の生まれた魯に近い鄒に、孔子の死後百年あまりして生まれた。生没年も両親の名もあまりはっきりしない。孟子の伝記には不明の点が多いが、断片的には次のようなことが伝えられている。

いわゆる「孟母三遷」や「断機の教え」で知られているように、孟子の母は、よい教育環境を求めて家移りを三度もしたり、学問を中断して帰ってきた子を、織りかけの布を断ち切って戒めたりする、熱心な教育者であった。そのような母を持った彼は、子思の門人についたり、「稷下の学士」(斉の稷における学者の集まり)に仲間入りして学んだ。

その後、梁の恵王に会い、「王何ぞ必ずしも利を曰わん。亦た仁義あるのみ。」と言って「仁義」を説いたり、斉の宣王、滕の文公に仕えたりして、自分の主張を実現しようと努力した。しかし、孔子と同様にその主張が時勢の要求(富国強兵)にあまりにも遠いために、どこへ行ってもいれられなかった。遊説をあきらめた孟子は郷里に帰り、弟子の教育や学問に専念し、『孟子』を著した。

王道政治　孔子の思想を集約すれば、仁と礼になる。孟子は仁を受けついで性善説を唱え、荀子は礼を受けついで性悪説を唱えた。"人間は生まれながらにして善である"という考え方は、潜在的に孔子の思いの中にあったが、孟子は、「仁・義・礼・智にいたる糸口は、すべて人間の本性に宿っている」と主張して、性善説を前面に押し出した。

このように、孟子は人間の心は善であると言い切った。治める者も、治められる者も、善でなければならなかった。とりわけ治める者に善を期待して、王としていかなる政治をとるべきかという「王道政治」を提唱する。

王道政治の基本は孔子のいう仁義であるが、孟子はこれをもっと具体化する。衣食住の生活が豊かでなければ、人民は礼義を身につけることはできない。言いかえれば、「恒産無ければ恒心無し。」(一定の生業がなければ安定した精神は持てない)ということであり、井田法(九百畝の田地を井の字型に九等分し、周囲を私田として八戸に与え、中央を公田として共同で作業し、その収穫を税として納める法)による農業重視こそが、恒産を所有する理想であるとする。つまり、孟子は道徳による国家の安定を最終の目的としながら、その手段としての経済生活に注目したのである。

このような政治を行えば、必ず民衆の信頼が得られる。孟子が「民は貴い。国家の象徴としての土地神・穀物神がこれにつぎ、君主は軽い。」と言うのは、当然のことばである。君主を軽視し、民衆を重視するこの発言は、あまりに進歩的であるため、いろいろと取りざたされたが、地位の低い者が上の者をしのいで勢力を持つという、当時の力関係を正しくふまえた発言といえよう。一口で言えば、"民衆のための政治"――これが孟子のいう王道政治のすべてであった。

儒家思想の確立　孟子は楊朱と墨翟とを批判した。罪人であったと言われる墨翟は、儒家の、家族愛から国家愛へと広げていく愛を「別愛」(差別愛)だと非難して、「兼愛」(無差別愛)を主張する。しかし孟子は、それは結局は家族愛を否定し、社会の基本的な単位である家族を否定するものだとして対抗する。また楊朱は、国家の問題に気を奪われて自分を見失う当時の思想家を非難して、人間個人の主体性を守ることが大切であり、たとえ自分の毛一本を抜くことによって世を救うことができる場合でも、それをすべきではないと主張する。孟子は、それは自分の利益だけを考えるものであって、人のためにする方法ではないとして対抗する。

孟子は「君主や父を無視する楊・墨は禽獣である。」「楊・墨の主張がなくならねば、孔子の主張はあらわれようがない。」と言って、楊朱や墨翟こそが現代の混乱した社会を生んだ元凶であると、厳しく非難する。孟子は、こうした攻撃によって、儒家思想を守り、世に広めていこうとしたのである。

▲孟子をまつった亜聖廟

孟母三遷　孟子の母は、息子を賢人に育てるために、いろいろ苦労した。その家が墓場近くにあった頃は、孟子はいつも葬式をはじめ、墓を築き死者を埋めるまねをして、とびまわっていた。好ましくないと思った母は、市場の近くに移転した。孟子は商人のかけ値売りのまねをして遊んだ。また好ましくないと思った母は、学校のそばへ移転した。孟子は祭礼の供え物を並べたり、礼儀作法のまねをして遊んだ。母はここそわが子を居らせる所と、やっと安心してそこに落ち着いた。

老子と荘子

▲老子

▲荘子

西暦	事項
B.C 四八〇	墨子このころ誕生。
四七九	孔子、死没。
三七二	孟子このころ誕生。
三七〇	荘周このころ誕生。
三三六	このころ楚の宰相に招かれたが、辞退す。
三三三	このころ梁の恵王に会う。
三一八	蘇秦の合従策なる。「稷下の学士」（斉の威王のもとに集まった学士たち）を批判する。
三一三	このころ恵施を弔う。
二九六	公孫竜・魏牟が荘周の哲学を論ず。
二九〇	屈原、汨羅に投身す。
二八六	母国の宋滅ぶ。

孔老会見　老子は孔子とは生き方を異にする人間である。何かと教えを受けたい思いでやってきた孔子を前にすえて、老子は一喝した。「君が慕う聖人も、その身はおろか骨さえも朽ち果てて、いまはただむなしいことばを残すだけである。君の驕慢さ、欲深さ、もったいぶり、野心を取り去りたまえ。それらは君には何の益もないもの。わたしが君に言いたいのは、ただこれだけだ。」と。孔子はかつてこのような人間に会ったことはなかったとみえ、怒ることも忘れ、帰って弟子たちに、「竜は風雲に乗じて天にあがるというが、私には実体はわからない。私は今日、老子に会ったが、さながら竜といおうか、まったくつかみどころがなかった」というのである。

この話は『史記』老子伝にあり、老子は孔子の先輩となっているが、その系図から逆算すると、老子は孔子の孫の時代の人となる。したがって、この会見記は儒家に対抗するために道家が作りあげた伝説であり、また老子は実在の人物ではなかろうともいわれている。

無為自然　老子の生涯はほとんどわからない。『史記』に記述されていることは、楚の苦県（河南省）に生まれたこと、周の守蔵室（図書館）の役人であったこと、孔子と会見したこと、道を修め才能を隠し、無名でいることを務めとしていたこと、関所の役人に頼まれて『道徳経』（『老子』のこと）五千言を著したこと、道を修め養生したので一六〇歳か二〇〇余歳の長生きをしたこと、などである。

「老子を学ぶ者は儒家を退け、儒家を学ぶ者もまた老子を退ける。『道が同じでなければ、互いに相手のことを問題にしようとしない』とは、こうしたことを言うのか。」と司馬遷は言っているが、老子の思想と儒家の思想とは、世を経ても対立をつづけた。その対立点は、たとえば孔子は、仁義や忠信を力説するが、老子は、それは大道（自然のままに生きる生き方）がすたれ、国家が乱れたための副産物であるとして否定する。また孔子は、善悪のけじめをつけよというが、老子は、この世には絶対的真理はなく、善悪・大小・貴賤などはすべて相対的なものであるとして否定する、などである。

要するに老子の思想は、他人に干渉せず、欲望も持たず、赤子のような無心の気持ちを持ち、静かに生きていくことを説く。これを「無為自然」の道とよび、太古の素朴な「小国寡民」の世界こそ、彼の理想郷であった。

悠々自適　荘子もまた、その生涯が明らかでない。『史記』荘子伝には、宋の蒙（河南省）に生まれたこと、漆園（うるし畑）の役人を務めたこと、梁の恵王・斉の宣王と同時代の人であったこと、荘子の思想は広いが、根本は老子の思想に基づいていること、十余万言の書物（『荘子』のこと）は、孔子の学をそしり、老子の学を明らかにしていること、それに、楚王が宰相に迎えようとしたが、「私は国家の主権者に拘束されたくない。一生仕えないで、自分の志を快適にしたいだけのこと」と言ってことわったこと、などが記されている。

荘子の思想は、死んで貴ばれる神亀（うらないに使う亀）よりも、生きて泥の中をはいずりまわる亀をよしとし、見たり聞いたり食べたり呼吸したりする穴をあけられて、こざかしい知恵を持った人間になるよりも、人為を加えないあるがままの状態でいることをよしとする。夢で蝶が自分になったのか、自分が蝶になったのかを区別するよりも、現実と夢、ひいては生と死とを一体とみることをよしとする。〝人間とは何か〟、〝生死とは何か〟を問う荘子は、老子よりも哲学的であるし、表現手段としての寓話には説得力がある。楡のこずえまでしか飛べない小鳥が九万里かなたまで飛んで行く大鵬を嘲笑するという寓話によって、荘子は、「人それぞれの立場によって事の判断は違い、ここに人間の悩みが生ずる。ありのままの自分を大切にし、すべてを自然にゆだねて悠々と生きるがよい。」と結論し、「無可有の郷」（無為の仙境）を説くのである。

▲孔老会見図

史記と司馬遷

▶司馬遷

西暦	事項
B.C 一七六六	湯王、夏の桀王を討ち即位。
一一二二	武王、殷の紂王を討ち即位。伯夷・叔斉、首陽山に餓死。
七七〇	平王、洛邑に遷都。
六七九	斉の桓公、覇者となる。
五五二	孔子、魯に誕生。
四九四	呉王夫差、句践を破る。
四七三	越王句践、呉を滅ぼす。
三七六	晋、三晋（趙・韓・魏）に分裂。
三三三	蘇秦の合従策成る。
三二八	張儀、秦の相となる。
二九〇	屈原、汨羅に死す。
二二七	荊軻、秦王刺殺に失敗。
二二一	秦、天下を統一。
二一〇	始皇帝、崩御。胡

個人発見の書

作者の司馬遷は、自らの伝記でもある「太史公自序」の中で、『史記』の構成について次のように述べている。「伝説の時代から当代にいたる帝王の盛衰を観察した十二本紀、事件を年表にまとめた十表、礼楽・天文・経済・制度などを記した八書、まごころをこめて帝王を補佐した諸侯の事跡である三十世家、正義を起こし、功名を天下に立てた士民の伝記である七十列伝、すべて一三〇篇、五二万六五〇〇字。」と。

これによって明らかなように、司馬遷は個個の人間の伝記を中心に歴史を書いた。この記述様式を紀伝体といい、従来の時代順に事実を記録した編年体とは異なる。個人の発見につとめたこの記述様式には、歴史事実を客観的に記録することのほかに、司馬遷の歴史観に基づいた主観的な表現も豊富に見られる。それが最も色濃く出るのが、列伝である。刺客・循吏・儒林・酷吏・遊侠・貨殖などのテーマのもとに並べられた人物の伝記には、文学的色彩が強くにじみ出ている。

刺客の存在

およそ二百年に及ぶ戦国時代には、大小の国々が入り乱れ、一日として戦争の絶えることがなかった。ところがここに、刺客なるものが登場して、戦国期の無秩序状態に終止符を打ち、秦の統一という新しい時代を迎える役割を果たした。分裂から統一への礎となった刺客の存在を、司馬遷は見逃しはしなかった。彼は刺客列伝のテーマを立て、五人の刺客の生きざまを戦国時代の諸士の伝記の末尾に置いて、奥書きの役目をになわせている。

五人の刺客——曹沫は魯の荘公のために、匕首で斉の桓公を脅かし、奪われた土地を取り返した。専諸は伍子胥の推薦を受けて、呉の公子光（のちの呉王闔廬）に仕え、彼の野望達成のために呉王僚を殺して王位につけた。予譲は自分を国士として待遇してくれた智伯に報いるために趙襄子を殺さんとした。聶政は主客の礼で待遇してくれた厳仲子の行為に感激し、彼の仇である侠累を殺して自らも切腹した。荊軻は燕の太子丹の命を受け、「風蕭々として易水寒し、壮士一たび去って復た還らず」のうたを遺し、秦の始皇帝を刺殺せんと出発したが、失敗して殺された。

司馬遷はこうした男たちに、強者に対する弱者の反抗、人間の信義を重んずる精神をみた。「士は己を知る者の為に死す」とは、刺客のせりふである。ここに司馬遷は強い共感を覚えた。刺客とは暗殺者・テロリストの意味であるが、決して殺しを専業とするプロではない。「己を知る者の為に死」す花火のような存在である。信義を重んじて、瞬時に生きる刺客——これが歴史を大きく変えたのである。

始皇帝の天下統一

紀元前二二一年、天下を統一した秦王政は、自らを始皇帝と称し、ここに群雄割拠の時代から郡県制による統一国家へと、時代は転換する。始皇帝は中央集権的な専制君主の必要を説く法家（商鞅・韓非子）の立場に立つ李斯に政治をとらせた。その結果、書体・度量衡の統一をはじめ、道路の新設や改修、万里の長城の補修や延長、宮殿の造築など、かつてない業績をあげた。しかし、そのために人民は強制労働や兵役や重い税金に苦しんだ。

こうした始皇帝の足跡は、これまでいろいろに評価された。まとめて言えば、暴君とさげすまれ、英雄とたてまつられた。今日的にみて、三七年の在位中に、中国に最初の国家統一をもたらしたこと、現在の中国領土とほぼ同じ範囲を定めたこと、能率のよい行政組織を作りあげたことなどは、高く評価されてよい。しかし反面、当時の底辺の人々には、始皇帝や二世皇帝の政治は圧政であった。

司馬遷は、この圧政に抗する人々の存在を歴史に浮かび上がらせる。陳勝世家がそれである。「王侯将相、寧くんぞ種有らんや。」（王や諸侯や将軍や宰相には血筋はない、だれだってなれる）というスローガンを掲げて、民衆が自我にめざめ、人間平等の意識を持ち、絶対君主制を打倒せんと立ちあがる、いわば百姓一揆の思想を持ったことに、司馬遷は共鳴したのであろう。

項羽と劉邦

陳勝の反乱は失敗に終わったが、彼の志をついだ劉邦（沛公）と項羽が、結局は「虎狼の国」秦を倒した。その後、両者の間には雌雄を決する争いが続いた。およそ八年にわたる攻防の結果、劉邦が勝利を得て、漢の第一代の天子高祖となった。その間のいきさつを司馬遷は、「項羽本紀」「高祖本紀」、さらに二人をとりまく多くの配下、たとえば高祖の三傑である蕭何、張良、韓信らの伝記に詳しく述べている。これらの伝記を総合していくと彼らの一つ一つの動きが再現できるほどに、細かに書き記されている。とりわけ司馬遷の筆使いは、「項羽本紀」中の鴻門の会、四面楚歌の場面で、文学性豊かに躍動している。項羽は、沛公を前

亥、二世皇帝と称す。

年	事項
二〇九	陳勝・呉広は楚に、劉邦は沛に、項梁・項羽は呉に挙兵す。
二〇八	陳勝・呉広、敗死。
二〇七	秦の相、趙高、二世皇帝を殺す。秦王子嬰、劉邦に降る。
二〇六	項羽、子嬰を殺す。劉邦、漢王となる。
二〇二	劉邦、項羽を垓下に囲む。項羽、自殺す。漢王、皇帝となる(高祖)。
一九五	高祖、崩御し、恵帝、即位。
一八八	恵帝、崩御し、呂后の専権はじまる。
一八〇	呂后、死し、文帝、即位。
一四五	司馬遷、誕生。
一四一	武帝、即位。
一一〇	武帝北巡し、封禅を行う。司馬遷、このころ『史記』を書きはじめる。
一〇〇	蘇武、匈奴に使いす。
九九	李陵、匈奴に降る。司馬遷、宮刑に処せらる。
九〇	このころ『史記』完成。
八七	武帝、崩御す。
八六	司馬遷、死没。

にすえ、刀一本ふりおろせば殺して天下を取ることができたのにそれをしなかった。また兵食ともに尽きて袋のねずみとなったとき、愛する虞美人と愛馬騅を前にして、「力は山を抜き気は世を蓋う、時　利あらず騅逝かず。騅の逝かざる奈何すべき、虞や虞や若を奈何せん。」と涙ながらに辞世の歌をよみ、さらに最後の一戦では「天が私を滅ぼすのであって、私の戦法のせいで敗れたのではない。」と部下に主張する。おそらく司馬遷は、彼の人間性にいたく心をひかれたのであろう。

司馬遷は劉邦と項羽を、対照的に描こうとする意図がかなりあったようにみられるが、どちらかと言えば項羽の生きざまに、より人間的魅力を感じていたように思われる。項羽は天子になっていないのに、彼を本紀に入れて伝記をつづっていることにも注目したい。

臥薪嘗胆

春秋、戦国の時代は、世相が混乱していただけに、『史記』に記される内容も戦争にかかわるものが多い。

春秋時代の戦いといえば、「越王句践世家」に記される越王句践と呉王夫差との、呉越攻防である。父の代を含めれば、三〇余年にわたる長い争いであった。句践は会稽(浙江省)で夫差に囲まれて辱めを受けたが、その後二二年、会稽の恥を雪ぐべく臥薪嘗胆し、配下の范蠡・文種の進言を聞きいれて、機の熟すのを待った。一方、夫差は驕る性格でもあり、忠臣伍子胥の諫めは聞きいれず、越から賄賂をもらって越のために動く不忠の臣伯嚭のことばに耳を傾けた。

結局は、句践が勝ったのであるが、司馬遷はこの戦いを通して、勝利は、人間関係は、社会は、信頼によるしかないという真理を認識したと思われる。それは終結より少し前、夫差が伍子胥に剣を与えて殺したことに、また終結の後に、范蠡が「越王は貪欲な人間で、苦しみはともにできるが、楽しみはともにできない。」と言って、句践のもとを去ったことに象徴される。

なお、范蠡はその後、偽名を使って斉に行き、財を蓄え、宰相にまでなったが、そのすべてを人々にわけ与えて陶(山東省)に行き、ここでまた巨万の富を得た。司馬遷は「貨殖列伝」の中で、晩年の范蠡の生き方を描いている。政治家から富豪へみごとに変身し、そのつど成功をおさめた范蠡にも、乱世に処する一つの型をみてとったのである。

『史記』編纂の意図

『史記』の内容は複雑で、登場人物はさまざまである。司馬遷における個人の発見とは、単に固有名詞を列挙するのではなく、その人間の心の奥にまで入りこんで、真実を見抜き、表現することであったが、いったい何が彼に真実を見抜く力を培ったのであろうか。

そのきっかけとなったものとして、司馬遷自身の力量はしばらくおいて、二つのことが考えられる。一つは、父の司馬談の影響である。代々周王室の史官である家に生まれた父は、祖先の遺志をついで上古以来の歴史を整理しようと考えていた。固定観念を捨て、事実のありのままを記して、すべての真実を見いだそうとする立場で書くつもりであった。そのうち、武帝の封禅の儀式に、職務がら当然お召しがあると信じていたのに、お召しのなかった父は憤りのあまりに病の床に伏した。そうしてわが子を枕辺に呼び、自分の志をつぐよう遺言した。司馬遷は父の遺言を〝今この世に二代目の孔子が現れるのだ。〟という気持ちで聞いていた。

二つは、憤りのはけ口としてである。『史記』を書き始めて七年後、司馬遷は李陵の事件にかかわった。匈奴を討って敗れた李陵を弁護したかどで武帝の怒りにふれ、獄につながれたのである。そのうえ、屈辱的な宮刑に処せられた。当然、死を選ぶべきであったが、『史記』を完成させるためには命を絶つこともできなかった。この刑によって逆に『史記』完成への意欲が強まった。このときの恨みは、友人でしかも死刑囚である任安にあてた手紙に綿々と述べられている。

このような事情を背景として、孔子の『春秋』につぐ大事業は完成されたのである。

▶鴻門の会址

始皇帝の父親　「秦の始皇帝は荘襄王の子である。荘襄王は人質として趙にいたとき、大商人呂不韋の愛妾が美しいのを見て、自分の妻とした。その女が生んだのが始皇帝である。正月に生まれたので、名を政(＝正)とした。」司馬遷は「始皇帝本紀」の中で、彼の出生をこのように記すが、「呂不韋列伝」では、荘襄王がこの女を妻としたとき、女はすでに妊娠していたと記している。つまり、始皇帝の父は、秦国横領の大陰謀をくわだてた呂不韋であることを、あばいたのである。

■中世文学史年表（三国時代〜唐時代）

歴史

二二〇年、曹丕が洛陽に都して国号を魏と称し、後漢は滅んだ。ついで劉備が蜀、孫権が呉を建てた。

この三国分立の時代は、諸葛亮、関羽、張飛ら名将が活躍しただけでなく、人人も漢代の統制から逃れて自由を獲得した時代でもあった。それは特に思想や文学面において顕著である。

三国のうち、まず蜀が滅び、続いて魏、呉が滅んで、魏の臣であった司馬炎が天下を統一し西晋を建てた。

やがて、長城内に住んでいた匈奴に西晋が滅ぼされると、北や西から異民族が侵入し、中国北方は小王朝が乱立する五胡十六国の時代になる。混乱した北方から江南の地に避難した晋の一族の司馬睿は、建康（南京）に都して東晋を建てた。その後は北に北魏・北斉・北周、南に宋・斉・梁・陳の国々が興亡する。この時代を南北朝時代と呼ぶ。

南北の分裂を統一した隋の楊堅は、均田制を実施し、また科挙（官吏任用試験）を行い、中央集権国家として発展した。二代目の煬帝

思想

三国時代から南北朝時代までの三五〇余年間は、混乱した現実を逃避せんとする人々が、救い・拠りどころを求めた時代だといえる。

まず三国時代では、『易経』『老子』『荘子』の学問が深く掘りさげられて、多くの注釈書が書かれたし、竹林の七賢（阮籍・嵆康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸）と呼ばれる人々が竹林に集まって、清談（老荘思想に基づく哲学論争）を行った。彼らはおおむね儒家の「礼」を無視し、世俗を超越した行いをする者が多かった。

『老子』や『荘子』の研究は、晋代になっても続けられる一方、後漢の時代に伝わってきた仏教は、魏・晋になってはじめて知識人の心をとらえた。特に東晋になると、支遁や慧遠らの僧が南方の人々に仏教の理論を説き、また鳩摩羅什が仏典を漢訳して、仏教の普及に努めた。さらに、戦国時代からあった神仙説（不老長寿を願う思想）を主体に老荘思想を取り入れて成立した道教も次第に知識人の心をとらえ、これを理論づ

文学

豪族が貴族化しはじめた三国時代には、王族を中心としたサロン文学が起こった。魏の曹操とその子の曹丕、曹植は詩文の才があり、いわゆる建安の七子（孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨）を生む土壌となった。彼らは五言詩を詩型の中心として定着させ、叙情的な詩を作った。また、曹丕は『典論』に「文章は国を経める大事業である。」と述べ、文学に大きな価値を認めた。

西晋から東晋にかけても詩は栄えた。西晋では、陸機、潘岳が知られ、東晋では、田園詩人陶潜が有名である。また、書（王羲之・王献之）、絵画（顧愷之）が貴族の教養として注目されるようになった。

南北朝においては、南朝のものがすぐれており、宋の謝霊運・斉の謝朓の山水詩、宋の鮑照の人生の怨みを述べた詩などがある。また、梁の沈約は詩の韻律美を追求し、簡文帝（蕭綱）は宮体詩（恋愛詩）を世に広めた。昭明太子（蕭統）は古今の詩文の名作を集めて

日本	中国	西暦	人名・書名（作品名）・史実
	三国 黄初一	二二〇	（曹操死し、曹丕、魏を建てる）
	二	二二一	（劉備、蜀を建てる）
	太和一	二二七	諸葛亮〔一八一—二三四〕「出師の表」
	三	二二九	（孫権、呉を建てる）
	六	二三二	曹植〔一九二—二三二〕「洛神の賦」「七歩の詩」
	嘉平一	二四九	何晏〔?—二四九〕『論語集解』、王弼〔二二六—二四九〕『易経』注
	甘露一	二五六	王粛〔一九五—二五六〕『孔子家語』
	景元三	二六二	嵆康〔二二三—二六二〕「幽憤の詩」
	四	二六三	阮籍〔二一〇—二六三〕「詠懐の詩」「大人先生伝」（蜀滅ぶ）
	西晋 泰始一	二六五	（魏滅ぶ。晋王司馬炎、帝位につく）
	太康一	二八〇	（呉滅ぶ。晋、天下を統一す）
	五	二八四	杜預〔二二二—二八四〕『春秋左氏伝集解』
	元康七	二九七	陳寿〔二三三—二九七〕『三国志』
	永康一	三〇〇	潘岳〔二四八?—三〇〇〕「秋興の賦」、張華〔二三二—三〇〇〕 劉伶〔二二一—三〇〇〕「酒徳の頌」（八王の乱、起こる）
	永興一	三〇四	（五胡十六国の乱はじまる）
	東晋 建武一	三一七	（司馬睿、東晋を建てる）
	太元四	三七九	王羲之〔三〇三—三七九〕「蘭亭の序」
	義熙九	四一三	鳩摩羅什〔三四四—四一三〕『法華経』などの漢訳
	宋 元嘉四	四二七	陶潜〔三六五—四二七〕「帰去来の辞」「桃花源の記」
	一六	四三九	（北魏、北方を統一。以後、南朝と北朝と対立）
	二一	四四四	劉義慶〔四〇三—四四四〕『世説新語』
	二二	四四五	范曄〔三九八—四四五〕『後漢書』
	梁 天監一二	五一三	沈約〔四四一—五一三〕『宋書』
	普通一	五二〇	劉勰〔?—五二〇〕『文心雕龍』
	中大通三	五三一	昭明太子蕭統〔五〇一—五三一〕『文選』
	太建一三	五八一	庾信〔五一三—五八一〕「江南を哀しむ賦」（楊堅、隋を建てる）
	至徳一	五八三	徐陵〔五〇七—五八三〕『玉台新詠』
	隋 開皇九	五八九	（陳を滅ぼし、南北を統一す）
推古一二	仁寿四	六〇四	（科挙制度はじまる）
一三	大業一	六〇五	（煬帝、即位す）
二六	唐 武徳一	六一八	（李淵〈高祖〉、唐を建てる）
三			
三五	貞観一	六二七	（太宗、即位す。"貞観の治"）

▲諸葛亮

▲王羲之

▲太宗李世民

は大運河を建設した。遠征や工事で苦しむ民衆の反乱によって隋は滅び、唐の李淵が天下を統一した。二代目の太宗は国土を拡大し、よく国を治めた(貞観の治)。中央と地方とを緊密に結ぶ行政機関が整備され、税収と徴兵のために均田制がしかれ、農民には租・庸・調を課した。しかし、唐の中ごろには荘園制が発達して均田制が崩れ、都市に市もでき、商工業が盛んになった。当時、都の長安は人口百万といわれ、外国人も往来する世界第一の都市であった。

ところが七世紀末、唐国家は則天武后の専制政治により動揺した。玄宗が開元の治によって一時それを立て直したが、やがて楊貴妃に心を奪われて政治を顧みなくなり、安史の乱によって天下は極度に乱れた。ために、それまで政権をとっていた貴族に代わって節度使が実権を握るようになり、朝廷では制度の改革をして国力の回復をはかろうとしたが効果なく、黄巣の乱によって長安を失い、節度使の朱全忠に滅ぼされた。

ける書物も著された。

老荘思想といい、仏教・道教といい、知識人たちは混乱した世界からのがれて、これらの教えにすがり、人間いかに生きるべきかを考えた。

南北朝に至ってもこの傾向は変わらなかった。北方では北魏の時に仏教が一時禁止されたが、その後また許されて、雲崗(山西省)の洞窟を掘って寺が作られるほどになり、南方でも梁の武帝は五百を越える寺を作って仏教の隆盛に尽くした。

隋・唐の時代になると、仏教の方法論と宗派が確立した。宗派でいえば、禅宗が知識人の心を、浄土宗が庶民の心をとらえたようである。玄奘(三蔵法師)は経典を求めてインドへ行き、後に『大唐西域記』を著したが、これは仏教の発展に効果があった。

また道教も、唐王室の姓と老子の姓が同じ李であることから、手厚い保護を受け多くの信者を得た。

このほか、ゾロアスター教、マニ教、イスラム教、キリスト教などの宗教も伝わり、一部で信仰された。

『文選』を編纂した。文章は四字六字を基本にした四六駢儷文が流行し、文学評論の書も生まれた。

詩は唐代に完成したといわれ、発展段階により四期に分けて説かれる。まず初唐では六朝の影響を受けながら、絶句・律詩のきまりが整えられた。盛唐の詩人たちは、初唐の詩人が整備した詩の形式によって、深い思想と強烈な感情を表現し、生命ある詩に高めた。この時期の李白・杜甫は、中国の詩人の中で最高位に位置する。また王維は、自然を美しくうたいあげた。中唐では、形式美を追求する者、民衆の苦しみをうたう者、自然美をうたう者など、いくつかの型がみられる。その中で、日本文学に影響を与えた白居易の存在は忘れることはできない。晩唐では、政治の衰えがそのまま詩に反映され、現実を逃避して退廃に傾き、唯美主義的な詩が多くなった。杜牧、李商隠がその代表である。

詩以外では、古文復興を唱えた韓愈・柳宗元の文章が知られており、伝奇小説、仏教説話も多く書かれた。

舒明一	三	六二九	(玄奘、インドへ出発)
八	一〇	六三六	(府兵制を定める)
一二	一四	六四〇	孔穎達〔五七四―六四八〕『五経正義』
斉明三	顕慶二	六五七	(洛陽を東都と定める)
天武七	儀鳳三	六七八	劉廷芝〔六五一―六七八〕「白頭を悲しむ翁に代はる」
朱鳥四	天授一	六九〇	(則天武后、国を周と号する)
慶雲二	神竜一	七〇五	(則天武后を退け、中宗即位し、国号を唐とする)
和銅六	開元一	七一三	(玄宗、即位す。〝開元の治〟)
養老一	五	七一七	(安倍仲麻呂、唐に留学)
五	九	七二一	呉兢『貞観政要』
神亀三	一四	七二六	王翰〔六八七?―七二六?〕「涼州詞」
天平一二	二八	七四〇	孟浩然〔六八九―七四〇〕「春暁」、張文成〔?―七四〇?〕『遊仙窟』
一七	天宝四	七四五	(楊太真、貴妃となる)
天平勝宝六	一三	七五四	崔顥〔?―七五四〕「黄鶴楼」
七	一四	七五五	王昌齢〔六九八―七五五〕「出塞」(安禄山の乱、起こる)
八	至徳一	七五六	(玄宗、蜀に亡命。楊貴妃、馬嵬にて死す。粛宗、即位す)
天平宝字二	乾元一	七五八	(史思明の乱、起こる)
三	二	七五九	王維〔七〇一―七六一〕「鹿柴」「竹里館」
六	宝応一	七六二	李白〔七〇一―七六二〕「静夜思」「早に白帝城を発す」「月下独酌」(玄宗、崩ず)
天平神護一	永泰一	七六五	高適〔七〇二―七六五〕「除夜作」
宝亀一	大暦五	七七〇	杜甫〔七一二―七七〇〕「絶句」「春望」「兵車行」 岑参〔七一五―?・七七〇?〕「胡笳の歌」
一一	建中一	七八〇	(両税法を実施)
延暦三	興元一	七八四	顔真卿〔七〇九―七八四〕
弘仁一〇	元和一四	八一九	柳宗元〔七七三―八一九〕「江雪」「捕蛇者の説」
天長一	長慶四	八二四	韓愈〔七六八―八二四〕「雑説」「師説」「十二郎を祭る文」
八	大和五	八三一	元稹〔七七九―八三一〕「白楽天の江州司馬に左降せらるるを聞く」
承和一二	会昌二	八四五	(道教以外の宗教を禁止)
一三	三	八四六	白居易〔七七二―八四六〕「長恨歌」「琵琶行」「新豊折臂の翁」
仁寿二	大中六	八五二	杜牧〔八〇三―八五二〕「山行」「江南の春」
天安二	一二	八五八	李商隠〔八一二―八五八〕「夜雨、北に寄す」「楽遊原」
貞観一七	乾符二	八七五	(黄巣の乱、起こる)
延喜七	開平一	九〇七	(朱全忠、唐を滅ぼす)

▼玄宗

▼杜牧

陶淵明

西暦	年	事項
三六五	1	潯陽(江西省)の柴桑に誕生。
三七二	8	このころ父死没。
三九三	29	江州の祭酒。のち州の主簿(文書係)。
三九八	34	桓玄クーデターに失敗。
四〇一	37	桓玄の幕下に入る。
四〇二	38	桓玄クーデターに成功。
四〇五	41	彭沢の令。
四〇六	42	「帰去来の辞」。
四〇八	44	火災にあう。
四一八	54	このころ著作郎(朝廷の著作をつかさどる官)に召されたが辞退。
四二〇	56	東晋滅ぶ。
四二七	63	「自ら祭る文」。郷里にて死没。

猛き心　陶淵明(陶潜)は若いころ、世のため人のためにわが人生をささげたいと願う情熱家であった。世間と交渉を絶ち、儒家の教典である六経(六つの古典)を学び、たくましい野望はこの世界を狭しとし、剣をなでながらあちこちを旅してまわった。

幼いころに父を亡くし、一一歳で継母を失い、どうしようもない貧乏から抜け出したかったことと、重税と飢饉と兵役に苦しむ人民を救おうとしたことから、この情熱は生まれたようである。

世渡りの拙さ　情熱は、二九歳の時、江州の祭酒(教育長)となることによって実を結んだが、わずかの日数で辞任している。これ以後四一歳までに、少なくとも四たび家を出て役人生活を送った。しかし、どの職も一年と続いていない。貧乏から脱出したい一心から就職してみたものの、世渡りの拙さが彼を職場に落ちつかせなかった。故郷にほど近い彭沢県(江西省)の令(知事)になった彼は、義妹の死を口実に職を捨てたが、真意は「我は五斗米のために腰を折りて、郷里の小人に向かうこと能わず。」(わずかの給料をもらっているからといって、小役人にぺこぺこすることはできん)(『宋書』陶潜伝)であった。

世のため人のために尽くす場を与えられながら、世と相いれない性格のために、知事の職が最後の役人生活となった。

帰りなんいざ　「帰りなんいざ、田園将に蕪れなんとす、胡ぞ帰らざる。」(「帰去来の辞」)と詠じて、郷里に帰った陶淵明は、自然を愛し、酒や琴・書を楽しみ、農耕に汗を流す生活をはじめた。しかし、役人生活に全く未練がなかったわけではない。折にふれて、名利に対する欲望が頭をもたげたが、そのつど「富や地位は望むところではない」と自分に言い聞かせつづけた。

郷里に退いてのちの、自然相手の農耕生活も、注いだ苦労がいつも報われるとは限らず、楽ではなかった。生活派詩人の石川啄木は、わが身の不遇に思い合わせて、「嗚呼、淵明の飲みし所の酒、其の味は遂に苦かりしならん。」と、その日記に記している。

孤独感　歴史家は陶淵明を隠者(世捨て人)とするが、いちがいにそうだとは言えない。むしろ、世を救わんとする激しさと、世の流れに身をまかせる静けさとの両面を持った人、というとらえ方が適切であろう。あるときは「死を思えば中心は焦がる。」と言い、またあるときは「万物の変化にまかせて人生を送ろう。」とうたう矛盾をはじめ、その心の中には対立する二つの感情が常にゆきつもどりつしていた。彼の内面深くにある孤独感が、対立する二面を持たせることになったのであろう。

この孤独をいやすために、彼は酒を飲んだ。しかし、不作で酒も飲めないこともあり、また、飲んだところでその場しのぎにすぎない。永久的・積極的な孤独感対策として、陶淵明はユートピア(理想郷)を思い描いた。「晋の太元中、武陵の人、魚を捕うるを業と為す。渓に縁うて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢う。」ではじまる、中国版浦島伝説の「桃花源の記」がその代表である。苦悩のあげくにたどりついた桃源郷は、彼にとって決して架空の世界のことがらではなかったろう。

淵明の生きざまは、「飲酒」の詩「帰去来の辞」「桃花源の記」「五柳先生伝」にほぼ明らかである。

酒

梁の昭明太子は、陶淵明の詩を評して「篇篇酒あり」と言っている。どの作品にも酒がうたわれている、とは少し大げさだが、現在伝わっている彼の作品一三〇余篇の約半数に酒が出てくる。

「世にあって必要なのは酒と長生きだけ」と言って、「酔っぱらうまで飲む」のが常であり、「酒はもろもろの心配ごとを除いてくれる」ものだと信じ、「酒の中にこそ深い味わいがある」とも考えていた。こうして毎日、酒を飲んでいたと思われるのに、自分の死を予想して書いた詩の中では、なんと、「但だ恨むらくは世に在りし時、酒を飲むことの足るを得ざりしを。」と残念がっている。まさに彼は飲者中の飲者であった。

▲五柳先生伝(箋註陶淵明集)

◀五柳先生(横山大観筆)

王維

西暦	年	事項
七〇一	1	河東に誕生。
七二一	21	進士科に及第。大楽丞となる。
七三四	34	右拾遺。
七三七	37	監察御史。
七四二	42	このころ左補闕(天子の過失を諫める官)、庫部郎中(兵器係)。
七五二	52	このころ文部郎中(人事係)。
七五六	56	賊軍の捕虜となる。
七五八	58	太子中庶子(太子のそばつき)。中書舎人(宮中の文書係)となり、再び給事中となる。
七五九	59	尚書右丞。
七六一	61	死没。

神童　王維は神童であった。記録によると、生まれつき音楽に通じ、とりわけ琵琶をひくことが得意であり、一五歳ころから、故郷を離れて都で学問したこともあって、交際の相手も皇族や貴人たちであり、玄宗皇帝の弟である岐王には特別にかわいがられた。二一歳で進士科(役人になるための資格試験)に合格し、出世の基盤を着実にかためた。

同じ盛唐詩人の李白や杜甫の晩成型とは違った、王維のこの多方面にわたる早熟さが、彼の詩作に大きな影響を与えているように思われる。

得意と失意　二一歳で得た大楽丞(音楽をつかさどる官)の職をふりだしに、右拾遺(天子の過失を諫める官)、監察御史(裁判・刑罰の監督官)となり、尚書右丞(尚書省の次官)を最後に、六一年の生涯を終えた。順調に出世の道を歩んだようであるが、意のままにならぬことも多かった。たとえば、天子でなければ舞ってはならぬ舞を舞って左遷されたり、安禄山の乱にまきこまれて捕虜となったり、乱平定ののち、罪人として裁判にかけられたりした。捕虜にされたときは薬を飲んで、唖になったと偽り、裁判にかけられたときは弟の縉や貴人たちの弁護によってかろうじて死罪を免れた。また、三〇歳ごろ妻を亡くしたが、その後三〇年間、再婚もせず一人ずまいであった。しかし、得意・失意にかかわらず王維の周囲にはいつも貴人がいる。いわば彼の生活は、貴族側に身をおいての生活であった。

自然詩人　人生の裏をみた詩人でありながら、彼は戦乱や悪政に苦しむ人民を詩の題材としない。人民の側に立った杜甫とは違う。王維はもっぱら自然の美を愛し、自然と一体となった人間生活の楽しさを題材とする。このことは、彼が六朝時代の詩風を受けつぐ詩人であり、貴人たちとの交わりが多かった人であることを物語っている。世の人々は彼を宮廷詩人(皇族や貴族おかかえの詩人)といい、自然詩人とよぶ。

独り坐す幽篁の裏、琴を弾じ復た長嘯す。
深林　人知らず、　明月来りて相照らす。

王維の別荘である輞川荘で、友人裴迪と唱和した二十首のうち、「竹里館」と題するこの詩には、まさに自然と人間とが一体となった美しさがある。夏目漱石は『草枕』にこの詩を引用して「ただ二十字のうちに優に別乾坤(別天地)を建立している。」と評価する。このような詩風は、晋の陶淵明の田園詩や、(六朝)宋の謝霊運の山水詩の流れをくむものであり、王維、孟浩然・韋応物・柳宗元(王孟韋柳という)の唐代四大自然詩人のうち、彼こそがその代表とされるのも、もっともなことである。

詩中に画有り　「竹里館」の詩や「元二の安西に使いするを送る」の詩を一読すれば明らかなように、詩がそのまま画になるというのも、彼の詩の特徴である。画のほうでも、後世、「南画の祖」と仰がれるほど、すぐれた腕を持っていた。輞川荘を画いた輞川図は有名であり、また岐王(前出)のために画いた大石の図は、ある暴風雨の日に稲光りとともに屋根を破り、高麗(朝鮮)にある山の上へ飛んで行ったという、左甚五郎の画いた竜が夜ごと水を飲んだ式の逸話まで残っている。宋の蘇軾は彼の詩と画を評して、「詩中に画有り」「画中に詩有り」(「摩詰の藍田烟雨の図に書す」)と言っている。

彼は詩と画にとどまらず、書にも音楽にもすぐれていた。さらに彼は有名な仏教信者であり、仏典にも詳しかった。その名と字とを続けた維摩詰は『維摩経』の主人公の名であり、したがって詩にもよく仏教語が使われている。王維と自然とのかかわりは、このような彼の多芸多才によって広く深いものとなり、それが彼の自然詩をよりすぐれたものにしていると考えられる。

▲明画輞川図巻之竹里館漆図

李白と杜甫

▲李白

西暦	年（李）	年（杜）	事項
七〇一	1		李白、西域？に生まれ、後に蜀（四川省）に移る。
七一二	12	1	杜甫、河南の鞏県に誕生。
七二〇	20	9	李白、このころから四二歳まで、成都・峨眉山・楚・太原・山東に遊ぶ。
七二五	25	14	杜甫、洛陽で文人の仲間に入る。
七三一	31	20	杜甫、このころから三五歳まで、呉・越・斉・趙と洛陽の間を往来。
七四二	42	31	李白、長安に至り、翰林供奉となる。
七四四	44	33	李白、長安を

詩仙　李白は「詩仙」とも、「天上の謫仙人」とも言われる。「詩仙」とは杜甫の「詩聖」に対するもので、天才的な詩人の意である。

両親の名もわからず、西域で生まれたとも伝えられる李白は、幼いころ、綿州（四川省）に移って来ていた。山奥での小鳥を相手とした生活を捨てて、揚子江沿岸をぶらつき始めたのが、二五歳ごろである。揚子江からさらに黄河の沿岸各地を歴遊し、その間、遊侠の人とつきあったり、人を斬ったり、湯水のごとく大金を使ったり、道士と交わったり、孟浩然らと交際したり――李白の長安に出るまでの生活は、自由奔放であった。「峨眉山月の歌」「静夜思」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」などの詩は、このころの作である。

長安　四二歳のとき、交遊のあった道士の呉筠に推薦されて待望の長安に出た。そこで賀知章の目にとまり、「天上の謫仙人」と賞され、やがて玄宗に詩才を認められて、翰林供奉（天子の詔勅などをつかさどる官）に任ぜられた。意を得た李白の生活は、若いころの自由奔放さにさらに拍車をかけた。とりわけ酒に溺れ、しばしば長安市中で痛飲した。のちに、友人の杜甫は、このころの李白の生活を「李白は一斗　詩百篇、長安の市上　酒家に眠る。天子呼び来たれども船に上らず、自ら称す　臣は是れ酒中の仙と。」（「飲中八仙歌」）とうたっている。

しかし、この得意な生活も足かけ二年で終わった。限度を知らないこの酒が、長安追放の原因となったのである。そのとき、今を盛りに咲く牡丹を玄宗皇帝は楊貴妃とながめていた。やがて玄宗は李白に命じて、このえもいえぬ雰囲気を詩に詠ませようとした。が、玄宗の前に現れた李白は、足も腰も立たぬほどの宿酔、あげくに宮中に隠然たる勢力を持つ宦官の高力士に、わが靴をぬがせるという始末。「一斗　詩百篇」の李白は、筆をとり、楊貴妃の美しさを牡丹にたとえて「清平調の詞」三首を作った。

しかし、先に恥をかかされた高力士が、楊貴妃を漢の趙飛燕になぞらえた第二首に難くせをつけた。趙飛燕は漢代の絶世の美人だが、出身が卑しく、後には成帝の愛を失って自殺の運命をたどった不幸な女性であったからである。高力士は楊貴妃と組んで、結局、李白を長安から追放した。

晩年　長安を追放されたこの年に、一一歳年下の杜甫との交遊がはじまり、河南省、安徽省、江西省、貴州省を転々とする。安禄山が乱を起こしたとき、彼は五五歳で宣城（安徽省）にいた。翌年、乱を避けて玄宗は蜀へ逃れ、粛宗が即位する。この年、安禄山を倒すために兵を挙げた永王璘の軍に、李白は才を買われて加えられた。彼は功名をあげんものと勇んだが、その後のいきさつは、杜甫のところで述べるとおりである。処刑を免れた李白は、三年ののち、万巻の原稿を親戚の李陽冰に託して病没した。

快楽の人生　李白の詩の特徴として、率直さ、明るさ、力強さ、連想のたくましさ、の四つをあげる人がいる。これはある意味では杜甫にはないものであって、李白の身体を流れる血や生活環境が、こうした詩を作らせたのであろう。そしてまたこのことは、政治家への野心を持ちながら杜甫は何度も受験して不合格になっているのに、李白は一度も受験しなかったこと（李白の家は代々商人であったので受験資格がなかった、とする説もある）、杜甫は常に家族を連れて旅をしていたのに、李白は妻子と別居生活をし、一人で旅をしていたこと、などとも無縁ではない。「官と家という二つのウ冠が李白の苦手とするならば、李白の得意とし好むところは二つの人偏である。すなわち侠と仙である。二つのウ冠は人を上から押さえつけ、窮屈に束縛し、二つの人偏は人間を対等の関係において、自由にし解放する。」と言う人もいる。

杜甫も李白も、ともに情熱に生きた人であることには変わりはない。ただ、李白はこの世のあらゆる快楽に向かって情熱をたぎらせ、杜甫は人間に対してあくまでも誠実であろうとする情熱に燃えていたのである。

▲孟浩然

李白の生と死　李白はたくさんのエピソードを持つ詩人である。生まれたときの話として、母が彼をみごもったとき、太白星（金星）がそのふところにはいった夢をみたので、名を白といい、字を太白といったことが伝えられている。また死ぬときの話として、得意になって揚子江に映る月をとらえようとして舟からおち、溺死したことが伝えられている。

いずれも、李白の生き方を象徴する逸話として言い得て妙である。

			追放さる。夏、洛陽で杜甫と会い、交際がはじまる。
七四六	46	35	杜甫、長安に出る。
七五五	55	44	杜甫、右衛率府の冑曹参軍となる。安禄山、反す。
七五六	56	45	長安陥落。玄宗は蜀へ逃亡。李白は永王璘の軍に参加。杜甫は賊に捕らわる。
七五七	57	46	永王の軍敗れ、李白獄につながる。杜甫は長安を脱出し、左拾遺となる。
七五八	58	47	李白、死罪を免れ、夜郎に流罪。杜甫は華州に左遷。
七五九	59	48	李白、赦免さる。杜甫、官をすてて秦州に行く。
七六〇	60	49	杜甫、成都に草堂を作る。
七六二	62	51	李白、李陽冰宅で死没。
七六五		54	杜甫、成都を去って揚子江を下る。
七七〇		59	舟中で客死。

詩聖

杜甫は「詩聖」と言われる。詩聖とは、詩の世界における聖人の意で、詩人としての最高の呼び名である。

代々地方長官を務める程度の家に生まれた杜甫は、七歳で詩文を作り、一四歳で文人の仲間入りをしたが、二四歳で進士科を受験して不合格となり、以後は官吏になるために奔走するという下積みの生活が続いた。この間の苦労が、のちに人々から「詩聖」とたたえられる素地となったものであろう。

安禄山の乱

三五歳で長安に出、四八歳で成都（四川省）に行くまでの十三年間の生活は不遇であった。官吏になりたいがために長安に出たのであるが、試験を受けても落第、高官にとりいろうとしても思うようにならなかった。そのうち、時の皇帝玄宗は、楊貴妃に愛を傾けすぎて政治を怠り、ために節度使（地方の軍政や行政をつかさどる長官）の安禄山が反乱を起こし、世は絶望的な混乱に陥った。杜甫は四四歳で待望の役人となったが、不安な世相のために十分な働きはできず、家族をあちこちに疎開させたり、皇帝の安否を気づかうのに精いっぱいであった。

安禄山が長安を陥れる寸前、玄宗皇帝は蜀へ逃亡し、その途中、太子が即位した（粛宗）。それを聞いて行在所に向かった杜甫は、不運にも賊軍に捕らえられ長安に引きもどされた。この年（七五六年）、李白は安禄山を討つために兵を挙げた永王璘（玄宗の第十六皇子）のもとにいたが、粛宗の命令にそむいた永王の軍は反乱軍とされて官軍に攻められた。

翌年、李白は獄につながれたが、かろうじて死罪を免れて夜郎（貴州省）に流されることになり、その道中、大赦にあった。杜甫はこの年、長安を逃れ出て粛宗の行在所にかけつけ、左拾遺（天子を諫める官）に任じられ、疎開先の家族とも連絡がとれた。この数年間は、杜甫の「春望」、李白の「早に白帝城を発す」の詩に象徴されるように、両者ともに危険な崖っぷちを歩いていた。

晩年

飢饉のために華州の司功参軍をやめた杜甫は、食糧を求め、家族を引きつれて西方へ移って行った。そうして途中、どんぐりを拾い山いもを掘って食べながら、四八歳の暮れに成都に着いた。そこには豊かな食糧、美しい自然があり、節度使となっている幼なじみの厳武と再会し、その援助によって新しい家も作り、五九年の生涯で最も幸福な時を送った。しかし、それもつかの間、またもや戦乱に巻きこまれ、家族を連れて揚子江を下って行った。この時期には、人間を拒否する厳しい自然に接しながらも、詩には逆に人間的なあたたかさが強くうたわれている。若いころからの体験が、このころ集大成され、境遇のいかんにかかわらず、杜甫をして詩の極致をきわめさせたのかもしれない。七七〇年、故郷の長安に帰ろうとして果たさないまま、湘江の舟の中で死んだ。

誠実な人生

〝杜甫、一生愁う〟ということばがある。杜甫の生きた世の中は、彼の思う方向へは進まず、「君主を堯や舜以上の存在として、風俗を淳化させたい。」というその願いはかなえられなかった。内乱と外征のために、多くの人々が兵役に駆り出され、重税に苦しんでいた。「悪を疾んで剛き腸を懐く」杜甫は、「兵車行」「石壕の吏」などの詩を作って、これに抗議した。直接に政治にたずさわれないからには、世の不正に対する不満を詩や文に表現し、それが何らかの形で政治に反映され、やがて人民が幸福になっていくのだと、自分の詩人としての使命を信じて疑わなかった。杜甫の人生に対する誠実さがそうさせたのであろう。

日本文学への影響

杜甫の詩文集は、遅くとも平安朝の末には日本に伝わっていたといわれる。平安朝では白居易の文集が愛読されたが、鎌倉から室町にかけての五山文学は、杜甫の詩文に影響されている。しかし、杜甫の文学のすばらしさを発見したのは、江戸時代の芭蕉である。芭蕉は杜甫とは、文学に対する心の寄せ方が違うけれども、負い笈の中にいつも杜甫の詩集を入れて歩くほどの心酔ぶりであった。また芭蕉は、旅に死んだ李白に対しても強い関心を示している。

◀杜甫

白居易

西暦	年	事項
七七二	1	鄭州(河南省)新鄭県に誕生。
七八七	16	はじめて長安に出る。
七九四	23	父、死没。
八〇〇	29	進士科に及第。
八〇六	35	盩厔県の尉。
八〇八	37	左拾遺。
八〇九	38	「新楽府五十首」を作る。
八一一	40	母、死没。
八一五	44	江州の司馬に左遷。
八一七	46	香爐峰下に草堂を築く。
八二八	57	刑部侍郎(法務次官)。
八三六	65	太子少傅。
八四二	71	刑部尚書で退官。
八四五	74	『白氏文集』完成。
八四六	75	死没。

天才

白居易(白楽天)は生後七か月で書物を開き、「之」と「無」の字を教えられると、口で言うことはできなかったが、はっきり覚えていたという。また五、六歳で詩を作り、九歳で詩の声律を暗記していた。頭脳の鋭さは人の追随を許さず、詩文を作る才能は天才的なものであった。一六歳のころ、自分の才能を鼻にかけてめったに後輩を認めない顧況という人にあった。彼は白楽天の詩文をみて茫然自失、「文章の道はとっくに絶えたものと思っていたが、あなたのような後継者がいたとは。」と言ってほめたたえたという。代々、地方官を出す程度の低い家柄であったが、彼の先天的な才能と後天的な努力には、白家の将来を明るくするものと大きな期待がかけられた。

出世街道

白楽天は期待を裏切らなかった。安禄山の乱をきっかけに社会が変革され、低い階級の者も高い地位に登れる新しい体制ができはじめていたことも、彼にとっては幸運であった。二九歳で進士科に合格し、三五歳で盩厔県(陝西省)の尉となった。以後、翰林学士(皇帝の秘書)、左拾遺(皇帝を諫める官)や忠州(四川省)、杭州(浙江省)、蘇州(江蘇省)などの地方官を経て、太子少傅(皇太子の教育副主任)となり、刑部尚書(法務大臣)を最後の官として退官し、七五歳の生涯を終えた。

諷諭の詩

全く順調な出世であった。しかし、古い体制下の役人と、新しい体制下の役人との間には、意見の対立がたびたびあり、彼は左遷もされている。早熟、順調な出世、裏の人生の体験、という点では、王維と同じ傾向がみられる。だが、悪政を憎み、人民の生活を豊かにせんとして、政府に向けて厳しく自分の意見を主張し、詩文をもって諷諭した点では、全く異なっている。

白楽天は憲宗皇帝(八〇六—八二〇在位)の側にいたとき、だれにもはばからず意見を述べた。政治のよしあしを一つ一つまな板の上にのせ、肉親や親友の心配を顧りみず、不正を訴え続けた。その意見の多くは聞き届けられたが、時の権力者の反感を買い、追放されもした。そのため彼は、どうしようもない気持ちを詩文や酒で発散させた。後に再び返り咲きはしたが、以前にもまして宮仕えが気にそまず、職務があっても病気の届けをし、七一歳でついに政界を去った。

政治、社会に関して、あるいは賞賛し、あるいは諷諭した詩を、白楽天自身「諷諭詩」と名づけ、彼の多くの詩の中で最も高く評価し誇りとしている。「諷諭詩」すべて一七二首のうち「新楽府」(新しい歌謡曲の意)五〇首は、その典型的な作品である。特に、「新豊の臂を折りし翁」「黒潭の竜」は有名である。前者は腕をたたき折ったじいさんの話を素材にして、外国を攻めることを戒め、後者は竜の威光をかさに豚を食いつくそうとする狐の話を通して、貪欲な役人を憎んでいる。「諷諭詩」に命をかけたのは、性格が剛直であり、また、「人民の苦しみを救い、政治の欠陥を補う」のが詩の使命であるという『詩経』の精神を信じていたからである。その辺の事情は、無二の親友である元稹(七七九—八三一)に与えた手紙に詳しい。なお白楽天と交わりのあった張籍や王建らも、多くの「諷諭詩」を残している。

日本文学への影響

白楽天には「諷諭詩」のほかに、人間のふだんの感情をうたった「閑適詩」、事物に触れて心に動く感傷をうたった「感傷詩」があり、ほかに「雑律詩」がある。当時の人々は、白楽天が重視し力を入れた「諷諭詩」よりも、それほど力を入れなかった他の詩をもてはやした。なかでも玄宗皇帝と楊貴妃との恋物語である「長恨歌」は、長安の妓女たちにもよく知られていた。白楽天の詩は、彼の生存中にすでにわが国にも伝わっていた。『源氏物語』のよりどころは「長恨歌」であるし、『枕草子』には「文は文集、……」とあり、詩文集の『白氏文集』は貴族たちの愛読書であった。このほか『平家物語』『和漢朗詠集』などにもその詩句は多く引用されている。

長恨歌(白氏五妃曲より)▶

▼玄宗と楊貴妃

韓愈と柳宗元

▶韓愈

西暦	年（韓）	年（柳）	事項
七六八	1		韓愈、南陽（河北省）に誕生。
七七三		1	柳宗元、長安に誕生。
七九二	25		韓愈、進士科に及第。
七九三		21	柳宗元、進士科に及第。
八〇一		29	柳宗元、藍田の尉。
八〇三	36		韓愈、監察御史。
八〇五		33	柳宗元、永州司馬に左遷。
八〇八	41		韓愈、国学博士。
八一五		43	柳宗元、柳州刺史。
八一九	52	47	韓愈、嶺南へ左遷。柳宗元、柳州で死没。
八二三	56		韓愈、吏部侍郎。
八二四	57		死没。

韓愈の生活　韓愈は中央と地方を何回かゆきつもどりつした。二〇歳のとき、兄が左遷されたのについて嶺南(広東省)へ。三六歳のとき、監察御史（裁判・刑罰の監督官）の職務を遂行して首都の長官を裁いたために嶺南へ。五二歳のとき、憲宗皇帝が仏舎利（仏骨のこと）を宮中へ迎え入れたので、「仏骨を論ずる表」をたてまつって反対したために、刑部侍郎（法務次官）から嶺南へ。

二回目の嶺南行きまでは、二五歳で進士に合格しながら官につけず、三五歳で国子監(国立大学)の教官になったが、彼の文学はまだ未熟であった。ところが、三九歳で嶺南から帰り、五二歳で嶺南へ行くまでの一三年間は、長安と洛陽にあって、時にはくじけながらもしだいに高い官位につき、作品も自信に満ちあふれていった。「南山」の詩、「秋懐」の詩はその代表作である。三回目の嶺南では、すぐれた叙情詩が多い。一年で中央に呼びもどされた彼は国子祭酒（国立大学長）となり、その後、吏部侍郎（官吏任用の省の次官）になって、五七歳で死んだ。

世に「韓門の弟子」といわれるほど、彼は人の面倒見がよく、孟郊や張籍はそのうちの秀才であった。また韓愈は孟子や揚雄（漢代の学者、文人）を尊敬し、復古の名のもとに、新しい文学の道を求め続けた人であった。

柳宗元の生活　柳宗元もまた中央と地方とをゆきつもどりつした。しかし、韓愈がいずれも二、三年で中央に返り咲いたのに比べ、柳宗元は中央での勤務より地方の生活のほうがはるかに長かった。二一歳で進士に合格し、二九歳で藍田県（陝西省）の役人、三一歳で監察御史裏行（裁判・刑罰の監督官見習い）となり、一年たらずではあるが韓愈と同じ職場にいた。三三歳で礼部員外郎（文部事務官）となり、同年に永州（湖南省）の司馬（副知事）に左遷された。彼は朝廷の人々に手紙を送って心情を訴えたが、その才能をねたまれていたため、心配してくれる者は一人としていなかった。「江雪」の詩や「蛇を捕うる者の説」はこのころの作である。それから一〇年後の四三歳のとき、やっと長安に呼びもどされたが、同年、柳州（広西壮族自治区）の刺史に左遷され、四七歳にしてこの地で没した。

古文復興　六朝時代に完成した、内容よりも形式を重んずる駢文（四字と六字の対句を多く用いる文体）を退け、儒教道徳を重んじた、内容のある文章を書こうとする、いわゆる古文復興運動の機運が、唐初の歴史家たちの提唱によって次第に高まってきていたが、韓愈と柳宗元はその動きに乗じ、文学は「道を明らかにするための道具」であると考え、儒教道徳を離れては文学の価値はなく、文学は民の教化を目的とすると信じていた。それは韓愈の「師の説」「孟東野を送る序」に、また、柳宗元の「蛇を捕うる者の説」「種樹郭槖駝の伝」に明らかである。「韓柳」と並び称されるように、この二人はまさに古文復興の集大成者であった。

二人の文章の違いについては、「韓愈は理づめで、経書を背景とし、柳宗元はスケッチで、歴史を背景とする。韓愈は気持ちを言い尽くすが、柳宗元は言い残す。韓愈は議論が思いのままで、気位が高いが、柳宗元は細かいことまで述べ、書きぶりはあっさりしている。」と説かれている。

なお、この二人は文人として〝唐宋八大家〟に数えられるとともに、詩人としても名高い。韓愈は唐代の四大詩人「李杜韓白」（李白、杜甫・韓愈・白居易）の一人であり、柳宗元は唐代の自然詩人「王孟韋柳」（王維・孟浩然・韋応物・柳宗元）の一人である。

▲革新案を話す柳宗元

推敲　賈島はロバに乗り、「僧は敲く月下の門」の「敲」の字を、「推」にかえようかどうしようかと思案していた。ロバの上で手を動かして、門を推したり、敲いたりする動作をしてみるが、なかなかきまらない。あまりに考えこんでいたので、都の長官韓愈の行列に突き当たった。わけを話してあやまると、韓愈は「もはや夜もふけていることだから、門は閉ざされていよう。推すより敲くほうがよい。」と言い、そのまま二人は、くつわを並べて詩について論じ合った。賈島もまた、韓愈に詩才を認められた一人である。

■近世文学史年表(宋時代〜清時代)

歴史

宣武軍の節度使・朱全忠が唐を滅ぼして帝位(後梁)についてのち、華北には短命な王朝、後唐・後晋・後漢・後周が続いた。

やがて、後周の部将趙匡胤が宋を建て、開封に都して混乱を収拾した。宋は次の太宗の時代にほぼ天下を統一し、節度使から行政と軍事の権限をとりあげ、文官を重く用いて、中央集権の政治を強化した。

しかし、十一世紀ごろから、北方の遼(契丹)や西夏の侵入に悩まされ、多額の軍事費や外交費を必要とした。この深刻な財政難を克服するため、神宗は王安石に命じて国政の改革を行わせた。王安石は新法とよばれる政策を打ち出したが、これは司馬光を中心とする保守派の反発を受け、新法党と保守派との対立を生んで政治は混乱した。

十二世紀に入ると、遼を滅ぼした北方民族の国、金が南下し、徽宗らを捕らえた。宋の一族は江南にのがれ、臨安(浙江省)に都した。これが南宋である。

モンゴル高原では遼が滅

思想

宋代においては、儒教、仏教、道教ともに革新の気運が高まり、それぞれに教義の上での論争があり、新しい論理を取り入れた。

特に儒教では経典の注釈(訓詁)を捨てて、哲学的論理的裏付けの方向にむかい、政治的実践の学問となった。こうした儒学は宋学と呼ばれ、周敦頤がその祖とされる。周敦頤は程顥、程頤(二程子)にその思想を伝えた。やがて、南宋に至り、朱熹がそれを統合整理して、宋学を大成させた。これを程朱の学、または朱子学と呼んだ。

しかし、同時代の陸九淵(象山)は朱子学が空理空論に走るのを非難して、静坐によって自らの心を探り認識することを主張した。これを朱子学に対して陸学と呼んだ。

仏教はようやく中国独自のものが生まれ、特に禅宗が盛んになり、名僧も輩出した。また『大蔵経』の出版をはじめ、仏教研究の書も多く刊行された。

道教は、真宗や徽宗の保護を受けたが、世俗的な栄

文学

唐末から五代、宋への移行において、貴族社会は次第に崩壊の道を歩み、庶民が政治や文化の面で台頭してくる。詩文においても、新興の知識階級の欧陽脩や蘇軾らが活躍した。王安石の詩も高く評価される。蘇軾の門下には黄庭堅、陳師道など江西詩派を生み、さらに陸游、范成大、楊万里などが詩壇の中心となっていった。

この時代にはまた詞(詩余)とよばれる新体の韻文(俗曲として成立したリズムに言葉をあてはめたもの)が隆盛をきわめ、『花間集』なども編集された。

散文では、唐の韓愈、柳宗元の古文運動を継いで、欧陽脩、王安石、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曽鞏らが活躍し、また司馬光、范仲淹らも文章家として知られた。

元代に入ると、元曲が生まれた。いわゆる戯曲であり、元代文学を代表するものとなった。

明代では詩文について特に新しい主張や方向は見当たらず、これまでの文学の模倣的傾向が強い。詩人で

日本	中国	西暦	人名・書名(作品名)・史実
延喜七	後梁 開平一	九〇七	(朱全忠、唐を滅ぼし、汴京に都する)
承平七	後晋 天福二	九三七	(契丹、国号を遼とする)
天徳四	宋 建隆一	九六〇	(趙匡胤、即位し、国号を宋とする)
天元一	太平興国三	九七八	李煜〔九三七―九七八〕「臨江仙」「相見観」
〃六	〃八	九八三	李昉ら『太平御覧』(遼、国号を大契丹とする)
寛弘五	大中祥符一	一〇〇八	陳彭年『大宋重修広韻』
寛徳二	慶暦五	一〇四五	欧陽脩〔一〇〇七―一〇七二〕「酔翁亭の記」
永承三	〃八	一〇四八	蘇舜欽〔一〇〇八―一〇四八〕
〃七	皇祐四	一〇五二	范仲淹〔九八九―一〇五二〕「岳陽楼の記」
天喜二	至和一	一〇五四	欧陽修ら『新唐書』
康平三	嘉祐五	一〇六〇	梅尭臣〔一〇〇二―一〇六〇〕「田家の語」「小村」
延久一	熙寧二	一〇六九	(王安石、参知政事となり、新法を施行)
〃四	〃五	一〇七二	蘇軾〔一〇三六―一一〇一〕「望湖楼にて酔ひて書す」「赤壁の賦」「後赤壁の賦」
〃五	〃六	一〇七三	周敦頤〔一〇一七―一〇七三〕「愛蓮の説」
永保三	元豊六	一〇八四	曽鞏〔一〇一九―一〇八三〕「虞美人草」、蘇軾「承天の夜遊を記す」
応徳三	天祐一	一〇八六	司馬光〔一〇一九―一〇八六〕『資治通鑑』、王安石〔一〇二一―一〇八六〕「孟嘗君伝を読む」「鐘山即事」
長治二	崇寧四	一一〇五	黄庭堅〔一〇四五―一一〇五〕「雨中、岳陽楼に登り、君山を望む」
永久三	政和五	一一一五	(女真、国号を金と改める)
大治二	南宋 建炎一	一一二七	(北宋、滅亡す)
安元一	淳熙二	一一七五	朱熹、呂祖謙〔一一三七―一一八一〕『近思録』
建久三	紹熙三	一一九二	陸九淵〔一一三九―一一九二〕『象山集』
〃四	〃四	一一九三	范成大〔一一二六―一一九三〕「晩春田園雑興」
正治二	慶元六	一二〇〇	朱熹〔一一三〇―一二〇〇〕『四書集註』「偶成」
建永一	開禧二	一二〇六	楊万里〔一一二七―一二〇六〕『西帰集』(モンゴル帝国成立)
承元一	〃三	一二〇七	辛棄疾〔一一四〇―一二〇七〕
〃四	嘉定三	一二一〇	陸游〔一一二五―一二一〇〕「山西の村に遊ぶ」
建長二	淳祐一〇	一二五〇	周伯弼『三体詩』
正嘉一	宝祐五	一二五七	元好問〔一一九〇―一二五七〕『中州集』
文永八	咸淳七	一二七一	(蒙古、国号を元とする)

▲欧陽脩

▲王安石

▲司馬光

▲朱熹

んだ後、テムジンが大帝国を建設した。この帝国はモンゴル民族を中心とした諸族で、テムジンの死後、フビライが即位して、都を大都（北京）に移し、国号を元と定めた。そののち南宋も滅ぼして天下を支配した。
十四世紀には各地で農民反乱が起こり、やがて朱元璋が、元を滅ぼし、金陵（南京）で即位し（洪武帝）、国号を明とした。
洪武帝の死後、成祖（永楽帝）が立った。成祖は北方民族を伐ち、西方へも勢力を伸ばしたが、その死後、宦官の専横、さらに北方民族の侵入や、倭寇の被害で国力が衰退した。民衆は窮乏し、各地で反乱が起こり、李自成は農民軍を率いて明の支配を終結させた。
金の系統を引く女真族は明の衰退につけ入り、ヌルハチを押し立てて再び金を建て、つぎの太宗は国号を清とした。その後、康熙帝、乾隆帝に至り、大いに栄えたが、二度にわたるアヘン戦争、その間に起きた、洪秀全を領袖とする太平天国の大乱のために勢力が衰えた。

利にとらわれて腐敗した。
元代になると、官吏の文化水準は低下し、朱子学の亜流が幅をきかせて見るべきものはない。
明代に入っても、思想の新しい発展はほとんど見られなかったが、王守仁（陽明）が現れるに至り、宋の陸象山の説をついで、学理と実践を合一させ（知行合一）、「聖人の道は我が心の中にある」と主張する陽明学を打ち立てて朱子学に対抗した。
清代に入ると、宋学への反動として顧炎武らが実学をおこした。続いて経書の実証的研究により主観的なものから脱出しようとする考証学が生まれた。この学問の系統は清朝六儒（顧炎武・胡渭・梅文鼎・閻若璩・恵棟・戴震）によって大成された。
一方、明以来、西洋の文明が盛んに移入されたことにともない、西洋の学術や思想に影響されて革命的な風潮もしだいに強くなり、清末には康有為による革新運動が起こり、それは孫文の三民主義革命理論につながっていった。

は、唐詩を学んだ高啓、文章家としては、宋濂、王世貞、茅坤らがいる。
この時代を代表する文学はやはり通俗小説であろう。いわゆる口語体小説で、講談として語られた説話をまとめたものである。四大奇書といわれる羅貫中の『三国志演義』、施耐庵の『水滸伝』、呉承恩の『西遊記』、作者不詳の『金瓶梅』は、その代表作といえる。
また、元から明にかけては、庶民の間にも学問が普及し、種々の書物が出版された。謝枋得の『文章軌範』、曽先之の『十八史略』、李攀龍の『唐詩選』などの書がそれである。
清代の文章は唐宋八家への復帰をねらい、簡潔で謹厳な文体が尊重され、姚鼐の一派がその中心をなした。詩人としては艶麗な詩風の呉偉業、唐宋詩を学んだ王士禎、沈徳潜らがいる。
通俗小説の流れとして呉敬梓の『儒林外史』、曹霑の『紅楼夢』、また、文語体小説に『聊斎志異』がある。
清末には林紓が、デュマの『椿姫』などを翻訳して西洋文学の紹介に努力した。

日本	中国	西暦	事項
建治一	徳祐一	一二七五	黄堅『古文真宝』
弘安二	元 至元一六	一二七九	（南宋、滅亡す）
〃一〇	〃二四	一二八七	（このころ元曲の全盛期）
正応二	〃二六	一二八九	曽先之『十八史略』、謝枋得〔一二二六―一二八九〕『文章軌範』
建武二	至元一	一三三五	（科挙の制度を廃止）
興国六	至正五	一三四五	托克托ら『宋史』
正平二三	明 洪武一	一三六八	（朱元璋、即位し、国号を明とする）
〃二四	〃二	一三六九	宋濂〔一三一〇―一三八一〕ら『元史』
文中三	〃七	一三七四	高啓〔一三三六―一三七四〕「胡隠君を尋ぬ」
応永五	〃三一	一三九八	瞿佑〔一三四一―一四二七〕『剪燈新話』
〃一四	永楽五	一四〇七	解縉〔一三六九―一四一五〕『永楽大典』
明応一	弘治五	一四九二	（コロンブス、新大陸を発見）
〃三	〃七	一四九四	このころ、羅貫中の『三国志演義』成る。
永正七	正徳五	一五一〇	このころ、施耐庵の『水滸伝』成る。
〃一六	〃一四	一五一九	王陽明〔一四七二―一五二九〕『伝習録』
元亀一	隆慶四	一五七〇	このころまでに、李攀龍〔一五一四―一五七〇〕の『唐詩選』成る。
天正一〇	万暦一〇	一五八二	呉承恩〔一五〇〇―一五八二〕『西遊記』
〃一一	〃一一	一五八三	（女真、ヌルハチ、挙兵）
慶長五	〃二八	一六〇〇	このころ、『金瓶梅』成る。
元和二	〃四四	一六一六	（ヌルハチ、即位し、国号を後金とする）
寛永一三	崇禎九	一六三六	（後金、国号を清と改める）
寛文一一	清 康熙一〇	一六七一	呉偉業〔一六〇九―一六七一〕
元禄一六	〃四二	一七〇三	彭定求ら『全唐詩』
宝永七	〃四九	一七一〇	張玉書〔一六四二―一七一一〕ら『康熙字典』
正徳五	〃五四	一七一五	蒲松齢〔一六四〇―一七一五〕『聊斎志異』
宝暦一三	乾隆二八	一七六三	曹霑〔一七一五―一七六三〕『紅楼夢』
明和六	〃三四	一七六九	沈徳潜〔一六七三―一七六九〕『唐宋八家文読本』
安永五	〃四一	一七七六	（アメリカ独立宣言）
天明二	〃四七	一七八二	『四庫全書』
寛政一	〃五四	一七八九	（フランス革命）
天保一一	道光二〇	一八四〇	（アヘン戦争、起こる）
嘉永四	咸豊一	一八五一	（太平天国の乱、起こる）
安政三	〃六	一八五六	（アヘン戦争〈第二次〉起こる）
明治二七	光緒二〇	一八九四	（日清戦争起こる）

▲三蔵法師

▲孫行者

▲猪八戒

▲沙和尚

▲孫文

四大奇書

三國志通俗演義卷之一
晋平陽侯陳壽史傳
後學羅本貫中編次
祭天地桃園結義
後漢桓帝崩靈帝即位時年十二歲朝廷有
大將軍竇武太傅陳蕃司徒胡廣共相輔佐
至秋九月中涓曹節王甫弄權竇武陳蕃預
謀誅之機謀不密反被曹節王甫所害中涓
自此得權建寧二年四月十五日帝會群臣

▶三国志通俗演義

西暦	事項
一三六八	朱元璋（太祖）、明を興し、南京に都す。
一四〇二	成祖（永楽帝）即位。
一四二一	北京に遷都。
一四九四	このころ『三国志演義』成る。
一五一〇	このころ『水滸伝』成る。
一五七〇	このころまでに李攀龍の『唐詩選』成る。
一五八二	『西遊記』成る。
一六〇〇	このころまでに『金瓶梅』成る。
一六一六	ヌルハチ（清の太祖）後金を興す。
一六二六	ヌルハチ死没。
一六三二	『今古奇観』成る。
一六三六	後金、国号を清と改む。
一七一五	このころ『聊斎志異』成る。

三国志演義

『三国志演義』は元末から明初の人、羅貫中によって書かれたとされており、三国時代の英雄・策士の活躍が描かれている。

後漢の末「黄巾の乱」と呼ばれる農民暴動が起こって朝廷の力が衰えると、各地の豪族が天下をねらうことになった。この中で献帝を擁した魏の曹操が実権を握る。しかし、揚子江の東南部一帯を長年にわたって支配した孫権は、この地を基盤として呉の国を建ててあなどりがたい勢いを示した。こうしたなかで、漢王室の正統と称する劉備は、豪傑の張飛・関羽と旗上げした。曹操の大軍に惨敗した劉備は、智謀の士諸葛亮に策を乞い、その天下三分の計を実行に移し、蜀を建てる。以後、三国の英雄・策士が入り乱れ、かけひきの限りを尽くして戦いをくりひろげる。なかでも、呉の将軍周瑜が曹操の大船団を一挙に焼きはらった「赤壁の戦い」や、劉備の死後、蜀軍を率いる諸葛亮と魏の司馬懿との間で行われた「五丈原の戦い」などが有名である。

水滸伝

『水滸伝』は明のはじめころ施耐庵によってまとめられたものとされる。宋の徽宗の宣和年間（一一一九～一一二五）、宋江ら三六人が山東で反乱を起こし、一時は官軍も歯が立たない勢いであったが後に降服したということが、正史『宋史』に見える。悪政と悪吏に悩まされていた民衆の間で、宋江の徒はしだいに英雄視され、伝説化されて語られるようになり、それら武勇伝がつなぎ合わされてできたのが『水滸伝』である。この物語は腐敗した官僚政治に対する民衆の憎しみを示したものといえよう。

宋の徽宗のころ、蔡京、高俅ら高官の悪政によって罪におとし入れられた者や、政治に不平を持って官権に反抗する者が、各地から梁山伯（山東省）に集まり、宋江を首領として官軍を悩ませる。しかし、後には天子の招きに応じて、北方の遼へ遠征したり賊の反乱を平定したりする。この間、一〇八人の豪傑の多くは戦死し、生き残った二十七人も後には別れ別れとなり、宋江も結局は蔡京、高俅らに毒殺されてしまう。

物語の前半は、豪傑の勇敢な反抗が豪快に描かれ、天子に招かれてからの後半は、彼らの悲劇的な末路が描かれているが、特にその前半は描写も生き生きとしていて抜群に楽しい読み物である。

西遊記

『西遊記』は呉承恩によって、明の中期に書かれた。唐のはじめ、十六年の歳月をかけてインドへ経典をとりに行き、中国仏教界に大きな貢献をした高僧玄奘（三蔵法師）の苦難の旅を中心にして、それにまつわる伝説、さらには奇想天外な想像をまじえて書かれている。玄奘の見聞録『大唐西域記』がそのもとになったようである。

三蔵法師がインドへ経典をとりに行くのを助けて、妖怪の孫悟空、猪八戒、沙悟浄が弟子となり、超弩級の化物どもを相手に次々と危難を切り抜け、三蔵法師の宿願を達成させるというのがその筋である。

一見、架空の妖怪談のように見えるが、孫悟空の自由奔放な精神と行動力、猪八戒の貪欲な性格、沙悟浄の臆病なまでの慎重さは、やはり人間の本来持っている知、情、意の世界を示しており、単なる作り話のおもしろさに終わらせていない。そのことが、長い間人々に親しまれてきた理由でもあろう。

金瓶梅

『金瓶梅』は明代末期に成立したと考えられるが、作者は不詳である。

『金瓶梅』という題は物語の中に出てくる代表的女性、潘金蓮、李瓶児、春梅の名前から一字ずつ取ったもの。

主人公西門慶は本職の薬屋以外に多くの事業に手を染め、ありあまる金と、その男ぶりのよさを武器として、正妻以外に、芸者あがりの女、小間使い、人妻などを自分の妻とし、それにあきたらず、目につく美女につぎつぎと手を出す。しかし、その荒れた生活の報いで、三三歳で死んでしまうという話である。

『金瓶梅』の舞台は宋の徽宗の時代とされているが、実際に描かれている世情や風俗は明代のもので、当時の社会の現実を幅広く描いており、単なる好色物語というだけにとどまっていない。露骨な描写のために、しばしば発刊禁止になったことでも有名である。

◀水滸全伝挿図

蘇軾

西暦	年	事項
一〇三六	1	眉山県（四川省）に誕生。
一〇五六	21	省試に合格。
一〇六一	26	制科に合格。鳳翔府に書記官として赴任。
一〇六九	34	王安石、新法を推進。
一〇七九	44	新法批判の罪で黄州に流罪。
一〇八二	47	「赤壁の賦」
一〇八六	51	王安石、司馬光、死没。
一〇九一	56	朝廷に帰る。
一〇九三	57	兵部尚書、礼部尚書を歴任。
一〇九四	59	政局変動し、恵州（広東省）へ流罪。
一〇九七	62	僻地の昌化軍へ流罪地変更。
一一〇一	66	許されて帰る。途中、常州で死没。

期待された門出

蘇軾は宋代随一の文学者である。父蘇洵、弟蘇轍も、ともに優れた文学者で、世に三蘇と称され（父は老蘇、軾は大蘇、弟は小蘇）、ともに唐宋八大家に数えられる。

二一歳で都の開封に上り、弟とともに省試（文官試験）に合格し、翌年の二次試験にもそろって合格した。時の試験官に欧陽脩（一〇〇七～一〇七二）、梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）らがいた。

欧陽脩は当時、文学者・歴史家として有名であり、政治家としても礼部侍郎（文部次官）であった。儒教思想を内容とする文学を主張し、中唐の韓愈の主張した古文復興運動を引き継いで、自由な古文体の確立に努力していた。また、梅堯臣は詩人としては欧陽脩をしのぐと評価され、欧陽脩の主張を受けて新しい詩風の確立に専念していた。

蘇兄弟にとって、こうした有名な文学者に認められたことは、大変な名誉であると同時に、文学者としてまことに幸せな出発となった。軾は以後、欧陽脩を師と仰いだ。また、『資治通鑑』の編者司馬光（一〇一九～一〇八六）にも認められ、文学者としても、政治家としても、将来を期待されることとなった。

政治批判と流罪

二六歳の時、制科といわれる特別試験に合格し、鳳翔府（陝西省）の書記官として最初の任に着いた。その後、中央の官となったが、王安石（一〇二一～一〇八六。政治家として有名であるが、宋代を代表する文学者でもある。唐宋八大家の一人）の政策を嫌って地方に出、以後、地方官を歴任した。

杭州通判（浙江省副知事）であったころは、しばしば西湖に遊び、有名な「望湖楼にて酔ひて書す」や「湖上に飲む、初め晴れ後雨ふる」などの詩を詠じた。

このころ宋は、北方の遼や西夏の侵略になやみ、国防費が増大した。この経済危機を乗りきるため、王安石を中心とする改革派は新法を打ち出した。しかし、蘇軾は、新法は人民を苦しめるものであるとして反対した。すなわち、均輸法のために運河を開くことは農耕をさまたげることになる、塩法により貧乏人は塩も食えなくなる、青苗法によって農民に金を貸し利子を取るのは人民を苦しめるものである、と主張した。

この新法には、欧陽脩や司馬光らも反対し、はなはだ不評の面が多かった。しかし、神宗の支持を受けていた新法党は、軾が四四歳の時、天子の政治をそしったとして、彼の諷刺の詩をとりあげて死罪にせんとした。しかし、大赦にあって黄州（湖北省）に流罪となった。このころ、魏の曹操の大軍を呉の周瑜が撃破したことで有名な赤壁の名勝に遊び「赤壁の賦」「後赤壁の賦」などを作っている。

政変の中で

軾が五〇歳の時に神宗が死に、新法党が実権を失って、軾は中央政府に復帰した。しかし、政局は必ずしも思うようにはならなかった。ある日、侍女たちに「わしの腹の中に何がつまっていると思うか。」と問うたが、誰も答えられなかった。しばらくして、侍女の一人である朝雲が、「先生の腹の中には、時勢に合わないものがいっぱいつまっているのでしょう。」と言いあてたので、軾が大笑いした（『梁渓慢志』）という話も伝わっている。やがて杭州の知事となって西湖に蘇堤をつくり、さらに、兵部尚書（国防大臣）、礼部尚書（文部大臣）の要職につくに至った。

五九歳の時、再び、新法党が実権を取りもどし、軾は官職が高かったので、前より厳しい処置を受けることになり、ついには昌化軍（海南島）にまで流された。六五歳の時、哲宗が死んで、再び中央に帰ることになったが、翌年、帰りの旅の途中、常州（江蘇省）で病没した。

再度の流罪は、彼の文学に大きな影響を及ぼし、自由のない生活の中での思索は仏教的色彩の強いものとなり、より清澄な心情を感じさせる。

▲舟遊の地，赤壁

軾と轍　「車にはその働きに必要な輪や輻（車輪の矢）などがあるが、軾（車の横木）は車の働きに直接関係がない。しかし、軾のない車は完全ではない。おまえは飾らないことで、人に憎まれるかもしれないから、この名をつけたのだ。さて、車が通ると必ず轍（車の通った跡）がある。轍は車そのものの働きに直接関係がないから、車や馬が倒れても轍に禍は及ばないものだ。だから、いつも禍の外におれるようにと、この名をつけたのだ。」という意味のことが、父蘇洵の文に見える。

後に軾は政争にまきこまれて流罪にあい、父親の願いは通じなかったが、弟轍には禍が及ばず、父の願いはかなえられた。

■近代文学史年表（中華民国時代～中華人民共和国時代）

歴史

アヘン戦争、日清戦争、さらに義和団の運動によってぐらつく清朝は、辛亥革命によってとどめをさされ、一九一二年、孫文を大総統として**中華民国**が発足した。しかし、やがて北方軍閥の実力者袁世凱が大総統となり実権を握る。

第一次世界大戦が始まると、軍閥政府に抗議して五四運動が起こり、その反封建主義、反帝国主義の運動は、各地に波及していった。一九一七年、孫文を中心に国民党が結成され、共産党と手を結んで北方軍閥を打倒するための北伐が始まり、国民政府は中国を統一した。しかし、国・共統一戦線の崩壊により、毛沢東らは中国奥地に根拠地を作り、国民政府と対立した。

満州事変、太平洋戦争を経過し、日本の降伏とともに国・共の内戦が始まった。結果は共産軍の勝利となり、一九四九年、**中華人民共和国**が成立した。

その後、文化大革命、批林批孔運動など、反革命の動きを封ずる運動を展開しつつ、今日に至っている。

思想

清末に、崩壊寸前の清国を、西洋を模範とした近代化によって補強せんとした洋務運動、変法運動はいずれも失敗し、排満革命運動が盛んになった。ここにおいて孫文は、民族解放、民権政治、民生（社会）主義を説く、いわゆる**三民主義**の革命理論を展開した。

辛亥革命によって清国は倒れたが、革命の成果は軍閥に横取りされ、やがて三民主義の理論を発展させた反封建主義、反帝国主義の思想が広まっていった。そうしてそれは、五四運動、北伐戦争、国・共内戦、抗日戦争を経過し、民族解放の思想となった。

毛沢東は、このうねりの中に身を置きつつ、マルクス・レーニン主義から中国の社会に適応できるものを吸収し、独自の革命理論を作り上げた。その理論は、労働者・農民をすべての基礎において革命を推進すべきことを説くものであった。

この**毛沢東思想**は、中華人民共和国成立の後も、社会主義国家建設のための原理として、応用されている。

文学

清末の文学界は沈滞ムードの中にあったが、一九一七年、雑誌**「新青年」**によって胡適は「文学改良芻議」を書き、文語文を排して口語文に改めるよう主張し、また陳独秀は「文学革命論」を書いて、封建文学を倒し、国民文学を建設しようと呼びかけた。そうして翌年、現代文学の最初の作品として魯迅の**「狂人日記」**が書かれた。

やがて第一次の国・共合作が挫折すると、革命文学が提唱され、それは左翼作家連盟の結成となり、魯迅を指導者として、無産階級の解放をスローガンにかかげて活動を始めた。

一九三六年頃からは抗日の機運が高まり、周揚らによって国防文学が提唱され、魯迅との激しい討論をへて文学界の抗日統一戦線が作られた。

一九四二年には毛沢東の**文芸講話**によって、文学・芸術はまず第一に人民に奉仕すべきもの、という方向が確認され、以来今日まで、革命の一環としての文学活動が行われている。

日本	中国	西暦	人名・書名（作品名）・史実
明治四四	宣統三	一九一一	（辛亥革命により清朝滅亡す）
大正一		一九一二	（清帝退位し、孫文が中華民国臨時政府の大総統となる）
〃三	中華民国三	一九一四	（第一次世界大戦）
〃六	〃六	一九一七	胡適（一八九一—一九六二）『文学改良芻議』、陳独秀（一八八〇—一九四二）『文学革命論』（ロシア革命の成功）
〃七	〃七	一九一八	**魯迅**（一八八一—一九三六）**『狂人日記』**
〃八	〃八	一九一九	魯迅『孔乙己』『薬』（五四運動）
〃九	〃九	一九二〇	郁達夫（一八九六—一九四五）『沈淪』
〃一〇	〃一〇	一九二一	**魯迅『阿Q正伝』『故郷』**、郭沫若（一八九二—一九七八）詩集『女神』（中国共産党創立）
昭和二	〃一六	一九二七	茅盾（一八九六— ）（蒋介石、反共クーデター）
〃三	〃一七	一九二八	魯迅『朝花夕拾』（北伐成功。蒋介石、国民党主席に）
〃六	〃二〇	一九三一	茅盾『子夜』、巴金（一九〇五— ）『家』（満州事変）
〃一〇	〃二四	一九三五	艾蕪（一九〇五— ）『南行記』、蕭軍（一九〇七— ）『八月の郷村』瞿秋白（一八九九—一九三五）
〃一一	〃二五	一九三六	魯迅『故事新編』（西安事件）
〃一二	〃二六	一九三七	老舎（一八九八—一九六六？）『駱駝祥子』、**毛沢東**（一八九三—一九七六）**『実践論』『矛盾論』**（日中戦争はじまる）
〃一五	〃二九	一九四〇	丁玲（一九〇七— ）「私が霞村にいた頃」
〃一七	〃三一	一九四二	郭沫若『屈原』、茅盾『腐蝕』、**毛沢東『文芸講話』**
〃一八	〃三二	一九四三	趙樹理（一九〇六—一九六八）『小二黒の結婚』『李有才板話』
〃一九	〃三三	一九四四	歌劇「白毛女」
〃二〇	〃三四	一九四五	趙樹理『李家荘の変遷』、茅盾『清明前後』、老舎『四世同堂』（太平洋戦争終わり、日本降伏）
〃二二	〃三六	一九四七	黄谷柳（一九〇八— ）『蝦球物語』
〃二三	〃三七	一九四八	丁玲『太陽は桑乾河の上を照らす』
〃二四	中華人民共和国	一九四九	（中華人民共和国が成立し、国民政府は台湾へ）
〃三〇	〃	一九五五	趙樹理『三里湾』、高宝玉（一九一七— ）『高宝玉』
〃三二	〃	一九五七	曲波『林海雪原』、蕭軍『過去の年代』、艾蕪『百煉成鋼』
〃四〇	〃	一九六五	金敬邁（一九三〇— ）『欧陽海の歌』
〃四一	〃	一九六六	（文化大革命始まる）
〃五〇	〃	一九七五	（蒋介石、死没）
〃五一	〃	一九七六	（周恩来死没〈一月〉。毛沢東死没〈九月〉）

魯迅

西暦	年	事項
一八八一	1	浙江省・紹興に誕生。
一八九三	13	祖父入獄。家は没落。
一九〇二	22	日本に留学。
一九〇四	24	仙台医学専門学校に入学。
一九〇九	29	帰国。
一九一一	31	辛亥革命。清国、滅亡す。
一九一二	32	中華民国成立。教育部部員となり北京へ。
一九一八	38	『狂人日記』
一九一九	39	五四運動。
一九二五	45	孫文、死す。
一九二六	46	北京を離れ、厦門に行く。
一九二七	47	厦門から広州、上海へ。
一九三六	56	死没。
一九四二		文芸講話。
一九四九		中華人民共和国成立。

魯迅は、浙江省の紹興で生まれた。祖父は官吏であったが、ある事件のために入獄し、家は没落した。そのうえ父が重病にかかり、魯迅は質屋と薬屋に三年間も通わねばならなかった。

父親の没後、学校へ行こうにも資金がなかったので、学資のあまりいらない官立の学校に入り、そこを卒業後、留学生試験にパスして日本に来た。

日本留学

時に中国は清朝の末期にあたり、列強諸国に侵害されて植民地化されつつあり、それと同時に、清朝打倒の革命運動が始まっていた。魯迅も革命運動に身をささげようと心に決め、日本に来ると仙台の医学専門学校に入学した。日本の明治維新が西洋医学に端を発したものであることを考えてのことであった。この学校で魯迅は藤野先生に出会う。先生は彼の勉強と生活によく気を配ってくれた。のちに魯迅は「藤野先生」の一文を書き、感謝の念を表している。

しかし魯迅は、講義のあい間のスライド映写――そこには日露戦争においてスパイの容疑をかけられ、見せしめのために首を斬られようとしている中国人と、それを見物している同じ中国人が写されていた――を見て、「愚弱な国民は体がいかに健全でもだめだ。我々が何よりも先にしなければならないことは、中国人の精神を改造することだ。それに役立つのは文芸だ。」と考えて、医学から文学へと方向を変えた。

革命いまだ成らず

辛亥革命によって清朝は滅亡し、翌年、中華民国が成立したが、革命の成果はすべて軍閥にかすめとられた。彼らは自分たちの利益のために、中国を外国に売り渡すような政策をとり、革命にかけていた人々の期待は完全に裏切られた。魯迅も深い絶望と寂寞のうちに幾年かをすごす。

やがて陳独秀、胡適らによる文学革命が、雑誌『新青年』に拠って始まった。それまで文語体で書かれていた文学作品を口語体で書こう、という運動であり、それは封建道徳の中心にある孔子打倒、封建道徳を表面に押し立てる軍閥政府打倒、につながっていた。

絶望の淵にあった魯迅は、この文学革命の将来にも希望を持てなかったが、友人のすすめにより「こんな中国でも、もしかしたら救えるかもしれない。」と思いなおし、初めての口語体小説『狂人日記』を書いて『新青年』に発表した。それは狂人の日記という体裁をかり、中国古来の儒教道徳を「人を食う」ものだとして、徹底的に批判したものであった。

彼は引き続き『孔乙己』『故郷』『祝福』『阿Q正伝』などを発表した。いずれも旧社会における不幸な人々の様子を描いたものである。

『狂人日記』を発表してから五六歳で亡くなるまで、魯迅は北京で、さらに上海で、中国の進歩をはばむすべての敵と、一本の筆を武器として戦った。その戦いは、「もし人をかむ犬だったら、すべて打つべきものと私は考える。たといそれが岸にいようと、あるいは水の中にいようとも。」(「フェアプレイはまだ早すぎる」)と言うように、徹底していた。これは、敵に慈悲をかけたために、かえってその逆襲を受け、これまで多くの生命を犠牲にしてきた苦い経験に基づく、革命の原則なのであった。

中国の「牛」

魯迅が亡くなったとき、妻であり同志でもあった許広平は、次のような弔辞を読んだ。

悲しみがあたりに立ちこめています。
私たちはあなたの死に対して、言うこともありません。
あなたはかつて私に言いました。
「私は牛のようなもの、食べるのは草で、しぼり出すのは乳、血」と。
あなたは、休息とはどんなものか、娯楽とはどんなものか、知らなかった。
仕事、仕事！
死の前にもなお筆をとり、
そうして今は……
私たちはみな、心をひきしめてあなたのあとに続きます。

これはまことに魯迅という人を言い尽くしたことばといえる。彼は病める中国を救うために、黙々と働き続け、甘んじてその犠牲になろうとした。中国の「牛」であった。

のちに毛沢東は、延安における「文芸講話」の中で、「我々は魯迅を手本にして、人民大衆の『牛』となり、命のある限り、献身的につくさなければならない。」と説いているが、その魯迅の精神は今もなお、中国人民に受け継がれ、革命の原動力となっている。

▲『阿Q正伝』さし絵

▲『風波』さし絵

主要文学者・思想家解説

王之渙(六九五—七四二)　盛唐の詩人。并州の人。若いころは遊俠の人と交わり、中年に及んで読書にはげんだ。王昌齢、高適、崔国甫らと交わり、情感のある詩を詠じた。「鸛鵲楼に登る」「涼州詞」「九日　送別」の詩など。

王昌齢(六九八—七五五?)　盛唐の詩人。官吏となったが行いを慎まず、たびたび左遷され、安禄山の乱後、故郷で刺史に殺された。李白とともに七言絶句の名手といわれた。辺塞、閨怨の詩人。「出塞行」「閨怨」「西宮の春怨」の詩など。

欧陽脩(一〇〇七—一〇七二)　北宋の詩文の大家・政治家。文章では古文の復興に尽力し、詩も内容・思想のあるものを目ざす。唐宋八大家の一人。「秋声の賦」「酔翁亭の記」など。

王陽明(一四七二—一五二八)　名は守仁。陽明は号。官吏としても大いに活躍したが、陸九淵の学を引き継ぎ、知行合一を唱え、朱子学に対し陽明学を大成した。『伝習録』など。

郭沫若(一八九二—一九七八)　現代中国の文学者・歴史家。日本留学後、文学運動をおこして創造社をたて、後に革命家として、実践、論争に活躍。『中国古代社会の研究』、歴史劇『屈原』、評論『李白と杜甫』など。

賈島(七七九—八四三)　中唐の詩人、はじめ僧侶であったが、韓愈に認められ、後に長江県主簿となる。詩は苦労して詠ずるものと主張。「桑乾を渡る」の詩。

顔回(BC五一三—BC四八二)　春秋時代、魯の孔子に師事し、門人の中でもっとも孔子に信頼され、将来を嘱望された。不幸にして若死にし、孔子をなげかせた。

管仲(?—BC六四五)　春秋時代、斉の宰相。法家の祖。桓公を補佐して遂に覇者とした。人民の生活を豊かにすれば国は治まると主張した。『管子』など。

韓非(BC二九五—BC二三三)　戦国時代の思想家。李斯と共に荀子に師事し、刑名、法術を学んだ。韓の王を諫めて用いられず、『韓非子』を著す。後、秦王に仕えたが、李斯に毒殺された。

嵆康(二二三—二六三)　魏・晋の人。官は中散大夫。名利を求めず、老荘を好み、反俗的な生き方をつらぬいた。〝竹林の七賢〟の一人。鍾会にくまれ、司馬昭に殺された。「養生論」など。

元稹(七七九—八三一)　中唐の詩人。白居易と親交あり。官にあっては、たびたび左遷された。詩は平易で、その詩風は「元和体」といわれる。「白楽天の江州司馬に左降せらるるを聞く」の詩など。

▲元稹

阮籍(二一〇—二六三)　魏・晋の人。老荘を好み、酒・琴を愛し、よく詩を吟じた。形式的礼法を好まず、「白眼視」の故事は有名。「詠懐詩」「達生論」など。

高啓(一三三六—一三七四)　明代の詩人。『元史』の編纂にも参加。詩は力強く格調が高く、明代随一と称せられる。太祖に殺された。「胡隠君を尋ぬ」の詩など。

公孫竜(生没年未詳)　戦国時代の人。趙の平原君に仕え、詭弁をもって有名な弁論家。荘子とほぼ同時代の人。「白馬は馬にあらずの論」などを唱えた。

高適(七〇二—七六五)　盛唐の詩人。剛健な性格で、詩人としてはまれな栄達をして渤海侯に封ぜられた。辺塞の詩人として岑参と並び称せられる。「除夜の作」「塞上にて吹笛を聴く」の詩など。

胡適(一八九一—一九六二)　中華民国の学者。アメリカに留学。後に北京大学教授。文学革命を首唱し、白話(口語体)文学運動を続け、中国の文学・思想界に大きな影響を与えた。

崔顥(?—七五四)　盛唐の詩人。ばくちと酒を好み、詩も軽薄であると評された。「黄鶴楼」の詩など。

子思(BC四九二—BC四三一)　春秋時代の思想家。孔子の孫。名は伋。子思は字。孔子の弟子の曽子に学び、『中庸』を著した。性善説の根本を作った。

司馬光(一〇一九—一〇八六)　北宋の文人・歴史家・政治家。王安石の新法に反対した。後に宰相となり、新法を改めた。歴史書『資治通鑑』など。

司馬相如(BC一七九—BC一一七)　前漢の文人。辞賦にすぐれ、雄大な構想の賦を詠じて、漢・魏・六朝の文人たちに大きな影響を与えた。「子虚の賦」「上林の賦」など。

謝冰心(一九〇〇—　)　現代中国の女流作家。キリスト教的素養による、愛を強調する短編や詩で有名。文化大革命ではすすんで農村へも赴いた革命的知識人。詩集『繁星』、小説『寂莫』『小読者に寄す』など。

謝霊運(三八五—四三三)　六朝、宋の詩人。康楽侯に封ぜられ謝康楽ともいう。山水詩に抜群の才を示し、文帝に厚遇されたが、後に刑死。

周敦頤(一〇一七—一〇七三)　北宋の人。宋学の祖といわれ、『太極図説』や『通書』を著し、宇宙の根源である太極から万物が生成してゆくことを説く。「愛蓮の説」など。

朱熹(一一三〇—一二〇〇)　南宋の思想家。孔子、孟子の主張を体系的に整理し、周敦頤の宋学を継いだ程顥・程頤の学を大成させ、朱子学をたてた。また『四書集註』など経書の注釈が多くある。

荀況(?—BC二三八)　戦国末期の思想家。楚の春申君に仕えた。孔子の学を伝え、礼を重んじ、孟子の性善説に対して性悪説を唱えた。彼の門下に李斯、韓非らが出た。

商鞅(?—BC三三八)　戦国時代、衛の人、公孫鞅のこと。秦の孝公に仕え、秦の法律や土地制度を改革し、刑罰を厳しくした。『商君書』。

昭明太子(五〇一—五三一)　六朝、梁の武帝の子、蕭統のこと。歴代文人の名作を集めた『文選』を編集した。

岑参(七一五—七七〇) 盛唐の詩人。辺塞の詩人としては第一人者。その詩は安西都護府などの勤務による体験にもとづくもので、悲愁と孤独感に満ちている。「胡笳の歌」「磧中の作」など。

曽参(BC五〇五—BC四三?) 春秋時代、魯の人。孔子の高弟。親に孝にして、日々その身を反省した。『孝経』を作り、孔子の学を子思に伝えた。

曹植(一九二—二三二) 三国、魏の人。曹操の子。陳思王に封ぜられた。詩文の才に優れていたが、兄の曹丕にねたまれて不幸な境涯を過ごした。「七歩の詩」「洛神の賦」など。

孫文(一八六六—一九二五) 中華民国の革命指導者。日本に亡命し、東京で中国革命同盟会を起こし、三民主義を唱えて革命に尽力した。清朝滅亡後、臨時大総統となった。

張継(生没年未詳) 盛唐の詩人。若くして世に知られ、博識で談論を好んだ。「楓橋夜泊」の詩など。

趙樹理(一九〇六—一九六八) 現代中国の作家。大衆的風格をそなえた人民芸術家。『李家荘の変遷』など。

陳子昂(六六一—七〇二) 初唐の詩人。六朝風の装飾の多い詩に反対し、諷諭の作風を主張した。盛唐の詩人、特に杜甫に大きな影響を与えた。「感遇詩」「幽州の台に登る」の詩など。

程顥(一〇三二—一〇八五) 程頤(一〇三三—一一〇七)とともに北宋の学者。兄顥は明道先生、弟頤は伊川先生と呼ばれ、二程といわれる。周敦頤について宋学(性理の学)を学び、宇宙の原理、人性の研究に志した。

丁玲(一九〇七—) 現代中国の女流作家。解放運動の中での文学活動に功績がある。『私が霞村にいた頃』『太陽は桑乾河の上を照らす』などの小説。

董仲舒(BC一七九?—BC一〇四) 前漢の学者。景帝の時、博士となり、武帝にすすめて儒学を国教とさせた。『春秋繁露』など。

杜牧(八〇三—八五二) 晩唐の詩人。官吏としては不遇であったが、その詩は滅びゆくものの美を詠じて情緒があり、李商隠と並び称せられる。「秦淮に泊す」「山行」「江南の春」の詩など。

▲中国の春景色

潘岳(二四七—三〇〇) 晋の文人。陸機とともに晋代を代表する文人であり、「錦をひろげたよう」だと評される華麗な美文は、六朝でも屈指のもの。人の死を悼む哀傷の詩文が特にすぐれている。

班固(三二—九二) 後漢の歴史家。父、班彪の志をつぎ、二十数年かかって『漢書』を編纂したが、未完成のまま獄死。妹の班昭が書きついだ。「両都の賦」など。

范成大(一一二六—一一九三) 南宋の詩人。官吏としては参知政事(副宰相)にまでなった。晩年に蘇州郊外に隠棲してから作った「四時田園雑興」六〇首は彼の代表作。他に紀行文『呉船録』がある。

范仲淹(九八九—一〇五二) 北宋の文人。仁宗の時、西夏の防衛にたずさわって功績をあげ、参知政事となる。詩文の大家であるが、とりわけ散文をよくし、「岳陽楼の記」は有名。また思想家としてもすぐれていた。

聞一多(一八九九—一九四六) 現代中国の詩人・学者。はじめは極端な唯美派の詩人であったが、祖国の現状を憂憤した愛国詩を作るようになった。『詩経』『楚辞』などの研究に大きな業績をあげた。抗日戦争後、民主運動に努力していたが、国民党の特務に暗殺された。

茅盾(一八九六—) 現代中国の作家・評論家。写実主義文学を提唱。『蝕』『子夜』などの小説。

墨翟(BC四八〇?—BC三九〇) 戦国時代、宋の人か。人を平等に愛する兼愛を唱え、倹約を主張し、戦争に反対して、儒家と対立した。墨家の祖。

孟浩然(六八九—七四〇) 盛唐の詩人。節義を重んじた。張九齢に召され官吏となる。陶淵明の流れをくむ詩人で、自然美を詠ずることに巧み。「春暁」「故人の荘に過る」「洞庭に臨む」の詩など。

毛沢東(一八九三—一九七六) 現代中国の偉大な政治家・思想家。終始一貫して軍閥、帝国主義と戦い、中国共産党を率いて中華人民共和国をたてた。大衆を信頼することと自己批判の思想に特色があり、プロレタリア独裁の中でも継続的革命が必要と説く。『実践論』『矛盾論』など。

▲毛　沢　東

楊朱(生没年未詳) 戦国時代の思想家。個人主義(為我の説)をたて、墨翟の兼愛の説と対立した。孟子は異端の説としてこれを排斥した。

陸游(一一二五—一二〇九) 南宋の文人。官吏としては出世せず、地方官として各地を転々とした。詩人としては、壮大で自由な独自の詩風によって多くの作品を作り、生涯に作った詩は一四、〇〇〇首にものぼるという。詩の内容は、異民族王朝である金の打倒を願う民族主義的なもので、その願いのかなえられぬ嘆きを詠じたものが多い。

李商隠(八一三—八五八) 晩唐の詩人。温庭筠と共に艶麗な詩風で知られる。多くの典故を用いて難解であるが、豊かな空想と浪漫的色彩に情趣がある。「夜雨北に寄す」「無題」の詩など。

老舎(一八九八—一九六六?) 現代中国の作家。庶民の生活を愛情とユーモアにつつんで描いた。『駱駝の祥子』『四世同堂』などの小説。

主要作品解説

易経　周以前、作者未詳。五経の一つ。『易』『周易』とも呼ばれる。後世の哲学や易占いなどの基本原理となった。万物の変化と倫理の関係などが説かれている。

淮南子　前漢、淮南王劉安著。二一巻。老荘思想を中心とし、儒家や法家の説をまじえ、幅広く諸学説をとり入れて、治乱興亡、伝説や吉凶などを説く。

管子　春秋、斉の管仲著。二四巻。法家に属する書で、法を重んじ、民を富ませ、道徳を重んずることを説く。

顔氏家訓　北斉、顔之推著。二巻。身をたて、家を治める方法を述べ、世間一般の誤りを指摘して、子孫をいましめた書物。

漢書　後漢、班固編。一二〇巻。『前漢書』ともいわれる。前漢の高祖から一一代平帝の元始五年までの二二九年間の歴史。儒教的色彩が強いが、文章が簡潔で整っており、文学的にも価値が高い。

韓非子　戦国、韓非著。二〇巻。政治の手段として法律・刑罰を重んじ、信賞必罰、富国強兵を説く法家の書。対句・比喩などを巧みに用いた、異色の名文。

玉台新詠　六朝・陳、徐陵編。一〇巻。漢から六朝梁までの五言・楽府などの詩を集めたもの。「艶体」と呼ばれる恋愛詩がほとんどである。

今古奇観　明、抱甕老人著。四〇巻。四〇編の短編小説を集めた。世間におこった話を素材とした世話物が多い。江戸庶民文学に大きな影響を与えた。

近思録　宋、朱熹と呂祖謙の共著。一四巻。周濂渓、程明道、程伊川、張横渠ら宋学の大家のことばから六二二項を選んで、宋学の要点を体系的に示した書物。四書、『小学』などとならび朱子学では重視された。

康熙字典　清、康熙帝勅撰。四二巻。四九〇三〇字の漢字の音声・字義を解説し、歴代の字典の総括として、近来まで最高の字典として扱われた。

孝経　戦国？　曽子の門流の著。一巻。孔子が弟子の曽子に孝について語ったものの記録。道徳の根源を「孝」として、個人と天下の秩序を説いた書。

孔子家語　魏、王粛著？　一〇巻。孔子とその門人たちの言行録。『論語』の姉妹編ともいえ、孔子の思想・言行を知るのに、必要にして便利な書物。

紅楼夢　清、曹雪斤著。別名『石頭記』。けんらん豪華な貴族家庭を背景とした、主人公賈宝玉をめぐる悲恋の物語。人物の心理や情景描写も巧み。

後漢書　六朝、宋、范曄編。一二〇巻。後漢王朝一代の記録。赤眉の乱の中から光武帝が台頭し、黄巾の乱で後漢が滅亡する（献帝）までの歴史。

五経正義　唐、孔穎達・顔師古らの編。二二三巻。太宗の勅命によって『易経』『詩経』『書経』『春秋』『礼記』五経の古い注釈を参考に、さらに注釈を加えた書物。科挙のために経書の統一的解釈が必要となって作られた。

国語　戦国、左丘明の著と伝えられる。二一巻。春秋時代の周・魯・斉・晋・鄭・楚・呉・越八国の歴史を国別に記した史書。『春秋外伝』ともいう。

呉子　戦国、呉起著。一巻。楚の宰相として功績をあげた呉起が、まだ魏の将軍であった時、魏の文侯とその子の武侯に説いたもの。現存するのは六編。

古詩源　清、沈徳潜編。一四巻。『詩経』と『楚辞』を除く、唐代以前の代表的な詩・楽府など九七六首を収録。詩の採択の範囲も広く、選詩も適当といえる。

古文真宝　宋、黄堅編。前集一〇巻、後集一〇巻。戦国末から宋に至るまでの詩文集。前集は詩、後集は文を載せ、漢詩文を学ぶ初学者の必読の書とされた。

三体詩　宋、周弼編。六巻。唐代の詩を七言絶句、五言律詩、七言律詩の三体にわけて編集したもの。一六七人の詩人の作品が載っている。

資治通鑑　宋、司馬光編。三九四巻。周の威烈王から五代後周の世宗まで、一三六〇余年間の歴史を編年体に編集したもの。為政者の政治を資ける鑑となることを願って編まれた通史。

四書集注　宋、朱熹撰。一九巻。『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書に注釈を加えたもの。義理を精細に説き、江戸時代の官学はすべてこの書によった。

十八史略　元、曽先之編。七巻。『史記』以下『五代史』までの一七史と宋代の史書から、重要で興味ある話を抜き出し簡略化してつないだ、初学者用の通史。

▲元治四刻『十八史略』

春秋　春秋、孔子の編といわれる。魯の隠公から哀公まで二四二年間の歴史を編年体に記録した書。簡単な記述であるが、孔子が天下の名分を正す目的で編集したものとして、儒教の経典となっている。

春秋左氏伝　戦国、左丘明著。三〇巻。歴史的な立場で、豊富な史料を使って、本文の背後にある事実を詳しく説明しており、文学的にもすぐれた文章である。『公羊伝』『穀梁伝』と合わせて「春秋三伝」という。

貞観政要　唐、呉兢編。一〇巻。唐の太宗の貞観年間は〝貞観の治〟といわれ太平の世であった。このころの太宗とそれを補佐した臣との政治についての問答。

書経　春秋、孔子の編といわれる。二〇巻。虞・夏・商・周四代の政治の記録。堯・舜から周の穆王まで、歴代天子の言行を中心に書かれている。『尚書』ともいう。

説苑　前漢、劉向著。二〇巻。春秋時代から漢初までの人々の伝記や逸話をあ

つめ、具体的事例をあげ、人々の処世訓としたもので、文学的にも高く評価される。

西廂記 元、王実甫作。元曲の代表的作品の一つ。張君瑞と崔鶯鶯との恋愛感情の機微を描き、その表現の巧みさは定評がある。

説文解字 後漢、許慎著。三〇巻。当時の古典的字体の小篆にもとづいて、部立てをし、漢字の形・音・義を説明した字書。九三五〇余字についての解説がある。

山海経 作者未詳。一八編。古代の地理書で、晋の郭璞が序と注釈を加えている。内容は中国周辺の動物・植物・鉱物および神話・伝説を述べたものであるが、しばしば怪奇な国々の、怪奇な人・動物が現れる。

戦国策 前漢、劉向編。三三巻。周の元王より秦の始皇帝まで約二四〇年間に諸国で活躍した遊説の士の言論と権謀術策を、国別に記録した歴史書。

千字文 六朝・梁、周興嗣撰。「天地玄黄」ではじまる四字の句を二五〇句選び一千字とした書物。王羲之の書から集めた句で、書の入門書として用いられる。

全唐詩 清、康熙帝勅撰。彭定求らの撰。九〇〇巻。集録詩人二二〇〇余人。詩四八九〇〇余首。帝王、后妃の作よりはじめ諸臣の作を録し、あらゆる階層の人々の作品に及ぶよう編集してある。

孫子 春秋、孫武著。一三編。万物は変化流動するとし、その中で、劣勢、弱者も優位に立てるという論法の兵法書。

大学 漢？ 作者未詳。一編。もとは『礼記』の中の一編。漢の武帝が儒教を国教とし、大学を設置したさいの教育理念を示したものと思われる。四書の一つ。朱熹が整理し、注釈を加えて『大学章句』を作った。

太平御覧 宋、李昉らの奉勅撰。一〇〇〇巻。宋代の類書（百科事典）で、引用書の数は一六九〇種にのぼり、内容は、天地から儀式、飲食、動植物までの五五部門に分かれている。宋以前の事がらを調べるのに便利な書物。

中庸 春秋、子思（孔伋）著といわれる。一編。もとは『礼記』の一編であった。「誠」と「中」を根本の理念として、偏向しない道理を説く。四書の一つ。

枕中記 唐、沈既済作。唐代の伝奇小説の一つ。主人公の盧生が、道士呂翁の仙術によって夢の中で枕中に入り、そこで栄華をとげるが、目覚めると、それは黍飯ができあがるにも足りない短い時間のことであった、という内容。道家的教訓色の濃い物語。

▲一炊夢（渡辺崋山筆）

伝習録 明、薛侃・銭徳洪らの編。三巻。明の王陽明が門人の問いに答えたことばの記録。「知行合一」（認識と実践との統一）の思想が明らかにされている。

唐詩選 明、李攀龍の編といわれる。七巻。唐の詩人一二七人の作品四六五首を、古詩、律詩、絶句、排律に分類して編集した詩集。

唐宋八家文読本 清、沈徳潜編。三〇巻。古文復興運動を起こした唐の韓愈、柳宗元、それを完成させた宋の欧陽脩、王安石、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曽鞏の八人の名文を編集。わが国でも多く読まれた。

琵琶記 元、高明作。『西廂記』とならぶ元曲の代表作。夫蔡邕が都に上った後、両親を大切にみとり、遙か都に夫を尋ねる、趙五娘の苦難と貞節を描いた戯曲。

文章軌範 宋、謝枋得編。七巻。科挙受験のための参考書として、模範となるべき文章六九編を選んだもの。主として唐宋代の古文。

文心雕龍 六朝・梁、劉勰著。一〇巻。文章の体裁を論じ巧拙を論じた、中国最古の文学理論書。視野広く、卓抜した意見を述べ、後世への影響も大きい。

抱朴子 晋、葛洪著。内編二〇巻、外編五〇巻。道家の書。内編は仙道の根本を述べ、仙薬の作り方や仙人になる方法を説く。外編は仙道の世界観によって、当時の政治・社会を批判している。

墨子 戦国、墨翟著。一五巻。五三編が現存。儒家に対抗した墨子の言行録。乱世に処するため、兼愛、非攻を主張した墨家の実践のための書。

本草綱目 明、李時珍著。五二巻。医薬に供する自然物を記述したもので、広く植物・動物・鉱物にわたる。古代から明代までの、膨大な医薬知識の集大成となっている。

蒙求 唐、李澣編。三巻。古人の逸話を類別編集した書。似た話を二つずつまとめて一編とし、こどもが記憶しやすいように四字句の題をつけた、故事・故実を知るための書。

文選 六朝・梁、蕭統（昭明太子）編。三〇巻。周から梁まで約千年にわたる代表的文学者一三〇余人、作品約八〇〇編を収録した、現存する最古の詩文集。三九種の文体にわけられており、文学的にも価値の高いもので、日本でも古くから読まれた。

礼記 漢、戴聖編。四九編。周末から秦、漢にかけての儒者の、「礼」に関する学説を記録したもので、日常の礼儀から、冠婚葬祭、官爵、身分、学問などに及ぶ。

聊斎志異 清、蒲松齢著。八巻。文語体の短編小説集。妖怪奇異を主題とした小説が主で、幻想的構成を持つ怪談小説として定評がある。

呂氏春秋 秦、呂不韋編。『呂覧』ともいう。漢初の『淮南子』などと同じく儒家・墨家・道家・法家などの思想だけでなく、当時の学術が総合的に取り入れられている。戦国末期の種々な思想を知る上に重要な書物。

列子 戦国、列禦寇著。八巻。魏・晋代の偽作とされる。道家思想が寓話を用いて述べられる。『荘子』と内容の同じ部分もあり、『荘子』の文章とならび称される。

故事成語

朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり〔春秋『論語』里仁〕孔子の、道を求める願望の強さを示した語。

羹に懲りて膾を吹く〔戦国 屈原『楚辞』惜誦〕失敗に懲りて、必要以上に警戒心を強くすること。

衣食足りて栄辱を知る〔春秋 管仲『管子』牧民〕生活が安定してはじめて名誉や恥を知るようになるの意。

一葉落ちて天下の秋を知る〔漢 劉安『淮南子』説山訓〕小さなきざしを見て、物事の大勢を知ること。

一将功成って万骨枯る〔唐 曹松「己亥の歳」の詩〕一人の将軍の戦功の裏には、万人の兵卒の犠牲があるの意。

一炊の夢〔唐 沈既済『枕中記』〕人生の栄華のはかないことのたとえ。

井の中の蛙〔戦国 荘周『荘子』秋水〕見聞見識の狭いことのたとえ。

烏合の衆〔〈六朝〉宋 范曄『後漢書』耿弇伝〕秩序なく寄り集まった衆。

燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや〔漢 司馬遷『史記』陳渉世家〕つまらぬ人物には大人物の遠大な心はわからないの意。

屋下に屋を架す〔〈六朝〉宋 劉義慶『世説新語』文学〕すでにあることの上に同じことを重ねるような、むだな行為のこと。また、人まねで新味のないこと。「屋上に屋を架す」も同じ。

尾を塗中に曳く〔戦国 荘周『荘子』秋水〕

青は藍より出でて藍より青し

出典 戦国、荀況『荀子』勧学篇

意味 (1)弟子が師よりもすぐれることのたとえ。(2)藍草からとった染料の青色が、もとの藍草よりも、もっと青いというのがもとの意味。この成語は「出藍の誉」ともいわれる。

君子曰、「學不可以已。青取之於藍、而青於藍。冰水爲之、而寒於水。」……故木受繩則直、金就礪則利。君子博學、而日參省乎己、則智明而行無過矣。

口語訳 君子が「学問は途中でやめてはならない。青色は藍草から取るが、藍草よりも青く、氷は水からできるが、水よりも冷たいものだ。」といっている。……だから木はすみなわを当てればまっすぐになるし、金属はといしでとげば鋭利になる。学を志す人が広く道理を学び、日々なんども自分を反省すれば、学んだ知恵が明確になり、行いにもあやまちがなくなる。

石に漱ぎ流れに枕す

出典 六朝、宋、劉義慶『世説新語』排調篇

意味 (1)負け惜しみの強いこと。ひどいこじつけ。(2)晋の孫楚が自分の言いまちがいを、まちがいでないと言い張った話にもとづく。夏目漱石の「漱石」の号もこの話によったもの。

孫子荊、年少時欲隱、語王武子、當「枕石漱流」、誤曰「漱石枕流」。王曰、「流可枕、石可漱乎。」孫曰、「所以枕流、欲洗其耳、所以漱石、欲礪其齒。」

口語訳 (晋の)孫子荊は年若かった時、隠遁生活にはいろうと思い、王武子に話したが、「石を枕にし、流れで口をすすぐ生活をする」というべきところを、まちがえて、「石で口をすすぎ、流れを枕にする」といってしまった。王が「流れを枕にし、石で口をすすぐことができるのか。」と問いただしたところ、孫は、「流れを枕にする理由は耳を洗おうとするからであり、石で口をすすぐのは歯をみがこうとするからだ。」といった。

杞憂

出典 戦国、列禦寇『列子』天瑞篇

意味 (1)不必要な心配。取り越し苦労。(2)昔、杞の国の人が天が崩れ落ちたらどうしようかと心配した話にもとづく。

杞國有人憂天地崩墜、身亡所寄、癈寢食者。又有憂彼之所憂者。因往曉之曰、「天積氣耳。亡處亡氣。若屈伸呼吸、終日在天中行止。奈何憂崩墜乎。」……其人舍然大喜。

口語訳 杞の国の人に、天が落ち地が崩れたら身の置きどころがないと心配し、寝られもせず、食物ものどを通らないものがいた。ところが、その人が心配していることを心配する者がいて、出かけて行って「天は大気の集まったものにすぎない。大気のないところはない。人が身体をまげたり伸ばしたり呼吸したりしているのは、一日中、天の中で行動しているのだ。天が崩れ落ちることなど心配することはないよ。」と言いきかせた。……その人は迷いがとけて大いに喜んだ。

漁父の利

出典 漢、劉向『戦国策』燕策

意味 (1)両者が争っているうちに、第三者が利を占めてしまうこと。(2)戦国時代、趙と燕が戦おうとした時、秦が趙と燕の両方をわが物とすることを恐れ、蘇代が戦いをやめさせるため趙の恵王に説いた話にもとづく。

蘇代過易水、蚌方出曝。而鷸啄其肉。蚌合箝其喙。鷸曰、「今日不雨、明日不雨、即有死蚌。」蚌亦謂鷸曰、「今日不出、明日

富貴の地位で束縛されるより、貧しくても自由な生活の方がよいということ。

渇すれども盗泉の水を飲まず〔晋 陸機「猛虎行」〕どんなに困窮しても決して悪事を働かないこと。

鼎の軽重を問う〔春秋 左丘明『春秋左氏伝』宣公三年〕権威、権力のある者をあなどって、その実力を問うこと。

眼光紙背に徹す〔江戸 塩谷世弘「安井仲平の東遊するを送るの序」〕読書の理解の鋭いこと。

肝胆相照らす〔唐 韓愈「柳子厚墓誌銘」〕互いに心の中を打ちあけて親しく交わること。

管鮑の交わり〔漢 司馬遷『史記』管晏列伝〕きわめて親しく理解し信じあったつきあい。

木に縁りて魚を求む〔戦国 孟軻『孟子』梁恵王上〕方法を誤ると目的を達成することができないこと。見当違いの困難な望みを持つこと。

驥尾に付す〔漢 司馬遷『史記』伯夷列伝〕愚者でもすぐれた人につけば、その力量以上にりっぱになれること。

九牛の一毛〔漢 司馬遷「任安に報ずるの書」〕多数の中のきわめて少ない部分。比較できないほどわずかなこと。

牛耳を執る〔春秋 左丘明『春秋左氏伝』定公八年〕仲間の上に立って、思うままに支配すること。

九仞の功を一簣に虧く〔春秋『尚書』旅獒〕長い間の努力が、ほんのちょっとの不注意からだめになること。

窮鼠猫をかむ〔室町 小島法師?『太平記』四〕弱い者でも追いつめられると強者に

不出、即有死鷸。両者不肯相舎。漁者得而并擒之。

口語訳 蘇代が易水を渡ると、蚌(どぶがい)がちょうど口をあけて陽にあたっていた。それを見つけた鷸(しぎ)がその肉をついばんだところ、蚌が口を閉じて鷸の口ばしをはさんだ。鷸がいうに「今日も明日も雨が降らないと、死んだ蚌になるだろう。」と。蚌もまた鷸にいうに「今日も明日も口ばしを出してやらなければ、死んだ鷸になるだろうよ。」と。そうしてどちらもはなすことを承知しないでいた。そこで漁師が両方とも捕らえてしまった。

螢雪の功

出典 唐、李瀚『蒙求』孫康映雪、車胤聚螢

意味 (1)苦労して学んだ成果。(2)孫康や車胤が、家が貧しくて油が買えないので、集めた螢の光や雪あかりで学習し、立派な人となったという話にもとづく。「螢の光」の歌もこの故事による。

孫康家貧無油。常映雪読書。少小清介、交遊不雑。後至御史大夫。

晋車胤、字武子、南平人。恭勤不倦、博覧多通。家貧不常得油。夏月則練嚢盛数十螢火、以照書、以夜継日焉。終吏部尚書。

口語訳 孫康は家が貧しくて灯油が買えなかったので、いつも雪あかりに照らして書物を読んだ。幼少のころから心清らかで、立派な人を選んで友人とした。後に御史台(役人の不正をただす役所)の長官になった。

晋の車胤は字を武子といい、南平出身の人である。たゆまず励み、博学で多くのことに通じていた。家が貧しくて灯油がたまにしか手に入らなかったので、夏には練り絹の袋に数十匹の螢を入れ、それで書物を照らして、夜を日についで読んだ。その結果、吏部尚書(官吏の選任をつかさどる役所の長官)にまでなった。

虎穴に入らずんば虎子を得ず

出典 六朝、宋、范曄『後漢書』班超伝

意味 (1)危険をおかさなければ大きな利(または名誉)を手に入れることはできない。(2)後漢の武将班超がわずかの手勢で匈奴の大兵と対抗するにあたって、家来に告げたことばにもとづく。

班超曰、「不入虎穴、不得虎子。当今計、独有因夜以火攻虜、使彼不知我多少。必大震怖。可殄尽也。」

口語訳 班超がいうに「こわい虎の穴の中に入らなければ、虎の子を捕らえることはできない。今もっともよい策は、夜の闇に乗じ、火を放って匈奴を攻め、我方の人数を相手に知らせないことだ。そうすれば敵は大いにふるえおそれるだろう。きっとみな殺しにできるぞ。」と。

五十歩百歩

出典 戦国、孟軻『孟子』梁恵王(上)

意味 (1)本質的には差がないこと。どちらもたいしたことのないこと。(2)梁の恵王が、隣国よりも良い政治をしているのに、自国の人民は増加せず、隣国の人民が減少しないのはどうしてか、と質問したのに対して、孟子が答えたことばにもとづく。

孟子対曰、「王好戦、請以戦喩。塡然鼓之、兵刃既接。棄甲曳兵、而走。或百歩而後止、或五十歩而後止。以五十歩笑百歩、則何如。」恵王曰、「不可。直不百歩耳。是亦走也。」

口語訳 孟子が答えていうに、「王は戦争がお好きですから、戦争でたとえさせてください。ドンドンと進軍の太鼓が

漢文の学習

反撃することのたとえ。

愚公 山を移す〔戦国 列禦寇『列子』湯問〕たえず努力すれば、いつかは成功するということのたとえ。→372ページ図参照。

鶏口と為るも牛後と為る無かれ〔漢 司馬遷『史記』蘇秦列伝〕強大なものの後につき従うより、たとえ小さくとも頭になれということ。

傾国の美人〔後漢 班固『漢書』外戚伝〕絶世の美人。その美しさに溺れて国を滅ぼすほどの美人。

逆鱗に触る〔戦国 韓非『韓非子』説難〕君主の怒りにあうこと。目上の人の気持ちにさからって怒りをかうこと。

紅一点〔宋 王安石「柘榴を詠ずるの詩」〕多くの中で一つだけ異彩を放つもの。多数の男の中のただ一人の女性のこと。

恒産無ければ恒心無し〔戦国 孟軻『孟子』梁恵王上〕生きてゆく一定の仕事がなければ、正しい心を持てない。

後生畏るべし〔春秋『論語』子罕〕後から生まれてくる者には無限の可能性があること。

狡兎死して走狗烹らる〔漢 司馬遷『史記』越世家〕敵国が滅ぶと、それまでの功臣は殺されてしまうことのたとえ。

胡蝶の夢〔戦国 荘周『荘子』斉物論〕物と自分、あるいは夢と現実とが区別できない境地。人生のはかないことのたとえ。

先んずれば即ち人を制す〔漢 司馬遷『史記』項羽本紀〕先手をとれば人を支配することができるの意。早いもの勝ち。

酒は百薬の長〔後漢 班固『漢書』食貨志上〕酒は多くの薬の中で最もすぐれた効能のあるものだの意。

なり、刀を交えての戦いが始まった。よろいを脱ぎ捨て、武器を引きずって逃げ出したが、ある者は百歩で、ある者は五十歩逃げて止まった。五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を臆病者と笑ったらいかがでしょうか。」と。恵王がいうに「それはいかん。ただ百歩でないだけで、これも逃げたことにかわりはない。」と。

塞翁が馬

出典 漢、劉安『淮南子』人間訓

意味 (1)人生の幸・不幸は予測しがたいこと。(2)とりでの近くに住む老人が、自分の馬にかかわって生じた禍と福とに、落ちついて対処した話にもとづく。「人間万事 塞翁が馬」ともいう。

近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、「此何不為福乎。」居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰、「此何不能為禍乎。」家富良馬。其子好騎。墮而折其髀。人皆弔之。其父曰、「此何不為福乎。」居一年、胡人大入塞。丁壯者、引弦而戰。近塞之人、死者十九。此獨以跛之故、父子相保。

口語訳 国境の要塞の近くに住んでいる人で、占いの術の上手な人がいた。その人の馬がどうしたことか逃げて胡の国に入ってしまった。近所の人がこれを見舞った。その爺さんは「これが福となるかもしれんよ。」といった。数か月して逃げた馬が胡のすぐれた馬を引き連れて帰ってきた。近所の人がみなお祝いに行った。その爺さんは「これが禍となるかもしれんよ。」といった。この家に良馬がふえた。その息子は馬に乗ることが好きであったが、馬から落ちて太ももの骨を折った。近所の人がこれを見舞った。その爺さんは「これが福となるかもしれんよ。」といった。一年ほどして、胡の大軍がこの要塞に攻め込んだ。男たちは弓を引いて戦い、要塞の近くに住む人は十人のうち九人まで死んだ。ところがこの息子は足が不自由であったので、父子ともに無事であった。

守株

出典 戦国、韓非『韓非子』五蠹篇

意味 (1)古い習慣を守って融通のきかないこと。(2)宋の国の農夫が、兎がたまたま畑の中の切り株にぶつかって死んだのを見て、農耕をやめて再び兎を得ようとしたが得られなかったという話にもとづく。北原白秋の「まちぼうけ」の歌はこの話によったもの。

宋人有耕田者。田中有株。兎走觸株、折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兎。兎不可復得、而身為宋國笑。

口語訳 宋の国の人に、畑を耕す者がいた。畑の中に木の切り株があった。兎が走ってきてその株にぶつかり、首の骨を折って死んだ。そのため、そのすきを投げすてて、切り株を見張り、再び兎を手に入れようと思った。しかし、兎はもう手に入れることはできず、自分は宋の国中の笑いものになった。

助長

出典 戦国、孟軻『孟子』公孫丑(上)

意味 (1)手助けしたために、かえって害を与えること。(2)宋の人が苗の成長を早めるために苗のしんを引っ張り、かえって枯らしてしまった話にもとづく。

宋人有閔其苗之不長而揠之者。芒芒然歸、謂其人曰、「今日病矣。予助苗長矣。」其子趨而往視之、苗則槁矣。

口語訳 宋の国の人に、自分の畑の苗が伸びないのを心配して苗のしんを引っ張った者がいた。くたくたに疲れて帰っ

三顧の礼〔晋 陳寿『三国志』諸葛亮伝〕目上の人が礼を尽くして賢者を招くこと。

歯牙にかけず〔漢 司馬遷『史記』叔孫通列伝〕全く問題にしないこと。相手にしないこと。

自家薬籠中の物〔五代 劉昫『旧唐書』貞元澹伝〕自分の思うがままに利用できるもの。

鹿を逐う者は山を見ず〔漢 劉安『淮南子』説林訓〕一事に熱中すると他の事を考える余裕のないことのたとえ。利欲に迷うと道理がわからなくなることのたとえ。

衆寡敵せず〔晋 陳寿『三国志』張範伝〕少数のものが多数のものに敵対して勝目のないこと。

愁眉を開く〔宋 劉兼「春遊」の詩〕安心した顔つきになること。

柔能く剛を制す〔春秋 老聃『老子』第七八章〕一見弱々しい者が、かえって強い者に勝つこと。

人口に膾炙す〔唐 林嵩「周朴の詩集の序」〕広く人々の口にのぼってもてはやされること。

人事を尽くして天命を待つ〔宋 胡寅「読史管見」〕できる限りの努力をして、結果は運命にまかせること。

心頭滅却すれば火もまた涼し〔唐 杜荀鶴「夏日、悟空上人の院に題する」の詩〕どんな苦難も、その境遇を超越すれば苦難と感じなくなること。

水魚の交わり〔晋 陳寿『三国志』諸葛亮伝〕きわめて親密なつきあい。

杜撰〔宋 王楙『野客叢書』杜撰〕出典の引用が不正確な書物。転じて、いい加減なこと。

てきて、家の人に「今日はすっかり疲れてしまった。わしは苗の伸びるのを助けてやったよ。」という。その子がびっくりして走って畑に行ってみると、苗はみな枯れてしまっていた。

蛇足

出典 漢、劉向『戦国策』斉策

意味 (1)利益のないむだな行為。あっても益のないもの。(2)もらった酒を飲むのに、蛇を早く画いた者がそれを飲むことになったが、一番に画きあげた者が、蛇に足を画き足したために酒を飲み損ねた、という話にもとづく。

楚有祠者。賜其舍人卮酒。舍人相謂曰、「數人飲之不足、一人飲之有餘。請畫地爲蛇、先成者飲酒。」一人蛇先成。引酒且飲之、乃左手持卮、右手畫蛇曰、「吾能爲之足。」未成。一人之蛇成。奪其卮曰、「蛇固無足。子安能爲之足。」遂飲其酒。爲蛇足者、終亡其酒。

口語訳 楚の国に神主がいた。そのめしつかいに大杯の酒を与えた。彼らは「数人で飲んだのでは足りないが、一人で飲めば余るほどだ。地面に蛇を描いて先にできあがった者がこの酒を飲むことにしよう。」と話し合った。一人が描いた蛇がまずできあがった。酒を引きよせて飲もうとしながら、左手で杯を持ち、右手で蛇を描きつつ、「わしは足を描くこともできるぞ。」と言った。まだその足ができあがらないうちに、もう一人の描いた蛇ができあがった。その杯を取りあげて、「蛇にはもともと足はない。どうしてありもしない足を描くことができようか。」といって、その酒を飲んでしまった。蛇の足を描いた者はとうとう酒を飲みそこなってしまった。

知音

出典 唐、李瀚『蒙求』伯牙絶絃

意味 (1)親友。相手を知りつくした仲。(2)春秋時代、伯牙のひく琴の音を聞いて、その心情を鍾子期がよくいいあてたという話にもとづく。

列子曰、「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽。伯牙鼓琴、志在高山。子期曰、『善哉。峩峩乎若泰山。』志在流水。子期曰、『善哉。洋洋兮若江河。』伯牙所念、子期必得之。」呂氏春秋曰、「鍾子期死。伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴。以爲無足爲鼓者。」

口語訳 『列子』に、「伯牙は琴を弾くことがうまく、鍾子期は琴の音を聴きわけることがうまかった。伯牙が琴を弾きながら、高山のことを考えていると、子期が『すばらしいよ、高く険しくそびえて泰山のようだよ。』という。また、川の流れを思い浮かべていると、『すばらしいなあ、ひろびろとして揚子江や黄河のようだよ。』といった。伯牙の考えていることは、必ず子期が言いあてた。」とある。『呂氏春秋』には、「鍾子期が死んだ。伯牙は琴をこわし、絃を切って、生涯二度と琴を弾かなかった。琴を弾いて聞かせるに足る者がいないと考えたからである。」と述べている。

朝三暮四

出典 戦国、列禦寇『列子』黄帝篇

意味 (1)偽って人をごまかすこと。(2)宋の狙公が、飼っている猿に、とちの実を朝三つ夜四つやるというと、猿が怒ったので、朝四つ夜三つにしようというと、猿がみな喜んだという話にもとづく。

宋有狙公者。愛狙養之成群。能解狙之意、狙亦得公之心。損其家口、充狙之欲。俄而匱焉。將限其食。恐衆狙之不馴於己也、先誑之曰、「與

青雲の志〔漢 司馬遷『史記』伯夷列伝〕普通でない大きな志。立身出世への野望。

前門の虎後門の狼〔?『趙雪航評史』〕やっと禍をのがれたかと思うとまた禍にあうこと。一難去ってまた一難の意。

千里眼〔北斉 魏収『魏書』楊逸伝〕千里の先まで見える眼。遠方や将来、また人の心などを見通す能力。

千慮の一失〔戦国『晏子春秋』雑下〕賢者も時には失敗のあること。十分配慮しても、なお思いがけない失敗のあること。

宋襄の仁〔春秋 左丘明『春秋左氏伝』僖公二十二年〕無用の情け。余計な憐れみ。

他山の石〔春秋『詩経』小雅 鶴鳴〕どんなものでも、自分の品性・知徳をみがくのに役立つこと。

天網恢恢疎にして漏らさず〔春秋 老聃『老子』第七三章〕天は決して悪事を見逃すことはないということ。

頭角をあらわす〔唐 韓愈「柳子厚墓誌銘」〕才能や力量が群を抜いてすぐれてくること。

同病相憐れむ〔後漢 趙曄『呉越春秋』闔廬内伝〕同じ境遇に苦しむ者は、互いに苦痛を察し同情する念の強いこと。

桃李言わざれども下自ら蹊を成す〔漢 司馬遷『史記』李将軍列伝賛〕仁徳のある人は、みずから求めなくても、人々が徳を慕って集まってくることのたとえ。

登龍門〔〈六朝〉宋 范曄『後漢書』李膺伝〕立身出世につながる難しい関門。

蟷螂の斧〔漢 劉安『淮南子』人間訓〕弱者が、自分の力を考えないで強者に立ちむかうことのたとえ。

涙を揮って馬謖を斬る〔晋 陳寿『三国志』

若芧、朝三而暮四、足乎。」衆狙皆起而怒。俄而曰、「与若芧、朝四而暮三、足乎。」衆狙皆伏而喜。

口語訳 宋の国に狙公といわれる者がいた。猿をかわいがり養って、猿が群れをなしていた。狙公は猿の気持ちを理解することができ、猿の方もまた狙公の心を理解した。自分の家の口べらしをしてまで、猿の食欲を満足させていた。ほどなく食糧がとぼしくなった。そこで猿の食べ物を制限しようとした。しかし猿がなつかなくなることをおそれて、はじめに猿をだまして、「おまえたちにとちの実をやるのに、朝三つ夜四つにしよう、足るか。」というと、多くの猿たちがみな立ちあがって怒った。ほどなく、「おまえたちにとちの実をやるのに、朝四つ夜三つにしよう、足るか。」というと、多くの猿たちはみな承服し喜んだ。

虎の威を借る狐

出典 漢、劉向『戦国策』楚策

意味 (1)強い者の威光を借りて、いばりちらす小人物をいう。他人の権勢を利用して、自己の利益をはかること。(2)虎につかまった狐が、虎をだまして後に従えて歩き、百獣がにげ散るのが、あたかも自分の威勢によるかのようにみせた話にもとづく。

虎求百獣而食之、得狐。狐曰、「子無敢食我也。天帝使我長百獣。今子食我、是逆天帝命也。子以我為不信、吾為子先行。子随我後観。百獣之見我、敢不走乎。」虎以為然。故遂与之行。獣見之皆走。虎不知獣畏己而走也。以為畏狐也。

口語訳 虎が百獣を求めて食べ、狐をつかまえた。狐が「あなたは決して私を食べてはなりません。天帝は私をあらゆる獣の王としました。今、あなたが私を食べるなら、それは天帝の命令に逆らうことになります。あなたが、私のいうことを信用しないならば、私はあなたの疑いを晴らすため先に立って歩きましょう。あなたは私の後についてきてみなさい。獣たちは私の姿を見て、必ず逃げだしますから。」という。虎はもっともなことだと思った。そこで狐と共に出かけた。獣はこれを見てみな逃げだした。虎は自分を恐れて獣が逃げるのだということがわからなかった。虎は「狐を恐れて獣が逃げるのだ。」と思った。

白眼視

出典 唐、房玄齢『晋書』阮籍伝

意味 (1)気に入らないものを見る目つき。冷淡に扱うこと。(2)晋の阮籍が、気に入らない者には白眼で対し、好む者には青眼で対したという話にもとづく。

阮籍不拘礼教。能為青白眼。見礼俗之士、以白眼対之。及嵆喜来弔、籍作白眼。喜不懌而退。喜弟康聞之、乃齎酒挟琴造焉。籍大悦、乃見青眼。由是礼法之士、疾之若讎。

口語訳 阮籍は礼教にこだわらなかった。黒い眼と白い眼とを使い分けることができた。形式的な礼教にこだわる人を見るときには白い眼で対した。嵆喜がやってきて、(母の喪に服していた)阮籍を見舞ったときは、阮籍は白い眼をした。喜はふきげんなおももちで帰った。喜の弟の康がこのことを聞いて、酒を持ち、琴をわきにかかえてやってきた。阮籍はたいそう喜んで黒い眼を出した。こうしたことによって、礼教の士が阮籍をにくむことは仇のようであった。

覆水盆に返らず

出典 晋、王嘉『拾遺記』

意味 (1)いったんやってしまったことは取り返しがつかないこと。(2)太公が、昔去っていった妻に、いちど地に流れおち

馬謖伝〕規律を保つためには、たとえ愛する者でも処罰すること。

鶏を割くに焉ぞ牛刀を用いん〔春秋『論語』陽貨〕小事を処理するのに大人物の手を借りる必要のないことのたとえ。適用の間違っていること。

敗軍の将は兵を語らず〔漢 司馬遷『史記』淮陰侯列伝〕失敗した者は、そのことについて言い訳をしないという意。

馬脚を露す〔清 翟灝『通俗編』獣畜〕ばけの皮がはげること。隠していたことが現れること。

始めは処女の如く、後は脱兎の如し〔春秋 孫武『孫子』九地〕はじめ弱々しく見せかけてだまし、後に見ちがえるような強い力を見せること。

破竹の勢い〔唐 房玄齢『晋書』杜預伝〕猛烈な勢いで進むこと。勢いが盛んで抑えがたいこと。

破天荒〔宋 孫光憲『北夢瑣言』〕めったにないこと。前例のないこと。

万事休す〔元 托克托『宋史』荊南高氏世家〕なすべき手段がないこと。すべてが終わりであること。

日暮れて途遠し〔漢 司馬遷『史記』伍子胥列伝〕年をとったのに、目的がなかなか達せられないことのたとえ。

尾生の信〔漢 司馬遷『史記』蘇秦列伝〕信義に厚いことのたとえ。愚かで正直なことのたとえ。固く約束を守ること。

人を射んとすれば先ず馬を射よ〔唐 杜甫「前出塞」の詩〕相手を屈服させるには、その人のたのみとするものを倒せば成功するということ。

髀肉の嘆〔晋 陳寿『三国志』先主伝 裴

た水はもはや盆にはかえらないことを示して、その復縁の願いをしりぞけた話にもとづく。

太公初娶馬氏。読書不事産。馬求去。太公封斉。馬求再合。太公取水一盆傾于地、令婦収水。惟得其泥。太公曰、「若能離更合、覆水定難収。」

口語訳 太公ははじめ馬氏と結婚していた。太公は書物ばかり読んで仕事に専念しなかった。馬氏は自分から願って離婚した。太公は後に諸侯として斉に封ぜられた。馬氏は元のさやにおさまりたいと申し出た。すると太公は水の入った盆を持ち出して地に流し、馬氏に水をもとに返してみさせた。馬氏はただ泥だけしかすくうことができなかった。そこで太公は、「おまえがひとたび離婚し、復縁しようとしても、こぼれた水は地にしみこんで、どうしても元にはもどらないようなものだよ。」といった。

舟に刻みて剣を求む

出典 戦国 呂不韋『呂氏春秋』察今篇

意味 (1)時勢の変化に気づかず、いつまでも古いしきたりにこだわっていること。(2)舟から剣を水中に落とした人が、動く舟にしるしをつけて、その下の水中に入って剣をさがした、という話にもとづく。

楚人有渉江者。其剣自舟中墜於水。遽刻其舟曰、「是吾剣之所従墜。」舟止。従其所刻者、入水求之。舟已行矣、而剣不行。求剣若此、不亦惑乎。

口語訳 楚の国の人で、長江を渡る者がいた。その剣が舟から水中に落ちた。あわててその舟に目印をつけて「ここからわたしの剣が落ちたのだ。」といった。舟がとまった。その目印をつけたところから、水中に入って、剣を探した。しかし、舟はすでに動いてしまっているのに剣は動いていない。剣を探し求めるのに、このようにするのは、なんとまちがったことではないだろうか。

先ず隗より始めよ

出典 漢、劉向『戦国策』燕策

意味 (1)遠大な計画も身近なことから始めるべきだということ。今日では、物事はまず言い出した者からやり始めよ、という意味で使われることが多い。(2)燕の昭王が、斉に報復するため賢者を招きたいがどうすべきかを郭隗に尋ねた。郭隗は、まず私のようなつまらぬ者を優遇することから始めれば、きっと賢者が集まる、と言った。昭王がその通り隗を優遇したところ、楽毅、鄒衍、劇辛などの賢者が集まった、という話にもとづく。

燕昭王、問郭隗曰、「誠得賢士、与共国、以雪先王之恥、孤之願也。先生視可者。得身事之。」隗曰、「古之君、有以千金使涓人求千里馬者。買死馬骨五百金而返。君怒。涓人曰、『死馬且買之。況生者乎。馬今至矣。』不期年、千里馬至者三。今王必欲致士、先従隗始。況賢於隗者、豈遠千里哉。」

口語訳 燕の昭王が郭隗に尋ねていうに「ほんとうに、賢者を得ていっしょに国政に従事し、先王の恥をすすぎたいというのが私の願いです。どうか先生、そのことのできる人を私に示してください。私はその人を師として仕えましょう。」と。郭隗が答えていうには「昔千金の大金をおそばの用人に持たせ、一日千里を行くすばらしい馬を求めさせた王がいた。その男は死んだ馬の骨を五百金も出して買って帰った。その王は大へんおこった。おそばの用人は「死んだ馬でさえ五百金で買ったのです。まして生きている馬なら、なおさら高く買うと思うでしょう。立派な馬が今にやってくるでしょう。」

松之注〕功名をたてたり、手腕を発揮したりする機会がなく、むだな時を過ごすことの嘆き。

百聞は一見に如かず〔後漢　班固『漢書』趙充国伝〕何度繰り返して聞くよりも、一度実際に見た方がよい。

百里を行く者は九十を半ばとす〔漢　劉向『戦国策』秦策〕何事も終わり少しのところが大切であるということ。

豹は死して皮を留め、人は死して名を留む〔宋　欧陽脩「王彦章画像記」〕豹は死後、その皮を大切にされるが、人は死後に残した名誉、功績で評価されるの意。

風樹の嘆〔漢　韓嬰『韓詩外伝』〕親に孝行しようとしても、その時にはすでに親がいないことの嘆き。

刎頸の交わり〔漢　司馬遷『史記』廉頗・藺相如列伝〕たとえ首を斬られても恨みに思わないほどの親しい交わり。

満を持す〔漢　司馬遷『史記』越王勾践世家〕満ちた状態を保つこと。用意を充分にして時期の来るのを待ち構えること。

水清ければ魚棲まず〔後漢　班固『漢書』東方朔伝〕あまりに清廉潔白すぎると、かえって人に親しまれないこと。

洛陽の紙価を貴む〔唐　房玄齢『晋書』左思伝〕著書がもてはやされ、よく売れることのたとえ。

良薬口に苦し〔魏　王粛『孔子家語』六本〕よい薬は飲みにくいが、病にはよくきくこと。よい忠告は聞き入れにくいが身のためになるというたとえ。

隴を得て蜀を望む〔〈六朝〉宋　范曄『後漢書』岑彭伝〕つぎつぎと望みを大きくして、満足することを知らないたとえ。

といった。まる一年たたないうちに、一日千里を行くすばらしい馬が三頭もやってきました。今、王がどうしても立派な人物をかかえたいと思われるなら、まず、私をよく待遇することから始めなさい。そうすれば、まして私より賢なる人は、どうして千里の道を遠いとするでしょうか。」と。

矛盾

出典　戦国、韓非『韓非子』難篇㈠

意味　(1)前後のつじつまの合わないこと。(2)どんな盾をも突き通せるという矛と、どんな矛でも突き通せないという盾を売る男が、その矛でその盾を突いたらどうなるかと言われて何とも返答できなかった、という話にもとづく。

楚人有下鬻二盾與一レ矛者上。誉レ之曰、「吾盾之堅、莫二能陥一也。」又誉二其矛一曰、「吾矛之利、於レ物無レ不レ陥也。」或曰、「以二子之矛一、陥二子之盾一、何如。」其人弗レ能レ應也。

口語訳　楚の国の人に盾と矛とをあきなう者がいた。自分の売る盾をほめて「私の売る盾の堅いことといったら、どんなものでも通すことはできません。」といい、また、「私の売る矛の鋭利なことは、どんなものでもつき通さないものはありません。」といった。ある人が「それなら、あなたの矛であなたの盾をつき通したらどうなるかね。」といったら、その人は答えることができなかった。

病膏肓に入る

出典　春秋　左丘明『春秋左氏伝』成公十年

意味　(1)病気が重くなって治る見込みがなくなること。また、ある物事に熱中して手がつけられなくなること。(2)晋の景公が病魔がとりついた。秦の名医に治療を頼んだところ、病魔は恐れて、肓（横隔膜の上）、膏（心臓の下）にもぐり込んだ。やがて名医がやってきたが、この場所にある病には手のほどこしようがなかった、という話にもとづく。

景公疾病。求二醫于秦一。秦伯使二醫緩爲一レ之。未レ至。公夢、疾爲二二豎子一曰、「彼良醫也。懼傷レ我。焉逃レ之。」其一曰、「居二肓之上、膏之下一、若レ我何。」醫至。曰、「疾不レ可レ爲也。在二肓之上、膏之下一。攻レ之不レ可。達レ之不レ及。藥不レ至焉。不レ可レ爲也。」

口語訳　景公の病気が重くなった。秦に医者を依頼した。秦の王は医緩をやって治療させることにした。医者がまだ来ないうちに、公の夢に、自分を苦しめている病気が、二人の子供になってあらわれ、「彼は名医だよ。きっとわれわれを苦しめるだろう。どこへ逃げようか。」という。その一人が「肓の上、膏の下におれば、われわれをどうすることもできまい。」という。医者が到着していうに「病気はなおすことができません。肓の上、膏の下のところに病気がありますので、治療できません。針も届きません。薬も通じません。だからなおすことができないのです。」と。

愚公山を移す（p. 368参照）

漢和辞典のひき方

(1)「凡例」を読んで、その辞書の編集方針・扱いかたを知り、記号・略字がそれぞれ何を表しているかを理解する。

(例) 平声 上声 去声 入声=四声　(対)=対義語

(2)調べることを確認する。

字形　字の総画　部首　旧字　異体字　その他

(例)　**情**　総画=11　部首=忄(心)りっしんべん
旧字=情

字音　字の音（慣用音・漢音・呉音・唐音）　韻
四声

(例)　**設**　漢音=セツ　呉音=セチ　韻=屑
四声=入声（訓=もうける）

意味　字のなりたち（六書）　字の意味（訓）　同義語・対義語

(例)　**悲**　なりたち=会意形声。心と、そむく意と音を示す非とから成り、自分の思いにそむくのをかなしむ意を表す。
意味=①かなしむ、かなしい、かなしみ　②あわれみ。
対義語=①の意味に対しては「喜」。

その他　教育漢字・当用漢字の別　熟語　その他

(例)　逃　当用漢字　熟語=逃走、逃亡

(3)①部首がわかっている場合→**部首索引**（漢字を字形により分類）をひく。
②部首がわからず、音または訓がわかっている場合→**音訓索引**（漢字の「音」または「訓」に従って五十音順に配列）をひく。
③部首・音訓の両方ともわからない場合→**総画索引**（すべての漢字について画数の少ない順に配列）をひく。
右のことを具体例を引いてまとめると次の表の通り。

	順序	(例) 広	(例) 秋
部首がわかる場合	①部首索引をひく。	广ーまだれ(三画)のページを調べる。	禾ーのぎへん(五画)のページを調べる。
	②その字の総画数から部首を除いた画数によってひく。	まだれの二画を見ていく。	のぎへんの四画を見ていく。
音か訓がわかる場合	①音訓索引をひく。	コウ(音)かひろい(訓)のページを見ていき、広の字をさがす。	シュウ(音)かあき(訓)のページを見ていき、秋の字をさがす。
両方わからない場合	①総画索引をひく。	広は五画だから、五画のページを見ていき、広の字をさがす。	秋は九画だから、九画のページを見ていき、秋の字をさがす。

漢文訓読のきまり

訓読　「私は本を読む」という文章を漢文で表現すれば、「我読書」となる。日本文は、主語・目的語・述語の構造であるのに、漢文は、主語・述語・目的語の構造となっている。われわれの祖先はこの漢文を、まず外国語として中国音で読み、それから日本文に訳した。「我読書」を Wǒ dú Shū（ウォー・ドゥ・シュ）と読んで、「私は本を読む」と訳したのである。これを後にカタカナや符号を使って、「我読レ書」と表記するようになった。このように、漢字のもとの形をそのまま日本文として読んでゆく工夫は、長い年月の間に改善が加えられ、次第に固定化していった。この伝統的な読みを「訓読」という。次に、訓読の例を示す。

楚人有下鬻二盾与一矛者上。誉レ之曰、「吾盾之堅、物莫二能陥一也。」又誉二其矛一曰、「吾矛之利、於レ物無レ不レ陥也。」或曰、「以二子之矛一、陥二子之盾一、何如。」其人弗レ能レ応也。

訓点　右の例文でわかるように、日本文と構造や性質の違う漢文を訓読するために、カタカナや符号を使っている。このカタカナを「送りがな」といい、符号を「返り点」という。これに。と、の「句読点」を加えて「訓点」と呼んでいる。訓点のついていない、漢字ばかりが並んでいる文を、「原文」あるいは「白文」と呼ぶ。

送りがな　われわれが訓読するときには、活用語（動詞・形容詞・形容動詞・助動詞）の活用語尾や助詞などを示すカタカナ、すなわち「送りがな」をつけるが、そのときには、次のことに注意する。

(1)　漢文は古典であることから、文語文法に従い、かな使いは歴史的かなづかいによる。

(2)　再読文字の二回目に読むものを例外として、原文の漢字の右横下に、「カタカナ」で送るのを原則とする。

〈送りがなの法則〉

(1)　活用語は、活用語尾を送る。

(例)　読ム　養フ　善シ　勿カレ　急ナリ　寂タリ　可シ　使ム

ただし、形容詞・副詞・前置詞から転じた動詞、動詞・副詞から転じた形容詞は、もとの品詞の活用語尾から送る。

(例)　悲シム　苦シム　以ツテ　輝カシ　未ダシ　甚ダシ

(2)　副詞・接続詞・前置詞は最後の一字を送る。

(例)　豈ニ　能ク　乃チ　遂ニ　自リ　従リ

ただし、活用語を含む副詞・接続詞は(1)の法則に従う。

(例)　必ズシモ　尽クハ　然レドモ　以ツテ

また、次のような語には送りがなは送らない。

(例) 今 又 亦 昔

(3) 対話や引用文などの終わりには「ト」を送る。
(例) 誉レ之曰、「吾盾之堅、物莫二能陥一也。」

(4) 下から返って連続した二字を読むときは、二字の間に‐(ハイフン)を用いる。
(例) 寄‐食門下一。 封‐閉宮室。

(5) 再読文字で二度目に読む送りがなは、その活用語尾を再読文字の左下に送る。
(例) 猶レ花。 宜レ去。 将レ行 不レ行。

以上のほかにも、動詞から転じた名詞は「動、戦」とし、重音の副詞には「各ゝ、愈ゝ」のように「ゝ」(踊り字)をつけるなど、細かい法則がある。なお、漢字によみがなをつけるときは、送りがなと区別して、ひらがなを用いることになっている。

返り点 日本文と構造が違うため、下から上へ返って読まなければならないことがあるが、そのときに用いる符号を「**返り点**」という。返り点をつけるときは、「漢字の左下に小さくつけること」に注意する。

〈返り点の種類と用法〉

(1) レ点—雁点(かりがね)ともいい、一字から直前の一字へ返って読む符号。
(例) 於レ物無レ不レ陥也。弗レ能レ応也。

(2) 一二点—二字以上隔てて、下から上へ返って読む符号で、必要ならば、一・二・三・四……と、いくつまで使ってもよい。
(例) 陥二子之盾一、

(3) 上中下点—「一二点」をつけた句を間にはさんで、下から上へ返って読む符号で、上下の二つか、上中下の三つかを用いることになる。
(例) 楚人有下鬻二盾与一レ矛者上。

(4) 甲乙点—「上中下点」をつけた句を間にはさんで、下から上へ返って読んだり、「上中下点」の三つでは足りず、四つ以上あるときに用いたりする符号で、必要ならば、甲・乙・丙・丁……と、いくつまで使ってもよい。さらに足りないときは、「天地点」(天・地・人)がある。

(5) レ点と他の符号との併用—一二点、上中下点、甲乙点の最初の符号である一・上・甲とともに用いられて、㆑、㆖レ、㆙レとなることがある。
(例) 鬻二盾与一レ矛。

右の例でわかるように、返り点を持つ漢字と持たない漢字とがある。返り点は右上の漢字が持っている。たとえば、「於レ物」のレは「於」の字が、「誉二其矛一」の二は「誉」の字が、一は「矛」の字が持っているのである。こういうときは上から順に、返り点を持たない漢字から読みはじめ、返り点を持った漢字にぶつかったらそれをとばして下にいき、先の返り点のきまりに従って読み進めていけばよい。(3)の例文を、この法則に従って読む順番を示すと、楚人が1で以下7 5 2 4 3 6となる。つまり、「楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り」となる。

書き下し文 訓読したそのままの形を日本文に書き改めたものを「書き下し文」といい、別に「かなまじり文」とも「読み下し文」ともいう。

〈書き下し文のきまり〉

(1) 文語文法に従い、歴史的仮名遣いで書く。
(2) カタカナで書かれた送りがなは、ひらがなで書く。
(3) 原文の漢字はそのまま用いることを原則とする。ただし、次の(ア)と(イ)はひらがなで書く。
(ア) 文語文法の助詞と助動詞にあたるもの。
(例) 与(と) 之(の) 也(なり) 不(ず) 弗(ず)
(イ) 再読文字で、二度目に読む部分。
(例) 将(将に〜す) 当(当に〜べし)
(4) 訓読しない漢字は、書き下し文には表さない。
(例) 矣 焉 兮 于

このきまりに従って、例文を書き下し文にすると、次のようになる。

楚人に盾と矛とを鬻(ひさ)ぐ者有り。之を誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、物として能く陥(とほ)す莫(な)きなり。」と。又其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利(と)きこと、物に於いて陥さざる無きなり。」と。或るひと曰はく、「子(し)の矛を以つて、子の盾を陥さば、何如(いかん)。」と。其の人、応(こた)ふる能(あた)はざるなり。

熟語の基本構造

漢字は一字だけで使われることのほかに、熟語として使われることが多い。熟語とは、二字以上の漢字が結びついてひとまとまりで用いられる語のことである。二字、三字、四字などの熟語があるが、ここでは二字の熟語の結びつきかた、つまり構造について例語を示しながら説明する。主なものは次のとおりである。

構造	例語
上の語が主語・下の語が述語にあたるもの	鶏鳴(鶏↓鳴く) 地震(地↓震ふ) 天授(天↓授く) 日没(日↓没す) 雷鳴(雷↓鳴る) 道遠(道↓遠し)
上の語が下の語(体言)を修飾するもの	善人(善き↓人) 遠路(遠き↓路) 飛鳥(飛ぶ↓鳥) 怒髪(怒れる↓髪)
上の語が下の語(用言)を修飾するもの	予知(予め↓知る) 林立(林のごとく↓立つ) 再発(再び↓発る) 先導(先に↓導く)
上の語と下の語が対立するもの	善悪(善↕悪) 長短(長↕短) 大小(大↕小) 尊卑(尊↕卑)
上の語と下の語が類義のもの	飲食(飲—食) 仁義(仁—義) 父母(父—母) 妻子(妻—子)
上の語と下の語が共通の意味を持つもの	身体(身—体) 平定(平—定) 巨大(巨—大) 邸宅(邸—宅)
上の語か下の語かに重点のあるもの	国家(国に) 疎通(通に) 異同(異に) 多少(少に)

構造	例
上の語と下の語とが継続的に連なるもの	迎撃（迎え撃つ） 射殺（射て殺す） 撃破（撃ち破る） 溺死（溺れ死ぬ）
上の語が述語、下の語がその対象または及ぶ場所を示すもの	入学（入る↑学に） 読書（読む↑書を） 昇天（昇る↑天に） 抜群（抜く↑群を） 即位（即く↑位に） 破産（破る↑産を）
上の語が述語で下の語が主語にあたるもの	有志（有り↑志） 無罪（無し↑罪） 多言（多し↑言） 少恩（少し↑恩） 寡欲（寡し↑欲） 有利（有り↑利）
上の語に否定の語があるもの	不幸（ず↑幸なら） 不言（ず↑言は） 勿論（勿かれ↑論ずる） 非常（非ず↑常に） 無情（無し↑情）
下の語に状態を表す語をつけたもの	偶然、突然、悠然、超然、突如、躍如、断乎、確乎、莞爾、卒爾
上の語と下の語と同じ語を重ねたもの	津々、堂々、徐々、悠々、寂々、歴々、皎々、刻々、粛々、朗々
上の語と下の語が同じ子音で始まるもの（双声）	恍惚、猶予、憔悴、髣髴、悽愴、参差、躊躇、玲瓏、伶俐、磊落
上の語と下の語とが同じ韻で終わるもの（畳韻）	散漫、逍遙、混沌、須臾、彷徨、丁寧、模糊、艱難、綽約、寂寞

漢文の基本構造

日本文の「私は本を読む」を漢文で表現すれば、「我読レ書」となる。この「我・読・書」の語順となる文の組み立てを、漢文の構造という。ここでは、その基本的構造について例文を示しながら説明する。

構造	例文
主語＋述語 何が・何は ｛どうする（動作）／どんなである（状態）／なんである（断定）	日没。（太陽が沈む。） 山青。（山が青い。） 仁人。（仁は人である。）
主語＋述語＋目的語 何が・何は・どうする・何を （述語は多く他動詞）	主人送レ客。（主人が客を送る。） 吾捕レ蛇。（私は蛇をつかまえる。）
主語＋述語＋補語 何が・何は・どうする・何に （述語は多く自動詞）	良薬苦二於口一。（良い薬は口ににがい。） 烽火連二三月一。（のろしが三月まで続いている。）
主語＋述語＋目的語＋補語 何が・何は・どうする・何を・何に	孔子問二礼於老子一。（孔子は礼を老子にきいた。） 孟子受二業子思之門人一。（孟子は学問を子思の門弟に受けた。）
主語＋述語＋補語＋目的語 何は・どうする・何に・何を	張良遺二漢王書一。（張良は漢王に手紙を送った。） 狙公与二狙茅一。（狙公は狙にどんぐりを与えた。）
修飾語＋被修飾語 連体修飾 連用修飾	白頭。（白い頭。） 已過。（もはや通りすぎた。）
対等の語・文＋対等の語・文	柳緑、花紅。（柳は緑で、花は紅である。） 父父、子子。（父は父らしくし、子は子らしくする。）
独立語 呼びかけ 感嘆	小子、識レ之。（おまえたちよ、憶えておけ。） 二三子、偃之言是也。（おまえたち、偃の言ったことは正しいのだ。）

上の例文で明らかなように、主語＋述語、修飾語＋被修飾語、対等、独立語の文構造は、日本文の構造と同じだが、主語と述語の関係に、目的語や補語の要素が加わってくると、構造は英語と同じになる。

私は彼に歴史を教える。

I teach him history.

我教二彼歴史一。

目的語と補語の区別は、送りがなに「ヲ」をとるものを目的語とし、送りがなに「ニ」「ト」「ヨリ」をとるものを補語とすればよい。昔から「鬼と（ヲ・ニ・ト）会ったら返れ」と言われるのは、目的語や補語に出会ったら返り点をつけて、下から上へ返って読めということを教えたものである。

▲文選（元徳二年鈔本）

漢文学習に必要な語彙

漢字には、同じ字でありながら異なる意味を持っているものがあり、また、そのために音が違ったりするものもある。以下その主なものを、五十音順に列挙する。

惡 ①アク ②オ(ヲ)

① a わるシ→人之性惡。〈荀子〉
b みにくシ→惡者貴、美者賤。〈韓非子〉

② a にくム→惡以而非者。〈孟子〉
b (疑問・反語)
(1) いづクンゾ・なんゾ→惡知之。〈孟子〉
(2) いづクニカ→君子惡乎成名。〈論語〉

安 アン

a やすシ・やすンズ→人有禮則安。〈礼記〉
b (疑問・反語)
(1) いづクニ・いづクニカ→沛公安在。〈史記〉
(2) いづクンゾ→君安與項伯有故。〈史記〉

已 イ

a すでニ→漢王已出矣。〈史記〉
b やム→死而後已。〈論語〉
c のみ→無不爲已。〈孟子〉

以 イ

a もッテ・もッテス
(1) で・を→王好戰、請以戰喩。〈孟子〉
(2) それで→溫故知新、可以爲師。〈論語〉
(3) そして→有殺身以成仁。〈論語〉
b おもヘラク→君家所寡有者、以義耳。〈戦国策〉
c ゆゑ→古人秉燭夜遊、良有以也。〈李白・春夜宴従弟桃花園序〉
d すでニ(已に同じ)→秦宮室、皆以燒殘破。〈史記〉
e 〔以為〕 おもヘラク→以爲畏狐也。〈戦国策〉

易 ①イ ②エキ

① a やすシ→事敗易以亡。〈史記〉
b おさム→喪與其易也、寧戚。〈論語〉
c あなどル→國小不可易。〈春秋左氏伝〉

② かフ→故以羊易之也。〈孟子〉

遺 イ(ヰ) ユイ(ユヰ)

a わすル→不敢遺小國之臣。〈孝経〉
b すツ→未有仁而遺其親者也。〈孟子〉
c おくル・つかハス→齊遺魯書。〈史記〉
d のこス→遺不滅之令蹤。〈後漢書〉

爲 イ(ヰ)

a なル・なス→化爲鳥。其名爲鵬。〈荘子〉
b たリ→爾爲爾、我爲我。〈孟子〉
c つくル→爲法令約束。〈史記〉
d ためニ→爲人謀而不忠乎。〈論語〉
e る・らる→父母宗族、皆爲戮沒。〈史記〉

焉 エン

a いづクンゾ・いづクニカ→仲尼焉學。〈論語〉
b これ→樂莫大焉。〈孟子〉
c なり→犯死者二焉。〈柳宗元・捕蛇者説〉

可 カ

a (可能)→免不可復得。〈韓非子〉
b (許可)→可以取、可以無取、取傷廉。

過 カ

a すグ→有過孔氏之門者。〈論語〉
b よギル→行過洛陽。〈史記〉
c あやまツ→過則勿憚改。〈論語〉

蓋 ガイ

a おおフ→力拔山兮氣蓋世。〈史記〉
b けだシ→蓋一歲犯死二焉。〈柳宗元・捕蛇者説〉

樂 ①ガク ②ラク

① (音楽)→聞樂不樂。〈論語〉
② たのシ・たのシム→樂天知命。〈易経〉

幾 キ

a いく・いくばク→未幾而死。〈白居易・与元稹書〉
b ほとんド→我幾不脱於虎口。〈史記〉
c ちかシ→不幾乎一言而興國乎。〈論語〉
d こひねがフ(庶幾)→幾己得復進。〈漢書〉

逆 ①ギャク ②ゲキ

① さかラフ→逆耳之言。〈晋書〉
② むかフ(迎に同じ)→天地萬物逆旅也。〈李白・春夜宴従弟桃花園序〉

苦 ク

a にがシ→良藥苦於口。〈説苑〉
b くるシム→天下苦秦久矣。〈史記〉
c はなはダ→艱難苦恨繁霜鬢。〈杜甫・登高〉

見 ①ケン ②ゲン

① a みル→見義不爲無勇也。〈論語〉
b まみユ→孟子見梁惠王。〈孟子〉
c る・らる→先大王見欺於張儀。〈史記〉

② (現に同じ)→才美不外見。〈韓愈・雑説〉

故 コ

a ゆゑニ→故君子愼獨。〈大学〉
b ふるシ→溫故知新。〈論語〉
c もとヨリ→非故生於人之性也。〈荀子〉

d ことさらニ→故遣將守關者、〈史記〉
e (ふるなじみ)→君安與項伯有故。〈史記〉

固 コ
a かたシ→筋骨欲其固也。〈呂氏春秋〉
b もとヨリ→小固不可敵大。〈孟子〉
c まことニ→固一世之雄也。〈蘇軾・前赤壁賦〉
d (かたくな)→學則不固。〈論語〉

塞 ①サイ ②ソク
①(とりで)→近塞上之人、有善術者。〈淮南子〉
② ふさグ→公道通、私道塞。〈淮南子〉

之 シ
a これ・この→我非生而知之者。〈論語〉
b の→會稽之恥。〈史記〉
c ゆク→送孟浩然之廣陵。〈李白〉

自 ジ
a みづから→遂自投汨羅以死。〈史記〉
b おのづから→桃李不言、下自成蹊。〈史記〉
c より→有朋自遠方來。〈論語〉

事 ジ
a つかフ→未能事人、焉能事鬼。〈論語〉
b こと・こととス→請事斯語。〈論語〉

爾 ジ
a なんぢ→出乎爾者、反乎爾。〈孟子〉
b のみ→非死則徙爾。〈柳宗元・捕蛇者説〉
c ちかシ(邇)→道在爾。〈孟子〉

疾 シツ
a にくム→恐其賢於己、疾之。〈史記〉
b はやシ→來何疾也。〈戦国策〉
c やム→昔者疾、今日愈。〈孟子〉

質 ①シツ ②チ
①(生まれつき・生地)→性質美。〈荀子〉
②(ひとじち)→燕太子丹者、故嘗質於趙。〈史記〉

者 シャ
a もの・ものハ・こと(事物や人を示す)→非死者難也。處死者難。〈史記〉
b ～は・もの・ものハ(提示)→仁者人也。義者宜也。〈中庸〉
c ときハ・ハ(場所や条件を示す)→不殺者爲楚國患。〈史記〉

若 ジャク
a ごとシ→其翼若垂天之雲。〈荘子〉
b しク→不若與人。〈孟子〉
c もシ→若反國、將爲亂。〈史記〉
d なんぢ→若入前爲壽。〈史記〉

須 シュ
a もちフ→不須復煩大將。〈漢書〉
b すべかラク～ベシ→須常思病苦時。〈慎思録〉

就 シュウ
a つク→出乃就職。〈宋書〉
b なル・なス→所以就大務也。〈呂氏春秋〉
c すなはチ→就加詔許之。〈晋書〉

縱 ジュウ・ショウ
a たて→合縱連衡。〈史記〉
b ほしいままニス→我實縱欲。〈春秋左氏伝〉
c たとヒ→縱彼不言、籍獨不愧於心乎。〈史記〉

且 ショ
a かツ→臣死且不避。〈史記〉
b しばらク→且進杯中物。〈陶潜・責子〉
c まさニ～セントス→引酒且飲之。〈戦国策〉

所 ショ
a ところ(提示・英語の関係代名詞)→富與貴是人之所欲也。〈論語〉
b る・らル→所殺者、子、上書言。〈史記〉
c (所以)ゆゑん(理由・原因、手段・方法)→法令者所以導民也。〈史記〉
天下所以治者何也。〈墨子〉
d (所謂)いはゆる→彼所謂豪傑之士也。〈孟子〉

女 ジョ(ヂョ)・ニョ
a おんな・むすめ→有女二人。〈陳玄祐・離魂記〉
b なんぢ→女奚不言。〈論語〉

如 ジョ
a ごとシ→如斯而已乎。〈論語〉
b しク→不如子。〈論語〉
c もシ→如詩不成、罰依金谷酒數。〈李白・春夜宴従弟桃花園序〉

尚 ショウ
a たつとブ→尚德哉、若人。〈論語〉
b なホ→今將軍尚不得夜行。〈史記〉

勝 ショウ(シャウ)
a ひきキル→上自將而往。〈史記〉
b もツテ→年年殺豚將餧狐。〈白居易・黒潭龍〉
c まさニ～セントス→君將何以教我。〈楚辞〉

將 ショウ(シャウ)
a かツ・まさル→勝人者、必先自勝。〈呂氏春秋〉
b たフ→刑人如恐不勝。〈史記〉
c あグ→不可勝食。〈孟子〉

少 ショウ(セウ)
a すくナシ→禮有以少爲貴者。〈礼記〉
b わかシ→少之時、血氣未定。〈論語〉
c しばらク→少則洋洋焉。〈孟子〉

嘗 ショウ(シャウ)
a なム→飲食亦嘗膽。〈史記〉

ｂ こころム→請嘗言之。〈荘子〉
ｃ かつテ→未嘗見天子。〈史記〉

食 ①ショク ②シ
①くらフ→食之比門下車客。〈戦国策〉
②ａ （たべもの）→將限其食。〈列子〉
ｂ やしなフ→食馬者、不知其能千里而食也。〈韓愈・雑説〉

數 ①スウ ②サク
①かず・かぞフ→不可勝數。〈史記〉
②しばしば→秦數挑戰。〈史記〉

是 ゼ
ａ コレ・コノ・ココニ→於是學國政、屬大夫種。〈史記〉
ｂ よし（正しいとす）→偃之言、是也。〈論語〉

說 ①セツ ②エツ ③ゼイ
①とク→使人說子胥。〈国語〉
②よろこブ（＝悦）→不亦說乎。〈論語〉
③とク（人に自説を説いて従わせる）→說大人則藐之。〈孟子〉

鮮 セン
ａ あざやカ→芳草鮮美。〈陶潜・桃花源記〉
ｂ すくなシ→巧言令色、鮮矣仁。〈論語〉

走 ソウ
ａ はしル→走犬逐狡兔。〈淮南子〉
ｂ にグ→曳兵而走。〈孟子〉

曾 ソウ
ａ すなはチ→爾何曾比予於管仲。〈孟子〉
ｂ かつテ→聞先古未曾貴。〈漢書〉

卽 ソク
ａ つク→吾初卽位、〈史記〉
ｂ すなはチ→先卽制人。〈史記〉
ｃ もシ→卽不能、諸侯虜吾屬而東。〈史記〉

卒 ①ソツ ②シュツ
①ａ をフ・をハル→維其卒矣。〈論語〉
ｂ つひニ→卒爲善士。〈孟子〉
ｃ （兵士）→視卒如愛子。〈孫子〉
②しゅっス→（高適）永泰元年正月卒。〈唐書〉

率 ①ソツ ②リツ
①ａ したがフ→率性之謂道。〈中庸〉
ｂ ひきキル→率天下之人、而禍仁義者、必子之言夫。〈孟子〉
ｃ おほむネ→其著書十餘萬言、大抵率寓言也。〈史記〉
②（きまり）→中率封爲樂安侯。〈漢書〉

殆 タイ
ａ ほとんド→殆有甚焉。〈孟子〉
ｂ あやふシ→思而不學則殆。〈論語〉

乃 ダイ
ａ すなはチ→大禹聖者、乃惜寸陰。〈晋書〉
ｂ なんぢ→乃心罔不在王室。〈書経〉

直 ①チョク ②チ
①ａ なほシ→友直。〈論語〉
ｂ ただちニ→直使送之。〈戦国策〉
ｃ ただ→直不百步耳。〈孟子〉
②（あたひ）→何不還他直。〈北史〉

適 テキ・セキ
ａ ゆク→將適于田。〈沈既済・枕中記〉
ｂ たまたま→適有萬金良藥、故得無死。〈史記〉
ｃ かなフ→何適之謂。〈沈既済・枕中記〉

道 ドウ（ダウ）・トウ（タウ）
ａ みち→道不行。〈論語〉
ｂ みちびク→道之以政、齊之以刑、民免而無恥。〈論語〉
ｃ いフ→君子道其常、小人道其怪。〈荀子〉

能 ノウ
ａ よク・よクス→唯士爲能。〈孟子〉
ｂ あたフ→是不爲也。非不能也。〈孟子〉
ｃ （才能）→安求其能千里也。〈韓愈・雑説〉

寧 ネイ
ａ やすシ・やすんズ→各寧其親。〈周書〉
ｂ むしロ→寧爲鷄口、無爲牛後。〈史記〉
ｃ いづクンゾ・なンゾ→寧可以急、相棄邪。〈世説新語〉

復 フク
ａ ふたたび・ふたたびス→無復怒。〈春秋左氏伝〉
ｂ かへル・かへス→无往不復。〈易経〉
ｃ まタ→兔不可復得。〈韓非子〉

方 ホウ（ハウ）
ａ あたル・まさニ→方其時、秦王方環柱走。〈史記〉
ｂ はじメテ→春蠶到死糸方盡。〈李商隠・無題〉
ｃ （四角）→地方千里。〈史記〉
（方法）→可謂仁之方也。〈論語〉
（方位・所）→遊必有方。〈論語〉

封 ①ホウ ②フウ
①（土地を与えて諸侯にする）→封爲武安君。〈史記〉
②（封をする）→封閉宮室、還軍霸上。〈史記〉

與 ヨ
ａ あたフ→多自與。〈史記〉
ｂ くみス→韓信易與耳。〈史記〉
ｃ ともニス→鳥獸不可與同群。〈論語〉
ｄ あづかル→不與存焉。〈孟子〉
ｅ ～と→懷王與諸將約。〈史記〉

漢文の修辞法

主な修辞法としては、一 対句、二 双関法、三 承遞法、四 漸層法、五 倒装法、がある。

一 対句

同一形式の句法によって作られた（対応する語が文法上、同じはたらきを持つ）二句が対になっているもので、それぞれ対応する語は、同性質または異性質の内容をもっている。

古之學者爲己、
今之學者爲人。（論語）

対応する語に注意して、各句の意味を考え、そののちに二句を合わせて、筆者の言わんとする内容を把握する。対句のどちらか一句が読めれば、もう一方の句は自然に読めるから、その文章に対句が用いられているかどうかを、まず見なければならない。

二 双関法

門の左右の扉のように、対立する二つの句を立て、それを基として、交互に受け継いで文を進める方法である。

1（右扉）― 3 ― 5
2（左扉）― 4 ― 6 ― 7

①に対して②を書き、①を受けて③を書き、それに対して②を受けて④を書く。例えば『論語』の、

子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。………

という文章は、

①富與貴是人之…　③不以其道得之…
②貧與賤是人之…　④不以其道得之…　―⑤君子去…

のような構成になっている。①と②は対立し、③は①を受け、④は②を受けながら、また対立している。そうして⑤以下、その両方をまとめて文を進めてゆく。

三 承遞法

上の句の終わりの語を、下の句の初めに置き、下の句の終わりの語をまた次の句の初めに置いて、順次に進めてゆく方法。つまり、しり取りの方法である。

A…1
1…B…2
2…C…3
3…D

A句の終わりの語①をB句の初めに置き、B句の終わりの語②をC句の初めに置き、C句の終わりの語③をD句の初めに置く。実例をあげると、唐・柳宗元「始得西山宴遊記」の、

幽泉怪石、無遠不到、到則披草而坐、傾壺而醉。醉則更相枕以臥。意有所極、夢亦同趣。覺而起、起而歸。

という部分は、

幽泉……不到。
到則……而醉。
醉則……臥。
……覺而起。
起而歸。

のようなしり取りになっている。

四 漸層法

語句の配列を、小から大、弱から強、軽から重にと、次第にその調子を高くしていって、終わりに頂点、つまり言わんとするところに導く方法をいう。

1 ― 2 ― 3 ― 4

これと逆に、大から小、強から弱、重から軽へと進んでゆくものがあり、これを「反漸層法」とよぶ。ここでは、『大学』から、「反漸層法」の例をあげる。

古之欲明明德於天下①者、先治其國。②欲治其國者、先齊其家。③欲齊其家者、先脩其身。④欲脩其身者、先正其心。⑤欲正其心者、先誠其意。⑥欲誠其意者、先致其知。致知在格物。

①天下―國　②國―家　③家―身　④身―心　⑤心―意　⑥意―知

この文章では、「反漸層法」とともに「承遞法」も用いられている。

五 倒装法

倒置法ともよび、文中のある語句を強めるために、その語句を先にあげる方法である。その方法には、次のような場合がある。

①語の位置を変えるとともに、「之」または「是」を添える場合。

古者、言之不出。恥躬之不逮也。（論語）

「言之不出」の原形は「不出言」である。

②語句の位置を変えるだけで、他の語を加えない場合。

子曰、巧言令色、鮮矣仁。（論語）

「鮮矣仁」の原形は「仁鮮矣」である。

江漢以濯之、秋陽以暴之。（孟子）

「以江漢濯之、以秋陽暴之。」が原形である。

漢文の用字法

■返読文字

漢文は日本文と文の構造が異なるので、下から上へ返って読まなければならない場合がある。目的語であることを示す「ヲ」、補語であることを示す「ニ」「ト」に会えば、倒置法でない限り、下から上へ返って読む。しかし、「ヲ」「ニ」「ト」に会わなくても、下から上へ返って読まなければならない文字がある。これを返読文字という。次にあげるものがそれである。

文字	読み	文字	読み	文字	読み
有	あり	無	なシ	莫	なシ・なカレ
勿	なカレ	毋	なカレ	不	ず
弗	ず	非	あらズ	可	ベシ
多	おほシ	寡	すくなシ	少	すくなシ
易	やすシ	難	かたシ	若	ごとシ・しク
如	ごとシ、しク	與	と、ともニ、より	毎	ごとニ
自	より	從	より	由	より
爲	ためニ、たり、る	所	ところ	所以	ゆゑん
雖	いへどモ	見	る、らル	被	る・らル
使	しム	令	しム	遣	しム
教	しム	希	まれナリ	稀	まれナリ
於	おいテ	能	あたフ	欲	ほっス
鮮	すくなシ	盍	なんゾ〜ざル	將	まさニ〜す
未	いまダ〜ず	當	まさニ〜ベシ	應	まさニ〜ベシ
且	まさニ〜す	須	すべかラク〜ベシ	猶	なホ〜ごとシ
宜	よろシク〜ベシ	以	もツテ	足	たル

■再読文字（表中の右側は読み方、左側は意味）

漢語を日本語に翻訳するとき、一つの漢語に一つの日本語を当てたのでは十分に意味が表せないので、二つの日本語を当てて二度読むことにした。これを再読文字という。はじめに副詞を当て、次に助動詞または動詞を当てて読む。

文字	読み方	意味	例文	書き下し・訳
未	いまダ〜ず	まだ〜しない。まだ〜でない。	未嘗見也。	未だ嘗て見ざるなり。
			未聞好學者也。	まだ、学問を好む者を聞かない。
(蓋)盍	なんゾ〜ざル	どうして〜しないのか。	盍反其本矣。	盍ぞ其の本に反らざる。
			盍各言爾志。	どうして各々君たちの思いを言わないのか。言うがよい。
將	まさニ〜す	いまや〜しようとする。〜するであろう。	將爲亂。	将に乱を為さんとす。
			將限其食。	その食いぶちを減らそうとした。
且	まさニ〜す	いまや〜しようとする。〜するであろう。	引酒且飲之。	酒を引きて且に之を飲まんとす。
			若屬皆且爲所虜。	おまえら一族は残らず捕虜にされるだろう。
當	まさニ〜ベシ	当然〜するはずである。当然〜すべきである。	及時當勉勵。	時に及んで当に勉励すべし。
			當如此。	当然このようでなければならない。
應	まさニ〜ベシ	きっと〜だろう。	知汝遠來應有意	知る汝の遠く来たるや応に意有るべし。
			應知故鄉事。	きっと故郷の事を知っているだろう。
宜	よろシク〜ベシ	〜するはずだ。〜するのがよい。	宜多應者。	宜しく応ふる者多かるべし。
			過則宜改之。	誤ちをおかしたら改めるのがよい。
須	すべかラク〜ベシ	ぜひ〜しなくてはならない。	人須自省察。	人は須らく自ら省察すべし。
			須急擊。	ぜひ急いで攻撃しなくてはならない。
(由)猶	なホ〜ごとシ	ちょうど〜のようである。	過猶不及。	過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。
			猶水之就下也。	ちょうど水が低い方へ流れていくようなものである。

■文末にある助字

文章の語気やニュアンスは助字によってあらわされる。そのうち、文末にある助字に次のようなものがある。なお「也」や「乎」が疑問や反語の意味であるときは、「何」「豈」などと呼応することもある。

助字	用法	例文	訳
也	断定の意味を表す（なり）	其人弗能應也。	その人はこたえることができなかった。
	理由を表す（なり）	知時有利不利也。	時勢に利、不利があるのを知っているからである。
	疑問の意味を表す（や・か）	不加多何也。	増えないのはどうしてか。
	反語の意味を表す（や・か）	何富貴也。	富貴にはならない。
	詠嘆の意味を表す（や・か）	來何疾也。	何と早く来たなあ。
	提示句を作る（や）	思之於學功也、	考えるということが学問においては、
		其為人也、	その人柄といえば、
矣	断定の意味を表す。（訓読しない）	收畢矣。	回収し尽くした。
	詠嘆の意味を表す（かな）	甚矣、吾不知人也。	ひどいなあ、私が人を知らないことといったら。
乎耶邪与歟	疑問の意味を表す（や・か）	馮公有親乎。	馮公には身内がいるか。
	反語の意味を表す（や・か）	越其可逆天乎。	越は天に逆らうことはできない。
	詠嘆の意味を表す（や・か・かな）	其恕乎。	思いやりだろうね。
	呼びかけの意味を表す（や・か）	參乎、吾道一以貫之。	参よ、私の道は一つのもので貫かれている。
哉夫	疑問の意味を表す（や・か）	今安在哉。	今どこにいるのか。
	反語の意味を表す（や・か）	奚暇治禮義哉。	礼義を治めるひまはない。
	詠嘆の意味を表す（かな）	哀哉。	かなしいことだなあ。
焉	断定の意味を表す（訓読しない）	俄而匱焉。	まもなくとぼしくなった。
耳・爾已・而已	限定の意味を表す（のみ）	直不百歩耳。	ただ百歩でないだけだ。

■文中にある助字

文中にある助字は、形式的には訓読しないものもあるが、文中に使われている限り、それなりの語気やニュアンスを持っている。

助字	用法	例文	書き下し・訳
於乎于	動作の方向・帰着・場所などを表す。（in, at, for, to にあたる）	求救於秦。	救ひを秦に求む。
		保於会稽。	会稽山にたてこもった。
	動作の起点を表す。（from にあたる）	青取之於藍。	青は之を藍より取る。
		小人之學也、入乎耳。	つまらぬ人の学問は耳から入ってくる。
	比較を表す。（than にあたる）	苛政猛於虎。	苛政は虎よりも猛し。
		霜葉紅於二月花。	霜に当たって紅くなった葉は春二月の花よりもあかい。
	受身を表す。	勞力者治於人。	力を労する者は人に治めらる。
		小人役於物。	つまらぬ人間は物質に支配される。
而	順接の接続詞。（「□而〈連用形＋テ〉か「而」のいずれか）	漁父見而問之。	漁父見て之に問ふ。
		折頸而死。	くびを折って死んだ。
	逆接の接続詞。（「□而〈已然形＋ドモ〉」か「而」「而」のいずれか）	樹欲靜、而風不止。	樹は静かならんと欲す、しかれども風は止まず。
		視而不見。	じっとよく視るけれども見えない。
者	主部を提示する。読まないときもある。	兵者凶器也。	兵は凶器なり。
		行者不利。	実行する者はいいことはない。
之	修飾関係を表す。	伍員之亡也、	伍員の亡ぐるや、
		父母者人之本也。	両親は人の根本となるものである。
所	次にくる語を体言化する。	先生所言者、國之大事也。	先生言ふ所の者は国の大事なり。
	（関係代名詞の働きをする）	顧計不知所出耳。	ただどう考えていいかわからなかっただけです。

■主な助字

〈あへて〉

敢　しにくいこと、してはならないことを、押しきってする意を表す。

子無敢食我也。

あなたは（天帝の命令を無視して）私を食べるようなことをしてはいけない。〈戦国策・楚策〉

肯　承知し、なっとくする意を表す。ガエンズともよむ。

兩人自匿、不肯見公子。

二人はかくれてしまって、公子に会うことを承知しない。〈史記・信陵君伝〉

〈あらたに〉

新　〜したばかり。

新浴者必振衣。

体を洗ったばかりの者は必ず衣服の塵をふるって着る。〈楚辞・漁父〉

〈いかん〉

如何　「どうしたらよいか」と問う意を表す。「奈何」「若何」も同じ。

今者出未辭也。爲之奈何。

いま外へ出るのに、あいさつをしてこなかった。どうしたらよかろうか。〈史記・項羽本紀〉

何如　「どのようか」「どうであるか」と問う意を表す。「何若」も同じ。

以子之矛、陥子之盾、何如。

君の矛で君の盾を突いたら、どうなるかね。〈韓非子・難一〉

〈いやしくも〉

苟　「かりそめにも」「すこしでも」の意。マコトニともよまれるが、本来は別字で「茍」（音はキョク）

故苟得其養、無物不長。

だから少しでも養育すれば、何物でも生長しないものはない。〈孟子・告子上〉

〈うたた〉

轉（転）　車輪の転ずる意より、次第に及ぶ意を表す字となる。イヨイヨともよむ。「愈」より語勢は強い。

客心何事轉凄然。

旅人である私の心は何故か次第にやりきれなくなってくる。〈高適・除夜作〉

〈かへって〉

反　ものがひっくりかえって裏になる意からの転用。

信知生男惡、反是生女好。

男を生むのは悪く、かえって女を生むほうが好いことが、よくわかった。〈杜甫・兵車行〉

還　ぐるりと身をめぐらせて返る意より転用。

譬畫虎不成、還爲狗者也。

たとえば虎を画いてできず、かえって犬になるようなものだ。〈三国志・曹植伝注〉

却　「退く」意からの転用。

欺人者、却爲人所欺。

人をあざむく者は、かえって人にあざむかれる。〈佐藤一斎・言志晩録〉

〈かつ〉

且　進物を台にのせた形を示す字で、台の上に安定して置かれている場合から「かつまた」の意に、かりにしばらく置かれている場合から「しばらく」の意に転用された。

(1) かつ

邦無道、富且貴焉、恥也。

国に道が行われていないのに、富んだうえに位が高いのは恥である。〈論語・泰伯〉

(2) しばらく

且欲與常馬等、不可得。

まずは並みの馬と同じようにやってゆこうとしても、そうはできない。〈韓愈・雑説〉

〈かつて〉

嘗　口で食物の味をなめてみる、こころみる、の意から、「〜したことがある」の意に転じた。

嘗一日行千里。

かつて一日に千里も行ったことがあった。〈史記・項羽本紀〉

常　「嘗」と音も意味も同じ。

常奉使夜歸。

かつて役目で外へ出かけ、夜になって帰ったことがあった。〈白行簡・三夢記〉

曾　「昔かつて」と「経験」の二つの意味を持つ。「嘗」が「なめる（経験）」の意だけを持つのと異なる。

孟嘗君曾待客夜食。

孟嘗君はかつて客を招待して夜いっしょに食事したことがあった。〈史記・孟嘗君伝〉

〈けだし〉

蓋　もののおおい、ふた、の意より転用され、大まかにまとめて「おもうに」「おおかた」と推量する場合と、「そもそも」「いったい」と、言い出しのことばに用いる場合とがある。なお「盍」（ナンゾ〜ザル）と通用する。

(1) 推量

屈平之作離騷、蓋自怨生也。

屈原が「離騒」を作ったのは、おもうに怨みによるものであろう。〈史記・屈原伝〉

(2) 発語

朕聞、蓋天下萬物之萌生、靡不有死。

私は聞いている、そもそも天下すべての生き物は、死なぬものはないのだと。〈史記・文帝紀〉

〈しむ〉

使　人を使って〜させる。

天帝使我長百獸。

天帝は私を百獣の長にされたのです。〈戦国策・楚策〉

令　人に命令して〜させる意より転用。

令將軍與臣有郤。

将軍を私と仲たがいさせようとした。〈史記・項羽本紀〉

教　人に教えて〜させる意より転用。

遂教方士殷勤覓。

そこで方士に念入りにさがし求めさせた。〈白居易・長恨歌〉

遣 人をつかわす意より転用。

遣二従者懐一レ璧間行先帰。

従者に璧玉をかくし持たせ、間道を通って先に帰らせた。〈史記・廉頗藺相如伝〉

〈すでに〉

已 「もはや」「とっくに」。「未」(イマダ〜ズ)に対する字。

道之不レ行、已知レ之矣。

道が世に行われないということは、とっくに知っている。〈論語・微子〉

既 「〜してしまった」「〜したうえに、さらに〜」。「将」(マサニ〜ントス)に対する字。「已」「既」ともに完了を表す字であるが、厳密にいえば、例えば何人かの人が川をわたるのに、まだ一人もわたりはじめていないのが「未レ済」、一人でもわたりはじめたら「已済」、全員がわたりおえたのが「既済」、という違いがある。

樊噲既飲レ酒、抜レ剣、切レ肉、食尽レ之。

樊噲は酒を飲んでしまうと、剣を抜いて肉を切り、ペロリとたいらげた。〈史記・項羽本紀〉

〈すなはち〉

則 (1) 仮設・条件を表す。(レバ則)

衣食足、則知二栄辱一。

衣食が十分であれば、栄と辱との区別がつくのだ。〈管子・牧民〉

(2) 他との区別を表す。

弟子、入則孝、出則弟。

若者よ、父母のいる奥の間では孝行、兄弟のいる表の間では仲よく。〈論語・学而〉

即 上と下とが同一であることを示す。「とりもなおさず」。「乃」に対する字。

先即制レ人、後則為二人所一レ制。

先にやれば人を制することができ、おくれたら人に制せられる。〈史記・項羽本紀〉

乃・迺 上文を順調にうけず、ねじってうけるのがその本義。ねじりかたに、いろいろある。

(1) そこで・ここに

於レ是項王乃悲歌忼慨。

項王はそこで悲しげに歌い、憤り嘆いた。〈史記・項羽本紀〉

(2) かえって

相国不下以二此時一為上レ利、今乃利二賈人之金一乎。

相国はこの時を利益をあげるチャンスとしないでおいて、今かえって商人の金に目がくらんだりしましょうか。〈史記・蕭相国世家〉

(3) はじめて

度三我至二軍中一、公乃入。

私が軍中に着いた頃を見はからって、君ははじめて(項羽の陣に)入りたまえ。〈史記・項羽本紀〉

(4) いまこそ・それこそ

先生所下為レ文市レ義者上、乃今日見レ之。

先生が私(田文)のために義を買われたわけが、今こそわかりました。〈戦国策・斉策〉

(5) 意外にも・なんとまあ

乃不レ知レ有レ漢、無レ論二魏晋一。

(村人たちは)なんと漢のことも知らないし、もちろん魏・晋も知らなかった。〈陶潜・桃花源記〉

便 便利の便で、「そのまま」「たやすく」「〜するとすぐに」。

林尽二水源一、便得二一山一。

林は水源の所でつきて、すぐそこに一つの山があった。〈陶潜・桃花源記〉

輒 「そのたびごとに」「すぐもう」「たやすく」「いつでも」。よく「毎〜、輒〜」の形をとる。

出望見、輒引レ車避匿。

外出して(廉頗の来るのを)見ると、すぐに車を引かせて避けかくれた。〈史記・廉頗藺相如伝〉

〈そぞろに〉

坐 そうするつもりはないのに自然にそうなる意を表す。

停レ車坐愛楓林晩。

車を停めてただわけもなく楓林の夕暮れの美しさにひかれている。〈杜牧・山行〉

〈たちまち〉

忽 にわかに生起する意。「不意に」「にわかに」。

忽逢二桃花林一。

不意に桃花の林に出くわした。〈陶潜・桃花源記〉

乍 急に変化して定まらない意。「ひょいと」「ちらと」。

今、人乍見下孺子将上レ入二於井一、

いまある人が、ふと幼児が井戸に落ちようとしているのを見つけた場合、〈孟子・公孫丑上〉

〈たとひ〉

縦 ゆるめる、が本義。「ゆるめてみても」「〜であっても」。

縦江東父兄憐而王レ我、

たとい江東の父兄たちが私を憐れんで王にしてくれるとしても、〈史記・項羽本紀〉

〈つひに〉

遂 ある原因・よりどころがあって、そのことが成しとげられる意。「その結果」「かくて」「そのまま」。

虎以為レ然、故遂与レ之行。

虎はそれもそうだと考えたので、そこで狐と歩いていった。〈戦国策・楚策〉

終 「始」に対する字で、事の結末を表す。「はては」「おわりには」「とうとう」。

亦終必亡而已矣。

(少しばかり残っている仁心も、これでは)はては必ずなくなってしまう。〈孟子・告子上〉

竟 結局は〜の意。「とうとう」「あげくのはてに」「しまいに」。

盗跖日殺二不辜一、竟以レ寿終。

盗跖は毎日、罪もない人々を殺していたが、結局は寿命いっぱい生きた。〈史記・伯夷伝〉

卒 そのはては、の意。始・中をのぞき、事のしまいだけをいう。

然今卒困於此。

しかし今やそのはてに、ここに行きづまってしまった。〈史記・項羽本紀〉

〈ともに〉

與(与) くみになる意。トともよむ。

遂去不復與言。

そのまま立ち去り、もはやことばをかわすことはなかった。〈楚辞・漁父〉

共 共同で事にあたる意。ミナ、オナジクともよむ。

玄齢與吾共取天下。

房玄齢は私といっしょに天下を取った。〈十八史略・唐〉

倶 それぞれがいっしょに、の意。ばらばらに行っても行きあう所は一つ、という意味で、共同のトモニとは異なる。

兩虎共鬭、其勢不倶生。

二匹の虎が闘ったならば、そのなりゆきとしてどちらとも無事というわけにはいかない。〈史記・廉頗藺相如伝〉

〈なほ〉

猶 もと、一歩ごとに後をふりかえりながら行く獣の名。それより、ためらい後もどりする意となる。「やはり」「まだ」「それでもなお」。

至今毎吟猶惻惻耳。

今でも吟ずるたびに、まだ痛ましく心にひびく。〈白居易・与微之書〉

尚 物の上にさらに物を加える意より転ず。「加うるに」「その上に」「まだ」。「猶」は主に上文にかかるが、「尚」はもっぱら下文にかかる。

此句他人尚不可聞。

この句は他人さえも(悲しくて)聞けないほどなのだ。〈白居易・与微之書〉

還 ぐるりと身をめぐらせてなおもまた、の意。

歸來頭白還戍邊。

(戦場から)帰ってくると髪は白くなっているのに、なおもまた辺境の守備につかされた。〈杜甫・兵車行〉

〈はじめ・はじめて〉

始 子が母親の胎内に生長しはじめる意より転用。事のはじまりをいう。「終」に対する。

賜也始可與言詩已矣。

賜よ、はじめておまえと詩について話せるようになったな。〈論語・学而〉

初 衣服を作る際の裁ちはじめの意で、時間上のはじめをいう。「始」と「初」は、よく通用されるが、本義には違いがある。「初」はハジメのよみが多く、ハジメテのよみは少ない。「始」はその反対で、たまにハジメとよむことがあっても、それは事のはじまりをいう。

初極狹纔通人。

最初はきわめてせまく、やっと人が通れるほどであった。〈陶潜・桃花源記〉

〈ひそかに〉

私 内心ひそかに、の意。

越乃私喜。

越は(それを聞いて)内心ひそかに喜んだ。〈史記・越王句践世家〉

陰 かげでわからないようにこっそりと、の意。

陰謀逆德、好用凶器。

こっそりと不正な行為をたくらみ、好んで不吉な道具(武器)を用いる。〈史記・越王句践世家〉

竊 内部の者がこっそりと盗み取る意より転用。

光竊不自外、言足下於太子也。

私(光)はそれをかくして誰にももらさず、あなたを太子に推薦したのです。〈史記・刺客列伝〉

〈べし〉

可 「許容」と「可能」の二義がある。

(1) 許容「〜してもよろしい」。

可以取、可以無取、取傷廉。

取ってもよく、取らなくてもよいという時には、取ると廉潔の徳をそこなう。〈孟子・離婁下〉

(2) 可能「〜することができる」。「能」と同じ。

兎不可復得。

兎はもう手に入れることができなかった。〈韓非子・五蠹〉

當(当) 道理にあたる意より、「べきである」「はずである」の意になる。マサニ〜スベシとよむ。

有頃、父亦來、喜曰、當如是。

しばらくして老人もやってきて、喜んで、こうでなければならん、と言った。〈史記・留侯世家〉

應(応) 「當」と同じように用いられるが、その意味は「當」より軽い。

君自故鄕來、應知故鄕事。

あなたは故郷から来たのだから、きっと故郷の事を知っているだろう。〈王維・雑詩〉

宜 このようにするのが宜しいから、このようにされよ、の意で、ヨロシク〜スベシとよむ。命令の形式ではあるが、その意は軽い。

惟仁者宜在高位。

ただ仁者だけが高位にあるべきである。〈孟子・離婁上〉

須 「必須」の意で、どうしても〜せねばならぬ、と要求するもの。「宜」よりは重く、また強い。スベカラク〜スベシとよむ。

人生得意須盡歡。

人生は思いのままになる時には、存分に楽しみをつくすべきだ。〈李白・将進酒〉

〈まさに〉

正 当たるべき所にちょうど当たって、の意。「まさしく」「ちょうど」。

本所以疑、正爲此耳。

はじめにためらったわけは、まさしくこのため

だ。〈世説新語〉

方 その時とか場にむかいあって、その最中、の意。「いまや」「おりしも」。『文語解』には「正は、その場にあたる意なり。方は、その場にむかう意なり。「正」は重くして狭く、方は軽くして広し」と説明する。

夜 方 半、宙 不 寐。

夜はいまや半ばになったが、宙は寝つかれなかった。〈陳玄祐・離魂記〉

適 ちょうどそこに行きあう意。タマタマともよむ。

至 今 適 三 百 歳。

今日までちょうど三百年である。〈後漢書・郎顗伝〉

〈まさに〜とす〉

將 現在まだその事は起こっていないが、以後にそれが起ころうとする場合などをいう。「〜しそうだ」「〜するであろう」「〜しようと思う」。

不 知 老 之 將 至。

老年がやってこようとしていることにも気づかない。〈論語・述而〉

且 「將」とほぼ同じであるが、「なおなお継続して〜しようとする」の意がある。

不 者、若 屬 且 爲 所 虜。

そうしなければ、おまえら一族は捕虜になってしまうぞ。〈史記・項羽本紀〉

〈また〉

又 ある物の上に重ねて、の意。「さらに」「そのうえ」。

行 人 臨 發 又 開 封。

旅人が出発するにあたり、かさねて手紙の封を開いてたしかめる。〈張籍・秋思〉

復 反復の意。「ふたたびまた」。

死 者 不 可 復 生。

死んだ者は再び生きることはできない。〈史記・孝文紀〉

亦 同類の事物を列挙する時に用いる。モマタとよむ。

生 亦 我 所 欲 也、義 亦 我 所 欲 也。

生もまた私のほしいものであり、義もまた私のほしいものである。〈孟子・告子上〉

還 ぐるりとめぐって、またもとへもどる意。

千 金 散 盡 還 復 來。

千金を使いはたしても、またかえってくるだろう。〈李白・将進酒〉

〈むしろ〉

寧 二つの事物を比較してその一つを選択し、それに寧んじようとする意を表す。

禮 與 其 奢 也 寧 儉。

礼というものは、ぜいたくにするよりはむしろ質素にした方がよい。〈論語・八佾〉

〈もし〉

如 「仮設」の意。「もし〜であれば」。

富 貴 如 可 求、雖 執 鞭 之 士、吾 亦 爲 之。

富貴というものが、もし求めて得られるなら、御者でも何でも私はする。〈史記・孔子世家〉

若 「如」と同じ意味で、やや重い。

若 嗣 子 可 輔 輔 之。

もし後つぎの子が、輔佐するにたる人物であれば輔佐してやってくれ。〈三国志・諸葛亮伝〉

設 仮に設けていう。

朝 廷 設 問 寡 人、大 夫 將 何 辭 以 對。

朝廷がもし私のことを尋ねたら、大夫はどうこたえるつもりだ。〈後漢書・敬王睦伝〉

誠 まことに〜なら、の意。

誠 聽 臣 之 計、可 不 攻 而 降 城。

もしも私の計略にしたがったならば、攻めないでも城を降すことができる。〈史記・張耳伝〉

〈もとより〉

固 終始かわらぬ意より、「本来」「もとから」、さらに「いうまでもなく」、となる。マコトニともよむ。

然 則 小 固 不 可 以 敵 大。

してみると小はもともと大にはかなわぬものである。〈孟子・梁恵王上〉

故 「今」に対して、以前からの意。「ふるくより」。

阿 舒 已 二 八、懶 惰 故 無 匹。

阿舒はもう一六歳になるのに、もとから大へんななまけ者。〈陶潜・責子〉

素 つむいだままの染めないきぬ糸で織った布が本義。「平素から」「以前から」。

高 祖 爲 亭 長、素 易 諸 吏。

高祖は亭長となったが、ふだんから役人を軽んじていた。〈史記・高祖本紀〉

〈より〉

自 動作の起点を示す。「〜から」。

有 朋 自 遠 方 來。

友が遠方からやって来た。〈論語・学而〉

從 その道にしたがって。「〜にそって」。

從 酈 山 下、道 芷 陽 閒 行。

酈山の下にそって、芷陽に向かって近道を進んだ。〈史記・項羽本紀〉

由 〜のすじから。経由の意。

誰 能 出 不 由 戸。

外に出るのに戸から出ない者はない。〈論語・雍也〉

〈らる〉

被 寝衣が本義。「かけられる」より受身の意となる。

信 而 見 疑、忠 而 被 謗。

まことを尽くしながら疑われ、忠でありながらそしられた。〈史記・屈原伝〉

見 「見られる」意から、受身の意となる。

衆 人 皆 醉、我 獨 醒。是 以 見 放。

みんな酔っぱらっているのに、私だけがさめている。このために追放されたのだ。〈楚辞・漁父辞〉

爲 「〜と為る」意から、受身の意となる。多くの場合「所」と組みあわせて用いられる。

厚 者 爲 戮、薄 者 見 疑。

程度のひどい者は殺され、かるい者でも疑われる。〈韓非子・説難〉

■漢文の重要句形

否定形

句形	読み	意味	例文	書き下し文	口語訳
(1)否定の助動詞を単独に用いる場合					
不、弗	～ず	～しない。	弗レ能レ應也。（韓非子）	応ふる能はざるなり。	こたえることができなかった。
無、莫、毋、勿、亡、罔	なシ	ない。	天下無レ馬。（韓愈、雜說）	天下に馬無し。	世の中に(千里の)馬はいない。
非、匪	～ニあらズ	～ではない。	知三其非二庸人一也。（史記）	其の庸人に非ざるを知ればなり。	その人(荊軻)が凡人でないことを知っていたからである。
未(再読文字)	いまダ～ず	(まだ)～しない。	未二嘗見一也。（戰國策）	未だ嘗て見ざるなり。	まだ見たこともない。
(2)否定の助動詞を重ねて用いる場合(二重否定)					
無レ不二～一	～セざルハなシ	～しないものはない。	於レ物無レ不レ陷也。（韓非子）	物に於いて陥さざる無きなり。	どんな物でも突き通す。
非レ不二～一	～セざルニあらズ	～しないことはない。	城非レ不レ高也。（莊子）	城は高からざるに非ざるなり。	城は高くないことはない。
無レ非二～一	～ニあらザルなシ	みな～である。	無レ非レ牛者。（莊子）	牛に非ざる者無し。	牛でないものはなかった。
不レ可レ不二～一	～セざルベカラず	～しなくてはならない。	不レ可レ不レ語。（史記）	語げざるべからず。	告げなくてはならない。
未三嘗不二～一	いまダかつテ～セずンバアラず	～しないことはなかった。	未三嘗不二稱レ善。（史記）	未だ嘗て善しと称せずんばあらず。	すばらしいと称賛しなかったことはなかった。
無三―不二～一	―トシテ～セざルハなシ	―として～しない―はない。	無二夕不一レ飲。（陶潛、飲酒詩序）	夕として飲まざるは無し。	飲まない夜はない。
(3)否定の助動詞が独立している場合(独立用法)					
否、不、未	いなヤ、いまダシヤ	～かどうか。	視二吾舌一。尚在不。（史記）	吾が舌を視よ。尚ほ在りや不や。	わしの舌をみよ。まだ在るかどうか。
不者	しからずンバ	そうしなければ。	不者且レ得レ罪。（史記）	しからずんば且に罪を得んとす。	そうしなければ(おまえは)殺されるだろう。
(4)否定の助動詞と副詞の連用					
(ア)全部否定と部分否定					
常不二～一	つねニ～セず	いつも～しない。	此道之所三以常不二行也。（中庸）	此れ道の常に行はれざる所以なり。	これが道のいつも実行されないわけである。
不二常～一	つねニハ～セず	いつも～とは限らない。	伯樂不二常有一。（韓愈、雜說）	伯楽は常には有らず。	伯楽はいつもいるとは限らない。
復不二～一	まタ～セず	またも～しない。	管寧復不レ至。（資治通鑑綱目）	管寧は復た至らず。	管寧はまたもこなかった。
不二復～一	まタ～セず	二度とは～しない。	馮諼不二復歌一。（戰國策）	馮諼 復た歌はず。	馮諼は二度とは歌わなかった。
(イ)特別な用法					
敢不二～一	あヘテ～セざランヤ	どうして～しないことがあろう。きっと～する。	敢不レ走乎。（戰國策）	敢へて走げざらんや。	どうして逃げないことがあろうか。きっと逃げる。
不二敢～一	あヘテ～セず	決して(しいて)～しない。	子無二敢食一レ我。（戰國策）	子敢へて我を食らふこと無かれ	あなたは決して私を食っては

句形	読み	意味	例文	書き下し文	現代語訳
				れ。	いけない。
亦不〜	また〜せず	また〜でない。	亦不詳其姓字。(陶潜、五柳先生傳)	亦た其の姓字を詳かにせず。	またその姓名がはっきりしなかった。
不亦〜乎	また〜ずや	なんと〜ではないか。	不亦樂乎。(論語)	亦た楽しからずや。	なんと楽しいではないか。
唯不〜	ただ〜ざルノミ	ただ〜しないだけだ。	唯不逃耳。	唯だ逃げざるのみ。	ただ逃げなかっただけだ。
不唯〜	ただニ〜ノミナラず	ただ〜だけではない。	不唯忘歸、可以終老。(白居易、與微之書)	唯だに帰るを忘るるのみならず、以つて老を終ふべし。	ただ家に帰ることを忘れるだけでなく、ここで晩年を終えてもよろしい。

疑問形

句形	読み	意味	例文	書き下し文	現代語訳
(1)疑問の助詞を用いる場合					
乎、邪(耶)、也、哉、與(歟)	〜や・か	〜か	可得聞乎。(孟子)	聞くを得べきか。	聞くことができるか。
			不加多、何也。(孟子)	多きを加へざるは、何ぞや。	(人口が)増えないのはどうしてか。
(2)疑問詞を用いる場合(文末に疑問の助詞を伴うこともある)					
誰、孰	たれ(カ)	だれが〜か。	誰加衣者。(韓非子)	誰か衣を加ふる者ぞ。	だれが着物をかけたのか。
孰、何、奚	いづレ(カ)	どちらが(どれが)〜か。	禮與食孰重。(孟子)	礼と食と孰れか重き。	礼儀と食糧とどちらが大切か。
何、奚、曷、胡	なんゾ・なに	どうして(何を)〜か。	子奚不爲政。(論語)	子奚ぞ政を為さざる。	おまえはどうして政治をしないのか。
安、焉、悪、何、曷	いづクンゾ・いづクニカ	どうして(どこに)〜か。	沛公安在。(史記)	沛公安くにか在る。	沛公はどこにいるのか。
如何、奈何	いかん(セン)	どうするか。	奈若何。(史記)	若を奈何せん。	おまえをどうしようか。
何如、何若	いかん	どのようか。	以子之矛、陥子之盾、何如。(韓非子)	子の矛を以つて子の盾を陥さば、何如。	おまえの矛でおまえの盾を突き通すとどのようか。
幾何、幾許	いくばくゾ	どれほどか。	相去復幾許。(古詩)	相去ること復た幾許ぞ。	どれほど離れているだろう。
何爲	なんすレゾ	どうして〜か。	何爲不可。(世説新語)	何為れぞ可ならざる。	どうしてよくないのか。
盍(＝何不〜)	なんゾ〜セざル	どうして〜しないのか。	盍反其本矣。(孟子)	盍ぞ其の本に反らざる。	どうして根本にたちもどらないのか。
(3)否定詞を用いる場合					
否、不、未	〜いなヤ・いまダシヤ	〜かどうか。	寒梅著花未。(王維、雑詩)	寒梅花を著けしや未だしや。	寒梅は花をつけたかどうか。

反語形

句形	読み	意味	例文	書き下し文	現代語訳
(1)疑問の助詞を用いる場合					
乎、邪(耶)、也、哉、與(歟)	〜や・か	〜か	越其可逆天乎。(史記)	越は其れ天に逆らふべけんや。	越はどうして天に逆らうことができようか、できない。
			豈足福哉。(史記)	豈に福とするに足らんや。	どうして(臣下が)福を受けられようか、受けられない。

漢文の学習

(2)疑問詞を用いる場合(文末に疑問の助詞を伴うこともある)

誰・孰	たれカ	だれが〜しようか、〜しない。	誰知烏之雌雄。(詩經)	誰か烏の雌雄を知らんや。	誰が烏の雌と雄とを見分けられようか、誰もできない。
何・奚・曷・烏・庸	なんゾ	どうして〜しようか、〜しない。	何富貴也。(史記)	何ぞ富貴とならんや。	どうして金持ちや高い身分になれようか、なれない。
安・焉・悪・烏・寧	いづクンゾ	どうして〜しようか、〜しない。	未知生、焉知死。(論語)	未だ生を知らず。焉くんぞ死を知らん。	生についてまだわからない。どうして死についてわかろうか、わかりはしない。
如何	いかんゾ	どうするか、どうすることもできない。	如何不涙垂。(白居易、長恨歌)	如何ぞ涙の垂れざらん。	どうして涙が流れないことがあろうか、いや流れる。
豈	あニ	どうして〜しようか、〜しない。	豈丹之心哉。(史記)	豈に丹の心ならんや。	どうして丹の本心であろうか、本心ではない。

(3)疑問詞と副詞・疑問の助詞との連用

豈獨(徒)〜乎	あニひとリ(たダニ)〜ノミナランや	どうしてただ〜だけであろうか。それだけではない。	豈唯順之。(孟子)	豈に唯だに之に順ふのみならんや。	どうしてただ順うだけであろうか、順うだけではない。
何必〜乎	なんゾかならズシモ〜や	どうして〜の必要があろうか、ない。	王何必曰利。(孟子)	王何ぞ必ずしも利を曰はん。	王はどうして利をいう必要があろうか、いう必要はない。

(4)その他の反語形

敢不〜乎	あヘテ〜セざランや	どうして〜せずにおれようか、きっと〜する。	敢不走乎。(戰國策)	敢へて走げざらんや。	どうして逃げないことがあろうか、きっと逃げる。
不亦〜乎	まタ〜ずや	なんと〜ではないか、〜である。	不亦樂乎。(論語)	亦た楽しからずや。	どうして楽しくないことがあろうか、いや楽しい。

使役形

(1)使役の助動詞を用いる場合

使一〜	一ヲシテ〜セしム	一に〜させる。	孔子使子路問津焉。(論語)	孔子子路をして津を問はしむ。	孔子は子路にわたし場をたずねさせた。

(2)使役を暗示する文字を用いる場合

遣(命、勸)〜	一(つかハ)シテ〜しム	一(遣は)して〜させる。	遣蘇武使西域。(史記)	蘇武を遣し西域に使ひせしむ。	蘇武を西域に派遣した。

(3)前後の文意から使役に読む場合

一	一	一	予助苗長矣。(孟子)	予苗を助けて長ぜしめたり。	私は苗を助けて伸びさせた。

受身形

(1)受身の助動詞を用いる場合

見〜一 被〜一	〜らル	〜される。	信而見疑、忠而被謗。(史記)	信にして疑はれ、忠にして謗らる。	誠実でありながら疑われ、真心を尽くしながら謗られた。

(2)「為―所～」の形を用いる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
為二―所一～	―ノ～スル所トなル	―に～される。	為二楚将所一辱。(史記)	楚の将の辱むる所と為る。	楚の大将に辱められた。

(3)前置詞を用いる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
―於二～一	～ニ―セラル。	～に―される。	労レ力者治二於人一。(孟子)	力を労する者は人に治めらる。	肉体労働をする者は人に支配される。

(4)受身を暗示する文字を用いる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
謫(命、任、封)	(たく)セラル	(左遷)される。	此夕聞三君謫二九江一。(白居易、與微之書)	此の夕、君が九江に謫せられしを聞く。	今夜あなたが九江に左遷されたことを耳にしました。

(5)意味の上から受身になる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
			飛鳥盡良弓藏。(史記)	飛鳥尽きて良弓蔵さる。	飛ぶ鳥がいなくなって良い弓はしまわれる。

比較形

(1)前置詞を用いる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
―於二～一	～ヨリモ―	～よりも―である。	苛政猛二於虎一也。(禮記)	苛政は虎よりも猛し。	苛酷な政治は虎よりもひどい。

(2)否定語と「如・若・及」などの動詞の連用

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
―不レ如二～一	―ハ～ニしカず	―は～に及ばない。	百聞不レ如二一見一。(漢書)	百聞は一見に如かず。	百回聞くより一回見るほうがよい。
―莫レ若二～一	―ハ～ニしクハなシ	―は～に及ぶものはない。	衣莫レ若レ新。(晏子春秋)	衣は新たなるに若くは莫し。	着物は新しいのが一番よい。

(3)比較選択形

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
寧―～	むしロ―トモ～	いっそのこと―しても、～(しない)。	寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。(史記)	寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれ。	むしろ鶏の口になっても、牛の尾になってはならない。
與二―一寧～	―よリハむしロ～	―するよりはむしろ～(がよい)。	禮與二其奢一寧儉。(論語)	礼は其の奢らんよりは、寧ろ倹なれ。	礼はぜいたくであるより、むしろつつましい方がよい。
與二―一不レ如二～一	―よリハ～ニしカず	―するよりは～する方がよい。	與二其生而無一レ義、固不レ如レ烹。(史記)	其の生きて義無からんよりは、固より烹らるるに如かず。	生きていて義がないよりは、煮殺される方がよい。
與二―一孰二若～一	―よリハ～ニいづレゾ	―するよりはどちらかといえば～の方がよい。	與二其有一レ譽二於前一、孰二若無一レ毀二於其後一。(韓愈、送李愿歸盤谷序)	其の前に誉有らんよりは、其の後に毀り無きに孰若れぞ。	生前に誉れがあるよりも、死後に非難されない方がよい。

仮定条件形

(1)仮定を表す副詞を用いる場合

句形	読み方	意味	例文	書き下し文	訳
若～	もシ～バ	もしも～ならば、	若嗣子可レ輔、輔レ之。(三國志)	若し嗣子、輔くべくんば之を輔けよ。	もしもあとつぎの子が輔佐するにたるならば、輔佐せよ。
苟～	いやシクモ～モ	かりに～としても、	苟富貴、無二相忘一。(史記)	苟しくも富貴となるも、相忘るること無からん。	かりに金持ちや高い身分になっても忘れることはない。
縦～	たとヒ～トモ	たとい～としても、	縦江東父兄憐而王レ我、(史記)	縦ひ江東の父兄、憐れみて我を王とすとも、	たとい、江東の父兄があわれんで、私を王にしてくれた

形	読み方	意味	例文	書き下し文	現代語訳
—	—	—	—	—	としても、
(2)仮定を表す助詞を用いる場合					
雖二—一(而)~	—トいへどモ(しかモ)~	たとい—であっても、(しかも)~	雖二千萬人一、而吾往矣。(孟子)	千万人と雖も、而も吾往かん。	たとえ千万人であっても、私は進んでゆく。
(3)使役の形を用いる場合					
使二—~一、	—ヲシテ~セしメバ	もし—に~させていたなら、	使二各自為一レ戦、則楚易レ敗也。(史記)	各をして自ら為に戦はしめば、則ち楚は敗り易きなり。	各々自分のために戦わせるなら、楚は打ち破りやすい。
(4)その他の形					
微二~一、	~なカリセバ	もし~がなかったとしたら、	微レ禹、吾其魚乎。(春秋左氏伝)	禹微かりせば、吾其れ魚とならんか。	禹がもしいなかったら、私は魚となっていただろう。
今~	いま~	いまかりに~するならば、	今予二之生地一、皆走。(史記)	今之に生地を予へなば、皆走げん。	今かりに人々に生きのびる道を与えたなら、みな逃げてしまうだろう。
(5)前後の文意から仮定に読む場合					
—	—	—	朝聞レ道、夕死可矣。(論語)	朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。	もし朝に人の道を聞いたら、夕方には死んでもいい。
抑揚形					
—且~、況—乎	—スラかツ~、いはンヤ—ヲや	—さえも~である、まして—はなおさらだ。	死馬且買レ之、況生者乎。(十八史略)	死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。	死んだ馬でさえ買うのに、まして生きている馬はなおさらのこと買う。
—~、安—乎	—スラかツ~、いづクンゾ—や	—でさえも~であるのに、どうして—しようか。	其父兄不レ顧、安能顧レ王。(史記)	其の父兄すら顧みず、安くんぞ能く王を顧みんや。	自分の父や兄さえ助けないのに、どうして王さまを助けようか。助けはしない。
—、況~乎	—いはンヤ~ヲや	まして—はなおさらである。	天子不レ召レ師、而況諸侯乎。(孟子)	天子すら師を召さず、而るを況んや諸侯をや。	天子でさえ先生を呼びよせないのに、まして諸侯であればなおさらである。
以二—一、而~	—ヲもツテスルモ、しかモ~	—であっても、~である。	夫以二秦王之威一、而相如廷二叱之一。(史記)	夫れ秦王の威を以ってするも、而も相如之を廷叱す。	そもそも秦王の威力でさえも、相如は朝廷で叱りつけた。
限定形					
(1)限定の副詞を用いる場合					
唯、但、徒、只、特、直	ただ~(ノミ)	ただ~だけ。	但聞二人語響一。(王維、鹿柴)	但だ人語の響くを聞くのみ。	ただ人の話し声がかすかに聞こえるだけである。
獨	ひとリ~(ノミ)	ひとり~だけ。	今獨臣有レ船。(史記)	今独り臣のみ船有り。	今、私だけが船を持っている。
僅、纔	わづかニ~(ノミ)	わずかに~だけ。	初極狹、纔通レ人。(陶潛、桃花源記)	初めは極めて狭く、纔かに人を通ずるのみ。	はじめのうちは大変狭く、やっと人を通すだけである。

(2)限定の助詞を用いる場合

耳、爾、已、而已、而已矣　のみ　～のみ、だけ
夫子之道、忠恕而已矣。(論語)
夫子の道は、忠恕のみ。
先生の道はまごころと思いやりだけである。

(3)限定の副詞と助詞の連用

直～耳　ただ～のみ　ただ、だけ。
直不百歩耳。(孟子)
直だ百歩ならざるのみ。
ただ百歩でないだけだ。

(4)否定詞や疑問詞の下に限定の副詞を用いる場合

非獨～　ひとリ～ノミニあらズ　ただ～だけではない。
不獨漢朝今亦有。(白居易、鹽商婦)
独り漢朝のみならず今も亦た有り。
ただ漢の王朝だけではなく、現在にもある。

豈惟～　あニたダニ～ノミナランヤ　どうして～だけであろうか、～だけではない。
豈惟口腹有飢渇之害。(孟子)
豈に惟だ口腹のみ飢渇の害有らんや。
どうして口や腹だけに飢えたり乾いたりの害があろうか。

非徒～、又～　たダニ～ノミニあらズ、また～ナリ　ただ～だけでなく、また～である。
今之君子、非徒順之、又從爲之辭。(孟子)
今の君子は徒だに之に順ふのみに非ず、又従つて之が辞を為す。
今ごろの君子は過ちを続けるだけではなく、さらに弁解までする。

(5)前後の文意から限定に読む場合

茅茨不翦、土階三等。(十八史略)
茅茨翦らず、土階三等のみ。
かやで屋根をふいたままで、土の階段は三段だけである。

感嘆形

(1)感嘆詞を用いる場合

噫、唉、嗟、嗚呼、嗟乎　ああ　ああ～
唉豎子、不足與謀。(史記)
唉、豎子、与に謀るに足らず。
ああ、小僧め、一緒に策をめぐらすには不足だった。

(2)感嘆の助詞を用いる場合

哉、乎、也、夫、歟、矣、也與　や、か、かな　～だなあ。
悲哉。(白居易、與微之書)
悲しいかな。
悲しいなあ。

(3)感嘆詞と感嘆の助詞とをあわせ用いる場合

嗟乎～哉　ああ～かな　ああ～だなあ。
嗟乎、惜哉。(史記)
嗟乎、惜しいかな。
ああ、残念だなあ。

(4)疑問形を用いる場合

何～也　なんゾ～や　なんとまあ～であることよ。
何楚人之多也。(史記)
何ぞ楚人の多きや。
なんと楚の人の多いことよ。

其～乎　そレ～か
呉其墟乎。(史記)
呉其れ墟ならんか。
呉は廃墟になるだろうよ。

何其～也　なんゾそレ～や
何其詭説也。(離魂記)
何ぞ其れ詭説なるや。
なんとまあでたらめであることよ。

(5)その他の形を用いる場合

豈不～哉(乎)　あニ～ナラずや　なんと～ではないか。
張儀豈不誠大丈夫哉。(孟子)
張儀豈に誠の大丈夫ならずや。
張儀はなんと立派な男ではないか。

不亦～乎　まタ～ナラずや
不亦樂乎。(論語)
亦た楽しからずや。
なんと楽しいことではないか。

■中国文学の日本文学への影響

土佐日記（紀貫之）

『土佐日記』は、作者が晩年に土佐守となって任地に赴き、四年の後、土佐を出発して都へ帰着するまでの道中の経験を書き記したもので、女性に仮託して仮名で書かれている。しかし作者の漢詩文についての素養によって、漢詩文に学んだ手のこんだ表現がなされており、漢文訓読調の硬さがあちこちに見られる。

そのような漢詩文の影響のうち、顕著な例をあげれば、二十七日、かこのさき（鹿児崎）での歌がある。

かみのはらから、またことひと、これかれ酒なにともておひきて、いそにおりゐて、わかれがたきことをいふ。……かくわかれがたくいひて、かのひとびとの口網ももろもちにて、このうみべにて、にないだせるうた。

をしとおもふひとやとまるとあしがものうちむれてこそわれはきにけれ

といひてありければ、いといたくめでて、ゆくひとのよめりける。

さをさせどそこひもしらぬわたつみのふかきこころをきみにみるかな

この段の、「ゆくひとのよめりける」歌は、「棹をさして探ってみても、どれくらい深いかわからぬほどの深い海、ちょうどそのように深い心を、あなた方から感じます」という意味であるが、この、人の心情を水の深さにたとえるという発想は、おそらく李白の、桃花村の酒造り、汪倫の歓待を感謝する「汪倫に贈る」詩によったものであろう。

李白乗レ舟将レ欲レ行
忽聞岸上踏歌声
桃花潭水深千尺
不レ及汪倫送レ我情

貫之は李白の奔放さをさらりと流して、しみじみとした味わいある歌に巧みにまとめあげている。

▲李太白像（傅抱石筆）

枕草子（清少納言）

清少納言は古典的教養という点では、かなり恵まれた家系に生まれ育った。父の元輔は梨壺の五人の一人であり、曽祖父の深養父は『古今和歌集』の歌人、叔父の元真は漢学者であり、兄の戒秀も歌人であった。

幼いころから自然に身についた古典の教養、特に漢学の素養は、中宮定子のもとに宮仕えして後、折にふれて披露された。たとえば、『枕草子』二九九段に、

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峰の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせ給ふ。

というのは、白居易の「香爐峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶々東壁に題す」という七言律詩の、頸聯の二句、

遺愛寺鐘欹レ枕聴
香爐峰雪撥レ簾看

をふまえている。中宮から質問されると、間髪を置かず、白居易の詩句が思い浮かび、それを動作に移すことができるほどに、その漢学は身についていた。

また、三八段の、「梨の花よにすさまじきものにして近うもてなさず……」は、白居易の長詩「長恨歌」の、

玉容寂寞涙欄干
梨花一枝春帯レ雨

をふまえており、八二段の、「炭櫃に消えたる炭のあるして、草のいほりをたれかたづねんと書きつけて……」は、白居易の「廬山の草堂、夜雨独り宿す……」詩の、

蘭省花時錦帳下
廬山雨夜草庵中

をふまえている。白居易の詩句は、彼女の機知、知性として、完全に消化されていた。

▲『白氏長慶集』

換骨奪胎型

中国文学	日本文学
杜子春伝（唐・鄭還古）	杜子春（芥川龍之介）
枕中記（唐・沈既済）	黄粱夢（芥川龍之介）
人虎伝（唐・李景亮）	山月記（中島　敦）
列子〈湯問篇〉	名人伝（中島　敦）
春秋左氏伝〈昭公四年〉	牛人（中島　敦）
春秋左氏伝〈定公・哀公〉	盈虚（中島　敦）
西遊記（明・呉承恩）	悟浄出世（中島　敦）
西遊記（明・呉承恩）	悟浄歎異（中島　敦）

翻案型

中国文学	日本文学
古今小説〈范巨卿鶏黍死生交〉（明・馮夢龍）	雨月物語〈菊花の約〉
剪燈新話〈愛卿伝〉（明・瞿佑）	雨月物語〈浅茅が宿〉
醒世恒言〈魚服記〉（明・馮夢龍）	雨月物語〈夢応の鯉魚〉

翻訳型

中国文学	日本文学
春江・嘉陵夜有レ懐（白居易）	句題和歌（大江千里）
石壕吏・新婚別（杜甫）	杜甫 石壕吏・新婚別（正岡子規）
韓非子〈守株〉	まちぼうけ（北原白秋）

源氏物語（紫式部）

紫式部も清少納言同様に、一族に多くの歌人や文人のいる環境に育った。幼いころから聡明であったとみえ、父の為時が「口惜しう男子にてもたらぬこそ幸なかりけり」と嘆いたことは有名である。

『源氏物語』には、随所に中国文学の影響がみられる。特に白居易の「長恨歌」から受けた影響は、二つの作品を読み比べてみると、すぐにわかる。ここでは、「桐壺」の巻にみられる影響を少しあげておく。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

とはじまる「いづれの御時にか」は、玄宗を直接に言わないで漢代までさかのぼった「漢皇」と言ういい方に類似しており、「女御あまたさぶらひたまひける」は「重レ色思二傾国一」と同趣であり、「すぐれて時めき給ふありけり」は「一朝選在二君王側一」に相当している。

続く文の「われはと思ひあがり給へる御かたがた」は「六宮粉黛」に当たり、彼女らが「無二顔色一」となるのは「めざましき者におとしめそねみたまふ」に当たる。このような関係をつけておいて、紫式部はやがて、「楊貴妃の例も……」と言い、楊貴妃と玄宗の関係を桐壺の更衣と桐壺帝との関係に重ね合わせていく。

また、「ある時には、大殿籠り過ぐして」は「日高起」「不二早朝一」を、「わりなくまつはさせ給ふあまりに」は「承レ歓」を、「さるべき御遊びの折々」は「侍レ宴」を、「あながちに御前去らず、もてなさせ給ひしほどに」は「無二閑暇一」を、「あまたの御方々」は「後宮佳麗三千人」を、「ひまなき御前わたりに」は「三千寵愛在二一身一」を、あるいは「羽をならべ、枝を交さむ」は「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願為二連理枝一」を意識している。

つまり、「桐壺」は構想だけでなく、文章までも「長恨歌」をまねている。しかし、それは単なるものまねではなく、それを自分のものにしきってのことである。

平家物語

『平家物語』では、冒頭に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。……」とあるところからも、仏教思想の影響の大きさが知られるが、それに続く、

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先皇の政にもしたがはず、楽しみをきはめ、いさめをも思ひいれず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。

という文によれば、中国の史書などの影響も考えられる。

その影響がはっきりわかる部分としては、巻二の「蘇武」があり、鬼界が島に流された康頼入道が、都に帰れるとの権現のお告げによって千本の卒塔婆を作って海に流したところ、そのうちの一本が厳島に流れ着いたという「卒塔婆流」の段について、それと似通った異国の話として語られている。しかしこれは、蘇武の話にヒントを得て「卒塔婆流」が作られたのかもしれない。

また、それとはっきり記されてはいないが、巻九の「木曽最期」の、敗走をつづける木曽義仲の姿、兵数を随所に記しての戦いの様子、その悲壮な最期などから、『史記』の項羽本紀との関係が考えられる。

『史記』の作者司馬遷は、悲劇の将軍項羽に深い同情を寄せ、その最期を美しく描いている。あるいは「木曽最期」の作者も、『史記』項羽本紀によって、一編の構想・描写法などに工夫をこらしたのかもしれない。

『平家物語』はこのように、漢語の使用という表現面だけでなく、内容面においても中国の史書などの影響を受けているようである。

▼『平家物語』延慶本

▲『史記』項羽本紀

型	中国文学	日本文学
類似型	史記〈項羽本紀・高祖本紀〉	項羽と劉邦（長与善郎）
	唐詩	鶯の卵（土岐善麿） 仲秋明月（井伏鱒二）
	杜甫	新訳杜甫詩選（土岐善麿）
	幽明録〈天台二女譚〉	万葉集・風土記〈浦島伝説〉
	史記〈項羽の最期〉	平家物語〈木曽の最期〉
引用型	贈汪倫（李白）	土佐日記〈「さをさせど」の和歌〉
	漢書〈蘇武列伝〉、史記〈孟嘗君列伝・刺客列伝〉	平家物語〈巻二・巻四・巻五〉
	早行（杜牧）	野ざらし紀行〈「馬上にむちをたれて」の段〉
	飲酒（陶潜）、竹里館（王維）	草枕（夏目漱石）
影響型	詩経〈大序〉	古今和歌集〈真名序〉
	狂人日記（魯迅）	ひかりごけ（武田泰淳）
その他	諷諭詩	万葉集〈貧窮問答歌〉
	論語	弟子（中島 敦）
	漢書〈李陵・蘇武伝〉	李陵（中島 敦）

徒然草（吉田兼好）

吉田兼好は『徒然草』一三段に、「文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。」というように、博学多識で、中国の文学・思想にも造詣が深かった。『徒然草』の内容には多種多様のものがあるが、それらの中から中国の文学や思想と関わりのあるものを二、三とりあげてみる。

一四二段に、

されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず、寒からぬように、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は、恒の心なし。

というのは、『孟子』梁恵王篇の、

無恒産而有恒心者、惟士為能。

ではじまる儒家の思想をふまえ、安定した生活を基本にすえた政治こそ人間を救う道であるという、兼好の政治観を述べたものである。また、三八段に、

但し強ひて智を求め、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でて偽りあり、才能は煩悩の増長せるなり。

というのは、『老子』第十八章の、

大道廃有仁義、智恵出有大偽。

をふまえており、儒家の説く知恵を否定し、善悪・長短などの対立する考え方を認めず「無」こそ真であることを主張する。これはまさに、道家の思想を根底にしている。また三〇段に、

去る者は日々に疎しといへることなれば、……はては嵐にむせびし松も、千歳を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田と為りぬ。

というのは、「古詩十九首」(その十四)の、

去者日以疎　生者日以親
古墓犂為田　松柏摧為薪

をふまえて、無常観を力説している。

▲『老子』

奥の細道（松尾芭蕉）

松尾芭蕉は、西行の和歌、宗祇の連歌を師とし、中国の李白・杜甫の詩およびその生き方を範とした。芭蕉の号の「桃青」(もも・あお)は李白(すもも・しろ)を意識して名づけたものであるが、その李白以上に彼が傾倒していたのが、杜甫であると思われる。

『奥の細道』の冒頭の、

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

は、李白の「春夜、従弟の桃花園に宴するの序」の冒頭にある。

夫天地者万物之逆旅也、
光陰者百代之過客也。

をふまえて、李白の感じた人生有限・無常を、奥の細道への旅立のまくらとしたのである。また、矢立の初めとして詠んだ、

行く春や鳥啼き魚の目は泪

は、杜甫の五言律詩「春望」の頸聯、

感時花濺涙　恨別鳥驚心

をふまえているとも、晋の陶潜の「園田の居に帰る」の、

羈鳥恋旧林　池魚思故淵

をふまえているとも言われる。また松島の絶景を、

其の気色窅然として美人の顔に粧ふ。

といったのは、宋の蘇東坡の「湖上に飲む、初め晴、後に雨ふる」と題する七言絶句をふまえたもの。平泉に到着した芭蕉が、藤原氏が栄華をきわめた高館にのぼって、

国破れて山河在り、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時のうつるまで泪を落とし侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

と感慨を述べるのは、杜甫の「春望」、とりわけ首聯の

国破山河在　城春草木深

を強く意識したものであった。

芭蕉の負い笈には、いつも『杜工部集』が入れられていたといわれるが、その俳句・俳文には、杜甫の詩を典故としたもの、杜甫の詩に暗示を得たものが多くある。

「杜甫石壕吏」（正岡子規）

正岡子規の短歌のなかに「杜甫石壕吏」「杜甫新婚別」「杜甫秋興八首」という、杜甫の詩によった作がある。

杜甫の「秋興八首」は七言律詩の八首連作であるが、それをそのまま八首の短歌に詠み、「石壕吏」「新婚別」は、いずれも歌行体で、「石壕吏」は五言二十四句、「新婚別」は五言三十二句の作であり、前者を七首、後者を八首の短歌に詠んでいる。いま「杜甫石壕吏」をあげてみると、次のようなものである。

石壕の村に日暮れて宿借れば、　夜深けて門を敲く声誰そ
墻踰えてをぢは走りぬうば一人　司の前にかしこまり泣く
三郎は城へ召されぬいくさより　太郎文こす二郎死にきと
生ける者命を惜み死にすれは　又かへり来ず孫一人あり
おうなわれ手力無くと裾かかげ　軍にゆかん米炊ぐべく
うつたふる宿のおうなの声絶えて　咽びなく音を聞くかとぞ思ふ
暁のゆくてを急ぎ独り居る　おきなと別れ宿立ちいでつ

どの歌も、杜甫の「石壕吏」の内容に忠実によっており、自分の気持ちを入れてはいない。「秋興八首」「新婚別」についても同じで、杜詩を短歌によって訳したらこのようになるであろうと思われるものである。

子規が漢詩を訳した作は、この三編にすぎず、特に目的があってのこととは思われないが、それが杜甫の詩ばかりであるところをみると、あるいは杜甫に心をひかれた時期があったのかもしれない。

▲石壕村を去る杜甫

草枕（夏目漱石）

『草枕』は、夏目漱石が、どこまでも人情の世界に終始する西洋の芸術に対して、東洋の非人情の世界を高唱した作品であり、そこには中国の文学・思想の及ぼした大きな影響がうかがえる。

具体的には「しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩」として、陶淵明と王維の詩が次のように引用されている。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。ただそれぎりのうちに暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向こうに隣の娘がのぞいているわけでもなければ、南山に親友が奉職している次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。独坐幽篁裏、弾琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。ただ二十字のうちに優に別乾坤を建立している。この乾坤の功徳は『不如帰』や『金色夜叉』の功徳ではない。汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後、すべてを忘却してぐっすりと寝こむような功徳である。

もちろん、人間であるからには非人情の世界にいつまでもひたりこんでいることはできないが、人情のしがらみから一時なりとも抜け出して、自然の中に自分をおき、まことの世界に直接ふれてみたい――「少しの間でも非人情の天地に逍遙したい」と願っている漱石にとって、陶淵明や王維など、中国の自然詩人たちは、すぐれた先達であったろう。

『草枕』の非人情の世界は、晩年の「則天去私」の境地にまで連なってゆくもののようであるが、その思想形成に及ぼした中国の脱俗の文学・思想の影響は、大きいものがある。

▶漱石の文人画

黄粱夢（芥川龍之介）

盧生は、立身栄達を夢見ている若者であるが、あるとき道士の呂翁に出あい、その願いを語る。それを聞いて呂翁は「ひとつ、この若者の心を入れかえてやろう」と思い、道術によって盧生に夢を見させる。

夢の中で盧生は立身出世したのち、天寿を全うして亡くなる、というところで目が覚める。呂翁は、これで心の迷いが覚めたろうと、得意げに髭をなでながら「では寵辱の道も、窮達の運も、ひととおり味わったわけですね。それは結構なことでした。生きるということは、あなたの見た夢といくらも変わっているものではありません。これであなたの人生の執着も、熱がさめたでしょう。」と話す。しかし盧生はそれに対して、「青年らしい顔をあげて、目を輝かせながら」次のように言う。

夢だから、なお生きたいのです。あの夢の覚めたように、この夢も覚める時が来るでしょう。その時が来るまでの間、私は真に生きたと言えるほど生きたいのです。あなたはそう思いませんか。

芥川龍之介の『黄粱夢』はこのような話であるが、これは唐代小説、沈既済の『枕中記』に基づいている。しかし『枕中記』と比べると、その結末部分が真反対になっている。すなわち『枕中記』では、夢から覚めた盧生は、

生憮然良久。謝曰、「夫寵辱之道・窮達之運・得喪之理・死生之情、尽知レ之矣。此先生所三以窒二吾欲一也。敢不レ受レ教。」稽首再拝而去。

のように、呂翁に感謝して去ってゆく。

これは、日本や中国の昔話を用いて自分の人間観・人生観を表現する、芥川一流の作風によるものである。この他、唐代小説『杜子春伝』を素材とした同様の作として『杜子春』がある。

▲芥川（北京にて）

山月記（中島敦）

中島敦の『山月記』は、唐代小説のひとつ、李景亮の『人虎伝』を本にした作品である。

『人虎伝』は、隴西の李徴が旅の途中、江南の地で、その行いが「神祇にそむいた」ために一夜のうちに虎に化し、のちに、監察御史に出世して江南を巡行中の友人袁傪に出あい、故郷に残している妻子のことを頼み、また、それまで作りたくわえていた詩を託して去ってゆく、という話である。『山月記』は、話の筋は『人虎伝』そのままにしておいて、李徴が虎に化した原因をその行いが「神祇にそむいた」ためではなく、「産を破り心を狂わせ」てまで詩業に熱中したため、つまり「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という猛獣を飼いふとらせた結果であるとして、そこに、詩人の運命の悲しさ、詩人の狂気の哀しさを描いている。

また、李徴が虎になってゆく過程、人間の心が次第に失われてゆく様子、さらに虎になった李徴の羞しさと自嘲の心、そのような友によせる袁傪の思いが、細かく描かれており、『人虎伝』が単なる因果譚、怪異譚であるのと異なり、人間を描く作品となっている。

『山月記』のほかに中島敦には、中国の書物、すなわち経書、史書、諸子の書に素材を求めた『名人伝』『牛人』『弟子』『李陵』などがあり、いずれも素材を忠実に用い、それを通して人間の心理・執念・運命を描き、語っている。

▲「李陵」原稿

漢文の基礎語彙

〈年齢に関するもの〉

孩提 二、三歳の幼児。「孩抱」ともいう。

志学 一五歳。『論語』為政篇の「十有五にして学に志す。」による。

笄年 女子の一五歳。一五歳でかんざしをつけることによる。成年を意味する。

加冠 二〇歳。二〇歳で冠をつけて成人式を行ったことによる。

壮年 三〇歳。または三〇歳前後。「壮」はさかんの意で、元気盛りのこと。

而立 三〇歳。『論語』為政篇の「三十にして立つ。」による。

丁壮 血気盛んな男子。二〇歳〜三〇歳ぐらいの男子。

不惑 四〇歳。『論語』為政篇の「四十にして惑はず。」による。

知命 五〇歳。『論語』為政篇の「五十にして天命を知る。」による。

耳順 六〇歳。『論語』為政篇の「六十にして耳順ふ。」による。

還暦 六一歳。六一年目に同じ干支がめぐってくることによる。

古希 七〇歳。杜甫の「曲江」の詩中の「人生七十 古来稀なり。」による。

従心 七〇歳。『論語』為政篇の「七十にして心の欲するところに従ひて、矩を踰えず。」による。

喜字齢 七七歳。「喜」の字の草書体が七十七に見えることによる。

米寿 八八歳。「米」の字を分解すると、八十八になることによる。

白寿 九九歳。百から一をとると「白」となることによる。

年歯 年齢のこと。

垂髫 童児。幼児のこと。幼児が垂らし髪をしていたことによる。

夭折 若死にすること。「夭」は若いこと。おさないこと。

黄髪 老人のこと。白髪から、さらに髪が黄色になること。

頒白 白髪まじりの年寄り。

〈名前に関するもの〉

字 成人した男子につける名。他人が敬意をもって呼ぶときに用いる。

諱 死者の生前の本名。死者は諡で呼ぶ。子孫はこれと同じ名はつけない。

諡 死者に対して、生前の功徳をたたえておくる名。

号 自ら好んでつける名。ペンネーム。

姓 血統や家系を示す名称。同姓は互いに結婚しないならわしがあった。

排行 同姓の一族の同世代(兄弟、いとこ、またいとこなど)において、出生順に番号をつけて呼ぶこと。

伯・仲・叔・季 兄弟の順序を示す語。「伯」が長子、「仲」が次子、「叔」はその次。「季」は末っ子を示す。

名 生まれたときにつける名。謙遜したとき、また、親や師が呼ぶときに用いる。

〈歴史に関するもの〉

王 ①夏・殷・周の天子の称。②戦国時代の諸侯の称。③漢以後、上位の諸侯の称。④徳によって天下を治める者。

王道 仁義・道徳をもって、人民の幸福をはかり、天下を治める方法。孟子が主張した方法。

科挙 科目を設定して、人材をあげ用いる官吏登用試験。唐代にはじまる。

革命 王朝の代わること。天子は天命によって位につくという考えから、王朝がかわるのは天命によるものと考えた。

宦官 罪により去勢されて、宮中の後宮に勤める役人。

外戚 皇后や天子の母など、嫁してきたものにつながる縁者。

合従連衡 「合従」は戦国時代、蘇秦の説いた政略。韓・魏・趙・燕・楚・斉の六国が同盟して秦と対抗するという政策。「連衡」は張儀の説いた政略。六国を分離させ、秦に仕えさせる政策。

堯・舜 古代の聖天子の堯帝と舜帝。仁徳のあるりっぱな天子。

郡国 漢にはじまった行政制度。「郡」は天子直属。「国」は諸侯・王の領土とする制度。

桀・紂 夏の桀王と殷の紂王。暴君の代表とされる。

左遷 ①官位をさげられること。②官位をさげて、遠地に流すこと。

社稷 ①土地の神と五穀の神。古代の国家のもっとも重要な守護神。②国家。

守成 完成された事業を守り続けてゆくこと。

諸侯 天子から領土をもらって君主となっているもの。いわゆる大名。

進士 ①周代では地方より選出された者が試験を受けて、秀士、選士、造士、進士と段階を通り、官職についた。②科挙の試験科目の一つ。またはその試験に合格した者。

禅譲 天子が位を有徳の者に譲ること。

創業 ①事業をはじめ、その基礎を築くこと。②国を建てるための基礎をつくること。

徳治 道徳で人民を治めること。またその政治。

南面 天子や王侯の位につくこと。天子や王侯は公式の場では南向きに座ることによる。

覇道 権力や武力をもって天下を治める方法。

布衣 一般庶民の着物。転じて官位のない人のことをいう。

焚書坑儒 ①秦の始皇帝の行った、儒家への弾圧政策。書物を集めて焼き、儒者をあなうめにすること。②学問、思想を弾圧すること。

貶謫 官位をさげて遠方の地へ流すこと。

〈思想に関するもの〉

陰陽家 中国古代の学派の一つで、鄒衍を祖とする。五行説と儒教を結びつけたもの。天文、方位などで吉凶を占う。

義 ①礼にかなった正しい行い。②人としてふみ行うべき道。③君・臣の間で守るべき道。

兼愛 墨子の主張する学説。人を差別なく、広く平等に愛すること。

儒家 孔子、孟子の教えをうけついだ学派。「仁」を理想とする実践的思想。

従横家 戦国時代、合従・連衡の策を諸侯に説いた蘇秦、張儀などの一派。

諸子 ①さまざまの思想家。②諸子百家。春秋・戦国時代の学者・学派をひっくるめて呼ぶ呼称。

信 ①真実、誠実。②ことばと行動とが一致すること。

仁 ①親しみ愛すること。②おもいやり。

誠 まごころ。いつわりのない心。

性悪 荀子の主張した説。人間の生まれつきの性質は悪であるとする説。

性善 孟子の主張した説。人間の生まれつきの性質は善であるとする説。

相愛 墨子の主張する学説。人々が互いにいつくしみあうこと。

惻隠 あわれみいたましく思うこと。仁のいとぐちとなる心。

知 ①さとること。②知るはたらき。

忠恕 まごころと思いやり。孔子が一生心がけたこと。

中庸 中正で、かたよりや不正のないこと。

天命 ①天が人に与えた使命。②天が人に授けた本性や賢愚・運命など。

徳 道徳。人としての価値ある行い。

道家 老子、荘子、およびその説を信奉する人の学派。無為自然をたっとび、人為を否定する学派。

博学 広い教養。君子の必要条件。

百花斉放 一九五六年に、中華人民共和国で、人民がさまざまな議論を自由に展開することをすすめたスローガン。

兵家 諸子百家の一つ。孫子、呉子など、用兵の術を説く人々。

法家 商鞅、韓非子、およびその説をうけつぐ学派。政治の手段として法律・刑罰を重んじ、富国強兵をはかった。

墨家 墨子の説をうけつぐ学派。乱世に処するために、兼愛・非攻を主張する実践の学派。

道 ①人として当然行うべき正しい道理。②道家のいう宇宙の根本原理。

無為自然 天地自然のあるがままの姿が真理であるとし、それに従うことが最善で、人為的に物事をすすめることは悪であるとする考え方。老子、荘子の主張した説。

名家 公孫竜、恵施などの説をうけつぐ学派。一種の論理学で、名と実との関係を明らかにする学派。

礼 人の守るべき秩序。真心の表れとしての行い。

〈人の呼称に関するもの〉

亜聖 ①聖人につぐりっぱな人。②孟子のことをいう。

君子 ①有徳の人。②位についている人。③学問・修養に志す人。

卿 ①執政の大臣。②高位高官の者。

賢人 聖人についで徳のあるりっぱな人物。

故人 ふるくからの知人、友人。

子 ①男子の敬称。②二人称の敬称。

士 ①官位における身分上の称。卿、大夫の下位。②学徳にすぐれた人。③学問の修養に志す人。

小人 つまらぬ人間。「君子」に対する。

処士 主君に仕えないで、民間にいる知識人をいう。

聖人 知・徳ともにすぐれた理想的な人格者。

匹夫 ①つまらぬ男。②身分の低い男。③ひとりの男。

〈その他の語〉

河漢 ①天の川。②黄河と漢水。

関中 函谷関より西の地。西は散関、南は武関、北は蕭関に囲まれた地。今の陝西省一帯。

傾国・傾城 君主の心をまどわし、国をあやうくさせるほどの美人。絶世の美女のこと。

桂蘭 桂や蘭のように香り高く清らかな人物、精神をいう。

乾坤 ①天地。②陰と陽。

江湖 ①朝廷に仕えず世俗を離れた人のいるところのたとえ。②民間、世間。

黄泉 死者の行くところ。あの世のこと。

渾沌 天地がまだ分離しない時の状態。この世界のはじまり。

股肱 主君の手足となって働く家来。「股」はまた、「肱」はひじ。

胡虜 北方の異民族をさげすんだ呼称。匈奴のこと。

虎狼之心 虎や狼のように残忍で、しかも欲深い心のたとえ。

旬朔 十日、または一カ月。「旬」は十日、「朔」は陰暦で月のはじめの一日をいう。

城・郭・郊・邑 「城」は町をとりかこんだ壁の内部をいう。または城壁でかこまれた町のこと。「郭」は城の外まわりをいう。「郊」は町のはずれの地。町に接する地。「邑」はむらざと。小さな町、領地などのこと。

人爵 君主など、人が与える爵位。

清談 ①世俗をはなれた風流な話。②魏・晋のころ、竹林の七賢などが行った、主として老荘思想にもとづく哲学談義。

粟 穀物。五穀の総称。

太初 天地の開ける前。

太牢 ①天子や諸侯の祭りで、神に供える牛、羊、豚、三種の供えもの。②りっぱなごちそう。

天爵 天から授かった仁、義、信などの徳性のこと。

天倫 自然に定まった人の順序。親子、兄弟のこと。

伯楽 ①天馬をつかさどる星の名。②春秋時代の孫陽のこと。馬を見わける名人であったのでこう呼ばれた。

比翼・連理 「比翼」は比翼の鳥。伝説上の鳥で、つばさが連なっていて、二羽ならんではじめて飛べるという。「連理」は連理の枝。二本の木の枝が合わさって一本になり、木目も続いているという。いずれも仲むつまじく愛情の深い夫婦のたとえ。

不肖 師や父に似ず、かしこくないこと。

北辰 北極星のこと。

梨園 歌舞や演劇を習う所。唐の玄宗が宮中の梨園に子弟・宮女を集めて音楽歌舞を学ばせたことによる。後に劇壇の意。

之以禮有恥且格 格者正也 子曰吾十
有五而志乎學三十而立 有所成立也
四十而不惑 孔安國曰不疑惑也 五十而知
天命 孔安國曰知天命之終始也 六十而耳順
鄭玄曰耳聞其言而知其微旨也 七十而從心所

▲論語（正平版）

漢文の学習

江雪　　柳宗元

千山鳥飛絶
万径人蹤滅
孤舟蓑笠翁
独釣寒江雪
（柳河東集）

【書き下し文】
千山　鳥飛ぶこと絶え
万径　人蹤　滅ゆ
孤舟　蓑笠の翁
独り釣る　寒江の雪

【口語訳】
どの山にも飛ぶ鳥一羽見えず、
どの小道にも人の足跡一つ見えない。
一そうの小舟に乗った　蓑と笠をつけた老翁が、
ただ一人　雪の降る寒々とした川で釣り糸を垂れている。

▲寒江独釣図（伝馬遠筆）

形式・韻字
形式――五言絶句
韻字――絶・滅・雪

構成
絶句の構成である起承転結に注目すると、起句と承句とが対句になっている。つまり、「千山」と「万径」、「鳥飛」と「人蹤」、「絶」と「滅」とがそれぞれ対応しており、この二句で人一人いない冬のきびしい大自然を表現している。また、転句と結句は、句頭に「孤」「独」の字を配置し、人間（ここでは作者の柳宗元）の孤独を表現している。すなわち、起句と承句によって自然を、転句と結句によって人間をうたい、人と自然とが融合した世界をえがきだしている。

内容
句ごとの内容を整理すると、
起句―鳥の姿ひとつ見えない山々。
承句―人の足跡ひとつ見えない道々。
転句―一そうの小舟にいる一老翁。
結句―ただ一人雪の降る中に釣り糸を垂れている。
となる。生物の活動をまったく拒絶するきびしい大自然の中で、孤独な漁翁のささやかな営みがある。韻字の「絶・滅・雪」の、息のつまるような仄韻（403ページ）が、また、きびしい孤独感をかきたてている。

制作時期
内容から推測すると、この詩は決して得意の境遇にある時の作品ではない。柳宗元は、順宗のもとで革新若手官僚の一人として活躍していたが、憲宗の代になると、保守派が実権を握り、永州に左遷された（363ページ）。「江雪」は政治革新の夢もやぶれ、左遷されてのちの失意の時期に作られたものであろう。

鑑賞
このようにみてくると、転句の「蓑笠翁」はほかならぬ柳宗元自身の投影であり、起・承・結句のきびしい大自然は、彼をとりまく環境にほかならない。確かに一幅の絵ではあるが、それは、起句末と承句末の「絶」「滅」、転句初めと結句初めの「孤」「独」からして、暗く寂しい絵である。わずか二〇字の中で自然描写に感情移入するこの描出法は、まことに巧みといわざるを得ない。

■漢詩読解の技法

1漢詩のきまりを確認する。
漢詩のきまりについては、402ページに詳しく説明する。その中でも、詩体・形式・韻字については、各詩ごとに確認する。

2朗読する。
漢詩にはリズムがある。そのリズムはなかなか感得できないが、音読みにしたり、繰り返し訓読することによって、口調のよさを味わってみる。

3構成を把握する。
404ページに説明するように、句の切れ目、一首の構成（起承転結、起聯・頷聯・頸聯・尾聯）、対句に注目する。対句の定義は簡単にいえば次の三つである。
(1)二つの句が同じ字数であること
(2)二つの句が同じ文法構成であること
(3)二つの句が何らかの意味で対応する関係であること。

4内容を読みとる。
一字一句に凝縮されている作者の感情を読みとることは、たやすいことではないが、一字一字を大切にして、時には字間や行間をも読みとりながら、そこにこめられた詩人の意図を十分に理解する。

5制作時期を調べる。
これは漢詩に限ったことではないが、内容は制作時期、いいかえれば、作者の境遇・心情と密接な関係があり、これを知ると知らぬとでは、作品理解に大きな差が生じてくる。作品の本質に迫るために、ぜひとも必要なことがらである。

論語（ろんご）

子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎。」（学而篇）

【書き下し文】

子曰はく、「学んで時に之を習ふ、亦説ばしからずや。朋有り遠方より来たる、亦楽しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや」と。

【口語訳】

孔子は言われた。「学問をして、しかるべき時に復習する、何と喜ばしいことではないか。遠くからも同学の友がやってくる、何と楽しいことではないか。人が知ってくれなくても腹をたてない、何と君子ではないか。」と。

論語學而第一　何晏集解

子曰學而時習之不亦悦乎

有朋自遠方来不亦樂乎

人不知而不慍不亦君子乎

▲論語（学而篇第一）

構成―段落

一読して気づくように、本章は孔子の言ったことばが三段階に分けて述べてある。つまり、

1 学而時習之、不亦説乎。
2 有朋自遠方来、不亦楽乎。
3 人不知而不慍、不亦君子乎。

の三つである。

句法

「不亦～乎」の三つの繰り返しが、段落構成を考える手がかりとなるのであるが、これは、反語形の中の特別な用法で、「なんと～ではないか」と訳す。感嘆形の一種。

内容

三つのことがらは、別のものを三つ並べたのではなく、互いに関連あるものを三つの段階に分けて述べたものである。

1 学んだことを繰り返し繰り返し復習して、自分のものとして体得していくことの喜び。
2 学問に志を持つ、いたるところの友人と学問について話し合うことの楽しみ。
3 自分の学問が人に認められなくても腹を立てず努力を続ける、それが君子であること。

三つのことがらは、孔子が学問を通して成長していった過程を、いいかえれば人間形成の過程を、時間的順序を追い、空間的広がりを持たせて発言したものである。

本章の位置

本章は『論語』全章の冒頭に置かれている。このことは、『論語』全編の内容がここに言い尽くされているとみることもできる。その意味において、本章にいう「学問」は、孔子およびその教えを受けつぐ儒家の思想を理解していく場合、眼目となるものである。

学問

『論語』冒頭で「学問」に言及するように、孔子はしばしば学問をとりあげる。孔子にとっての学問は、人格形成の基盤であり、更には、為政者としての心得、知識を身につけるためのものであった。

■思想読解の技法

1 諸子百家誕生の背景を理解する。

中国では、春秋時代の孔子から戦国時代の韓非子に至る、およそ二世紀半の間に、多数の思想家が生まれた。この二世紀半は、毎日が戦いで、一日として安寧の日がなく、この世をいかにして救うか、いかに生きるかを考えた結果生まれた思想である。

2 諸子百家の思想内容を理解する。

儒家・道家・法家・墨家・縦横家などが、どのような思想内容を持っているかを知らなければならない。

3 『論語』の読解

(1) 対語・対句・対文に注意する。
(2) 主な弟子の名は覚えておく。
(3) 仁・礼・忠・信・恕・孝・悌などの語に注意する。

4 『孟子』の読解

(1) 文章に表現されている論理を追求する。
(2) 比喩が多用されるから、孟子の主張との関係を明らかにする。
(3) 対話文が多いから、主語を明確にする。
(4) 仁・義・礼・智・惻隠・性善などの語に注意する。

5 『老子』の読解

(1) 対語・対句・対文に注意する。
(2) 道・無為・柔弱などの語に注意する。

6 『荘子』の読解

(1) 比喩・寓話が多いから、荘子の主張との関係を明確にする。
(2) 無・自然・渾沌などの語に注意する。

史記　　司馬遷

范増数目二項王一、挙二所レ佩玉玦一以示レ之者三。項王黙然不レ応。范増起、出召二項荘一、謂曰、「君王為レ人不レ忍。若入前為レ寿。寿畢請以レ剣舞、因撃二沛公於坐一殺レ之。不者、若属皆且レ為レ所レ虜。」荘則入為レ寿。寿畢曰、「君王与二沛公一飲。軍中無二以為一レ楽。請以レ剣舞。」項王曰、「諾。」項荘抜レ剣起舞。項伯亦抜レ剣起舞、常以レ身翼二蔽沛公一。荘不レ得レ撃。　（項羽本紀）

【書き下し文】

　范増は数々項王に目し、佩ぶる所の玉玦を挙げて、以つて之に示すこと三たびす。項王黙然として応ぜず。范増起ち、出でて項荘を召し、謂ひて曰はく、「君王　人と為り忍びず。若　入り前みて寿を為せ。寿畢らば、請ひて剣を以つて舞ひ、因りて沛公を坐に撃ちて之を殺せ。不者、若が属　皆且に虜とする所と為らんとす」と。荘則ち入りて寿を為す。寿畢りて曰はく、「君王　沛公と飲む。軍中　以つて楽を為す無し。請ふ　剣を以つて舞はん」と。項王曰はく、「諾」と。項荘　剣を抜き　起ちて舞ふ。項伯も亦　剣を抜き　起ちて舞ひ、常に身を以つて沛公を翼蔽す。荘　撃つを得ず。

登場人物の整理

　上文は、世に「鴻門の会」といわれる個所の一部分であるが、ここに登場する五人の関係を整理すると、左のようになる。

漢軍　沛公—後の漢の高祖。この時、四二歳。
楚軍　項王—楚軍の大将。この時、二七歳。
　　　范増—項王の参謀。　項伯・項荘—項王の親族。

場の状況

　沛公が漢中の王になろうとしていると聞いた項王は激怒し、沛公を打ち破ろうとした。沛公は項王を恐れ、朝早く項王の陣地鴻門に謝罪に来た。先の五人に沛公の参謀である張良も加えて、それぞれ定められた席に坐った。この場で范増は沛公を殺そうとしたが、味方の項伯がこれを妨げた。項伯はかつて人殺しをしたとき、張良に助けてもらったことがあるからである。

あらすじ

　范増は沛公を殺すように項王に合図するが、項王は反応を示さない。范増はそこで項荘に座興の一つとして剣舞をさせ、それにかこつけて沛公を殺すよう言いつける。項荘は座中で舞い、機会をうかがうが、項伯に妨げられて、殺すことができなかった。

心情の把握

　「数々項王に目」し、「佩ぶる所の玉玦を挙げて、以つて之に示すこと三たび」する范増と、「黙然として応ぜざ」る項王との、動と静の動きには、かたや沛公撃殺という激しい心情が、かたや沛公を許し、天下を取ることを忘れた心情が託されている。また、項伯の動きには、身内を裏切ってまでも、かつての恩人を助けるという、厚い友情が描かれている。

注意すべき表現

　「項荘　剣を抜き起ちて舞ふ」と「項伯も亦剣を抜き起ちて舞ひ」との対句表現は、項荘の剣舞と同時に、項伯の剣舞がはじまったことを暗示し、時の危急を巧みに表現している。また、「荘　撃つを得ず」を「荘　撃つこと能はず」と表現しないところにも、項伯の翼蔽が徹底していたことを示している。

歴史的意味

　項王が鴻門において沛公を殺さず、終局的には沛公に殺されることが、中国の歴史においてどのような意味を持っているかを考察することも大切なことである。

■史伝読解の技法

1場の状況をつかむ。
　史伝作品は比較的長文が多く、時には前後省略して採録されることがある。したがって、本文がどのような場面であるかを、前後の関係を明らかにして的確につかまえておく必要がある。

2登場人物を整理する。
　史伝は詩・思想・文章に比べて、登場人物が多くなり、複雑に入り組む場合がしばしばである。したがって、敵・味方などの人間関係を明確にしなければならない。

3あらすじをつかむ。
　長文の場合は、段落ごとに要旨をまとめ、全体のあらすじをつかむことが読解の早道である。

4作中の人物の心理・動作を読みとる。
　漢字一字一字の意味を大切にし、句と句がどのようなつながり方をしているかに注意しながら読みとる。

5すぐれた文章表現を味わう。
　文学作品としての色彩の濃い、いわゆる史伝の文学は、非常にすぐれた文章表現が随所にみられる。漢字一字の使い方にも、また、対句表現・比喩表現にもそれがみられる。

6歴史的意味をおさえる。
　史伝は文学作品として読み、味わうわけであるが、一方また、そこに描かれた結果およびその過程が、歴史的にどのような意味を持つかも考察されなければならない。

文章

雑説　　韓愈

①世有伯楽、然後有千里馬。

②千里馬常有、而伯楽a不常有。故雖有名馬、祗辱於奴隷人之手、駢死於槽櫪之間、不以千里称也。

③馬之千里者、一食或尽粟一石。食馬者、不知其能千里而食也。是馬也、雖有千里之能、食不飽、力不足、才美不外見。且欲与常馬等不可得。b安求其能千里也。

④策之不以其道、食之不能尽其材、鳴之而不能通其意。執策而臨之曰、「天下無馬。」嗚呼、c其真無馬邪、其真不知馬也。

（韓昌黎集）

題目

「説」とは文体の一種で、筋道を解釈して、筆者の主張を述べるもので、いわば「論説文」である。「雑説」とは、特に主題を決めない論説文という意味であるが、本文では、明確に論旨が貫かれている。

句法

a「不常〜」は部分否定、b「安〜也」は反語形、c「其〜邪、其〜也」は比較選択形を含む疑問形である。また、「辱」は受身と使役、「称」は受身、「尽」は使役の助動詞を送りがなとして送っている。

構成

本文は、先にも述べたように、「雑説」とはいえ、明確な論旨で貫かれた論説文であるので、構成も整っている。

序　論——①主題の提示
本論㈠——②提示への反対論
本論㈡——③提示の成立条件
結　論——④主題の結論

内容

序論——伯楽がいてこそ千里の馬がいる。

本論㈠——伯楽はいつもいるとは限らないので、名馬も駄馬扱いされる。

本論㈡——飼い主が食糧を十分に与えないので、名馬はその能力を発揮することができない。

結論——飼い主は名馬の扱い方がわからないので、名馬はいるのに、「天下に名馬はいない」と嘆いている。

比喩

「馬」を題材に使って、実は、伯楽を有能な役人に、千里馬・名馬を有為な人材に、常馬を普通の人間に、奴隷人・食馬者を無能な役人にたとえているのである。巧みな表現法である。

主題

為政者が有為な人材を登用することのできない現状に対して、嘆き憤って批判している。

時代背景

有為な人材を登用することのできない、いわば無能な役人が大勢いたことを推察することができる。

■文章読解の技法

1題目に注目する。
題目はその作品の内容を端的に（抽象的な場合もあるが）表すものである。特に文章の場合、「説」「論」「序」「辞」「書」などの文体を示す語には注目すべきである。

2構成を把握する。
論説の文章でなくても、長文の読解には、構成、とりわけ段落構成をしっかりと把握することが必要である。段落分けの方法は現代国語や古文の場合と、変わることはない。

3文脈をたどる。
漢文では、主語が省略されたり、指示語があったり、また、時制が示されなかったりして、文脈をたどるのに苦労するが、前後の文章をあわせ読みながら、つながりを明らかにしてゆく。

4内容を把握する。
段落ごとの内容を整理し、あるいは小見出しをつけ、全体の内容を把握する。全体の内容を把握するには、まず題目に注目し、また、繰り返し使用されている語に注目することである。

5主題をとらえる。
主題がずばり示されることもあるが「雑説」のように隠喩表現によって示されることもあるので、論旨の展開や比喩表現を的確に把握することが必要。

6社会背景をおさえる。
文学は常にその時代や社会背景とかかわっていることを忘れてはならない。筆者は社会を背景にして、自分の意見・主張を述べているのである。

漢詩概説

(1) 漢詩の流れ

詩は中国文学の精髄であり、限られた字句のうちに、作者の無限の思いが述べられる。その詩の流れを略述すれば次のようである。

周代には、各地の民謡や周王室の歌があり、それらは『詩経』としてまとめられている。いずれも四言を主体とした。素朴でおおらかな内容の詩であるが、すでに、句末の字のひびきを合わせる押韻や、比喩表現などの技巧もこらされている。

漢・魏になると、民謡に文人たちが手を加えて楽府体の詩を完成し、また、古詩と呼ばれる、形式に束縛されず内容も豊富な、五言や七言の詩が作られるようになる。

六朝時代に入ると、宮廷詩人たちによって、平仄・対句など、特に表現の面において検討が加えられ、五言・七言の詩は形式的にはほぼ完成した。

唐代に入ると、初唐の時期に絶句と律詩の形式が確立し、韻律的に美しい詩となり、ついで盛唐に至り、李白、杜甫、王維ら個性豊かな詩人が現れるに至って、詩の内容も多方面にわたる充実を示し、ここに詩の黄金時代を築くことになった。

これ以後、宋・元・明・清代の詩は、なんらかの意味で唐詩の流れを継いだものといえる。

(2) 漢詩の種類

漢詩は、六朝末から唐の初期にかけて成立した近体詩と、六朝以前の古体詩に分けられる。

〈古体詩〉

古体詩は次のように、いろいろな点において制約が少ない。

○平仄の規則がない。

○句数や構成に制限がない。

○押韻も比較的自由である。

詩体		形式分類	一句の字数	句数	平仄	押韻	備考
古体詩	古詩	四言古詩	四字	自由	自由	原則として偶数句末	主として『詩経』の詩。
		五言古詩	五字				
		七言古詩	七字				他に六言詩なども見られる。
	楽府体		不定				もともとは音曲に合わせて歌われた詩。
近体詩	絶句	五言絶句	五字	四句	一定	偶数句末	
		七言絶句	七字	四句		一句末と偶数句末	
	律詩	五言律詩	五字	八句		偶数句末	
		七言律詩	七字	八句		一句末と偶数句末	
	排律	五言排律	五字	十二句以上の偶数句		偶数句末	長律ともいう。七言排律は例が少ない。
		七言排律	七字			一句末と偶数句末	
現代詩		白話(口語)詩	自由	自由	自由	自由	

〈古体詩の種類〉

四言古詩　中国でもっとも古い詩形で、黄河流域の民謡として歌われたもの。周代に王室の儀式などで歌われたものもこの形式である。これらを集めたものとして、『詩経』がある。

五言古詩　四言古詩は戦国時代にはすでに衰退し、漢代に入って五言古詩が起こった。「古詩」と呼ばれる無名氏の作品が残っているが、その後、六朝に至るまで、詩の中心をなす形式であった。偶数句末に押韻するものが多く、同一の韻字で一首をなすもの(一韻到底格)、途中で韻のかわるもの(換韻格)がある。

七言古詩　五言古詩の起こりと同じころと考えられる。しかし、主流は五言古詩であり、六朝以前は作品の数も少ない。『史記』に記される項羽の「垓下の歌」や漢の高祖の「大風の歌」などが初期のものである。六朝時代になってしだいに作られるようになり、唐以後になると重視されるようになった。

楽府　もともと漢の武帝の時に設けられた音楽を司る役所の名で、当時、地方に残っていた楽曲や詩歌を集め、その保存をすると同時に、朝廷での楽曲を作った。後には、これらの楽曲に合わせて作られた詩をすべて楽府、または楽府体の詩と呼ぶようになった。中唐の白居易の作った「新楽府五十首」は、これらとは形が異なり、歌われる詩から離れてしまった。

〈近体詩〉

近体詩は、古体詩の形式がかなり自由であるのに対して、韻律的な美しさを意識的に作り出すための配慮がなされており、押韻・平仄・句数・構成などについて、こまかくきびしい制約がある。

〈近体詩の種類〉

五言絶句　六朝のころから、平仄・対句など表現に工夫がこらされてきたが、初唐に入って絶句・律詩の形式が確立した。絶句の形式がどのようにしてできたかはよくわからないが、長詩の一部を切ったものであろうといわれる。一句五字、一首は四句。二句目、四句目

末に必ず韻をふみ、さらに、平仄のきまりがある。◎漢字の音には、平声と呼ばれる平板な音、尻上がりの上声、尻下りの去声、語尾音がｔ・ｐ・ｋなど、つまる音の入声があり、平声を「平」とし、他の三つの音を「仄」として、これらの音を韻律上効果的に組み合わせるものである。

七言絶句　一句七字であることと、韻を一句目、二句目、四句目末にふむこと以外は、ほぼ五言絶句と同じである。

五言律詩　「律」とは「きまり」の意で、一定のリズムを持った声調を意味している。初唐の詩人、宋之問、沈佺期らがこの形式を完成したといわれる。一句五字、一首は八句で、韻は偶数句末にふむことになっている。換韻は許されない。二句ずつを一聯といい、首聯、頷聯、頸聯、尾聯の構成となり、頷聯と頸聯は必ず対句を用いる。平仄の規則もきちんとしている。

七言律詩　一句七字。押韻が一句目末と偶数句末になること以外は、五言律詩と同じである。

排律　長律とも呼ばれ、律詩の規則に従う。普通は十二句と、十六句のものが多いが、長編のものも見られる。五言排律が多く、七言排律は珍しい。

白話詩　口語で書かれたもので、特別な規則はない。一句の文字数、句数、押韻、平仄、構成など、すべて自由である。

(3) 押韻と平仄

漢字の音は声母と韻母からできており、例えば「清」という字はｓが声母、eiが韻母であって、この韻母をそろえることを「韻を押む」という。漢詩では原則として偶数句の終わりの字に押韻するが、これは吟詠する時、句末のひびきあいの美しさをねらったものである。ただ訓読した場合には、その美しさは表れない。なおすべての漢字は別表のように、平上去入あわせて一〇六の韻に分類され、まとめられている。

漢字の音は、平らな音（平声）と、上がったり下がったり、またつまったりする音（仄声）とに分けられる。漢詩においては漢字音のこの特徴が生かされて、音調的に美しく漢字が並べられるように、別表（近体詩図式）のごとく平仄のきまりができている。

このように漢詩は、押韻・平仄の規定によって、音調の上からも美しく作る努力がなされている。

〈詩韻韻目表〉

平仄	四声	圏点	一〇六韻（平水韻）
平	平声　上平	◣	一東　二冬　三江　四支　五微　六魚　七虞　八斉　九佳　一〇灰　一一真　一二文　一三元　一四寒　一五刪
	平声　下平		一先　二蕭　三肴　四豪　五歌　六麻　七陽　八庚　九青　一〇蒸　一一尤　一二侵　一三覃　一四塩　一五咸
仄	上声	◤	一董　二腫　三講　四紙　五尾　六語　七麌　八薺　九蟹　一〇賄　一一軫　一二吻　一三阮　一四旱　一五潸　一六銑　一七篠　一八巧　一九皓　二〇哿　二一馬　二二養　二三梗　二四迥　二五有　二六寝　二七感　二八琰　二九豏
	去声	◥	一送　二宋　三絳　四寘　五未　六御　七遇　八霽　九泰　一〇卦　一一隊　一二震　一三問　一四願　一五翰　一六諫　一七霰　一八嘯　一九効　二〇号　二一箇　二二禡　二三漾　二四敬　二五径　二六宥　二七沁　二八勘　二九豔　三〇陥
	入声	◢	一屋　二沃　三覚　四質　五物　六月　七曷　八黠　九屑　一〇薬　一一陌　一二錫　一三職　一四緝　一五合　一六葉　一七洽

〈近体詩図式〉（平仄、韻）

○＝平声、●＝仄声、◐＝平声、仄声いずれとなってもよいもの。◎＝韻字

五言絶句

正格（仄起式）	偏格（平起式）	茱萸沜　王維
◐●○○●	◐○○●●	結●実●紅○且○緑●
◐○◐●◎	◐●●○◎	復●如二○花○更●開一◎
◐○○●●	◐●○○●	山○中○倘○留●レ客●
◐●●○◎	◐○◐●◎	置●二此●茱○萸○杯一◎

七言絶句

正格（平起式）	偏格（仄起式）	早発二白帝城一　李白
◐○◐●●○◎	◐●◐○◐●◎	朝○辞○白●帝●彩●雲○間◎
◐●◐○◐●◎	◐○◐●●○◎	千○里●江○陵○一●日●還◎
◐●○○○●●	◐○◐●◐○●	両●岸●猿○声○啼○不●レ尽●
◐○◐●●○◎	◐●◐○◐●◎	軽○舟○已●過●万●重○山◎

五言律詩

正格（仄起式）	偏格（平起式）	旅夜書レ懐　杜甫
◐●○○●	◐○○●●	細●草●微○風○岸●
◐○◐●◎	◐●●○◎	危○檣○独●夜●舟◎
◐○○●●	◐●○○●	星○垂○平○野●闊●
◐●●○◎	◐○◐●◎	月●湧●大●江○流◎
◐●○○●	◐○○●●	名○豈●文○章○著●
◐○◐●◎	◐●●○◎	官○応二○老●病●休一◎
◐○○●●	◐●○○●	飄○飄○何○所●レ似●
◐●●○◎	◐○◐●◎	天○地●一●沙○鷗◎

七言律詩

正格（平起式）	偏格（仄起式）	登高　杜甫
◐○◐●●○◎	◐●◐○◐●◎	風○急●天○高○猿○嘯●哀◎
◐●◐○◐●◎	◐○◐●●○◎	渚●清○沙○白●鳥●飛○廻◎
◐●◐○○●●	◐○◐●○○●	無○辺○落●木●蕭○蕭○下●
◐○◐●●○◎	◐●◐○◐●◎	不●尽●長○江○滾●滾●来◎
◐○◐●○○●	◐●◐○○●●	万●里●悲○秋○常○作●レ客●
◐●◐○◐●◎	◐○◐●●○◎	百●年○多○病●独●登○レ台◎
◐●◐○○●●	◐○◐●○○●	艱○難○苦●恨●繁○霜○鬢●
◐○◐●●○◎	◐●◐○◐●◎	潦○倒●新○停○濁●酒●杯◎

(4) 漢詩解釈上の注意

〈句の切れ目〉

①五言詩の場合―〇〇＋〇〇〇　上二字と下三字とで構成される。

②七言詩の場合―〇〇・〇〇＋〇〇〇　上四字と下三字とにまとまり、上四字はさらに二字ずつに切れる。

〈一首の構成〉

①絶句の場合―初めから、起句、承句、転句、結句と呼び「起承転結」という。起句でいいおこし、承句はそれを受けて発展させ、転句は一転した内容を持ちこみ、結句で全体を結ぶ。江戸時代の漢学者頼山陽は次のような俗謡を作って、これを説明している。

(起句) 大阪本町　糸屋の娘 ｝年ごろの美しい娘の紹介。
(承句) 姉は十六　妹は十四

(転句) 諸国大名は弓矢で殺す ｝一転して大名の殺戮。

(結句) 糸屋の娘は目で殺す ｝殺を悩殺にすりかえた結び。

②律詩の場合―八句を二句ずつ一まとまりとし、首聯(起)、頷聯(承)、頸聯(転)、尾聯(結)とする。頷聯と頸聯は必ず対句となるよう構成されるが、他の聯が対句になってはいけないという規則はないので、さらに首聯、または尾聯が対句となるものや、全聯対句となるものも見られる。

③すべて詩は、二句で一まとまりになっており、さらに四句で大きくまとまる。ただ古詩などでは、六句一まとまりのものもあるから、まず二句ずつまとめたうえで、全体の構成を考えるとよい。

〈対句〉

対句とは、

老妻画レ紙為二棊局一
稚子敲レ針作二釣鈎一 ｝(杜甫「江村」)

のようなものをいう。二句をひとまとめにして、そこにえがかれている世界を読みとらなければならない。

資料編

■主要人物姓名一覧

	人名	姓名（姓は血族による区別、名は誕生の時つける名）	字（成人した男子につける名）	号（その人が好んでつける名）	その他（*はおくり名）
思想家	孔子	孔丘	仲尼		*文宣王
	老子	李耳	伯陽		聃
	荀子	荀況			荀卿・孫卿
	孟子	孟軻	子輿		
	荘子	荘周	子休		南華真人
	朱子	朱熹	元晦・仲晦	晦庵	*文
	王陽明	王守仁	伯安	陽明	*文成
政治家	始皇帝	嬴政			
	王安石	王安石	介甫	半山	
	毛沢東	毛沢東	潤之		
書家	王羲之	王羲之	逸少		王右軍
	顔真卿	顔真卿	清臣		*文忠
	褚遂良	褚遂良	登善		
詩人	李白	李白	太白	青蓮居士	
	杜甫	杜甫	子美	少陵	杜陵布衣
	白居易	白居易	楽天	香山居士	*文
作家	司馬遷	司馬遷	子長		太史公
	欧陽詢	欧陽詢	信本		
	韓愈	韓愈	退之		昌黎先生 *文
	魯迅	周樹人	予才		

■二十四史一覧

（清代の乾隆年間に定められた正史の総称。〇印は十七史、△印は二十一史、□印は二十二史。）

	書名（ ）内は巻数	成立	撰者
一	□△〇史記(一三〇)	前漢	司馬遷
二	□△〇漢書(一二〇)	後漢	班固
三	□△〇後漢書(一二〇)	(南朝)宋	范曄
四	□△〇三国志(六五)	晋	陳寿
五	□△〇晋書(一三〇)	唐	房玄齢
六	□△〇宋書(一〇〇)	梁	沈約
七	□△〇南斉書(五九)	梁	蕭子顕
八	□△〇梁書(五六)	唐	姚思廉
九	□△〇陳書(三六)	唐	姚思廉
一〇	□△〇後魏書(一一四)	北斉	魏収
一一	□△〇北斉書(五〇)	唐	李百薬
一二	□△〇周書(五〇)	唐	令狐徳棻
一三	□△〇隋書(八五)	唐	魏徴
一四	□△〇南史(八〇)	唐	李延寿
一五	□△〇北史(一〇〇)	唐	李延寿
一六	旧唐書(二〇〇)	(五代)晋	劉昫
一七	□△〇新唐書(二二五)	宋	欧陽修
一八	旧五代史(一五〇)	宋	薛居正
一九	□△〇新五代史(七五)	宋	欧陽修
二〇	□△宋史(四九六)	元	托克托
二一	□△遼史(一一六)	元	托克托
二二	□△金史(一三五)	元	托克托
二三	□△元史(二一〇)	明	宋濂
二四	□明史(三三六)	清	張廷玉

■年中行事

月	行事		
一月	一 元日の祝	七 人日	三～一七 燈節
二月	春社（土地神の生日）（立春より第五の戊の日）	寒食節 清明節（二月初～三月末（春分の日から十五日目。寒食節はその前日。）	
三月	三 上巳（流觴曲水・祓除）		
四月	八 灌仏会（仏誕）		
五月	五 端午節		
六月	六 虫干し		
七月	七 七夕（乞巧節）	一五 中元（盂蘭盆）	
八月	秋社（土地の守護神を祭る）（立秋より第五の戊の日）	一五 中秋節	
九月	九 重陽（登高）		
十月	一 送寒衣（先祖の墓参り）		
十一月	冬至 冬至盤（冬至のごちそう）		
十二月	八 臘日（駆儺）	二三 祀竈（かまど祭り）	三〇 除夕

■四季と色の関係

五行	五色	五時	五方	五声	五常	五数	五味	五帝
木	青	春	東	角	仁	八	酸	青帝
火	赤	夏	南	徴	礼	七	苦	赤帝
土	黄	土用	中央	宮	信	五	甘	黄帝
金	白	秋	西	商	義	九	辛	白帝
水	黒	冬	北	羽	智	六	鹹	黒帝

■二十八宿

（昔、天を東西南北の四宮に分け、各宮を七宿に区切って、星を配した。「州・分野」は、地上の州・国を星宿に配当したもの。）

方角	神	宿	星	州	分野
東	青龍	木	角	兗（えん）	鄭（てい）
		金	亢（こう）		
		土	氐（てい）		
		月	房	豫（よ）	宋
		日	心		
		火	尾	幽	燕
		水	箕（き）		
北	玄武	火	室	并	衛
		水	壁		
		木	斗	揚	呉越
		金	牛		
		土	女		
		日	虚	青	斉
		月	危		
西	白虎	木	奎（けい）	徐	魯（ろ）
		金	婁（ろう）		
		土	胃	冀（き）	趙（ちょう）
		日	昴（ぼう）		
		月	畢（ひつ）		
		火	觜（し）	益	魏（ぎ）
		水	参（しん）		
南	朱雀	木	井	雍（よう）	秦
		金	鬼		
		土	柳	三河	周
		日	星		
		月	張		
		火	翼	荊（けい）	楚（そ）
		水	軫		

■唐代職官表（位階は、正一品・従一品・正二品・従二品・正三品・従三品・正四品上下・従四品上下・正五品上下・従五品上下・正六品上下・従六品上下・正七品上下・従七品上下・正八品上下・従八品上下・正九品上下・従九品上下の三十階にわけられる。）

三師

官	長官
太師（正一品）	
太傅（正一品）	
太保（正一品）	

訓導の官。適当な人がなければ欠く。時に親王がつくことがあるが、名位だけのもの。多く贈官に用いられる。

三公

官
太尉（正一品）
司徒（正一品）
司空（正一品）

論道の官。時に親王がつくことがあるが、名位だけのもの。

六省

区分	官庁	長官	次官
三省	尚書省（詔勅を施行）	尚書令（正二品）	左・右僕射（従二品）
六部	吏部（官吏の選授勲封）	尚書（正三品）	侍郎（正四品上）
六部	戸部（戸籍・年貢）	尚書（正三品）	侍郎（正四品下）
六部	礼部（礼儀・祠祭）	尚書（正三品）	侍郎（正四品下）
六部	兵部（軍衛・武官の選授）	尚書（正三品）	侍郎（正四品下）
六部	刑部（刑罰）	尚書（正三品）	侍郎（正四品下）
六部	工部（百工・屯田・山沢・水利）	尚書（正三品）	侍郎（正四品下）
三省	門下省（詔勅の内容を吟味）	侍中（正三品）	黄門侍郎（正四品上）
三省	中書省（政策の立案・詔勅の起草）	令（正三品）	侍郎（正四品上）
	秘書省（経籍・図書）	監（従三品）	少監（従四品上）
	殿中省（乗輿・服御）	監（従三品）	少監（従四品上）
	内侍省（後宮）	内侍（従四品上）	内常侍（正五品下）
	御史台（不法を糾察）	大夫（従三品）	中丞（正五品上）

九寺

官庁	長官	次官
太常寺（礼楽・宗廟）	卿（正三品）	少卿（正四品上）
光禄寺（宮中での饗宴）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
衛尉寺（宮門の警護）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
宗正寺（皇室の簿籍）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
太僕寺（廐牧・車輿）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
大理寺（検察と裁判）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
鴻臚寺（賓客の接待・葬儀）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
司農寺（穀物・倉庫）	卿（従三品）	少卿（従四品上）
太府寺（財貨・度量衡）	卿（従三品）	少卿（従四品上）

五監

官庁	長官	次官
国子監（儒学・訓導）	祭酒（従三品）	司業（従四品下）
少府監（天子の服御・百官の儀制）	監（従三品）	少監（従四品下）
将作監（土木・建築・工匠）	大匠（従三品）	少匠（従四品下）
軍器監（甲弩などの繕造）	監（正四品上）	少監（正五品上）
都水監（川沢の舟・橋）	使者（正五品上）	丞（従七品上）

武官

官庁	長官	次官
十六衛（宮廷の警衛）	大将軍（正三品）	将軍（従三品）
左右羽林軍（天子の宿衛）	大将軍（正三品）	将軍（従三品）
諸折衝府（五七四府を諸州に分置）上府（兵一二〇〇人）	都尉（正四品上）	果毅都尉（従五品下）
中府（兵一〇〇〇人）	都尉（従四品上）	果毅都尉（正六品上）
下府（兵八〇〇人）	都尉（正五品下）	果毅都尉（従六品下）

太子府

区分	官	職掌
三師	太子太師（従一品） 太子太傅（従一品） 太子太保（従一品）	道徳をもって太子を補教す。常置せず、その人がいなければ欠く。
三少	太子少師（正二品） 太子少傅（正二品） 太子少保（正二品）	太子につきそい、三師の述べた道徳を教諭する。常置せず、その人がいなければ欠く。

官庁	長官	次官
太子詹事（東宮の総督）	詹事（正三品）	少詹事（正四品上）
太子家令寺（太子の食事）	家令（従四品上）	丞（従七品上）
太子率更寺（礼楽・刑罰・時刻）	令（従四品上）	丞（従七品上）
太子僕寺（車輿・騎乗）	僕（従四品上）	丞（従七品上）
太子左右衛諸率府（東宮の警備）	率（正四品上）	副率（従四品上）

地方官

区分	官庁	長官	次官
	京兆・河南・太原府	牧（従二品）	尹（従三品）
都督	大都督府	都督（従二品）	長史（従三品）
都督	中都督府	都督（正三品）	別駕（正四品下）
都督	下都督府	都督（従三品）	別駕（従四品下）
諸州	上州（四万戸以上）	刺史（従三品）	別駕（従四品下）
諸州	中州（二万戸以上）	刺史（正四品上）	別駕（正五品下）
諸州	下州（二万戸未満）	刺史（正四品下）	別駕（従五品上）
都護	大都護府	大都護（従二品）	副大都護（従三品）
都護	上都護府（国境警備）	都護（正三品）	副都護（従四品上）
	親王府	傅（従三品）	諮議参軍事（正五品上）
	諸県	令（正五品上～）	丞（従七品上～）

〈唐代の官制〉

官吏　官と吏とは同じではなく、九品以上のものが官と呼ばれ、九品官に入らない吏、胥吏・流外・職掌・雑色人などと呼ばれる官庁勤務者が官と庶民との間にいた。また勤務地によって内、外の区別があった。内は中央官庁に所属するもの、外は地方官庁、すなわち州・県・折衝府などに所属するものである。また文官・武官の区別もあった。いま、唐の開元二五年(七三七)における定員を示すと、内外文武官あわせて一八八〇五人(内官は二六二〇人、外官は一六一八五人。また文官は一四七七四人、武官は四〇三一人)となっている。

科挙　科挙の試験科目には、秀才・明経・進士・明法・明字・明算の六科があり、中央と地方の学校の優秀者(生徒)と、州・県の予備試験を通過した者(郡貢)が受験した。他に、天子が臨時に人材を抜擢する「制挙」(制科とも)があった。なお武官の任用には武挙があった。

中央の官制　唐代では中書省・門下省・尚書省の三省が中核をなした。この中、中書省の長官(中書令)、門下省の長官(侍中)、尚書省の次官(左・右僕射)が宰相の任についた。尚書省の六部は行政を担当する官庁であるが、実務を担当したのは、秦・漢以来の流れをくむ九寺・五監・十六衛などであった。

地方の官制　唐の地方行政は州県制で、州は時に郡とも呼ばれた。一州は数県からなり、全国は約三五〇の州と約一五五〇の県に分けられていた。特別の州として三府と都督府があった。三府はこれまで都が置かれた所、都督府は重要な土地に置かれた。三府の長官は牧、都督府の長官は都督、州の長官は刺史と呼ばれた。都督府、州の次官である別駕・長史・司馬は、唐の中期以後は実務がなくなり、左遷用のポストと見なされた。県は、京・畿・上・中・中下・下の六等級に分かれ、長官は令、次官は丞、その下に主簿、尉が置かれた。節度使・観察使は、必要にせまられて新設された天子直属の官で、数州を管轄し、やがて管内の軍事・民政・財政を一手に握るようになった。

■主な度量衡単位の時代別変遷表

単位＼時代	周～前漢 (BC10~BC1)	新・後漢 (1～3)	魏 (3)	隋 (6～7)	唐 (7～10)	宋・元 (10～14)	明 (14～17)	清 (17～20)	現代中国 (20)	日本 (20)
分(cm)		0.2304	0.2412	0.2951	0.311	0.3072	0.311	0.32	0.333	0.303
寸(cm)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11	3.2	3.33	3.03
尺(cm)	22.5	23.04	24.12	29.51	31.1	30.72	31.1	32	33.3	30.3
丈(m)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11	3.2	3.33	3.03
歩(m)	1.35	6尺, 1.3824	6尺, 1.4472	6尺, 1.7706	5尺, 1.555	5尺, 1.536	5尺, 1.555	5尺, 1.6	5尺, 1.666	
里(m)	405	300歩,414.72	300歩,434.16	300歩,531.18	300歩,559.8	360歩,552.96	360歩,559.8	360歩,576	300歩,500	3927
畝(a)	100方歩,1.82	4.58647	5.02653	7.524	5.80326	5.66254	5.80326	6.144	6.666	0.99174
頃(a)	182	458.647	502.653	752.4	580.326	566.254	580.326	614.4	666.6	
銭(g)					3.73	3.73	3.73	3.73	3.125	
両(g)	16	13.92	13.92	41.76	37.3	37.3	37.3	37.3	31.25	
斤(g)	256	222.73	222.73	668.19	596.82	596.82	596.82	596.82	500	600
勺(dℓ)			0.02023	0.05944	0.05944	0.09488	0.17037	0.10355	0.1	0.1839
合(dℓ)	0.194	0.1981	0.2023	0.5944	0.5944	0.9488	1.7037	1.0355	1	1.8039.
升(ℓ)	0.194	0.1981	0.2023	0.5944	0.5944	0.9488	1.7037	1.0355	1	1.8039
斗(ℓ)	1.94	1.981	2.023	5.944	5.944	9.488	17.037	10.355	10	18.039
石(ℓ)						94.88	170.37	103.55	100	180.39

■度量衡主要単位比較表

	単位			単位	
尺度	分(ふん・ぶ)	0.01尺	重量	勺(しゃく)	0.01升
	寸(すん)	0.1尺		合(ごう)	0.1升
	尺(せき・しゃく)	——		升(しょう)	——
	丈(じょう)	10尺		斗(と)	10升
	仞(じん)	7尺		石(せき・こく)	100升
	尋(じん)	8尺	面積	畝(ほ)	周 100平方歩 秦以後240平方歩
	揲(よう)	5尺		頃(けい)	100畝
	跬(けい)	3尺	容量	銭(せん)	0.1両
	歩(ほ)	隋以前 6尺 唐以後 5尺		両(りょう)	——
	里(り)	清以前 1800尺 中華民国 1500尺		斤(きん)	16両

(参考図)

主要名数一覧

（日本の名数は67ページ参照）

一人 天子。君主。
二気 陰と陽。
二柄 君主の持つ二つの権力。賞罰あるいは文武。
三峡 揚子江上流の三つのはざま。巫峡・瞿塘峡・西陵峡。
三傑 ①前漢の張良・蕭何・韓信。②三国時代、蜀の諸葛亮・関羽・張飛。
三軍 周の制度で大諸侯の軍隊。上軍・中軍・下軍。
三教 儒教・仏教・道教。
三皇 太古伝説上の三人の王。伏羲・女媧・神農。
三綱 君臣・父子・夫婦の道。
三国 ①中国の魏・呉・蜀。②朝鮮の新羅・百済・高麗。
三才 天・地・人の称。
三史 ①史記・漢書・後漢書。②史記・漢書・東観漢記。
三春 春三か月の称。孟春・仲春・季春。
三代 ①上代三王朝。夏・殷・周。②祖父・父・子。
三体詩 七言絶句・七言律詩・五言律詩。
三伝 「春秋」を解説した三書。左氏伝・公羊伝・穀梁伝。
三王 三代の聖王、夏の禹王・殷の湯王・周の文王・武王。
三伏 夏至の後九〇日間を三つに分けたもの。初伏・中伏・末伏。
三友 ①（白楽天）詩・琴・酒。②（歳寒三友）松・竹・梅。
三余 勉強すべき三つの余暇。冬は年の余り、夜は日の余り、陰雨は時の余り。
三楽 君子の三つの楽しみ。一家の平和・心にやましくないこと・英才教育。
四夷 四方の蛮族。東夷・西戎・南蛮・北狄。
四庫 経・史・子・集の四部の書を収納した書庫。
四恩 天地の恩・国王の恩・父母の恩・衆生の恩。
四科 孔子が門人に教えた四種の学科。徳行・言語・政事・文学。
四海 東海・西海・南海・北海。
四書 大学・中庸・論語・孟子。
四神 天の四方の星宿の形。青竜（東）・朱雀（南）・玄武（北）・白虎（西）。
四声 平声・上声・去声・入声。
四大奇書 水滸伝・三国志演義・西廂記・琵琶記。後に西廂記・琵琶記を除いて、西遊記・金瓶梅を加えた。
四端 仁・義・礼・知の道に進むいとぐちになる四つの心。惻隠・羞悪・辞譲・是非。
五岳 泰山（山東）・華山（陝西）・衡山（湖南）・恒山（山西）・嵩山（河南）。
五経 詩経・書経・易経・春秋・礼記。
五行 天地の間に広がり、めぐり動いてやむことのない五つの元素。木・火・土・金・水。
五常 仁・義・礼・智・信。
五節供 人日（正月七日）・上巳（三月三日）・端午（五月五日）・七夕（七月七日）・重陽（九月九日）。
五帝 太古伝説上の五人の皇帝。①黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜。②伏羲・神農・黄帝・堯・舜。
五等 爵位の等級。公・侯・伯・子・男。
五覇 ①斉の桓公・晋の文公・秦の穆公・宋の襄公・楚の荘王。②斉の桓公・晋の文公・秦の穆公・宋の襄公・呉王闔閭。③斉の桓公・晋の文公・越王勾践・宋の襄公・呉王闔閭。
五倫 父子有レ親・君臣有レ義・夫婦有レ別・長幼有レ序・朋友有レ信。
六軍 天子の率いる軍隊。一軍は一万二千五百人。
六経 詩経・書経・易経・春秋・礼記・楽記。
六芸 周代に士以上の必須科目とされた六種の技芸。礼・楽・射・御・書・数。また六経の称。
六合 東・西・南・北・上・下の六つの方角。
六書 字のなりたち。象形・指事・会意・形声・転注・仮借。
六親 いっさいの血族。父・母・兄・弟・妻・子。
六尺之孤 十四・五歳のみなしご。
六朝 呉・東晋・宋・斉・梁・陳。
七賢 ①周代の七人の賢人。伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・少連・柳下恵。②晋代の七人の賢人（竹林の七賢）阮籍・嵆康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎。
七子 （建安の七子）孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨。
七順 人の徳をすすめる七つの道。一、順レ天得レ時　二、順レ地得レ助　三、順レ民得レ和　四、順レ利足レ財　五、順レ徳助レ明　六、順レ仁無レ失　七、順レ道有レ功。
八卦 占いに用いる八種の卦。乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤。
八股文 明・清代、官吏登用試験に用いられた対句の多い文体。
八大家 唐・宋の八人の文章家。唐の韓愈・柳宗元、宋の欧陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曽鞏・王安石。
八荒 八方の遠いはて。
八景 （瀟湘の八景）江天の暮雪・遠浦の帰帆・洞庭の秋月・漁村の夕照・煙寺の晩鐘・平沙の落雁・山市の晴嵐・瀟湘の夜雨。
八仙 （飲中八仙）杜甫の詩中に出てくる酒豪八人。賀知章・汝陽王李璡・李適之・崔宗之・蘇晋・李白・張旭・焦遂。
九天 天を九つの方角に分けたもの。鈞天（中央）・蒼天（東）・変天（東北）・玄天（北）・幽天（西北）・昊天（西）・朱天（西南）・炎天（南）・陽天（東南）。
九重 天子の御所。宮中。
九流 先秦時代の代表的な九学派。儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家。
十哲 （孔門十哲）顔淵・子貢・子路・子游・子夏・冉有・宰我・仲弓・冉伯牛・閔子騫。
十三経 儒家の十三の経典。易経・書経・詩経・周礼・儀礼・礼記・春秋左氏伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孝経・爾雅・孟子。

○三好行雄（みよしゆきお）
大正一五年、福岡県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業（近代文学専攻）。現在、東京大学文学部教授。著書に『島崎藤村論』『作品論の試み』『芥川龍之介論』などがある。

○稲賀敬二（いながけいじ）
昭和三年、鳥取県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業（中古文学専攻）。現在、広島大学文学部教授。著書に『源氏物語の研究』『堤中納言物語』『落窪物語』などがある。

○森野繁夫（もりのしげお）
昭和一〇年、広島県生まれ。広島大学文学部中国文学科卒業（中国語学・文学専攻）。現在、広島大学教育学部助教授。著書に『六朝詩の研究』『文選雑識』などがある。

○白石喜彦（しらいしよしひこ）
昭和二〇年、神奈川県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業（近代文学専攻）。

（表紙・装丁　川辺一夫）

新総合国語便覧　定価550円（〒300円）

昭和53年11月10日　初版発行
昭和54年2月20日　再版発行
昭和55年1月20日　三版発行
昭和57年2月25日　六版発行
昭和58年2月10日　七版発行

監　修　三好行雄
　　　　稲賀敬二
　　　　森野繁夫
発行者　松本　清
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　教育図書出版　第一学習社

東　京　東京都大田区蒲田4丁目29番10号　TEL（732）5906・9514
〔郵便番号〕144　〔振替口座番号〕東京55158番
大　阪　吹田市江坂町2丁目1番6号江坂山甚ビル　TEL（380）1391・1538
〔郵便番号〕564
広　島　広島市中区西白島町17番3号　TEL 代表（228）5171
〔郵便番号〕730　〔振替口座番号〕広島17118番

書籍コード　2109—07　（落丁・乱丁本はおとりかえします。）

❶祈年殿（北京）

❷雄大な天安門（北京）

❸毛沢東記念堂（北京）

❹蘇州の寒山寺

❺富春江の春景色

❻桂林の奇観

⓫ゴビ砂漠の景観

❼高昌城の遺趾

❿山丹地方の放牧

❾嘉峪関の楼閣